

野阿弥全集

第八巻

解説

「當る辰の春」とあるが、この辰年は明治元年（慶應四年）である。所謂江戸三座時代のことで、一年に一度づつ、役者及び作者の入替があつた。大抵は前年の十一月前に入替が行はれて、顔見世興行が十一月に催されるのであつた。『七種入替番附』とあるから正月から入替にもなつたと見える。新規に決定した三座の顔觸れを、かういふ一枚摺りにしたものらしい。河竹新七とあるは二世河竹新七即ち後の默阿彌のことであるが、市川團藏、澤村田之助等と共に、三座兼勤をしてゐたことはこの番附によつて確められる。市村座は默阿彌の本據であつて、他の二座は兼務であり、補助といふ格式であつたから、肩に「スケ」とあるのである。



笠森お仙

（豐原國周筆）



隱家の茂兵衛（中村芝翫）　笠森お仙（澤村田之助）　中間市助（市川九藏）

河竹糸女補修
河竹繁俊校訂編纂

默阿彌全集 第八卷

東京 春陽堂刊行

默阿彌全集 第八卷目次

挿繪目次

怪談月笠森

古の野中の清水は播磨の舊跡今も東に名にしおふ柏木のふる事を掘返したるお千が針箱明て見たれば雌鳥雄鳥蒔畫の笄うらは千草のいろは茶屋へおきつ丹三が戀中を鰻繩手の市助が奸計にうつかりのつた藤兵衛が身の繋船時刻も五つか四つ手網引にひかれぬ縁組も主の光りの金左衛門が媒役はおつな譯にも成駒込の隠れ家茂兵衛男を磨く達引とおろした心の錠前に歪んで合ぬ鍵屋義兵衛が道ならぬ戀も非道が怨念のかゝりやつながる義次郎が親へ異見もさかさまと横にさへぎる闇の夜に執着の靈魂目さきばかりをまぼろしとおさみおむらがふところに入るやいづるや待宵の更行く鐘を相圖に打つたる名代娘が仇討の次第

「笠森お仙」は慶應元年八月、守田座に稿下された、作者五十歳の作である。傳説に著名な笠森お仙はたゞ谷中鍵屋の場へ面影を見せてゐるだけで、實はお仙の妹といふことになつてゐるおきつの方が主人公になつてゐる。名人とまで言はれた田之助の爲めに、作者が趣向を凝らして、姉と妹とを同時に演じ分けるやうに綴つたものである。田村氏の續々歌舞伎年代記に「田之助のおきつ九藏の市助評判殊によく大當り」とある如く、おきつの嫉妬は今も噂に上つてゐるし、後の團藏である市川九藏の下部市助も非常に好評で、殊に門跡川岸の殺しは、田之助のおきつと相待つて、あざやかな出來榮えであつたと傳へられてゐる。「狂言百種」中に收められた時には、谷中鍵屋の場は一幕取除けられてゐたが、今度は加へておいた。けれども、實演の際には多くの場合此の幕は省かれる。

書下しの時の役割は澤村田之助（笠森茶屋のお仙、今村の下女おきつ、おきつの亡靈）中村芝翫（男達隱家の茂兵衛）市川九藏（今村の下部市助）中村福助（今村丹三郎）關三十郎（鍵屋義兵衛）市川小文次（佐藤金左衛門）中村仲太郎（紙屋藤兵衛）尾上梅幸（彌惣左衛門娘おむら）坂東玉三郎（母おさみ）嵐吉六（ざこ七）中村芝歌藏（恩田吾市）澤村田三郎（茶屋女お澤）中村駒十郎（夜そば賣り井熊）等。口繪にしたのは國周筆の錦繪で門跡川岸の殺しであり、挿畫にしたのは明治三十年六月明治座上演の際の繪草紙の一部分である。

大正十四年六月

校訂者


二幕目
築地
門跡河岸の場

怪談月笠森（笠森お仙――四幕）

序幕

谷中笠森稲荷の場
築地今村住宅の場

〔役名――今村丹三郎、佐藤金左衞門、今村の下部市助、紙屋藤兵衞、恩田吾市。笠森お仙、今村の下女おきつ、丹三郎母おさみ其他。〕

（笠森稲荷の場）――本舞臺三間の間上手へ寄せ石の鳥居、これへ笠森稲荷といふ額を掛け、鳥居の内千本幟を立て、續いて前を落間の心にして後へ下げ常足の二重、此の上下へ葭簾を掛け、正面へ障子を立切り、此の前平舞臺。大和葺の屋根、障子の欄間、茶見世の出し臺、土瓶、茶碗などを列べ、上下の柱へ「御せんじ茶、鍵屋」と記したる行燈を掛け、床几を列べ、下手石垣の上同じ玉垣、總て笠森稲荷門前の體。爰に若い衆思ひ〳〵の仕出し○△□床几に掛けてゐる、茶屋女お澤茶を出して居る。此見得宜しく流行唄大拍子にて幕明く。

お澤　どなた樣もよう御參詣なされました、お茶を一つお上りなされませ。

○　おい〳〵おいらは茶斷だから、香煎湯を一つ下さい。

お澤　畏りました、何かあなたは御願掛でもなされましたか。
△　いや此人は傘屋の職人で、骨がらみになつたから、それで笠森様へ願を掛けたのよ。
○　これさ、詰らねえことを言ひなさんな、此姐えがほんたうにすらァな。
□　違えねえ事だから、ほんたうにしてもいゝぢやあねえか。
○　面白くもねえ、おいらの茶斷は少し當込みのあることだ。
△　おいちやだちぢやあ谷中道は辷るぜ。
□　又まぜツけえしやあがらあ。
△　そりやあさうと、評判のお仙さんの顔が見えねえが、何處ぞへ行たのかね。
お澤　只今ちよつとお客様と御一緒に、近所迄參りましてござりますわいな。
□　何だ、お仙さんは居ねえのかえ、やれ〳〵無駄足をしたわえ。
お澤　もう今に歸りますから、御ゆるりとなされませいな。
△　お仙さんが居ねえのなら御ゆるりとしてもつまらねえ、そろ〳〵出掛けて、又歸りに寄つて見ようぢやあねえか。
○　成程それがよからう。茶代を出してくんねえ。

△　おめえ出しておきねえな。
○　ゝゝえてが居りやあ幾ら出してもいゝが、留守ぢやあ出す氣がねえ。
□　それも無駄な話しだ。
○　大きにお世話だ、ゝゝえてが家なら二朱もはずまうと思つたが、居ねえ日には天保だの。
△　それも何だか惜しいやうだ。
□　さあ、無駄を言はずと出掛けようか。
お澤　まあ宜しうござりまする。
○　又歸りに寄りませう。
三人　さあ出掛けよう。

トやはり大拍子にて○△□は下手へはひる。茶屋女茶碗を片付けながら、

お澤　左樣ならお歸りにお願ひ申します、お待申しますぞえ。（ト茶代を取つて、）何だ、腹さん〲茶を呑んで三人でたつた百か、お臺場の一つも貰つて髷紐でも買はうと思つて、どんなに世辭を言つたかしれない、百ぐらゐくすねたつて買喰ひの足しにもならない、赤の一つも呉れるやうないゝ客が來ればよいが。

ト三味線入大拍子になり、花道より吾市、文吾、丈八袴着附大小にて出來り、花道にて、

文吾　何と恩田氏、だいぶ賑ふことではござりませぬか。

丈八　斯樣に稻荷へ參詣のあるも、先お仙を張りに參るのでござらうて。

吾市　いや丈八殿の仰せ通り、彼女めが色香で客をば引寄せますて、然し今日はどうかお仙が見世にをればよいが。

文吾　いや〳〵、今日は是非宅にをるに違ひはござらぬ。

丈八　文吾殿には、よくそれを御存じでござるな。

文吾　爰が拙者の心得て居る天文の德でござる、御覽じろ、稻荷の邊りにお仙の雲氣があり〳〵と立登つてござる、是が爭はれぬ所でござる。

吾市　それは早よい吉左右、然らば早く顏が見たうござるて。

丈八　然しながら、あの丹三郎殿は何を致してをるでござらう。

吾市　今坂下の植木屋にて頻に鉢物を見てをつたが、又例の氣長でござればちよつくりは參るまいて。

文吾　左樣々々其上何か黑人めかし、松葉蘭だの小萬年靑だのと分かりもせぬに捻くり廻し、

丈八　所詮めつたに參るまいから、先肝腎のお仙の所へ參らうではござらぬか。

吾市　いかさま、それが專一でござる。さゝおいでなされい。

ト三人舞臺へ來る、お澤見て、

お澤　これは旦那樣、だいぶお早い御參詣でござりまする。

吾市　今日も天氣でいゝの。

お澤　よいお天氣で宜しうござりまする、どなた樣も是へお掛けなされませいたあ。

文吾　さゝ恩田氏、お掛けなされ。

吾市　先づ〳〵。

文吾
文八　御免下されい。（ト皆々床几へ掛ける、お澤茶を汲んで來て、）

お澤　お茶をお一つお上りなされませ。

吾市　これ〳〵、お仙は今日は在宿であらうな。

お澤　はい、只今ちよつとお客樣で、近所迄參りましてござりますわいなあ。

吾市　なに、お仙は留守だと申すか。

お澤　はい、左樣でござりますわいなあ。

文吾　お仙が他行の筈はないが、こりやァちと天文が狂つたと相見えるわえ。

丈八　文吾殿の天文も、こりやあ當になりませぬな。

吾市　何はともあれ、お仙が他行ちやと申して、顏を見ずには歸られませぬ、歸る迄是にて相待ちませう。

文吾　なるほどそれが宜しうござる、是迄參つてお仙の顏を見ぬ時には、武士道にもかゝはると申すものでござる。

丈八　左樣でござる、刀の手前武士の恥辱に相成りますわ。

吾市　然らば是にて相待ち申さう。これ、茶をもう一つくりやれ。

お澤　はい〳〵畏りましてござります。

ト お澤茶を汲んで出す。矢張流行唄大拍子になり、花道より丹三郎、羽織袴大小雪駄にて出來り、花道にて思入あつて、

丹三　はて笠森の社は靈驗いちじるしとは申せども、聞きしに勝る參詣の賑ひ、殊に此邊りは樹木の茂み造らずしてそなはる風景、又格別な詠めぢやなあ。

ト 本舞臺へ來る、皆々丹三郎を見て、

吾市　これは〳〵丹三郎殿、先刻よりお待受け申した。

文吾　だいぶお手間が取れましたな。

丈八　何か又おつな婦人でも、ぞめいてはござらぬか。

丹三　いや〳〵、なか〳〵もつて無骨な某、左様な儀はござらぬ、只今寄りましたる植木屋に近頃異國より參つたる珍らしき草木がござるゆゑ、つい浮々と暇どりましてござる。まことに失敬の段御容赦下されい。

吾市　大方左様な事と、推察致し申した。

文吾
丈八　さゝ、是へお掛けなされい。

丹三　然らば御免くだされ。（下床几へ掛ける。お澤茶を汲んで出し、）

お澤　へい、あなたよういらつしやいました、お茶を一つお上りなされませ。

丹三　おゝ構やるな〳〵。いやなに、恩田氏、かの評判のお仙と申す美婦人は何れにをりまするな。

吾市　いや是は斯様でござる、拙者も參ると直樣尋ねましたる所、只今客がござつて近邊迄參つたと申すことでござる。

文吾　大方客とござれば、團子坂の玉屋あたりでござらうて。

丈八　左様でござらう。

丹三　然しそれは殘念な儀でござる、折角是迄お仙の顏を見に參つたが、よく〳〵緣がないと見えまするわえ。
吾市　あはゝゝ、是は丹三郞殿お氣さくなことでござる。
文吾　左樣仰せられては、身共などは申すことが、
兩人　ござらぬて。
吾市　然し今村氏、貴殿などはお仙ぐらゐな婦人は、お珍らしくもござりますまい。
丹三　拙者と申して美婦人は、矢張り目に付きまする。
吾市　ではござらうが、貴殿の召仕のきつと申す女子がござるな。
丹三　いかにも、召仕ひをりまする。
吾市　其のきつとお仙とは、瓜を二つに割らずと其儘、いやお美しいことでござる。
文吾　其のお仙に似た美婦人をば、
丈八　朝夕側に引附けておいでなさるゝとは、
兩人　お羨ましいことでござる。
お澤　左樣ならあなた樣の所に、お仙さんに生寫しといふ女中衆がござりますとか、そりや若しや姉さ

んではござりませぬか。

文吾　なに、お仙に姉があると申すか。

お澤　はい、小さい時別れたといふ姉さんがござんすと、常々言うて居なさんすわいな。

文八　他人の猿似かしらないが、實に姉妹と言つてもよいやうだ。

吾市　其美しいのを當節は、お床の上げおろし、又ある時はお寐間のお伽にも致すとのこと、いやなに丹三殿、貴殿はあやかりものでござるな。

丹三　是は又けしからぬ、何しに左樣なみだらな事がござりませう。

吾市　いや〳〵お隱しなされな、一家中で誰知らぬ者もない大評判。

文吾　左樣でござる、其樣に浮名が立つとは、又色事師は格別な物、拙者などは遠方の所を足を運んでたまさかお仙の顔を見ても、片目も茶代を張込まねば世辭の一つも言はれませぬて。

丈八　それもよつほど氣に向かねば、につこりとも致さねば、まことに心配なことでござる。

吾市　此方共は金銀をもつてお仙に逢ひに參れども、今村氏、貴殿はなか〳〵御如在ない、お召使のおきつをば年に三兩か三兩二分のお給金で、朝から晩迄側へ引附け、其上夜のお伽をおさせなされば、此上の安いものはござらぬ。

文吾　左樣々々年に三兩と見た所が、月に割れば一分づゝ、當年などは閏がござつたれば、一分の內が缺けまするわ。
丈八　いかさま、日割に致せば五十文餘りの婦人でござる。
吾市　いやなに丹三郎殿、お心易い故申し入れたが、必ずお氣にさへられな。
文吾　色男にあやかる樣、お茶の呑み餘りでも頂戴致さう。
丈八　身共もどうか呑み度いものだ。
三人　あはゝゝゝ。（ト三人にて丹三郎を嘲弄する、此內丹三郎むつとせしこなしにて）
丹三　いやなにいづれも、只今仰せられたのは、拙者か事でござるかな。
吾市　いやさ、なにもむツとなさるには及びませぬ、違ひのない事でござるわ。
丹三　拙者召仕のきつ事は、一季半季の水仕ではござらぬわえ。
文吾　して又おきつは、
兩人　何でござる。
丹三　疾くより身共が妾に致した。
吾市　あの、お手かけに、

三人 なされしとか。

丹三 いかにも、手前が妾でござる。

吾市 左樣でござるか、それは少しも存じ申さぬ。さすれば何ぞ我等へ御披露がてらの、お振舞でもござらうな。

文吾 こりや丹三郎殿も、其お心得でござらうて。

丈八 イヨお妾をもつて、樣樣、(ト丹三郎を扇にてあふぐ。)

丹三 そりや披露を致さうとも、又振舞を致さうとも、此方が所存にある事、貴殿方のお指圖は賴み申さぬ。(トずつけりと言ふ。吾市思入あつて、)

吾市 これさ〳〵丹三殿さうすげなくは言はぬものだ、女に可愛がられる其許、羨しいことでござる。

文吾 これさ〳〵丈八殿、何も其樣に羨しがることはござらぬ、手前などは少し女には不向だが、其代りには朝夕共武術に心をゆだねまする故、色戀には鈍けれども、いざといふ其時には、此腕が役に立ちまするわ。

丈八 てかけ狂ひや女狂ひで、浮身をやつすお人とは、こりや同日の論ぢやござらぬ、それをお上で用ひるとは、是が世にいふ盲目千人、笑止なことではござらぬか。

三人　あはゝゝゝ。(ト是にて丹三郎きつとなつて、)

丹三　いやなにいづれも、聞き捨て難い當こすり、身共の腕が役に立たぬと申さるゝか。

三人　さうではなけれど、話しでござる。

丹三　いゝやないとは申されまい、丹三郎が此耳は、だてに附けてはおきませぬ。親累代より高祿を頂戴致す今村丹三、お望みならば此處でお役に立つか立たざるか、拙者が腕前御覽に入れん。いざお相手になりませう。

文吾 丈八　なにさ、それには及び申さぬ。(ト兩人は後へ下る。吾市思入あつて、)

吾市　こりや面白い、其のお手並を拜見したい、拙者がお相手仕らう。

丹三　御所望ならば相手は嫌はぬ、心許なう思召さば三人一度においでなされ、丹三が手練をお見せ申さう。

吾市　(むッとして、)其廣言は後でのこと、身共が腕も御覽に入れん。

丹三　然らば拜見仕らう。

吾市　いざ、

丹三　いざ、

兩人　いざ〳〵〳〵。

ト双方きつとなる、文吾丈八も下緒にて襷を掛け身拵へをする、丹三郎吾市立上つて双方身構へ、吾市刀の柄へ手を掛ける。これを丹三郎扇にて附廻す。又吾市拔掛けるを、丹三郎其手を扇にて押へきつと見得。此時花道よりお仙島田髷好みの着附茶屋娘の裝、駒下駄にて、手に秋草を持出來り、花道にて舞臺を見て思入あつて直舞臺へ來り、花を下へ置いて、

お仙　まあ〳〵待つて下さりませ、先づ〳〵お靜まりなされませいなあ。

ト兩人の中へ割つて入り、宜しく留める、兩人お仙を見て、

丹三　して其方は、

吾市　笠森お仙か。

丹三　えゝ女の存じた事ではない。

吾市　留立て致すな。

丹三　其處退いた。（ト双方又刀へ手を掛ける。お仙これをきつと留めて）

お仙　いゝえ退れぬ、のかれませぬ、とさあ斯う申しますと、どうやら鞘當の樣でござりますが、女だてらに大膽にも、お武家樣の爭ひをお留め申すもまんざらに、知らぬお顏のお方でない故、あれ

から様子を承はれば互ひに一つお屋敷にて、お仲がよい故御一緒に笠森様への御參詣、是が他家のお方なら堪忍ならぬがお刀し手前とやらでもござんせうが、お友達にて若しひよつとお怪我でもあつた時は、お上へ對して濟みますまい、是此花も斯うやつて、ちやんとしてある時はお床へ活けて役にも立てど、落花微塵になる時は、何の役にも立ちますまい。お武家様はまさかの時のお役に立つのが御奉公、譬にもいふ三つ子に淺瀬、どうぞ此場は此儘に花を散らさずわたくしに、花を持たして下さんせいな。

ト思入あつて言ふ、丹三郎敵役三人共なるほどゝいふ思入あつて、

吾市　何樣そちが申す通り、負うた子に淺瀬の譬へ、

文吾　流石は名代の笠森お仙、

丈八　こりや恐入つたわえ。

吾市　なれども武士の一分が、

丹三　立たぬとあるなら何時でも、決して違背は致しませぬて。

お仙　さゝおつしやつては、やつぱり物に、

文吾 丈八　角が立つては色氣がござらぬ。

吾市　然らば此場は、此儘にして丹三殿、貴殿の所存は、
丹三　はて事は好まぬ今村丹三、いか樣とも貴殿の御隨意、
吾市　何樣物は當つて碎けろ、今日はお仙が詞を立て、
文吾
丈八　それが何より上分別。
お仙　そんなら私の言ふ事を、聞いてをさめて下さんすか。
吾市　聞かいで何と致さうぞ。
お仙　あなた樣にもお心殘らず、
丹三　異議なく濟めば何より重疊、然しそちには測らぬ厄介。（ト禮を言ふ。）
お仙　何のお禮に及びませう、是で痞へが下りましたわいなあ。
お澤　どうなる事かと思ひましたに、お仙さんの挨拶で、物事丸う納まつたれば、ちよつと爰でお仲直りに、御酒でもさう言つて參りませうか。
お仙　御酒といふのもおッくふ故、お茶でも一つ上げようわいな。
お澤　此のお花は、奥へやつておきませうか。
お仙　あい、さうして下さんせ。（トお澤は花を持ち奥へはひろ。お仙は茶を汲んで、）さあ、お一つお上りなさ

れませいなあ。(ト皆々へ茶を出す、吾市思入あつて、)

吾市　お仙が出花は有難い。これお仙、豫て身共が、な、申入れた此山吹の、色よい返事を。

ト云ひかけるを、文吾丈八、吾市の袖を引いて、

文吾　はて折が悪い、後でゆつくり。

丈八　折角の此出花、色がさめると悪いによつて、參詣致した其戻りに、別茶を一つ所望致さうではござらぬか。

吾市　なにさま、お茶の因縁香込み申した。然らばこれより稲荷へ參詣致した上にて。これお仙、戻りに又々立寄る間、別に濃く致して、色よい出花を頼み申すぞ。

お仙　まあ兎も角も、御參詣を遊ばしませいなあ。

文吾
丈八　さ、參らうではござらぬか。(ト三人立ち上る。)

吾市　今村氏、お先へ參詣仕る。

丹三　さ、御遠慮なく、御參詣。

吾市　これお仙よいか、戻りの出花を忘れまいぞ。(トお仙の側へ寄らうとするを、兩人隔て。)

文吾
丈八　はて、參詣をなされと申すに。(ト無理に引張る。)

吾市　然らば御兩所、
兩人　さ、參りませう。
　　ト大拍子になり、吾市お仙に心の殘る思入にて、三人上手へはひる。跡兩人思入あつて、合方になり、
丹三　いやなに女中、測らざる事にて今日の厄介、無難に事の相濟みしも其許の働き、實に災難を脱れ申した。
お仙　其樣に仰しやつては、却つて痛み入りまする。あのお三人のお方樣は、やゝともするとお武家樣の御威勢をお見せなされますので、此樣な生業では實に險難でござりますわいなあ。
丹三　あの仁達も皆手前が朋友なれど、何が詞に骨があつて、附合にくい人でござるて。
お仙　ほんに左樣でござりませうわいなあ。
丹三　(思入あつて、)いやなにお仙殿とやら、異な事を尋ぬるやうぢやが、其許には外に同胞はござらぬかな。
お仙　はい、姉が一人ござりますわいなあ。
丹三　なに、姉があると言やるか。
お仙　(少し愁ひの思入あつて、)さあ、其姉と申しまするも、あるに甲斐なく幼い時別れた儘で顏さへ覺え

ず、何處にどうして居りますやら、案じぬ日とてはござりませぬわいなあ。

ト涙を拭つて言ふ。丹三郎も思入あつて、

丹三　さそれに附いて聞きたいは、身共が召使ふ女に、いゝきつと申す者がござるが、似たとはいへ其許に生寫し、餘り不思議に似てをる故、

お仙　そんなら、あの、わたくしに。

丹三　もしやそちが實親は、草加在の名主にて、忠右衛門とはいはざるか。

お仙　え、どうしてそれを御存じでござります。（トびつくりしたる思入。）

丹三　さ只今申せし召使の、きつと申す女こそ、忠右衛門が娘なれども、只今にては鳥越の寺町にて、淺草紙を製する事を生業となして居る藤兵衛といふ者の娘となり、我家に腰元奉公、常々彼女が話にも妹があるといふ事を申し暮らしてをりし内、測らずも緣あつて身共が妾になし置けど、心立さへまめ〳〵しき女なれば、行く〳〵は本妻にも致す所存、只今話しの割符といひ、全くそちはおきつが妹、さすれば實の同胞なりしか。

お仙　そんなら姉さんは、おまめでおいでなさんしたかいなあ。

丹三　さ、朋友共が我妾とそちが似たると話すを聞き、今日是へ參りしも、實はそちを見に參つたのぢ

や。して其方は此家へは、何日の頃より參りしぞ。

お仙　はいお話し申すも涙の種、其姉さんに別れてより間もなう實の父さんは、人手に掛り非業な御最期、それから後に此家の主人義兵衛さんといふ方は、其頃には吉原にて遊女屋渡世をなされし故、父さんとはお友達にてお金の替りに連れて來られ、既に女郎になる所を、不仕合にて家が潰れ、それから間もなう此谷中へ逼塞なして、これぞといふ家業もなければ相談して、思ひ附いたる茶見世の渡世、是迄いくせの苦勞はすれど、まだしも女郎にならぬのが、わたくしの身の仕合せでございますわいなあ。（ト思入あつて言ふ。丹三郎も不便なといふ思入あつて、）

丹三　あゝ、聞けば聞くほどせつない話、いや、必ず心を落さぬがよい、下世話に申す七轉び八起とやら、既に今日測らずも一人の妹を得し如く、又幸ひもあるものぢや、近き内にはおきつを連れて、そちに逢はせて悦ばす程に、必ずきな／＼思はぬがよい。

お仙　はい／＼有難うございますわいなあ。失禮な事ながら、さうしてあなたのお屋敷は。

丹三　身共が屋敷は築地にて、結城家の藩中、今村丹三郎と申す者、又あの邊へ參りなば、必ず尋ねて參るがよい。

お仙　もう參るどころではございませぬ、姉さんの居所が知れました上からは、一日も早う姉さんにお

目に掛りたうござりますわいなあ。

丹三　身共も歸つて話しなば、きつにも嘸かし悅ぶであらうわえ。（ト此時八ツの鐘鳴る。）ありや最早八ツぢやな、今日は歸宅致し、又其内に逢ひ申さう。

お仙　必ずお便りを、お待ち申しますわいなあ。

ト靜なる大拍子になり、上手より以前の敵役三人出來り、

三人　さあ、歸りませう〳〵。

文吾　これは丹三殿、まだ此處に居られたか。

丹三　これなるお仙と話に紛れ、つい長座を致しました。

丈八　なに、お仙と話しをなされしとか。

文吾　あの、たつた二人、

丈八　差向ひで。

丹三　いやも、おくそこなしの話でござつた。（ト此内お仙丹三郎の側へ來り）

お仙　そんなら必ず、今の事をば、

丹三　其儀は篤と承知致した。

文吾丈八　丹三殿には、お仙とどうやら。
丹三　いやも、面目ないが惚れました。
兩人　いや呆れたものだ。(ト兩人呆氣に取られし思入、この内吾市はちよつと小隱れをする。)
文吾　あゝどう廻つても、役の惡さ。
丈八　こちらは出船を致しませう。さゝ吾市殿、參らうではござらぬか。
文吾　さあ〳〵、恩田氏、(トあちこちを見て吾市見えぬ故)こりや恩田氏には、むつとして出し拔いたと見えますわい。
丈八　大方先へ行かれたらう。して、今村氏には。
丹三　お歸りとあらば御同道致すでござらう。(ト皆々立上る。お仙思入あつて)
お仙　左樣なれば、御機嫌宜しう。
丹三　何かと世話でござつたわえ。
文吾丈八　あゝ一緒にはひるも面目ないわえ。
丹三　さゝ參りませう。
ト唄大拍子になり、丹三郎思入あつて、先に立ち文吾丈八附いて花道へはひる。お仙後を見送り、

お仙　日頃逢ひたい〳〵と、お尋ね申した姉さんが、思ひがけない丹三郎様に、お目に掛つたばつかりに、其のお行方が知れたといふは、こんな嬉しい事はない、是もやつぱりお稲荷様の、
ト上手へ向つて手を合せる。此時下手より以前の吾竊市ひ出て、
吾市　其御利生は、（トお仙の後より目を塞ぐ、お仙びつくりなし、）
お仙　あれ、御常談を、（ト振拂つて吾市の額をぴつしやり打つを木の頭。）おや、御免なされませ。
ト袖にて額を隱す、吾市は痛いといふ思入、額へ唾を附ける。此仕組宜しく、大拍子にて、
トしらべにてつなぎ、直引返す。
ひやうし幕

（今村宅の場）――本舞臺三間の間常足の二重、上手一間の床の間、此下小形の襖、上の方折廻し障子屋體、下の方玄關口、いつもの所枝折戸、庭口の模樣總て今村丹三郎長屋の體。こゝに市助紺看板の布子、一本差し中間裝にて玄關前を掃除してゐる、常の唄にて幕明く。
市助　お長屋に子供の多いので、朝に晩に掃除をしにやあならねえ、早くお玄關を拭いてしまつて、暮れねえ内に五丁目の湯へ行つてはひつて來よう。

ト花道より藤兵衞少し更けたる打扮にて風呂敷包を提げて出來り、直舞臺へ來て庭口より、

藤兵 はい、御免下さりませ。

市助 何方からござつた。

藤兵 おきつが親父でござりまする。

市助 おきつ殿の親父だ、さあ、こつちへはひらつしやい。

藤兵 まつぴら御免下さりませ。(ト小腰をかゞめ、内へ入り顔見合せ、)や、こなたは市右衞門の悴の、市助ぢやないか。

市助 おゝ、さういふお前は藤兵衞どのか。

藤兵 やれ思ひ掛けない所で逢つた。

市助 それぢやあおきつ殿は、知らなんだがお前の娘かえ。

藤兵 こなたが寺町に居なくなつてから、草加在から貰つた娘、死んだ噂が姉の所へ、裁縫や三味線を習に遣り、家にはとんと居なんだ故、世間の人は知らぬわいの。

市助 朝夕一つ所に居れど、物堅いお屋敷故、話をする事もなかつたから、お前の娘とは知らなんだ。

藤兵 してまた、此方は此屋敷へ、どういふ譯で奉公に來たのだ。

市助　話せば長い事だが、藤兵衛どの聞いて下せえ、去年の暮からごろついて、此方の方に居る内に、知つての通りの惡酒故喰ひ醉つた勢ひに、こつちの殿様のお供先を切り亂暴したものだから、丹三郎様に縛り上げられ、既に命を取らるゝ所、お手柄によつて殿様から御褒美を下さると仰せを聞いて丹三郎様が、其御褒美には酒興の上故、彼が命をお助け下されと、お上へお願ひ下すつて危い所を脱れたる御恩送りに心を入替へ、ふッつり酒を斷つてしまつて、伯父御の喜兵衛に判を賴み、とんだ事が御縁になつて此家に奉公して居るのさ。

藤兵　それは〳〵感心な事だ、よく酒を止めさつしやつた、醉ひさへせねば人並に勝れた心の市助どの、爰らが此方も締り時だ、大事に御奉公さつしやるがいゝ、わしも御縁あつて娘をば御奉公に上げておくが、御隱居様も旦那様も、よいお方様ぢやと、娘から聞いて居ます。

市助　いやも、お若いに似合ない、よい旦那様でござります。

藤兵　さうして娘は、お家に居りますかな。

市助　今御隱居様のお肩を揉んでだ、ちよつとわしがさう言つて上げよう。

藤兵　いや御用を致して居りますなら、後でも宜しうござりまする。

ト合方にて上手の障子を明ける、内におさみ母親の打扮、おきつ島田鬘屋敷下女の打扮にて、おさみ

の肩を揉みゐる。

さみ　障子越しに誰かと思つたが、きついが親父の藤兵衞どの。ようござつた。

藤兵　これは〳〵は御隱居樣でござりますか、いつもながら御機嫌宜しうお目出度う存じまする。

さみ　其方も達者で悅ばしいわいの。

きつ　父さんようござんしたな。

藤兵　御機嫌伺ひ旁、ちつと話したい事があつて來たのぢや。

きつ　おゝさうでござんしたか、何ぞ急な事でござんすか。

藤兵　いや〳〵別して急な事でもなければ、お療治をしまつてから、ちよつと顏を貸してくりやいの。

さみ　藤兵衞どのも遠方なれば、揉むのは後でもよい程に、部屋へ行つて聞いたがよい。

きつ　いえ〳〵後でようござりますわいな。

さみ　後と言はずに聞いたがよい、何にせよ久し振、茶なと入れて進ぜたがよい。

きつ　有難うござりますわいな。

市助　いやおきつどのは話があらうから、わしが入れて來てあげよう。

さみ　おゝよう氣が附いた、菓子簞笥に菓子があらうから、一緒に持つて來やいの。

市助　畏りました。
きつ　こりや市助どの、憚りでござんす。
市助　何のざふさもないことだ。
　　　ト市助奥へはひる。おきつやはり揉んで居る故、
さみ　これ、揉むのは後にしやいの。
きつ　左樣なら御免下さりませいな。（ト藤兵衞の側へ來り、）もし父さん、私へ用とは何でござんす。
藤兵　用といふは外でもない、おぬしが身の上の事だ。
きつ　え、わたしが身の上とはえ。
藤兵　幸ひ是に御隱居樣がいらつしやります故、憚りながら直々お願ひ申し上げまする、今日わたくしが上りましたは、きつが身の上でござりまする。もう年頃でござります故、あちらこちらから嫁に呉れいと申込んで參りますが、御奉公中故大概は斷りましてござりまするが、わたくし風情に過ぎました有德な人が、是非嫁に貰ひたいと申します故、不釣合ではござりますが、其身の出世になりますれば、遣ります積りに申しましたれば、半途ではござりますが、どうか娘にお暇をばお願ひ申したうござりまする。

さみ　そりや何にしても困つたことぢやが、今急なことかいの。
藤兵　いえ〱早急と申す譯でもござりませぬが、お替りの女中が出來ましたら、お下げなされて下さりませ。
さみ　それは折角の願ひながら、今是に暇をやつては、忰丹三郎が。
藤兵　え丶。
さみ　いやさ、忰は兎もあれ私が困れば、どうかもう二三年奉公させてくりやいの。其替りわしが方で身分に過ぎたよい所へ、片付けて遣りませうわいの。
藤兵　思召は有難うござりまするが、何をお隱し申しませう、先きは地面も二三ケ所、株などもござりますれば、今此口を取外しては、又此後に此樣な口があらうやも知れませねば、どうか遣りたうござりまする。（ト是を聞きおきつはぢつと思入あつて俯向き居る。）これ娘、そちが身の出世なれば厭應はあるまいな。（トおきつはやはり默つて居る。）これ、なぜ默つて居やるぞいの。
きつ　父さん、折角のことながら、わたしや嫁入りする事は厭ぢやわいな。
藤兵　これ、厭と言つて濟むものか、考へて見やれ、年頃になれば嫁入りして、親に安心させるのが、孝行といふものぢや。

さみ（思入あつて、）いやなに藤兵衞どの、私の口から言ひ憎いが、きつはうんと言ふまいわいの。
藤兵　え、そりや何故でござりまする。
さみ　何を隠さう、きつは悴と、
藤兵　えゝ、（トびつくり思入。）
さみ　見て見ぬ振はして居れど、疾うから譯のある樣子。
藤兵　すりや娘は、若旦那樣と、
さみ　さあ互ひに女なし夫なし丁度似合の年配故、末始終はそなたに話し悴が嫁に貰ふ心、早う言はぬは惡かつたが、斯ういふ譯故今いうた其縁談を斷つて、わしが悴にくりやいの。
藤兵　そりやもう貰うて下されば、願うてもない娘が出世、上げませいで何としませう、がきつとお貰ひ下さりますか。（トこのうち前幕の丹三郎下手より出で、門口に窺ひ居て、）
丹三　おゝ、刀に掛けて女房に致さん。（ト内へはひるを見て、）
さみ　おゝ悴、歸りやつたか。
丹三　只今歸りましてござりまする。
藤兵　これは〳〵旦那樣、お歸りなされましてござりまするか。生業用にかまけまして、御無沙汰を致

しましてござりまする。

丹三　いつもながら達者でよいな。

藤兵　仕合せと丈夫にござりまする、扨只今、御隠居様から承りましてござりまするが、いよ〳〵お貰ひなされて下さりますか。

丹三　いかにも、一兩年の内に上へ願ひて、表向一家中へも披露なさんが、先づそれ迄は某が妾に致しておくほどに、さう心得て安心致しやれ。

藤兵　へい〳〵、それは〳〵有難うござりまする。これ娘、よくお伽を致したな。

きつ　そんなら、叱つてぢやござんせぬか。

藤兵　なんの叱つてよいものかい。

きつ　お前にも此事を疾うから言はうと思うたれど、叱られようかとそれが怖さに、言はなんだのはもし父さん、どうぞ堪忍して下さんせいな。

藤兵　早く言うてくれゝばよかつたに、斯ういふ事とは露知らず、先きがよい故約束したれど、分限にもせよ高が町人、御武家様の御新造様になるといふは玉の輿、此上もない身の出世、娘出かした出かした、いや出かしをつたなあ。

ト藤兵衛ほた〳〵と悦ぶ。奥より市助盆へ菓子と茶碗を載せ、土瓶を提げて出來り、

市助　生憎火が少なく、大きに遅なはりました。

藤兵　これは〳〵、御無用になされて下さりますれば宜しうござりますに。

丹三　武士の口から斯く言へば、必ず違變はない程に、安心をして居やれ。

さみ　現在親子の此母が、證人に立たうわいの。

藤兵　いやもう冥加に餘る其仰せ、死んだ婆が居りましたら、嘸悦ぶでござりませう。

きつ　ほんに母様に、お知らせ申したうござりますわいな。

藤兵　丁度是から歸るには、通路故墓參りして、婆にも吹聽しようわいの。

きつ　どうぞさうして下さんせいな。

藤兵　善は急げと申しますれば、もうお暇を致しませう。

市助　まだ七つには間のあるに、

さみ　食事でもして行きやいの。

藤兵　又ゆつくりと上りませう。

丹三　そんなら、もう歸らつしやるか。

藤兵　へい、お暇致しまするでござります。（ト風呂敷包より淺草紙を出し、）さつぱり失念致しましたが、少しばかりでござりますが、是はお土産の印ばかりに差上げますでござりまする。

さみ　いつもながら忝ないわいの。

きつ　さあ、急いで行かしやんせいなあ。

藤兵　なに、おれが足ではツイ一と走りだ。（ト門口へ出掛け、）くどい樣ではござりますが、此末娘をお見捨てなく。

丹三　武士の言葉に二言はない、

藤兵　えゝ有難うござりまする。

ト唄になり、藤兵衛いそ〳〵嬉しき思入にて、花道へはひる。おきつ後を見送り嬉しき思入。

市助　旦那樣には今日は、どちらへおいでなされました。

丹三　朋友共に誘はれて、此頃世間で信仰なす笠森稻荷へ參詣なせしに、夥しき群集にて、かの門前に名の高いお仙が茶店へ休みし所、不思議なるはお仙の面差これなるきつに生寫し、それに附けて朋友共といさゝか口論に及びしが緣となつて、かのお仙と物語り致せしに、似たこそ道理幼い時、別れしおきつが妹と、慥な證據を聞いて來た。

きつ　すりや日頃尋ねし妹は、今此江戸で名の高い、笠森お仙でござりますかいな。
丹三　むかうでもそなたの事を、久しう尋ねて居たとのことぢや。
きつ　嘸さうでござりませうわいな。
市助　何にしてもおきつどのも、行方の知れぬ妹が知れて、嘸嬉しいことだらう。
きつ　こんな嬉しいことはござりませぬわいな。
さみ　今評判の女子故、此頃にそなたを連れて、お仙に逢ひに行かうわいの。
きつ　どうぞお連れなされて下さりませいな。
ト唄になり、花道より金左衞門羽織袴大小にて出來り、直に舞臺へ來り。
金左　頼まう。
市助　どうれ。（ト玄關へ出る。）
金左　丹三殿には御在宅でござるかな。
市助　はッ、在宿にござりまする。
金左　金左衞門參りしと、取次いでくりやれ。
市助　畏りました。（ト舞臺へ出て、）佐藤樣がいらつしやりましてござりまする。

丹三　なに、先生がござつたとな。
さみ　何か御表の御用であらうから、わしは奥へ行きませう。
丹三　それが宜しうござりまする。
さみ　さあきつや、そなたも一緒に。
きつ　はい、お奥へ參りませうわいな。（ト兩人奥へはひる、丹三郎玄關へ出迎へ、）
丹三　これは〱先生には、ようこそ御入來、さゝこちらへお通り下さりませ。
金左　然らば御免下され。（ト玄關より座敷へ通り、よき所へ住ひ、市助煙草盆を出す。）今日は谷中邊へ他出の樣に承はつた故、如何と存ぜしがよく在宿でござつたな。
丹三　朋友共と、流行の笠森稻荷へ參詣致し、只今歸宅致しましてござりまする。
金左　扨今村氏、此方は仕合せな人ぢや、未熟ながら某も殿樣へ御指南番に、劍道の弟子も多くあるが此方の樣な弟子を持つたは此上もない悅びでござる。（ト一人嬉しき思入、丹三郎心得ぬこなしにて、）
丹三　先生には、何時にないお悅びでござりますが、何ぞ吉事でもござりますかな。
金左　いやも吉事も吉事、大吉事ぢや。
丹三　してそれは、如何樣な事でござりますな。

金左　其仔細と申すは、先達て是なる市助の狼藉を取押へて、其上に命乞致せし事殊の外御賞美あつて殿様のお覺え目出度く御贔屓に思召れ、奥様のお手許にも召仕はれし御側女中のおむらどのを、こなたの妻女に下されんとて、殿様奥様お二方様より、媒介なせと拙者へお指圖、なんと有難い事ではないか、多くの女中の其中でも器量勝れしおむらどの、お上からのお指圖にて貰ふといふは武士の冥加、此上もない此方の仕合せ、聞けば今日笠森稲荷へ同道なしたる吾市等が蔑に申せしとか、畢竟夫も小祿故馬鹿に致すと申すものぢやが、元は家老の娘たるお村どのをお上からのお指圖で貰ふ上は、笠に着ずとも肩身も廣く、どの位此方に位が付くか知れぬ、願うてもない立身出世、弟子は我子も同然故、身共も身に取り如何程か悦ばしいことでござる。

ト金左衛門嬉しき思入、丹三郎是を聞き俯向き居る。

なあ市助、此の様な目出度い事はないな。

市助　左様にござりまする、御隱居様がお聞きなされましたら、嘸お悦びでござりませう。御恩になればわたくしなども、どの位嬉しいか知れませぬ。

金左　おゝさうだ〳〵、是を悦ばぬ者があるものか。丹三殿、嘸お悦びでござらうな。

丹三　數なりませぬ拙者めを御贔屓になし下され、有難うはござりますが、此儀はちとお請が致し難う

ございます。

金左　致し難いとはどうしたことぢや、何ぞ仔細があつてか知らぬが、外ならぬ殿のお指圖、只今お請け致したがよからう。

丹三　ではございますが、卽答にお請申しにくうございますれば、どうかよしなにお斷りを。

金左　（思入あつて、）いや〳〵それは以の外の事ぢや、有樣は奧樣にも如何あらうかとお案じなされくれぐれとのお賴み故、決してお案じ遊ばすな。お上からの仰せといひ丹三郞は我門弟、早速お請致させて後刻參上仕ると、立派に申して參つたれば、後とも言はず今直に、是非ともお請致してくりやれ。

丹三　折角のことながら、どうも只今、卽答には。

金左　すりやお請が出來ぬと申すか。

丹三　左樣にございます。

金左　はて扨それは困つたものぢや、お請が出來ねばおむらどのゝ、一命にもかゝわる儀ぢや。

丹三　それは又、如何なる譯にて。

金左　何を隱さうおむらどのには、疾うから此方に戀焦れ、此程よりのぶら〳〵病、とんと藥の驗もな

く御上にても御心配、所で煩ふ病根を朋輩共より申上げ、それと知れて奥樣にも御不便に思召し、身共にくれ〴〵お頼みあつて、一日も早く整ふやうにと、殊の外なる御急ぎ、それ故只今其返事を承はつて參らにやならぬが、何故お請がならぬのぢや。

丹三　さあ、其儀は。

金左　師弟の中に遠慮は入らぬ、かゝる譯にてお請が出來ぬと、有體に申したがよい。

丹三　でも先生へ、明さまに。

金左　言はれぬとは、如何なる仔細ぢや。（トきつと言ふ。丹三郎術なき思入、市助こなしあつて、）

市助　下郎が差出たことながら、旦那樣の御返事のなりませぬ其譯は。

丹三　あゝこれ、めつたにそれを。

市助　でもあなたのお口から、おつしやり難うござりませう。

金左　さゝ、如何なる仔細か、市助言やれ。

市助　其の仔細と申しまするは、召仕のおきつどのを、行く〴〵御本妻になされまする思召しでござりまする。

金左　むゝ、すりやあの眉目よき召仕、おきつとやらを丹三殿には。

丹三　面目もなき事ながら、病身なる母の看護をまめやかに致しくれます故、猶も隔のなき樣に、此程より妾となし、行く〳〵は我妻に致す心にござります故、母や彼女にも申聞けねば、此御返事は出來ませぬ。

金左　なるほどさういふ譯あつては、うくわつにお請も出來まいが、然し世間にまゝある事、高が召仕のことなれば金子でも遣はして、暇を出したがようござる。

丹三　ではござりますが、只無下に彼に暇を遣られませぬは、先刻きつが親藤兵衞と申す者へ、きつと身共が妻に致すと、刀に掛けて申したる其舌の根も乾かぬ内に、暇を遣るとは申されませぬ。

金左　仔細を聞けば卽答にお請の出來ぬも尤もながら、難儀といふは御前にて、先刻も申す通り弟子は我子も同然故、假令如何樣申さうとも、きツと媒介致しますと、餘り立派に申した故、只今となり出來ぬ時は、御前へ對して申譯がない、武士の一分申譯に、切腹致さにや相成らぬ。

丹三　え、すりやあなた樣には申譯に、御切腹なされますとか。

金左　是が町人百姓ならお請合ひ申したれど、斯樣々々な仔細あつて整ひませねば是非がないと、斷りも申されうが、武士たる者が其樣な卑怯な事が申されうか、潔く切腹なして申譯仕る、迷惑ながら丹三殿、此座敷を貸して下され、師弟のよしみ介錯賴む。

ト金左衛門肌を脱ぎ、差添に手を掛ける、丹三郎あわてゝ是れを留め、

丹三　あいや先生、お待ち下され。

金左　いゝや、留立しやるな。

丹三　御一徹なお心故、御尤もではござりますが、先づ〳〵お待ち下さりませ。

金左　然らばお請をさつしやるか。

丹三　さあ、それは。

金左　但しは身共が切腹せうか。

丹三　さあ、

金左　さあ、

兩人　さあ〳〵〳〵。

金左　恩には着せぬが劍道の指南なしたる金左衛門、身共に武士道捨てさすか、如何でござる丹三殿。

丹三　むう。（ト當惑の思入。）

市助　下郎が差出たことながら、佐藤樣に御切腹を、おさせ申しては濟みますまい。

丹三　（思入あつて、）何さまかゝる御意を蒙るも、市助そちが狼藉を取押へし手柄故、それと申すも先

生の教を受けしことなれば、此身が切腹なせばとて、師匠に命が捨てさせられうか。

金左　左程師弟の恩義を思はゞ、身共が武士を立てゝくりやれ。

丹三　いかにも、あなたの武士道立て、お請致すでござりませう。

金左　すりや得心を致すとか、身共も是で安堵致した。

市助　のツぴきならぬ義理と義理、よく御得心をなされました、小の蟲を殺して大の蟲を助けるといふ世の譬もござりまする、おきつどのへはよい樣におつしやつて、暇をお出しなされませ、根が貧乏人のことなれば、手當の金をお遣りなされましたら、どうでも方が付きませう。

金左　金子で事が濟むことなら、身共が遣らうから、遠慮なく申されよ。

丹三　いえ、其御心配には及びませぬ。

金左　外ならぬ其方が斯く立身出世なすは、師匠の身に取り如何程か悦ばしいことでござる。何に致せ奥樣にもお待兼でござらうから、少しも早く此趣を、御殿へ上つて申し上げん。（ト立掛るを、）

丹三　もうお歸りでござりまするか。

金左　又後刻參るであらう。（ト市助玄關の履物を直す。）いや取急いで御挨拶も致さぬが、母上にはお變りもないか。

丹三　息災にござりまする。

金左　宜しう申してくりやれ。

ト唄になり、金左衛門心ぜはしき思入にて、花道へはひる。此内上手屋體よりおきつ窺ひ、泣居る、金左衛門のはひる途端に、おきつハアツと泣く。

丹三　や、あの聲は。

市助　(襖を明け、)おきつどの、其處に居たか。

きつ　あい。

丹三　すりや、今の樣子を。

きつ　殘らず承はりましたわいな。(トこちらへ來り、ハアと泣く。丹三郎術なき思入にて、)

丹三　むゝ聞いたとあれば別段に、改め言ふには及ばぬが、無據今の仕儀、そでない事と腹も立たうが、何をいふにも殿の御意、お請をせねばならぬわえ。

きつ　そりやもう賤しい身分故どうなりましても致方はござりませぬが、斯ういふ事があらうかと存じました故、あなたが兎やかう仰しやつた時行末見捨て下されずば、お心に隨ひませうと申しましたら其時に、假令どの樣な事があらうとも、親子共見捨てぬと仰しやつたではござりませぬか。

丹三　そりやもう生涯見捨はせぬが、違背ならざる殿の御意、殊には又媒介は是迄數年劍道の敎を受けし金左衞門殿、お請をせねば切腹なすと、のッぴきならぬ手詰の返事、師匠に命を捨させては弟子の身として義理立たず、お請けをせねば當家に居られず、浪人なして出る時は先祖より傳はりし今村の家名を捨てるのみか、母を路頭に捨てねばならぬ、切ない譯を汲分けて心に變りはあらざれば、生涯見捨てはせぬ程に、是迄の縁とおきらめくりやれ。

　　下思入にて言ふ。おきつは只泣伏し居て、

きつ　わたくしはどうなりましても、宜しうござりますから、そのおむら樣とやらを、お貰ひなされませいな。

市助　これさく\おきつどの、腹の立つのは尤もだが、旦那も餘儀ない義理づくで御返事をなされたのだ、お心にさへ變りがなくば、どうでも話しの出來る事だ、まあお前の部屋へ行きねえ。

きつ　いえく\構うて下さんすな、貧しい者は金さへ出せば、どうでもなると言はしやんすが、金で此身を旦那樣へ、お任せ申しはしませぬわいな。

市助　それも座興で云つた事だ、惡いやうにはしまいから、まあそんな野暮を言はねえで、來ねえといつたら來ねえといふに。

きつ　此の事を御隱居樣へ、お話し申さにやなりませぬわいな。

市助　さあお話し申すなら、お話し申すがいゝが、後で言つてもいゝ事だ。

丹三　さあ市助が言ふ通り、後でどうでもならうから、泣顏せずと部屋へ行きやれ。

きつ　はい、爰にをつてお邪魔なら、參りますわいな。

市助　さあ〳〵、早く來ねえか〳〵。

きつ　旦那樣、ようお騙しなされましたな。

市助　これさ、ぐづ〳〵せずと、來ねえといふのに。

ト唄になり、市助おきつを無理に引立つて奧へはひる。丹三郎殘り思入あつて、

丹三　世間にまゝある事ながら、下女に手を付けてかけとなし、寵愛なせしが我過り、願うてもない殿樣よりお指圖ありしおむらどの、妻に貰はゞ出世ながら吉事が却つて凶事となる、此丹三郎が身の災難。愚癡は女子の常なれば思ひ迫つて早まつた、事でもなさば恥の恥、事の仔細が顯れなば、一家中の物笑ひ、はて困つた事になつたなあ。

ト唄になり、丹三郎思入、此道具廻る。

（おきつ部屋の場）——本舞臺上手へ寄せて二間の屋體、上手襖、下手鼠壁、此前に半櫃、針箱など女中部屋の模樣。下の方二間三尺の暖簾口、鼠入らず、膳棚、鍋、擂鉢など書割、下手に釜茶釜を掛けし竈、置流し、手桶、水瓶など宜しく、いつもの所門口、此外黒塀、すべて臺所の體。爰に以前のおきつ泣居る、道具半程より床の三重にて道具留る。

淨るり 〽日も西へ傾ぶく軒の片庇、つまる日ざしにいとゞ猶、秋の哀れを身に知りて、心も狹き女部屋、おきつは涙にくれながら、

トおきつぢつと思入、

きつ 今更いつて返らねど、賤しい此身に勿體ない旦那樣のお情受け、やがて妻に持つてやると仰じやつた時の嬉しさに今引替へて捨てらるゝ、此悲しさは猶百倍、明日にもお嫁がおいでなされ、添伏しなさるにお側に居て、どうまあそれが見て居られうぞいなあ。

〽人目なければ聲を上げ泣居る後へ市助が、邊り窺ひ立出て、（トおきつ泣居る奥より市助出て）

市助 これおきつどの、尤もだく、嘸腹が立つだらうが、主と家來だ仕方がねえ、然し何にも知らねえのが、實におらァ可愛さうだ。

きつ 何にも知らぬとは、市助どの、何ぞ仔細があつてかいな。

市助　是にやあ譯のあることだが、言やあおめえに餘計な腹を、立てさせるやうなものだ。
きつ　どういふ譯か、言うて聞かせて下さんせいなあ。
市助　いや〳〵、こりやあ止さう〳〵、何にも聞かずに是迄と、思ひ切つてしまひなせえ。
きつ　決して腹は立たぬから、譯があるなら市助どの、言うて聞かせて下さんせいな。
〽言ふに市助四邊を窺ひ、（ト市助思入あつて、）
市助　それぢやあ言つて聞かせるから、假令腹が立たうとも、己が言つたと言つちやアいけねえぜ。
きつ　いえ〳〵お前の名は出さぬ程に、早う言つて下さんせ。
市助　ほんにお前が可愛さうだ、といふのは、旦那が性悪故、
きつ　え、何と言はしやんす。
市助　（思入あつて、）さつき殿様の上意といつて劍術遣ひの佐藤様が口入にござつたのは、ありやあ皆拵事、お側女中のおむらどのとは、疾うから旦那が情事になつて、御代參の度毎に途中で逢引をして居たのだ、たしか身重になつたので、うつちやつておけねえ所から、金左衛門様を頼み込んで、殿様へお願ひ申し女房に貰ふ積り、ところでお前が爰に居ちやァ邪魔になるから追出す手段に、殿様からの上意と拵へ、無據持つ積りで、色の女を引取るのだ。

きつ　へゝえ、そんならおむら樣といふのは、疾うから旦那さまと譯あつて、お嫁においでなさるのかいなあ。

〽藁を焚かれて女氣に、ぱつと燃え立つ悋氣のほむら、（トおきつ腹の立つ思入。）

市助　おゝ嘸腹が立つだらう、おれでせえ腹が立つもの、お前は腹が立つ筈だ、命の親の旦那樣故惡く言ひてえことはねえが、腹さん〴〵お前と樂しみ、又おむらどのといふ美しい新情人が出來たつて、得心づくでどうともなるに、厭應の言へねえ樣に、殿樣の上意ごかしで思ひ切らして突出さうとは、あんまり無慈悲な仕方ぢやあねえか、旦那は若い身の上故、あるめえ事でもねえけれど、いゝ年をして佐藤樣が眞面目な顏で理窟張り、腹を切るの切らねえのと、よくあんなしらばツくれた事が言はれたものだ。ほんに掛構ひのねえ事なら、おらあお前の力になつて、横ぞツぽうでもくらはしてやりてえ樣だ。

〽胸に一物市助が、まことしやかに言ふを聞き、流石女子の實と思ひ、

ト尤もさうに言ふ、おきつ是を聞き腹の立つ思入にて、

きつ　そりや、ほんまのことでござんすかえ。

市助　犬も朋輩鷹も朋輩、何しに嘘を言ふものか、あんまりお前がいとしいから、内證で話して聞かせ

なが、俺が言つたと言つてくんなさんな。

〽聞くに悔しさ口惜しさ、思はず奥へ打向ひ、（トおきつ奥へ向ひ思入あつて）

きつ　そりやお情ない旦那樣、賤しい身でも生涯に夫は二人持つまいと、御奉公に上つた日より恥かしながら旦那樣に、

〽心で惚れてをりましたが、及ばぬ事と諦めてお召物の出し入や御膳のお給仕する度に、お顔を見るを樂しみに思ふ心が通じてか、嬉しい仰せを聞いた時、飛立つほどにあつたれど、下女やはしたの身の上で、御新造樣にはなられねば、

〽末始終は又餘所の男を持たねばならぬ故、願うてもない仰せをばお斷り申したら、決して當座のことではない、末は女房に持つほどに言ふ事聞けと仰しやる故、道ならぬとは知りながらお任せ申せし我身の上、最前も最前とてあの父樣に言うた時、親にまさつた立身出世、出來した娘と悦んで、歸らしやんしたことなれば。

〽嘸や家の隣近所へ、娘はかう〳〵いふ所の今に嫁になりますと、自慢話しに言はれしならん、其處へ此儘暇が出たと、どうまあすご〳〵歸られませう。

いかにお主と家來とて、そりやお情ない、お情ないわいなあ。

〽悔し涙にかきくれて、持ちし團扇を思はずも引裂き捨てゝぞ泣きふしぬ。

トおきつ團扇を引き裂き悔しき思入。

市助　おゝ悔しからう〳〵、主家來とはいふものゝ、戀に上下の隔てはない、存分恨みを言つたがいゝ。

きつ　おゝ言はいでかいな、弄物にされたからは、きつと言はねばならぬわいな。

市助　言ふのは思入れ言ふがいゝが、今の話しを己が言つたと、言つてくれちやァいかねえぜ。

きつ　わたしを思ふ親切に言うてくれた市助どの、お前に難儀をかけうぞいなあ。

市助　斯うして二人居る所を、旦那様に見られたら、疑ひ受けるは知れたこと、どれ、お庭へ水でも打つて來ようか。

きつ　市助どの、お前に禮はあとでしますぞえ。

市助　なに、禮に及ぶものか、

〽親切ごかしにおきつを欺し、してやつたりと立上り、（ト市助思入あつて立上り、）

きつ　おきつどの、お前ほんたうに悔しいか。

きつ　あい、悔しいわいな。（トきつとなる。）

市助　おゝ可愛さうなことだなあ。

〽言ふに哀れの空涙すゝり上てぞ入りにける。（ト市助舌を出しにつたりと思入あつて奥へはひる。）

〽跡におきつはかつぱと臥し、泣き居る折しも塀越しに隣で謳ふ葵の上、（ト床の謠になる。）

謠〽我世に在りし古へは、雲上の花の宴、春の朝の御遊に馴れ。（ト獨吟の唄になり。）

唄〽仙洞の紅葉の秋の夜は、月に戲れ色香に染み、はなやかなりし身なれども、

ト此内おきつ思入あつて、櫃の内より小袖を引出し、

きつ　時も時とてお隣で、お謳ひなさるあの謠は、葵の上とやらいふ謠、春の朝の御遊に慣れと、賤しい我身も此春から旦那樣のお情受け、これ此樣な小袖をば拵へてお貰ひ申し、花やかなりしも昨日と過ぎ、今日は紅葉の色增るおむら樣に見替られ、いつか哀な秋の來て、お暇の出し身の悲しさ。

謠〽衰へぬれば朝顏の日影待つ間の有樣なり、（ト小袖へ思入あつて、）

お心變りし上からは、下りますれば下る樣に、恥をおかゝせ申しますから、お覺悟なされておいでなされませ。

唄〽たゞいつとなく我心、物憂き野邊の早蕨の、萌出そめし思ひの露、

とはいふものゝ最前も、お年取られし父樣があの樣に、悅んで歸らしやんした其處へ、どうまあ

此儘歸られませう、とあつて爰になりまして、おむら様と睦じう一つ衾にお寢みなさるを餘所に見なして居られませうか、一方ならず御恩になりし御隱居樣には濟まぬけれど、お騙しなされし旦那樣のお心が憎い故、きつとお禮を致しまする。

〽かゝる恨み晴らさんとて、是迄顯はれ出たるなり。

上つ方でも下々でも、愼しまれぬは悋氣嫉妬、

〽人の恨の深くして、憂き音に泣かせ給ふとも、

〽生きて此世にましまさば、

今更言うて返らねど、昨夜迄も旦那樣と、

〽水暗き澤邊の螢の影よりも、光る君とぞ契らむわらはゝ、

〽蓬生のもとあらざりし身となりて、

〽葉末の露と消えもせば、それさへ殊に恨めしや、

きつとお恨み申しまする。

〽悋氣嫉妬は利發でも、愼しみ難き女の情、目も血走つてほうとつく息も炎と立上り、髮も逆立つばかりにて、物凄くこそ、

ト此中おきつ嫉妬の思入宜しくあつて、奥をきつと見込む。三重にて此道具廻る。

（元の場）――本舞臺元の座敷の道具。爰に丹三郎思案の思入、三重にて道具留る。

丹三　どう考へてもきつが身の上、手當の金子を遣はして得心なせばよけれども、愼しみ難きは女の嫉妬、一途に我を恨みなば如何なる事を致さうも知れぬ、さある時には恥辱のみか殿の御不興受けねばならぬ、家名にかゝはる事なれば、不便ながらも仕儀によつたら、

淨るり〽座敷隔てゝ一間には、

〽思ひ迫りし後から、（ト此内後ろへ市助出て）

市助　すりや、おきつどのを。

丹三（びつくりして）そちや市助か。

市助　旦那樣、嘸御心配でござりませう。

丹三　思ひ掛けなき緣談に、身共もほとんと當惑致す、どうか仕樣はあるまいか。

市助　其儀はお案じなされまするな、今夜宿へ連れて參り、親父に金で掛合ひましたら、どうか方が附きませう。

丹三　手當の金は遣はさうから、無事に事の納るやう、其方骨を折つてくりやれ。

市助　なにわたくしが以前なら腕づくでも方を附けますが、今は心を入替へて人の難儀になる事を、するのがいやになりましたから、どうか向うの爲になつて、あなたのお名の出ませぬ樣に、取計らひます氣でござりますが、もし得心せぬ其時は、御恩になつた旦那樣のお爲め、一思ひにやッつけませうか。

丹三　あこれ、（ト四邊へ思入あつて、）不便には思へども、きつが得心なさゞれば殿樣へ濟まざる上、大恩受けし師匠に迄面皮をかゝさにやならぬ故、金子で得心なさばよし、なさゞる時は是非に及ばぬ。

〽一思ひに殺せよと、言はぬばかりの心を察し、（ト丹三郎殺せといふ思入、市助うなづき、）

市助　畏りました、一旦命を助かりし爰が御恩の送りどこ、どちらなり共市助が、命に掛けて働きます。

〽主從しめし囁き合ふ折柄表の玄關口、釣臺擔はせ來る若黨、

ト花道より若黨先に、中間二人結納物を載せし釣臺を擔ぎ出來り、直に舞臺へ來て、

若黨　はッ、お賴み申します。

市助　どうれ。

若黨　佐藤金左衛門方から參りましてござります、此の御狀を旦那樣へお上げ下さりませ。

ト文箱を出す。

市助　畏りました。(ト受取り丹三郎に出し、)佐藤樣から御狀が參りました。

丹三　おゝ佐藤氏から參りしとか。

〽封印切つて、紐とく〳〵中なる狀を讀下し。(ト封を切り中の手紙を開き見て、)

おゝ殿樣初め奧樣にも、殊の外のお悅にて、「明日日柄も宜しき故、結納を遣はされる樣に、則ち品物は此方にて買調へ候間持たせ差上げ候。」これは〳〵御配慮の段千萬忝なうござると、先生へ宜しく御傳言下され。

若黨　委細畏りましてござりまする。

市助　さあ、其品を是へ下され。

中間　はい〳〵。

〽はツと答へて釣臺より取出す壽留女柳樽、諸白髮迄變らじと祝し壽くよろこんぶ、數の品品取揃へ、

ト結納の品を渡す、市助是を座敷へ運び、よき所へ並べる。

若黨　是で殘らずでござりまする。

市助　たしかに受取りました。

丹三　先生へ宜しく、

若黨　はッ、畏りました。

〽中間諸共若黨は、引返してぞ立歸る。（ト中間明釣臺を擔ぎ、若黨附添ひ花道へはひる。）

市助　これはまあ、お立派なことでござります。

丹三　先生は生得性急な性質故、結納迄買調へ遣はして下さるとは、親も及ばぬ御親切、よい師匠は持ちたいものぢや。

〽噂半ばへ中の間より、おきつは立出で結納の、品を見るよりくわつとせき立ち、

ト奥よりおきつ出來り、

きつ　旦那樣、こりや何でござりまする。

丹三　や、おきつか。（ト言兼る思入。）

きつ　御結納の品でござりますか。

市助　おゝ、こりやアさつきお前も知つてる、奧女中のおむら樣の所へ、旦那から行く結納だ。

きつ　此樣な品迄が、出來てをつたのでござりまするな。
丹三　なに、是は只今媒人なす、佐藤氏が遣はされたのぢや。
きつ　いえ〳〵左樣ぢやござりますまい、疾からお誂へでござりませう。
丹三　さう思ふも無理ならねど、寐耳に水で聞いたは最前、何で疾うから誂へようぞ。
言譯なすも聞かばこそ、妬み心に詰寄りて、（トおきつ詰寄りて）
きつ　もし旦那樣、元より賤しい町家の娘、見る影もないわたくし故愛想がお盡きなされましたら、なぜ最前父さんにあの樣なこと仰つしやりました、いやになつた故暇を遣ると仰しやつては下さりませぬ。
丹三　斯ういふことのあらうとは知らぬ故に言うたのぢや、愛想が盡きたの飽きたのと、決してさういふ譯ではない、降つて湧いたる殿の仰せ。
きつ　もうよい加減に殿樣の、仰せ〳〵と仰つしやりませ、わたくしは何もかも、よく存じてをりますわいな。
丹三　なに、存じてをるとは。
きつ　旦那樣、あなた樣はなア。

〽むしやぶり附いて言ひたさも、主といふ字に手出しもならず、おむら様とやらとは疾から深いお仲にて、御新造様になさりたいにもわたくしを、末始終女房にしようと仰しやつた故、兎やかう言はうと思召して、金左衛門様をお頼みなされ、殿様からのお指圖とわたくしを追出す爲によう拵へ事をなされましたな、それよりは斯う〳〵して外に馴染の女があるから、下つてくれろと仰しやればお主様の事ぢやもの、是非もない事と諦めてわたくしは思ひ切りませうのに、拵へ事をなされましてお出しなされますとは、そりやどうよくでござります〳〵。

〽我と我手に袖喰裂き、悔し涙にくれにける。

丹三　其疑ひは尤もぢやが、全くさういふ譯ではない、末は妻にも致さうと思うたそちに嘘僞り、何しに身共が言はうぞい。

きつ　假令何と仰しやつても、ほんまの事をわたくしはよう存じてをりまする。賤しい身をも顧みず末始終は御新造さまになられる事かとあさはかにも、あなたのお心に隨うたが口惜しうて〳〵なりませぬ。

丹三　又しても〳〵、身に覺えもない事を疑うて恨むのか。

きつ　はい、お恨み申しますわいなあ。

〽戀に上下の隔てさへ泣の涙に主從の禮儀を餘所に恨むにぞ、（トおきつきつと丹三郎を見る。）

丹三　いかに女は愚痴なるものとて、おのが心の推量に大方斯うであらうなぞと、思ひ過して我れへの恨み不便には存ずれど、達て申さば是非がない、其分には致さぬぞ。

きつ　其分に致さぬとは、わたくしが邪魔になる故、殺すお心でございますな。

丹三　あゝこれ、何しに其樣な、

きつ　いえ／＼さうでござります／＼、殺すお心でござりませう。わたくしも此儘に父さんに逢ふも面目ない、いつその事一思に早う殺して下さりませいな。

〽身を摺付けて言譯も聞かぬおきつにもてあまし、困るを市助押隔て、

トおきつ丹三郎へ體を摺附ける、市助思ひ入あつて、

市助　これさ／＼、おきつどの、其腹立は尤もだ／＼、尤もだが言つちやあ濟まねえ、そりやあ死にたくもあらうがお前一人の體ぢやあなし、跡へ殘つた父さんが、どの位案じるか知れねえ、死ぬなあいつでも死なれるから、まあ／＼待ちなせえ／＼。

きつ　市助どの留めて下さんすな、腹が立たうか立つまいか、末始終は女房にすると仰しやるお詞故。

市助　尤もだく、分かつて居るく。

きつ　父さんにも樂がさせたくお心に隨うたも、それも此身が不束故愛想がお盡きなされたら仕方もないが此樣に、拵事で厭應の言へぬ樣になされるのが、私や悔しうござりまする。

市助　さう思ふのも無理ではねえが、何を言ふにもお主樣だ、拵事を、さあ、拵事ぢやあねえから、料簡しねえく。

きつ　何で拵事でないことがあるものかいな、結納迄も此樣に調へてあるからは、疾からお話のあつたことぢや。

丹三　又してもく其樣な思ひ過し、今も言つた師匠より買調へてよこされたのだ。

きつ　其お師匠樣も一つ穴、見れば見る程腹の立つ、

〽憎しと思ふ女氣に、比翼の契り恨めしく女蝶を取つて引裂くにぞ、（ト女蝶をとつて引裂く。）

丹三　やあ、師匠からよこされし、結納へ手を掛けて、

きつ　この蝶々を破りましたが、惡くば殺して下さりませいなあ。（ト女蝶を丹三郎に打附ける。）

丹三　もう此上は、

〽禮儀忘れしおきつが振舞、怺へ兼ねて刀の柄、それと見るより一間より、

ト丹三郎刀を取りきつとなるを、市助留める。奧よりおさみ出て、

さみ　あゝこれ、悴、まあ〳〵待ちやいの。

丹三　母上でござりまするか。

さみ　樣子は奧で聞いて居た、急く所でない、まあ〳〵待ちやいの。（ト丹三郎を留め、）これおきつ、嘸女子の身では腹が立たう、尤もぢや〳〵、疑ふのも無理ではないが、決してさういふ譯ではないから、氣を取直してくりやいの。

〽厚き情に言諭され、おきつも面を和らげて、

きつ　これは〳〵あなたのお耳へ入りまして、濟まぬことでござりますが、女子の狹い心から、悔しうて悔しうてなりませぬわいな。

さみ　おゝさうであらう〳〵、悴が何と言はうとも、わしがそなたを見捨てはせぬ、器量は元より心立も十人並に勝れたそなた、死水取つて貰はうと疾から悴と只ならぬ譯のあるのも蔭ながら、悦んで居た程なれば、こゝへ嫁が來ようとも、そなたは私が親になり、よい所へ片付けて生涯樂に暮される樣、惡い樣にはせぬ程に、必ずきな〳〵思やんな。

きつ　あゝ有難うござります、御奉公に上つてより、一方ならずお目掛けてお遣ひなされて下された大

恩のある御隱居樣、あなたの御恩は死にましても決して忘れは致しませぬ、御恩のあるあなた樣へ對し、此樣な事申しましては濟みませぬから、どうぞ堪忍して下さりませいなあ。

さみ　何の濟まぬことがあるものか、さう思ふのも尤もぢやが、何にせよ何事もわしに免じて料簡してくりや、惡い樣にはせまいわいの。

きつ　有難うござりまする。

丹三　某とても其方を見捨てる心は更々ない、

へ丹三が言へば氣色をかへ、（トおきつ思入あつて、）

きつ　何のないことがござりませう、此樣な結納迄ちやんと出來てありながら、わたくしへ只の一言仰しやつても下されず、見捨てる心に違ひござりませぬ。（トきつと言ふ。）

さみ　これ〳〵おきつ、今もわしの言ふ通りそなたの惡い樣にはせぬ程に、何事も言うてくりやるな。

きつ　いえもうあなたへ何を申しませう、御恩は生涯忘れませぬ。

丹三　互ひの心に替りがなくば、何日か一つになられぬといふこともあるまいぞよ。

きつ　えゝまだマアそんなよいことを、なまじ生中其樣な、やさしいことを仰しやらずと、愛想が盡きたと仰しやりませ。

市助　いや何にしろ斯うなつては、見る事聞く事が心に障つてならねえものだ、御隠居様もあの様に御親切に仰しやるから、悪いことはないほどに、何事もお任せ申して病氣の積りで家へ行つて、體を樂にしなさるがいゝ。

さみ　おゝ市助の言やる通り、嫁の來るのを側に居て、見て居たら心に濟まず、そなたの體に障らうから、今日から直に家へ行つて、何事も聞かずに居てくりや、明日はわしが家へ行き、藤兵衛殿に逢うた上、よい様に話しをしませう。

市助　それが宜しうござりまする、御隠居様があゝ仰しやるから、爲にならぬことはねえから、うんと言つて行きなせえ、己が送つてやらうから。

きつ　はい有難うござんす、爰に居りましたらお邪魔故、家へ參りませうわいな。

さみ　邪魔といふ譯ではないが、そちが爲故さうしてくりやいの。

きつ　あなた様の仰しやる事故、參りますは參りますが、父さんへ何と言うたらようござりませう。

市助　そりやあわたしが附いて行くから、病氣の積りにしなさるがいゝ。側からいゝ様に言ふから、案じなさらねえ方がいゝ。

きつ　そんなら御隠居様、あなたのお詞に隨ひまして、

さみ　一先宿へ行つてくりやるか。

きつ　はい、参りますでござりまする。

さみ　支度はよいか。

きつ　いゝえ、此儘で宜しうござりまする。

（事をわけたる詞詰、おきつは仕方なく／＼も、身支度なすに丹三郎、

ト丹三郎思入あつて、手箱より金を出し紙に包み、

丹三　家へ行けば厄介故、小遣ひに持つて行きやれ。

（包みし金を差出すを、見るよりおきつは又腹立て、（ト丹三郎金包を出すを）

きつ　思召しは有難うござりますが、心の替つたお前様に、何でお貰ひ申しませう。（ト金を突返す。）

市助　あゝこれ、下さる物なら夏もお小袖、（ト取りに掛るをおさみ取つて）

さみ　さういふことなら此金は、明日わしが遣りませう。

きつ　左様なれば、御隠居様。

さみ　おゝ、もう行きやるか。

きつ　はい。（ト名残惜しき思入。）

丹三　市助、氣を附けてゞりやれ。

市助　畏りました、

きつ　えゝ氣を附けて貰はずと、ようござりますわいなあ。

市助　これさ、又そんなことを。

さみ　これきつや、あまりきな〳〵思やつて、煩らうてくりやるなや。

きつ　有難うござりまする。

〽思ひ切つても今更に後へ引かれて行く足も、羊の歩み八つ下り、

トおきつ泣きながら行き兼ねるを市助せき立て花道へ行き、

今日此樣にお暇の、出るのも元はおむらどの故、

市助　ほんにお前が可愛さうだ。

〽今日が別れと鳴る鐘の、數々積る胸の內、心殘りに振返れば、怪しやかたへの結納へ、鎌首もたげ這ひ寄る蛇、

トおきつ振返り、泣きながらぢつと見る、風の音のやうなドロ〳〵になり、結納へ誂への蛇差金にて這ひかゝる。

さみ　や、こりや何處よりか蛇が。
丹三　結納目掛けて這寄るは、もしや嫉妬の、
きつ　え、
丹三　女は恨みの、
深いものぢやな。
ト扇にて蛇の天窓を打つ、と花道のおきつアツト言つて倒れる、ドロ〴〵にて蛇は消える。
ト宜しくドロ〴〵合方にて、
ひやうし　幕
ト花道の市助おきつを介抱なし、
市助　これおきつどの、どうしたのだ。
ト是にておきつすつくと立上る、此時額へ油紅にて疵付き、舞臺を恨めしさうにきつと見込む、爰へ本釣鐘を打込み、市助覗き込み見て、
や、こりや額に疵が。
トおきつ思入あつて手をやり、糊紅の付くを見てきつと思入、本釣鐘を打込み以前の葵の上の唄の切

になり、
〽猶も思ひはます鏡、其面影も恥かしや、枕に立てる破車、打載せ隱れ行かうよ〱。
ト是へ薄ドロ〱を冠せ、おきつ行かうとしては振返るを、市助留めながら宜しく花道へはひる、波の音にてつなぎ直引返す。

二幕目　築地門跡川岸の場

〔役名――今村の下部市助、男達隱家の茂兵衞、今村丹三郎、紙屋藤兵衞。今村下女おきつ、笠森お仙、其他。〕

（門跡川岸の場）――本舞臺四間通しの高二重、石垣の蹴込み、後上手へ寄せて練塀、下手斜に屋敷の遠見、下手に柳の立木、平舞臺下手に漁船四ツ手網を掛け雨落より浪手摺、舞臺一面浪布を敷き、上手は蘆原にて見切り、すべて築地門跡川岸の體。爰に夜蕎麥賣り丼熊荷を下し呼かけ居る。此見得時の鐘、浪の音にて幕明く。

熊　蕎麥イ、にうめん、しつぽこイ〱。
ト漁船より雜魚七さしッ子、筒ッぽ半纏、四つ手網の船頭の打扮にて出來り、

七　おい〳〵當り屋さん、いつぺいくんねえ。

熊　おゝ四つ手の雜魚七さんか。

七　今夜はいつもよりちつと早いぢやあねえか。

熊　いつも北條の賭場へ寄つて來ますが、今日は寄らずに來やしたから、ちつと早うござります。

ト蕎麥を拵へて出すを喰ひながら、

七　此節諸式の高いのに、斯うよくして賣つちやァ合ひやすめえね。

熊　どうで不斷の樣には行きませぬが、有難えことに、出せへすりやあ七八貫の商ひをしやすから、どうなりかうなりこねツけえして行くのさ、雜魚七さんの生業なざァ元手が掛らなくつていゝね。

七　さうさ、繩と違つて四つ手だやあ餌の錢がかゝらねえが、祝儀でも呉れる客がなくツちやあ旨え酒を吞むことが出來ねえ。

熊　お前の方にやあ祝儀でも貰ふ不意な錢の當があるが、わつちらの生業と來たら餘計な物は三文でも取れねえ。

七　其代り出せえすりやあ、定びッたりにきつと錢になるから、其方が堅えといふものだ。

熊　何でも仕慣れた事でなくツちやあいけねえ。

十　早くしまつて歸んねえ。又後に逢ひやせう。

熊　そりやあさうと親分は、又五丁目で遊んで居なさるか、是非來るから待つて居ろと先刻人をよこしなすつたが、あんまり遲いぢやあねえか。もう今に五ツだらう。どれ、ちよつと迎ひに行つて來ようか。

七　そばアい〳〵。（ト呼びながらそばやの熊は上手へはひる。）

ト是より床の淨瑠璃になり、

〽時も五ツか四ツ手網漁夫は町家へ急ぎ行く。（ト時の鐘にて、雜魚七下手へはひる。）

〽折柄こゝへ藤兵藤が娘の難儀も知らぬが佛、寺門前へ急ぎ來て、（ト上手より藤兵衞出來り、）

藤兵　やれ〳〵今日は朝から娘の事で、行つたり來たり日を暮した、育てる時は世話なものだが子がなくては人はいけない、其内にも譬にいふ氏なうて玉の輿、女の子は出世が早い、今村樣の御新造になるといふのは、おきつめは運のよいやつだ。親は非道忠右衞門といつて心立の惡い人だが、あれが心が素直故神佛のお惠と見える、何にしろあの樣な娘を養女に貰うたは、誰より己が仕合せだ、さつき言つた緣談を斷つてしまつたれば、娘に安心させうと思つて、明日でもよい事ながら年寄の忙しなく又出直して來たが、盆後から暮合が早く、もう灯りが點いてしまつた。どれ、

ちつとも早く行きませう。

〽とつかは急ぐ向うより來かゝるおきつは闇ながら、盡きぬ緣に行當り、

ト藤兵衞行きかゝる、時の鐘合方にて花道より以前のおきつしを〳〵と出る、後より市助附いて出來り、舞臺へ來り行當り、

きつ　これはしたり、心急きについうか〳〵、眞平御免下さりませ。

〽言ふは娘の聲音故、星明りにすかし見て、（トおきつ訝るを、藤兵衞すかし見て）

藤兵　や、さういふは、娘ぢやないか。

きつ　思ひがけない、父さんでござんしたか。

藤兵　今時分何處へ行きやるのだ。

市助　父さん、お前の所へ行くところだ。

藤兵　なに、わしが家へ。

きつ　父さん堪忍して下さんせ。

〽思ひ迫つて石垣より、前なる川へ飛入らんと、なすを市助押止め、

トおきつ前の川へ飛込まうとするを市助藤兵衞抱留め、

市助　これはしたりおきつどの、短氣なことをしなさんな。
きつ　どうぞ放して下さんせいなあ。
藤兵　えゝめつさうな、何でまあ死なうなどゝしやるのだ。
きつ　さあ、父さん、お前に面目ない故、
藤兵　なに、面目ないとは、どゞどういふ譯ぢや。
きつ　さあ、それは、
藤右　早う言つて聞かしやいの。
〽老の心の忙しなく、急き立てられて猶更に涙に咽び泣き入れば、
これ、泣いて居ては譯が分らぬ。
市助　いや、其譯は藤兵衛殿わしが代つて言ひませう。（ト捨石へ腰を掛け、）外でもねえ、旦那様が奥様のお側女中おむらどのといふ女と疾から深い仲であつて、内々聞けば身重故、當時屋敷で羽振のいゝ劍術の師匠を頼み、奥様から其女を貰ふ積りにお願ひ申し、殿様のお指圖と權柄押に、今言つた劍術の師匠殿が、さつき其事を言ひに來て、あした直に結納を遣ると言つて、今し方家へ持込んで來たものだから、おきつどのが腹を立つて、さういふ譯ではあるまいと、言つた所が殿様

のお指圖だから仕方がないと、色氣のない挨拶ゆゑ、御隱居樣が側で見兼ね、一先家へ行つたがよい、私があした尋ねて行つて親父どのに話さうからと仰しやるから、此子を送つて今お前の所へ行くところさ。

藤兵 〽始終を聞いて藤兵衞は、律義一途に拳を握り、（ト是を聞き悔しき思入にて、）さりとは無慈悲な旦那樣、なぜさういふ事がござりますなら、最前言うては下さりませぬ、此藤兵衞に不相應な地面地屋敷を持つた所から、娘を呉れいと望まれたも、刀に掛けて女房にすると仰しやつた故誠と思ひ、斯樣々々で御主人さまで、女房に呉れと仰しやる故お斷り申しますと、自慢心で斷つたのに、其御主人樣の弄物になり、暇が出て歸されたと近所の衆に言はれうか、嫁に呉れと言はれたる先へ對して外聞がわるい、親子の者に此樣な面皮をかゝせて下さりますとは、情を知らぬなされかた。娘、おれと一緒に來い、旦那樣にお目にかゝり、一分を言はにやお腹がいぬ。

〽泣き居るおきつが手を取つて、引立つるを振拂ひ、（トおきつの手を取り引立てるを、）

きつ あゝもし父さん、わたしやもうお屋敷へ行くのは、厭でござりますわいな。

藤兵 はて一人行くのではない、己が一緒に連れて行くわい。

市助　あゝこれ〳〵藤兵衞殿、おきつどのも二度と再び歸らぬ心で出たからは、今更行くのは厭だらう、此子はわしが送つて行くから、お前一人で旦那へ行つて、存分言つてやんなせえ。
藤兵　おゝ、そちが行くのが厭ならば、己一人で行つて來よう。
きつ　其のお腹立は尤もながら、私と共に此儘に、家へ戻つて下さんせいな。
藤兵　いや〳〵、此儘にして歸つては腹が立つて家には居られぬ。
市助　おゝさうだらう〳〵、己でせえ腹が立つもの、お前の立つのは尤もだ、又來るのも面倒だ、もうわづかだから行つて來なせえ。
藤兵　それぢやあ市助殿、娘をこなたに頼みます。
市助　案じなさんな、しつかりと送り屆けて進ぜます。
きつ　市助殿が親切に、よう世話をしてくれるから、父さん禮を言うて下さんせ。
藤兵　其處はどうでも昔馴染、こなたへ禮はわしがします。
市助　何の禮もへちまもいるものかね。まあ、それよりやあ更けねえ内に、ちつとも早く行つて來ねえ。
藤兵　おゝ、一分言つて來にやあ、夜が寐られぬ。
きつ　そんなら父さん行かしやんすか。

藤兵　家へ行つて待つて居やれ。

〽尻はせ折つて藤兵衛は、子故の闇にいちもくさん、川端傳ひに急ぎ行く。

ト浪の音ばた〳〵にて、藤兵衛花道へ走りはひる。

市助　これとつさん、あぶねえ靜に行きねえよ。（ト花道迄行きて見送り、）よく〳〵腹が立つと見えて、いちもくさんに駈けて行つた。

ト時の鐘かすめて浪の音、市助後へ返る、おきつ泣きながら、

きつ　もう父さんは行かしやれてかいな。

市助　おゝ、影も形も見えなくなつた。

〽水に移りし星影の光に後を打見やり、燧取出し呑む煙草。

ト市助摺火打を出し、火を打ち煙草を呑みにかゝる、おきつ見て、

きつ　さあ市助どの、早う行かうぢやござんせぬか。

市助　ちよつと一ぷく呑んで行くから、ちつとの内待つてくんねえ。

きつ　待つのは何時迄も待つけれど、往來もない此川端、何だか後が見らるゝ樣で。

市助　なに、なまじ往來の人がねえから、別に怖いことはねえが此後はべたゝ寺だから、出るものは人魂

ばかりだ。

きつ　あれ、氣味の惡いことを。

〽思はず取付く其手を捉へ、（トおきつ市助に取付くを、市助おきつの手を捉へ思入あつて、）

市助　何の怖いことがあるものかね。（ト宜しく思入。）こうおきつどの、お前は家の旦那どんに心が殘つて居るだらうが、思ひ切つて仕舞ひねえよ、向うにおむらといふ情人が出來て女房にする上からは、お前に心は返らねえ、これが常の色戀なら振込んで行つて二人共、疵でも付けてやるのだが何をいつても主家來、かすり疵でも附けた日には吟味なしに主殺しだ、さうした日には父さん迄に難儀を掛けにやあならねえから、所詮意趣は返せねえから、すつぱりと思ひ切つて、金と轉んで手切を取んねえ、百兩の金は押へたばつたゞ、それを元手に氣の利いた亭主を持つて父さんに樂をさせるが孝行だ、惡いことは言はねえから、己が言ふことを聞いてさうしねえ。

きつ　そりやさうでもござんすが、嫌はれてもいとしい殿御、外の男を持つ事は私や厭でござんすわいな。

市助　そりやあ大きな野暮といふもの、お前が幾ら思つたとて、向うで倦きたら仕方がねえ、益ねえ心中立てずとも、旦那よりお前にやあ、ぞつこん惚れた男があるぜ。

きつ　なに、わたしに惚れた男とは。
市助　さあ、其の男といふは。
きつ　誰でござんすえ。
市助　誰でもねえ、この市助だ。
きつ　え﹅。（ト びつくりなす、此時どんと浪の音の頭を打込み、誂の合方になる。）
市助　お前が目見得に來た時からぞつこん惚れちやあ居たけれど、好な酒も斷つて仕舞ひ心を入替へ堅氣になり、奉公をして居る市助だから、言ひてえ事も我慢して言はずに居る其内に、旦那様とい い中になつた様子に、こいつあ所詮始まらねえとぷッつり思ひ切つて居たが、斯ういふ事になつたからは、牛を馬に乘替へて己がいふ事を聞いてくんねえ。其替り手切の金は、己が力で存分に取つて遣つたら父さんに、こんな孝行な事はねえ。（ト 宜しく思入にて言ふ。）
きつ　そりや孝行にならうけれど、旦那様は兎も角も御隱居様には一方ならず、御恩になつたわたし故手切など﹅其様なねだりがましい事が言はれうか、又お恨みは申すもの﹅、一旦お情受けた上は外の夫は持たぬ心、足らはぬわたしを其様に言うて下さんすは嬉しいけれど、お前に限らず誰であらうと、女子の操に是限り、誰にも此身は任せぬ心、堪忍して下さんせいなあ。

市助　そりやあ悪い料簡だ、お前がそんなに義理を立つても、向うで何とも思やあしねえ。緣の下の力持だ、そんな野暮を言はねえで、己が女房になつてくんねえ、生涯お前も父さんも困る樣なことはしねえ。

きつ　そりやもうお前の親切故、見捨てることはござんすまいが、父さんにも話した上お前に此身を任さうわいな。

市助　そんなつまらねえ挨拶があるものか、父さんが悪いと言やあそれで己に斷る氣だらうが、情事をするに父さんに相談をしてする奴があるものか、さあ、善は急げ早いが勝だ、今返事をしてくんねえ。

きつ　それぢやといつて、今というて、どうまあわたしに。

市助　なに、出來ねえことがあるものか、厭も應も胸一つ、お前の心で返事をしねえ。

きつ　それぢやと言つて此中で、それ所ではござんせぬわいなあ。

市助　其の男に捨てられた所がこつちの附込みだ、斯う言ひ出したら一寸でも後へ退かねえ捻金市助、返事次第でこつちも又、いやなこともしにやあならねえ。

〽水道の樋へ腰打掛け弱身へ附込むおどしの詞、（トおきつ思入あつて、）

きつ　すりやどうあつても今爰で、
市助　厭か應かの返事が聞きたい。
きつ　それ程迄に言はしやんすなら、思ひ切つて言ひますぞえ。
市助　おゝ、其返事が聞きてえ〳〵。
きつ　さあ、其返事は、
市助　さあ、其返事は、
きつ　厭ぢやわいな。
〽ずつけり言つて逃出す帯際取つてぐつと引附け、（トおきつ逃出すを市助追かけ帯際を捉へ）どつこい逃してなるものか。いやだと言やあもうこれ迄、手荒い事をしてなりと、己が思ひを晴らさにやおかねえ。
きつ　そんならどうでも、わたしをば。
市助　むゝ、情ごかしに屋敷をば連出したのは斯うする巧み、呑みてえ酒も願酒して、堅氣になつた市助も、根が惡玉にいゝ玉のしがを隱した此胸が、ひつくりけえりやあ又惡玉、替るが早い人心佛と見せた立役仕込み、忽鬼の敵役、茲迄お前を連出したが、こつちの巧みの山猫廻し、尻尾を見

せた上からは、四の五の言はずとおきつばう、うんと得心してくんねえ。

きつ　すりやどうあつても、わたしをば、

市助　厭だと言やあ縛つても、己が思ひを晴らさにやおかねえ。

きつ　さう聞く上は、南無阿彌陀佛、

〽とらへる手をば振拂ひ、又もや川へ飛入らんとなすをあわてゝ抱き留め、

トおきつ川へ飛込まうとするを、市助しつかと捉へ、

市助　どつこい、殺してなるものか。

きつ　えゝ、爰放して下さんせいなあ。

〽かよわき女も一心不亂、横顔打つて逃出すを、（トおきつ市助の顏をぴつしやり打つ。）

市助　うぬ、くらはしやあがつたな。

きつ　もう斯うなる上からは、

〽轉ぶ拍子に砂取つてめつたむしやうに打付け〳〵、目口へ入りて市助がひるむ其間に是迄と飛込む下は川ならず川岸に付けたる漁舟、四つ手の網に身をまつはれ、あせるを見るより市助が舟へ飛込み引摺倒し、

トおきつ砂を取つて打付ける、市助目へ入りし思入、おきつ此間に川へ飛込む心にて舟の中へ飛込むを、市助後より飛込み、酷く引摺り倒し、

市助　所詮たゞぢやあ承知しめえ、幸ひの此縄で、縛り上げて思ひを晴らさう。

きつ　あれえ、誰ぞ來て下さんせいな。

市助　えゝやかましい、だまりやあがれ。

〳〵もやひの縄を幸ひと、片手に手繰つて市助が縛り上げんと捻伏せる、其手にひしと喰付けば、あつとばかりに手を放したじろぐ隙を窺ひて、脇差抜いて切附くれば、身をかはして櫂おつ取り、打つてかゝれば暗さは暗し、足許わるき舟のゆれ、切立てられて是非なくもひらりと岸へ飛上れば、續いておきつが付入るを、櫂にて脇差打落し取るより早く切付くれば、

ト市助縛らうとする舟の立廻りあつて、トゞおきつを捻伏る、おきつ市助の指を喰切る。市助アイタアイタと飛退く、おきつ隙を窺ひ市助の脇差を抜いて切つて掛る、市助舟に有合ふ櫂にて立廻り、切立てられて二重へ飛上り、おきつ續いて上つて立廻りあつて、市助櫂にて脇差を打落す、市助直に件の刀を取上げる、是にておきつむしやぶり付くを一刀切下げる、是にておきつどうとなり、

きつ　やゝ、こりやわたしを切らしやんしたな。

市助 不便ながらも頼まれて、おきつわれをば殺すのだ。
きつ なに、頼まれしとは、そりや誰に。
市助 誰でもねえ、丹三郎樣に。
きつ えゝゝゝ。
市助 おむらを女房に貰ふのに、邪魔になるから連出して殺してくれろと頼まれたが、何科もねえおぬしをば殺すも不便に思ふから、己が心に隨はゞ女房になして助けようと思つたけれど女の淺慮、殺す心の丹三樣に心が殘つて不承知故、是非なく己が殺すのだ、場所もあらうに門跡前、あの世へ導く念佛の聲も哀れに子の刻過ぎ、二十三夜の月代も沖を離れて引汐に、弘誓の船が四つ手網水葬禮にしてやるから、魚の餌食となりやあがれ。
〽可愛さ餘つて憎さが百倍、又も肩口切下げれば、其手に縋り吐息をつき、
ト又切付けるを、おきつ其手に縋り苦しき思入。
きつ むゝ、すりや丹三さまが汝を頼み、おむら殿を呼迎へるに邪魔になる故殺さすとか、戀には邪險になるものとて、何科もないわたしをば、殺さするとはどうよくな、此身は兎もあれ父さんがかゝる非業な死と聞かば、其お歎きはいか程か、歎きのあまりに取詰めて、若しもの事でもあつ

たなら、親子共に丹三樣のお手に掛つて死ぬのも同然、何程なお恨みあつてかゝる事をなされまする、恨はこつちにあるものを、却つてこつちが殺さるゝとは、ちえゝ口惜しい、口惜しいわいなあ。

〽迷ふ心に僞とも知らず白刃を握り詰め、目も血走りて恨むにぞ、

市助　おゝ恨しからう／＼、腹さん／＼なぐさまれ、擧句の果に殺されちやあ、口惜しくつてなるめえが、愛想の盡きたも有樣はお側女中のおむらどのが、お前よりやあ十層倍向うが女がいゝからだ。悔しけりやあ女の一念、旦那に存分言ふがいゝ。

きつ　おゝ、人に恨みのあるものか、ないものかお主樣とて餘りの無慈悲、恨みを言はいでおかうかいの。

〽おどろの髮を振亂し、嫉妬の一念苦痛も忘れ、心引かれてひよろ／＼と立上りて行きかゝるを、

市助　どつこい此儘行かれちやあ、殺してくれと頼まれた、此市助が濟まねえから、不便ながらも一思ひに。（トおきつに切付ける。）

きつ　すりや、どうでも殺すのぢやな。

市助　おゝ、己ちやあねえ丹三樣だ。

〽めつたむしやうに切付け〱、

それ丹三樣だぞ。（ト市助めつた切におきつを切付ける立廻り宜しく、ぐつと脇腹へ突込む。）

きつ　えゝ悔しい、悔しいわいな。

市助　己ちやあねえ〱。

〽ぐつと突込み一とゑぐり、虛空を見詰め齒を喰締め、刀を拔けばがつくりと、はかなく息は絕えにけり。（ト切倒し乘掛り、）

いや惜しいものだが、（ト止めをさし、ほつと思入。）

〽胸許探つてとゞめの刀、一息ほつとつく折しも、來掛る蕎麥屋の風鈴に、見付けられじと市助が、暫し小蔭へ身を忍ぶ、斯くとも知らず夜蕎麥賣り死骸に躓きびつくりなし、

ト市助ほつと思入、此時上手にて夜蕎麥賣の風鈴の音、「そばイ〱」と云ふ聲聞ゆる、市助びつくりなして刀を差したまゝ下手へはひる。上手より以前のそばや荷を擔ぎ出來り、件の死骸に躓き、

熊　えゝ往來中に、生醉かしらぬ。（ト見てびつくりなし）やあ、こりや人が切られて居る、而も女だ、掛り合にならぬ内に、さうだ〱。そばイ〱。

〽そばい〳〵といふ聲も、齒の根も合はぬ顫へ聲、後をも見ずに行きかゝる、向うへ見ゆる提灯の火影にほつと行過ぐるを、

トそば屋花道へ行く、花道より以前の丹三郎着流し、大小、小田原提灯を持ち出て來る、そばやぶるぶるしながら行合ふ。

丹三 こりや〳〵、そば屋〳〵。

熊 はい〳〵〳〵。

丹三 今是へ來る道にて、五十餘りの老人に逢はなんだか。

熊 いえ、左樣な、ひ、ひ、人には、

丹三 何かそは〳〵詞の顚倒、如何致したのだ。

熊 はい、怖くつて〳〵、齒の根が合ひませぬ。

丹三 怪しき者にでも出逢つたのか。

熊 いえ、ひ、ひ、人殺しがござりまする。

丹三 そりや何れに、

熊 あ、あ、あれに、

〽後へ指差し風鈴の、音もせはしく急ぎ行く。
ト そばや顫へ〳〵宜しく花道へはひろ、丹三郎後を見送り、

丹三　はて、合點の行かぬ奴だなあ。
〽心ならずも來掛る川端、糊に辷りて立留り、
ト 舞臺へ來り、糊に辷りびつくりなし、提灯にて見て、
やゝ、こりや夥しい、此の血汐、
〽邊り窺ふ小蔭より、聲聞き付けて立出る市助、（ト市助窺ひ出て）

市助　旦那樣、
丹三　や、市助か。
市助　へい、わたくしでござりまする。
丹三　しておきつは、どうした、
市助　殺しましてござりまする。
丹三　えゝ、（トぎよつとなし、）殺したか。
市助　へい、割つ口說いつ言聞かしても、只悔しい〳〵と、女の一途に心が解けず、取て返して御家老

樣へ此事を言上げると、振りもぎつて行きますから、言はれた日にはお身の上故、爰ぞ御恩の返し所と、殺しましてござりまする。

丹三　して、おきつが死骸は、

市助　へい、これにござりまする。

〽止めをさせしおきつが死骸、引起せば目を見開き、さも恨めしき顔色に、

ト突込んだ脇差を持つて引起す、おきつの吹替の死骸を裏向にて見る思入。

丹三　一生見捨はせぬといふに、聞入れぬ故此最期、人を恨むな心がらだぞ。

市助　實に私が言ふ事を、聞きやあ殺しはしませぬに。（ト脇差を拔く、吹替ばつたり倒れる。）

丹三　して此死骸は、如何致さうな。

市助　幸ひ今が引汐故、こゝから直に水葬禮、

丹三　首尾よく沖へ流れ出ようか。

市助　丁度水氣でござりますから、海迄出りやあ風次第、上總房州それからそれ、何處へ行くか知れはしませぬ。

丹三　さういふことなら、ちつとも早く。

市助　合點でござりまする。

〽刀引拔き亡骸を岸より流す水葬禮、果は何くか白浪の汐に引かれて流れ行く、

ト死骸を舞臺切穴へ打込み、水の音水の花ぱつと立つ。

丹三　彼が親父の藤兵衞が、やかましく言つて來た故、生涯決して見捨てぬから、先此金を當分の小遣に致しやれと、十五兩遣はせしを手にも取らず投付けて、けんもほろゝに歸つた故、直に後を追掛けたが、何處で道が違つたか、たうとう途中で見失つた。

市助　あの親仁もいつこく者故、金などは取りますめえ。

丹三　何にしろ差當つて、今宵娘が歸らずば、又明日やかましく申して屋敷へ來るであらうが、何と言つたものであらう。

市助　其儀はお案じなされますな、是から直に私が上州の伯父の所へ逃げて行つて居りますから、おきつを連れて出奔したと、私へ罪をお着せなされまして、出奔屆をなされませ。

丹三　すりや、其方がおきつを連れ出奔なせし體にして、姿を隱してくりやるとか。

市助　へい、何その時にはお役にと、思つてをつた此市助、命をお助け下すつた御恩送りでござります

る。

丹三　一旦の恩を忘れず忝い志し、些少ながら持合せし藤兵衛に遣る十五兩、是を路用にして行きやれ。（ト懐中より金包を出し、市助にやる。）

市助　有難うございますが、血だらけでございますから、ちよつと手を洗つて参ります。

ト時の鐘凄き合方にて、市助雁木から川岸へ下り、川にて手を洗ふ、薄ドロ〳〵になり、川の中より細き女の手出て、市助の手を捉へる、市助思入あつて、

これ誰だ、己が手をつかまへるのは。（ト振拂ふ。）

丹三　なに、手を捕へられた。

市助　へい、冷てえ手でつかめえました。

丹三　や。（ト又川より手を出し捕へる。）

市助　まだ其處にうしやアがつたか。

ト浪の音になり、上手より垂を下せし四手駕籠を駕籠舁擔ぎ出て、舞臺下手にて杖をする、此の途端人魂を引上げる。

丹三　やゝ、あの人魂は。（ト是を聞き、）

駕舁　ワア、幽靈だ。（トびつくりなし、駕籠を置いて下手へ逃げてはひる。市助思入あつて、）

市助　もし旦那、今のは慥に、

丹三　おきつが人魂。（ト此時下手より以前の雑魚七窺ひ出て、）

七　うぬ、人殺しめ。

ト市助に組付くを振解き、丹三郎突廻す、雑魚七駕籠の提灯へ當る、是にて灯り消え、時の鐘忍び三重模様の合方になり、駕籠の垂を上げる、内にお仙居て前へ出る、雑魚七お仙に突當る、「アレ」トいふ聲に、丹三郎雑魚七の襟上を取り投附る、爰へ市助探り寄り、一寸立廻つて三方へ別れ、きつと見得、時の鐘誂への鳴物になり、上手より茂兵衛男達好の打扮一本差し、尻はし折、麻裏草履にて青柳といふ貸提灯を提げ出て此中へはひり、提灯を差出すを、丹三郎打落し、四人にてだんまり模様の立廻りになり、お仙落散りある簪を拾ひ、市助丹三郎の落せし金を拾ひ、茂兵衛、丹三郎の提灯を拾ふ。丹三郎は茂兵衛の貸提灯を拾ひ、この内始終雑魚七掛り立廻りあつて、トゞ市助雑魚七を投退け、つかく〱と花道へ行く、茂兵衛お仙を探り見て、

茂兵　お仙か。

お仙　茂兵衛さんか。

市助　えい。

ト花道より石を打付ける、茂兵衛身を躱す、と雜魚七に當り、ポンと轉るに茂兵衛片足掛るを木の頭、上手に丹三郎柄へ手を掛けきつと見得、茂兵衛お仙を關ひ、丹三郎を窺ふ。此見得浪の音佃にて、

ひやうし幕

ト幕引附けると一緒に、市助逸散に花道へはひる、知せに附き跡シャギリ。

三幕目　谷中鍵屋の場

〔役名――男達隱家の茂兵衛、鍵屋義兵衛、同悴義次郎、恩田吾市、夜蕎麥賣り丼熊、藪垣文吾、溝川丈八、醫者山井養仙。笠森お仙、茶屋女お澤。〕

(茶見世の場)――本舞臺三間の間平舞臺、正面暖簾口、上手押入戸棚、下手奉納の額、土の狐、土の團子を飾りし棚の書割、例の所門口、上の方一間障子屋體、下の方笠森稻荷の境内を斜に見たる片遠見、下の方へ千本幟を立て、門口の柱に鍵屋といふ掛行燈、總て笠森稻荷門前鍵屋の體。こゝに上手に醫者山井養仙、傍へ刀を置き藥箱を控へ、調合をしてゐる、門口に仕出し三人○△□立つてをり、茶屋女のお澤商ひをしてゐる、この模樣よろしく稽古唄にて幕明く。

○　この土の團子と額が、兩方でいくらになります。

お澤　はい、お團子が十二文、額が五十六文でござります。
△　わたしにも額を一枚おくれ。
お澤　はい〳〵畏りました、あなたは此間いらつしやいましたが、もうお禮參りでござりますか。
△　いやもう御利益は有難いもので、すつかりふツきりまして、この通りしやん〳〵歩けまする。
お澤　それはまあ、よろしうござりました。
□　わたくしにも團子を一盆下さいまし、焦げた所がようござります。
お澤　その團子はこちらにはござりませぬ、わたくしどもは土の團子でござりまする。
□　何だ、土の團子、それは大違ひだ。
お澤　附燒きの團子は、この御地内の屋臺見世にござりまする。
□　それは有難うござりまする。
○△　はい、代はこゝへおきますぞえ。
お澤　はい〳〵、有難うござりまする。

ト仕出しは下の方へはひる。お澤は錢をしまひ、土の團子、額などを列べてゐる。奥より鍵屋の忰義次郎町人息子の打扮にて出來り、

義次　これは〳〵養仙様、毎度御苦勞でござります。
養仙　息子どの、嘸御病人で心配でござらうの。
義次　有難うござりまする、いやもう忙しない生業故、實に手のないので困りきります。
養仙　いや、さうでござらうとも、然し、よく商ひがありますの。
義次　有難うござります、笠森様のお蔭で、よい商ひをいたします。
養仙　愚老かゝるつてからも、買ふ人が途切れませぬ。わしなぞも本道外科、やらずのがさずで挊ぎまするが、なか〳〵醫者なぞは及ばぬことでござる。
お澤　いや、こちらもやつぱり外科のやうでござります。
養仙　何で外科でござるな。
お澤　それでも買物に來る人が、五臟圓の看板のやうに、やれ横根だの、やうばい瘡だのと、瘡毒患者ばかりでござります。
養仙　なるほど、こりやあさうでござらう、はゝゝゝ。
義次　もし養仙様、いつたい親父の病氣は何でござりませうな。
養仙　いや、あの病ひは殊の外難症でござつて、早く申すと瘧のやうなものでござる、烈しく熱を發し

ます時には、事によると發狂いたさうも知れぬ症でござれば、先づ〳〵なるたけ氣を使はぬやうになされねば相成りませぬ。

義次　それははや困つたものでござりまする、何分ともにお加減の藥りを、お願ひ申しまする。

養仙　いや、そこは如在はござらぬて。

ト この内花道より夜蕎麥賣り 丼熊尻端折り草履にて、草臥れたるこなしにて出來り、直に舞臺へ來て、

熊　はい、どうぞ土のお狐樣を、一つお願ひ申しまする。

お澤　はい〳〵畏りました。（ト土の團子を土器へ載せて切火を打つて、）お團子でござりまする。

熊　もし〳〵團子ぢやあござりませぬ、お狐をお願ひ申します。

お澤　左樣なら、お團子ぢやあござりませぬか、わたくしは又歩きつきがをかしうござりますから、横根の御願掛かと存じました。

熊　それは御親切有難うござりまする、わたくしの歩きつきのをかしいのは、遠方から來た故、草臥れたのでござります。

義次　これさお澤、失禮千萬な、ちと氣をつけたがいゝぢやあねえか、あんまり當推も程があるわ。

（ト熊に向ひ）御達方とおつしやつて、あなたはどちらでござりまする。

熊　はい、築地の川岸の者でござりまする。

養仙　なに、築地でござるか、それはよほどの道でござるの。

義次　さうして何ぞ腫物の、御願がけでもござりますか。

熊　いえ／＼そんなものぢやあござりませぬ、ちつと變つた願掛けでござりますのさ、まあ御免なさい、煙草の火を一つかして下さりませ。

義次　さあ／＼、こちらへおはひりなされませ。

トお澤煙草盆を持つて來る、熊煙草をのみながら、

養仙　もし、變つた願掛けとは、いつたいどんな願掛けでござりますな。

熊　へい、わたくしが生業は夜蕎麥賣りでござりますが、此間商ひ先で厭なものを見まして、それからこつちは間が惡く、其の事を思ひ出しますとぞく／＼として來まして、心持が惡くなつて仕方がござりませぬ、ところで笠森樣を家へお祀り申すとよいといふことでござりますから、お狐樣を取替へて勸請をしようと存じまして、

お澤　さうして厭なものとは、いつたいどんなものを御覽なすつたのだ。

熊　いや、話しをしてもぞつとしますが、わたしらが方に門跡川岸といふ所がありますが、そこを通りかゝりますと、女が一人殺されてをりました、其の女の死骸といふものは、あゝいやだ〳〵。

ト一人氣味惡がつて話す。

義次　さうしてそれは、何處の者だか知れましたかな。

熊　さあ、何處の者だか知らないが、丁度夜の九つ時分、生業に出て歸りがけ、何でも年の頃は廿歳ばかりで、いゝ女でござりました、それを見ると氣味が惡くなつたによつて、急ぎ足で來る途中でお侍に出ツくはしましたが、今度はびつくり仰天して、怖々ながら顏を見ると、なんでも私が見たお方、どこのお人であつたかとやう〳〵のことで思ひ出したが、この春而もやつぱり築地で、結城樣のお通りの時、生醉がお供先を切つたその時に、えらい手柄に噂のあつた、今村丹三郎樣といふお方、なんでもそのお人が女を殺したものと見えまするて、なか〳〵切り取りするやうな人ではないが、何か仔細のあることであらうと思ひまして。

養仙　はゝあ、その結城家の藩中とあるからは、此方の家のお仙どのに生寫しといふ女子衆のゐるお家ではござらぬか。

熊　おゝそれ〳〵、それに相違ござりませぬ、お前さんはよう御存じでござりますな。

養仙　されば、あのお屋敷には、懇意なものがあつて、時折行くので知つてをります。

義次　そんならいつぞやお仙が話しに、結城樣の御家中で見世へござつてかう〳〵と、話しのあつたことがあるが、それぢやあもしや殺した女は。

熊　お心あたりでもござりますかな。

義次　なにさ、まだ若いのに氣の毒なことだね。

熊　いや、とんだ話しでおそくなつた、左樣ならお狐樣を貰つてまゐります。

義次　まあ、ゆつくりとしておいでなされませ。

熊　有難うござります、遠路をかゝへてゐますから、これから參詣をしてまゐりませう。

お澤　左樣ならお靜においでなされませ。

熊　はい、おやかましうござりました。（ト土の狐を持ち門口へ出て、思入あつて下手へはひる。）

養仙　いや、世間にはいろ〳〵な椿事があるものでござるての。

義次　實に聞いても厭でござりまする。

ト この内養仙調合をした藥を疊紙へ入れて、

養仙　今日の藥は加減がしてあれば、たてつけて上げたがようござる。

義次　それは有難うございます。（ト藥を取る。）
養仙　先づ、大事にさつしやるがようござる。
義次　もうお歸りでございますか。
養仙　また明日お見舞ひ申さう。藥箱は後に下部を遣はしますから、邪魔ながらおいて下さい。
義次　へい、たしかにお預り申します。
養仙　どうかお天氣が變らねばよいが、
　　ト下手へはひる、跡へ脇差を忘れて行くこと、義次郎脇差を見て、
義次　いや、そゝつかしい養仙樣、又脇差を忘れてござつた。これお澤、ちよつと後を追かけてお屆け申してくれ。
お澤　いえ〳〵お屆け申さぬ方がようございませう。折角お屆け申しましても、又どこぞへ忘れておいでなさるから、やつぱりこつちへ置くはうが大丈夫でございませう。
義次　いかにお家が茗荷谷だとて、あのやうに忘れるお方はない、見世へおいても險難だ、奥へやつておいておくれ。（ト脇差を出す、お澤取りて、）
お澤　畏りました。

義次　ついでに、このお藥を煎じてくれ。
お澤　はい〳〵、（ト藥包みを取つて、）水加減はいつもの通りでようござりますか。
義次　常の通りだといふことだ。
お澤　左樣なら煎じてまゐりませう。（ト奥へはひる。）
義次　あゝ何だか厭な話ばつかり、今來た蕎麥屋の話では、どうも氣になるお仙が姉御、此間お仙が所へ丹三郎樣がおいでなされ、同胞だといふことが分かり、それから間もなく家のお仙が、あの茂兵衞さんに誘はれて、品川泊りで大師へ行き、歸りに結城のお屋敷へ寄つて、今村樣でたづねたところ、市助とかいふ中間と駈落をして逃げたとのこと、何でもその夜のことぢやあねえか、どうもこりやあ安心がならねえわえ。
ト思案の思入、稽古唄になり、花道より吾市、文吾、大八等三人の侍出來りて、
文吾　いやなに恩田氏、今日はよほど手強くお談じなされねば、手に入りませぬぜ。
丈八　何でもかでも手延びになつては、掛合ひが面倒でござる。
吾市　そこは拙者も心得てをる、今日は是非とも強談にてお仙を身共が女房に貰ひ受けねば相成りませぬ。

兩人　早くまゐらうではござらぬか。

吾市　さ、さ、まゐりませう。（ト舞臺へ來り門口にて、）賴まう〳〵。

義次　（門口を明けて、）これはよういらつしやりました。

三人　許しやれ。（ト三人ともずつと上手へ通る、義次郎は心得ぬ思入にて、）

義次　してあなた方には、何ぞ御用のござりまして、

吾市　さ、用がありやこそ推參いたした、此の家の主人鍵屋義兵衛に、面談のいたしたい。

義次　それははや折角のおいでゞはござりますが、親共事は先日より瘧の病ひにて打臥しをりますれば何御用かは存じませぬが、わたくしは悴めにござりますれば、どうか仰せおかれて下さりませ。

吾市　いや〳〵悴なりとも、餘人では相分からぬ。

文吾　病氣と申して、逢はれぬほどのこともあるまい。

丈八　是非とも面談いたさねば相成らぬ。

吾市　義兵衛を早くこれへ呼べ。

義次　左樣でもござりませうが。重き病ひにござりますれば。

吾市　えゝ、その方では分からぬわえ、

兩人　親父を早く呼んでまゐれ。
義次　それぢやと申して。
吾市　えゝ、きり〳〵これへ、
三人　呼びをらう。（トきつと言ふ、この時上手屋體にて、義兵衛の聲にて、）
義兵　鍵屋義兵衛、唯今それへまゐるでござりませう。
ト義兵衛少々月代の延びたる鬘、着流し扱帶、病人の装にて出來り、下手へ住ふ。
吾市　すりや、その方が義兵衛よな。
義兵　いかにも、義兵衛めにござりますが、病中のことでござりますれば、長髪の儀は御免下されませ。
わたくしに逢はねばならぬとおつしやりまする、その御用はな。（ト思入。）
吾市　おゝ用事と申すは外でもない。身共事は結城の藩中恩田吾市と申す者。そちが養女のお仙事を身が妻に貰ひ受けたい。尤も先達より朋友を以て度々申入れたれども、有無の返事をいたさぬ由、今日は自身にまゐつた。是非ともお仙は身共にくりやれ。
義兵　これは〳〵何事かと存じましたれば、お仙の儀でござりますか、いやもう見る影もない娘を、お歴々のお所望でござりまするもの、直様あなたに差上げませうと、さ、申し度うはござります

れど、恥を言はねば理が分かりませぬ、何をお隱し申しませう、元わたくしは大磯にて遊女屋渡世をいたしてをりましたが、間の惡いは仕方のないもの、度々の類燒にて、やう〳〵普請の出來るやいな、やれ心中の駈落のと不時の事のみ續きまして、唯今にてはこの谷中へ逼塞なして微な暮し、家業といつたら御覽の通り、額や狐を商ひまして、後はお仙が茶見世へ出て、それで暮しをつけますれば、彼女をあなたへ差上げますと、明日から暮しができませぬ。それ故どうもお仙めは、上げますことはできませぬ。

文吾　これさ〳〵義兵衞、それは惡い合點、うんと言つて恩田殿へあのお仙を差上ぐれば、こんな暮しの二軒や三軒、

丈八　左樣々々、親子は元より左り團扇、浮みあがると申すものだ、それだによつてお仙なれば、

文吾　有無を申さず遣はすがよい。

吾市　今御兩所の申す通り、拙者が萬事仕送りいたす、それならよもや違背はあるまい。

義兵　(思案の思入あつて、)いやもうそのやうに、おつしやりまするに、不得心ではござりませねど、これぱかりは親甲斐に無理往生もさせられませねば、又當人の料簡をば問ひたゞした其の上で、何れなりとも此方より、お返事いたすでござりませう。

吾市　いや、さうべん〳〵とは待つてゐられぬ、然らばお仙に面會なし、是非とも色よい返事をさゝう。
義兵　でも、唯今即答には、
吾市　えゝ、ぐづ〳〵いたしてをられるものかえ。
文吾　我々どもが見世へまゐり、お仙を連れてまゐりませう。
　　　トきつと言ふ、この以前よきほどに、お仙下手より出來り門口に窺ひゐて、
お仙　いえ、そのお迎ひには及びませぬ、唯今それへまゐりますわいな。(ト内へはひる。)
吾市　こりやお仙にはよい所へ。
義兵　あゝ歸らずともよいことを、
義次　手詰となりしこの場の仕儀、
お仙　樣子は門で聞きましたが、父さん、お前端近へ出やしやんして惡いぞえ。
義兵　さあ、惡いと知れど餘儀ない譯故。
お仙　(二人を見て、)お前方も遠方を、よう無駄にござんすなあ。
吾市　おゝ、まゐるとも〳〵、今日は自身に身共がまゐつた、今義兵衛にも申した通りだ、さあお仙、身共が妻に貰ひにまゐつた、厭とも應とも手短に、この場に於て返答しやれ。

お仙（ぢつと思入あつて）そのお返事でござりますかえ。
文吾　おゝ、そちが返事が、
兩人　聞きたいのだ。
お仙　厭でござんす。
吾市　やあ、厭だとな。
お仙　あい、わたしや蟲が好かぬかして、げぢ〳〵よりもお侍さんがきつい嫌ひでござんすわいな。
　　ト ずつけり言ふ。
三人　何と。
義次　あゝこれ、めつたな事を。（ト案じゐる）
お仙　あゝもし、捨てゝおかしやんせいなあ。（ト替つた合方になり）お前さん方のお心では、茶見世の女子といふものは金びらさへ切つたなら自由になると思うてか、それでは無駄でござんすぞえ。外の女子は知らないこと、色氣のないのが名代にて、ほんの浮世の愛嬌に氣休めぐらゐは言ふものゝ、浮氣といつたらこれほどでも、ないのが自慢の笠森お仙、遠い所をわざ〳〵と、お稻荷様へおまゐりならそりや御利益もござんせうが、わたしの所へおいでなら、よいお返事はないほど

に、この後おいでなさんすな、御親切は蔭ながら、心で受けてをりますわいな。

　ト思入あつて言ふ、吾市、文吾、丈八これを聞いてむつとせし思入にて、

吾市　いゝや、假令何と申さうとも、一旦武士が言ひだしては、

文吾　是が非であらうと、得心させねば、

丈八　刀の手前が相立たぬ。

お仙　武士が立たうが立つまいが、誰も頼んだことではなし、お前の勝手でござんすわいなあ。

吾市　これほど申すにそつけない挨拶いたすはこれお仙、扨は外に言交した情人でもあつて厭だと申すか。

お仙　何でわたしに、そんなものが。

吾市　然らば身共が女房になりやれ。

お仙　あたしつこい、いやでござんす。

吾市　如何樣に申さうとも、是非とも貰はにや、

三人　相成らぬわ。

　トきつと言ふ、この前方より男達隱家の茂兵衛、着流し一本差し、駒下駄にて派手なる打扮にて花

道より出來り、門口に窺ひゐて、この時門口を明けて、

トこれにて三人の侍は心得ぬ思入にて、

茂兵　いゝや、お仙はやられませぬ。

吾市　なに、お仙を、

三人　やられぬとは。(トこれにて茂兵衞内へはひる、義兵衞茂兵衞を見て、)

義兵　おゝ、誰かと思へば隣家の、

義次　茂兵衞さんでござりましたか。

お仙　よい所へ來て下さんしたなあ、(トこれにて茂兵衞は眞中へ住ふ。)

吾市　やい町人、藪から棒に表から、お仙を、

三人　やられぬとは。

茂兵　お前方は知るめえが、このお仙はおれが情人、末は夫婦にならうといふ女房約束した女、一人身ならぬ主ある身體、それ故わしがやられませぬ。

三人　やゝ。(トびつくりする。お仙は嬉しきこなし。)

義兵　そんならお仙は疾うからして。

義次　茂兵衛さんと言ひ交し、
お仙　あゝもし、わたしや。（ト言ひかけるを、）
茂兵　あゝこれ、（トお仙を抑へ、）もうかうなつたら仕方がねえ、隱しても隱されねえから、言交したをぶちまけて、おれがこの場をさばく氣だ、お前方は何にも言はず、おれに任しておきなせえ。
ト思入あつて吞込ませる。
文吾　すりや隱家の茂兵衛とやらが、お仙が情人だと言やるのか。
丈八　情人とはいへど、怪しい言葉。
吾市　假令女房であらうとも、お仙は身共が女房にしたい、今改めて身共にくりやれ。
茂兵　何だ、お仙をくれろとえ。
吾市　いかにも。
茂兵　もしお侍樣、名は隱家の茂兵衛だが、ちつとは人に知られた男、猫子かなんぞを見るやうに、何で女房がやられるものか、お武家の威光の權柄ぢやあ、猶更いやだ、なりませぬ。
吾市　呉れぬとあれば身共も武士、腕づくでも貰はにやならぬ。
茂兵　さう出なさりやあ面白い、して又どうして取らうといふのだ。

吾市　おゝ、刀にかけて。

ト吾市刀の柄へ手をかける、文吾、丈八も一緒に立上る、茂兵衞こなしあつて、

茂兵　さ、取られるものなら取つて見なせえ、茂兵衞が腕にやあ骨があるわえ。

ト吾市を突廻してきつと見得、この時義兵衞癪の顫ひ時になり、顫へながらこの中へ割つて入り、

義兵　あゝこれ、お侍様も茂兵衞どのも、まあ〳〵待つて下さりませ。（ト顫へながら双方を留め）お仙が事から言募り、どちらにお怪我がござりましても、迷惑いたすはこの義兵衞、御覽の通り難病にて煩うてゐるわたくしを、不便と思つて双方とも、角めだゝずと料簡して、まあ下にゐて下さりませ。（ト顫へ〳〵）あゝ、折も折とて、この顫へ。

義次　そりや氣を揉ませるでござりまする。

お仙　お前は退いてござんせいな。

義兵　何で退いてをられうぞ、おれが留めずば切ツつはツつ、生死にもなること故、どうまあ留めずにゐられるものか。

義次　もし皆樣方、親父の病氣にさはりますれば、どうぞ御料簡なされて下さりませ。

茂兵　これさ義兵衞どの、何にも氣を揉むことはねえ、お前は何も構はずと、奥でゆつくり寐てゐなせ

え。
義兵　それでも、この場を見捨てゝは、
茂兵　はて案じずとこの茂兵衞に、任せて奧へ行きなせえ。これ兄い、父さんを早く寢所へ。
義次　それではどうぞお願ひ申します。これ親父樣、茂兵衞さんがあのやうにおつしやること、この顫へでは風にあたらば、重らうも知れませぬ。
お仙　どうぞ寢てゐて下さんせ。茂兵衞さんが何かのことは、
茂兵　氣遣ひせずと、（ト義兵衞へよろしく呑込ませ、）行きなせえな。
義兵　そんなら何分、茂兵衞どの。
茂兵　風の來ぬやう夜具でもかけて、
義次　はい、有難うござりまする。
　ト唄になり、義兵衞思入あつて、義次郎介抱しながら奧へはひる、三人立上つて、
吾市　さあ、これからは相手は茂兵衞。
兩人　武士の性根を見せてくれうわ。
　ト刀の柄へ手をかけ、茂兵衞に詰寄る、お仙はその中へ割つて入り、

お仙　まあ／＼待つて下さりませ、もとの起りはわたし故、一分立たぬとおつしやるなら茂兵衛さんに科はない、わたしを切つて下さんせ。さ、お仙を切らしやんせいなあ。

　ト お仙身體を突きつける、侍三人こなしあつて、

吾市　これ／＼それは何を申す。貴樣を殺してどうするものだ。

兩人　何でも相手は隱家茂兵衛。

　ト又立ちかゝるをお仙留める、茂兵衛お仙を除けて、

茂兵　えゝ女が出る場所ぢやあねえ。怪我でもしちやあつまらねえ。そつちへ寄つてゐるがいゝ、さあお侍、相手はおれだ、拔きなせえ、切られるものなら切つて見なせえ。

三人　うぬ、その舌の根を。

　ト三人刀を拔いて茂兵衛に切つてかゝる、お仙危ないといふ思入にて、氣を揉んでゐる、茂兵衛は持つた煙管にて、三人を相手に立廻りあつて、トゞ兩人を左右へ投げる、吾市切込むを茂兵衛煙管にて刀を押へつけ、

茂兵　さあ、動かれるものなら動いて見ろ、今こそ賤しい町人だが、以前は大小たばさんで、劍術柔術も皆傳受け、免許を取つたこの茂兵衛、僅な祿で窮屈な勤めをするがうつたうしく、浮世にそげ

で草深い土地に隠れし隠家も、武器は捨てねえ槍ん棒、よろひ蝶や甲蟲、とんだ佐野の源左衛門だが、いで鎌倉といふ時ア、うぬらがやうなへら〳〵武士は馬を引かして供に連れるわ。心の曲つたなまくら刃鐵がおれが身體へ立つものかえ、見りやア見るほど、

ト煙管を取る、吾市又ウムと息込むを、茂兵衛煙管を突きつけて、

へゝ、馬鹿な面だなア。

トせゝら笑ふ。吾市又切りかけるを、文吾、丈八起上り吾市を留めて、

文吾　あゝこれ〳〵恩田氏、腹も立たうが折が悪い、折が悪い。

丈八　今日のところは、な、それ、立歸つて、又出なほして出入をするがようござる。

吾市　それぢやと申して、あまりの雜言、

茂兵　さ、ぐづ〳〵いふなら、相手にならうか。

吾市　いゝや、それには及ばぬわえ。退いてよく〳〵考へれば、今日は佛滅、日取が悪い、今日は立歸り、暦でも見てよい日に、この返報をきつといたすぞ。

文吾　まあ〳〵ようござる、兎も角も門へ出てから、その上で、

丈八　それがよい〳〵、さゝ早く表へ。（ト兩人腕の痛む思入にて吾市を連れ門口へ出て、）

吾市　これさ御兩所、唯今あの者に假令負けても決して恥ではござらぬぞ。あの者も以前が武士と申せば、町人に負けたといふわけでもなし、

文吾　左樣々々、何も恥辱なこともござらぬ。武士とあれば劍術でも下手と上手と違ふだけだ。

丈八　いかさま、下手がなければ上手が分からぬと申すもの。

文吾　左樣でござる、あちらは上手こちらは下手、きつい違ひはござらぬわえ。

吾市　然し今日は立歸るが、もう一息稽古をして此の腕前を磨いたら、きつと出入をしかけるぞよ。

茂兵　遺恨はいつでも持つて來なせえ、異名は隱家茂兵衞だが、逃げ隱れはしやあしねえわ。

吾市　その言葉を忘れるな。（ト又息込むを、兩人留めて、）

文吾　これはしたり、こゝらが丁度、

丈八　引込みどこだ。

ト兩人腰の痛む思入にて碎けるを、吾市これと呑込ませて、

吾市　さ、行かうかえ。

ト痛みを怺へる思入にて見得をして唄になり、三人よろしく花道へはひる。跡茂兵衞お仙思入あつて、

茂兵　いや、意氣地のねえ奴等だわえ。

お仙　茂兵衛さん、よい所へ來て下さんした。わたしの難儀が助かつたもお前のお蔭、何とお禮を言はうやら、有難うござんすわいなあ。さうしてお前は、どこも痛めはせぬかいなあ。

茂兵　何であんなへろ〳〵侍、五人や三人何でもねえのよ。おれもこれまで生眞面目に元の武士でゐた日にやあ、槍一筋の主人にもなられることは知つちやあるが、三百石や五百石で身體を縛られ、窮屈な思ひをするが厭だから、大小捨てゝ氣樂な暮し、然しお前もちつとの內でも、おれが女房と言はれたが、嘸厭だつたであらうなあ。

お仙　あれ勿體ない茂兵衛さん。厭どころではござんせぬ、嘘にもわたしや女房と言はれるやうになりたいわいなあ。

茂兵　今のお禮に受けさせるの、その口前で侍もやつぱり熱くなつたやつよ。

お仙　えゝも憎らしい。そんな事を、實のことはわたしや疾うから、あのお前に。

茂兵　おれに何ぞ用でもあつたか。

お仙　さあ、言ひださうとは思うたれど、色氣を捨てた俠氣故。

茂兵　なに、俠氣がどうぞしたのか。

お仙　さあ、その俠氣故に言ひ兼ねて。

茂兵　え、何だかぐづ〳〵小ぢれッてえ、早く言つてしまひねえな。

お仙　言つてもよいかえ。

茂兵　よくなくつてどうするものだ。

お仙　そんならどうぞ、

茂兵　むゝ、どうぞ、

お仙　情人になつて下さんせいなあ。

茂兵　えゝ、

トびつくりする、お仙恥かしき思入、なまめいたる合方になり、

お仙　恥かしいことながら、わたしや疾うからお前に惚れ、見世へござんすその度に、今日は〳〵と思ふのみ、口まで出ては言兼ねて、心で定めたわたしの願ひ、どうぞかなへて下さんせいなあ。

茂兵　いや、とんだことになるものだ、(ト思入あつて、)きざな事を言ふやうだが、實はおいらもお前にやあ疾うから心で惚れてゐて、どうぞしたらば言ひ出さうと思つたことは度々だが、今評判の笠森お仙、なまなかきざを言ひだして、出來ねえ時にやあおれの恥、お笑ひぐさになるのが厭さに口へ出しちやあ言はねえのよ。

お仙　あい、わたしのやうな女子をば、やつぱり思うて下さんしたかえ。
茂兵　思つたどころか一日でも忘れたことはありやあしねえ、戀煩らひをしねえばかりよ。
お仙　又口先でうまいことをば、
茂兵　なんの、こりやあまことの話だ。
お仙　ほんまにさうでござんすかえ。
茂兵　少しは男を賣る茂兵衛、嘘僞りを言ふものか。
お仙　今斯うなつて見る時は、
茂兵　とんだ先刻の侍が、
お仙　わたしの爲めには結ぶの神。
茂兵　嘘がいつしか眞實となり、
お仙　今日からわたしや、
茂兵　おれが女房、
お仙　必ず棒つて、（トぢつと寄添ひ、）下さんすなえ。
茂兵　いや、こいつあ何だか夢のやうだ。

お仙　えゝも、にくらしい。

ト打つ眞似をする、流行唄題目太鼓にてこの道具廻る。

（鍵屋奥座敷の場）――本舞臺上へ寄せて常足の二重、三間の屋體、正面更紗の暖簾口、此の上四尺ほどの佛檀、障子、佛具、位牌、佛檀の下けんどんの襖、左右腰張りの茶壁、欄間に札箱、上の方三尺中窓の手水場、石の手水鉢、四つ目垣、秋草、下の方折廻して建仁寺垣、四つ目垣、秋草、紅葉の立木、例の所枝折戸、總て奥座敷の體。こゝに蒲團の上に義兵衛住ひ、佛檀を拜みゐる、下手に以前の義次郎義仙の脇差を見てゐる、この見得合方にて道具留る。

義兵　南無秋馨白露信士頓證菩提。南無阿彌陀佛々々。

義次　もし親父樣、その白露信士といふは、お仙が親父でござりますな。

義兵　おゝおれと賭碁の友達であつた。草加在の名主にて、非道々々と人に言はれた忠右衛門どのゝ戒名だ。

義次　家は退轉したさうだが、誰も親戚はござりませぬか。

義兵　以前は緣者もあつたさうだが、非道と言はれる惡黨故音信不通に死んだをりも、誰一人構ひ手な

く、おれが跡の始末をして、貸した金のその抵當に、あのお仙を引取つたのだ。

義次　その死んだのもたゞではなく、非業な最期ぢやござりませぬか。

義兵　おゝ忘れもせぬ七年後、而も今月今宵だつたが、小雨の降つた雨上り、千住川原で殺されたが、廻り廻つて七年忌におれが身體へ。

義次　え。

義兵　いやさ、おれが懇意にした故に、迎ひに來たか知らねえが、後の月からこの煩らひ、もう段々と取る年に、今度は所詮むづかしからう、疾うから覺悟をしてゐるから、手前も覺悟をするがいい。

義次　又そんなことを言ひなさるか、年のせゐとはいひながら、何故そんなに弱い氣になんなすつたことだらう。

義兵　こゝが人の弱り目に祟り目といふ所だ、年廻りが悪いから床に就いたら起きられめえと、思つた通り起きられねえ、愚癡なことだが大磯で、小格子をしてゐる時分は、小相應な身上故身分相應榮耀もしたが、おれが賭碁が好き故に、たうとう家も耗つてしまひ、こんなしがねえ暮しをするも、元はといへば心から、悔む所もねえけれど、可愛さうなは手前の身の上、親の因果が子に報

ひ、大した金の遣えねえのが、おらあ不便で堪えられねえ。（ト涙を拭ふ。）

義次　なに、そんな事は悔みなさんな、草履取から關白まで、一足飛に出世をするもこりやあみんな人の運、今かういふ身の上でも、末始終は運が向き、どんな暮しをするかも知れぬが、たゞそれまでお前の身體が達者であればいゝけれど、何といつても年の上、わたしが苦勞をするよりか、お前に樂をさせねえのが、悔しうてなりませぬ。

義兵　今樂をしねえとつて、おらあ若え時からしてえ三昧して來た身體、難儀をするのも心がらだ。

義次　又、さし込みますか。（ト介抱なす。）

ト義兵衛胸を押へ苦しき思入。

義兵　時をきつて苦しむも、段々近寄る身の終り、南無阿彌陀佛〳〵。

義次　そんな弱い氣ぢやいけませぬぜ。

義兵　あゝもうよい〳〵、大きに胸が開いて來た。

義次　それはようしうござりまする。（ト義兵衛脇差を見て。）

義兵　これ、その脇差は誰のだ。

義次　こりや　先刻養仙樣が忘れておいでなされたのだ。

義兵　刃物はあぶねえ、こゝへよこせ。（ト脇差を取つて脇へおき。）手前見世へ行くならば、お仙をちよつと呼んでくりやれ。

義次　畏りました。（ト立上り思入あつて、）今の親父の言葉といひ、性の知れざる煩ひは、もしや、何その、

義兵　や、

義次　いやもう、何時であらうなあ。

ト時の鐘、誂への獨吟になり、義次郎思入あつて奥へはひる、跡に義兵衞思入あつて佛壇へ線香を上げ、手を合せをがんで、

義兵　これ忠右衞門、手前まだ浮ばねえのか、七十兩の金故に、非業な最期を遂げたのも、佛五兵衞が報いだぞ。人を恨むことはねえ、みんなその身の罪だから迷はず成佛してしまひねえ、なむあみだ、なむあみだ。（ト手を合せをがむ、奥より以前のお仙出來り、）

お仙　父さん、少しはようござんすかえ。

義兵　今し方から熱が發し、身體の顫へはやう〳〵止まつた。先刻は危ふいことであつたが、茂兵衞どので助かつたな。

お仙　ほんに茂兵衛さんがござんせずば、どうなることでござんせう。
義兵　その難儀を免れたのも、笠森様の御利益だ。
お仙　ちつと肩でも摩りませうかえ。
義兵　肩はいゝが大儀ながら、胸を少し摩つてくりやれ。
お仙　あい〳〵。

ト又獨吟になりお仙義兵衛の後へまはり、胸へ手を入れ摩りおろす、薄くドロ〳〵のやうな風の音になり、義兵衛後を振向き、お仙の顔をちつと見て、

義兵　ても、美しいものだな。
お仙　父さん、何を常談を言はしやんすぞいなあ。
義兵　なに、常談ぢやあねえが凡夫の悲しさ、いくつになつても忘れられねえ。
お仙　何と言はしやんす。
義兵　これお仙、頼みがあるが聞いてくれるか。
お仙　義理ある仲とはいひながら、親子の仲に何遠慮。假令どの樣なことなりとも。
義兵　聞いてくれるか。

お仙　聞かいでかいな。（ト又獨吟になり、義兵衞嬉しき思入にて、）

義兵　そんなら今日から、このおれの、女房になつてはくれめえか。

お仙　えゝ、（トびつくりする。）

義兵　これお仙、何もおどろくことはねえ、親父が非業に死んでから、金の抵當に引取つたおぬし、段段成人するにつけ、娘といへど根が他人、三年後に女房は死に、今一人身に丁度幸ひ、今日は言出し得心ささうか明日は口說いて女房にせうかと、永の年月待つてゐて、茂兵衞に横番切られちやあ、今まで待つた甲斐がねえ、言出すからは明日とも言はず、厭でも應でも今こゝで、うんと返事をしてくんねえ。（ト思ひ込んで言ふ、お仙呆れし思入にて、）

お仙　そりやまあ、ほんまでござんすかえ。

義兵　ほんの噓のと心底から、ぞつこんおぬしに惚れたのだ。

お仙　これ父さん、お前樣はなあ、（ト合方きつぱりとなり、）いかなる事でそのやうな心にはならしやんした、ほんに幼い時からして、お世話になつたわたし故、義理ある仲も眞實のわたしやお前を親と思ひ、廓をしまつてこの谷中へ逼塞しても不幸がつゞき、その日の煙りもたえ〴〵故、爰ぞ御恩の送り所と、茶見世を出して人樣の機嫌きづまを取る辛さも、親を大事と思ふ故、何が不足で

娘を捉へこのやうな事言はしやんす、性の知れざる病ひといひ、こんな心にならしやんすは、何その罰でござんすぞえ。

義兵　假令何の罰だらうが、もう斯うなつたら親子でも、何見さかひがあるものか。

トむやみにお仙を捉へて言ふ。

お仙　えゝも、こゝ放して下さんせいな。

義兵　いゝや放さぬ、言ふこと聞きやれ。

お仙　それぢやと言うて、どうまあこれが。

義兵　情だ、おれが心に從へ。

ト獨吟になり、義兵衞袖を捉へるを、お仙振拂つて逃出すを義兵衞裾を捉へて引戻す、またお仙振切つて表へ出ようとする、義兵衞立廻り枝折戸をぴつしやりしめてきつと見得、始終ドロ〳〵のやうな風の音にて、義兵衞に死靈の憑りし思入。お仙わな〳〵顫えてゐる、又立廻つて義兵衞以前の養仙の脇差を取つて、幸ひといふ思入にて、これを拔きお仙へ突附ける。お仙びつくりして、

お仙　あれえ。(ト逃廻るを、)

義兵　さあお仙、茂兵衞がことを思ひ切り、おれの自由になりやれといふに。

お仙　假令、何と言はしやんしても、道に缺けたるその樣なことが。
義兵　えゝ、道も法も入るものか、達て厭だとぬかしやあがりやあ、もうこれまでだ仕方がねえ、人の花とさせようより、いつそのこと、一思ひに、（ト脅しに白刄を振上げる。）
お仙　あゝこれ父さん、めつたなことを、
義兵　そんならおれの女房になるか。
お仙　それぢやというて、どうまあこれが、
義兵　得心せざあ、ぶつぱなさうか。
お仙　さあ、それは。
義兵　さあ、
お仙　さあ、
兩人　さあ〳〵〳〵、
義兵　えゝこぢれツてえ、いつそのことに。
ト獨吟の切にて振上げきつと見得、お仙あれえ〳〵と迯廻るを、義兵衞病擧句の思入にてよろ〳〵しながら追廻す。この時奥より以前の義次郎出來りお仙を圍ひ、義兵衞を後より抱留め、無理に義兵衞

　　を下へすゑ、義次郎思入あつて義兵衛の胸ぐらを取り、

義次　これ、親父樣。（トきつと言ふ。）

義兵　えゝ、何だ。

義次　えゝお前はなあ〳〵、樣子は奥で聞きましたが、いかに實の娘でないとて、娘を捉へてこの始末はどうしたことでござりまする。思案の外とはいひながら、若い者でもあることかよい年をして人樣に後指をさゝれるのが、恥かしくはござりませぬか。斯ういふお人ぢやなかつたが、いかなる天魔の魅れなるか、人間界へ生れ來て犬猫になりたいとは、えゝお前は氣でも違つたのか。

　　ト義次郎思ひ込んで義兵衛をこづく、義兵衛は平氣なるこなしにて義次郎を振拂ひ、

義兵　えゝ何をしやあがるのだ、まだ乳ツくせえ形をして、親に異見もすさまじい、うぬらが知つたことぢやあねえわ。

義次　（又義兵衛を捉へて、）これ親父樣、假令年は行かいでも、無法なことをなさる故異見をせねばなりませぬ。

義兵　えゝ、きいた風なことをぬかしやあがるな。

　　ト義次郎を蹴倒す、義次郎どうとなつて、

義次　やゝ、病苦に弱りし身體にて常に替らぬ此の力、病の業か但しは又、物の祟りでなすことか、あまりといへば、（トきつとなつて、）お情ない。

ト思入、始終ドロ〲のやうな風の音にて、義兵衞むら〲とせし思入にて、持つた脇差にて義次郎の肩先を切下げる、義次郎糊紅になりどうとなる、お仙これを見てびつくりなし逃出さうとするを義兵衞追ひかける立廻り、義次郎切られながらこれを留め、誂への鳴物になり、三人立廻りよろしくあつて又義次郎を切下げる、義次郎うんと苦しみどうと倒れる。此の時正面の札箱落ちて義兵衞の頭へあたり、仕掛にて頭より血潮流れ、此の時ほつと正氣の附きし思入あつて、ひよろ〲と立上りきつと見得、鳴物替つて又お仙を殺さうといふ思入にて白刃を振上げる、お仙その手に縋り、留めるこの機に義兵衞を切る。

義兵　やあ、こりやおれを切りやあがつたな。

お仙　やゝゝゝ、こりや手が廻つて父さんを。もし、怪我でござんす、堪忍して下さんせいなあ。

義兵　なに、怪我といふがあるものか、殺さば殺せ。

ト身體を突附ける、お仙殺すまいといふ立廻りあつて、お仙庭の四つ目垣の周圍を廻り逃げるを、義兵衞ひよろ〲と追ひかけ、立廻りよろしくあつて、トゞお仙の手を持添へて自分の肩先を切下げどうと倒れる、お仙びつくりして、

お仙　もし父さん、お前一人殺しはせぬ、わたしも共に。

ト自害しようとする、此の時門口に以前の茂兵衞窺ひゐて、つか〳〵と內へはひりお仙を留めて、

茂兵　あゝこれお仙、早まるな。

お仙　茂兵衞さんでござんしたか、どうぞ放して下さんせいな。

茂兵　見りやあ義兵衞どのといひ、息子まで手を負つたるこの有樣、まだその上におぬしまで死なうとするのは、どうしたわけだ。

お仙　怪我とはいへど恩のある、あの父さんに深手を負はせ、その言譯にこの自害、死なねばどうも濟まぬわいな。

義兵　(此の時起上りて、)あゝこれ、必ず急くな早まるな、この義兵衞を殺しても、いゝだいじない故死ぬには及ばぬ。

お仙　何と言はしやんす。

義兵　何を隱さうこのおれは、おぬしの爲めにやあ親の敵だ。

お仙　えゝゝゝ。

ト お仙びつくりする、茂兵衞も思入、義兵衞苦しきこなしにて、

義兵　そのびつくりは尤もだ、仔細をとつくり聞いて下せえ。（ト竹笛入りの合方になり。）そなたの親の忠右衛門は、元より賭碁の友達にて、惡い心も互ひ先、負けず劣らず兄弟同樣懇意にしたが、忘れもせぬ七年後、草加にて佛五兵衛といふものが、忠右衛門へ預けたる七十兩のその金を、預からねえとふんでしまひ判證文もねえこと故、五兵衛は仕方なく〳〵も川へ飛込み非業な最期、相手が死んで目出度いと祝ひに呑んだ酒の上、ふつと浮んだ慾心に七十兩がほしくなり、小塚原へ行かうと連出して而も千住の川原にて、非道と異名の忠右衛門を、非道におれが殺したも忽ち報ふ五兵衛の恨み、廻り廻つて七年の年忌におれが煩ひも、死靈の祟りといひながら、今又お仙と茂兵衛どのが言交せしを障子越し、寐耳に聞いて嫉ましく、自由にしようと思つたも此の身に報ふ惡事の終り、思ひがけなく我子を殺し、又もやおぬしに殺されるは、好きな賭碁のだめのだめ、落ちたお札で正氣になり、白い黑いの分かるのは、天道樣の御罰だわ。

ト義兵衛よろしく思入にて言ふ、お仙、茂兵衛これを聞きびつくりなし、

お仙　え丶、そんならわたしの父さんを、手にかけたのはお前であつたか。

茂兵　それもやつぱりおぬしの親が、五兵衛とやらを殺した報い。

トこの時義次郎起きなほりて、

義次　今又我が殺さるゝも、その忠右衞門を殺せし祟り、

茂兵　討ち討たるゝも子に報ふ。

お仙　親の惡事で、

義次　この最期。

義兵　（思入あつて、）まだ〳〵不思議な事といふは、最前思はず見世先へ買物に來た蕎麥屋の話し、たしか今月月始め、所は築地の門跡川岸で切られた女の話から、道にて逢うた侍は結城の家中の今村樣、たしかにこれが殺し手と、言つたはまさしくお仙が妹、非業な最期を遂げたる樣子。

義次　これもやつぱり親の因果か、血筋へ祟る五兵衞の恨み、思へば人の恨みほど世に怖ろしいものはない。

茂兵　（この內思入あつて、）その話にて思ひあたるは、この月始めにお仙と二人、池上まるりに行つた時築地の川岸にてつい飮み過ぎ、雜魚場の知邊へ泊らうと、通りかゝつた門跡海岸、

お仙　怪しい人に出逢ひしが、邊りに流るゝ血潮といひ、びつくりおどろくその機、わたしが拾つた簪は家の定紋劒花菱、心もつかずに持つては來たが、そんならあの時殺されたは、アノ姉さんではなかつたか。

茂兵　おれもその時拾つた提灯、紋は澤瀉、角字にて今村といふ印があつたが、

お仙　そりや姉さんが勤めし御主人、

義兵　むゝ、蕎麥屋が言つた人殺しと、割符の合つた二人が話、

茂兵　先刻測らずこのお仙と、言交したる上からは、つながる縁のこの茂兵衛、これから直に築地へ行き、もつと實否をたゞした上、

お仙　まこと敵が知れたらば、

茂兵　助太刀なして討たしてやらう。

お仙　嬉しうござんす。

ト　お仙嬉しき思入、この時本釣鐘を打込み、義兵衛、義次郎は苦痛の思入にて、

義兵　最早近づく、

義次　知死期どき。（ト兩人うつとりとなるをお仙縋つて、）

お仙　や、こりや二人ともに、（トこれにて茂兵衛立戻つて、）

茂兵　あ、そんならこれが、

義兵　親子もろとも、

義次　死出三途、

お仙　思へば深い、

　ト義兵衛、義次郎手を取交し、よろしく思入あつて、

三人　互ひの惡縁。

　トこの時以前の文吾窺ひゐて、

文吾　先刻の返報。

　ト茂兵衛に切つてかゝるを、身を躱して文吾を切下げる、これと一時に義兵衛、義次郎がつくりとなり、お仙縋り泣く。

茂兵　えゝ、益ねえ殺生、

　ト白刃を引く、文吾見事に轉る、お仙手を合せる。双方見合つて木の頭、

茂兵
お仙　南無阿彌陀佛。

　ト義兵衛、義次郎落入る、茂兵衛は顔をそむける、お仙は義兵衛に縋り泣伏す。この見得本釣鐘、愁ひ三重にて、よろしく、

幕

今村屋敷怪異の場
築地濱邊浪除の場

四幕目大切

〔役名――今村丹三郎、男達隱家の茂兵衞、今村の下部市助、紙屋藤兵衞、恩田吾市、藪垣文吾、四つ手綱のざこ七。笠森お仙、下女おきつの亡靈、丹三郎母おさみ、同妻おむら。〕

（幕外）――知せに附き、波の音、合方にて幕外へ菖蒲革の袴股立一本ざし六尺棒を持ちたる中間○△の二人出で來り、

○ これ作介、今村樣の話しを聞いたか。

△ 化物の一件か。

○ さうよ、氣味の惡い話ぢやあねえか。

△ 此間迄勤めて居たおきつといふいゝ女を、女房代りにして居たさうだが、おむら樣を貰ふにつけ邪魔になるところから、酷い事でもしやあしねえか。

○ 市助が連れて逃げたと、出奔居をなすつたが、どうもありやあ怪しいぜ。

△ 此頃聞きやお金杉沖に、傷だらけな女の土左が浮いて居るといふ事だが、もしや海へでも打込んだかも知れねえ。

○何にしろ貰ふと直におむら樣が煩ひ付き、熱のせるかしらねえが、女が來る〳〵と晝夜とも言ひ續けだとよ。
△それに又毎晩四ツ過から、今村樣のお庭の內へ靑い火が見えるさうだ。
○てつきりこりやあ酷くした、おきつの思ひに違ひねえ。
△生靈か死靈か知らねえが、毎晩々々出られちや、夜廻りはまつぴらだ。
○四ツから先は一ぺいやりやあ、幽靈でも化物でもちつとも怖いことはねえ。
△さうか〳〵、一杯やつて酒の力を借りにやあいけねえ。
○只恐れるのは酒屋の怨靈だ。
△違えねえ。
○どれ、一廻り廻つて來ようか。

ト矢張波の音にて、兩人幕の引付へはひる。

（今村屋敷の場）――本舞臺三間の間、常足の二重、正面床の間、掛物に誂へあり、此脇袋戸棚、違ひ棚、眞中瓦燈口、下手秋草の襖、平舞臺上の方に丸木の井筒、此の脇に木燈籠、柳の立木、此の後

芒女郎花萩など秋草の茂み、建仁寺垣、下の方座敷、續きて障子屋體、いつもの所枝折戸、此の下建仁寺垣、總て今村住居庭口の體。二重眞中へ屏風を立廻し、側に丸行燈病人のある體、二重におさみ母にて住ひ、平舞臺に前幕の藤兵衞住ひ、此見得合方にて幕明く。

さみ　藤兵衞どの、おきつが行方はまだ知れぬかいの。

藤兵　一向に手掛りがございませぬが、さうして市助どのも知れませぬかな。

さみ　あの夜おきつを送つて行つて、それぎり家へ歸らぬからは、連立つて行つたと見えるわいな。

藤兵　憎い奴でございます。あの夜思はず門跡川岸で、出逢ひましてございますが、わたくしを騙しまして旦那樣に斯う／＼いふ情ない目に逢うて家へ歸ると申します故、私も腹が立ち、直に參つて旦那樣へ失禮な事を申しましたが、あとにてよく／＼考へますれば、日頃からお慈悲深く、あの日の晝も上つた時、行末ともに見捨てぬと仰しやつて下すつたに、さういふ事はない筈なるに、逃げる途中でわたくしに逢ひ、よい加減な拵事を言うたに違ひございませぬ、あれが親父は近在で名主をして居りましたが、名さへ非道の忠右衞門と人に云はるゝ惡い人、貸した金の其抵當にわたしが貰つたあの娘、瓜の蔓に茄子はならずと、種が種故大恩のあるお主樣や親を捨て心よからぬ市助と逃げましたと見えまする。若氣故とはいひながら、憎いやつでございます。

さみ　ほんにそなたも年取つて、力に思ふ娘に別れ、嘸便ないことであらう、困ることでもあつたならば、遠慮なく言うたがよい。

藤兵　不奉公を致しましたを、憎いとも思召さず有難い其仰せ、御恩になりし御主人樣へ御苦勞掛けるのみならず、幼い時より養育した義理ある親の此わたくしが、世間の人に顏向もならぬ樣なことをして、憎い奴でござりまする。

さみ　それにも譯のあることで、いやさ、若い內といふものは、人の難儀も構はずに、ほんに困つたものぢやなあ。

藤兵　たゞなら宜しうござりますが、先達ても申上げました、よい所で嫁に呉れと望まれましたを、此方樣のお內樣になる事と、先は元より近所の衆に自慢致した甲斐もなう、こんな事になりまして人に悔みを言はれますが面目なうござりますから、いつその事死なうかと思ふ事がござります。

さみ　えゝわつけもないこと言はつしやれ、何の死ぬに及ぶものぞ、老い朽ちた身ではなし、必ずそんな氣を出しやんな。

藤兵　これを思へば死んだ婆が羨しうござりまする。いや、つまらぬ愚癡を申上げ、おやかましうござりました。もうお暇を致しませう。

さみ　何はなくとも茶漬でも、喰べて行つたがよいわいの。
藤兵　まだほしうござりませぬ故、暮れぬ内に參りませう。
さみ　そんなら、もう歸らつしやるか。
藤兵　又近い内上りますから、旦那樣に宜しう仰しやつて下さりませ。
さみ　おゝほんに、おきつの荷物があるが、あれを持つて行きやらぬか。
藤兵　いえ、置所もござりませねば、もう少々お置き下さりませ。
さみ　邪魔とあるなら何時迄も、預つて置かうわいな。
藤兵　どうかそれで、死んだ後を。
さみ　え。
藤兵　いやさ、四五日の其内にお貰ひ申しに上りまする。

ト此時下手より二幕目の雜魚七風呂敷包を提げて出來り、

七　へい御免下さりませ、今村丹三郎樣のお宅は、こらちでござりまするか。
さみ　丹三郎は手前ぢやが、用なら玄關へ廻つて下され。
七　ちと内々の事でござりますから、お庭から申し上げます。

藤兵（是を聞き藤兵衛思入あつて）いや、私はもうお暇を致しまする。
さみ　まあ、よいではないか。
藤兵　又上りますでござりまする。（ト思入あつて花道へはひる。）
さみ　してこなたは、何方からござつたのぢや。
七　へい、私やあ築地から参りましたが、旦那様にお目にかゝりたうござりまする。
丹三　なに、身共に逢ひたいとは、誰ぢや。（ト丹三郎奥より出て來る。）
七　これは〳〵旦那様でござりますか、わたくしは築地にをりまする、雜魚七といふ漁師でござりますが、昨夜生業の四つ手に出ました所、飛んだものが掛りまして、それを持つて参りました。
丹三　して、其の品は。
七　こんな着物でござりまする。（ト風呂敷包を解きおきつの血の付きし着物を出す。丹三郎びつくりなし。）
丹三　や、此の着類は、
七　お覺えがござりますか。
さみ　たしか、きつに遣つた小袖。
丹三　あゝもし、（トおさみを押へ）して其の小袖は、何處で網にかゝつたな。

七　へえ、門跡川岸の川下で、四つ手に掛つて上りましたが、其處ら中が血だらけで、何だか不氣味な着物故、直に流してしまひませうと思ひましたら船に居た客が是を見まして、こりやあ結城の御家中で、今村丹三郎様といふお方の、お妾の着物だから、持つて行つて上げるがいゝと、達て其客がいひますから、それでわざ〳〵持つて參りました。

丹三　(合點の行かぬ思入にて、)して其客と云ふは、何處の者だ。

七　何處の人でござりますか、いゝふりの客でござりましたから、うちは何處だか存じませぬ、年の頃は廿歳ばかりで、此頃世間で評判の笠森お仙にそつくりといふ、いゝ女でござりました。

丹三　むゝ。(ト思入。)

七　煩ひ擧句か知りませぬが、髪が亂れてまつ蒼な顔へかゝつて物凄く、とんと死人の様でござりました。

丹三　其の女が身共の所へ、持つて行けと申したか。

七　へい、旦那様へお渡し申せと、申しましてござりまする。

丹三　扨はきつが、

さみ　え。(ト思入。)

丹三　いや、きつは死にでもしましたかしらぬ。（ト思入。）
七　左様なら、此着物は、たしかにお渡し申しまする。
丹三　折角持つてござつたが、此方の所持でなければ請取つては置かれぬから、其儘持つて歸つてくりやれ。
七　でも其女中が、旦那樣へ是非上げてくれと申しましたから、是へ置いて參りまする。
丹三　假令何と申さうとも、忌はしき其着類、此方請取る覺えがない。
七　覺えがないと仰しやれど、御隱居樣のお詞にきつに遣つた小袖だと、仰しやつたではござりませぬか、覺えがないとは言はれますまい。
丹三　むゝ。（ト丹三郎ぎつくり思入。）
七　殊にやあどうかあなたにやあ、此月初めのことであつたか、門跡川岸の暗紛れ、たしかにお目にかゝつたやうだ。
丹三　や、（ト思入。）
七　ほんにあの晩川岸端で、人が切られて殺されましたが、此着物の其の主もたしかに非業に殺されて、旦那樣に葬つて貰ひたいのでござりませう。何にしろ此樣にそこら中が血だらけだ、是をさ

らりと洗つたら上部を隠す二重染め、下から何か顯はれませう、ぼろの出ぬ内旦那樣、どうぞ請取つて下さりませ。

丹三　假令何と言はうとも、以前は兎もあれ今にては、出奔なせし召使ひ宿へ持つて行つたがよい。

七　さう仰しやりやあ仕方がねえ、御用人か御目附へ擔ぎ込んで仔細を話し、お預け申して歸りませう。（ト持つて立掛るを）

丹三　あゝこれ、それを目附や用人へ。

七　持つて行つて悪いなら、請取つて下さいましな。

丹三　さあ、それは。

七　厭なら持つて行きませうか。

丹三　さあ、

七　さあ、

兩人　さあ〳〵〳〵。

七　否應なしに、請取つて下さいましな。（ト是にて丹三郎思入あつて）

丹三　是非に及ばぬ、請取つておかうわえ。

さみ　あゝこれ、其様な品を。
丹三　はて何事も、わたくしが胸にござれば、宜しうござる。
七　是で佛も嘸悦び、どれ、お暇致しませう。
丹三　然し世間へ、此事は。
七　そりやアお案じなされますな、決して申しは致しませぬが、是を御縁に又何ぞ、
丹三　え、（ト思入。）
七　網へ掛つたら上りませう。
ト雑魚七は思入あつて花道へはひる。此時屏風の内にて、おむらの聲にて、
お村　あれ旦那様、又參りましたわいな。
さみ　おゝ、又おむらが魘されるさうな。
トおさみ屏風の内へはひる、跡に丹三郎件の着物を見て、合點の行かぬ思入にて、
丹三　二十日あまり日數が立つに、着類に附きしおきつが血潮、今に色の替らぬは、はて心得ぬ事だなあ。
さみ（屏風の内にて、）目が覺めたら鬱陶しからう、屏風を取つてやらうわいの。（トおさみ屏風を明ける、

内に絹夜具を敷き此上にお村、振袖、島田髷、病鉢巻、病人の打扮にて居る。)

お村　お馴染もないお母様に、此の様なお世話になり、お氣の毒でなりませぬわいな。

さみ　何の氣の毒なことがあるものか、斯うして嫁に貰ふからは、實の娘も同然に私は思うて居る程に、必ず遠慮せぬがよいぞえ。

お村　有難うござりますわいな。

丹三　熱のせゐか時々におそはれて、うは言をいふが、怖い夢でも見やつたか。

お村　夜晝となくうつ〳〵と、夢ばかり見てをりますわいな。

さみ　時々誰か來てゐる樣なことを言やるが、どうしたのだ。

お村　夢の内に、年の頃廿歳ばかりのよい女子が、恨めしさうにわたくしの顏を見ますと、ぞつとして身の毛が立つてなりませぬわいな。

丹三　むゝ、すりや年の頃廿歳ばかりの、

さみ　美くしい女子が來るとか。

お村　(四邊を見て、)それ、其處にをりますわいな。(トハツと言つてうつ伏せになる。)

さみ　えゝ、(ト氣味の惡きこなし。)

丹三　どれ何處に居るると言やるのだ、誰もこゝには居りはせぬに。

お村　いえ〳〵をりますわいな。

丹三　これ、何處に居るか敎へやれ。(ト、お村を引起す、お村下手を見て、)

お村　あなたのお側にをりますわいな。

丹三　や、(ト件の着類を見て扨はといふ思入。)やつぱりそれが熱のせるだ、心を落付け寐たがよい。

お村　丹三樣には戀焦れ、やう〳〵の思ひにて奧樣のお情にて參りましてござりまするが、恨む人でもござりまするか、參つて間もなく此煩ひ、樂しむ甲斐もないといふは、ない御緣でがなござりませうから、お媒人なり里親の佐藤樣へ私を、お返しなされて下さりませいな。(ト泣伏す。)

丹三　なに恨む者があるの無いのと、さういふ事はなけれども、氣保養に行き度くば、師匠の事故遣りもせうが、もう兩三日待つたがよい。

お村　參り早々御苦勞掛け、お氣の毒でござりますわいな。

さみ　又しても其樣な、他人がましいことを言やるか。

丹三　何にせよ熱のあるのに、風に當つては却つて惡い、

さみ　鬱陶しくも風除に、屛風を立つて置きませう。

丹三　只今に替りますから、母樣お頼み申します。
さみ　おゝ、私が摩つてやりませうわいな。
　　トおさみ屏風を立廻す、丹三郎思入あつて件の衣類を取り、
丹三　人目に掛らば身の大事、何處ぞへ隱して置きたいものだが、おゝ幸ひのあの燈籠、あれへ後迄匿して置かう。（ト井筒の際の誂の木燈籠の内へ件の衣類を押込み）斯うして置いてこつそりと、寺へ頼んで埋めて貰はう。
　　ト時の鐘、下手の四ツ目垣を乘り越え、市助逆熊の鬘そぼろの裝にて出來り、
市助　旦那樣、旦那樣。（ト丹三郎びつくりして、）
丹三　誰だ〳〵。
市助　わたくしでござります。
丹三　や、市助ぢやないか。
市助　へい、左樣にござりまする。（ト庭の内へはひり）
丹三　あの砌役向へ出奔届をして置いたに、川からそちははひつて來たか。
市助　いえ、川岸ッ端の練塀を、乘越えて參りました。

丹三　して上州へ行くと云つたが、いつ江戸へ出て來たのだ。

市助　上州へ行く積りで蕨迄參りましたが、兀熊といふ友達に立場酒屋で出ツくはし、一ぺい呑んだ勢ひに其晩宿場へ泊りに行き、朝は立たうと思つた所、雨に降られてぶんぶん流し、二日が三日と居續につまらぬ女に入り上げて、貰つた金を耗つてしまひ草鞋錢せえねえ始末に、上州へも行かれませず、無據蕨在でくすぶつて居りました、早く上州へ行きたうござりますから、ちよつと立歸つて參りました。

丹三　何ぞ用事があつてか知らぬが、ひよつとおきつが親父にでも出逢つた時には身の大事、路銀に困らば遣らうから、ちつとも早く行つたがよい。

市助　それは有難うござります、實は其路銀に困つて、御無心に上つたのでござります。

丹三　大方さうであらうと思つた。(ト袋戸棚より手箱を出し、中より金包を出して五兩紙に包み、市助の前へ出し、)さあ、是を路用にして行きやれ。

市助　こちらから申さぬ中に、路銀に困らば遣らうとは有難うござりまする。(ト紙包を頂き、封を明け見て思入あつて、)もし旦那、こりやあ五兩でござりますな。(ト下へ置く。)

丹三　五兩あつたら行けさうなものだが。

市助　そりやあ上州は扨おいて、京大阪迄も五兩ありやァ行けねえことはござりませぬが、どうかもう少しお貰ひ申したうござります。

丹三　それで不足とあるならば、十兩も遣はさうか。

市助　もう少しでござりまする。

丹三　それでも不足だと申すのか。

市助　左樣でござります。

丹三　して、何程呉れと申すのぢや。

市助　へい、百兩と申したうござりますが、五十兩下さいまし。

丹三　何と申す。

市助　これから上州へ參りましても、何か生業を致しませにやァ喰ふことが出來ませぬ、何をするにも金の世の中、四十と五十元手がなけりやァ直に耗つてしまひます、お氣の毒でござりますが、どうぞ、五十兩下さいまし。

丹三　そりや尤もなる事ながら此の方とても取前の定つて居る家中者、恥かしいことながら、有金のしまつてあるといふ身分でもなければ、五十兩といふ金を貢いでやる譯にはいかぬ。

市助　お持合せがござりませずば、失禮ながら質を置いても、四十や五十の目腐れ金は貢いで下さりにやァなりますめえぜ。

丹三　ならぬとは、そりや何故に。

市助　其譯をぶちまけて言つても宜しうござりますか。

丹三　え、（ト思入。）

市助　いやさ、門跡川岸の人殺し。

丹三　あゝこれ、めつたなことを。

市助　御無心申すを何故と、しらばつくれて仰しやるから、此家ばかりか兩隣り邊り近所へ聞える樣に大きな聲で言ひますが、御重役樣へ知れましたら、わたくしは兎も角もあなたのお身に掛りませう、三百石の御扶持をば投げておしまひなさるより、耳を揃へて五十兩、きれいに金を下すつた方が、勘定したらお德用、無理な事は申しませぬ。

丹三　さうでもあらうが此の方も、差當つて困る故、三十兩遣はさうから、それで一先づ行つてくりやれ。

市助　そりやァ行けと仰しやるなら、三十兩でも參りますが、御時節柄に節約をして、日一兩に遣ひま

しても、わづか一月あるかなし、好な酒をたらふく喰ひ、宿場へ行つて、二三日も居續なして手を廣げ、大すつちやんで騒いだ日にやア、十日と持たねえ三十兩、髪結錢にも困つた果は、又上らにやあなりませぬ、足を近く參る日にはろくな事はござりませぬ、どうぞ五十兩お與んなせえ。

丹三　先達の狼藉より改心なして身が方へ、中間奉公致せしが、持つて生れし惡心に、又もや元へ立歸り、おきつが事をかせになし、そちや丹三郎をゆするのぢやな。

市助　どう致しまして、ゆするのなんのと、三日なりとも家來となり、御恩になつたあなた樣、おねだり申すはお主樣にみついでお貰ひ申すのだ、御恩がなけりやア命づく、あなたがお賴みなすつたから、人殺しの兇狀持ち、翌日が日是が暴れた時は、わつちが首にかゝはること、他人ならば市助が疵の付いた腕づくで、二百兩といふなあ當りめえ、ゆすりといはれちやア合ひませぬ。

丹三　ゆすりでなくば志し、三十兩の金子をば忝いと持つて行きやれ。

市助　お志しぢやアござりますが、三十兩が五十兩でも貰ふ筋があつて貰ふのだ、そんなに恩にお着せなさるなら、止しませう、貰ひやすめえ。

丹三　厭ならよしやれ、達て遣らうとは申さぬわ。

市助　遣らうといつても貰やアしませぬ。（ト思入あつて、ずつと立つて行くを、）

丹三　これ市助、何處へ參る。
市助　何處へ行きますものか、奉行所へ駈込んで、方を付けて貰ひます。
丹三　すりや、五十兩遣らざれば、
市助　お氣の毒だが命づく、御恩を仇で返します。
丹三　おゝさう聞く上は。
トツカ〳〵と行き、市助を引戻すを振拂ふ、丹三郎刀の柄へ手を掛ける、市助其手を留め、
市助　こりやアわしを切らつしやる氣か。
丹三　むゝ。
市助　こんな事もあらうかと、今夜爰へ忍んで來るにやア、命を取られる氣で來たのだ、先刻こゝへおきつが着物を屆けに來た雜魚七は、遊び仲間の友達故、もし殺されたら奉行所へ駈込んでくれと賴んでおいた、大方そこらに居ませうから、あなたも命を捨てる氣なら、サアすつぱりとやんなせえ。（トきつと思入、丹三郎こなしあつて）
丹三　そちを切らうなどゝいふ身共短氣な所存はない。（ト刀をしやんと納め、）困るとあらば望みの通り五十兩遣はさう。

市助　そんなら刻まず、わつちがねだつた五十兩下さいますか。

丹三　(手箱より五十兩出して紙に包み、)それ、改めて持つて行きやれ。

市助　こりやア有難うございまする。(ト金を懷中へ入れる。)

丹三　して、今言ひし雜魚七は、そちが友とあるからは、きつが小袖を持參なせしは、市助そちが計らひだな。

市助　いかにも左樣でございまする、昨夜夜網に參りまして、網に掛つたあの小袖、不氣味な女に賴まれたと怪談咄しで雜魚七に、さつき持たして上げましたは、お察しの通りわたくしサ、何にしろ廿日から日數の立つのに生々しい、血潮は怪しうございますぜ。

さみ　(屛風の内にて、)これ丹三、又嫁女が苦しむから、ちよつと來てくりやいの。

丹三　はツ〳〵、只今それへ參りまする。

市助　もし、お嫁御さんと仰しやるからは、もうお貰ひなさいましたか。

丹三　おゝ先達て貰ひしが、十日前から煩ひ付き、病症分らぬお村が大病。

市助　たしかにそりやア、おきつが祟りで、

丹三　これ、人目に掛らぬ其の中に、

市助　左様なら、旦那様。
丹三　此の後屋敷へ、
市助　へい、上つちやァ濟みませぬが、又此の金がなくなりますと。
丹三　や。
市助　御無心に上ります。
　ト時の鐘合方にて、市助思入にて下手へ出て、うなづいて垣の蔭へはひる、後を見送りて、
丹三　命助けし恩義を思ひ、改心なして奉公せしが、根が惡心に又元のゆすり衒りに立返り、おきつをかせに五十兩のつぴきならぬ強ねだり、一度が二度と度重り地藏の顏も三度目には、刀の錆に致さにやならぬ、よしなき者を語らひしが、此丹三郎の身の曇り、冴え行く月の雲ならで、あゝ心にかゝる事ぢやなァ。
　ト此時薄きドロ〳〵にて庭の木燈籠へ灯りつく、丹三郎見て、
やゝ、思ひがけなき燈籠へ灯りの付きしは。（ト心得ぬ思入。と屏風の内にて）
さみ　これ丹三、早う來てくりやいの。
丹三　又もや死靈の祟りなるか。

ト時の鐘幽靈の合方になり、丹三郎屏風の内へはひる、ドロ〳〵寐鳥になり、燈籠の側より燒酎火出て屏風の内へはひる。

お村　あれえ、又參りましたわいな。

丹三　これ、つまらぬ物の目に見えるのは、熱のせゐだ、しつかり致せ。

お村　どうぞ助けて下さりませいな。

さみ　お村、此胸がせつないか。

お村　あい、せつなうてなりませぬわいな。

丹三　身共がちつと替りませう。

さみ　お〻少しの内替つてくりや、藥を煎じ掛けておいたから、ちよつと行つて見て來ねばならぬわいの。

丹三　最前からお一人で、嘸お草臥なされましたらう、ちと御休息なされませ。

さみ　なに、休息には及ばぬわいの。

ト丹三郎おさみと入替る、お村苦しき思入にて、

お村　あれ、又參りましたわいな。

丹三　これ、そんな事は言はぬものだ。

ト おさみこちらへ來て、

さみ　熱のせるとはいひながら、氣味の惡いお村の詞。最前持參の着物といひ、若しやおきつを。

丹三　え。

さみ　どれ、藥を見て來ませうわいの。

ト合方にておさみ奧へはひる、又ドロ〳〵になるお村俯伏せになり、すつぽんでせり下げ、其脇へすつぽんにておきつの亡靈お村の打扮にて出る、丹三郎心付かず、

丹三　これ、何處が痛いのだ。

亡靈　此の胸が痛うござります。（ト顏を上げる、丹三郎見てびつくりなし、）

丹三　や、おのれはおきつ、何故爰へ。

亡靈　見かへられたる此身の恨み。（ト丹三郎を恨めしさうに見る。）

丹三　障礙をなすか。

ト拔打に切る、ドロ〳〵にて亡靈すつぽんにて消え、お村出て、

お村　これや、何で私を。

丹三　おきつと思つて手を負はせしか、やゝゝゝゝ。（トドロ〳〵にて、燒酎火を出し、附聲にて）

亡靈　これで少しは恨みが晴れた。

丹三　おのれ、おきつめ、（トドロ〳〵にて、お村の首を打落し、丹三郎見てびつくりなし、）やゝ、おきつと思つて、お村が首を、やゝゝゝ、（ト首を取上げ見てびつくりなし）我妻ながらお上より、お指圖受けて貰ひしお村、何科も無く殺しては御上へ對して言譯なし、惡事は千里おきつをば殺せし事も遠からず、露顯致すに疑ひなし、こりや自殺せねばならぬわえ。

ト丹三郎平舞臺へ來て肌を脫ぎ、腹を切らうとする、此時下手より市助出て、

市助　死ぬならおれに、もう片手（五十兩）も、金を呉れて死になせえ。

丹三　おゝよい所へ市助め、さつきの返報覺悟しろ。（ト拔討に切附ける、ちよつと立廻つて市助どうとなり）

市助　えゝ、不意をくらつて切られたか。

丹三　おゝ汝も共に冥土の道連れ。（ト又切つてかゝり立廻つて切付ける、市助悔しき思入あつて、）

市助　今夜こなたに切られたも、是もおれがなした科、おきつを女房にしようと思つて、お村は疾から情人だと焚付け、門跡河岸で口説いたが、おれが自由にならねえから、こなたに頼まれ殺すといつて、なぶり殺しに殺したが、爰へうか〳〵無心に來て、今こなたに殺されるのは非業に死んだ

おきつが恨みか。

丹三　（思入あつて、）扨はおきつに悋氣を起させ、かゝる祟りも市助汝が、巧みし事でありしよなア。

市助　おゝ、みんなおれが企んだ事だ。

丹三　さう聞く上は猶の事、遺恨重なる下部市助、われがきつを殺した樣になぶり殺しにしてくれん。

市助　殺さば殺せ、たゞは死なねえ。

丹三　こしやくなことを。

ト市助むしやぶり附くを振拂ひ、誂へ合方ドロ〳〵にて燒酎火顯はれ、丹三郎市助をなぶり切りにする、此立廻り門跡河岸で市助がおきつを殺せしやうな立廻り宜しくあつて、トゞ市助を切倒し、乘掛つて止をさす、是れにてドロ〳〵止み燒酎火を消す。ばた〳〵にて奧よりおさみ出て、

さみ　これ悴、樣子は奧で殘らず聞いた、上より御沙汰のない内に、早く此場を落ちてくりやれ。

丹三　いや一人ならず二人迄、人を害せし上からは、所詮存命かなはぬ某、此場を去らず切腹なさん。

さみ　切腹せうとは尤もぢやが、とても死ぬならきつが恨みの、晴れる樣にしてくりやいの。

丹三　きつが恨の晴れるやうとは。

さみ　血を分けた兄弟があるといふ事聞いたれば、身寄りの者に一刀切られた上で切腹なし、立派に命

を捨てやいの。

丹三　むゝ、きつを初めお村市助、非業な最期を遂げたのも、元はといへば我なす業、

さみ　それ故こゝを立去つて、身寄の者の手に掛り、命を捨てゝくりやいの。

丹三　然らば仰せに隨つて、

さみ　人目にかゝらぬ其内に、

丹三　とはいへ、あなたが。

さみ　後氣遣はず、ちつとも早う、

丹三　左樣なれば母上、

さみ　丹三郎、

丹三　これが此世の、（ト愁ひの思入。）

さみ　未練なるぞ。（トきつと言ふ。）

丹三　はッ。

ト立上る、ドロ〳〵にて上手へ燒酎火出る、是をきつと見る。これにて宜しく道具廻る。

（築地波除の場）――本舞臺正面小高き石垣、亂杭、川岸端の張物、向うは波除より町家をはすに見たる海の遠見、闇の心にて黑き書割り。上手稻荷の宮の後を見せ、下手船板を立掛けあり、柳の立木宜しく波の音にて道具留まる。と時の鐘、波の音にて以前の雜魚七頰冠りにて出來り、

七　さつき市助に賴まれたが、丹三郎に殺されたら奉行所へ駈込んで、訴人をしてくれと言つたが、今中間の話しで聞きやア、どういふ譯かお上からお世話のあつた女房を殺し、擧句の果に市助を殺して逃げたといふ事だが、一人ならず二人三人、人殺しをした大罪人、奉行所へ訴へれば御褒美にありつく仕事だ、ちつとも早く、さうだ。

ト身拵へして行掛る、此時後へ丹三郎出て、

丹三　雜魚七、待ちやれ。（ト雜魚七見て、）

七　やア丹三郎か。（トびつくりなす。）

丹三　奉行所へ訴人に及ばぬ、人を殺せし上からは命を捨てるは覺悟の某、おのれも冥土の道連に殺してやるから觀念なせ。

七　こいつはたまらぬ。

丹三　うぬ、逃げるとて逃さうか。

トちよつと立廻つて雜魚七を切倒す、こゝへ吾市、文吾尻端折り大小にて出來り。

吾市 やあ、人殺しの今村丹三、

文吾 繩掛けて引く、

兩人 覺悟なせ。

丹三 おゝ死ぬるは疾より覺悟の丹三、そち達二人も冥土の道連。

兩人 こしやくなことを。

ト波の音早き合方にて、丹三郎兩人を相手に烈しき立廻りあつて　ゞ兩人を切倒し、ほつと思入、ばたくになり上手より茂兵衞、男達にて、下手よりお仙出て　丹三郎を中に挾みき　と見得。しくせに附き月を出し後打返しにて明るき遠見の書割になり　丹三郎兩人を見て、

丹三 やゝ、そち達は。

お仙 見忘れられしか丹三郎、きつが妹の笠森お仙。

茂兵 緣につながる我こそは、男を立てる隱家茂兵衞。

丹三 して又何故、此處へ、

お仙 姉の恨みを晴さん爲、

丹三　何と、

お仙　門跡川岸にて我姉を、殺せし敵の丹三郎。

茂兵　證據は其夜拾つたる汝が所持の此の提灯。　ト前幕の小田原提灯を出す

丹三　いかにも其場へ行合ひしが、姉のおきつを殺したは、身共ではない　市助だ。

お仙　假令市助が仕業にもせよ、敵と狙ふは丹三郎、

茂兵　此場でおのれを討取つて、非業に死んだるおきつへ、

兩人　手向けん。

丹三　何をこしやくな。

ト波の音白囃子やうの鳴物になり、三人立廻つて丹三郎わざとお仙に一刀切られ、直にお仙の懷劍を打落し、

おきつが最期も其元は、我より起りし事故に、今一刀切られたはおきつが恨みを晴らさん爲め。

ト刀を取直し、腹へ突立てる。

茂兵　やゝ、こりや何故に、

お仙　自殺をせしぞ。

丹三　死霊の祟りといひながら多くの者を害せしからは、所詮存命かなはぬ丹三、先非を悔いての此の切腹。

お仙　敵ながらも流石は武士、

茂兵　はて、あつぱれな、

ト丹三郎引廻して、がつくりとなるを木の頭。

お仙
茂兵　性根ぢやなア。

ト両人きつと見得、丹三郎落入る。此模様宜しく波の音、カケリにて、

ひやうし　幕

笠森お仙（終り）

吹雪花小町於靜

二世と契りし辻堂にておもはぬ難に奥州屋の禮三が身をば捨鐘も法華傳次に助けられ侘びた住居の其中へたづねくるわの裏道と聞いてお民と與惣兵衛が義理にしがらむ緣切もあはれお靜は七つ子を杖にさまよふ目なし鳥それとさとりて宗右衛門娘お早のいひわけも世も牛島と麥庵の惡事を見いだす半衛兵が吉事を告げる商家のをさまり

「お靜禮三」は慶應三年二月、作者五十二歳の春、市村座に於て書卸された。「傾城草履打」と共に新作されて、「契情皆我廓鑑」なる大名題の下におかれてあつた。この作は當時の若手花形として人氣の盛んであつた田之助と家橘（後の五世菊五郎）とを中心として、非人と町人との情話を題材とした世話物で好評を以て迎へられた。殊に小磯ヶ原雪降りの場の別れの如きは、後年和國太夫によつて義太夫の語り物にまでされた。又その場へ出て來る駕籠舁が、いつもの敵役でなかつたことが見巧者連の間に取沙汰されたといはれてゐる。此の作は上演される數年前に、淺草に實際あつた話を噺し家の柳櫻が作者に話した。その事實によつて新作したものと言はれてゐる。然し事實の方は女が町人で男の方が非人であつたといふ。

書卸しの時の役割は、澤村田之助（お靜）市村家橘（禮三郎）坂東龜藏（鐘馗の半兵衞、法華傳次）關三十郎（劍澤麥庵、奧州屋宗右衞門）市川新車（奧州屋の女房お民）河原崎國太郎（奧州屋の娘お早）市川左團次（牛島主税）坂東三八（非人まむしの仁三）坂東薪左衞門（川うそ新太）坂東太藏（ちやぢや馬道八）等であつた。お靜は又お賤ともなつてをり、傳次は傳二ともなつてゐる。

挿繪にしたのは、國周筆の錦繪で、小磯ヶ原雪の別れの場である。

大正十四年六月　　　　校訂者



序幕

御行之松雨宿の場
鶯春亭入口の場
田川屋座敷の場
大川橋身投の場

〔役名——鐘馗ノ半兵衞、劍澤麥庵、牛島主税、奧州屋手代禮三、半兵衞乾兒金太郎、日勸進市介。
女太夫小町お靜、奧州屋女房お民、同娘お早、同下女お國、女乞食お捨、お靜娘お千代、其他。〕

（御行の松雨宿の場）——本舞臺後一面の淺黃幕、下手に出茶屋の後を見せたる葭簀張り、薄き雷の音にて幕明く、と下手よりお捨、襤褸裝、跛の日和下駄、女乞食の打扮にて、お千代を背負ひ番傘を持ち出來る。上手より市介、手拭を被り日勸進の打扮にて出來り、舞臺にて行違ひ、

市介　おい／＼、お捨何處へ行くのだ。

お捨　おや誰だと思つたら市介さん、お前、內のお靜坊を見掛けなかつたかえ。

市介　おゝお靜さんは、先刻笹の雪の前で見掛けたが、さうして何ぞ用でもあるのか。

お捨　なあにお前、晝時分から此の通り雷樣が鳴るものだから、あの子の父親が氣を揉んで、不斷から強い嫌ひゆゑ嘸困つて居るだらう。雨にでも降られてはならねえから、御苦勞でも搜しにいつて、居たら一緒に連れて歸つてくれとの賴みだから、斯うして傘を持つて搜して歩くのだわな。

市介　さうか、それぢやあもう一足早えと、直に逢ふ所だつたが、もう今時分は大方團子坂あたりへ行つたらうよ。

ト此の内段々雷の音大きくなる。

千代　怖いから早く歸らうよ。

市介　おゝ、千代坊か、背負でいゝな。

千代　爺やあ、一緒に行かう。

お捨　何だ、爺やあと歸りたい、それだから内に居なといふに、一緒に行くんだ〳〵といつて、困つた子だつちやあねえ。

市介　おい〳〵、そんなに叱んなさんな、どうせもう内へ歸るから、それぢやあ己が連れて行つて遣らう。

お捨　さうかえ、そんなら己等は歸りがちつと遲くなるかも知れねえから、お前この子を連れていつて

くんなな。
市介　おつと合點だ〳〵、それ背負しろ、（ト背中を出す、お捨、市介に背負せる、）やれ〳〵、大層重くなつたぞ、ほんに此の子をお靜坊が産んだとは思はれねえの。
お捨　ほんにさうだよ、何處へ出しても兄弟としッきやあ見えねえ。
市介　さうして、己あ、此の子の父親といふのを、つひぞ未だ見たことがねえ。
お捨　さうかえ、それぢやあこんだ敎へてやるが、どんなにお前好い男だらう。
市介　さうか、さうして聞きやあ奉公人ぢやあねえか。
お捨　あい、傳馬町二丁目の奥州屋といふ小道具屋の若い衆だといふことだが、あの近所ぢやあお前、業平禮三といつて、評判の色男だといふことだよ。
市介　さうか、其奴はお靜坊は素敵なものを引つ掛けたなう。
お捨　ほんに、あの子も仕合せだわな。
市介　それぢやあ、なんだの、流しに出た先きで、色にでもなつたといふことかの。
お捨　なんでも二人の馴染めは、光願寺の門番の花屋の婆さんの内が、出合場所だつたさうだ。
市介　はゝあ、光願寺だから、それで門でとぼしたのだらう。

お捨　市介さん、おつウ洒落たの。
市介　さうして親の傳二さんは、知つて知らねえ分とでもいふのか。
お捨　あゝいふ氣性な人だから、斯うして孫まで出來て居ても、渡りを附けに行かうぢやなし、打捨つておくところを見ると、あのお靜坊も拾つた子で、根が素人の生れだから末始終は話合で、向うへ嫁にでも遣るかも知れねえ。
市介　しかし己が素人にしても、お靜坊なら色になりてえ。
お捨　呆れけえらあ、何でお前と色になるものがあるものか。
市介　さう見限つたものでもねえ、これでも昔やァ色男だ。
お捨　黒男が聞いて呆れらあ。
市介　又惡口をきゝやあがるか。
ト又雷の音嚴しく鳴る。
千代　爺やあ早く歸らうよ。
市介　違えねえ、がうぎに雲行きが惡くなつて來た。降らねえうちに早く歸らう。
お捨　それぢやあお前、その子を頼むよ。

市介　おい〳〵、それぢやあ又晩に逢はう。

ト市介は下手お捨は上手へ別れてはひる、雷の音にて淺黄幕を切つて落す。

本舞臺三間の間後　淺黄幕、少し上手へ寄せて注連を張りし大樹の松の木、これより下手へ所々に枝受けの丸太、眞中に一間の辻堂本緣付き、この下手に石の手水鉢、ずつと上手に竹の垣根、内より梅の梢を見せ、上下とも藪疊すべて御行の松の體、上手に牛島主税大小着流し雪駄掛け浪人の打扮にて立かゝり、此の次に釣澤麥庵着流し一本差醫者の打扮にて雪駄を帶に挾み尻端折にて居る。眞中に鐘馗ノ半兵衞着流し脚絆草履掛けにて羽織を疊み肩へ掛け立ちかゝり、傍に半兵衞乾兒金太郎着流し脚絆草履にて、天窓へ王子土產を挿して立ちかゝり、此の後　辻堂の緣端にお靜女　太夫好みの打扮にて編笠を被り三味線を抱へ腰を掛け居る、傍に奧州屋手代禮三郎羽織着流し雪駄掛けにて、短刀の入りし包みを持ち置手拭をして居る、下手に奧州屋娘お早振袖娘にて立かゝり、奧州屋女　房お民母　親の打扮にて立ちかゝり、傍にお國下女の打扮にて附添ひ居る、何れも雨宿りの模樣よろしく、雨車きびしく、ばつたりと雷の音して此の道具納まる。と是れにて女形　皆々耳を塞ぐ、跡端唄の合方、鶯笛折々雨車のあしらひ宜しく、半兵衞麥庵に向ひ、

半兵　もし、きつい降りでござりましたな。

麥庵　左樣でござります、今日ばかりは此のやうに、降らうとは思ひませせなんだ。

半兵　ほんに氣違日和とは此の事でござります。

お民　雨ばかりなら好いけれど、嫌ひなものがお鳴りなさるので、氣が氣ではないわいなう。

お早　今の一つは何處ぞへお下りなされた樣子ぢやが、ほんにもう私や怖うてなりませせなんだわいなあ。

金太　なあにお孃さん、お案じなさる事はござりません、わつちが附いてをりますから、まあ落着いておいでなされませ。

ト是れを聞き、半兵衞思入あつて、

半兵　それ光つた。(ト大きく言ふ。)

金太　あゝ桑原々々萬歳樂々々。

半兵　それ見ろ、人一倍先きへ怖がるくせに、御大層なことばかり言つて、意氣地のない野郎だなあ。

主税　いやもう古人の句にもある通り、初雷や今年も丁度梅の上と、えて、梅の咲く時分といふと、時ならぬ雷のあるものだて。

麥庵　もし若旦那、昨晩は定めし廓でございませうな。

主税　いや二三日廓に遊んで居たが、天氣のいゝのに居續けも何だかどつとしねえから、友達の所へ行

つて見ようと、此方の方へ出掛けて來たが、さうしておぬしやあ何處へ行つたのだ。

麥庵　急病人があるといつて、海老屋の寮から呼びに來たゆゑ、今行つて歸りがけでござります。

主税　さうか、そりや好い所で逢つた、いろ〳〵貴様に話すこともあるから、何處ぞそこらへ行つていつぺいやりてえものだ。

麥庵　わしもお前さんにお聞き申したい事もあり、丁度好い所でお目にかゝりました。

トこの内半兵衛、煙草入より火打道具を出し、火を打ちて煙草を呑んである、麥庵これを見て、

麥庵　モシ、憚りながらどうぞ一つ貸しておくんなさいまし。（ト煙草を出す。）

半兵　さあ、お安い御用だ、お附けなされえ。

ト兩人煙草を呑むことよろしく、お靜空を見て、

お靜　段々曇つて來ましたから、霽りさうもござりませんね。

禮三　どうか、もう一降りかゝりさうだ。

お靜　困つたものでござんすな。

トこれにてお民禮三郎を見て、

お民　これ、其處に居やるは禮三ではないか。

ト禮三郎たうとう見付けられたといふこなしにて、前へ出で、

禮三　へい、これはお上樣でございましたか、わたくしはまた何方樣かと存じてをりました。

お早（禮三郎を見て、）おゝ其方は禮三、いゝ所で逢うたわいなう。（ト嬉しき思入。）

禮三　これはお孃樣も御一緒でござりましたか、嘸お降られなさいまして御難儀でござりませう。

ト これにてお靜、扨はといふ思入、半兵衞禮三郎を見て、

半兵　おゝ禮三さん、お前そこに居なすつたのか。

禮三　これは鐘馗親分に金太さん、おゝ、みんな知つたお方ばかりでござりました。

ト この內麥庵お靜を覗き込んで見て、

麥庵　もし若旦那、そこに居る女太夫は、いゝすてきでござりますぜ。

主稅　なるほど、こりやがうてきなものだ。

金太（お靜を見て、）もし親分、彼ので ござりますく。（ト半兵衞の袖を引く。）

半兵　なんだ藪から棒に、彼のだくと女せえ見りやあ、大騷ぎをやりやあがる。

金太　なにさ、そこに居る女太夫は、今世間で評判の小町お靜といふ、女太夫でござりますよ。

半兵　はゝあ、それぢやァあれがゝ、道理で好い女だと思つた。

主税　如何様これは小町といつても、憎からぬ器量であるわえ。
麥庵　おい姐え、何もそんなに後の方へ引込んで居ることはねえ、もつと前の方へ出たがいゝやな。
お靜　はい、お恥かしうござりますわいなあ。（ト顏をそむける。）
半兵　こうツと、かう立列んだ其の所は、丁度男が五人居るが、まあ此の中で業平にでも見立てようといふのは誰だらう。
麥庵　左樣さ、六歌仙にでも例へて見ると、もし若旦那、差しづめお前さんが業平でござりますぜ。
ト背中を叩く。
主税　煽てゝくれるな、當時ぢやァおらァ宗旨を替へた方だ。
金太　なあに、その業平は爰に居る、禮三さんと極つて居らあ。
トこれにて禮三郎あわてゝ留めて、
禮三　これ金太さん、何を言ふのだ、そんな嘘をいふと間違ひになるぜ。
金太　なに、嘘なことがあるものか。
禮三　はて、又してもそんなことを。（ト此方を向き、）なんであんな女太夫などゝ、情人になつてよいものでござりませう。

お早　はて、誰も情人ぢやとは申しませぬわいなう。

ト つんと拗ろ、これにてお靜腹の立つこなし、此の内麥庵煙草を呑んで居て、煙管のつまる思入にて懷中より手紙を出し、これを裂いて撚繼にして煙管を通すこと宜しくあつて、お靜を見て、

麥庵　おい姐え、一服呑まねエか、（ト言つてもお靜はお早の方ばかり見て居るゆゑ、）これさ、姐え。

ト 大きく言ふ、これにてびつくりなし、

お靜　はい、何でござりまする。

麥庵　さツきから、一服呑まねえかといふに。

お靜　それは有難うござりまする。（ト帶の間から煙管と煙草入を出し、）これは憚りでござりまする。

ト 煙草を吸付けて呑む、このうち主税、お靜をよく〳〵見て、

主税　夜目遠目傘の内と、編笠を被つて居るせゐか、三浦屋の岩藤にがうぎによく似て居るではないか。

麥庵　ほんに私もさつきからさう思つて居ましたが、岩藤よりも新造の初菊に、そつくりぢやあござりませんか。

主税　なるほどさういへば、初菊にも面ざしが似て居るやうだ。

禮三　もし鐘馗親方え、お前さん方も内のお上さんと、今日は御一緒でござりますか。

半兵　いえなに、わしァ野郎を連れまして、王子へ參詣へ行きまして今歸りがけでござります。

禮三　それぢやあ、うちのお上さん方は、御一緒ぢやァないのでござりますか。

お民　今日はお彼岸の中日ゆゑ、お寺參から梅を見ながら、此方の方へ廻つて來ましたのぢやわいの。

お國　ほんに丁度好い所でござんすゆゑ、歸りは禮三どのも御一緒に、なあ、お孃樣。

お早　ほんに、それが好いわいなう。

ト嬉しき思入、これにてお靜氣の揉めるこなし、

禮三　それは丁度幸ひのことゆゑ、わたくしも貴方方のお供を致したうござりますが、旦那樣のお使ひでこれに持つて居ります菊一文字の短刀を、以前入間樣の御家來でござりました庵崎樣のお宅まで是非とも今日持つて參らねばなりませぬゆゑ、どうぞ貴方方は一足お先きへ、おいでなされて下さりませ。

トこれにてお靜安堵せし思入、麥庵、主税この話を聞き、短刀の包みへ思入あつて、囁き合ふことよろしく、

金太　どうして〳〵そりやァ無駄でござります、禮三さんは歸られまい、これにやあ譯がありますよ。

お國　そりや又なぜでござんす。

金太　禮三さんは、あすこに居る、
　　ト言ひかけるゆゑ、禮三郎言つては惡いといふこなし、半兵衞これを見て悟り、
半兵　これさ、又餘計なことを言やァがるか、默つてそつちの方へ引つ込んで居ろ。
金太　オツト、叱られた。
　　ト後へ下る、麥庵空を見て、
麥庵　あゝ好い鹽梅に空が切上つて來た。もし若旦那、そろ〳〵と出掛けませうぢやござりませぬか。
主税　さうよ、何かの話しも爰では出來ねえ、それぢやあ直に此の先きの鶯春亭で、ゆつくり呑みながら話すとしよう。
麥庵　もしお恥しいことぢやァあるが、まだ此の根岸の鶯春亭へ行つたことがござりませぬが、評判記はどうでござります。
主税　さういふことなら丁度いゝから、おれと一緒に行つて見さツし、湯があつて喰せるものがよくツて、まあ第一酒がいゝ。
麥庵　それは何よりでござります。
主税　跣足になるも冷たいから、未練に雪駄をはいて居たが、これで其處まで行けようか。

麥庵　なあにお前さん、爰等は前が流れゆゑ、雨が降つてもはけが好く、直に路が乾きます。
主税　それぢやあ、飛び〳〵やツつけて見よう。
麥庵　それが宜しうございます。もし、何方も御ゆつくりとしてお出でなされませ。
半兵　左樣なら、もうお出掛けでございますか。
麥庵　大きに失禮を申しました。
　　ト これにて主税、麥庵上手へはひる。
禮三　今爰に居たお侍は、ありやあ入間の御家中にて庵崎樣の御同役牛島樣の御子息だが、今の話しの口振りでは廓通ひが元になり、御浪人でもなされたと見えるわえ。
半兵　又側に居たあの醫者は、ありやァ確に本所で麥庵といふ鍼醫の名人、死んだ者でも生しさうな逞しい面構へだが、彼奴もたゞの醫者ぢやァあるめえ。
金太　もしお上さん、どうで歸りは一つ道、御一緒に參りませうか。
お民　ほんにこれから田川屋で食事をして行く積りゆゑ、お前方が一緒だと假令歸りが夜に入つても、落着いて居られれば、どうぞさうして下されいなう。
半兵　あゝもし〳〵お上さん、わたし共は今しがた王子の海老屋へ寄つた所が、隣の座敷にお馴染の旦

那が行つて居なすつて、丁度いゝ所へ來たと言つて御馳走になつて來ましたから、田川屋ならば今日はお預けに致しませう。

金太　奢りがうはで其のお負けに、年玉の猪口まで貰つて來ました。

半兵　いや又この野郎がお福さんだの、お信さんだの、おきんさんだのといふ小綺麗なのが居るものだから、頻りに跡へ殘りたがつて、連れて歸るのに大骨折りでございました。

金太　なあに、そりやあわつちぢやあねえ、薪左衞門といふ役者の事だ。

お民　さういふことなら坂本で、お別れ申すとしませうわいの。

半兵　(空合を見て)もし又一濕かゝりさうな空鹽梅でございますから、降らねえ中に出かけませうか。

お民　そんなら、さう致しませう。

お早　あゝもし母樣今にも降つて參りさうなれば、わたしやいつ迄も爰に居たうございますわいなあ。

お民　これはしたり何をいふのぢや、此樣な淋しい所に何時まで居らるゝものかいなう。

お早　それでもわたしや。(ト思入。)

金太　淋しい此處にお孃さんが、何處までも居たいといふのは、あの禮三さんが。(ト言はうとする。)

半兵　これさ、又餘計なことをいふか。

金太　オツト、又叱られた。

ト禮三郎間の悪き思入にて、お靜に向ひ、

禮三　もし姐さん、お前もう雨が止んだが、そろ〱と出掛けてはどうだえ。

お靜　はい、行きたくば勝手に参ります、どうぞ構うて下さりますないナア。（ト腹の立つ思入。）

禮三　いや、これはとんだ御挨拶だ。

金太　あゝ、何とか言つたら、又叱られるだらう。（ト双方へ思入。）

禮三　左様なら貴方方は、もうお出掛けなされますか。

お民　わたしどもはもう行く程に、其方も用が濟みやつたら、早う家へ歸つたがよいぞや。

禮三　へい、御用さへ濟みますれば、なるたけ急いで歸りますでござります。

お早　もし母様、これから戻りに田川屋へ寄ることを、禮三に言うてもようござりますか。

お民　ほんに、これから田川屋で食事をして行けば、戻りが早くば寄つたがよいぞや。

禮三　へい、それは有難うござります。

お早　これ禮三、きつと待つて居るほどに、庵崎様の御用が濟んだら、早う戻つて來てもいなう。

禮三　御用さへ濟みますれば、直にお後から参るでござります。

お早　きつとぢやぞえ、よいかや。（トお靜へ思入あつて、）ほんに、もう雨も降らぬに行きはせで、心にかゝることぢやなあ。
お民　これ其方、何を言うて居やるぞいなう。
半兵　さあ、お孃さん參りませう。
お早　それでも、わたしや。（ト心殘りのこなし。）
半兵　はてまあ、おいでなされませ。
ト流行唄にてお民先へ、お早振返り〱、禮三郎にきつと待つて居るといふ捨白よろしく、これを跡から半兵衞せりたて、金太郎、お國附いてはひる。禮三郎花道の附際まで行きて、
禮三　唯今直にお後から參りまするでござりまする、いえ、間違ひは致しませぬ、きつと參りまする。（ト此方へ來り、）やれ〱惡い所で出逢つたものだ、背中もなにもぴつしよりになつた、これなら結句雨宿りをせずに、雨に濡れた方がよつほどましであつた。
ト手拭にて身體の汗を拭く、お靜編笠を取り前へ出て、
お靜　もし禮三さん、それ程お孃さんの所へ行きたくば、ちつとも早う行かしやんせ。はい、わたしやどうせ女太夫でござんすわいなあ。

禮三　いや、こりやァとんだお腹立ちだ。
ト兩人辻堂の椽へ腰を掛ける、媚いた合方になり。
これお靜、おぬしやあ直に其の樣な厭な癪をば言ふけれど、おれだといつて氣の詰つたお主樣の供をして、何の行きてえことがあるものか、今のやうに言つたのは、ありやあみんな氣休めといふものだわな。

お靜　いえ〳〵それは嘘でござんす、あゝいふお娘のあることは疾うから話に聞いては居れど、お見世へ立つても御大家ゆゑ、つひにお顏も知らなんだが、あの美しいお孃さまと一つお家に居るのぢやもの、譬にも云ふ近くの他人、お前が見替なさんすもわたしや無理とは思はぬわいなあ。
ト怨めしさうに言ふ。

禮三　又きまりを言つて居るぜ、假令一つに居ようとも、お主樣であらうとも、どんな大家であらうとも、厭だと思へば厭になり、貧乏しても零落ても、惚れたからにやあ何處が何處まで添ひ遂げるのが浮世の習ひだ、戀に上下といふことをおぬしも知つて居るぢやあねえか、そんな邪推な廻り氣は嘘にも言つてくんなさんな。

お靜　いえ〳〵、何と言はしやんしても、みんなお前の口先きばかり、疾うから愛想の盡きたのは、わ

たしや合點でござんすわいなあ、

禮三　なに、愛想のつきたを知つて居るとは、そりやあいつたいどういふ譯で。

お靜　さあ、此の間から音信もなしの礫もござんせぬゆゑ、煩うてゞも居やしやんすか、但しお家が不首尾なのか、どうした事と案じるゆゑ、人にとやかう言はるゝも聞いて流して行く振で、お見世へ立つても居やしやんせず、こりや折惡う奥へでも行かしやんしたであらうと思ひ、二度も三度も行つたり來たり、お見世へばかり立つゆゑに、向うや隣りのお見世で笑はれ、わたしや顔から火の出る程恥しい目をしたわいなあ。それに一度も顔見せて下さんせぬはあのやうな好いお娘樣の側に居て可愛がらるゝお前ぢやもの、妾に愛想も盡きようわいなあ。（ト禮三郎の膝へ泣伏す。）

禮三　そりやあ、あゝいふ娘御の側に居るゆゑ、其樣に思ふといふも無理ぢやあねえが、これが當座の色戀や浮いた同志の仲ぢやあなし、假初ならぬ七年越し、子までなしたる二人が仲、朝晩一つに居ねえとて、互ひに思ひ思はれて實を盡した曉は、雪駄直しを生涯しても、己はおぬしと添ひてえと思つて居るに其樣な、やゝともすると見替るの、愛想が盡きたといふやうな、そんな厭みは噯にも出してくれちやアいけねえぢやねえか。

お靜　（これにて心の直りし思入にて、）もし禮三さん、そりや、まあ、お前眞實に、さういふ心でござ

んすかえ。

禮三　なに僞りを言ふものか、噓でねえのは此の年月、替らぬ己が心でも大抵知れて居るぢやあねえか。

お靜　さういふお前の心とは知つては居れど女の廻り氣、今のやうに言つたのはみんなわたしが惡うござんす。腹も立たうが禮三さん、どうぞ堪忍して下さんせいなあ。

禮三　おぬしの心が解けせえすりやあ、なんのあやまるに及ぶものか。

お靜　やれ〳〵、それでわたしも落着いたわいなあ。

禮三　いや、まだ落着いて居られぬのは、今におぬしを素人にして、此頃流行る唐物の吳服見世でも出す氣だが、何をいふにも兩隣が仕入れも多き大店に、今指折りの顏揃ひ、肩を並べて立竝んでは所詮及ばぬ小切見世、揃はぬ勝の色品ゆゑ、賴みに思ふはおぬしばかり、しつかりとしてくれにやあいけぬ。

お靜　わたしもそれが苦勞になつて、心にかゝつて居る所、斯うしてお前と一つになるのは疾うから願つて居たことゆゑ、飛立つ程に嬉しいけれど、今もお前の言ふ通り、仕入れ少ない小切見世、伯父さん達を後楯に見世を開けるもお前が便り、妾よりは禮三さん、お前しつかりして下さんせ。

禮三　そりやあしつかりする氣だが、年は行かず功は積まず、元より未熟の此の禮三、綸子や錦の時代

はいけず　木綿仕入れの世話ごとも、今唐棧のまがひ織り、

お靜　そりやあ、わたしとても同じこと、親の光と御贔屓のお取立てには大役を勤むるものゝ更紗染、色さへ鈍き今紫、直に見ざめの不束に、どうしたものと去年から、案じ暮して居るわいな。

禮三　どうといつて今更に仕樣模樣もない譯ゆゑ、何でも今年は安賣りに、幕數多くした上に、おぬしと己が精一杯、二人前も勤めにやいかぬ。

お靜　いやも、二人前は愚なこと、三人前も出來るだけ、どんな小切の端役でも、わたしや勤むる氣でござんす。

禮三　その氣でやつたら生業冥利、よしや本場とまがひ織り、比べて見れば見劣りの、するのも其處が數年來お惠みうけしお得意だけ。

お靜　惡いも承知で、是非一度は行つてやらずばなるまいと、お運びあるが弱きをば、見捨てぬお江戸の御贔屓樣。

禮三　實々以て何れも樣を、力に始める見世開き、

お靜　その引札のお引立てを、

禮三　偏にお願ひ、

兩人　申し上げまする。（ト見物へ辭儀をなし）
禮三　先づ此のお願ひを申し上ぐれば、
お靜　心丈夫でござんすわいな。
　　　ト雨車になり、
禮三　あゝ、又ばら〳〵とやつて來たか。
お靜　ほんに、又きつう降つて來たわいなあ。
禮三（四邊へ思入あつて）たゞさへ淋しい里の名も、雨の縁の時雨ケ岡、
お靜　替らぬ松の辻堂で、逢ふのも深い互ひの縁先き、
禮三　降るのを幸ひ、爰でしつぽり、
お靜　濡れても好いかえ。
禮三　それ、雫が襟へ、
お靜　あれえ」（ト禮三郎に寄添ふ。）
禮三　と言つたものさ。
　　　ト手を執る。お靜恥しきこなしにて有合ふ編笠にて顏を隱す。やはり雨車きびしく、此の時上手の

藪の蔭より以前の麥庵、尻端折り黒の頭巾を被り窺ひ出で、大樹の松の蔭へはひり、辻堂の縁にある短刀の包みをそつと取り、松の蔭より出て、旨いといふ思入にて藪の蔭へはひる。時の鐘、雨車止む。これにて兩人解れて四邊へ思入あつて、

今打つたは、七つの鐘か、降つて居ると思つたが、濡れたのは此方ばかり、何時の間にか雨も止んだ。

お靜　ほんに二人が斯うして居たを、誰ぞに見られはせなんだかいなあ。

禮三　なあに今日らア、誰も通りやあしねえ、どれ、出掛けようか。（ト立上る。）

お靜　それでは、わたしも出掛けようかいなあ。

ト禮三郎上手の垣根を見て、

禮三　誰も見まいと思つたら、笑つて居るものがあつた。

お靜　え、そりやまあ、何處にでござんすえ。

禮三　それ、あすこの垣根で、梅の蕾が。

お靜　あれ、憎らしい。（ト抓る。）

禮三　あゝ痛い、又極りをやつて居るぜ。

お靜　もし禮三さん、さうして今日はこれなり別れ、何時又逢つて下さんすえ。
禮三　さあ、全體今夜歸りがけにちよつと寄つてと思つたが、さつき家のお上さんにお目にかゝつた上からは、今夜は早く歸らねばならぬ。
お靜　さあ、あのお孃さんが、お待兼ねゆゑでござんすわいなあ。
禮三　えゝ、まだそんな厭味を言ふか。
お靜　さうして、何日來て下さんすえ。
禮三　明日はちつと出られぬが、明後日あたりは都合して是非また逢ひに來ようから、例の所に待つて居てくれ。
お靜　あい〳〵、そんならきつと待つて居るゆゑ、ならうことならなるたけ早う。
禮三　おれも其の氣で居るけれど、兎角自由にならねえ身體、どれ、お屋敷へ行つて來ようか。（ト短刀の包みを取らうとしてびつくりなし）じやゝ、こりや爰へ置いた短刀の、包みが見えぬがお靜知らぬか。
お靜　いゝえ、わたしは知りませぬわいな。
禮三　扨は今のその内に、こりや盜まれたと見えるわえ。（トハッと思ひ入。）
お靜　もし、其の短刀と言はしやんすは、大事なものぢやござんせぬか。

禮三　大事も大事、あの品は菊一文字の銘作にて、世にも稀なる入間の重寶、庵崎樣へ是非ともに持つて行かねばならぬ品、こりやかうしては居られぬわえ。
お靜　もし、手がゝりにでもなりさうな、心當りはないかいな。
禮三　さあ、何を言つても此の樣な通り掛りの所ゆゑ、これぞといつて手掛りとても。
　　トお靜落散りある以前麥庵が煙管を掃除したる、手紙の切端へ目を附け、取上げ見て、
お靜　もし、爰に何やら此樣な手紙が落ちてござんしたが、こりや手掛りにはならぬかいなあ。
禮三　むゝ、こりや劍澤麥庵へ、病家先きから賴みの手紙、むゝ、扨は一癖ある奴と思つて居たが彼の醫者が、さつき爰にて短刀の話をしたを聞嚙り、歸つた裝で隙を窺ひ、盜んで行つたことかも知れねえ。
お靜　たゞ者ならぬと思うたが、大方あれでござんせうぞえ。
禮三　連と二人でこの先きの鶯春亭でと聞く上は、これから行つて詮議の手續き、
お靜　とはいへ、きつと盜みしやら、たしかにそれと分らねば、もしもそでないその時は、お前の大事になることゆゑ、とつくり思案をした上にて、
禮三　さあ、それゆゑ事を荒立ず、遠廻しから尋ね掛け、取返して來ようわいの。

お靜　役に立たねど、わたしも一緒に、

禮三　いや〳〵、其方が行つては足手まとひ、

お靜　そんなら必ず短氣を出さず、

禮三　何處が何處まで下から出て、

お靜　怪我せぬやうに、

禮三　おゝ、合點だ。

ト時の鐘合方にて逸散に上手へはひる、お靜後を見送りて、

お靜　手紙を證據に盜まれし其の詮議に行かしやんしたが、何をいふにも相手は侍、たゞ者ならぬ其の上に、一人ならず二人ゆゑ、もし言募り禮三さんに、怪我過ちでもなければよいが、案じるせるか胸さわぎ、あゝ、心にかゝることぢやなあ。

トお靜花道へ思入あつて、案じる思入、時の鐘合方にて道具廻る。

(鶯春亭入口の場)——本舞臺三間の間後淺黄幕、一面風雅なる板塀、内より梅の梢を見せ、眞中に風雅なる門、これに鶯春亭といふ額を掛け、上手に庚申塚の堂、下手に梅の臺幹、總て初音の里

鶯春亭入口の模樣よろしく、流行唄にて道具留る。とばた〴〵になり、花道より以前の禮三郎逸散に走り出來り、直に舞臺へ來り、

禮三　まだ時たつたといふではなし、大方二人も居るであらうが、もしも歸つたその後なら、いくら待つてもむだな譯。どれ、ちよつと誰ぞに聞いて見ようか。

ト門の内へはひらうとする時、門の内にて、

麥庵　若旦那、お危うござります。

トこれを聞き禮三郎思ひ入あつて、上手の庚申塚の後へ隱れる、流行唄になり、門の内より以前の麥庵貸提灯を提げて先に立ち主稅銜へ楊枝にて出來り、

主稅　いや、つい酒といふ奴は長くなり勝なもので、到頭とつぷり暮れてしまうた。

麥庵　若旦那、今日は大きに御馳走樣になりました、左樣なら唯今の一條は、何分どうかお含みなされて居て下されませ。

主稅　おゝ、それは委細承知いたして居る。

麥庵　さうして若旦那には、今晩はこれから何方へお出でござりますえ。

主稅　さうよ、今一杯やつたので又北廓へ引返したくなつた、どうだ貴公も一緒に附合はねえか。

麥庵　有難うございますが、今夜は據ろない用がございまして、深川まで參らねばなりませぬ。
主税　今から歩いて行くのか。
麥庵　堀から舟といたしませう。（ト躓き、）思ひの外醉ひました。
　ト この時懐中より袱紗包みの一卷を落す、主税取つて、
主税　麥庵、この一卷は何だ。
麥庵　こりやあ師匠から傳來の、鍼の傳書でございます。
主税　落さねえやうにするがいゝ。
麥庵　有難うございます。
　ト 懐へ入れる、此時庚申塚の蔭から以前の禮三郎出て、
禮三　あゝもし、お二人樣、ちよつとどうぞお待ちなされて下さりませ。
　トこれにて兩人振返り、
麥庵　待てとお言ひのは、わし達のことかえ。
禮三　へい、左樣でございます。
　ト 兩人こちらへ來り、主税禮三郎を見て、

主税　おゝ、貴様はさつきお行の松で、雨宿りをした町人ではないか。
禮三　左樣でござりまする。（ト下に居る。）
麥庵　さうして私を呼び留めたは、何ぞ用でもあつてかえ。
禮三　へい、お呼び留め申しましたは、外の事でもござりませぬが、ちよつと貴方に見てお貰ひ申したいものがござりまして、
麥庵　はゝあ、醫者を見掛けて見て貰ひたいとは、お脈體でも伺ふのかな。
禮三　いえ、左樣な譯ではござりませぬ。（ト懷中より件の手紙の切端を出して、）もし、これにお覺えがござりますか。
ト出す、麥庵取つて開き見て、
麥庵　なるほど、こりやあ、病家先きから私の所へ賴んで來た、見覺えのある手紙の切端、これがどうぞしたのかえ。
禮三　覺えがあるとおつしやれば、お尋ね申さにやなりませぬ。（トきつと言ふ。）
麥庵　なんと。
禮三　先刻思はぬ夕立にお行の松の雨宿り、一緒になつたはわたくしの主人や娘出入の町人、言はゞ内

輪も同じこと、他人といふは貴方お二人樣より外にはなく、一樹の蔭のもやひ宿、その内雨も上つてしまひ、皆それ〴〵に別れまして、跡に殘つたわたくしが所持してをつた短刀の包みが見えぬは不思議と存じ、四邊を捜せば落ち散る手紙、たしかに貴所のお名前と存じたゆゑにわざわざと。

麥庵 はゝあ、それぢやあ先刻お行の松で雨宿りをした其の跡に、私が手紙が落ちて居たゆゑ、態々屆けてくんなすつたとか、それは御親切に有難うござります。

ト此の白のうちに麥庵扱はといふ思入あつて、主税と頷き合ひ、袖から袖へ短刀の包みを主税へ渡すことよろしく、

禮三 あゝもし〳〵、左樣ではござりませぬ。

麥庵 むゝ、左樣でないとは、どういふ譯だえ。

禮三 そのわたくしの所持いたした包みが紛失いたした跡に、殘つて居たはこの手紙、それゆゑお跡を尋ねまして。

麥庵 むゝ、それぢやあ何かえ、反故同然の此の手紙が、お前が持つて居たといふ短刀とやらが失つた跡にひよつくり落ちて居たゆゑ、それで此の手紙を證據にして、己が盗んだといふのだな。

禮三　いえ、左樣ではござりませぬが、思ひ違ひといふことは世間にいくらもある事ゆゑ、もしや貴方が御自分のお包みと思ひ違へ、お持ちなされはせぬかと存じて。

麥庵　默れ〳〵、えゝ默りやあがれ、何だ、思ひ違ひをしやあしねえか、べらぼうめ、なんぼ年を取つたからといつて、思ひ違ひをするやうな未だ耄碌はしねえつもりだ、年が年中生業に何百人と限りのねえ人の命を預つて、生身へ打ち込む鍼術も阿吽の呼吸の狂はずして譽れを取つた劍澤、鍼の病の療治から鬼麥庵と言はれちやあ、人に知られた此の醫者が、そんな愚な料簡で浮世渡りが出來るものかえ。

主税　これさ〳〵麥庵老、何もそんなに腹を立て身の上話しを致したとて、それにて彼れが疑念を晴らし歸ると申す譯にも行くまい、又其方もあの者に疑ひ受けしが身の不祥ゆゑ、此の場の潔白立つるには、身の廻りから懷中を改めさするが何よりめんばれ。

麥庵　なるほど、こりやあ、さうでござりました。これ若いの、それ程貴樣が此のおれを疑はしいと思ふなら、今この旦那を證人に己が天窓の天邊から、足の爪先きに至る迄悉皆改めるがいゝ、其の替りにやあ、もしも亦身ぐるみすつかり改めて、その短刀の出ねえ日にやあ、言掛けをした手前ゆゑ、たゞは置かねえからさう思へ。

禮三　へい、それはもうわたくしが粗相を申したことなれば、

麥庵　よし、さう約束が極つたら、遠慮はねえから改めるがいゝ。

禮三　左様なら、失禮ながら疑念ばらしを致すでござりませう。

トこれにて麥庵、下手の梅の枝へ提灯を掛け、自由になつて改めさせる、この内主税懐中より短刀を出し、上手の庚申塚の中へ隠す、禮三郎いろ〳〵と改めて短刀の見えぬ思入。

麥庵　どうだあつたか、ありやしめえがな。

主税　そつちになけりやあ、もしも亦身共の方へ紛れ込んで居るかも知れぬ、何も念晴らしの爲なれば、身が懐中も改めてくりやれ。

禮三　失禮ではござりまするが、あの短刀のない時は主人の家にも拘る大事、御所持でないは知れては居れど、諦めの爲めでござりますれば、どうぞ改めさせて下さりませ。

主税　大事の品なら猶以てぢや、遠慮に及ばぬ改め見やれ。

禮三　左様なら、御免下さりませ。

トこれより主税の方をあちこち改め見て、短刀の見えぬ思入。

麥庵　どうだ、そつちにあつたか。

禮三　へ、へい。(ト蹲る。)

麥庵　何處にあつた、ドウ見せろ。

禮三　いえなに、ありは致しませぬ。

主税　どうぢや、何處にもあるまいがな。

禮三　へい、御免なされて下さりませ。

ト手を突いて詫びる、これにて麥庵禮三郎の襟上を取つて引倒し、

麥庵　さあ、約束通りだ。うぬ、どうするか見やあがれ。

禮三　あゝもし、どうぞ御免なされて下さりませ。

麥庵　何だ、御免なせえだ、これ御免なせえで事が濟むと思やあがるか、うぬがやうなむやみな奴に何を言つても無駄だから、今まで何も言はずに居たが、さつきの雨に降籠められ、止むのを待つが待ち久しく、一服やつた其の時に詰つた煙管の脂掃除に遣つた反故の切れ端が、落ちて居たのをとつこに取り、よくも正直正統な己に言掛けしやあがつたな。いゝわ、この腹癒せにやあうぬが着物を、煙管掃除の反故のやうに、ずた〳〵にするからさう思やあがれ。

ト麥庵禮三郎を打擲なす。是にて着附ずた〳〵になる、此の折麥庵一巻を落す、主税は庚申塚より隱

せし短刀を出し懐中なし、

主税　こりや／＼麥庵、身共も疑ひ受けたれば、少々ばかり助けて遣はさう。

麥庵　さあ、御遠慮はねえから、御存分になさりませ。

ト　これにて主税禮三郎を引倒し、足にて踏み躙り、

主税　こりやヤイ町人、よく承はれ、これなる連の麥庵はな町家に住ふ醫者なれども、假令浪人いたしても大小腰にたばさめば人の上たる侍ぢやぞよ、其の侍たる某に無禮を申すのみならず、懐中までを手籠みになし、詫びたばかりで此の分に濟まうと思ふか不埒者め、申し掛けをばひろいだ返報、以後の見せしめ、かう／＼／＼。（ト散々に打擲なし、）いつそのことに。

ト　刀の柄に手を掛けるを麥庵留めて、

麥庵　あゝもし若旦那、もう此のくれえにくらはしたら、何も後生でござりますから命ばかりは助けておやんなせえ、薄々聞きやあ此の野郎は、先刻見掛けた女太夫とくッついて居やあがるといふ事ゆゑ、言はゞ畜生同様な奴を御成敗なされますと、却つてお刀の穢れでござりませう。

主税　（思ひ入あつて、）如何さま、申さば刀の穢れ、然らば其方の詞に免じ命ばかりは助けてくれう、ええ、これ、命冥加の素町人めが。（トきつと言ふ。）

麥庵　左樣なら私は遠道を控へてをりますから、遲くなりませぬうち出掛けたうござります。

主税　おゝ、さうであつた、然らば直に同道いたさう。

ト是れにて麥庵梅の枝へ掛けし提灯を取りて先に立ち兩人花道へ行く。この内禮三郎身體の痛む思入にて起上り、花道をきつと見て、

禮三　あゝこれ、身の過りに手出しもせず、詫びる禮三を此樣に、打ち打擲をするのみか、着類までをもずた〳〵に。思へば〳〵。（ト無念の思入。）

麥庵　まだ言分があるといふのか。

禮三　いえなに、ありは致しませぬ。

ト主税懷よりちよつと短刀を出し、麥庵と顏見合せ旨いといふ思入にて、

麥庵　いや、馬鹿な野郎もあるものだなあ。

ト流行唄になり兩人花道へはひる、禮三郎身體の痛む思入にて、花道を見込みどうとなる、此の時本釣鐘を打込む。

禮三　どう思案を仕直しても、あの時一つに居た内にて盜みをしようといふやうな惡い心の人とては、藥にしたくも一人もなし、見當といふは何でもあの醫者、ないとはいへど二人の内何れか隱し持

てゞあらう、とはいへ今の様子では所詮たゞでは渡さぬ短刀、あれが無ければ此の儘に生きて家へは歸られぬ、とても命を捨てるなら跡追つ掛けて今一應詮議をなして、おゝ、さうだ。

ト思ひ込んだるこなしにて立上り、誂への合方にて花道へ行く。この時花道より以前の半兵衞出來り、花道よき所にて禮三郎に行き當り、

半兵 ちつと心の急きますもの、御免なされて下さりませ。（ト逸散に花道へ走りはひる。）や、さういふお前は禮三さんぢやあねえか。あゝ雲を霞と駈けていつたが、何か仔細のありさうな事だ。（ト舞臺へ來り、）鶯春亭に仲間の者が呑んでゐると聞いたゆゑ、顏を出しに歸つて來たが、どうで歸りは北廓だらう。（ト以前の麥庵が落せし一卷を拾ひ取り、）や、こりや何だ、卷物が落ちて居たが、お經でもねえやうだ。

ト星明りにすかし見る、此の內麥庵下手より出來り、

麥庵 たしか爰等へ落した筈だが、

ト搜す心にて半兵衞に行當る、半兵衞びつくりして拂ひ退け、一卷を懷へ入れ左右より窺ふ、時の鐘きびしく忍び三重模樣の合方、西の下にて通り神樂を打ちちよつと立廻り、此の時上手より以前のお靜三味線を抱へ走り出で此の中へはひり、三人ダンマリ模樣の立廻りあつて、お靜花道へ脫れ行

く、舞臺の麥庵一腰を抜きかける、これを半兵衛留るを木の頭、麥庵振拂つて引つぱりの見得、お靜逸散に花道へはひろ、此の模様早き合方通り神樂にてよろしく、

ひやうし　幕

ト波の音のつなぎにて引返す。

（大川橋の場）――本舞臺三間の間　後　黒幕、正面　晝心に飾りし丸物の橋、上の方に寄席の行燈、これへ麗々亭柳橋おこよ源之丞讀切りといふビラ、下の方柳の立木、總て大川橋袂の模様、浪の音にて道具留る。と浪の音打上げ、唄淨瑠璃になり、花道より以前の禮三郎、窶れし裝思案の思入にて出る。後より法華傳二雪駄直し好みの打扮、笠を被り道具笊を持ち出來り、禮三郎の體を見てなかしな風だといふこなしあつて、花道にて下に居て窺ふ、禮三郎思入あつて、

禮三　とかうする内もう爰は、冥土へ近き吾妻橋、あ、思ひ廻せば廻すほど濟まぬ此の身の色狂ひ、ただ者でもあることか、選りに選つて小屋者に、不圖馴染んだが縁となり、二人の仲へ子までなし、引くに引かれず七年越しお主の目をば掠めたる、其の天罰が廻り來て庵崎様へ納めねばならぬ大事の短刀を持つて居ながら、大膽にもお使ひ先きの色狂ひ、其の場で逢ひし災難になほ〳〵濟まぬ此の禮三、所詮生きては居られぬゆゑ、死なうと覺悟極めても、たゞ不便なはろく〳〵に父親

さへも知らぬ悴、せめて名殘りにたゞ一目逢うてやり度く思へども、今宵につゞまる切羽ゆゑ、たゞ何事もこれまでの緣と思うて、これお靜、坊主がことを賴んだぞよ。

ト又唄淨瑠璃になり、禮三郎揚幕の方を伏拜み舞臺へ來る、これにて傳二も舞臺へ來り思入あつて、下手の柳の木の蔭へ小隱れする、禮三郎これに心づかず石を拾ひ袂へ入れることよろしくあつて、上手の行燈のビラを見て、

あれに掛けたる行燈の下に張りたる下ビラは、本所邊の歷々が女太夫を見初めたる、人情咄の柳橋が得意のおこよ源之丞、丁度今宵が讀切りと張り出しあるは兩親の、恥を此の身に思ひ知る言はず語らぬ御異見と思ひ當れば當るほど濟まぬ此の身の不孝をも、約束事と親父樣お許しなされて下さりませ、人の目褄にかゝらぬ內少しも早く、南無阿彌陀佛。

ト禮三郎橋の上へあがり飛び込まうとする、この內傳二、柳の木の蔭より出で窺ひ居て、

傳二　あゝこれ待つた、待ちなせえ。

禮三　あゝ、もし、何方樣かは存じませぬが、どうぞお見脫しなされて下さりませ。

傳二　いゝや見脫すことは出來ねえ。おい禮三さん、まあ下に居て下せえ。

禮三　さういふ聲は。

傳二　あい、お靜の親の傳二でござります。

禮三　えゝ。

トびつくり思入、兩人舞臺へ下り下に居る。

傳二　今日仕事から歸りがけ、雪の下の廣小路でちらりと見掛けた後姿、はて、似た人と近寄つて、見れば似た筈やつぱりお前、をかしな素振と思ふから、知れねえやうに跡をつけ、お前が死なうといふ譯も、あらまし後で聞きましたが、そりやあお前の口元思案、主人の物を盜まれて言譯なさに身を投げてお前は言譯立つにもせよ、跡に殘つた親御達、又二つにやあ七年越し、馴れ馴染んだ其の上で子までなしたる私が娘、一人の子をば置土産にお前に先へ行かれて見なせえ、跡の歎きはどんなか知れねえ、三方四方へ歎きをば掛けるもお前の心一つ、爰の所を考へて死なうといふは止めにして、其の身を落して生延はり、刀とやらを尋ね出し主人へ歸參の時節をば、どうぞ待つ氣になつて下せえ。

禮三　さあ、其の御異見は有難けれど、どうも死なねば御主人へ言譯立たぬ此の禮三、それぢやによつて此の場において。

傳二　これさ、まだそんなに死にたがるか、假令お前が死んだとて、取られた刀が出るといふ譯でもな

禮三 ければ生き延はり、詮議をしたがいゝぢやあねえか。

傳二 成程、お前樣のおつしやる通り、今わたくしが死んだとて取られましたる短刀の戻るといふ譯ではなし、三方四方へ歎きをば掛けねばならぬ仕儀なれば、一旦死する此の身をば生延はりて短刀の行方を搜すでござりませう。

禮三 さうだ〳〵、何でも其の氣になつてくれにやあいけません。さう事が極つたらまあ何にしろ橋の際、爰で話も出來にくい、家へ歸つてゆつくり相談、

傳二 左樣なれば兎も角も、お家へ參るといたしませう。

禮三 まあ家へ行つて見なせえ、あの坊主めが悦んで、父さん〳〵と慕はれた日にやあ、死なれる所の譯ぢやねえ。

傳二 いやもう、いろ〳〵と、又坊主めが御丹精になりまして、有難うござりまする。

禮三 世の中に孫ほど可愛いものはねえと、斯うして仕事に出ましても、坊主が待つて居ると思ふと、それぱつかりが樂しみだ。

傳二 左樣なら、そろ〳〵と出かけると致しませう。

禮三 そんなら出かけませう。（ト禮三郎の裝を見て、）おゝ、何處もかもずた〳〵だ、まあ〳〵かりと支

度をしなせえ。

禮三　どれ、支度をば致しませう。

ト唄淨瑠璃になり、花道より奧州屋の娘お早出來り花道にて、

お早　さつき丁稚の萬吉が迎ひに來る途中にて、あの禮三に逢うた所菊一文字の短刀を人に盜まれ、父樣に言譯が無いゆゑ身を投げて死ぬとのこと、禮三に添はれぬことならば生きて居ても詮ない此の身、共々死なうと覺悟して田川屋から拔けては來たが、父樣や母樣に御恩も送らず、先立つ不孝濟まぬことではあるけれど、どうぞお許しなされて下さりませいな。

ト揚幕の方を拜む、舞臺の兩人はよろしく身支度なし、

禮三　あ、思へば此の身の短氣から、死なうと覺悟極めたれど、

お早　聞けば禮三も此の川へ、身を投げ死にやると聞くからは、

傳二　これが一生短刀の、行方の知れぬといふではなし、

お早　假令死んでもこの川の、同じ流れに沈む身の、

禮三　明日にも知れるその時は、

お早　此の身の大事、少しも早く、

傳二　内へ歸つて何かはゆつくり、

お早　人の見ぬ間に、

禮三　そんならこれから、

お早　さうぢや／＼。

ト三人心々のセリフよろしくあつて、又唄淨瑠璃になり、兩人は花道へ、お早は舞臺へかゝり花道附際にて擦れ違ふ、禮三郎お早互に顏を背ける、傳二お早を見てをかしな風だといふ思入よろしく、この内お早は舞臺へ來り、橋の上へあがる。

傳二　をかしな風だが、

お早　南無阿彌陀佛。

ト橋の上手へ飛込む、ドンと水の音、禮三郎思入あつて、

禮三　はゝあ、やつぱり身投げか、はて、氣味の惡い。

傳二　それ見なせえ、すんでにお前もあゝなる所だ。

禮三　でも、怖しい。

ト身ぶるひするを、道具がはりの知せ、

傳二　さあ、行きませう。
ト浪の音佃にて兩人花道へはひる。とやはり右の鳴物にて橋の下より小舟に以前の麥庵乘り、船頭首尾の松、艪を押してゐる見得、外廻しにて舞臺眞中へ出で、

松　やいく、どうするのだく、身投げの方ばかり見て居やあがつて、一本つッぱらねえかといふに、どぢな野郎だ、取楫よ。（トやはり艪を押して居る。）

麥庵　船頭さん、今の身投げは娘ださうぢやあねえか。

松　あい、何處のかいゝお孃さんらしいといふことでござりますが、情人の間違ひとでもいふやうなことでござりませう。

麥庵　さうかえ、初春早々可愛さうに何處の娘か知らねえが、助けてやりてえものだ。
ト浪の音にて舟の前の切穴より、以前のお早ずつぷり濡れて出る。

松　それ、其處へ浮きましたぜ。

麥庵　どつこい、しめた。
ト手早くお早を捉へ、引上げて船の內へ入れる。

松　もし、どうでござります、助かりませうかね。

麥庵　はて、生業柄だ文句は入らねえ。

松　ほんにお前さんはお醫者樣だッけ、それぢやあ何にしろ、そこらへ附けませう。

ト船頭棹を遣つて船を晝心にする、此の內麥庵お早を介抱することあつて、よく〳〵顏をみてびつくりなし、

麥庵　こりやあ、先刻の雨宿りに、お行の松で見掛けた娘。

松　はゝあ、それぢやあお前さんが知つて居る娘でござりますかえ。

麥庵　（思入あつて、）此奴は一番金の蔓に。

松　もし、當りますよ。

ト棹を突張る、これにて麥庵船の着いたる心にて、ちよつと居直るを木の頭、

麥庵　いゝ辻占だ。

トこれをきざみ、麥庵お早を介抱する。松は棹を遣ふ、此の仕組よろしく佃にて、

ひやうし　幕

二幕目

田圃非人小屋の場

（役名——非人法華傳二、奥州屋手代禮三郎、庵崎の若黨與惣兵衛、丁稚萬吉。傳二娘小町お靜、奥州屋女房お民、其他。）

（田圃非人小屋の場）——本舞臺三間の間、藁屋根の葺下し、丸物青梅丸太の柱、反故張りの欄間、これへ身延山、中山、堀の内などの日蓮宗のお札をだいぶ張り、上手障子屋體、正面上手に古びたる金襖と戀しくばを書きたる障子の張物を建てたる襖、眞中反故張りの障子を二枚立て、下手芝居の番附で腰張りをしたる鼠壁、これへ花笠枝木など小道具を掛けてあり、此の脇に三味線を掛け、よき所に太鼓、鼓を置き、舞臺下手少し後へ下て古板葺の下家、竹の中窓、鼠壁臺所の心、いつもの所丸太の門口竹の枝折戸、これより續いて篠を結込みたる竹垣、この内へ振よき梅の立木、垣根の外下水の心にて少し小高き草土手、これへ板の橋を渡し、この下手黒御簾の所忍び返しの附きたる黒塀、この内に風雅なる二階家ありて障子閉切りあり、總て大磯廓の後乞食小屋の體。爰に非人龜吉やつし裝に萌葱の風呂敷を素袍のやうに肩にかけ扇を持ちゐる、非人鶴松、矢張りやつし裝にて立ちかゝりゐる、非人千代飛八奴頭豆藏の打扮にて門口の外にて、子持筋の銀襖を出し清元の觸書にて破れを繕つてゐる見得、幕の内にて龜吉「賴朝參詣」と呼ぶ、これをキツカケに大拍子へ鳥追唄をかぶせよろしく幕明くと。龜吉舞臺の眞中に腰を掛け、

龜吉　日々毎てうらい、ふそうしてかんほんするゐ。（ト眞面目に言ふ、門口にて、）

千代　はあ〳〵。

鶴松　えゝ何をぬかすのだ、今稽古の最中だ、早く襖でも張つてしまへ。

龜吉　稽古の時に可笑味がいるものかえ。

千代　それでも、つい口癖になつたのだ。

龜吉　やかましい、そつちを向いてゐろ。（ト又眞面目になつて、）日々毎てうらいふそうしてかんぽんする、鎌倉の諸大名相詰めたかやい。

鶴松　はあ。（ト短く言ふ。）

千代　おい〳〵、さう短く言つちやあいけねえ、はあ――と長くいふのだ、不器用な男だぜ。

鶴松　えゝ、又口を出しやあがらあ。

龜吉　ちッぽけな形をしやあがつて、大きな者をへこましやあがる。

千代　あんまり大きいから凹ましたら、丁度いゝ加減になるだらう。

鶴松　又口の減らねえ事をぬかしやあがるか、厄拂ひめが。（ト千代飛八の頭を張る。）

千代　あゝ痛え、あんまり厄拂ひ〳〵と安くするものぢやあねえ、これでも厄拂ひぢやあ新作ものを拵へる男だぜ。

鶴松　又こましやくれたことをぬかしやあがらあ、新作があるならやつて見ろ。

千代　やらなくてどうするものだ。

龜吉　きつとやれるか。

千代　やつて見せるから驚きなさんなよ。

兩人　さあ〳〵やれ〳〵。(ト急いて言ふ。)

千代　えへん。「あゝら目出度いな〳〵、目出度いことで拂ひましよ、二丁目役者紋盡しにて拂ひましよ、一夜明ければ賑はしく、一トごに二タご三がいの松をお門へ橘は、禮者のおいでを松皮菱、寶結びの七福は二日の夢に三ツ銀杏、屠蘇の銚子の鶴の丸、冷酒もすんでこれからは先づかん菊の酒機嫌、お顏の色も四ツ紅葉、定めはひよろ〳〵千鳥足、かゝる目出度いその所へ、子舞の鬼が矢車の矢よりも早く飛んで出で、妨げなさんとする所を此の厄拂ひが搔い摑み、目よりも高く差上げて役者盡しのことなれば、西の海とは思へども西の棧敷を打越して引舟へさらり。」どうだ恐れ入つたか。

兩人　なるほど、此奴ア口まめな奴だ。

千代　これでも去年の年越しにやあ、錢を三百と豆を五合五勺稼いだ、お前達よりやあよつぽど頭の手

助けになるよ。

鶴松　此奴あ口から先へ生れやアがつたと見えてよくませたことをぬかしやあがらあ。

ト又千代飛八の頭をはる。

千代　あゝ痛え、又ぶつたな、さうぽん／＼張るものぢやあねえぜ、頭は天庭といつて、神様がござるぜ。

龜吉　えゝ又何處でか聞ッかぢつて來やあがつて、高慢なことを言やあがるぜ。

千代　何處で聞くものか、頭が說法の話をした時に聞いておいたのだ。何でも知らぬことがあるなら聞きに來さッし、あゝ世話がやけるの。

鶴松　利いた風なことをぬかすな。

千代　ぬかすまいと思つても、腹からぷッ／＼と込上げて來るのだ。

龜吉　まだぬかしやあがるか。（トまた頭を張る。）

千代　おい／＼、おれも張物をして居れば一人前の仕事だぜ、そんなに安くするものぢやあねえよ。

龜吉　えゝ張物も凄じい、此の張りざまは何だ。

鶴松　さうして襖の繕ひに、こんな大きな反故を張りやがつて、ざまを見ろ。

千代　さう叱んなさんな、これもおれが働きだ。

兩人　何が働きだ。

千代　この紙の高い時節に紙をついやしてはならないから、今隣りの塀の側にいゝ反故が落ちてあつたから、拾つて張つたのだ。

龜吉　なに、反故を拾つた、まだ手前は紙屑拾ひの癖が失せねえな、さうしてこりやあ何だ。

千代　お前讀めるかえ。

龜吉　讀めなくつてどうするものだ。

千代　讀めるなら讀んで見ねえ。（ト千代飛八襖を出す。）

龜吉　えゝ何だ、淨瑠璃名題――

鶴松　淨瑠璃太夫清元延壽太夫、三味線――相勤めまする役人、

龜吉　市村家橘、中村仲太郎、市川新車、澤村田之助、いよ〳〵この所淨瑠璃始まり、

千代　其の爲め、口上左様。

兩人　又口を出しやあがる。

トやはり鳥追通り神樂になり、千代飛八を追廻す、此の時奥より傳二、少し更けたる打扮にて木綿や

つし、染返しの半纏にて辻番と正本を持ち出來り、此の體を見て、

傳二　え丶又奴めが惡ふざけをしやあがるか。手前達も大人氣ねえ、子供を相手にする事があるものか。

鶴松　頭、聞いて下さいまし、小さな形をしやあがつて、大人そばえをしやあがるから、つい腹が立ちますのさ。

龜吉　このくれえ口の達者な奴といふが、あるものぢやあござりません。

千代　口の達者は、此の生業ぢやあ座頭だ。

兩人　又喋りやあがる。

龜吉　頭ごの通りでござりやすわな。

傳二　無口な奴もしやうがねえが、あんまり手前は餘計なことをぬかすからだ。もう好い加減に默つて居ろ。

千代　あい。(ト不承々々に後へさがる。)

傳二　さうして手前達も明日から狂言の替りだ。ちつと身に染みて稽古でもするがい丶わ、ふざけてるるが能ぢやねえぜ。

龜吉　なに、ふざけたといふ譯ぢやあござりやせん。此の男が舞臺の事が新米だから、日々毎てうらい

と稽古をしてゐると、此奴めが口を出しやあがるから、立つて騒いだのでござりやす。

鶴松　なか〳〵遊んで居たのぢやあござりやせん。

傳二　まあ〳〵、そんならそれで好いが、その稽古はいつでも出來るわ。明日新幕を出さにやあならねえ、手前達二人は饗應の白は覺えたか。

龜吉　はい、あらましは覺えやした。

傳二　あらましで行けるものか。鶴松手前は大役だ、光秀は好からうな。

鶴松　はい、可なりようござりやす。

千代　へゝ、ざまあ見やあがれ。可なりで役に立つものか。（ト前へ出る。）

龜吉　えゝ、又口を出しやあがるか。（ト頭を張る。）

千代　オツト、しまつた。（ト口を押へて後へ下る。）

傳二　さあ〳〵、おれが正本を控へてゐるから、一遍やつて見ろ。

龜吉　はい〳〵。（ト前へ出る。）

傳二　えゝ、そんな風呂敷を取つてしまへ。

龜吉　はい。（トあわてゝ風呂敷を取る。）

傳二　手前も肩衣を取らねえか。
鶴松　はい〳〵。（ト肩衣を取る。）
千代　頭にあつちやあ意氣地はなしだ。
龜吉　又出やあがる。
千代　おツと、頭だ。
ト頭を抱へて後へさがる。傳二は木綿の座蒲團の上へ住ひ、前へ行火を置き、其の上へ正本を載せる。
傳二　さあ〳〵、こゝへ來てしつかりとやれ。今日は立つて見ろ。
兩人　あい〳〵。
ト宜しく居竝ぶ。傳二は正本を開く、この內小屋の稽古唄の合方になり、奧より禮三郎少し窶れたる好みの鬘、着流し、意氣なる町人の打扮にて出來り、
禮三　これは皆さん、新幕のお稽古でござりますかね。
傳二　おゝ禮三さん、お前も芝居は好きだと言ひなすつたが、饗應の場の眉間割の所は、ちつとは覺えて居なさるね。
禮三　いえ、私も好きな道でござりますから、二三度見ましたが、人がするのを見ますとちつとは分り

ますが、斯ういふ鹽梅といふ、仕打はどうも出來ませぬ。

龜吉　なあに禮三さんなんぞは器用だから、きつと旨いに違ひないのさ。

鶴松　ちつと遣つて御覽なさい。よつぽど面白うござりやす。

龜吉　此の狂言の替りには、山へ一幕助けに出ておくんなさい。

鶴松　どうして／＼、禮三さんに出られてたまるものか、お茶屋の姐さんたちが、みんな氣まぐれを起さあな。

龜吉　なるほど、こいつあ山の相場が狂ふに違えねえ。

千代　禮三さんぢやあ、山の姐さんが浮れるだらうが、お前方ぢやあ乳母さんもむづかしい。

龜吉　えゝ、又四文と出やあがる。

傳二　これさ、手前達も餘計な口を利かねえで、身に染みて稽古でもしろえ。

鶴松　はい／＼、もし禮三さん、時々は何ぞ敎へておくんなさい。

龜吉　どうぞ、ちつと好い型をお賴み申します。

禮三　いやもうさう言はれちやあ面目ないが、わたくしも狂言ぢやあ何時でも店をしくぢつたものさ。

兩人　なるほど、さうでござりやせう。

ト捨ぜりふを言つてゐる。やはり右の鳴物にて奥よりお靜、さらげの島田好みの鬘、着附、前垂掛け
襷を帶へ挾み、土瓶と茶碗を持ち出來り、

お靜　さあ〳〵父さん、お茶がはひりましたわいなあ。

傳二　おゝお靜か、坊主はどうした。

お靜　はい、今中田圃へお友達と遊びに行きましたわいなあ。

傳二　さうか、溝へでも落ちねえやうに、氣を附けてやるがいゝぜ。

お靜　あい。よう言附けてやりましたわいなあ。

鶴松　もし、お靜さん、今禮三さんに勸めまして、

龜吉　この好男子で遊んでゐるのも勿體ねえから、ちつと山へ出たらよからうと言つてゐる所さ、然し
わつち等が氣揉みの種さね。

お靜　ぬしを山へ出したら、お前方よりわたしが氣が揉めるわいなあ。禮三さんは山はおろか、とぼ口
へも出しはせぬわいなあ。

龜吉　なるほど、こりやあ尤もだ。

鶴松　氣が揉めの吉祥寺さね。

傳二　常談はさて置いて、ひよつと世間へ知れた日には第一がお店の恥、當分外へは出られぬ身の上、こいらは皆内輪だから別に隱しもしませぬが、妙な所へござつたのもこれも何か因緣づくだ、まあ、もうちつと我慢をなさるがいゝ。
禮三　いやも、ひよんなことからこゝへ來て、とんだ厄介になりました、我慢どころではござりませぬ、實に氣散じで好うござりまする。
傳二　あんまり左樣でもなからうが、これもみんな前生から斯うなり行くのが約束だ、あゝ南無妙法蓮華經。あゝあく、雜煮腹のせるか何だか氣が重くつて睡氣がさして來た。これ、手前達は今日刻限も遲いから場所を休んで、新幕の稽古をしんみりとするがいゝ。
お靜　ほんにそれが好うござんせう、奥で小道具や鳴物でも調べておかしやんせ。
龜吉　あいく、道具はあらまし好うござりやす。おい鶴公、ちつと鳴物でもやつておかうぢやあねえか。
鶴松　さうしようく、其の後でゆつくり本能寺を言合せよう。これ奴、手前は繕つた張物を内へ入れろ。
千代　おいく。（ト此の内千代飛八張物を内へ入れる。）

傳二　それぢやあ、おれは一寐入やらかすから、龜吉や、正本は手前に渡しておくぞ。

龜吉　あい／＼、わしがこれから狂言方と二役やりませう。

お靜　もし父さん、今わたしが搔卷をかけて上げるほどに、風引かぬやうにしなさんせえ。（ト行火を取つて）行火も後から持つて行くぞえ。

傳二　いや／＼、行火はおれが御持參としよう。やれ、南無妙法蓮華經。（ト行火を持つて立ち上り）禮三さん、お前はこゝでゆつくりと、水入らずで娘と二人、

禮三　え、

傳二　鼓の調べでも直して下さい。

禮三　はい／＼、畏りました。（ト有合ふ鼓を取り上げる。）

傳二　あゝ樂寐をするのも御利益だ。妙法蓮華經。（ト行火を持つて奥へはひる。）

お靜　お前方早く奥へ行かしやんせ。

龜吉　今日は場所を休んだから、しつかりと稽古をしようぜ。

鶴松　お芝居なら惣淩ひといふ所だ。

龜吉　さうよ／＼。そんなら禮三さん、

たもいつしかに、

お靜　二度が三度と度重なり、初手の內證も打忘れ、心で晴れて女夫ぢやと素人衆を大膽に、此方の人ぢや思ふうち、

禮三　到頭おぬしも子持となり、それから後は生業の出先きの用も手に附かず、坊主を見るのが樂しみに、一日逢はねば氣にかゝり、今日も明日もとうか〳〵と暮して居たる其の罰で、いつぞや屋敷の歸りがけ、お行の松の雨宿りで、大切なる短刀を盜み取られて御主人へ言譯なさに覺悟を極め、大川橋から身を投げて死なうとしたを後から、抱きとめられたは此方の父さん、振放しても放さばこそ、異見を言はれて其の氣になり、それから直ぐに此方へ來て、今では小屋の者同樣、さるもの日々に疎しとやらで、其の心配も二日たち三日と過ぎて月日も經ち、隣り知らずの別世界、今では結句氣散じで、おぬしと一つに斯うして居るが、よつぽど氣樂で樂しみよ。

お靜　あんまり樂しみでもござんすまい、わたしもあの折父さんがお前を連れて戾つた時は、どういふ譯か入譯が、知れねばわたしや氣にかゝり、苦勞のやうな嬉しいやうな片心でござんしたわいな。

禮三　その時わしが失つた菊一文字の短刀は元はといへば、此の禮三が實父の古主庵崎樣が、惡人共の計略で紛失なしたる彼の一品、どうか斯うして居る內によい手掛りの傳手を求め、尋ね出して庵

崎樣へあの短刀を差上げねば、親への不孝お主へ不忠、これが一つの苦勞ぢやわいの。

お靜　お前が此方へ來なさんして嬉しい事は嬉しいけれど、寶の知れぬ其の時は親御やお主へ濟まぬ譯、

禮三　一つ好ければ又一つ、

お靜　儘にならぬが浮世とは、

禮三　ても、よう言うた、

兩人　事ぢやなあ。

ト兩人よろしく思入、此の時管絃の頭を打ち込む。

禮三　えゝびつくりした、唐突に鳴物を始めたのか。

お靜　又本能寺の稽古ぢやわいなあ。

禮三　今のびつくりで、どうやら愚癡を忘れたやうだ。

お靜　ほんに、さうでござんすわいな。

トやはり右の鳴物にて花道より禮三郎の子千代松木綿の着附、附紐ばかりにて藁草履をはき春駒を持ち出來り、此の後より奥州屋女房お民、丸髷、商人の女房好みの打扮、庭崎の若黨與惣兵衛更けたる若黨好みの裝、後より丁稚萬吉風呂敷包を背負ひ出來り、花道にて、

千代　これ小母さん、わたしの家はあすこだよ。
お民　そんなら向うに見ゆるのが傳二どのゝ家かや、よう敎へてたもつたの。與惣兵衛どの向うの家ぢやさうなわいの。
與惣　左樣でござりまするか、これが三ツ兒に淺瀨でござりまするな。
萬吉　おいく、あの子、それぢやあ向うが乞食の家か。（ト大きく言ふ。）
お民　これはしたり、どうしたものぢや、其の樣なことをいふものではないぞや。
萬吉　それでも、田圃の乞食小屋だと言ひました。
お民　えゝも、默つて居やといふに、さ、與惣兵衛どの參りませう。
與惣　さゝ、お越しなされませ。
お民　さあくばうや、其方は先きへ行てたもや。
千代　あいく、（ト足早に本舞臺へ來り、門口をあけて內へはひり、）これ母さま、何處かの御新造樣にこんな好い物貰うたぞや。（ト見せる。）
お靜　わがみは何處へ行つて遊んで居やつた。おゝ、好い物をお貰ひ申しやつた。さうして其の御新造樣とおつしやるは。

トこの内お民、奥惣兵衛、丁稚の萬吉門口へ來るを、千代松見て、

千代　あれ、あの御新造樣に。

お靜　(門口へ思入あつて、お民を見て)これはまアあなた樣でござりまするか、結構な物を坊主めに、はい〳〵、有難うござりまする。(ト丁寧に禮を言ひ、萬吉を見て)や、お前はお見世の。

トびつくりする。

萬吉　やあ、鳥追のお靜さんだ、お上さん、爰の家だ〳〵。

トこれにてお靜間の惡き思入。禮三郎もこれを見てうろ〳〵して居る。お民こなしあつて、

お民　あこれ、お靜どのとやら、何も遠慮なものではない、わしは鎌倉の傳馬町で奧州屋の家内のものでござりまする。

お靜　そんなら、あなた樣が。

ト驚き、禮三郎と顏見合せる、禮三郎もびつくりして、

禮三　あの、お上樣がおいでなされましたか。(ト逃げようとするをお民見て)

お民　あこれ禮三郎、何も逃げるには及ばぬ、まあ落着いて居たが好いわいなう。

ト合方になり、禮三郎お靜顏見合せ、お靜は千代松の手を引き後へ下る、禮三郎はぢつと思入、お民、

與惣兵衛思入あつて、

さゝ、與惣兵衛どの、此方へおはひりなされませ。

與惣　先づ／＼お先きへ。

お民　左樣なら、御免なされませ。

トお民、與惣兵衛内へはひる、丁稚萬吉は兩人の履物を片寄せて内へはひり、彼方此方を見廻して、

萬吉　やあ、爰の家は乞食芝居だ。

ト大きく言ふ、お靜、禮三郎悄げたる思入、お民丁稚へ目交をして、

お民　これ。（ト抑へる、萬吉心附き、）

萬吉　何さ、光る唐紙があるから、定めて値が高からう。高直芝居だと言つたのだ。

トこれも間の惡き思入にて後へ下る。

與惣　（思入あつて、）忰、禮三郎、久しう逢ひませぬの。

禮三　（これにて顏をあげ與惣兵衛を見て、）や、貴方は親父樣、お聞及びの此の成行き、面目次第もござりませぬ。

お靜　そんなら貴方は、禮三さんの、

與惣　身腹分けたる實の悴、蔭ながら噂を聞きしに其許始め親御どのも、これまで段々悴が厄介、禮は詞に盡されませぬ。

お靜　勿體ない其お詞、左樣におつしやつて下さりますほど、お恥かしうござりまする、穴へも入りたうござりまする。

禮三　御主人樣のお目を偸み、斯かるしだらの其の上に御心配を掛けまして、何と詞もなき仕合せ、重ね重ねの不埓の段、御免なされて下さりませ。

お民　何のまあ其の言譯に及ぶこと、若い內は誰しもありがち、決して叱りはせぬ程に、まあ〱顏を上げやいなう。萬吉や其の包みを此處へ出しや。

萬吉　はい〱。（ト包みの中より菓子折を出す。お民受取りて）

お民　お靜どのとやら、これはさもしい物なれど、ほんのわしが土產のしるし、坊のお目覺にして下さんせ。（ト折を出す。）

お靜　これはまあ結構なものを有難うござりまする、坊主が悅ぶでござりませう。これ千代松、御新造樣にお禮を申しや。（ト千代松を前へ出す。）

千代　あい、御新造樣、有難うござりまする。（トお靜千代松の頭を押へて辭儀をさせる。）

お民　おゝ、おとなしい事わいの、失禮な事ながら場所柄にも似合ず人柄なこと、あ、目元なら口許なら、ほんに親子は、（ト お靜と禮三郞の顔を見て思入あつて、）ても、好い子ぢやなう。
ト與惣兵衞と顔見合せホロリと思入。
千代　母樣、此の菓子喰べてもよいのかや。
お靜　これはしたり行儀の惡い、其方は此のお菓子を、祖父樣に見せておぢや。
千代　あいく。
お民　おゝ、聞分けのよいことぢや。
ト千代松は折と春駒を持ち、いそくと奥へはひる。皆々よろしく思入。此の時知らせにつき、下手二階屋の障子を引拔く。と内に淸元連中羽織袴兩吟にて居並び、直に三勝の淨瑠璃になる。
〽此の廣い大阪に住所さへ長町と、言の葉草の露深きうらの凩吹きそらす、〽美濃屋と書きし目印の暖簾の文字は太けれど、細き煙のやせ世帶、
ト淨瑠璃の内、皆々こなし、お民思入あつて、
お民　もし、あの淨瑠璃は、何處で語るのでござんすえ。
お靜　はい、あれは隣の寮へ石町の太夫さんが來なんして、語つて居るのでござります。

お民　さうでござんすか、好い聲でござんすなあ。
萬吉　わしも清元は大好きさ、イヨ、石町の色男。
お民　えゝ、又喋るかいなう。
お靜　ほんに元氣な小僧さんでござりますわいなあ。
お民　これ萬吉や、わしはちつと爰の内に用があるゆゑ、其方は長谷の奥山へでも行つて遊んでおぢや。
萬吉　はい〳〵、此奴はがうぎなお許しだ、奥山へ行つたら玉子でも吹いて、錦繪をしめて來ようか。
ト門口へ出る。
お民　あゝこれ〳〵、又遊びに身を入れて隙取つてはならぬ、直に歸つて來るのぢやぞ。
萬吉　はい〳〵承知でござります。
トいそ〳〵として花道へはひる。禮三郎思入あつて、
禮三　親父樣といひお上樣、わざ〳〵今日おいでのありしは、定めて何ぞわたくし共に、
お靜　穢い汚ないこの家へ、お二人樣のお運びは、
禮三　何の御用で、
兩人　ござりまする。

お民　（ちつと思入あつて、）さいなう。わざ／＼二人で爰まで來たのは、
與惣　餘儀ない頼みがあつてのこと。
禮三　あの、わたくし共二人に、
與惣　如何にも、其方達二人のものへ。
兩人　其のお頼みとおつしやりますは、
お民　今語る三勝の、あの淨瑠璃が其方への頼み、
兩人　何とおつしやりまする。
お民　も、餘儀ない譯で、お前方二人の緣を。（ト思入。）
兩人　え。
お民　切つて貰はにやならぬわいなう。
兩人　えゝゝゝゝ。（トびつくりする。）
〽一夜流れの空夢も別れは惜しき人心、子までなしたる半七さん、炎の中にも暮さうが、別れといふ字は聞くにさへ胸に染々悲しうて、（トこの內皆々よろしくあつて、）
お民　さゝ二人のものが驚きは、尤もとも道理とも、切らるゝ其方が思ひより脫れぬ緣を切りに來た、

心の内の苦しみはどのやうにあらうぞいなう。たゞ斯うばかりでは合點が行くまい、筋を言はねば理が分らぬとやら、二人は元より與惣兵衞どのも聞き役にどうぞ聞いて下さりませ、（ト誂への合方になり、）禮三郎も知つての通り、あの奧州屋のお上樣が、過ぎ去られし其の跡へ、わしは雇ひのお針奉公、女の子の世話何やかや、男の手では成り難いと旦那樣のお情で跡へ直つたわしは二度添ひ、家のお早は娘とはいふものゝ先妻のお子なれば、わしが爲めには御主人同樣、もう年頃にもなつたゆゑ好い聟がねと諸々方々、あれのこれのと相談しても、娘は兎角厭ぢやとばかり、これには何ぞ樣子があらう、何か仔細のある事と、仲の好い彼のお杉に問はせて聞けば、厭のも道理、禮三郎に思ひを掛け彼れならねばといふとのこと、其方の事なら此方も望み、早速これなる與惣兵衞どのを、内へ招いで何かの談合、

與惣　いやも、其の節もとやかくと御親切なる御主人のお詞、當人の身も納まること、早速おゝと御返事して、段々樣子を聞く所、なあ申しお上樣、

お民　さ、此の座では言ひ難けれど、お前と深く言交し、小兒まで出來たと話を聞き、困つた事と思ふうち、この間お行の松で其方に逢うた歸りがけ、丁度食事時に田川屋で食事してゐる内に、菊一文字を盜まれて言譯なさに其方が死ぬと、小僧が歸つてわしへの話し、聞くと娘は庭口から何處

へ行つたか行方知れず、大方身でも投げはせぬかと所々方々を尋ぬるうち、案の定、大川橋から身を投げたを、折よくも劒澤麥庵といふ醫者殿に助けられ、これにも難儀なことがあつたが、漸う濟んで娘をば家へ連れて戻つた上、いろ〳〵異見もして見たれども、何をいつても世間見ず、禮三と女夫になられずば生きて居ぬと一途な料簡、可愛いものとは思へども、叱つて見ても賺しても思ひ込んだが娘の一筋、もしもの事でもあつた時は、旦那殿の祕藏の一人子、どのやうな悲しい目を見ようも知れず、中に立つたる此のわしが義理ある娘を粗略にしたと、戸の立てられぬ世間の口、少しは粹も知つて居る與惣兵衛どのも此のわしも、無理を承知で子まである二人が仲の縁切りに、佛いぢりも何處へやら、鬼になつて來たわいなう。

〽語るも涙聞くなみだ共に思ひの淵ならん、三勝は只だうろ〳〵と退くも苦しくいな舟の、いなとも言はず胸迫り、

トこの内お靜と禮三郎は切なき思入、お民はよろしくこなし、與惣兵衛前へ出て、

與惣　これ禮三、お靜どの、二人とも合點が行きましたか、此の私も序ぢやによつて、言はねばならぬ事がある。改めて言ふまでもなく、其方はおれの悴ながら貧に迫つて養ひ兼ね、しかも其方が七歳の年役にも立たぬ其方を奥州屋樣へお願ひ申して子飼の奉公、又此のおれは其の以前の御主人

ゆゑ入間の御家中庵崎様へ歸參を願ひ若黨奉公、よう爰を思うて見や、七歳の年から子飼となり手習ひ算盤、又夜々は實語敎、今川状迄習はせて成人なして二十年、今人並になつたのはこりや御主人の皆お蔭、よもや御恩を忘れはせまい、殊におれが御主人も不慮な事から御家は斷絶、今御子息の求女様は伊太八様と名を替へて、其の日の煙りも立ち兼ぬれば、其方の御恩の其の上に時折上つてお上様にお惠み受ける今の身の上、親子のものが大恩うけたお家のお娘御が命を捨てるとおつしやるを、よもや見殺しにはしやせまいな、これ禮三郞、しつかりと返事をせぬか。

ト禮三郞に冠せかけて言ふ。禮三郞はたゞ俯向いて居るゆゑ、

これ程いふに物言はぬは不承知か、よもや厭とは言はれまい、お上様の前では申し難い事ながら、今思ひ切つて一旦娘御のお命を取留めれば、又長い月日の其の内にはどうとも話の仕方もあらう。なうお靜どの、合點が行きましたか。一先づお主の家へ歸り、お早様と杯すりや、お靜どのを始め子供の養育何かや、そこはおれも侍ぢや、どんなことはさせぬほどに、切れにくからうが二人のもの。

お民　切ないわたしや與惣兵衛どのに、どうぞ義理を立てさせてたも、主が家來に手を下げて頼まにやならぬも浮世の義理、爰の道理を聞分けて、どうぞ得心して、

お民與惣　下されいなう。（ト兩人思入あつて言ふ。）

〽三勝取りつき、なう情なや五年この方馴れなじみ、子まで儲けていつしかに去年より今年は深うなり、今日は昨日にます思ひ、神や佛の御異見でも思ひ切る瀬のあらばこそ、母も涙に暮れながら、背撫でおろし撫で擦り、

ト此の內禮三郎、お靜口說模樣よろしくあつて、お民與惣兵衛もこれに搦んでよろしくこなし、

お民　其の悔みは尤もなれど、今いふ通りの譯なれば、

與惣　どうぞ緣を切つて下され、これ、汝も得心せにやならぬぞ。

禮三　お主と親の其の御異見、聞かねばならぬ譯なれど、

お靜　此の事ばかりはお二人樣、

禮三　どうぞ許して、

兩人　下さりませ。

トこれにてお民與惣兵衛思入あつて、

お民　もうよい、賴みませぬ、これ程言ふに聞分なくば、わしも義理を捨てねばならぬ。

與惣　かう一旦引分けようと、思つた心は武士の金鐵、こゝまゝさうかと歸られませぬ。

お民　もう此の上は、與惣兵衛どの、
與惣　覺悟は極めてをりまする。
二人　さうぢや。
　　ト　お民は懷より用意の剃刀を出し、與惣兵衛は一腰へ手を掛け死なうとする、兩人あわてゝ禮三郎は與惣兵衛、お靜はお民を留めて、
禮三　まあ〳〵待つて下さりませ。
お靜　どうぞお待ちなされて下さりませ。
お民　いや〳〵、此の事かなはぬ其の時は、死ぬると覺悟を極めたわたし等、
與惣　どの面さげてお家樣へ、言譯がならうぞ、其處放せ。
兩人　まあ〳〵、お待ち下さりませ。
二人　いや〳〵死ぬる、そこ放せ。
兩人　短氣をなされて下さりますな。（ト兩人取附いて留める。）
お民　そんなら、わし達二人の、
與惣　頼みを聞いて下さるか。

兩人　さあ、それは。

二人　但しは死なうか。

兩人　さあそれは。

二人　得心なるか。

兩人　さあ、

二人　さあ、

四人　さあ〳〵〳〵。

〽眼許うろ〳〵髮亂れ、わつとばかりのかこち事、眼も當てられぬ風情なり。

ト宜しくあつて、知せなしに清元連中を消す。

お民　どうぞ得心、

兩人　してたもひなう。

トこなしあつてきつと言ふ。この時奥にて、

傳二　其の御返事は、わたくしが致しませう。

ト忍ぶ戀路の合方紙砧になり、奥より以前の傳二、千代松を連れて出來り、兩人を見て下手へ住ひ、

辭儀をして、

へい〳〵、これはまあ、此の汚い所へ好うおいでゞございました。始終の樣子は一間の内で殘らず承はりましてございります。

お民　むゝ、そんならお前は、

與惣　此の家の御亭主。

傳二　へい、靜めが親の傳二と申すものでございます、先づ御挨拶は後での事、貴方方の思召しにも娘は兎もあれ、よい年した親父が承知で色狂ひ、徒ら事をさせるかとおさげすみも面目なうございますが、穢い汚ない世渡りを致しては居りますが、心の清い信者が證據日蓮樣かけまして決して卑劣は申しませぬ。まあわしが申します事、もう長文句は申しませぬ、早解りのするやうに小短く申しますが、モシどういふ事にか若い時から子供の緣が薄うございまして、出來るとは死に、出來るとは死に、あゝ、こいつアどうした譯だらう、前生に何か惡い事でもした其の報いで子緣がねえかと、それから田圃のお祖師樣へ百日が間日參を初めまして、どうぞ子供の育ちますやうにと一心不亂に願掛けを致しますと、モシお聞きなされませ、御利益は怖しいもので、其の百日の滿願の晩に、お祖師樣の御門前で赤兒の泣き聲がいたしまする、やれ捨子かと拾ひあげて見た

所が、何處の誰れと證もなく、よく〳〵見れば身裝は好し、古金襴の守りが添へてござりましたゆゑ、何でもこれは由緒ある人の胤だらう、然しこれもお祖師樣のお授けと、狐が寶珠を拾つたやうに内へ連れて戻つたが則ち此女でござりまする。それから身分不相應に藝も仕込み、手習させ、成人するに隨つて親には孝行、器量は好し、小町お靜と云はれる程私が自慢でござりましたが、其の内婆めは病死いたし、わしが手しほで大きくは致しましたが、生涯爰で果さすが實に不便に存じまして、根が素人の胤ゆゑにどうか始終は素人にしてやりたいと思つて居るうち、禮三殿と言交し子までなしたる二人が仲、只今のお話を存じませぬゆゑ、素人衆を男にもつて娘は大きに仕合せと、實は悦んで居りましたが段々との御樣子を、聞けば聞くほどお道理だらけ、假令娘や禮三殿がどの樣に申しませうとも、二人が仲を割きましてきつとあなたへ禮三殿を、お返し申すでござりまする。

ト思入あつて言ふ、お靜は傳二の側へ摺り寄つて、

お靜　モウシ父さん、お前はほんまに二人の仲を、

傳二　はて、どうも切れずばなるまいわえ。何ぼ可愛い娘でも義理にはどうでも替へられぬ。

お靜　そんならどうでも。

傳二　これ娘、素人衆に輪をかけて、一倍義理を立てねばならぬわえ。

　　トぢつと思入、お靜はハア、と泣き伏す。

お民　あんまり無慈悲な頼みなれど、

與惣　親父殿が請合うて得心させるとあるからは、

お民　私も安堵しましたわいなう。

傳二　然しなんぼ親がひでも、只今直とも參りませぬ、暫時が間お二人樣には。

お民　成程左樣でござりまする、そんなら其の内清正公樣へお參り申して參じませう。

與惣　それが好うござりませう、又何やかや話もござらう、何分ともに傳二どの、

傳二　そこはわしがお請合ひ申しました。

與惣　それにしても、あの小僧どのは、もう歸りさうなものでござるの。

お民　もうかれこれ歸る時分、一筋道の田圃なれば其處らできつと逢ひませうわいなあ。左樣なれば又後程、

傳二　お待ち申してをりまする。

　　ト此の内お民與惣兵衞は門口へ出て、

與惣　行つて參るでござりませう。
お民　さゝ、參りませう。(トはひる。)
　トやはり右の合方通り神樂にて兩人は思入あつて下手へはひる。傳二は後を見送りゐる。禮三郎、お靜顔見合せ、ホツと思入あつて、
お靜　もし、禮三さん、
禮三　お靜、
お靜　ひよんな事になつたわいなあ。(トお靜わつと泣き伏す。千代松お靜に縋り)
千代　これ母樣、お前は何で泣かつしやる、お前がそんなに泣かしやると、わしもどうやら悲しうなつたわいなう。(ト袖にて涙を拭ふ思入。)
お靜　おゝ尤もぢや、悲しうなるも道理ぢやわいなう、現在父御に別れるのぢやもの、これが泣かずに居られうかいなう。
　ト泣く、傳二此方へ來り、
傳二　えゝ又泣きをるか、其方達が泣くによつて坊主めがうろ〳〵するわえ、合せものは離れもの、死んだと思や事が濟むわ、未練な事を言ひをるな。

お靜　この悲しみを見るよりも、わたしや死んだが優しぢやわいなあ。

傳二　それが愚癡といふものぢや、おれだといつて何で別れさせたからう、どうか始終は素人にして爰の足をば洗はせようと、そればつかりがおれが願ひ、其の願ひも鵙となり、今段々の入譯を聞いてはどうも二人共、縁を切らずばなるまいわえ。

お靜　いえ〳〵わたしやどうあつても、切れる心はなけれども、わたしが切れぬといふ時は、禮三さんは一生涯、小屋の住居の果敢ない世渡り、

傳二　おゝさうだ〳〵。

お靜　今わたしと別るれば傳馬町の大店向き、奧州屋の旦那となり、わたし風情の身分では夢にも見られぬ立身出世、

傳二　さうとも〳〵。

お靜　わたしや思ひ切る程に、奧州屋へ歸らしやんして、その美しいお早さんと、夫婦に成つて下さんせ、お前が立派にならしやんすを、見るのが嬉しうござんすわいなあ。

ト喰しめて泣く、傳二も切なき思入、禮三郎こなしあつて、

禮三　これお靜、そりやあおぬしの愚癡といふもの、假令大家は愚なこと、公家高家から迎ひが來て、

どんな有德に暮らすとも過す浮世は同じこと、立身出世は望みでない、どんな貧苦に暮さうとも自分の好いた暮しをして、うぬのわれのが此方の望み、誰が何といはうとも此の坊主めの顔を見ては、どう引き放して行かれるものか。

傳二　これ禮三どの、それはお前の惡い料簡、いや〱それでは道が違ふ、そんな事言はしやつては、お主と親へ大不孝、おれも法華の信者ぢやが、何でもかでも好い道へ一人も多く導くが、わしが宗旨で說かれた通り、廣宣流布といふものぢや、あゝ南無妙法蓮華經、勿體ないことを言ふやうぢやが、此の間も法龍寺の御說法で三光院樣がおつしやつたにも、お祖師樣も前名を蓮長とおつしやつたげな、自ら日蓮と改めたまふも、父母樣の御法號をかたどつて、お名に附けられたといふ。これ以て親御への孝行どいふものぢや、それから一派をお弘めなされるに、薪水の行をなされて其の艱難といふものは、鎌倉では土の牢、龍の口はいふに及ばず、既に高祖大上人大難四ケ度、小難は數知れず、南無妙法蓮華經。

ト話に乘りが來て、辻番火鉢を叩き、說法のやうに言ふ、この時千代松幕明きの拍子木を持つて、

千代　南無妙法蓮華經々々。

ト頻りに拍子木を叩く、傳二心附いて、

傳二　いや、こりや坊主めが出來しをつた、あはゝゝゝ、あんまり話に實が入つて、とんだお說法をやらかした、おゝ其方は利口者だ、今に小母樣のお土産を遣りますぞ。（ト氣を替へて禮三郎に向ひ、）禮三殿、今の話の忠孝をよもや背きはさつしやるまい、お前が厭といふ日には、先刻もいうたお娘御の命づく、もしもの事があつた時は、このまゝ二人も安穩で女夫になつても居られまい、こが世上でいふ通り、義理は切ないものぢやわいなう。

ト思入あつて言ふ、禮三郎も尤もだといふ思入、お靜もこなしあつて、

お靜　わたしはそれゆゑ思ひ切り、別るゝ心になりましたわいなあ。

傳二　おゝ、いよ〳〵其方は得心したか。

お靜　あいなあ。（ト泣く。）

傳二　おゝ出來した〳〵、それでこそおれが娘、何でも思ひ切りが肝腎ぢや、禮三どの、娘でさへあの通り、其方もよもや違背はあるまい。

禮三　事を分けたるお前の詞、得心せずばなりますまい。

傳二　むゝ、出來た〳〵、それでわしが詞も立ち、親御達への義理も立つといふものぢや、二人とも得心の上からは、親御樣方の戻らぬ内、又再び逢はれねばゆつくり暇乞をしたがよい、おれは其の

内奥へ行て讀さしの方便品、お祖師樣へ上げねばならぬ。
ト立上り思入。此の時門口の梅へ鶯來て啼く。
お、、例の鶯が又梅へ來て囀りをるわえ、鳥類とはいひながら經讀鳥といふなれば、ほうほけきやうが一期の別れ、(ト又蛙鳴く。)
禮三　鶯も蛙も同じ歌仲間。
傳二　經讀むもあり、
お靜　たゞ啼くもあり、
ト お靜わつと泣伏す、傳二氣を替へる、又鶯笛。
傳二　あの鶯と掛合で、お經をあけて待ちませう。
ト唄になり、傳二思入あつて奥へはひる。これより誂への端唄の合方になり、此の内千代松禮三郎の膝を枕にしてすや〳〵と寐入つてゐる、禮三郎思入あつて、
禮三　これお靜、これを見や、父親に別るゝのも何にも知らずにすや〳〵と、實に子供は羨ましい、これがほんの神樣だなう。
お靜　成程さうでござんすなあ、つひぞお前が抱かぬ子が膝を離れず寐入つてゐるは、父親に今に別れ

ゐのを、蟲が知らすとやらでござんせうわいなあ。

禮三　成程言やればそんなものか、未練な事をいふやうだが、親父どのゝ義理詰めで今のやうにはいふものゝ、このまあ坊主の寐顏を見ては、何ぼ鬼になる氣でもどうも振り捨てちやあ行かれない、こりやもう思案を仕直して、いつそ此の家を、（ト駈落しようといふ思入）あゝ、まさかさうもなるまいかえ。

お靜　もし禮三さん、わたしやよう得心をしたゆゑに、どうぞ別れて下さんせいなあ。

禮三　それぢやあ、未練も殘さずに、

お靜　切れる心でござんすわいなあ。

禮三　（こなしあつて）むゝよく思ひ切つた、さうきつぱりといふからにやあ、此禮三が厭になつたな。

トきつといふ、お靜恨めしさうに禮三郎の顏をぢつと見て、

お靜　もし禮三さん、そりやお前情ないぞえ、切ない所を別るゝも、みんなお前を思へばこそ、彼方へ行けばお前は出世、わたしは一人此の小屋で坊を相手にさもしい暮し、一緒に居たいは山々なれど、浮世の義理に搦まれて據ろなく別れるわたし、愛想が盡きるくらゐなら、もし此の癪は、（ト禮三郎の手を取つて胸先を押させて、）おこらぬわいなあ。

ト是にて禮三郎不便といふ思入あつて、

禮三　その心とは知つては居れど愚癡の出るのも其方ゆゑだ、必ず惡く思つてくれるな、それぢやあ一旦別れた上、又その內にはどうかして二人を一緒に引き取つて、一つに居られる工風もあらうよ。

お靜　それはつかりを樂しみに、わたしや辛抱するわいなあ。

ト此の時寐入りたる千代松寐惚しこなしにて、

千代　母樣イなう〳〵。

ト起上る、お靜あわてゝ抱き上げて、

お靜　おゝ、目が覺めたか、好い子ぢや〳〵。(ト千代松を抱くと、又すや〳〵寐入る。)もし寐惚たのでござんすわいなあ。

禮三　何ぞ魘されたのであらう。風引かぬやうに、いゝいぶり附けてやるがいゝ。

お靜　あい〳〵、(ト千代松を抱いて立上りいゝいぶり附けながら。)ねんねこせ〳〵、ねんねが守は何處へいた。山を越えて里へいた。

ト宜しく唄ふ、この內禮三郎は後の襖を見て、

禮三　お靜あれを見や、あの襖は葛の葉の狂言の時使つた障子、戀しくば尋ね來て見よ和泉なると、作

つたものとはいひながら、畜類でさへ子別れにはあれ程心を殘すもの、まして可愛い其の坊主、殘して行くのは滿更にいゝ心持ぢやないものだなう。

お靜　ほんにさうでござんすわいなあ、あの葛の葉は狐でも尋ねて來いとの歌なれど、わたしは尋ね行く事もならぬは因果な小屋者ゆゑ、今別れるが一生の別れにならうも知れぬわいな。

ト又泣く。千代松の顏へ淚のかゝりしこなしにて、千代松目を覺し、

千代　母樣、こゝが冷たいわいなう。（ト顏へ指さして言ふ。）

お靜　堪忍しや〳〵、それで目が覺めたかいなう。

ト袖で顏を拭いてやる、禮三郎もぢつとこなしあつて、

禮三　これお靜、もう〳〵未練は互ひに止めて、いよ〳〵己は奥州屋のお家へこれから行くほどに、どうぞ父さんを大事にして、坊主に怪我をさせねえやうに。

お靜　あい〳〵、そりや如在なうするわいなあ。

千代　そんなら父さんは、何處へか行くのかえ。

お靜　あの、父さんはの、傳馬町といふ所の好いお家へお歸りなさんして、美しいよい母さんを持たしやんすのぢやわいなう。

千代　父さんが行くのなら、わしも一緒に行きたい。母樣お前も一緒に行かしやんせ。
お靜（これにて切なき思入あつて、）これ、坊や、一緒に行かれる位なら、此の悲しみはせぬわいなあ。
千代　そんなら、一緒に行ては惡いかえ。
お靜　おいなう、これから外で逢うても、父さんとは言はれぬぞや。
千代　そんならもう、父さんとは言はれぬかえ。
お靜　おいなう。

ト　お靜しめ泣きに泣く。千代松禮三郎の顏を見て、わつと泣き出す、兩人も怺へ兼ねて泣伏す。この時ばた〳〵になり、花道より以前の丁稚萬吉、雪駄を手に持ち跣足にて駈けて出來り、門口を明けて、

萬吉　遲くなつた〳〵、お上さんは、居ますかえ。（トこれにて兩人こなしあつて、）
お靜　おゝ小僧どん、お上さんは先しがた、
萬吉　あの、歸つてしまつたかえ。
お靜　あいなあ。
萬吉　わあゝ、（ト大きな聲にて泣出して、）お上さんをなくしては、おいらは、家へ歸られない、わあゝ。

ト　大聲をあげる。

お靜　お前、泣くことはない。又爰へ歸らしやんすわいなあ。
萬吉　そんなら、何處ぞへ行つたのかえ。
お靜　清正公樣へ行たのぢやわいなあ。
萬吉　やれ〳〵、それで落着いた。
　　　ト鳥追唄になり、其の儘に萬吉は花道へ引返す。これと一時に花道より以前のお民、與惣兵衞出來り。
　　　萬吉は花道にてお民に行き當りびつくりして、
　やあ、お上さんかえ。
お民　えゝも萬吉、何をあわてるのぢや。
萬吉　あわてる所か、お前さんをなくなしたと思つて、それで搜しに行く所でござります。
お民　ほんに其方は忠義者ぢやなう。さ、與惣兵衞どの參りませう。
　　　トやはり右の唄にて本舞臺へ來り、門口まで來る。萬吉先に立つて門口を明けて、
萬吉　さあ〳〵、お上さんを捉へた〳〵。
お民　これはしたり、靜にせぬかいなう。（ト内へはひり）先程はおやかましうござりました。
與惣　只今戻りました。

ト兩人よろしく住ふ、禮三郎思入あつて、

禮三　これはお歸りでござりましたか、これお靜、親父樣を。

お靜　あい〳〵、（ト奧へ向ひ、）もし父さん、御新造樣がお歸りぢやわいなあ。（ト呼ぶ、奧にて、）

傳二　おい〳〵、只今參りまする。

ト合方になり、奧より傳二出來り、兩人を見て、

これは〳〵大そうお早うござりました。もしお二人樣お悅びなされませ、禮三どのもお靜めもすつかり埒が明きました。御遠慮なう禮三どのをお連れなされませ。

お民　それはまあ〳〵、よう得心させてくださりました、さうさへなれば双方の身の納りといふものぢやわいなあ。

與惣　傳二どのゝお骨折りで、奧州屋樣のお家も安心。

お民（禮三郎とお靜に向ひ、）禮三郎もお靜どのも、手前勝手な取捌きと定めて思ふであらうけれど、更更さういふ譯ではない、一旦此方の緣切つて娘お早の聟と定め、家の要を据ゑさへすりや、又その後では彼の子も引取り、娘となして成人させ、お靜どのは妾になとわしがきつとさせまする、辛い所も少しのうち、なう傳二どの。

傳二　へい／＼左樣でござりまする、どうか始終は出來まする事なら、娘をばお側へお置き下さりませ。あれも生れは素人ゆゑ、身許はたしかでござりまする。

與惣　その事はお内儀が、きつとなさるでござらうわえ。

お靜　（思入あつて、）その思召は有難いことながら、當歳のとき拾はれてこれまで育つ御恩の父さん、生涯襤褸を身に纏ひしがない暮しを致しましても、側を離れず孝行を盡しませねば今日樣へ、どうも濟みませぬわいなあ。

お民　ても、しをらしい志し、

與惣　これが所謂、泥中の蓮とやら、

お民　ほんに見上げたものぢやなう。

トよろしく思入、傳二もこなしあつて、

傳二　いやも有難いお褒めのお詞、親仁がお禮を申しまする。（トお民與惣兵衛に向ひ、）もし、斯う直が極つた上からは、長居は却つて未練の種、禮三どのも支度をさつしやれ。

禮三　（これにて思入あつて、）長の間の御厄介、お禮は詞に盡されませぬ、もうわたくしは參りますれば、又坊主めが貴方の厄介、何分よろしくお願ひ申しまする。

傳二　小僧が事は案じさつしやるな、孫は祖父が寶珠の玉ぢや、大事にせいで何とせうぞい。

禮三　お上樣、親父樣、不所存者のわたくしを斯程にお世話下さりますは、何と申してよからうやら、實に罰が當りまする。

お民　その斟酌には及ばぬこと、何かは家で寛りと談合いたしませう。さゝ與惣兵衞殿、お前樣は禮三郎と共々に、

與惣　お暇いたすでござらう。さゝ、禮三來やれ。

ト與惣兵衞禮三郎の手を取り引立てる。

禮三　左樣なれば、親父樣、

傳二　もう挨拶はいりませぬ、互ひに何にも言はぬが花聟、

お民　お靜どのにも、お達者で。

お靜　そんならこれが、(ト喰しめて泣く。)

禮三　無事で居やれ。

ト立上がる、お靜禮三郎に寄らうとするを傳二隔てる、此の内禮三郎の手を取り、與惣兵衞門口へ行掛ける。此の時千代松禮三郎の袂に縋り、

千代　父様、一緒に行きたいわいなう。

ト取付く、禮三郎尤もだといふ心にて愁の思入、わざと千代松を突放す、千代松よろ〳〵となるのをお靜おゝと千代松を抱き上げて、わあゝと泣伏す、お民不便なといふこなし、此の時入相の鐘、與惣兵衞思入あつて、

與惣　とかういふうち、もう黃昏、

傳二　なるほど、とつぷり暮れました。（ト奧へ向ひ、）誰ぞ其處まで送つて上げろよ。（ト奧にて、）

龜吉 鶴松　あい〳〵、お送り申しませう。

ト廓淸搔になり、龜吉先に鶴松大森駿河屋と書いたる小田原提灯を持ち出來る、これまで丁稚の萬吉下手に居睡りをして居て、此の時目の覺めたるこなし、

萬吉　あゝもうお上さんお歸りか、あゝ好い心持に夢を見た。（ト伸びをしながら龜吉の持つてゐる提灯を見て、）おや〳〵、爰は大森かえ。

龜吉　何さ、こりやあ鈴ケ森の狂言の時使つたのさ。（ト門口へ來り、）禮三さん。

鶴松　お目出度う、

兩人　ござりやす。

禮三　長々お世話になりました。

ト此の内お民、紙に包んだ金を龜吉、鶴松にやる。

兩人　これは有難うござります。

お民　心ばかりでござんすわいなあ。

龜吉　もし、頭、

兩人　御新造様から。（ト兩人傳二に金を見せる。）

傳二　これは有難うござります。

ト是れにて龜吉、鶴松提灯を持ち門口へ出る。禮三郎、與惣兵衞、お民、萬吉後へつき門口へ出て、

お民　お靜どの、また、此ごろに來ますぞや。

お靜　隨分共に御機嫌よろしう。（ト行掛けるを傳二留めて、）

傳二　二度と再びこんな所へ、決してお出でにゃ及びませぬ。

與惣　御厄介になりました。

龜吉
鶴松　さあ、お送り申しませう。

ト與惣兵衞は禮三郎をせり立て、皆々ついて花道へ掛る、舞臺は知らせなしに半分廻ると、屋體の横

手鼠の破れ壁、竹の中窓になり、門口は舞臺の下手になり、傳二門口にて見送りながら、

傳二　これ、氣を附けろよ、田圃は道が惡いぞよ。

ト捨ぜりふを言ひながら道具留まる、皆々は段々と花道へかゝる、この内お靜は千代松を抱き窓へ取りつき、伸び上り見送りゐる。

お靜　もし。

ト千代松を抱き上げ禮三郎に見せる、禮三郎振返りつか〳〵と戻るをお民隔てる、お靜はハアと泣き落す、傳二門口をぴつしやりしめる、皆々よろしく双方見合つて木の頭。お靜は伸び上る、禮三郎は振返り振返り心の殘るこなし、廓の騷ぎへ寺鐘をかぶせ、よろしく

ひやうし幕

ト幕引附けると一緒に、皆々よろしく花道へはひる。跡シヤギリ。

三幕目大切　小磯ヶ原雪降の場

(役名　奥州屋禮三郎、奥州屋惣右衛門、非人蝮の仁三、同川獺新太、同じや〳〵馬道八、大工あらしこ勘次、同かゞりの音松、雲助けんのみ市、同ぐづ八、同よたんぼ虎。女太夫小町お靜、同一子千代松。)

(小磯ヶ原雪降の場)――本舞臺常足の二重六枚飾り、雪の積りし田の畦の蹴込み、上手に小さな用

水の樋の口、流れの波板、正面後へ下げて雪の積りし大きな石地藏、左右藪疊み、所々に松の立木、向う八丁堤、大磯の廓を見たる雪降りの遠見、舞臺花道とも一面に雪布を敷き、正面棧敷の水引雪布に打返し、總て小磯ヶ原雪降の體。爰に雲助けんのみ市、同じくぐづ八、赤合羽、草鞋、竹笠を被り、息杖を突き立掛り居る、雪おろし馬子唄にて幕明く、

市　こう、八や、めつぽふに降つて來たぢやねえか。

八　もう雪はあるめえと思つたが、人足殺しな天氣だな。

市　一ぺいやらにやあ凌げねえが、よたんぼ虎はどうしたらう。

八　夜明しの家へ飛込んだが、白馬（濁酒）でもやつて居るのだらう。

市　彼奴のやうな呑みたがる奴はねえ、二百でも三百でも錢の顏を見ると直と酒だ。

八　借りることも借りるだらうが、酒屋にやあ好い得意だ。

市　あゝ毎日喰つて居ちやあ、どうで終ひは天王さまだ。

八　川原に兄貴があるといつたが、天王さまにも引取られる伯父御でもあるか。

市　分らねえことを言ふ、よい／＼だといふことよ。

八　古風なことを言やアがるな。

市　何にしろ、よたんぼ虎が何時來るかも知れもしねえものを、横ッ面ア切られるやうな此の田圃の風に吹かれて待つて居るなあ、白癡ぢやあねえか。

八　おらあ、虎より今逢つた、目の惡い女が來たら、手を引いてやらうと思つて。

市　止しにしろ無駄なことだ、盲目になつても小町お靜だ、手前の口へはひりやあしねえ、それよりやあ川原の飯屋で、いつぺいやつて飯でも喰はう。

八　先刻見たら、いゝ海豚があつたぜ。

市　なんぼこんな雪が降つても、一夜明けると鍋は厭だな。

八　贅澤なことを言ふなえ、海豚鍋が相應だ。

市　何にしろ早く行かう、おらあ咽喉がぐびく／＼して來た。

八　意地の穢ねえ野郎だな。

ト雨人上手へはひろ、時の鐘、床の淨瑠璃になる、

〽降りしきる雪に往來も長繩手、小磯の原の田も畦も皆白妙に今日はなほ、田圃の風も身に沁みて案山子の蓑もそう毛立ち、哀れお靜は二世かけし、夫に別れて泣きあかし、終に盲目になりはてゝ、頼む小蔭も七ッ子を杖にたどく／＼歩み來て、

ト此の內時の鐘雪おろしにて雪しきりに降り、花道よりお靜さらげの結び下げ切繼好みの打扮、片褄端折り手拭を吹流しに冠り、杖をつき跣足にて、千代松同じく切繼、前垂を被り、跣足にて、小さなめの字を書きし額を提げ、お靜の手を取り出來り、花道にて、床の合方になり、

千代　おつかちやん、大層雪が降つて來たよ。

お靜　曇つては居たけれど、降らうとは思はぬゆゑ傘を持たずに出て來たが、もう方々が白くなつたか。

千代　あい、いつもの大きな地藏樣が、眞白になつたよ。

お靜　それでは爰は小磯ヶ原か、道理で風が寒いと思つた、わたしは此の目の願掛けに跣足參りも苦にならねど、坊は嘸寒からうの。

千代　いゝえ、おいらはちつとも寒くないよ。

〽無いとは云へど、身に沁みる寒さに聲も顫はれて、

ト千代松寒さを怺へる思ひ入にて、

「牡丹に唐獅子竹に虎、虎をふんまへ和藤內、內藤樣の下り藤、富士見西行後向き、」

ト唄をうたひながらお靜の手を引き舞臺へ來る、お靜石に躓き轉ぶ。

おつかちやん、轉んだのか。（ト介抱する、お靜起き返り、）

お靜　石のあるのも見えぬゆゑ、つい躓いて轉んだわいの。
千代　何處も打ちはしなんだか。
お靜　いや／＼何處も痛めはせなんだ。
　　トこの内お靜の足の小指から、血の出るを見て、
千代　おつかちやん、足の小指から血が出るよ。
お靜　それでは石で擦り剝いたか。
千代　袂糞でもあげようか。
お靜　いゝや、それには及ばぬわいの。
　ト紙取出して足の指、結ぶ手先きも冷え凍り、しばし傍へに休らふ折柄、遊び歸りの二人連、
　ト雪おろし浮いた合方にて、上手より大工あらしこ勘次、かゝりの音松、頰冠り三尺 尻端折り職人の打扮、安下駄を履き張替傘を相々にさし出で來り、
勘次　こう熊や、べらぼうに降つて來たぢやねえか。
音松　こんなに降ると知つたらば、もう一晩ぶん流すに。
勘次　なんのねたもねえ癖に、居殘りはまツぴらだ。

音松　そこはおれだ案じるな、一駒や二駒で手前達を居殘りにおくものか、女に達引かせらあ。
勘次　あんまり達引く風でもねえぜ。
音松　それでも傘を買はしてやつた。
　　ト言ひながら下手へ來て、お靜を見て、
勘次　こう、あの女を見や、すてきに好い女ぢやねえか。
音松　ありやあ好い筈だ、小町お靜といふ女太夫だ。
勘次　違えねえお靜だな。おい、小町姐え、どうしたか、目が惡いのか。
お靜　（思入あつて）はい、何方樣でござりますか、此の間から目を煩ひ少しも明くことが出來ませぬわいな。
勘次　そりやあ嘸困るだらう。
音松　さうして、此の雪に何處へ行くのだ。
お靜　笹目ヶ谷の日朝樣へお參り申しに參りまする。
勘次　なに、笹目ヶ谷の日朝樣へ行く。
音松　この大雪に行かずとも、天氣になつて行きやあいゝに。

お靜　今日で七日の跣足參り、滿願ゆゑに降りましても、お參り申さにやなりませぬ。

勘次　見りやあ傘もねえやうだが、なんぼ信心參りでも濡れて行くなあ大變だ。

吾松　これが五町か七町なら雪だから好いけれど、日朝樣までは半里ばかり、この小僧が可愛さうだ。

〽親や師匠に苦勞を掛け、内を外なる心にも不便と思ひ目に涙、

ト兩人お靜と千代松を見て可愛さうだといふ思入あつて、

勘次　こう熊や、此の傘を遣らうぢやねえか。

吾松　さうよ、可愛さうだから遣りてえが、此方やあどうせう。

勘次　田圃を越しやあ一本や二本借りる所はいくらもあらア。こう、〳〵、小町姐え、此の雪に日朝樣まで傘がなくツちやあ行けねえから、これを遣らあ、さして行きねえ。

〽差出す傘は張替の油も紙も薄けれど、厚き情を押し戴き、

ト勘次傘を出す、お靜探り取つて頂き、

お靜　これは〳〵有難うございます、わたしは濡れてもようござんすが、これが可愛さうでございますお陰さまで助かりますが、然しお前樣方が。

勘次　なあに、おらツちやア、目が見えるから、飛んで行きやアわけはねえ。

ト此の内音松、隠しから百錢を出し、

音松　さあ、小僧金鍔でも買はッし。（ト千代松に遣る。）

千代　おつかちやん、お錢を貰つたよ。

お靜　これは〳〵、おあしまで有難うござります。

音松　何の禮に及ぶものかな。

勘次　それぢやあ、たんと降らねえ内、早く詣つて來るがいゝ。

兩人　可愛さうなことだなあ。

〽人の哀れも身に積る、雪を拂ひて兩人は風に追はれて急ぎ行く、

ト雪おろし、雪降るを袖にて拂ひ、兩人花道へはひる。

〽お靜は跡を伏し拜み、

お靜　俄かの雪に傘は無し、どうしようかと思うた所、人に人鬼はないといふ譬の通り今のお方、職人衆の樣子だが二人を不便と思つてか、此の傘を下さんした、これで濡れずに行かれるわいの。

ト お靜傘をさす。

千代　おいらが持たうか。

お靜　どうして〳〵、千代松に此の風でさせようぞ。
〽傘を片手に我が子を杖、立上りしが、
トお靜立上りしが、癪のさし込む思入にて、
あいたゝゝゝ。

千代　痛いとは、先刻の疵かえ。

お靜　いや〳〵、先刻の疵ではない、此の雪ゆゑに持病の癪が、あいたゝゝゝ。
〽胸を押へて苦しさを怺へるお靜の後へ廻り、纎弱き力に撫摩る、折柄又も雪道を一杯機嫌の雲助が、
トお靜胸を押へ下に居る。千代松これを介抱する。雪おろし馬士唄の合方にて、花道より雲助よたんぼの虎、頬冠り、切れた赤合羽、繩の帶をしめ息杖を腰にさし、酒に醉つた思入にて、ひよろひよろと出來り、

虎　「あいがなあ、遠けりやなあ、えゝ、こりや〳〵〳〵、」（ト長持を擔ぐ思入にて）久しく酒の高いので、こんなに醉つた事はねえ、雪が顏にかゝるのが、冷たくツて好い心持だ、あこれ〳〵、これこれ〳〵、」

〽行き過ぎせしが立ち留り、

トよたんぼ虎、矢張り長持を擔ぐ思入にて舞臺へ來り、上手へ行きかけお靜を見て、

虎　おい〳〵姐え、此の雪の降るのに何をして居るのだ。

お靜　はい、持病の癪がさし込んで、歩く事が出來ませぬから、

虎　それで、そこにさうして居るのか、とんだその字盡しだが、そりやァ嘸困るだらう。

お靜　御覽の通り子供を連れ、まことに困り切ります。

虎　何にしろ、癪だといふに身體へ雪が積つちやあ、なほ〳〵冷えていけやァしねえ、おゝ、おれが此の合羽をやらう、これを引掛けて行くがいゝ。

〽しめたる繩の帶解く〳〵破れたる合羽脱ぎ捨てゝ、恩にも着せずお靜に着せ、

トよたんぼ虎、赤合羽を脱ぎ、お靜の肩へ掛ける。

お靜　これはまあ、御親切に有難うございます。

千代　小父さん、お前濡れるよ。

虎　なんの、おらあ濡れたつて、着るものは無し素ッ裸だ。

お靜　え、この寒いのに裸でござんすか。

虎　裸で生れて此の年まで裸で暮す雲助だ、酒せえ呑みやあ寒さ知らず、冷てえ雪が好い心持だ、醉つて愚癡を言ふやうだが、おれも酒ゆゑだりむくり國へ女房と小僧を殘し、此の鎌倉へ出て來たが、百の錢も送らねえから、こんな裝になりやあしめえかと思ふと、おらあ、(ト鼻をすゝり、)おらあ、何だか悲しくなつた。

〽すゝりあげたる泣き上戸、

ト褌に包みし端た錢を出し、

虎　おゝ、爰に呑み殘りの錢がある、これで蕎麥でも喰つてくんねえ。

お靜　いえ〳〵、それには及びませぬ、今も往來の職人衆にお錢をお貰ひ申しました。

虎　遠慮するにやあ及ばねえ、おらァ國へ捨てゝ來た女房や小僧に遣る心だ。こう、坊は好い子だが幾歳になる。

千代　あい、取つて斯うだよ。(ト指を七本出す。)

虎　おゝ、おれが小僧も丁度七ツだ、あゝ可愛さうなことだなあ。

〽身につまされて鬼の目に、涙は殊勝に見えにける。(トよろしく思入あつて、)

おらのやうな鬼の目に涙をこぼすも親子の愛、國に殘した女房を思ひ出すも夫婦の愛、爰は町家

と宿場の間、あい、「あいがなあ、遠けりやなあ、えゝ、こりや〳〵〳〵。」

〽氣も輕々と長持の重荷を擔ぐ心にて、雪踏み分けて急ぎ行く。

トよたんぼ虎、長持を擔ぐ思入あつて、息杖を突き上手へはひる。

お靜　日朝樣の御利益で、傘も合羽も此樣に人樣が下さんして、やれ嬉しやと思うたら、癪も大きに快くなつたわいなう。

千代　そんならそろ〳〵行かうかえ。

お靜　行くは行かうが、これ千代松、合羽は其方に着られまいか。

千代　おいらはいゝから、おつかちやん、お前これを着ておいで。

〽後へ廻り引掛ける合羽の丈も足らぬ背、傘に縋りて親と子が行かんとしたる向うより、二人連れの野伏りが、それと見るより囁き合ひ、

ト雪おろしにて、お靜へ千代松合羽を着せ、傘をさし兩人立上る。此の時上手より非人蝮の仁三、同じく川獺新太、同じくじや〳〵馬道八、橋市の施し頭巾、納め手拭を繋ぎし手拭にて頰冠りをなし出來りお靜を見て囁き合ふ。木魚入りの合方。

仁三　あゝ寒い〳〵、何でこんなに降りやあがるか。（ト態とお靜に行當り、）やあ、お靜ぢやねえか。

お靜　え、さう言はしやんすは、
仁三　おぬしが嫌ひな、蝮の仁三だ。
お靜　え〻。（トびつくりする。）
千代　おつかちやん、怖いよ。（ト縋る。）
〽縋る我が子を合羽で圍へば、
仁三　かう見や、傘と合羽に有り附いた。
新太　錢もちつとは持つて居よう。
道八　酒の足しにしてえものだ。
〽言ふをお靜が摺拔けて、行くを蝮が引戻し、
トお靜思入あつて上手へ行くを、蝮の仁三引捉へ、
仁三　なにもそんなに怖がつて、急いで行くことはねえ、まさか身ぐるみ剝ぎやあしねえ。
新太　この大雪に傘がなくつて困り切つて居るとこだ、丁度天から授かつた其の傘、己達に貸してくれ。
道八　まだ〳〵、それはかりぢやあねえ、錢があるならありツたけ、呑代に貰ひてえのだ。
お靜　え、めつさうなこと言はしやんせ、此の子を連れて此の雪に傘がなくつて歩かれませうか、そん

な無理なことを言はずと、どうぞ堪忍して下さんせ。

仁三 どうして〱、おらッちの眼にかゝつたら、堪忍することはならねえ。

新太 其方も困りやあ、此方も困る味は同じことだ。

道八 なにも後生だお靜坊、傘と合羽は此方へ貸しなよ。

〽取りに掛るを其の手に縋り、

お靜 そりやさうでもござんせうが、今も二人が困るであらうと、しかも若い職人衆がこの傘を下さんしたのぢや、又問屋場の人足衆が、其の身は裸でありながら、これを着て行けと下さんした紙合羽今お前方に取られると、その人達の親切がみんな水になりまする、眼の不自由な此のお靜に、何頑是ない千代松を、不便と思はゞ此の儘に、どうぞ許して下さりませ。

〽お慈悲〱と千代松も共に紅葉の手を合せ、拜むも聞かで空吹く風、

ト お靜千代松手を合せて拜む。

仁三 水にならうが湯にならうが己達が構ふものか、この大雪の降る中でうぬが物を脱いで遣るなどゝ、そりやあ當世に合はねえ奴だ。

新太 人はのめつてくたばらうが、我せえ好けりやあいゝといふが、これが今の人情だ。

道八　流行物は早いが得、傘や合羽はいふに及ばず、小遣ひ錢も少しはおらう。
仁三　有るなら早く出してしまへ、雪の中にぐづ〳〵と立往生はして居られねえ。
お靜　そんなら、どうでもお前方は、
新太　厭と言はうが應と言はうが、見込んだ日にやあ取らにやあおかねえ。
お靜　そりやあんまりでござんすぞえ。
道八　おゝあんまりだ〳〵、あんまり陀佛と往生しねえ。
お靜　假令何と言はしやんしても、こればかりは上げられぬわいなあ。
仁三　えゝ、面倒な、引ッ剝げ〳〵。
新道　合點だ〳〵。

〽情容赦もあらけなく、目かいも見えぬお靜を引きのけ、合羽を剝ぎとる川獺新太、遣らじと縋るを傘で蝮の仁三がめつた打ち、あれかゝ樣をと千代松が、留めるをじや〳〵馬踏み退け蹴退け、

トこの内雪おろし烈しく雪降る、新太お靜の合羽を剝取る、お靜遣るまいと留めるを仁三傘で打つ、これにてお靜どうとなる、千代松この中へはひるをじや〳〵馬蹴倒し、

仁三　さあ、これからは小遣錢だ。

〽倒れしお靜を引起し、手籠めに引出す巾着の、中を蝮は手早く改め、

ト又三人立掛り、お靜を捉へ懷から桔梗袋の巾着を出し、三人改め見て、

やあ、こりや端た錢と思ひの外、額が三ッに一朱が二ッ、

兩人　そいつァしつかり呑めるわえ。

〽言ふ聲しるべに探り寄り、（ト お靜三人に縋り、）

お靜　それは此の子に着物が着せたく、眼が惡いのも厭はずに仲間の子供を呼集め、唄淨瑠璃の稽古して僅か二百か三百のお錢を貰つて溜めた金、どうぞ堪忍して下さんせえな。

仁三　どうして〳〵、錢でも取らにやあおけねえのだ、ところへ額と來た日にやあ、打ち殺して取らにやあおかねえ。

〽縋るお靜を突き退くれば、又千代松が取り附いて、（ト三人お靜を突き退ける。）

千代　おいらのおぜゞを上げるから、おつかちやんのを返しておくれ。（ト以前の百錢を出す。）

新太　おゝよく出した、よく出した。重荷に小附け小僧まで、百錢を持つて居らあ。

道八　端た錢でも取らねえのは損だ。（ト道八千代松の錢を取る。）

お靜　え丶子供のものまで取るといふは、お前方は鬼か蛇か。

仁三　鬼でもねえ蛇でもねえ、以前は同じ小屋仲間、頭をかぶつて追出され、今ぢやあ野伏り宿なしだ、義理も絲瓜もあるものか。

新太　雪が降らにやあこの上に念佛講でもするのだが、雪が降るので寒くつて小僧が縮んで居るのが仕合せ。

道八　愛でおい／＼泣いて居たら、間抜な奴が通り掛り、小遣錢ぐれえはくれるだらう。

仁三　貰つた時分に廻つて來て、又香代に借りて行かう。

新太　さあ、錢が出來たら早く呑みてえ。

道八　小降な中に出掛けよう。

〽言ふにお靜は探り寄り、足に取付き引き留めて、

ト仁三、新太相々傘になし、道八赤合羽をすつぽり被り行かうとするを、お靜探り寄り三人を引留め

お靜　そんならどうでも、その金を、

仁三　まだ、白癡未練なことを言ふか。（ト蹴倒す、お靜どうとなるを千代松縋り、）

千代　あれ、おつかちやんを。（ト泣く。これに構はず、）

仁三　いや往生際の。

三人　悪い奴だ。

〽直なる道も横吹雪、打ちこぞりてぞ急ぎ行く。

ト雪おろしになり、三人一緒にかたまり、捨ぜりふにて花道へはひる。

〽又もや強く降る雪に、積る難儀の重なりて、

ト床の合方になり、雪頻りに降る、お靜やう〳〵起上り、

お靜　え丶、情ない目に逢ふことぢやなあ、道に缺けたる色戀をなしたる罰か此のやうに、子までなした禮三さんと浮世の義理に縁を切り、飽きも飽かれず別れたる其の悲しみに泣き明かし、

〽終にこの眼を煩うて見えぬやうになつたのは、御苦勞かけし親の罰、此の身はさせる罪あるゆゑ、言うて返らぬ事ながら、

可愛さうなは此の千代松、悪い親を持つたばッかり、共に難儀をする不便さ。

〽旦那方は申さずとも、同じ仲間の子でさへも雪の降る日は外へも出さず、身分相應辻かの炬燵に入れて遊ばすのに、

此の大雪に吹きはらしの小礒ヶ原の東北風、身を切らる丶程寒いのも、厭はずわしが手を引いて、

〽いたはりくれる孝行者、何でこんな不孝者の、
子には生れて來たことぞ、
〽堪忍してくれ千代松と、抱きしめて聲をあげ泣けど叫べど往來もなく、又もや胸へ差込む
癪、
トこの内お靜千代松を抱き苦しき思入あつて、又癪のさしこむこなしにて苦しむを、千代松介抱しながら、

千代　おつかちやん、又痛いかえ。

お靜　折角少し納まつたも、氣を揉んだのでまた胸へ、あいたゝゝゝゝ。

ト千代松額へかゝる雪を拂ひ除けながら、お靜の背中を擦り、

千代　段々雪がたんと降るから、もう家へ歸らうぢやないか。

お靜　たゞなら直に家へ歸るが、今日で七日の滿願ゆゑ、行き損うては心にかゝる、寒からうが辛抱して、どうぞ一緒に行つてくりや。

千代　あい／＼。

〽杖に縋りて立上れど、一足行つては二足戻り、齒を喰ひしばれど病には勝たれずどうと伏

し轉ぶを、年端も行かぬ千代松が、介抱なすぞいぢらしゝ、

ト　お靜立上り行き掛けては苦しき思入にて行き惱みどうとなり、千代松雪を拂ひながら介抱なす。時の鐘。

〽斯かる歎きも白妙の雪踏み分けて禮三郎、舅と共に大師の歸途、思はず爰に來かゝりて、

ト　上手より奧州屋總右衞門更けたる鬘、半合羽、ぱつち、尻端折り、足駄がけ、白張の傘をさし出來る、後より禮三郎同じく半合羽、ぱつち、尻端折り、白張の傘をさし出來り、上手にて、

禮三　親父樣お危うござります。

總右　なんだ、もう七ツだ。

禮三　お危うござりますから、お氣をおつけなされませ。

總右　（聞え兼ねる思入にて。）年のせゐで二三年耳が遠うなつた所へ、どうでも春先で逆上るせゐか、小さな聲では聞えない。

禮三　然しお耳の遠くなるは、長生きぢやと申しまする。

總右　なに、長井兵助が通つた。

禮三　いえ、長生きぢやと申しまする。（ト大きく言ふ。）

〽言ふ聲聞いて眼早くも、千代松は禮三を見附け、

ト此の内お靜は胸を押へ苦しみ居る、千代松禮三郎の顏を覗き見て、

千代 おつかちやん、おとつちやんが來たよ〳〵。

お靜 なに、おとつさんとは。

千代 それ、お店から來るおとつちやん。

〽言ふに禮三も振返り、

禮三 や、其方は、

〽言はんとせしが舅の手前、素知らぬ振に千代松が、

ト禮三郎千代松を見てびつくりなし、側へ寄らうとして惣右衞門へ思入あつて顏を背ける。

千代 これ、おとつちやん、何故家へお出でない、おとつちやん〳〵。

〽慕ふ我が子を引留めて、

お靜 あゝこれ〳〵、おとつさんとは誰が事、其方の親はわし一人、おとつさんはないわいの。

千代 いや〳〵、おいらのおとつちやんだ〳〵。

お靜 これはしたり、どうしたものだ、假令實の親にもせよ、別れてしまへば、あかの他人、おとつさん

とは言はれぬわいの。

千代　それでもおいらの、おとつちやんだものを。

お靜　おゝ尤もぢや、道理ぢやが、おとつさんと言はしては、此の母が濟まぬわいの。

千代　ワア丶丶丶。（ト泣く。）

〽現在我が子の慕ふのを素知らぬ顏で見ぬ苦しさ、此方は窶れし姿をば夫に見するが恥かしく、さし俯向いて泣き居るも、舅はそれと氣も附かず、

ト禮三郎この中顏を背け切なき思入、お靜は我が姿を見らるゝが恥しく、千代松を抱いて泣き居る、惣右衛門思入あつて、

惣右　これ〳〵禮三、手の內をくれといふのか。

禮三　いえ、左樣ではござりませぬ。

惣右　おゝ、財布の內に錢がなくば、わしが此の巾着にある。（ト腰から巾着を出す。）

禮三　いえ〳〵、それには及びませぬ。（ト手を振つて見せる。）

惣右　まだ、まあ見れば年若で、つまはづれも尋常な賤しからぬ女子だが、眼が不自由の樣子ぢやの。

禮三　どうか、見えませぬ樣にござります。

惣右　なに、今日が十日か八日かとは、そりや何を言はつしやる、今日は廿一日ゆゑ大師樣へ行つたのではないか。
禮三　何を言うても此の樣に舅殿は耳が遠く、聞えぬのがわしが仕合せ。
惣右　あゝ、仕合せが悪いので袖乞になつたとか、側に居るのは我が子かの。
禮三　はい、あの女の子でござります。（ト大きく言ふ。惣右衛門聞えたる思入にて）
惣右　はて、男の子のやうに見えるがの。
禮三　いえ、あの女の、子でござります。
惣右　どういふ譯で袖乞するか、とつくり樣子を聞いた上、合力でもしてやりたいが、おれは耳が遠いゆゑ、聟どの、聞いてやつて下され。
禮三　畏りました。
〽舅の頼みを幸ひに、禮三はお靜の側へ寄り、（ト禮三郎思入あつて、お靜の側へ來り）
これ、これ、お靜。
お靜　あい。（ト顏な上げる。）
禮三　いや、お靜ではない知らぬ女中、別れて僅かまだ一月、どうしてそんな眼になつたぞ。

お靜 〽いふは戀しき我が夫、飛び立つ程に思へども、四邊を兼てよそ〳〵しく、（思ひ入あつて、）何れのお方か存じませぬが、ようお尋ねなされて下さりました、わたしがこの眼の見えぬのは、頼みに思ふ夫に別れ、明暮くよ〳〵泣き明かし、遂に兩眼盲てしまひ、生れも附かぬ不具になりしも身の因果とはいひながら、斯ういふ姿になりましたを父さんが苦にやんで胸に痞へてぶら〳〵煩ひ、もしもの事でもあつた時には、夫の形見のこの千代松、僅か六ツか七ツの子を力に浮世を送らにやならぬ、頼み少ない身の上を、

〽推量なして下されと、跡は涙に伏し沈めば、禮三郎も涙を拭ひ、

禮三 其のみぢめを見するのも、いはゞ別れし男ゆゑ、嘸義理知らずと思はうが、餘儀なき譯で切つた緣、ほんに眼こそ煩はねど朝夕箸の上げ下しに、若し煩つてゞも居はせぬかと、二人の事が氣にかゝり、片時胸に忘れねば三度の食もろく〳〵進まず、藥を呑まぬ日とてはない、眼が見えるなら此の禮三が、窶れた顏が見せたいわい。

お靜 そんならお前もその樣に、わたしを思うて下さんすか。

禮三 はて、思はいで何とせう、假初ながら七年越し、子までなしたる二人が仲、緣は切つても一生涯忘るゝことがあらうかい。

〽言ふに嬉しく這ひ寄るを、舅の手前拂ひ除け、
トお靜探り寄るを禮三郎拂ひ除けて、
あゝこれ、舅の見る前、今は惡い、わるい〳〵。
〽留る側から惣右衛門。

惣右 なに、わるいとは。

禮三 え。

惣右 いや、惡いは眼のことか、此の耳が遠いのでさへ不自由でならぬもの、眼が見えいでは猶のこと嘸不自由の事であらう。此の大雪に子供を連れ、何處へ此方は行かつしやるのだ。

お靜 はい、眼の願掛に笹目ヶ谷の、日朝樣へ參りまする。

惣右 (聞耳を立て、)なに、笹の雪へ幾町ある。はあ、そんなら根岸の方へ行くのか。

禮三 (耳の側へ來て、)いえ、笹目ヶ谷の日朝樣へ、參りますと申しまする。

惣右 むゝ、日朝樣へ參るのか、街道からは枝道だが、其の子が案內して行くか、親孝行な事ぢやな。

これ、爰へ來い〳〵。

お靜 それ、旦那樣がお呼びになる、早うお側へ行つたがよい。

千代　あい〳〵。

〽あいと返事も臆面なく、側へ來る子の顏を見て、

ト千代松つか〳〵と側へ來る、惣右衛門顏をぢつと見て、

惣右　あゝこれは好い子ぢや〳〵、器量といひ形恰好、町家の子でも此樣な尋常なのは少ないもの、賤しい育ちして居れど、親は由緒あるものなるか、人柄の好いこの面立ち、

〽ためつすがめつ顏打ち守り、

ト惣右衛門千代松の顋へ手をかけ、ぢつと思入あつて、

最前から二人の素振、どうか譯ありさうに思うて居たが、案の定、此の幼子の面差が禮三其方に生寫し。

禮三　え。（トぎつくり思入。）

惣右　目許なら口許なら、我が子といつても好いほどに、似たのはもしや噂に聞いた。

お靜　えゝ（トはツと俯向く。）

惣右　いやさ、噂に聞いた中氣の名灸、天王樣の横町でおろして貰ふをさつぱり忘れた、又來るのも面倒なれば、とつて返しておろして貰はう。

禮三　すりや親父樣にはこれから後へ、

惣右　返つた所が二三町、道は少しも苦にならねど生れついての灸嫌ひ、嘸熱からう切なからうと我慢をして居る二人の、心の内が思ひやられ、

兩人　えゝ、（ト兩人びつくりなす。）

惣右　いやさ、思ひやられてすゑぬ先きから、熱い涙がこぼれるわいの。

〽それと悟つて惣右衛門、灸によそへて泣く涙、側に聞き居る苦しさは、其の皮切りを怺へる思ひ、

ト惣右衛門、お靜千代松を見て不便なといふ思入、兩人はぢつと切なき思入、

どうやら見れば此の雪で、癪に苦しむ樣子ゆゑ、袖振り合ふも多少の緣、殊には大師の歸り道、何をするのも後生の種、わしが灸をすゑて來るうち介抱してやつたがよい。

禮三　親父樣のお詞ながら、二三町でも雪道ゆゑ、お供いたして參りませう。

惣右　あゝいや〳〵、其方は一緒に行くには及ばぬ、爰で歸りを待つて居やれ。

禮三　それぢやと申して、

惣右　はて、この雪にこれ迄の積る話を、

これ、千代松、水を早く、(トお靜を介抱なす。)

千代　あい〳〵。

〽滑る足許やう〳〵に流れへ浸す手拭を、水に取られてびつくりなす拍子に、落つる溝の中、

ト千代松二重から流れへ手拭を浸す、指金にて手拭水に取られ流れ行く、千代松びつくりして二重から落ちる。

あれ、水の中へおつこちたよ。

〽言ふにおどろき引上ぐれば、のつけに反つて苦しむお靜、これはしたりと駈寄る側へ、冷たいわいのと來る千代松。これ幸ひと着物の雫絞り入るれば息吹き返し、

ト禮三郎お靜を下に置き千代松を引上げる、これにてお靜反り返る、禮三郎あわてゝ抱起し介抱する、千代松側へ來て冷たいと泣く。禮三郎これを見て着物の裾雫をお靜の口へ入れ、呼び生ける、これにてお靜うんと心附く、

禮三　これお靜、氣が附いたか。

お靜　(思入あつて、) わたしやどうかしましたかいな。

禮三　どうしたどころか取詰めて、おらあ死ぬかと思つたゆゑ、水を汲ませに千代松を遣つたらどんぶ

り溝へ落ち、右と左りにおれ一人、こんな困つたことはなかつた。

お靜　舅御さんが粹を通し、灸をすゑにおいでなされ、やれ嬉しやと思つたら、怺へ〳〵た痞がさし込みそれから跡は夢現、とんだ御苦勞かけましたわいな。

千代　おつかちやん冷たいよ。

お靜　あゝ、どんなに濡れたか、爰へ來や〳〵。

〽見えぬ目ながら探り見て、濡れたる着物の水しぼり、

ト お靜探り見て着物の水を絞り、

思つたよりは濡れぬゆゑ、冷からうが辛抱しや。

千代　あい〳〵。

禮三　おゝ、爰に好いものがあつた、土產に買つた生の輕燒、これを喰べて待つて居や。

〽取出す生の輕燒も、切目離れぬ二人が種、

ト 禮三郎袂より袋入りの生の輕燒種を出して遣る、千代松取つていたゞき、

千代　餘所の小父さん、有難う。

お靜　あこれ、側に誰も人が居ねば、おとつさんと言つてもよい。

千代　そんなら言つてもよいかえ。（ト思入あつて、）おとつちやん〳〵。
〽縋り附くにぞ、（ト取り附かれて、）
禮三　親子といへど朝夕に、一ツに居たは僅かの中、それでもおれを親と思ひ慕つてくれるか、忝けない。
お靜　そりや慕はいで何としませう、假令僅かの内にもせよ、そこが親身の親子の仲、晝は遊びに身が入つて聞くこともたまなれど、夜は寐てから思ひ出し、おとつさんはと言はるゝ度毎、今に家へ歸つてぢやと欺しておくが現にも、おとつさんはと起返り、捜さぬ夜とてはござんせぬ。
禮三　捨て行く程邪險な親が、それほど其方は戀しいか。（ト抱きしめる。）
千代　いえ、おいらよりおつかちやんが、お前の事を言ひ續け、嘘ぢやアないおつかちやんは、おとつちやんに惚れてるよ。
お靜　えゝも、此の子はそんな事を。
禮三　誰が其方に教へたのだ。
千代　誰も教へやあしないけれど、おとつちやんとおつかちやんは色だものを。
禮三　いや、面目次第もないことだ。

兩人　ほゝ、はゝゝゝ。

〽悲しい中でも笑ふのは、隔てぬ親子夫婦仲、

ト禮三郎千代松の天窓を摩る、千代松袋から輕燒を出して喰ふ、お靜思入あつて、誂への合方になり、

お靜　いつぞやお別れ申してより、どうぞしてモ一度お目にかゝり度いものと、明暮思うた念が屆き、思ひがけなく今日爰でお目にかゝつて御無事も知れ、これで思ひが晴れましたれば、此の後何處で逢はうとも、詞をかけて下さりますな。

〽思ひがけなきお靜が詞に、

ト禮三郎合點の行かぬ思入にて、

禮三　此の後何處で逢はうとも詞をかけてくれるなとは、そりやお靜何を言ふのだ、昨日や今日の仲ではなし、言交せしも七年越し、縁を切つたもほんの義理ゆゑ、心の内に替りはない、愚癡な事を言ふやうだが、別れた晩から昨夜まで忘れねばこそ一晩でも夢に見ぬことはない、此方はこれ程思ふのに、詞を掛けてくれるなとは、おれに愛想が盡きたのか。

お靜　なんでお前に愛想が盡きよう、子までなしたる二人が仲、此の目が泣いて見えぬほどわたしや焦

れて居るけれど、舅御樣がそれと覺り、二人に話をさせようと跡へお歸りなされたが、心の内で嘸や嘸やつぱり二人は言交し、緣を切つたは僞りと思召すは知れたこと、お前の出世の邪魔になるゆゑ、わたしや思ひ切るほどに、言葉交して下さんすな。

禮三　〽愛想づかしも夫の爲め、健氣な心聞くにつけ、其の志しは忝ないが、以前に替るおぬしが身の上、斯かる難儀を餘所に見て、出世する氣は少しもない、舅どのがそれと覺り心にかなはぬ事ならば、五間間口の居附地主奥州屋の若旦那と一旦着たる冠を捨て沓に劣りし雪駄直し、身には襤褸を纏ふともおぬしが心の錦をば、どうまあ見捨てられようぞ。

お靜　嬉しうござんす禮三さん、それ程思うて下さんすなら、お早さんと睦まじう行末長く添遂げて、妾の替りに此の子をば人にして下さんせ、日朝樣へ日を限つてお願ひ申した甲斐もなう、少しの驗もない上は所詮この目は明きませぬ、もう人並になりませねば、思ひ切つて下さんせ。

〽小町お靜と人樣が、おつしやつたのも皆前表、思へば果敢ないこの身の末、お前の恥でござんすゆゑ、此の後何處で逢はうとも、知らぬ顏して下さんせ。

〽一世も二世と思うたる情人を此方から思ひ切る心の内を禮三さん、不便と思うて下されと

又も涙に暮れにける。
トお靜思入、禮三郎術なき思入、

禮三 あつぱれ見上げたおぬしの心、浮世の義理がないならば、これから直に小屋へ行き、元の夫婦にならうもの。

〽何をいふにも七ツから御恩になつたお主樣、家出をなして若しひよつと、お早どのに凶事でもあらば、

〽これも捨てるに捨てられず、

女房といへど元はお主、取りも直さず主殺し、

〽これも捨てるに捨てられず、

又おぬしとても七年越し、馴染んだ上に以前に替り、盲目となればなほ更に、

いつその事に中に立つ此の身を捨てゝ死んだなら、雨降つて地固まると無事に納まる事もあらう。

〽何方をどうと捨て難く四鳥にかゝる禮三がくるしみ、お靜はやう〳〵泣く目を拭ひ、

トこの內禮三郎よろしく切なき思入あつて、

お靜 盲目とならば猶更に捨てられぬといふ一言で、わたしや思ひは殘りませぬから、死なうなどゝい

ふやうな必ず惡い心を出さず、お早さんと睦じう百萬年の御壽命過ぎ、あの世へ行つたら此のお靜と、女夫になつて下さんせいな。

禮三　そりや言はずとも知れたこと、元より二世を掛けたる仲、彼の世は一蓮托生なるぞ。

お靜　それで此世は義理のあるお早さんへお讓り申し、彼の世の緣を樂しみに、今日逢うたのを逢ひ納め、此の後逢うても他人向き、

禮三　そんならどうでも、お靜には、

お靜　思ひ切る氣でござんすわいな。

〽岩田となりし其の身を恥ぢ、思ひ切るとはいひながら、心惹かれて泣く淚、側に聞き居る千代松が身に沁む寒さ怺へかね、

ト　お靜心惹かる〻、思入にて手拭を當て泣く、千代松寒き思入にて禮三郞に取り附き、

千代　おとつちやん、寒いからもう家へお歸りな。

禮三　お〻寒からう〳〵、このまあ手はかなッ氷、（ト手を取りちつと見て、）あ〻、一緒に家へ行きたいが、行くに行かれぬ今日の仕儀。

お靜　これ千代松、もうおとつさんと言ふではないぞ。

千代　言つては悪いかえ。

お靜　おゝ悪い〳〵、其方は利口者ゆゑに何處でお目にかゝらうとも、おとつちやんと言ふではないぞ。

千代　あい、あい。

〽あいとは言へど子心にも、言ふなといふが悲しさに、もうこれからは言はぬから、たつた一遍言はしておくれ。

お靜　一遍ならばだいじない。

千代（これにて嬉しき思入にて）おとつちやん。（ト禮三郎に縋る。）

禮三　おゝ、何だ。

千代　もうこれからは、餘所の小父さんだね。

禮三　あれ、あんなことをいふわいの。

〽禮三は堪らず引寄せて、現在親子と産れながら、何の因果で他人となり、斯かる憂き目を見ることぞ。

お靜　浮世に義理がないならば、賤しい暮しも好き合うて、

禮三　一旦夫婦になつたれば、土藏造りの家を捨て、

お靜　埴生の小屋に住はうとも、
禮三　親子三人一ッ家に、
お靜　破れたる垣の隔てなく、
禮三　藪鶯に起されて、
お靜　蛙の聲に灯をともし、
禮三　鄰の騷ぎを寐耳に聞き、
お靜　氣兼ね苦勞も中田圃、
禮三　それも田の畦枝道の、
お靜　別れ〳〵になるといふは、
禮三　思ふに任せぬ、
兩人　世の中ぢやなあ。

〽夫婦手に手を取交し、一目見たさも見え分ぬ眼にも涙は先立ちて、今降る春の雪解けて軒端に傳ふ如くなり。

ト兩人手をとり交し、お靜顔の見たき思入よろしく、トヾ振拂ひ禮三郎千代松を抱き上げ泣く、時の

の鐘になり、思入あつて、

禮三 今鳴る鐘はありや七ツ、親父樣の歸らぬ內、幸ひ爰に有合せし此の金を遣るほどに、少しも早く歸るがよい。

〽紙入より金取出し、紙に包んで手に渡せば、

ト禮三郎紙入の金入より金を鼻紙へあけ、これを包みお靜の手へ渡す、お靜びつくりして差戾し、

お靜 いえ〳〵、これには及びませぬわいな。

禮三 はて、此金は薄着で居る、小僧になんぞ着せてくりやれ。

お靜 えゝ、有難うございまする。

〽包みし金を押し頂く、折柄後へ惣右衛門咳きなして立歸り、

ト お靜金を戴く、雪おろしになり、上手より以前の惣右衛門咳拂ひをして出來る、これにてお靜は金包みを帶の間へ入れる。

禮三 親父樣、只今お歸りなされましたか。

惣右 なに、田圃の風は寒かつたか、いやも、吹きはらして寒かつた。

禮三 それは嘸お寒うござりましたらう。

惣右　いや三里ではない、背中の灸だ、熱い思ひをして來たが、定めてその内とつくり、いやさ、女中の癪も納まつたかの。
禮三　はい、納まりましてござります。
惣右　おゝ、それはよかつた〳〵、上方唄にもある通り、癪に嬉しき男の力と、兎角男でなくてはいかぬ、どういふ譯かとてもの事、素性も詳しう聞きたいが、何をいふにも耳は遠し、改めて聞かずとも若い女中の事なれば、大方深く言交した男にでも、別れたといふやうな事であらうの。
禮三　左樣にござりまする。
惣右　おゝ、さうあらう〳〵、姿形が變つた上、目の惡いので見違へたが、よく〳〵見れば面差は見覺えのある女中、一人身でもあることか、斯ういふ可愛い子のあるものを、如何に我が子の賴みぢやとて、仲を割くといふことが子を持つた身にあらうかい、定めて鬼の寄合と思ふてゞあらうけれど、餘儀ない譯は淨玻璃の鏡に寫して見せたいわい。よしない罪を作りしゆゑ、業の秤にかゝりや繋がる親が出合うて眼前に見るは劍の山に居るやう、まだしも耳の遠いが仕合せ、目もあらうのに此の雪は八寒地獄に異ならず、せめては衆生濟度と聞く地藏尊のこの前で、後生の種に進ぜる目藥、（ト言ひながら懷から藥包みを出し、）これは得難き蚫の眞珠、どのよな眼でも一度はか

たく治るといふことゆゑ、少しも早く呑まつしやれ。

〽差出す眞珠を、禮三は取次ぎ、

ト惣右衛門差出すを、禮三郎受取り、

禮三　思ひがけない此の眞珠をお貰ひ申すは地獄で佛、（ト包紙を見て。）や、こりや大橋の松屋の包み、扨は灸を据ゑるといつて、親父樣には此の眞珠を、求めにおいでなされましたか。これお靜、ではない、知らぬ女中、今聞く通りこれにござる旦那樣から下さるお藥、なか〳〵輕い身の上では求める事のならぬ眞珠、信心してこれを呑み、早うその眼を治すがよい。

〽手に探らすれば、おし戴き、

お靜　お早樣の邪魔になりし此のお靜を、旦那樣には憎いとも思召さず、價の高いお藥を下さりまするお志し、え丶、勿體ないことでござりまする。

惣右　禮三、悅んで居るかの。

禮三　はい、價の高い眞珠を下され、勿體ないと申してをりまする。

ト大きく言ふ。惣右衛門思ひ入あつて、

惣右　高いというても些細な金、何の勿體ない事があらう、其方が盲目となつたのも、元は誰ゆゑ、我

お靜　え、が娘。
惣右　いやさ、娘があれば年頃も似たる者が不便になり、他人のやうには思はぬわいの、少しも早くその眼をば治るやうしてやりたい、忙しないのは老の常、今の眞珠を呑ませたいが、禮三そこらに水はあるまいか。
禮三　水は流れにござりまするが、何ぞ汲むものがほしいものだ。
　　ト いふに側から千代松が、
　　　石地藏の臺石にある水向茶碗を取つて、
千代　餘所の小父さん、爰に茶碗が載つて居たよ。（ト出すを、禮三郎取つて、）
禮三　先刻は心附かなんだが、爰にあつたは水向茶碗、中に溜りし雪水は、天の賜眼の藥、これにて今の眞珠をば。
お靜　何から何まで、有難うござります。
　　ト 藥包みを取出せば、禮三はさし寄り介抱なし、こぼさぬやうに眞珠を呑ませ、
　　　禮三郎藥包を開き、眞珠をお靜の手に載せてやる、お靜これを頂きて呑む。禮三郎水を呑せよろし

くあつて、

禮三　眞珠は喉へ通つたか。

お靜　はい、通りましてござりまする。

惣右　やがて其の眼も治るであらう。

ト此の時入相の鐘を打つ。

禮三　ありやもう入相。

惣右　暮れぬ其のうち行かうかの。

禮三　それがよろしうござりまする。

お靜　そんならもう、おいでなされまするか。

へ名殘り惜しげに見返れば、（トお靜名殘惜しき思入。）

禮三　春とはいへどこのやうに、雪の降るほど寒いから、煩はぬやう大事にしやれ。

お靜　思ひきつても、もうこれ限り逢はれぬことかと思ひますれば、お名殘り惜しうござりまする。

禮三　そりや、おれとても同じこと。

千代　これ、おとつちやん、ぢやアない餘所の小父さん。（ト禮三郎の袖に縋る。）

禮三　遊びに耽つて怪我するな。
千代　あい〳〵。
惣右（此の中へ割つて出て）さ、いつまでゐても、名殘りは盡きぬ。
禮三　どれ、御一緒に參じませう。
ト傘を開き、惣右衞門に先へ行けといふ思入。この內床の合方にて惣右衞門先に立ち行かゝる、お靜思入あつて、
お靜　あゝ愚癡なことだがたゞ一目、この眼を開けてお顏が見たい。
ト見えぬ目ながら伸上り、見送るお靜が哀れさを耳にそれ、は聞えねど、眼に見る舅は切なさに先へ進めば千代松に、引かれて戾る禮三郞、輪廻の絆に締搦まれ、行きつ戾りつ行惱む空には雪の降りしきり、吹雪によろめく惣右衞門、これはと我が子を振拂ひ、
トこの內お靜顏にかゝる雪を振拂ひながら、杖に縋りて見送る。惣右衞門は傘をさし珠數を爪繰りながら先に立ちて行く、禮三郞は心の殘る思入。千代松袖に縋るを振拂ふ。これにてばつたり轉ぶを起さうとして、惣右衞門先へ行くゆゑ向うへ行かうとする。千代松起上り又袖に縋る、これにて禮三郞後へ引戾され行き兼ねる思入よろしく、此の內お靜始終眼の明きたき思入。惣右衞門は先へ行つて

はといふ思入あつて珠數を爪繰り念佛を唱へ居る。雪おろし烈しく、雪頻りに降り、惣右衛門雪風に傘を取られまいといふ思入あつて躓く、禮三郎びつくりして千代松を振拂ひ、つか〳〵と側に行き、

禮三　あ、もし、(ト抱留める。)

〽抱き留めれば傘で涙を隠し先に立つ、舅に仕方なく〳〵も、見返り〳〵行過ぐる。

ト惣右衛門傘で顔を隠し、涙を拭ひ思入あつて先へ花道へはひる。これにて禮三郎是非なく、つか〳〵行き揚幕の際にて振返り、後を見て傘をすぼめ、顔を隠し揚幕へはひる。

〽お靜は跡を見送りて、思はず深田へ轉び落ち、

トお靜見ようといふ思入にて段々前へ出て、二重より落ちる。

千代　あれ、危いわいの。

〽駈寄る我が子に取縋るお靜は兩眼開き、

ト千代松捉へる、お靜千代松に縋り二重へ上る、此の時本釣鐘を打込む。お靜眼を明く、

お靜　禮三さんは、もう見えぬか。

ト千代松お靜の眼を見て、

千代　やあ、お前は眼が明いたかえ。

お靜（心附き、千代松を見て、）おゝ、其方の顏が見えるわいの。

千代　あゝ嬉しい〳〵。

お靜　そんなら今の眞珠がきゝ、今日滿願の七日目に、此の眼の明きしは信心なす日朝樣の御利益なるか。

〽あら有難やと伏拜み、それと後の地藏尊、蓮座の上へ駈上り、

ト此の內千代松以前の額を取上げる、お靜これを伏拜み、よろしく床の合方雪おろしにて、お靜石地藏の臺座へ上り、花道の方をきつと見る。本釣鐘を打込み、雪頻りに降る。

あれ〳〵、向うの町家に程近く、微に見えるが禮三さん。

〽雪に追はれて行く影を、名殘り惜しやと、

ト三重、雪おろし、本釣鐘にてお靜もう見えぬといふ思入にて滑り落ち、向うをきつと見る、千代松駈寄る。此の見得よろしく三重にて、

幕

お靜禮三（終り）

吉様まゐる由縁音信

封文月狂言の榮

一筆申入り〻小堀様のお召使おみつの方と申候はもと湯島のお勘とて茶見世で人を釣狐罠に掛りし彌平次様の惡事も積る雪の夜に自害も吉田忠左衛門殿腰元お杉を手引となし若殿左門様を牢より出しり〻跡に殘りし簪に拔さしならず龍左衛門が非道の責に逢候へ共言ぬ忠義の鏡より妹お民が取出せし姉が覺悟の書置に屑屋伊兵衛が訴へ出科は脱れず湯灌場小僧が鎌倉中を追放され旅へ出掛に忍び入候八百屋で聞し身の素性親の難儀を救はんと百兩盜みし金故に礫川にて辨秀を酷く殺しり〻然も所はどん〱に櫓の太鼓を打しお七の年も十五か六地藏兒の敵に討れ候吉三が果も鈴ケ森仁田様の御捌にて惡人亡び善人世に出り〻目出度かしく

「小堀政談」は明治二年七月、中村座に書卸された、作者五十四歳のことである。實錄の小堀政談とお七の實說とを基礎として創案されたもの。然し御家物めいた部分はほんの發端だけで、世話物として勝れてゐる。お杉が責殺される場は、水道端に於て吉三が辨秀を殺す場と共に好評であつたし、著明であるが、谷町のお杉の宿紙屑屋に於て、お杉の兩親と妹とが、お杉が忠義の爲に責殺されたのを知るの件は、しんみりとした情味が巧みに書現はされてゐて、いゝ場であると思ふ。

書卸しの時の役割は、尾上菊五郎（小堀の召使お杉、湯灌場小僧吉三、非人土左衞門傳吉）坂東三津五郎（小堀の愛妾おみつ實は湯島のお勘、伊兵衞女房お早、八百屋お七）坂東龜藏（小堀の家臣吉田忠左衞門、紙屑屋伊兵衞）市川團藏（仁田四郎忠常）中村仲太郎（幡代龍左衞門、齋坊主辨秀、八百屋久兵衞）嵐榮三郎（お杉妹お民、八百屋下女お玉）坂東簑助（小堀彌平次、海老名軍藏）中村成藏（圓城寺の日和上人）坂東薪左衞門（釜屋武兵衞）尾上梅五郎（了念寺の雲貞）嵐璃鶴（伊東吉之進、小堀左門之助）等であつた。

挿繪にしたのは、大正七年九月市村座上演の時の寫眞で、菊五郎の吉三及び吉右衞門の辨秀である。

大正十四年六月　　校訂者



吉様参由縁音信（小堀政談――五幕）

序幕

小堀家御殿の場
藩中吉田宅の場
奥庭座敷牢の場

〔役名――小堀の召使お杉、伊東吉之進、小堀左門之助、幡代龍左衞門、小堀彌平次、小堀の中間九助、藪坂傳吾、中間甚六、同駒八、同權平、石垣伴藏、吉田忠左衞門。小堀の妾お光實は湯島のお勘、小姓小菊、腰元お花、同お雪等。〕

（小堀奥座敷の場）――本舞臺四間通し中足の二重、正面銀張り花鳥の彩色の襖、上手一間塗骨の障子屋體。下手網代塀。總て小堀屋敷奥座敷の體。爰に石垣伴藏、藪坂傳吾着附袴一本差し、九助中間部屋頭のこしらへ、駒八、權平同じく中間にて酒肴を大分取り散らし、伴藏頻りに踊つて居る見得。甚九へ調べを冠せ幕明く。と伴藏踊り草臥れたる心にてどうとなる。

傳吾　イヨウ〳〵石垣氏は、大分下地があると見えて、うまい〳〵。

伴藏　あゝ醉つた〳〵、たら腹呑んだ所へ思ふさま踊つたものだから、腰はふら〳〵目はちら〳〵、あ

れ〳〵みんなの顔が幾つにも見えるわえ。

駒八　いや誠に面白い事でござりました。伴藏樣はたしか御生國が奥筋と承はりましたが、奥州踊りはお手に入つたものでござりまする。

伴藏　やい〳〵何だ失禮千萬な、身共の事をおん國者だなど〻、こりやこの方ナ、此東京で玉川上水を産湯につかひ、御誕生なされた、一騎當千萬夫不當の武夫だ。

九助　これ〳〵黒木尊、何を旦那方へ粗相申すのだ。へい〳〵石垣樣、此頃部屋へ參りました新參者、まだ勝手を存じませぬから、御無禮を申し上げました、どうぞ御免なされて下さりませ。

伴藏　む〻、新參とあれば、料簡仕憎い所だが許して遣らう。

傳吾　それがい〻、殊更今日は殿樣御全快のお祝ひで、上下貴賤の差別なく無禮講の御酒下され、少々位の無禮があつても打捨てお置きなされ。さあ〳〵野暮は言ひッこなしに、酒落呑みといたさう。

伴藏　あ〻いや、只今拙者が申したも、矢張り酒落のうちでござる。

傳吾　酒落にいたしては、餘り面白くない酒落でござる、は〻〻〻〻。

權平　いや、それで私共も、やう〳〵落着きました。

九助　今日のやうに有難い事はござりませぬ、私共は此節はやたで一合引つ掛けますにも、容易な事で

はいけませぬ、所へ斯ういふ結構なお肴で、御酒をたら腹頂戴いたすといふは、何の事はねえ極樂へ行つたやうなものでござります。

駒八　おい〳〵役當々々、お前よく極樂を知つてるの。

九助　えゝ又憎まれ口を利くよ、すつこんで居ろといふに。然し、もし旦那方え、お上のお噂を申しては濟みませぬが、當殿樣の彌平次樣から、お家の振合がくるりと替り、ちよつと先づお床上げにも、つひにない斯やうな御馳走。

伴藏　さあそれと申すも、お手かけのお光さまが、其行屆きのよいと申すのは、何でも以前が、それ者の果と見えて、下々までお心が附かるゝて。

駒八　此やうな結構な御奉公といふものは、何處のお屋敷へいつても、なか〳〵ある事ではござりませぬ。

權平　そこが目の寄る所へ玉とやらで、今度彌平次樣のお里から、お附人の龍左衞門樣、あんな結構なお人はまたと一人ござりませぬ。

九助　さうよおぬし達のいふ通り、あの又結構な幡代樣に引替へて、御年貢の引きずり込みで、先達て、長のお暇になつた横木田傳右衞門といふ人は、箸の上げ下しにも小言ばかり言つて、やかましい

人であつたなう。

傳吾　所で御家老の吉田忠左衞門殿は、是れも同じく小言屋だが、此間時候に當つたとか逆上たとか、それからこつちはかいな聾になつて、出仕もいたさず引籠り。

作藏　此頃では側に居つて、どんなに惡く言つても、少しもお通じなく、何の事はねえ晝日中の木兎のやうに、目ばかりきよろ〳〵いたして居るて。

傳吾　追々やかましやが引込んでしまひ、此方共が段々出世いたせば、其方達にも心を附けて遣すから、隨分樂しみにいたして居るがよいぞや。

九助　さうなれば願つたり叶つたり、こんな目出度い事はござりませぬ。

作藏　時に其方共は御使ひに、毎日諸方へ出歩くが、お暇になつた傳右衞門を何處ぞで見掛けた事はないか。

九助　いえ、其横木田さんは此間、小川町へお使ひの歸りがけ、飯田町で見掛けましたが、何でも袖乞でもして歩く樣子で、忰の傳吉も一緒でござりましたが、是れも大煩ひでもしたと見えて、眞蒼な面をして、乞食からつりを取りさうなざまをして歩いて居りました。

駒八　何でもあの人は、不斷大部屋の者をば、犬や猫のやうに追ひ使ひ、

権平　針ほどの事を棒ほどに小言をいつた其報いで、乞食をするのはまあ當りめえさね。
作藏　あんまり話しに實が入つて、肝腎の酒盛りがお留守になつた。
傳吾　さあ〳〵、最う一盛りはやらせよう。
九助　折角醉つた酒が覺めかゝつた。
皆々　さあ〳〵是れから大酒々々。（ト此時花道の揚幕にて、）
呼び　殿様のお入り。（ト是れにて舞臺の皆々こなしあつて、）
作藏　やあ〳〵御前様が、是れへお入りとの知らせ。
傳吾　此儘では、餘り見苦しい爲體。
九助　そんなら一立てちよつと爰を片附けといたしませう。さあ〳〵みんな手傳つて片寄せろ〳〵。
駒八
権平　おつと合點だ〳〵。（ト九助、駒八、権平そこらに取り散らしたる皿などを片寄せる、此時又向うにて、）
腰元
三人　御前様には、先づ〳〵いらせられませう。
ト唄になり、花道より小堀彌平次羽織着流し一本差し殿のこしらへ、お光好みの着附、妾のこしらへ、幡代龍左衞門着附袴大小にて彌平次の刀を持ち、跡より小菊、お花、お雪何れも腰元のこしらへにて附添ひ出で花道よき所に留る。舞臺は伴藏、傳吾よろしく出迎ふ。九助、駒八、権平は下座に平伏し

て居る。横笛になり、

彌平　春もやゝ景色とゝなふ月と梅、夫の桃青の口吟みも立つこと易き春日影、昨日今日とて衣更月の間毎に引かれし八重霞、畫く襖の蝶鳥も翅かはすと疑はれ、はて、風情ある事共ぢやなあ。

お光　ほんに御前樣の御意遊ばす通り、御殿の内も春東風に心浮き立つ酒機嫌、顏も夕日の紅梅に餌飼の鳥も音を入れて、悦び告ぐる百千鳥、夫の南山に桃を得し東方朔が例にならひ、君の御壽命長久と、壽き祝ふ今日の御酒宴。

お菊　千代萬代の末までも、替らぬ色の玉椿、枝葉もしげりお睦まじう、

お花　やがて蕾の若樣を、おまうけ遊ばし花の王、松の綠の末長う、

お雪　笑ひそめたる山々に、若葉もいつか葉重ねの、紅添ゆる初紅葉、

龍左　何は兎もあれ我が君には、先刻より暫時の御歩行、あれなる席にて御休息、然るべう、

皆々　存じ奉ります。

彌平　おゝ、左樣いたさう、皆も來やれ。

皆々　はッ。

ト右の鳴物になり、此人數殘らず本舞臺へ來る。腰元三人褥を敷き脇息刀掛など直して、皆々よろしく

住ひ、彌平次舞臺の皆々を見渡して、悦ぶこなしにて、

彌平　ほゝお、皆一統に機嫌の體ぢやな。過分々々。（ト是れにて伴藏、傳吾、九助、駒八、權平、皆々はゝあと辭儀をする。）いや／＼、今日は其心配に及ばぬ。予も舊冬より、計らず風邪に冒され打臥せしが、此程やうやく全快に及び今日は床上げの祝ひとして、一家中打混じ、無禮講の酒宴を申し附けたる儀なれば、聊か上下の隔てなし。さゝ、碎けをれ／＼。

伴藏　はゝッ有難き其お詞、かねて仰せ渡されの儀ゆゑ、今日は少しも上下の隔てなく、

傳吾　我々始め中間小者に至るまで、打混じての御酒頂戴、

九助　へい／＼、いやもう天井拔けの大酒盛、是れがほんの、天下非番と申しませうか。

駒八　惣番振舞と申しませうか。

權平　呑んだり喰つたり跳ねたり飛んだり、

九助　いやもう、大どんたくをいたしまして、

三人　ござりまする。

ト中間三人も辭儀をする。彌平次見て嬉しきこなし、お光もこなしあつて、

お光　ほんに此やうにお目出たい事はござりませぬ、是れと申すも御不快中、當家の守り神たる稻荷の

社へ御願を掛け、御平癒をお祈り申し上げたるに、神慮にも叶ひしにや、早速の御全快ゆゑ、殿樣のお供にて御禮參りのお戻りがけ、

龍左　斯くお健かの御平癒は、一つにはお部屋お光樣の御丹精、中々早春の御容體にては、火急の御全快はあるまいと、心も心ならざりしに、是れなるお部屋樣が稻荷の祠へ晝夜の立願、神にも納受まし〱て、思ひの外なる此御快氣、家中一統の安堵といひ、殊には以てお家は磐石。

皆々　此やうなお目出たい儀はござりませぬ。

彌平　おゝ目出たいな。最早參詣も相濟む上は、上下打混じて一獻汲まん。皆の者も打ち解けて予も仲間入りをいたさせくれい。それ腰元ども、酒宴の用意いたせ。

腰元三人　畏りました。（ト以前の酒肴の外に見事なる臺の物銚子杯を、腰元三人して運ぶ事よろしくあつて、）

彌平　さ、皆此處へ一筵に、參れ〱。

龍左　それ殿樣の御意ぢや、石垣氏も藪坂氏も、夫の者共を一筵にお呼びなされ〱。

伴藏　はツ〱。これ〱九助を始め皆一同に、御前のお側へ參れ〱。

ト九助、駒八、權平もぢ〱して遠慮することなし、

傳吾　これさ、どうしたものだ、今日は其方共も殿樣もいはゞ同格同然だわ、胡座をかゝうと腹鼓を打

たうと、勝手次第にいたすがよい。

九助　へえ〻、そんならいつも大部屋に居るやうに、胡座をかいてもい〻のでござりますか。

龍左　よいとも〳〵、何でもいたすがよい。

傳藏　そこがお許しの出た無禮講だわ。

九助　これみんな聞いたか、殿樣の前で胡座をかいても構はねえとよ。

駒八　そいつは豪氣だ、さつきから向う臑がみり〳〵いつて居るわ。

權平　さあ〳〵遠慮は無沙汰だ、遣ッ附けようぢやあねえか。

九助　へい〳〵、お殿樣、お詞に隨ひまして、眞平御免なされませ。

ト九助先きに駒八權平胡座をかき、よろしく並ぶ。彌平次見て氣に入りたるこなしにて、

彌平　お〻うい奴〳〵、それでなければ面白くない、さあ是れからが酒ぢや。（ト彌平次杯を取上げ、）一つ注ぎやれ。

お光　どれ、わたしがお酌をいたしませう。（トお光酌をする。）

九助　左樣なら御免を蒙り、羽織と出掛けて、此丼で、一杯引つ掛けねえうちは、魂がすわらねえ。なう黑本尊。

駒八　さうだ〳〵、何でも早く呑んで廻した〳〵。

小菊　どれ、わたしがお酌をしませうわいな。

九助　いや、たぼの酌とは有難え、切見世のすべたか船饅頭より外に、つひぞ酒をついで貰つた事のねえ奴さんだから、是れぢやあ又呑めるわえ。（ト小菊酌をして九助呑む、彌平次こなしあつて、）

彌平　さゝ、龍左衛門一つ差し申さう。

龍左　はゝッ、有難う存じまする。

お雪　どれ、私がお酌をいたしませう。（トお雪酌に立つを彌平次見て、）

彌平　あゝこれお光、あの小間遣ひの雪は、踊りをよう踊るではないか。

お光　ほんにさうでござりました。今日は丁度幸ひ、殿様の御酒の肴に、何ぞ一つ踊りやいなう。

お雪　どういたしまして、私のやうな不調法者が。

彌平　はてまあ、何とあらうと今日の祝ひぢや。

伴藏　さあ〳〵。お雪どの、殿様の御意ぢや、こつちへ出たり〳〵。（ト伴藏傳吾お雪を無理に眞中へ押出し、）

皆々　さあ〳〵、所望ぢや〳〵。（ト是れにて地へ取つて、お雪ちよつと小短く振事あつて納る、）やんや〳〵。

彌平　何と龍左衛門、あの大部屋の者が、常々部屋の酒宴の時は、何ぞ隠し藝があるだらう、聞いて見

やれ。

龍左　成程こりやよいお慰みでござる。こりや〳〵九助、其方共が不斷大部屋にて酒盛りの時、甚九やら聲色やら、種々の隱し藝があるであらう、それを殿樣が御所望ぢや。さあ〳〵何ぞ遣れ〳〵。

九助　遣れとおつしやりやあ遣りますが、どうせ大部屋でする事は、碌なことはしませんのさ、前町の酒屋から酒を引きめんたんをするか、出入りの町人の棒先をゆたぶりに行くか、それでなけりやあ一文この引つぺがしか。

伴藏　これさ其やうな事は、酒の座敷の肴にならぬ。

傳吾　それよりは踊とか端唄とか、何ぞ陽氣な事をいたすがいゝ。

駒八　成程陽氣なことがいゝ。何でも思ふさま、ぶッ騷げ〳〵。

九助　面白い〳〵。さあ〳〵黑木尊、手前から先きへ何ぞ遣ッ附けろ〳〵。

駒八　何だ人ばかりそんでえに出しやあがる、手前は役當ぢやあねえか、手前が先きへ遣るが當りめえだ。

權平　そいつは尤もだ、さあ〳〵遣つたり〳〵。

ト權平駒八九助皿鉢などを叩く、思ひ〳〵饗盡しをする事あつて、トゞよき時分花道の揚幕にて、

呼ビ　吉田忠左衞門出仕。（ト是れにて皆々こなしあつて、）

作藏
傳吾　なに、吉田忠左衞門の出仕とな。

龍左　あの堅藏の聾親仁、未だ出勤の屆けもなき其内に。

作藏　押しての出仕は、殿を蔑ろにいたした始末、

傳吾　我々が參つて、御廣敷より追ひ返してくれう。

彌平　あゝいや〳〵。何を申しても少しも聞えぬかな聾、此處へ呼び寄せて話しを仕掛け、聞えた振りにて挨拶いたすを嘲弄なすも、また一興であるまいか。

龍左　成程こりや又、事が替つてお慰みにも相成りませう。

お光　龍左衞門どの、吉田様がお出でなら、萬事お前がよいやうに。

龍左　何事も手前が心得居れば、お心遣ひは御無用でござる。

ト彌平次龍左衞門ちよつと顔見合せて頷き合ふ、又揚幕にて、

呼ビ　出仕。

ト三味線入り序の舞になり、吉田忠左衞門少し更けたるこしらへ、上下大小にて出來る、舞臺の中間三人、氣味の惡きこなしにて坐り直すことなどある。此内忠左衞門舞臺下手へ控へる。彌平次見て、

彌平　あゝこりや〳〵忠左衛門、今日は豫て申し渡したる如く、無禮講の事なれば、上下の隔てには及ばぬこと。

お光　御遠慮なされず、是れへお出でなされませ。

ト忠左衛門少しも聞えぬこなし、あちこち睨めまはし、中間三人を睨みつけ、

忠左　こりやヤイ、其方共は徒士中間の分際で、殿の御前も憚らず、無禮至極の雜人ども、次ぎへ立て立て。

ト叱り附ける、龍左衛門引き取つて、

龍左　あゝいや〳〵吉田氏、今日は殿のお床上げの御祝儀とあつて、上下の隔てなく、無禮講の御催しなれば、夫の者共も此席へ參つたのでござる。（ト矢張り忠左衛門聞えぬこなし。）

忠左　なに、先刻より貴殿が仰せられても、承引いたさぬとな。

龍左　いやさ、左樣ではござらぬ、今日は殿よりのお許しなれば。（ト言ひかけるを、）

忠左　なに、まだ其上に過言を申せしとな。いや重ね〴〵の不屆き奴。

龍左　これさ、彼等の知つた事ではござらぬと申すに。（ト知つた事ではないと手眞似をする。）

忠左　いや龍左衛門殿おかばひなさるな、殿の御前でなくば、手討にいたしても苦しくない奴等。

龍左　こりや、何を申しても馬の耳に風とやら、いや呆れたものぢや。

忠左　いや呆れた奴等ぢや。下れ〳〵下り居らう。（ト是れにて九助始め三人もじ〳〵しながら後退りに後へ下る、忠左衞門彌平次へ向つてこなしあつて、）是れと申すも御家の掟、正しからざるゆゑの事、恐れながら祖父の代より既に三代、身不肖ながら當家の家老を勤むる某、御先祖よりの御儀式又は臨時の御祝儀事は格別、不斷朝夕淫酒の二つにお心を奪はれたまふ其時は、上を見習ふ下々ゆゑ、中間小者に至るまで君の御座所へ推參し、君臣父子の尊卑を失ひ、遂にはお家を亂すの道理、此後常々の御酒宴は堅く御禁制あらせられ、文武の道の御修行こそ肝要の儀と、恐れながら存じ奉つる。（ト彌平次こなしあつて、）

彌平　忠左衞門の詞尤もなる事ながら、今日は予が床上げの祝儀ゆゑ、主從共に睦じく斯く酒宴を設けたのぢや。他家へ養子の身の上なれば、家の爲にならぬ事は決していたさぬ、必ず心配無用にしやれ。

忠左　ちえゝ情ない、斯程まで申し上げても御酒宴は止みませぬとな、假令お聞濟みこれなくとも、家老の役目、御承引これあるまでは、拙者が一命召さるゝとも、いツかな此座は動きませぬ。

ト忠左衞門こなしあつて言ふ、彌平次持て餘したるこなし、龍左衞門に側へ行つてさういへといふこ

なし、龍左衛門呑込み忠左衛門の耳の側へ口を寄せ、

龍左　今日は殿様お床上げの御祝儀に附き、無禮講の御酒宴でござる。

トやう〳〵忠左衛門分りしこなしにて、

忠左　そんなら今日は殿様お床上げの御祝儀にて。

龍左　如何にも。（トさうだといふこなし、）

忠左　お床上げの御祝儀とあれば、少しも苦しうござらぬ、左様の儀なれば龍左衛門殿にも、仰せ聞けらるればよいに。いやとんだ間違ひでござる、はゝゝゝ。（ト彌平次杯を取上げ、）

彌平　忠左衛門、予が心祝ひぢや、一つ過しやれ。

忠左　はゝッ。（ト忠左衛門杯を取り、）御祝儀の御杯、有難く頂戴仕つりまする。

小菊　どれ、私がお酌いたしませう。

忠左　あゝいや〳〵、拙者は元より酒は一滴も呑み申さぬ、御祝儀の事なれば、御杯は頂戴いたした、此儘殿へ御返杯申し上げる。（ト杯を彌平次の前へ置き、）斯かる御酒宴の席に、老人は兎角邪魔な者、殊に此程の逆上より、どうやら耳も少し遠い様子、お話しのお伽も不都合勝、最早退出仕つりまする。

お光　御酒がならずば御祝ひの、御膳を頂戴なされませいな。

忠左　あゝいや〳〵、御酒は少しも呑み申さぬ。左樣に强られては、甚だ迷惑いたす。

お光　御酒と申したのではござりませぬ。お次ぎで御膳を。

忠左　いや、どうしても呑みませぬて。

龍左　すりや、吉田氏には最早退出めさるゝか。

忠左　はて、貴殿までがお勸めなさるゝか。拙者呑み隱しをいたすと思はれて、はゝゝゝゝ。

ト是れにて龍左衞門噴出し、

龍左　はゝゝゝ。(ト皆々笑ひを隱すこなし。)

忠左　どれ、お中の口から退出いたさうか。

ト唄になり、忠左衞門こなしあつて奧へはひる。皆々ほつとしたるこなしにて、

龍左　扨々聾といふものは、不自由なものぢや、おのれが申す事ばかり申して、此方で申す事は一ツばも分らぬテ。

作藏　それに御當家へ三代勤めるのを鼻に掛け、彥左衞門氣取りで、いやもう耳の聞える時分から、我儘氣儘の勝手親仁。

傳吾　臭い者身知らずとはよく言つた者で、今も何と申すと思へば、此程逆上のせるか耳が少々遠いやうだなどゝ、かゝ、かな聾の癖に押しの強い親仁でござる。

九助　いやもう私共などは、あの御家老が爰に長居をなされるかと、うんざりしましたが地體が性急なお人だから、思ひの外早く歸つたので、大仕合せといふもの。

駒八　どうして〳〵、あの人に長居をされて堪るものか、どんなお心善でも蟲持になりますわ。

權平　あんな野暮な人は、こちとの畠にはない仕事だ、南京米とでも交易してしまつたらよさゝうなものだ。

九助　違えねえ、牛ぢやァあるめえし、はゝゝゝゝ。

彌平　予も最前は面白う騒ぎかけたに、とんだ奴が參り居つて、酒が大分めいつたわえ、さあ〳〵又酒にいたさう、つぎやれ〳〵。（ト杯を出す、お光銚子を取り、）

お光　さつきから召上りましたが、又御氣分にでも障りましては。

彌平　何の〳〵、これしきの酒に、これから眞劒の酒盛りぢや。（ト杯へ酒を受けながら、）生の松の千代かけて、（ト謠をうたひ掛けこなしあつて、）いや、生の松と申せば、謠で思ひ出したが、伊東吉之進は如何いたしたな。

龍左　少々不快の由申せしが、餘りの遲刻。こりや〳〵九助々々。
九助　はツ〳〵。（ト前へ出る。）
龍左　其方は伊東が宅へ參り、先刻より殿樣のお待兼ね、早々御出仕いたさるゝやう、迎ひに參れ。
九助　畏つてござりまする。（ト立上る。此時花道の揚幕にて、）
吉之　あいや其儀には及ばず、伊東吉之進只今出仕仕りまする。
　ト三味線入り序の舞になり、花道より吉之進上下衣裳、大小にて出來り、花道よき所へ住ひ、
今朝未明より出仕仕つるべきの所、計らざる腹痛にて遲刻の段は幾重にも、御高免下し置かれませうなれば、難有く存じ奉つりまする。
彌平　おゝ吉之進か、早速の全快重疊々々、苦しうない、近う〳〵。
お光　先程より御前樣のお待兼ね。さゝ少しも早う。是れへ〳〵。
吉之　はゝ、然らば御免下さりませう。（ト矢張り以前の鳴物になり、本舞臺へ吉之進來る、）
彌平　今朝より不快と聞きしが、常に替らぬ汝が血色。なう、龍左衞門。
龍左　仰せの如く健かなる體を見受けまして、私共まで安堵仕ツてござりまする。
吉之　これは〳〵殿樣といひ、幡代氏までのお心添へ、此身に取りて如何ばかりか、有難う存じまする。

彌平　予も早春よりの病床に飽き果てたが、生れ附いて謠曲が好きな道ゆゑ、其方が謠にて毎度病苦を忘れ忝けない事であつた。

お光　ほんに御前の御意の通り、吉之進殿の謠といひ舞といひ、四座の太夫衆も、なか〳〵及ばぬ程の事でござんすわいなあ。

お雪　私共の分らぬ者が、拜見いたしてさへ、誠に面白い事でござりました。

作藏　いやそれは其筈ぢや、伊東氏の謠といひ舞といひ、此道へたづさはるものは知らぬ者はないと申すこと。

傳吾　拙者などは折惡しく、未だ一度も拜見いたさぬが、どうぞよい折に拜見いたしたいものでござる。

彌平　傳吾などはまだ見た事がないと申すか、丁度幸ひ今日の床上げの祝儀に、最前ちよつと思ひ出した、猩々を所望いたす。

吉之　これは〳〵一向未熟なる藝道を、御賞美に預り汗顏の至り、恐れ入り奉つりまする。

龍左　某も生得好きの道ゆゑ、少々は下地がござるが、なか〳〵貴殿には及ばぬ事、これより折々夜分推參いたせば、どうか御指南の下されい。

吉之　御指南などゝは思ひも寄らぬ、こりや御座興でござりませう。

ト此内彌平次杯を取る、お光酌をする、彌平次呑み干して、

彌平　吉之進へ差し申さう。

吉之　はゝ、御祝儀の御杯有難く頂戴仕つる。

ト吉之進杯を取り上げる。お雪酌をする。銚子に一雫ゆゑお光見て、

お光　お雪お銚子がないではないか。

お雪　ほんに粗相をいたしました。眞平御免遊ばしませ。

龍左　あゝいや〳〵、是れにお替へ銚子がござりまする。

お光　ほんに、さうでござんしたか、（トお光銚子を取つて、）どれ、わたしがお酌をしませうわいなあ。

吉之　是れは憚りでござりまする。拙者ことは御酒は元より、至つて不調法でござりますれば。

彌平　いや〳〵いつもならずとも今日は目出度い床上げの杯、なみ〳〵受けて予が所望の、猩々を一指舞うてくりやれ。（ト吉之進杯を取上げる、お光酌をする、）

作藏　こりや伊東氏にもなみ〳〵と、頂戴いたさずばなるまい、殿様の御意といひ、

傳吾　お部屋さまのお酌とは、こりやあやかり者でござるわえ。（トお光腰元へこなしあつて、）

お光　殿様は先程より餘程の間、もうお引けに間もあるまい程に、そなた衆は奥へ行て御寢所の支度を

しや。

腰元三人 畏りました。(ト小菊、お花、お雪奥へはひる。)

彌平 こりや龍左衛門、夫の者共には暇を遣はせ。

龍左 はゝツ、こりや／＼九助を始め皆の者、今日は終日大儀であつた、最早お暇が出たに依つて、部屋へ参つて氣兼ねなしに、一杯遣りやれ。

九助 へい／＼それは有難い仕合せでござりまする。左様なれば又引下りまして、頂戴いたしませう。

駒八 これ／＼役當々々、此殘物のお肴を、頂戴して行かうぢやあねえか。

權平 それがいゝ／＼。(ト以前の片寄せし肴を一つ皿へあけて權平持つて、)さあ／＼、是れだけあれば澤山だ。

九助 えゝ下司ばつた事をするなえ。

駒八 へゝ、あんまり下司ばらねえ風でもあるめえ。

權平 さあ／＼役當、早く行きねえ。

三人 へい／＼、有難う存じまする。

ト九助先きに駒八、權平下手へはひる。此内吉之進やう／＼杯の酒を呑みしまひたるこなしにて、

吉之　至つて御酒は不調法の私なれども、今日の御祝儀ゆゑに、一盞頂戴いたしましたれば、御覽の如く總身へ通じ、甚だ酩酊仕つッてござりまする。
お光　ほゝゝゝ、僅の御酒にあがらぬ方といふものは、可笑いやうでござりまするわいなあ。
彌平　吉之進は生得酒は嫌ひと見える、はゝゝゝゝ。さゝ其醉ひ醒しに先刻より、予が申したる猩々の一指所望いたす。
吉之　はゝ、畏つてござります。
　　ト吉之進扇を持ち思ひ入。龍左衞門も居住ひを直し、猩々の謠をうたふ、吉之進立掛り扇をさし舞に掛り、苦痛の思ひ入、「足許もよろ〳〵」といふ文句にて、吉之進どうとなる、
龍左　是れは伊東氏には、如何めされたな。（ト吉之進苦痛のこなしにて、）
吉之　俄に五臟惱亂なし、
彌平　五體が自由にならざるか。
吉之　仰せの如く手足とも、
龍左　自由にならぬは、藥の效驗。
吉之　えゝ、すりや今受けたる杯へ、

お光　わたしがついだあの酒は、五體叶はぬ祕法の毒藥。

吉之　えゝゝゝ、（ト大きにびつくりして、吉之進立上らうとして、どうとなつて血を吐く、）何ゆゑ我を毒殺なせしぞ。

彌平　吉之進、何ゆゑとは愚な事を。（ト凄味の合方になり、彌平次きつと思入、）われが心に覺えがあらう。兎角忠臣顔をいたすゆゑ、某當家へ養子に來り、一旦家督なしたれども、後年に及びなば小堀の血統左門之助へ所領諸共讓らねばならぬゆゑ、先づ忠義立てする横木田傳右衛門は、年貢不納の不調法を越度になして梵天國。

お光　また御家老の吉田忠左衛門は聾ゆゑ、あつてもほんの案山子も同然、其外家中の者共は當殿様に合體なし邪魔になるのは其方一人。

龍左　それゆゑいつそ手短かに、お床上げの御酒宴と表は言立て內證で、一杯呑した祕法の毒藥、三惡道へ一足飛び。何と膽が潰れたか。

吉之　むゝ、扨は當家へ養子に來りし其頃より、合點行かざる汝が振舞、朝夕心を附けたりしに、天知る地知る道理にて、叛逆の企てありと世の人口に相違なく、當家をば横領なさん巧みであつたるか斯かる惡計企みし上は、若殿左門之助様も先達てより、御病氣とのみ披露はあれど、御身の上も

氣遣はしゝ。

彌平　おゝ、いゝ勘の附け所だわ、一家中の者共へ病氣といふは皆僞り、先達て左門めが金龍山へ代參の戻りがけ、たつた一度の廓通ひを幸ひに、家の不爲と引捉へ。

お光　それを科に奥庭の、離れ座敷を牢となし、後の月より押籠めおき。

龍左　三度の食は扨ておいて、湯茶さへ碌々呑ませねば、肉は日々痩せ衰へ、此世からなる餓鬼道のみじめなざまは見せてえやうだ。

お光　其上、此まあ餘寒の烈しさでは、生きた所が最う四五日。

彌平　くたばりせえすりやまだ部屋住み、屆けを出せば後腹病めず、小堀の家はおれが丸呑み、やがてお光に男子を産ませ、實子に家督を讓るのだわ。

龍左　爰まで來りやあ最う直だ、おぬしは先きへ冥土へ行き、馬鹿若殿が行つたなら、十分忠義をあの世で盡せ、見りやあ見るほど主從とも、思へば哀れな死にざまだなあ。

吉之　揃ひも揃ひし大惡人、元の知行に比ぶれば大家の家督を讓り受け、其恩義をも忘却なし小堀の血統絕たんが爲、忠義の家來を追ひ退け、或は僞り此毒殺、これといふのも其起りは身許知れざるお光どの、兄辨長が惡事に與なし、それへ荷擔の龍左衛門、皆おのれが勸めゆゑ、やみ〳〵毒手

に陥りしか、ちえゝ殘念な。

ト吉之進拳を握り無念のこなし、お光このせりふを聞きこなしあつて、吉之進の側へ立掛り、

お光　何だ、わたしの身許が知れぬ、どうでそなたも死ぬ體、冥土の土産に聞いておきや。（ト合方きつぱりとなり、）元は湯島の天神前辨秀といふ門徒坊主、さる大寺をしくじつて、修行に歩く禪門の其妹のお轉婆者、十五の年から天神の茶見世も丁度女坂、登り下りの參詣に弄らるゝのが習はうより、馴れろとやらの世の譬、軒を並べた其中で跡へは引かぬお先き者、黄楊の木櫛に洗ひ髪、湯島のお勘と名を取つた我儘育ちの姉さん株、今年で明くれば三年跡、然も祭りの其時に、此殿樣のお目に留り、どこか秀佳に似た所から、おみつと名を替へお妾さま、蟲も殺さぬ顔をして遊ばせ詞で三つ指突き、性を隱して居るとも知らず、こんな深みへはまるとは、お前もぼんやりした人だね。

龍左　此龍左衞門も古狸、妲妃も及ばぬおてかけの其取持ちで御實家から、羂に狐の附人も、今用人となり濟ませど、元はでも茶や曲りなり、花の師匠とごまかして、名も一庵と野幇間、惡事に掛けちやあ、いき拔きのあの辨秀と一つ穴、化されるとは大腰拔め。

彌平　是れほど聞いたら吉之進、もう此世にやあ用はあるめえ、先きに待つてる大殿や、跡から追ひ附

く左門めに、地獄の底の伽話し、それを土産に早く死にやれさ。

ト是れを聞き吉之進無念のこなしにて、

吉之　ちえゝ殘念や口惜しや、惡いと知りつゝ斯くまでの、よもや惡事はなすまじと、今日が日までも捨置きしは我が一生の誤り、五體は毒氣に苦しむとも、やわか此儘死すべきか。（ト苦しみながら刀に縋りよろしくこなしあつて、）最う此上は冥土の道連れ、誰彼の容赦はない。一太刀なりと。

ト刀を杖に立掛らうとして血を吐き、よろしくこなしあつて落入る。龍左衞門側へ寄り、死に切つたかと窺ふこなし、

彌平　龍左衞門、息は絶えたるか。

龍左　脆い奴、すつぱりとくたばりました。

お光　なに脆い事があるものかね、此毒で堪るものかね。したが、もしえ、日を延すほど何かの障り、今宵の内に左門どのにも毒を用ひ、

彌平　成程、先んずれば人を制すの譬もあれば、

龍左　おツ片附けた其上で、世間へ病死と披露なし、

彌平　小堀の家は濡手で粟。

お光　さうなる時は表向。
龍左　あなたは直に奥方さま。
彌平　むゝ、目出たい、一つ注ぎやれ。
龍左　どれお酌を。（ト龍左衞門銚子を取るを、）
お光　あゝこれ、それはさつきの、
彌平　毒酒の方か。
龍左　えゝ。（トびつくりして銚子を落す。）
お光　とんだ粗相を、（トお光手拭を投つてやるを木の頭、）しつかりおしといふ事さ。
　ト お光彌平次に凭れかゝる、龍左衞門は以前の手拭にて拭ふ。此仕組よろしく、道具廻る。

（吉田宅の場）——本舞臺三間常足の二重、上手一間の障子屋體、正面の見附上手床の間、是れへ風雅なる掛物を掛け、花活へ花を挿し、眞中茶立口、間に合せ太鼓張りの襖、上下違ひ棚銀張り墨繪の地袋、此下手雪持の建仁寺垣、いつもの所枝折戸、此外舞臺花道とも一面の雪布を敷き、爰に甚六中間にて、赤合羽竹の子笠、竹箒を持ち、門口の雪を掃いて居る見得、半程より雪おろしにて道具納まる。

甚六　あゝ寒い〳〵、おそろしくまあ降るぢやあねえか、幾ら掃いても側から直に眞白になるから、何にもならねえ、是れよりはいつその事明日の朝積つたら、いちどきに溝へでも捨てる方がよかんべい。（ト竹箒をそこらへ片附け、）何にしてもあんまり寒いから、前町の湯はまだ拔きはしめえから溫まつて寢ると仕よう。（ト行き掛けて、）いや〳〵、湯に行くには合羽は邪魔だ、内へ置いて行かう。（ト合羽を脱ぎ枝折戸の内よき所へ置き、）あゝ合羽を脱いだら、猶々寒くなつて來た、どれ一風呂飛び込んで來よう。

ト甚六下手へはひる。矢張り雪おろし時の鐘合方になり、花道よりお杉好みのこしらへ下駄掛け、傘を持ち出來り、花道にて、

お杉　病氣ゆゑにお暇を願ひ、久しう宿へ下つて居て、やう〳〵病氣も直つたゆゑ、今日は御殿へ上らうか明日は全快屆けをせうかと、思つて居る其矢先きへ、昨日態々お使ひで當殿樣のお床上げの御祝儀ゆゑ、是非〳〵上れとおつしやるゆゑ、妹のお民に送られて上つて見ればあちこちの、樣子もからりと替つてゐる、それにまあお祝ひ日だと言ひながら、御殿は舞ふやら謠ふやら其賑かなお席にも左門樣がござらぬゆゑ、御前樣に伺へば只病氣ぢやとおつしやるばかり、どうも樣子がをかしいゆゑ、お小間使ひのお梅どのに内々樣子を聞いたれば、少しの仕落を言立てにお庭の

隅へ檻をこしらへお入れ申してあるとの事、聞いてびつくり合點行かずと、御殿の樣子を窺ふ所、今日も計らず吉之進樣が御急病とて血を吐いて御殿で御死去なされしとの事、どうもこりや常事ではあるまいわいなあ。どう思案をして見ても、心ならぬは左門樣、此儘にして置くときはどういふ凶事があらうも知れぬ。というて、思案せうにも女の事、只此上は御家老の吉田樣のお宅へ行き、一部始終をお話し申し、お力借りて今宵の内に、若殿樣をどうぞしてお助け申し上げねばならぬ。とはいふものゝ吉田樣は、此頃ではお耳が遠いといふ噂、密々のお話しには、はて困つたものぢやわいなあ。(トちよつと思案をして、)あゝ何であらうと、お目に掛つた上の事、さうぢや〳〵。

ト以前の鳴物にて本舞臺へ來る、此時奥にて、

忠左 新六は居らぬか、新六〳〵。(ト此聲を聞いて、お杉枝折戸の側へ寄り窺つて居る、忠左衞門奥より眼鏡を掛け讀みさしの本と手雪洞を持ち出來り、)あゝ、此新六めは何處へ行き居つたか、門口を掃いたり鉢前の植込の雪を拂つてやれと申したに、困つた奴ではある。(ト本をそこへ置く、やはり雪おろし。)あゝまだ〳〵大分降る樣子ぢやな、二月になつて此やうな大雪は珍らしい事ぢや、然しはや何時やらの事であつた、おれがまだ壯年の時分、三月の節句に赤い雪の降つた事もあつて、天地の間

というものは分らぬものぢやな。(ト是れにてお杉忠左衞門ゆゑ丁度よいといふこなしにて、)

お杉　はい、お頼み申しまする。少々お願ひがござりまして、上りましたものでござります。

ト忠左衞門聞えぬこなしにて、そこらを見廻し門口を見て、

忠左　むゝ、誰やら門口に居ると見えるな。誰ぢや〳〵、新六か。

お杉　はい、杉でござりまする。

忠左　誰だか一向物を言はぬな、誰ぢやと申すに。

お杉　はい、私でござりまする。

忠左　まだ物を申さぬ、呆れたものぢや、まさか幽靈でもあるまい、どれ〳〵。(ト忠左衞門雪洞を持ち切戸口へ來て傘の内を覗き、)おゝ、そなたは以前の御奉公人、お杉ではないか。

お杉　はい、杉でござりまする、御無沙汰ばかり申し上げまして。

忠左　此大雪によくこそ見えられた、さゝ、遠慮に及ばぬ、こちらへ這入らつしやれ〳〵。

お杉　左樣なれば、御免なされて下さりませ。

ト是れにて忠左衞門手焙をよき所へ置き、上座へ住ふ、此内にお杉も雪を拂ひ内へはひる。

忠左　定めて寒かつたであらう、ずつと此方へ來て、火邊へ寄つたがよい。

お杉　有難うござりまする、もうお構ひ遊ばしまするな、今日はお上のお床上げの御祝儀に附き、態々のお招きでござりまするゆゑ、今朝より參つて居りまするが、今晩こなた樣へ上りましたは、據ないお願ひがござりまして。（ト言ひ掛ける、忠左衞門やはり聞えぬこなしにて。）

忠左　そなたも久しう病氣と聞いたが、早速の全快で目出たうござる、そちが御殿へ上りしと聞かば若殿樣にも嘸かしお悦びなさるであらう、久々の事なれば、今宵はゆつくり話したがよい。

ト是れにてお杉こなしあつて、

お杉　もし御家老樣、その若殿樣の事につき、女子の思案に餘りまして、夜中ながらもあなた樣へ、御相談申し上げ、思召をば承つた上の事と存じまして。

忠左　いやも珍らしい雪ぢや、さゝ、もそつと火鉢の側へ寄りやれ、去年の暮病氣というて暇を取つて下りやつたは、聟でも取るかと思うて居たが、よく上つた。兎角古い馴染でなうては、とんと話しの出來ぬものぢや。（トお杉話しが合はぬゆゑ、困つたものだといふこなしにて、）

お杉　此樣子では噂の通り、餘程お耳がお遠い御樣子、何を申し上げても、こちらの事はあなたへ通ぜず、（トちよつと思案して少し聲を張上げ、）旦那樣に種々と申し上げたい事がござりまするが、口上で申し上げては世間の憚り、お硯箱を拜借いたして。（ト手で字を書く眞似をしながら言つて、門口へ

こなしあつて、）今宵につゞまる、お家の大事を。

忠左　これ。（ト内外へ氣扱ひのこなし、お杉聞えたかとびつくりして、）

お杉　や、あなたはお耳が。（ト是れにて忠左衞門刀掛の刀を手早く取つて、）

忠左　お杉、覺悟。（ト拔打ちに切りかける、お杉潛りぬけ見得よく留めて、）

お杉　こりや、何ゆゑに私を。

忠左　今まで包みし苦肉の計略、汝が口より我が聾は僞りなりと世間へ流布なす其時は、佞人讒者の舌頭に我が一命も斷たるゝ道理、左ある時にはお家の浮沈、是れぞ餘所ながら守護いたす左門之助樣の御身の上、それぢやに依つて。

ト忠左衞門又切りかけ、始終お杉の心を引き見るこなしの立廻り、ちよつとあつて留り、

お杉　さゝ、それゆゑにこそ此大雪を幸ひに、忍び參りし女の一心、若殿樣の御身の上委細をあなたへお話し申し、お賴み申せし其後は、何の命を惜しみませう。

忠左　すりや、それ程までに若殿を。

お杉　さあ過ぎ去りたまひし大殿樣の、海山深き御恩といひ、御幼少よりお附き申せし若殿樣の御身に拘はる御難儀を、どうまあ見捨て居られませう。（ト忠左衞門こなしあつて、）

忠左　む、、心底見えた。

お杉　すりや、お疑ひが晴れましたか。

忠左　お、、如何にも晴れた。〈ト忠左衞門門口へ來り枝折戸を明けて外を見て、元の所へ戻り、〉して、今宵來りし其仔細は。

お杉　さあ、あなたも薄々御存じでもござりませうが、御家中一統腰元まで、出入りを止めしあの奧庭、殊に若殿樣は御病氣とのみおつしやれど、影さへお見せなさゝぬゆゑ、お小間使ひのお梅どのに樣子を聞けば奧庭へ、牢をこしらへお入れ申し、三度の御食や召物まで碌々手當もせぬとのこと、此ほどのお寒さでは今宵の內にもお命が、危いと聞いた時の其悲しさ、どうぞお助け申して上げたいと、心一杯思へども、とても及ばぬ女の力、お願ひ申すはあなたばかり、どうか御思案遊ばされて、今宵の內に若殿樣を、お助けなされて下さりませ。

忠左　お、尤なるそちが詞、某とても佞人共の企みをば見出さん爲に、態と耳の聞えぬ體に持てなして、引籠り居つたるなれど、今日は當殿の床上げと取り〴〵囃すを幸ひに、御殿の樣子を探らんと屆けもいたさず出仕なし、暫く詰所に控へし所、吉之進が俄の變死、正しく毒害と存じたれば若殿のお命も、風前の燈火同然、某とてもまッその如く何卒手引きいたす者あらばと、千々に心を碎

けども、迂濶に口外ならざる時節。
お杉　あなたがさういふお心なら、女でこそあれ此杉が、命に掛けてもきつと御手引きいたしませう。
忠左　おゝ出來したく、さりながらもし仕損ずる其時は毛を吹いて疵の譬、必ず萬事に油斷なく。
お杉　石に立つ矢も女の念力、見事仕果せ若殿樣を、お手渡しいたしませう。さうして是れより落着く先きは。
忠左　それぞ幸ひ先達て筋違外にて計らずも横木田傳右衛門に面會いたせし所、牛込に浪居いたし居るとの事、宿所も篤と承はり置いたれば、直樣傳右衛門方までお供いたすであらう。
お杉　そりやよい御忍ばせ申す所でござりまする、したが、角物で打廻したる牢屋とあれば、一二三本も格子を切りませねば、お助け申す事もなりますまい程に、後程お出での其時に、鋸を御持參なされて下さりませ。
忠左　おゝ承知いたした、斯く治定の上からは、長居いたして、氣取られては一大事。
お杉　まだまあ御殿は酒宴最中、騷ぎに紛れて素知らぬ顏。
忠左　そんなら後方、九つの鐘を合圖に忍び寄り。
お杉　稻荷の祠の南の隅、御庭の小門を内よりして、閂取つておきますれば。

忠左　馬場の角にて待合さん。
お杉　必ず共に九つの、
忠左　合圖をそなた違ひなく、
お杉　合點でござんす。
忠左　さゝ、ちつとも早く、
お杉　どれ、お暇いたしませう。（トお杉門口へ來り、以前の傘をさして行かうとするを、）
忠左　あゝこれ、待ちや。
お杉　まだ、御用がござりまするか。
忠左　いや、假令屋敷内なりとも、女姿で若しひよつと、見咎められては事の破れ、其傘おいて是れなと羽織つて。（ト以前の新六の置いたる赤合羽を出して遣り、）
お杉　ほんに、是れではどうやら人目に、（トお杉傘をそこへ置き合羽を引掛け、）御免遊ばせ。
　ト手拭をかぶる。
忠左　隨分途中に心を附けて、
お杉　そんなら後程。

忠左　早く〳〵。

お杉　はい。

　　トこなし、雪おろし合方、お杉雪を踏分け花道へはひる。忠左衞門跡を見送り、感心のこなしあつて、

忠左　譜代御扶持を頂戴なし、妻子を養ふものですら、御家の存亡後になし、時世に諂ひ佞人讒者に引込まれ、若殿樣の御身の上知つても態と知らぬ顏、彌平次殿に媚びへつらひ、お髭の塵を拂ふといふは、ても淺猿しき世の人情、小堀の家も滅する時節か。それに引替へあのお杉、僅な恩義を忘却せず、身を殺しても若殿を救はうといふ眞心と比べて見れば雪と墨、左はさりながら世の中の、多くの人を尋ねても又と得難きお杉が實心。あ、女に稀な。（トこれを道具替りの知らせ）あ、忠義なものぢやなあ。

　　ト忠左衞門ぢつと思入、雪おろし寺鐘にて、此道具廻る。

（奧庭座敷牢の場）——本舞臺眞中より少し上へ寄せて、一間四方角物にて組みたる牢屋、此格子首の出はひり出來る程になし、此格子の內黑き幕張り、後に落すこと、下手の隅に出はひり出來るだけのひらき、是れもやはり錠を下し、上手莫大なる松の立木、此松ヶ枝牢屋の軒面まで這出で、邪魔に

ならぬ所へ、所々枝受けの杭などよろしく、日覆よりも同じく松の釣枝、所々に雪板、後庭の遠見、總て一面の雪持ち、舞臺花道ともに雪布を敷詰め、雪おろし、蛙の聲、誂への合方にて道具納る。と雪しきりに降り、花道より以前のお光、蛇の目傘をさし、跡より龍左衞門同じく傘をさし、風呂敷包みの重箱を提げ出來り、花道にて、

お光　最う今に如月も半になるに、時ならぬ此大雪、今宵は嘸かし積るであらう。

龍左　いやも此分では、どの位積るか知れたものではござりませぬ、然し此雪といひ殿樣は御全快なり、お寐間の睦言が思ひ遣られる。（ト是れにてお光舞臺の窂へ聞えては惡いといふこなしあつて、）

お光　えゝも、其やうな猥りがはしい事いうて下さんすな。

龍左　いや、是れは近頃粗相を申しました、いや粗相と申せば、今日は御酒宴の混雜にて、今朝ッから一度も御膳を差上げなんだ、嘸御空腹にござりませう。（ト態と大きな聲にて聞えろやうにいひながら本舞臺へ來ると、下手より縫包みの犬出で頻りに吠える）しッ〳〵、えゝ此畜生め、此方を誰だと思ふ、當殿樣のお部屋樣、如何に畜生でも餘り見さかひのない奴だ、此畜生め。

ト傘にて打ち、犬は下手へ逃げてはひる。と此時窂の中の黑幕落ちて内に若殿左門之助五十日鬘窶れし形にて居る、錠を明け潛りを開く、是れにて左門之助潛りの口まで來る、お光こなしあつて、

お光　若殿様、時ならぬ此大雪、嘸まあお寒い事でござりませう。もう少しの内の御辛抱、其内には私がどのやうにもお執成しをいたしまして、お樂にいたさせ申しまする程に、必ずきな〳〵思召しますな。御運の開くをお待ち遊ばすが、肝要でござりまする。

龍左　いやも、我々共に至るまで、晝夜心配いたし居りますれども、何を申すも只偏屈一遍に情を知らぬ吉田忠左衞門めが、お家のお爲にならぬ、嚴く御窮命させ申せと遮つて申しまするゆゑ、據なく斯かる御難儀、嘸御殘念でござりませう。

お光　ほんにあの忠左衞門殿が家老の權威を笠に着て、御先代よりの御家風を言立て、日頃からの我儘ばッかり。

龍左　それゆゑ當殿様も、他家より御養子の事なれば、押して斯うとも御意なされず。

お光　只お心の内にては、朝夕あなたの事を御心配遊ばしまして、お尋ねなされぬ日とてはござりませぬ。

龍左　然しこれが大した御放蕩を遊ばしたといふではなし、遠からぬ内には此締切をお出し遊ばして、御目出たくお目通りいたすやうに相成りませう。

お光　それはさうと今日は、御本家様方よりの御客來で、御殿の内は上を下、心は附いて居りながら、

つい〳〵此やうに遲なはりましてござりまする。嘸まあ御空腹でござりましたらう。

龍左　さあ、少しも早く召上りませ。（ト重箱を明けて出す、左門之助思入あつて、）

左門　いやもう、お光どのといひ龍左衞門、志しは忝ないが、いとゞ病の其上に、昨日今日とて猶更に餘寒の强さにとぢられて、胸の痞も一倍强く、湯も茶も喉へ通らねば、折角持つて來やつたなれど、其儘持つて歸つてくりやれ。

お光　そりやもうお食もおいやでござりませうが、少し我慢を遊ばしても、御膳をお上りなされねば、お體が疲れるばかり、少しなりともお上りなされませ。

左門　其やうにいうてくれるは忝ないが、所詮直らぬ我が病、それゆゑ食も喰べたうない。

龍左　いや〳〵、それは惡い御合點、後々は當家の御跡目をお繼ぎなされる御身分で、若し御軍役で戰場へでも臨んだ節に其やうな、腑甲斐ない思召しでは、中々行く事ぢやあござりませぬ、思ひ切つて召上つて御覽なされませ。

左門　いや〳〵龍左衞門、そちがどのやうに勸めても、中々喉へは通らぬわいの。

お光　でもござりませうが、それではお身のお爲になりませぬ。

左門　あゝ、もう〳〵何にも言うて下さるな。

龍左　はて扨、たつた一つ召上つて御覧なされませ。（ト重箱を突附けるゆゑ、左門之助じれつたきこなしにて）

左門　えゝ、喰られぬといふに。（ト重箱を拂ひのける。是れにて重箱落ちて中の結飯ころげ出る、）

龍左　是れは御短慮千萬な。（ト爰へ以前の犬出て、轉げたる結びを食ふ、）

お光　あゝこれ、犬めがそれを。

龍左　えゝ畜生め。

ト傘にて打つ、犬は毒に中りたるこなしにて、ぐる／＼と廻つてばつたり死ぬ、左門之助是を見てびつくりなし、

左門　犬めが忽ち、さては今のは。

龍左　あいや、横腹を打つたので一打に、いや、脆い畜生だ。

お光　こゝにあつては見苦しい、な、それ、跡で人目に掛らぬやう。

龍左　いつそ、此犬同様に。（ト龍左衞門いつそ殺さうかといふ思入、お光留めて、）

お光　はて、急いては事の、いやさ、折角持つて來た御膳を、

龍左　こんな奴めが相伴とは、是れがほんの犬骨とやら、

お光　其死骸をば水門から、

龍左　用水口へ流しませう。
お光　左樣なれば若殿樣、
龍左　明朝御目見得いたしませう。

ト龍左衞門は潛りを締め錠をおろし、お光と顏見合せうなづき合ひ、こなしあつて花道まで來る內、龍左衞門以前の鍵を落すこと、

お光　今の左門めが素振では、毒の入りしを悟りし樣子。
龍左　蟻の穴より堤とやら、なほ忠臣な奴等があつて、もし若殿が口走つては一大事、いつそ手短かに今宵の內に。
お光　なあにそんなにびく〳〵するには及ばないよ、大抵家中はこつちのもの、誰がこゝまで來るものかね、そんなに急ずと今夜らは、此雪で凍え死に死ぬかも知れないよ。
龍左　それもさうでござりまする、然しさつきから餘つほど手間を取りましたな。
お光　こんな事なら寒さツさらしに、來なくつてもよかつたものを。
龍左　大方御前樣がお床で、お待ち兼ねでござりませう。
お光　さあ、早く行かうぢやないか。

龍左　あんまり正直過ぎますよ。

お光　なあに、當り前だアよ。

トお光龍左衞門花道へはひる。左門之助牢の格子より顏を出して跡を見送り、

左門　あゝ和漢ともに女程實に怖しいものはない、口と心と裏表、詞に情は含めども、內心如夜叉と譬の通り、我が養父たる彌平次殿も當家へ來りし其頃は、斯くまで邪險にあらざりしが、あのお光が來りてより彼れが容色艷言に惑はされ、日々募る彼等が惡計、小堀の血筋を絕やさんと僅かな事を越度となし、捨殺しなる此牢屋、今日も朝から食事を斷ち空腹なるを附込んで、持つて來りし握り飯、食する時は犬同樣毒に中つて死せんもの、危い命は助かつても、出る事叶はぬ籠中の鳥、弓矢神にも見放され、よく〳〵武運に盡き果てた、賴み少なき身の上ぢやなあ。

ト左門之助思入あつて言ふ。矢張り雪おろし誂への合方になり、花道よりお杉、高からげ赤合羽竹笠をかざし、跣足にて出來り、跡を振返りこなしあつて、

お杉　今そこで見掛けしは、おてかけのお光どの、今一人は幡代龍左衞門、もしや見咎めらるゝ其時はわたしばかりか若殿樣の御身の上、まだまあ胸先がどき〳〵するやうぢや、あのまあ鵜の目鷹の目の二人のものが見附けぬも、是れもやつぱり天の助け、ちえゝ有難い。

ト本舞臺へ來り、下手にて合羽を脱捨て、四邊を窺ひながら牢屋の前へ來て、

お杉 若殿樣、左門樣。（ト是にて左門之助、又格子より顔を出して、）

左門 さういふ聲は、誰ぢや〳〵。

お杉 はい、杉でござりまする。

左門 なに、杉。（ト不審のこなし、）

お杉 若殿樣、杉めでござりますわいなあ。（ト是れにて左門之助お杉を見て、）

左門 おゝ、お杉か。

お杉 はい。

左門 お杉、逢ひたかつた、逢ひたかつたわいやい。

お杉 おゝ御尤でござりまする〳〵、斯ういふ事とは夢更知らず、このまあ淺ましい牢屋は、何事でござりませう、嘸御無念でござりませうわいなあ。

左門 さ、無念に思へど此身の薄命、推量してくれいやい。

お杉 それにまあお顔のおやつれといひ、大殿樣御繁昌の其折は、お乳の人やらお附やら、襖の風さへ當てぬやうお育ちなされし若樣が、此まア降積む大雪に障子一枚筵戸さへ、掛け拂ひなる此牢屋

身骨も凍るでござりませう、如何に胴慾ぢやというても、大抵限りのあつたもの、鬼にも勝りし彌平次樣。（トお杉向うを見、悔しき思入、左門之助もこなしあつて、）

左門　さ、お杉聞いてくりやれ、あの龍左衞門に勸められ、觀世音へ參詣の其時に、今に家督する時は來る事叶はぬ廓ゆゑ、話しの種にと吉原へたつた一度遊びに行つたを、家の爲にならぬとあつて彌平次が此牢へわしを押入れて、われは養子の事なれば斯かる苦患はさせたくないが、家老の吉田忠左衞門が物堅い性質ゆゑ、據なく取計ひしと、我に申せど其前より、彌平次お光が素振といひ、心ならざる事のみなれば、正しく彼等が僞り事。

お杉　そりや僞りも僞り、眞赤な僞りでござりまする、忠左衞門樣も私も斯かる御難儀遊ばす事は神ならぬ身の少しも知らず、只當分の御病氣と一家中へ御披露故、御當分の事とのみ存じて居りしに今日計らず、小菊どのに斯う〳〵と樣子を聞いて、びつくり仕樣かせまいものか、直にもお助け申したけれど、とても私一人ではと、忠左衞門樣のお宅へ行き、事の仔細をお話し申し御相談いたせし所、佞人蔓るお屋敷内、一先づ此場をお連れ申さうと、お約束を取り極め、今に九つの鐘を合圖に、これへ忍んで參られまする程に、お心を丈夫にお持ちなされませいなあ。

左門　そんならそなたと忠左衞門が言合せ、わしを救うてくれるとか、こりやまあ夢ではないか、そな

た衆二人の志し、死んでも忘れはおかぬぞや、え丶忝けない。とは言ひながら助けてくれるは嬉しいけれど、此牢には錠が下してあることなれば、出ようといふても出所はなし。

お杉　さ、それもお案じなされまするな、斯ういふ事と存ぜしゆゑ、今に忠左衛門様が鋸を持つてお出でなされ、格子を切つてお出し申すかねての手筈。（ト是れにて雪おろしへ風の音をあしらひ、お杉向うを見込み）や、向うへ誰やら、人影が。（ト立上り花道の方へ行かうとして、）あいた丶丶、（ト足へ鍵の障りしこなしにて取上げ、鍵へ附けある札を透し見て、）何、牢屋の鍵。（ト不審のこなし）牢屋の鍵と記してあるが、どうして爰に此鍵が。

左門　なに、鍵がありしとや、それこそ正しく今來たる、龍左衛門が落せしならん。

お杉　不思議に爰で手に入りしは。

左門　そなた衆二人の眞心を、神にも感應まし〳〵て、

お杉　御主人様を救へとある、

左門　心が屆いて其鍵を、

お杉　天より授けて下さりしか。ちえ丶忝けない。（トお杉こなしあつて鍵を頂き、牢の錠を明け戸を開く、内より左門之助出る、お杉いろ〳〵着附の前など直し、介抱しながら、）此まあお體のお痩せなされたこと

左門　何處も彼處も絲のやうに。それも其筈でもござりませうか、上る物さへ碌々に、此まあ寒さに此薄着、よくまあ今まで御辛抱なされました、ほんにお愛しう存じまする。此牢へはひつてより、其やうに言うてくれるはそなたばかり、多くの家來もありながら、如何に時世につるればとて、訪ぬる事は扨置いて、顏さへ見せし事もなく、それに引替へそなたの親切、譜代の家來といふでもなく、僅の恩義に斯くまでも心を盡しくれるとは、これお杉、忝けないぞや、嬉しいぞや。（ト左門之助お杉に縋り、嬉し泣きに泣く。）

お杉　何のまあ其お禮に及びませう、僅か一季半季の御奉公でも御主に替りがござりませうか、それに取分け私は、先殿樣や奧樣の、御不便受けし其事は、寐た間も忘れはいたしませぬ。それに比べて見ますれば、是れしきの事いたしたとて、萬分が一九牛が一毛とやら、何のあなたが其やうに御斟酌に及びませう。

左門　何の〳〵、そなたがなければ此わしは、牢屋の内で朽果てゝ、小堀の血筋もこれ限り。

お杉　さあそれゆゑ大事のあなたのお體、此上ともに御用心なされねばなりませぬ。

左門　さ、用心といへば、お杉聞いてたも、最前もお光と龍左衞門と結びを持つて連れ立ち來り、わしに喰べよと勸むれども、どうも心が濟まぬゆゑ、拂ふ拍子に落ち散りしを、わしが常々祕藏にし

た、犬めが來居つて其結びを、喰ふと其まゝ血を吐いて死んだわいの。
お杉　そりやまあ危い事でござりました、そんならやつぱりあなた樣を、毒害せんとのお光どのゝ惡巧み。それに引替へ畜生でもあなたの御恩を忘れずに、毒を喰て死んだのは、お身替りに立つたも同然、可愛い奴でござりまする。（ト此時九つの鐘鳴る。）
左門　ありや最う、善光寺坂の九つの鐘。
お杉　九つなれば忠左衞門樣が、お出での時刻。
ト花道より忠左衞門、着附尻端折り大小鋸を持ち出で、花道にて跡を振返り窺ひ、直本舞臺へ來り、
忠左　そこに居るのは、お杉か。
お杉　忠左衞門樣でござりまするか。（ト是れにて忠左衞門左門之助を見て、）
忠左　やゝ、左門樣をどうして牢より。
お杉　さゝ、聞いて下さんせ、爰に丁度鍵が落ちてあつたゆゑ、直さまあなたをお出し申してござりまする。
忠左　それといふのも神佛の加護、ちえゝ忝けない。
左門　あゝこれ、忠左衞門、逢ひたかつたく。何かの話しは杉より聞きしが、よう今宵來てくれた。

忠左　何かの話しは後でのこと、屋敷の内は佞人共、晝夜に限らず徘徊なせば、見咎められぬ其内に片時も早く御支度を。（ト忠左衞門せり立てる。左門之助もこなしあつて、）

左門　實に尤、そんなら直樣。（ト歩かうとしてひよろ〳〵となるを忠左衞門介抱して花道の方へ行掛け、）

忠左　これより裏手の塀を破り、外へ出れば背負つても、拙者がお供申しまする、おせつなうはござりませうが、御屋敷外まで御歩行なされませ。

ト忠左衞門介抱して花道へかゝる。此以前より花道舞臺とも雪頻りに降る、お杉見遣つて、

お杉　とはいふものゝ此の御病氣、あなた一人で途中の程も、私も一緒にお供して。

忠左　其心配も尤なれど、そなたは一先づ跡に殘り、屋敷の樣子を糺し、

左門　委しく文にてそちが宅まで、

お杉　そんなら私は跡に殘つて、何かの事を、

忠左　頼むはそなた、たつた一人、

左門　積る恨みは彌平次お光、

お杉　春の雪解と諸共に、

忠左　いつかあなたの汚名も晴れ、

左門　曇らぬ心は神かけて、

お杉　吹き拂ひたるまがつみの、

忠左　雪にすゝぐの聲あれば、

左門　やがて目出たう、

お杉　御家督を、

忠左　先づそれまでは、

左門　暫時の別れ、

お杉　若殿樣、

左門　お杉。（ト双方別れを惜しむこなし。忠左衞門左門之助の手を取つて）

忠左　さゝ、ござりませ。

ト風の音、雪しきりに降る。忠左衞門左門之助を介抱し、吹雪をよけながら花道へかゝる。お杉は、延上り〳〵見送り、たぢ〳〵となつて松の枝受けの杭へ打ツつかる。是れにて枝より雪のかたまりお杉の體へ落ちかゝり、ぱつと散る。是れを木の頭。お杉は雪を拂ひながら兩人を見送る。忠左衞門は左門之助を介抱しながらはひる。双方一時に、よろしく

ト雪おろしつなぎにて、道具出來次第直に引返す。　ひやうし幕

二幕目

青山小堀邸の場
谷町了念寺の場
同　西寺町の場

〔役名〕――腰元お杉、湯灌場小僧吉三、幡代龍左衞門、齋坊主辨秀、小堀彌平次、中間九助、了念寺の番僧雲貞、洗濯屋お虎、寺男權兵衞。小堀妾お光、腰元小菊、同桔梗等。〕

〔小堀奥庭の場〕――本舞臺三間の間中足の二重、大和葺の本庇木緣附き、前側塗骨障子を立廻し、向う銀襖、上の方一間折廻し塗骨障子、下の方大和葺屋根附の中門、明立あり、左右土塀、上の方に誂への松の木、石の手水鉢總て小堀屋敷奥庭の體。爰に○△紺看板中間裝にて竹箒を持ち、掃除をして居る、調べにて幕明く。

△　コウ雨と違つて雪は降つても、早く掃いて片附けりやあ、降つたか降らねえか知れねえ。

○　隨分昨夜は積つたが、何といつても春は春だけ、やはらけえから解けるが早い。

○それに又二人とも、折助根性を少しも出さず、骨ッきり掃いたから、すつかり乾いた。

△然し少さな屋敷でも御玄關前からお庭まで、道程にしたら一町ばかり、隨分長い町場だから腕も腰もめり〳〵いふやうだ。

○早く仕舞つて湯へでもはひり、昨夜貰つた酒がまだ、五合ばかり殘つてあつたが、雪を掻いた骨折賃に、龍左衞門樣へお願ひ申し、最う一升もついで貰ひ、

△前町の魚屋に鮪のあらがあつたから、あいつを買つて葱と煮込み、胴骨でも甜ぶりながら、鮫ケ橋ののろけでも言つて、茶碗でぐい〳〵やッつけよう。

○そりやあさうと、九助はまだ今朝から逢はねえが、何處ぞへお使ひにでも行つたかな。

△あいつァ奥の受けがいゝので、中門から內を掃除に行つたが、女中衆にでもからかつて居るのだらう。

○お光さまの氣に入りだから、酒でも呑んで居るかも知れねえ。

兩人 氣の惡い話しだなあ。

ト下手中門より前幕の九助、箒を擔ぎ、誂へ丸の內に杉といふ字の銀簪を持ち出て來る。

九助 おゝ、仲間の手合、こゝに居たか。

○　九助か、今も噂をして居たところだ。
△　何處へ掃除に行つたのだ。
九助　おらあ奥庭へ掃除に行つたが、それに附けて龍左衞門様にお目に掛りたい事があるが、手前達は知らねえか。
○　さつきお玄關前でお見掛け申したが、大方お詰所にござるだらう。
△　誰ぞに呼んで貰ひたいものだ。（ト九助が持つて居る簪を見て、）
○　こう九助、手前が持つて居る簪は何だ。
九助　こりやあ今、奥庭で拾つたのだ。
○　そりやあ豪氣なものを拾つて來たな、捨賣りにしても銀だから、一分や一分二朱にやなるだらう。
△　今一杯遣らうといふ所だ、しやも鍋でも奢らッし。
九助　どうして／＼酒所ぢやあねえ、此簪を拾つたので、龍左衞門様にお目に掛りたいのだ。
兩人　そりや又どういふ譯で。
九助　いや、大變な事があるからだ。（トやはり調べにて上手障子を明け、前幕の龍左衞門袴大小にて出て、）
龍左　こりや九助、身共に逢ひたいとは何事ぢや。

九助　龍左衞門樣、大變な事がござります。
龍左　大變とは氣遣はしい、如何なる變事が出來たのだ。
九助　今奥庭の檻の前で、此簪を拾ひました。（ト簪を出す。）
龍左　なに檻の前でこれを拾つた、はて誰が落したか。
九助　さあ、落した主は知りませぬが、檻の戸が明ッ放しで、中にござつた左門樣が、影も形もござりませぬ。
龍左　やあ。（トびつくりなし。）して、檻の戸は破つて明けたか。
九助　いえ〳〵鍵で明けたと見えて、錠も鍵もござりました。
龍左　なに、錠も鍵も側にあつた。（ト思ひ出せしこなしにて。）扨は昨夜犬を打つ時身共が鍵を落したか知らぬ。此簪の持主も大概それと覺えがあるが、察する所何者か手引をなして左門樣を、連出したに違ひない。
九助　何と、大變でござりませう。
兩人　成程これは大變だ。
龍左　して此簪を拾ひ取つた、其邊の雪に足跡はなかつたか。

九助　ござりました〳〵、然も男と女が來たか、揃はぬ足跡がござりました。
龍左　何れの方へ參つたか、其足跡をそち達も共々行つて見て參れ。
九助　畏りました。
○△
龍左　他聞の憚り、竊にいたせ。
皆々　はあゝ。（ト調べにて九助先きに兩人附いて下手中門の内へはひる、龍左衞門跡を見送り）
龍左　丸の內に杉といふ字の此簪は、腰元のお杉がさして居たやうだが、何者が連出したか、打捨ておかれぬ一大事。何にもせよ此事を殿樣やお光樣へ、少しも早くお知らせ申さん。
ト此時正面障子の內にて、
彌平　知せに及ばぬ、樣子は聞いた。
ト誂への合方になり、障子を左右へ明ける。內に前幕の彌平次着流しにて搔卷を引掛け褥の上に住ひお光煙草盆を控へ、煙管を突いて居る。龍左衞門はツと辭儀をなし、
龍左　すりや、御前には疾くより是れに。
お光　昨晚の御酒がまだ醒めず、御前と共にとろ〳〵と、睡るともなき夢の內。
彌平　下部が聲に目が覺めて、樣子を聞けば奧庭の檻を破つて左門殿を、奪ひし者があるとやら。

お光　其ほとりに簪が落ちてあつたとあるからは、手引をせしは女子の內、一詮議せにやなりますまい。

彌平　して、證據になるべき其簪は。

龍左　卽ち是れでござりまする。（卜件の簪を出す、お光取つて見て、）

お光　丸の內に杉といふ字の此簪は、誰も知る御殿に古き杉が簪。

彌平　扨は病氣で宿へ下り、昨日上りし杉めが仕業か。

龍左　慥に是れは家中の內に、荷擔人あるに極りました。

彌平　荒立ては他家への聞え、先づ穩便に事をしやれ。

龍左　畏つてござりまする。（卜下手より九助出來り、はツと平伏なす。）おゝ九助、足跡は如何であつた。

九助　はツ、篤と改め見ましたが女と男の足跡にて、男の方を附けましたれば、裏手の塀が一枚程切破つてござりまする。

彌平　なに、裏手の塀が切破つてあつた。

お光　何者が荷擔人なるか。

彌平　傳右衛門を追放なし、吉之進を片附けたれば、跡に殘るは忠左衛門、聾親仁只一人。

龍左　馬鹿忠義を盡す奴ゆゑ、彼が仕業かも知れませぬ。
　　下ばた〳〵になり、下手より袴一本差しの侍出來り、
侍　はッ、龍左衞門殿お取次ぎ下されい。
龍左　何事でござる。
侍　はッ、お訴へ申し上げるは、拙者が隣家吉田忠左衞門が召仕新六と申す者只今拙者方へ參り、主人忠左衞門昨夜よりいづく〳〵參り候か、只今以て歸り申さず、御屆けに參りしと申すゆゑに、取敢ず宅へ參つて見ましたる所、衣類道具を取散らし、正しく出奔なせし樣子、隣家の事ゆゑ御訴へ申し上げまする。
龍左　御訴への趣き承知しました、忠左衞門出奔とあれば、火の元萬端お氣を附け下されい。
侍　畏つてござりまする。（ト引返しはひろ。）
龍左　出奔なせしとあるからは、忠左衞門が若殿を連出せしに違ひない、手引きをなせしお杉めが、素知らぬ振りで居るこそ幸ひ、彼女を引出し詮議いたさば、事明白に分りませう。
彌平　杉めは當家に子飼より久しく勤め居る者ゆゑ、我を始めお光をば恨んで居ると申すこと、それゆゑ左門が手引きをなし、奪はせたに違ひない。思へば憎き下司女、手酷く拷問いたすがよい。

ト彌平次急き立つ思入。

お光　あゝもし御前、手酷く拷問なされては、却つて白狀いたしますまい、高が女子の事なれば其簪を證據となし、騙し賺さば言ひませう。

龍左　そこは拔らぬ龍左衞門、或は手酷く或は騙し、氣長に白狀いたさせませう。

彌平　もし又手強く白狀せずば、括し上げて打ちすゑれば、九助は部屋の割竹と成敗棒を持參いたせ。

九助　はッ、畏つてござりまする。

お光　龍左衞門殿は御苦勞ながら、逃さぬやうに杉を是れへ。

龍左　何氣なき體に持てなし、召連れまして詮議いたさん。

彌平　斯樣な密事も壁に耳あり、勘附ぬうち片時も早う。

龍左　心得ましてござりまする。

ト合方になり、龍左衞門先きに九助附き下手へはひる。後合方彈き流し、

彌平　忠左衞門が俄頓も合點行かずと思ひしが、察する所計略ならん、何れへ左門を連れ出せしか足利殿へ進達されなば、小堀の家に拘はる大事。

お光　手引をなせし杉めを呼び寄せ、詮議なしたら忠左衞門が、其行く先きも知れませう。

彌平　行方知れなば多勢を以て、奪ひし左門を取返し、

お光　傳右衞門や忠左衞門を、自滅させねばあなたもわたしも、枕を高く臥せられませぬ。

彌平　時日延さず片ッ端、刀の錆としてしまひ、表向きにて小堀家を、我が手に握る時節到來。

お光　あもし、他聞を憚る一大事、お靜かになされませいな。（ト奥より腰元小菊出來り）

小菊　はツ、お光さまへ申し上げます。

お光　何ぞ用か。

小菊　お兄さまの辨秀さまが、只今お出でなされまして、あなたへお目に掛りたいとおつしやつてござりまする。

お光　兄さんが逢ひたいとは、又いつもの無心であらう。今逢はれぬと言うてくりやいの。

彌平　これ、折角遠方から尋ねて來たに、ちよつと行つて逢つてやれ。

お光　兄さんの參りましたは、無心に違ひござりませねば、待たしておいてもようござりまする。先づそれよりは捨ておかれぬ、詮議が大事でござりますわいな。

彌平　成程おぬしのいふ通り、辨秀はあとでもよい、酒でも出して待たしておきやれ。

小菊　畏りました。（ト小菊奥へはひる。）

彌平 龍左衛門が最う杉を、召連れて來さうなものぢやな。

お光 今に進れて參りませうわいな。（ト時の鐘、床の淨瑠璃になる。）

〽今や遲しと松ケ枝の、意地くね惡き龍左衛門、中戸開いて案内も、我が身の科に胸塞り、お杉はおづ〳〵出兼ぬれば、

ト彌平次お光煙草を呑みながら囁く思入、よき程に下手の門を開き、龍左衛門先きにお杉思入あつて出來る。

龍左 さあお杉、遠慮せずと出たがよい。

お杉 殿樣が居らせられますれば、恐れ多うござりまする。

彌平 お〻杉か、苦しうない、近う〳〵。

お杉 仰せではござりまするが。（ト後へ下る。）

お光 ちと尋ねたい事がある、遠慮せずと是れへ來やいの。

龍左 さあお光さまのお詞、ずつとお側へ行つたがよい。

お杉 左樣なれば、お許し遊ばしませ。

〽會釋こぼして進み寄り、（トお杉眞中へ住ひ、龍左衛門は上手へ控へ居る。）

私へお尋ねとは、何事でござりますぞいな。

お光　尋ねたいは外でもない。これ杉、今そなたに聞く事があるが、何事に依らず有體に、隠さずに言ふてくりやいの。

〽四邊見廻し聲潜め、

ト誂への合方になり、お杉扨はといふ思入あつて、

お杉　何事かは存じませぬが、存じました事ならば、

お光　言うてくりやるか。

お杉　はい、申し上げいで何といたしませう。

お光　言うてくりやるとは、嬉しいわいの。

お杉　して私へお尋ねとは。

お光　奥庭の離れ家に、お出でなされた左門様、そなたが知つて居るであらうの。

お杉　え、

〽問はれてはツと思ひしが、お杉は素知らぬ風情にて、

左門様が、どうぞ遊ばしましたか。

お光　さあ此間からの廓通ひ、お身持がよからぬゆゑ、お爲を存じ放れ家へ御窮命おさせ申しましたが昨夜夜更けて檻を破り、左門樣のお行方知れず、何者の仕業なるか、そなたが知つて居るとの事誰だか言うて聞かしやいの。

お杉　いえ〳〵、それは一向に私は存じませぬ。御存じの通り不快にて、お暇願ひ宿へ下り、やう〳〵病も直りまして、昨日のお目出たに上りました私ゆゑ、左門樣を其やうに御窮命遊ばすも、今あなたから承はりますが、初めてゞござりますわいな。

お光　これ杉、まざ〳〵ととぼけやんな、そなたが手引きで左門樣を、聟親仁の忠左衛門が連出せしといふ事は、慥に聞いて居る。けれどそなたの口から聞きたいから、此やうに頼むのぢや、定めて言うたらどのやうな目に逢はうかと思ふであらうが、有體に言ひさへすれば、其儘に濟むことぢや、どうぞ言うてくりやいの。

お杉　其やうに私へ事を分けておつしやるもの、存じました事ならば、何しにお隱し申しませう、夢更存じませぬ事ゆゑ。

お光　まだ其やうな事を言やるか、達て言はねばどのやうな、責に逢はうも知れぬぞえ。其苦しみ見せぬ内に、わたしに早う言やいの。

お杉　何やうにおつしやりましても、存じませねば申されませぬわいな。

〽誠しやかに言ひければ、聞く彌平次は急き立ちて、（ト彌平次思入あつて、）

彌平　やあ隱し立てする憎き女郎め、光が申す詞を用ひず、しら〴〵しい其言譯、拷問せずば白狀せまい。それ龍左衞門、打ち据ゑて白狀させい。

龍左　はッ、御諚にはござりまするが、手酷い拷問いたさずとも、元より存ぜし事なれば申すに違ひござりませぬ、先づ〳〵拙者にお任せ下さりませ。

〽殿を宥めて龍左衞門、お杉が側へ差寄りて、（ト龍左衞門彌平次を留めお杉の側へ來り、）

これ〳〵お杉、なぜ有體に言はぬのだ、お光さまがあのやうに、物柔らかにおつしやるに、なぜ包み隱して言はぬのぢや、早く言つたがよいではないか。

お杉　今も申し上げます通り、存じました事ならば何しにお隱し申しませう、左門樣の御窮命さへ存じませぬ私ゆゑ。

龍左　まだ〳〵そんな事を言ふか、忠左衞門と言合せ、おぬしが手引きで左門樣を、盜み出したといふ事は、慥に目串が附いて居るのだ。

お杉　何を證據に其やうな、覺えのない事おつしやります。

龍左　そなたが手引きなしたといふには、證據があるゆゑ申すのぢや。

お杉　して其證據とおつしやりますは。

お光　〽言ふにお光は最前の、拾ひし簪取出し、（トお光以前の簪を出し、）

お杉、此簪を存じて居やうな。

お杉　え〻。

〽見れば覺えの簪に、拔き差しならず是非なくも、（トお杉ハツと思入あつて、）

お光　はい其簪は、私の簪でござりますわいな。

丸の内に杉といふ字の二重文字の紋附、誰知らぬものもないそなたの簪、通路を止めし奧庭の

檻の口に、此簪が落ちてあつた上からは、よもや知らぬとは言はれまい。

龍左　忠左衞門と語らうて、そちが手引きをなしたであらう。さあ、有體に言つてしまやれ。

〽言はれてはつと思ひしが、遁れるだけはと詞を返し、（トお杉ちつと思入あつて合方になり、）

お杉　成程それは私の簪でござりますが、お床上げのお祝ひに、女中同士とゝち狂ひ、どこへ落しま

したかと、今朝から捜して居りましたが、どうしてそれが奧庭の檻の口にござりましたか、とん

と合點が參りませぬわいな。

〽素知らぬ體に言ひなせば、氣早の彌平次進み出で、

彌平　斯かる慥な證據があるに、素知らぬ風情はふてぐしい、身が手をおろして拷問なさん。

ト立ち掛るをお光留めて、

お光　あゝもし御前、お待ち遊ばせ、あなたがお手を下さずとも、龍左衞門がいたしまする。

彌平　それぢやと申して、べんくとまだるいゆゑ。

お光　左樣ではござりますが、先づくお待ち遊ばしませ。

彌平　然らば早く打ち据ゑい。

龍左　はッ、畏つてござりまする。

〽袴の裾を端折りあげ、（ト龍左衞門股立を取りながら）

やあく九助、用意の品を是れへ持て。

九助　はあゝ。

〽はッと答へて切戸より、割竹あら繩携へ出で、

ト下手の門より、九助あら繩と割竹を持ち出來り、

豫て仰せの割竹荒繩、持參仕ッてござりまする。（ト龍左衞門これを取つて）

龍左　これお杉、これを見やれ、白狀せねば縛り上げ、此割竹でぶつて〳〵、背中の皮の破れる程、憂き目に逢はせて言はせるぞ。それよりは痛い目せぬうち、早く白狀してしまへ、餘人と違つて龍左衞門ぞつこんおぬしに惚れて居るから、打擲なすも不便に思ふわ。犬も朋輩鷹も朋輩、惡い事は言はねえから、有體に言つてしまへ。

お杉　さあ、存じた事なら申しまするが、實に私は存じませぬから。

龍左　すりや、どうあつても申さぬか。

彌平　やあ、まだ〳〵手ぬるい〳〵。それ九助、杉めを縛りあげい。

九助　はツ、畏つてござりまする。

〽元より不敵の中間九助、小腕取つて捻り伏せ、情容赦もあら繩にて後手に括りあげ、繩先き取つて引据ゆれば、

ト九助お杉を捻伏せ、繩にて後手に縛りあげる、お光これを見て、

お光　これ杉、痛い目するのは心柄、情を知らぬ主人だなどゝ必ず人を恨むなよ。

九助　なに、あなた樣を恨みませう、言ひさへすれば打たれぬのに、言はぬから打たれるのだ。

龍左　さあ有體に白狀せぬか。白狀せねば、割竹で、打つて〳〵打ちのめすぞ。さあどうだ〳〵。（ト此

内龍左衞門割竹にてお杉の額を突き〳〵きり〳〵言はぬか。

お杉　え〻、存じませぬわいな。

龍左　いけ強情な女郎だな。

〽直なる竹も邪の、龍左衞門が腕任せ、りう〳〵ハツシと打ちすゆれば、其儘どうと伏轉ぶを、すかさず九助が引附くれば、繩は腕へくびれ込み、あなたこなたへ這ひ廻るを、めつた無性に續け打ち、

ト文句の通り龍左衞門お杉を割竹で打つ、お杉打ち倒され、どうとなるを、九助繩を手繰り引附けよろしくある、

お杉　どうぞお許しなされて下さりませ。

龍左　許してやるから、白狀するか。

お杉　それぢやというて、存じませねば。

龍左　知らぬと言へば許さぬぞ。

お杉　はあ〻。（ト泣く。）

彌平　それ、もつと打て〳〵。

龍左　はッ、さあ吐かさぬか〳〵。

〽又も手酷く打ちする〳〵れば、霜夜に弱る蟋蟀の、手足も利かず這ひ廻り、

ト床の合方になり、お杉思入あつて、

お杉　假令どのやうに打たれましても、元より覺えのない事なれば、申し上げやうがござりませぬ、お疑ひが晴れませずば、打ち叩きをなされませずと、いつその事一思ひに、早う殺して下さりませいな。

彌平　いや〳〵有體に言はぬうちは、一思ひには滅多に殺さぬ、氣を失はゞ藥を呑ませ、生しては殺し生しては殺し、言はぬうちは、拷問なすぞ。

お光　常から弱いそなたの體、殊には長の病氣擧句、痛いめせずと言へばよいのに。

龍左　さあ拷問に逢ふが苦しくば、左門樣を何れへ落した、其行先を吐かしてしまへ。

九助　これ程いふに白狀せぬとは、ても强情な女だなあ。

彌平　所詮たゞでは白狀せまい、幸ひ是れなる松ヶ枝へ、縛つた儘につるし上げ、ぶり〳〵に掛けて白狀させせい。

九助　はッ、畏つてござりまする。さあお杉どの、こつちへござれ。（ト繩を引く）おゝぶたれたので

動かれねえか。どれ、おれが抱いてやらう。いや、抱き心のいゝ體だなあ。

〳〵縛つた儘に抱きあげ、頬摺りなすを喰ひ附けば、

ト九助お杉を抱きあげ、頬摺りなし、口を吸はうとするを、お杉喰ひ附く、

あいたゝゝゝゝ、よく酷い目に逢はしたな、今意趣返しをして遣るぞ。

〳〵しだれし枝に縄打ち掛け、力任せに引きあぐれば、腕を肩へ釣りあげられ、縄は喰込み堪へ難きも、お主大事と思ふの一心、死ぬる覺悟に齒を喰縛り、苦しさ怺へるお杉が忠節。

ト此内九助縄を松の枝へ掛け引上げる、仕掛にてお杉宙へ引揚げられ、苦しき思入よろしくあつて、

お杉　あゝ苦しうございます〳〵、どうぞ殺して下さりませ、お慈悲でございますお情でございます、もし龍左衞門樣、早う殺して下さりませ。

龍左　どうして〳〵殺すものか、殿の御身に拘はる大事を、仕出したる横道者、左門樣を何處へ遣つたか其行先きを言はぬうちは、拷問なして苦痛をさせる。早く言はぬと今に此手が、くびれ込んでもげてしまふぞ。さあどうだ〳〵。それ、そちらへ廻るか、それ、こちらへ廻るか。

ト龍左衞門此内お杉を打つ、これにてくるり〳〵あちらへ廻る、

彌平　扨々彼奴は死太いやつだ。（ト傍にある杯を取り、）光、あれを肴に一杯呑まう。

お光　お燗がぬるうございます。これ、誰ぞ居ぬか、お燗のよいのを持つて來や。

小菊　はあゝ。

〽はツと答へて一間より、銚子携へ立ち出る小菊、お杉を見るよりびつくりなし、

ト奥より腰元小菊銚子を持ち出來り、お杉を見て、

や、こりやお杉どのには。

お光　なに、お杉がどうした。

小菊　いえ、お燗が過ぎはいたしませぬか、御覧遊ばして下さりませ。

彌平　おゝ、一つ注ぎやれ。

小菊　はい。（ト小菊ふろへ〳〵酌をなす。）

龍左　どれ御酒のお肴にもう一責、責めませう。

九助　下郎もお合に出掛けませう。

お杉　すりや、此上にまだもわたしを。

龍左　おゝ、責殺すのが御酒の肴だ。

〽割竹取つて立ち掛れば、九助はお杉が兩足捉へ逆さになし、龍左衛門は骨も折れよと打ち

据れば、お杉はひい〳〵蟲の息、
ト此内松の枝へ掛けし繩を引き結へ附け、九助お杉の足を捉へ、龍左衞門割竹で打つ、是れにて口より血汐流れる、

九助　やあ、こりや口から血が流れます。
龍左　もしや舌でも喰切りはせぬか。
小菊　えゝ。(トびつくりなし銚子を落す。)
お光　何を粗相な、取替へて來やれ。(トお光小菊を煙管で打つ。)
小菊　はあゝ。

〽怖さに小菊は齒の根も合はず、ふる〳〵て入りにける。
ト小菊銚子を持ち、慄へながら奥へはひる。

彌平　こりや龍左衞門、殺しては詮議がならぬ、繩を緩めて介抱なせ。
兩人　はッ。

〽はッと答へて松ヶ枝の、繩を緩めて繰りおろせば、お杉は其儘氣を失ひ、うんとばかりに倒るれば、

ト九助繩を解き、お杉をどんと落す、是れにて氣を失ふ、龍左衞門介抱なし、

龍左　やあ、こりやお杉は氣を失ひました。

彌平　それ、氣附を吞ませい。（ト印籠を投つてやる。）

龍左　畏りました。

〽喰縛る齒をこぢ明けて藥を吞ませ、水つぎ込めば、お杉は息を吹き返し、

ト此内龍左衞門笄にてお杉の口をこぢ明け、印籠の藥を入れる。九助手水鉢の水を柄杓に汲み吞ませる、是れにてお杉息を吹返し、

お杉　早う殺して下さりませいな。

龍左　それ程早く死にたくば有體に白狀しろ、言はぬ内は幾度も氣を失へば藥を吞ませ、まだ〳〵めつたに殺しはせぬ。

九助　これからお庭の石を抱かせ、最う一責責めてくれう。

お光　九助、待ちやれ。

九助　へい。

お光　最前から疲れし樣子、最う一責責めたらば、今度はほんとに死なうも知れぬ、今宵は其まゝ縛り

置き、明日また責めるがよい。

龍左　如何さま斯うしておきましたらば、お杉も篤と考へて、痛い目するより言ふ方が、苦痛がないと氣が附いたら、白狀いたすでござりませう。

九助　左樣ならば此儘に、松へ縛つておきませうか。

彌平　おゝ、しつかりと括しおけ。

九助　はツ。（ト九助松の木へ結び附ける。）

彌平　龍左衞門、其方は忠左衞門が宅へ參り、家内の樣子を檢分なし、家中の者は一人も門外へ出さぬやう、足輕共に申し附けい。

龍左　畏つてござります。

彌平　さゝ、早く參れ。

龍左　はあゝ。

〽はツとばかりに龍左衞門、九助も共に傍なる、お杉を尻目に立つて行く。

ト龍左衞門九助お杉へ思入あつて、下手中門へはひる。

〽跡にお光は靜々と、お杉が側へ立寄りて、（トお光思入あつて庭下駄をはき、お杉の側へ來り）

お光　これ杉、そなたは久しく宿へ下り、委しい事を知らぬゆゑ、無慈悲な事と思ふであらうが、左門樣を檻に入れたは、小堀の御家が大事ゆゑ、御放蕩を止めん爲、定めてこちらが惡いやうに左門樣がおつしやつたであらうが、忠左衞門に手引きして連出させしは料簡違ひ、其行先きは何れだか有體に言うてしまや。今のやうな責に逢うては遂には命を落さにやならぬ。まだ兩親もある身の上、そなたが死んだと聞いたらば、其歎きはどのやうだ、言はぬは親に不孝だぞよ。有體にさへ言うてしまへば、決して打ちも叩きもせぬ。さあ、何處へ落した、それを言や。

〽物柔かに問ひけれど、死する覺悟に口を閉ぢ、顏を背けて一言の答なければ急き立ちしが

ト　お光思入あつて言ふ、お杉うつ向き居る、お光きつとなり、立掛りしが心を取直し、

すりや、此やうにわしが言うても、そなたは白狀しやらぬか。

彌平　さりとは死太い。（ト彌平次刀を持ち立ち掛るを、）

お光　あゝもし、人に勝れて利口な杉、跡で篤と考へましたら、包まず白狀いたしませう。

彌平　えゝ、何で彼奴が。

お光　はてまあ、奧へ、（ト顏見合せ思入あつて、）お出でなされませいなあ。

〽巧みは深き奧の間へ、心殘して入りにける。（ト彌平次お光思入あつて奧へはひる、時の鐘。）

〽跡にお杉はやう〳〵と、泣き塞がりし目をあいて、奥口見廻し吐息をつき、

ト床の合方、お杉額をあげ、四邊を見廻し思入あつて、

お杉　數代續きし小堀のお家も、大殿樣のお逝れより、間もなく奥樣若樣と引續いての御不幸に、左門樣の御大病、是幸と御養子の彌平次樣の惡企み。是れといふのもお妾のお光どのゝ皆勸め。

〽忠義一途な方々は、或は追放或は殺され、

お家の血筋を絶さんと、左門樣を檻へ入れ、御窮命させし上、毒殺なさん計らひと、聞いて心も心ならず、吉田樣をお賴み申し、首尾よく昨夜忍び行き、竊にお落し申せしは、未だ御武運盡きざるしるし。

〽此身は此儘責め殺されても、左門樣さへお助け申せば、

御恩になりし大殿樣、又奥樣へ一つの忠義、どうぞ御身に恙ないやう、御家を守りの神々樣、お救ひなされて下さりませいな。

〽身節の痛さも打ち忘れ、あなたこなたの神々を、合されぬ手に伏し拜む、心の内ぞ、

トお杉縛られしまゝ神へ願ふ思入よろしく、トヾ行かうとして繩に引かれどうとなり、體の痛き思入三重、時の鐘にて道具廻る。

（お光部屋の場）――本舞臺三間の間平舞臺、向う上手床の間、次いで袋戸棚、下手雲母形の襖、上下折廻し杉戸の出はひり。總てお光部屋の體。爰に以前のお光煙草を呑み居る、下手に辨秀、坊主鬘好みの着附、前帶出家のこしらへ、酒肴を取散らし酒を呑み居る、ありふれし長唄にて道具留る。

お光　兄さん、大分お前足が近いが、何しにお出でござんす。

辨秀　何しに來るものか、無心に來たのだ。

お光　また無心でござんすかえ。

辨秀　おぬしにも氣の毒だが、知つての通り本山を酒と博奕で追出され、せう事なしに家へ歸り、お袋の所に掛り人、先づ禪門と姿を替へ、修行先きへお齋に行き、百のお布施でお經を上げ、殊勝顏にして居るが根が酒好きの辨秀ゆゑ、幾らあつても呑んで了ひそこら中へ借りが出來て、此首が廻らねえのも、元はといやあ酒の科、そこで向後思ひ切り、下戸になる其替り、切餅を一つ借りに來たのだ。

お光　ほんにお前の貸せ〳〵も、阿漕ヶ浦でしつこいね、平次よりは平氣な顏で、わたしに無心を言ひなさるが、妾になつて樂にやあなつたが、それも大々名といふではなし、大きな聲では言へないが。高が千五百石のお旗本、幾らのお金になるものかね、それもお前が堅氣になり眞面目な事に

入る金なら、殿樣へお賴み申し、借りて上げまいものでもないが、手慰みやお酒の代なら、素一分でも御免だよ。（トずつけりいふ、辨秀思ひ入あつて、）

辨秀　素一分でも御免だとは、あんまり色氣のねえ話しだ、とんだ芝居のせりふだが、親なき後は兄が親、親孝行すると思つて、一俵いけざあ十五兩、どうか都合してくりやれ。

お光　都合が出來る位なら、器用に貸して上げるけれど、實にわたしも困るから。

辨秀　そりやあさうでもあらうけれど、今が今といふぢやあねえ、どうで今夜は泊つて行くから、晩に寐てから殿樣を口說いて都合してくりやれ、もう今度から來やあしねえ。

お光　お前の來ないも聞飽きた、何ほ惚れてる殿樣でも、さう／＼無心が言はれるものかね、泊るのは幾日でも、直の知れねえお米だから、勝手に泊つてお出でだが、お金は所詮貸されないよ。

辨秀　さう因業に言はずとも、僅か十か十五兩、殿樣へ言つて借りてくりやれ。

お光　えゝ、お前もこけ未練な、出來ないと言つたら、出來ないよ。

トお光頭を背けて煙草を呑み居る。辨秀むつとなし、

辨秀　出來ざあいゝ、直談じに殿樣へぶッつかつて借りて行くからさう思へ、何ほ借りがあるといつて今もいふ兄は親、あんまり安くしてくれるな。まだ湯島に居た時分、湯灌場小僧と情人になり、

逃げ隱れをした時に、どうで吉三に賣られる體、おれが手で賣つてやらうと、思つた所へ妾の口入、たんとの金にもならねえが、細く長く取らうと思つて、僅か四十か五十の金で茲へ妾によこしたは、困る時に十と二十借りる心で寄越したのだ。それが出來ざあ暇を取り、年一ぱい島原へ叩き賣つてたんまりと金にするからさう思へ。（ト言ひながら燗徳利の酒を茶碗へつぎ、）えゝ、もう一本明いたか、量りの惡い酒だ。（ト辨秀手を叩く、）

お光　これさ、何で手を叩くのだね。

辨秀　お銚子のお替りだ。（ト徳利をとんと下に置くを道具替りの知らせ、）

お光　困り者だねえ。（ト呆れし思ひ入、辨秀生醉のこなしよろしく。所作の切にて道具廻る。）

（元の庭前の場）　本舞臺元の道具。爰にお杉縛られしまゝうつ伏せになり居る。時の鐘、送り三重にて道具留る。

〽哀れなり、次第に更くる春の夜の、殘る寒さの身に沁みて、お杉は庭に宵のまゝ、泣き伏し居るを小菊は案じ、奥のお引けを待兼ねて、差足ぬき足側へ寄り、

ト此内よき程に、奥より以前の小菊、雪洞を袖にて隱し、忍び足にて出來り、お杉の側へ來て、

小菊　お杉どの〳〵。

〽呼ぶも四邊を忍び聲。（ト　お杉顔を上げ、）

お杉　や、さういふお前は。

小菊　小菊でござんす。（ト雪洞を出す、）

お杉　おゝ小菊どの、よう來て下さんしたな、

小菊　情ない目に逢はしやんしたなあ。

〽嘸や打れた其痕が、夜風で痛うござんしよと、縋り附いていたはれば、

ト床の合方、お杉思入あつて、

お杉　斯うして宵から縛られしまゝ、憂き目に逢うて居るけれど、誰一人朋輩が尋ねてくれる者もないに、年端も行かぬ身の上で、よう來て下さんしたな。

小菊　朋輩衆もお前をば、案じては居たけれど、お光さまを憚りて誰も來る者がないゆゑ、お引けを待つてわたしが來たは、折惡く今宵の寒さ、夜の明けるまでわたしの肌で、あたゝめて上げようと寐た振りをして來ましたわいな。

お杉　人に勝れし志し有難うはござんすが、氣が張つて居るせゐか、夜風も寒うはござんせぬ、何に

しろ其灯が、奥へさしてはお前の難儀、火を消して下さんせいな。

小菊　いえ〳〵、消すには及ばぬわいな。

〽かねて用意の髪掛取出し、雪洞覆ひ火影を隠せば、

ト小菊袂より髪掛けの袖なしを出し、雪洞へかけ火を覆ふ、

お杉　明りを隠す用意まで、心附いてござんすとは、ても感心な事ぢやなあ。

小菊　これで明りの氣遣ひなければ、暖めながら痛い所を、わたしが擦つてあげようわいな。

〽撫つ擦りついたはりて、眞身も及ばぬ介抱に、（ト小菊お杉をいたはる思入よろしく）

お杉　あゝ有難いお前の親切、死んでも忘れはせぬわいな。

小菊　えゝも忌はしい鶴龜々々、死ぬのなんのといふ事は、假にも言うて下さんすな。

お杉　いえ〳〵、わたしや死なねばならぬ。

小菊　えゝ、そりやまあ何ゆゑ。

お杉　今日も手酷い責に逢うたが、明日は輪を掛けどのやうな責に逢はうも知れぬゆゑ、ひよわい體に病擧句、責殺されて死ぬであらう。それも覺悟の上なれど、斯かる非道なお屋敷ゆゑ、死んだ跡でわたしの宿へ、何というて遣る事やら、せめて一筆この事を書殘して置きたいにも、書く事な

らぬ此縄目、どうで明日は責られてわたしや死ぬであらう程に、いつでもよいから親達へ責に逢うて死んだ事を、いや／＼お前がそんな事いうて、それが證據になりでもしたら、又もやわたし同樣に、どんな責に逢はうも知れぬ、必ず言うて下さんすな。

小菊　そりやお前のいふ通り、知れたら責に逢ひもせうが、御奉公に上つた時より一方ならぬお世話になり、ほんに眞身の姉さんと、思うて居るお杉どの、お前ゆゑならどのやうな責に逢うても大事ない、何なと言うて下さんせいな。

お杉　あかの他人でありながら、責に逢うても大事ないと、それ程までにわたしをば、思うてくれる志し、嬉し涙がこぼれるわいの。

〽流るゝ涙を振拂ひ、

嬉しいは嬉しいが、お前に難儀は掛けられぬ、やつぱりわたしが書置くから、硯箱がそこらにあるなら、ちよつと取つて下さんせいな。

小菊　あい／＼。

〽見れば傍に硯箱、手箱のあるを幸ひに、紙取り添へて持ち來り、

ト二重にある硯箱、手箱の内より巻紙を出し、是れを持ち來り、

幸ひ紙もありましたが、縛られて居ては書かれしまい、繩を解いて上げませうわいな。

お杉　いや〳〵此繩を解いたなら、誰が解いたと詮議になり、お前の難儀になる程に、それよりわたしが言ふことを、そこへ書いて下さんせ。

小菊　そりやお易い事ながら、わたしや字をばろく〳〵に。

お杉　假名でも大事ないわいな。

小菊　假名でよくば、何なりと。

〽あくる硯のふた親へ、送るお杉が書置に、くる卷紙は長けれど、筆の命毛短くも、する墨薄き親子の緣、

　　ト此内お杉思入、小菊は泣きながら硯箱をあけ、墨をすりにかゝりよろしくあつて、

お杉　墨が磨れたら一段下げて。

小菊　何と書きますえ。

お杉　書置の事。

小菊　はあゝ。（ト泣伏す。）

お杉　あゝこれ、𨷻に〳〵。

小菊　あい〳〵。

〽二人は四邊を窺ひて、

ト是れより竹笛入り床下座打合せの合方になり、小菊筆を取り、書きにかゝる、

お杉　「一筆書殘し參らせ候、左樣に候へば、私事久々病氣にて宿へ下り、昨日お目出たを幸ひに、お屋敷へ上り、御殿の樣子承り、驚き入り參らせ候。」

小菊　「驚き入り參らせ候。」

お杉　「御養子の彌平次樣、又お姿のおみつさま、新參の御用人幡代龍左衞門殿三人の惡巧みにて、御家の血筋を絕さんと、若殿左門樣に廓通ひをお進め申し、それを越度に檻へ入れ、三度の御膳も碌々上げず、毒害なさん巧みの樣子。」

小菊　「巧みの樣子。」（トお杉思入あつて、）

お杉　何科もない左門樣を、毒をもつて殺さうとは、言はうやうない人でなし。（トきつと思入）

小菊　「言はうやうない人でなし。」

お杉　あゝ、それは書かずとようござんしたに、消しておいて下さんせ。

小菊　あい〳〵。

お杉「巧みの樣子承はり候ゆゑ、何卒お助け申度く、兎や角思ひ候へども、横木田傳右衞門樣は御追放、伊東吉之進樣は物當りにて俄に御死去、これも毒害と申す噂ゆゑ、猶々お案じ申し候まゝ、吉田忠左衞門樣をお頼み申し、檻を破りて左門樣をお助け申さんと思ふ折柄、天道樣のお授けにや、檻の鍵を道にて拾ひ、やす〳〵明けて裏手より、忠左衞門が御供申し、危きお命お助け申し上參らせ候。」

小菊「お助け申し上參らせ候。」

お杉「扨我が身の災難は、杉といふ字の紋附きし簪を取落し、それを證據に手引きせしと御庭に於て繩目に逢ひ、松の木へつるし上げられ、繩は手にくびれ込み、竹さへ簓になる程に割竹にて打ち叩かれ、血を吐くほどの苦しみは、地獄の責も斯くばかりと存じ參らせ候へども、御恩になりし大殿樣、又奧樣への御恩返しと、如何やうに責に逢ひ候とも白狀いたさず候まゝ、一兩日内には責殺され、相果て候事と覺悟いたし參らせ候」

小菊「覺悟いたし參らせ候。」はあゝ。（ト小菊泣く。）

お杉　あこれ、最う少しでござんすから、泣かずと書いて下さんせいな。

小菊　あい〳〵。

お杉　一猶又我が身こと、幼い時より病氣にて長々御苦勞お掛け申せし上、又々先立ち候のみか、非業な死を遂げ御歎きを掛け候不孝の段々申譯なく存じまゐらせ候へども、假令女子の身なりとも武家奉公いたし候ものはお主へ忠義を盡したく命を捨て候まゝ、くれぐれも御許し下され候やう、願ひ上げまゐらせ候。まだまだ申し上げたき事は海山御座候へども、人目を忍び候上いまだ縛られ居り、人を頼みて認め候事ゆゑ、心に思ふ十が一つ、よろしく御推量下され御讀取り願ひ上げまゐらせ候。先はあらあら書殘しまゐらせ候。目出度御兩親樣へ、杉より。」

ト言終りて咽せ返れば、共に小菊も泣伏して、暫し涙に暮れたりしが、

トお杉襟へ顏を入れて泣く、小菊も其儘ワッと泣伏す。時の鐘。小菊顏を上げ、

小菊　何ゆゑこんな酷い目に逢はしやんすかと思うたが、此書置の樣子では、若殿樣をお助け申せし、それゆゑでござんしたか。

お杉　憂き目に逢ふもお主へ忠義、わたしは是非もなけれども、お前なども宿へ話し、早うお暇を願ふがよい、長く居たらどのやうな、難儀に逢はうも知れぬわいの。

小菊　頼みに思ふお杉どの、お前がどうぞしなさんしたら、直にわたしは暇を取り、お前の家へ尋ねて行つて、親御さんに此事を、委しう言うて上げようわいな。

お杉　どうぞさうして下さんせ、長居して居て見廻りにでも、見咎められては互ひの大事、お前は早く其書置を白紙で包み、わたしの部屋へそつと行き、鏡の間へ知れぬやうに、入れて置いて下さんせ。

小菊　あい／＼、そんなら是れを鏡の間へ。

お杉　さあ、鏡は女子の魂ゆゑ、我が思ふ一心でも、其書置が恙なく宿へ屆くであらうわいの。

小菊　そりやもうお前の一心で、屆かいで何としませう。

お杉　さあ／＼、誰ぞ來ると惡いから、早う行つて下さんせ。

小菊　最うお引けが濟んだから、誰も參りはいたしますまい。

お杉　いえ／＼譬にもいふ油斷大敵、人目に掛らば水の泡、早う行つて下さんせ。

小菊　そんなら是れをしまつてから、又忍んで參りませう。

〽小菊はかしこく書置を、帶に挾んで雪洞を、袖で隱して立上れば、

ト小菊書置を帶の間にはさみ、雪洞を袖に隱し立ち上るを、お杉見送り、

お杉　あゝ、これが此世の。

小菊　え。

お杉　いやさ、此身の賴み、少しも早う。

小菊　あい／＼。

〽跡へ心は殘れども、仕方なく／＼奥の間へ、忍び足にて別れ行く。

ト小菊よろしく思入あつて奥へはひる。

〽お杉は跡を見送りて、ほつと一息つく鐘も、無常を告ぐる夜半の鐘。

トお杉跡を見送り思入、本釣鐘床の合方になり、

お杉　あゝ嬉しや／＼、折よくあの子が來たばかり、心に思ふ事を書かせ、鏡の内へ入れさせたれば、死ぬる此身の一心でも、親の手許へ屆くであらう、思へば後の月からして一昨日までも病氣にて宿へ下つて兩親の手許に居たは此世の名殘り、昨日も妹が送つて來て、歸る時に別れを惜しみ泣き顏して歸つたは、再び逢はれぬ知らせであつたか。

〽今更いふも愚癡ながら、此間も父さまが御恩になつた奥樣の、御三回忌が濟んだなら、お暇願ひ家へ呼び、よき聟取つて兩親は、妹を連れて別になり、樂がしたいと朝夕に、言はしやんした甲斐もなう、非業の最期を遂げたと聞いたら、其歎きはどのやうぞ、強い事を言はしやんしても父さんも取る年に、五年あとゝは

大きな違ひ、父母さんは血の道持ち、内氣な生れに不斷でさへも取越し苦勞をしなさんすれば、體に障るは知れた事。それを知らぬでなけれども、

〽御恩になりしお主の爲、輕い勤めのわたしでも、命捨てるは忠義の道、武家奉公の習ひぢやと、先立つ不孝は幾重にも、

お許しなされて下さりませ。

〽縛られしまゝ身をあせり、暫し涙に暮れたりしが。（トお杉よろしく思入あつて、）

御殿もひつそとなつたるは、今宵も最早八つ近し、草木も睡る丑滿の夜半が此身の最期の時刻、

〽覺悟極めし其折柄、家中を廻る時の聲。（ト下手にて、）

中間　八つでござい〳〵。（ト六尺棒で叩く音する、）

お杉　おゝ丁度八つの火の廻り、人の命は五十年、その半の二十五もやうやく過ぎし此身の曉、夜明けぬ内に少しも早く、

〽死なんとすれど刃物なく、縛られしまゝ何がなと、見廻す硯の箱の内、小刀ありしは幸ひと、取らんとすれど繩にて引かれ、やう〳〵銜へ引寄せて、（ト此内宜しく硯箱を引寄せ、）

思ひ掛けない硯箱に、此小刀のあつたるは、是れで死ねとの天の賜。

中間　八つでございく。（ト西の通ひ道を通る。）

お杉　父さま母さま、お許しなされて下さりませ。

〽口に唱名小刀を、逆に銜へて突かんとすれど、流石女子の死に兼ねて、縛られし儘起つ居つ、心弱くて叶はじと、銜へし儘に踏段の石へ、くわつしと打附くれば、咽から頸へ貫きて流るゝ血汐のから紅、七轉八倒苦しさによろぼひく立上り、手水鉢へ身を打附け、終に果敢なく二十五の、曉知らぬ十日月、西の空へと落ちにける。

ト此内お杉文句の通りよろしく思入あつて、トゞ糊紅になり、手水鉢へ胸を打附け、ひよろくとなりては打附けく、トゞ立身にて苦痛の思入あつてばつたり倒れる、

〽折しも出で來る火の廻り、

ト下手より九助、弓張提灯六尺棒を突き出來り、

九助　火の廻りく、お杉どのはどうして居るか、龍左衛門様が惚れて居て、戀の叶はぬ意趣晴らしに酷い事をしなすつたが、嘸體が痛むだらう。

〽言ひつゝ側へ差寄つて、

これお杉どのく、どうした、寐たのか、風でも引いちやあいかねえぜ。お杉どのく。

〽抱き起して血に染みし、お杉を見るよりびつくりなし、

やあ、こりやあ、大變、お杉が死んだ〳〵。

〽腰もわな〳〵ぶる〳〵と、呼はる九助が聲もれて、彌平次お光も一間を立ち出で、

ト九助顫へ居る、上手屋體よりお光しごき裝、彌平次前帶一本ざし、手燭を持ち出で來り、

彌平　こりや九助、騷がしい、靜にいたせ。

お光　お杉がどうぞしやつたか。

九助　どうした所か、くたばりました。

兩人　え。

彌平　して尋常に相果てたか。

九助　いえ、口から喉へ小刀を突立てましたと見えまして、刃物が殘つて居りまする。

彌平　死骸を見せやれ。

九助　只今お目に掛けまする。

〽九助はこは〴〵引起し、顏差上げれば目を見詰め、恨めしげなる死顏に、

ト九助お杉を抱起し、顏を上げ見せる。お光ぞつとせし思入にて、

お光　もうよい九助、寐かして置きや。

彌平　おぬしはお杉が怖いのか。

お光　幽靈が嫌ひだから、あんまりぞつといたしませぬ。

九助　誰も好きな者はござりませぬ。

彌平　人目に掛らぬ其内に、筵でしつかり體を包み、夜の明けぬうち揚場から、こつそりと流してしまへ。

お光　いえ／＼それは鼻許思案、筵が腐れて死骸が出て、どんな難儀にならうも知れぬ。

彌平　それでは藪の隅へでも、此儘そつくり埋めておかうか。

お光　斯ういふ非業に死んだ者を、お屋敷内へ埋めるのは、先第一不緣起に、わたしを恨んで居ませうから跡へ念の殘らぬやう、燒いてしまふがようござりまする。

九助　こりやお光さまのおつしやる通り、燒くのがよろしうござりますが、お庭で直に燒きませうか。

彌平　えゝ馬鹿な事を申せ、なか／＼以て人一人容易に燒けるものではない、殊には臭氣が隣家へ匂ひ不審を受けるに違ひない、どうか燒場でこつそりと、知れぬやうに燒きたいものだ。

／＼主從ひそ／＼囁き合ふ、後へ辨秀立ち出で、（ト此時奧より辨秀出で來り）

辨秀　いや、御心配なされますな、佛の事なら愚僧が得手物、こつそり燒いて進ぜませう。

彌平　お丶よい所へ辨秀、其方の手で始末が出來るか。

辨秀　そこは以前門徒寺を潰して出ました此辨秀、何處の寺へも燒場から、十枚づゝ渡つて居る燒場切手が一枚あれば、死骸を出さず桶燒にそつくり燒けば跡は灰、ちつとも知れる氣遣ひなし。

お光　さうしてしまへば氣も殘らず、さつぱりとして跡もよし。

彌平　どうか貴樣の働きで、燒場切手は手に入るまいか。

辨秀　懇意な寺は幾らもあれど、借りて來る譯にも行かず、そつと盜んで來たいものだが、わしが行つては目に立つゆゑ、此妹も知つて居る本郷に居る湯灌場買、惡い事には拔目のない吉三といふ者がござりますが、所々の寺へ入込めば、是れに賴んで燒場切手を、一枚盜んで貰ひませう。

彌平　そりや首尾よく參らうかな。

お光　今兄さんの言ひました、吉三さんなら大丈夫、手に入るに違ひござりませぬ。

彌平　それでは辨秀、何分賴むぞ。

辨秀　そこは承知しましたが、素手で行かぬ吉三郎、丸はようござりませうな。

お光　さつきお前が言ひなさんした、無心を篭んで殿樣から、十兩貰つて上げようから、それで一枚持

つてお出でな。

辨秀　どうして〳〵十や二十でいけるものか、吉三に切手を盗ませるにも、切餅位は遣らねばならねえ。

彌平　おゝ其金子は承知した。お光、手箱を。

お光　はツ。

〽手箱を出せば彌平次が、五十兩取出して、

トお光上手の屋體より手箱を持ち來る、彌平次中より金包を出し、

彌平　これ辨秀、五十兩遣はすから、是れで首尾よくいたしてくりやれ。

辨秀　畏りましてござりまする、五十兩なら私が、萬々よろしく取計らひませう。

彌平　して杉が宿へは、何と言はうな。

お光　そりや九助と言合し、逐電したと申しまして、荷物を下げて遣りましたら、それまでぢやござりませぬか。

九助　お杉と九助の密通は、受け取りにくい其上に、斯うして居てはをかしいもの。

お光　それはそなたに手當をやるから、在所へでも行つたがよい。

九助　それは何より有難い、丁度今年が親仁の年回、國へ行つて參りませう。

辨秀　人は見掛によらぬもの、九助が親仁の年回に、國へ行くとは可笑な話し。
九助　堅氣になつたと見せかけて、金でも借りて來ますのさ。
辨秀　いや、そんな事だらうと思つた。

〽折しも烈しき小夜風に、亂れし髮の動くを見て、

ト風の音、ドロ〳〵のやうにお杉の髮の毛動くを見て、

九助　やあ、こりや死骸が動きますぜ。
辨秀　猫でもそこらへ來やあしねえか。

〽髻摑んで引起せば、さも恨めしげに見詰めるお杉、お光はぞつと身の毛立ち、

ト辨秀お杉の髻を摑み引立てる、お杉ひよろ〳〵と立ち、瞑りし目を明きお光を恨めしさうにきつと見る、お光ぞつとなし、

お光　あれ。（ト彌平次に縋る。）
辨秀　おゝ、まだ息があるやうだわえ。
彌平　生返られては騷動だ。
お光　とてもの事に、骨折ついで。

辨秀　どれ、引導を渡してやらうか。

〽小刀拔いて喉笛を、ぐつと一突き貫けば、此世の息は絶えたれど、恨みは殘る一念力、物凄くこそ。

ト辨秀お杉の口にさしたる小刀を拔き喉を突く、是れにてお杉ぐつたりとなる。お光ほつと思入、辨秀小刀を拔く、ドロ／＼のやうな風の音になり、お杉ひよろ／＼立ちお光を見込む。お光、アレと彌平次に縋る、辨秀ぎよつとしてどうとなり、九助は着物をすつぽり被り顫へ居る。此見得よろしく、三重ドロ／＼のやうな風の音にて、

幕

ト禪の勤めにてつなぎ、直に引返す。

(了念寺門前の場)――本舞臺三間の間一面の練塀。上の方一間冠木門出はひりあり、日覆より松の釣枝、總て了念寺門前の體。爰にお虎結び髮前垂裝、風呂敷包みを抱へ洗濯屋のこしらへ、寺男の權兵衞着流し尻端折りにて箒を持ち立掛り居る、葬ひの鳴物にて幕明く。

權兵　おゝ洗濯屋のおつかあか、おらが袷はまだ出來ねえか。

お虎　お天氣都合が惡いので、大きに遲なはりました。やう〳〵仕立てゝ持つて來ました。

權兵　そりやあお世話でござつた、仕立賃はいくらだな。

お虎　なに、幾らでもようござります、お住持樣のお仕立でうんとお貰ひ申しますから、お前方のは御奉公、絲代ばかりでようござります。

權兵　絲代ばかりぢやあ氣の毒だな、今度いゝ葬禮でもあつたら、餅を禮に進ぜませう。

お虎　それは何より嬉しいね、お煮染さへ附いて居るなら、お強飯でもようござりますよ、それはさうと旦那樣は、お內でござりますか。

權兵　今日は檀家に法事があつて、李助親仁と小僧を連れて、今しがた行かしやつた。

お虎　雲貞さんも、御一緒かえ。

權兵　いや、お前の情人の雲貞坊は、今臺所の火鉢の側で居睡をして居たツけ、わしが飯炊きゆゑ焚きつけるのではないが、新情婦でも出來たかして、ちよこ〳〵と內を明け、晝の內は間がな隙がな居睡りばかりして居るテ。（トこれを聞きお虎むつとして）

お虎　なに、新情婦が出來ましたえ、誰だかわしに敎へておくれ、其替りお禮には袷の代は貰ひませぬ。

權兵　おゝ、敎へてやるとも〳〵、それ笠餅をよく持つて來る、前町の餅屋の後家さ。

お虎　あのぽちや〳〵と太つた餅屋の後家かえ、肌は薄皮で綺麗だけれど、臍燒を見たやうなあんな女に見替へられては、腹太の腹が立つ、これから庫裏へふん込んで、存分燒餅をやかねばならぬ。

權兵　思入れ行つて言ふがいゝ。

お虎　權兵衞どの、本當でござんせうな。

權兵　なに、噓をつくものだ。

お虎　えゝ、向うが餅屋の後家だから、あんと言つたらよからうぞ。

ト　やはり葬禮の鳴物にて、お虎腹の立つ思入にて門の內へはひる。

權兵　あの慾張りの洗濯婆め、雲貞坊におつかぶせ小遣錢を取るものだから、大層腹を立てやあがつた。是れから庫裏でいゝ加減燒餅喧嘩をした時分、仲人に中へはひり、酒の五合も買はしてやらう、先づこの喧嘩で洗引の仕立代をやらぬ上、たゞ酒が呑めるとは、こんなうまい話しはないわえ。

ト木魚入りの合方になり、權兵衞下手へはひる。此鳴物にて花道より前幕の辨秀先きに、跡より吉三好みの鬘、着附、尻端折り、五布風呂敷を肩へ掛け、湯灌場買のこしらへにて出て來る、

辨秀　これ吉三、手前の行くのは、向うの寺か。

吉三　あの寺の番僧はよほどぼんやりして居るから、あすこで首尾よく遣つて來る氣だ。

辨秀　拔目のねえ手前だから、案じる所はねえけれど、道まで佛をかついで來たから、少しも早く切手を賴むぜ。

吉三　おれがうんと言つたらば、外れッこはねえ、乘つて居ねえ。（ト右の鳴物にて舞臺へ來る。）

辨秀　いや肝腎の事を極めるんだが、幾らで手前遣つてくれる。

吉三　こんな仕事は先方次第、幾らかくらと相場はねえが、屋敷から幾ら出るのだ。

辨秀　向うからは五十兩。

吉三　え。

辨秀　いやさ、五兩で捌いてくれといふから、そんな事ではいけねえと、何を隱さう屋敷から二十兩取つて來た、おれも此節苦しいから、二つ山に十兩で、安からうが負けてくれ。

吉三　見ず知らずの者ならば、五十兩ともいふ所だが、兄弟同樣の辨秀手前の事だから、二つ山でやッつけよう。

辨秀　そいつあ何より有難い。

吉三　さうして何處で待つて居るのだ。

辨秀　此先きの寺町で施主を待つてる顔をして、桶を擔がせて待たせておいた。
吉三　それぢやあ今に切手を持つて、寺町へ行くから待つて居ねえ。
辨秀　これ、骨折代は五十兩だよ。
吉三　なに五十兩。
辨秀　いやさ、五、十兩、二十兩の二つ山だ。
吉三　幾らでもいゝぢやねえか。
辨秀　それぢやあ辨秀頼んだぜ。
吉三　辨秀とは手前のことだ。
辨秀　何だか心がどぢぐぢする。
吉三　慾張つて居るからだ。

ト吉三せゝら笑ふ、辨秀は懐から財布を出して見る。此模樣よろしく、早めたる木魚の合方にて道具廻る。

(了念寺庫裏の場)――本舞臺三間の間常足の二重、向う白地藍模樣、寺めいたる襖、上の方一間障子屋體下の方黒塀、墓場の入口、桶に樒を入れ側に柄杓附きの手桶、總て庫裏の體。爰に雲貞坊主　雲鼠

の着附番僧のこしらへ、以前のお虎雲貞の胸倉を取り居る、弔ひの鳴物にて道具留る。

雲貞　これさおばゝ、何をするのだ〳〵。

お虎　何をするもあるものか、よくもわたしを振り捨てゝ新情婦をこしらへなすつたな。どうするか覺えて居なせえ。

雲貞　これさ〳〵、誰がおぬしを振捨てゝ、新情婦などをするものか、放してくれ〳〵。

お虎　なに、しない事があるものか慥な事を聞いて來たのだ、よくも餅屋の太ッちようと、お前は餅をつきなすつたな。

雲貞　誰に聞いたか知らねえが、燒損ひの金鍔か伊賀餅を見たやうな、あんな後家が喰へるものか。

お虎　いえ〳〵お前は何でもござれ、物喰ひのいゝ入道だから、喰はないとは言はさぬ。

雲貞　それだといつて愚僧は酒好き、おぬしの顔は虎鰒か虎魚によく似て居るが、魚だから喰ふけれど伊賀餅や金鍔は、胸がやけて喰へるものか。

お虎　いえ〳〵さうは言はさぬ〳〵、大方今日も忍んで來て、お前と寐たに違ひない。

雲貞　まだ、そんな事を言ふか。（ト兩人爭ふ、下手より以前の吉三出來り。）

吉三　へい、もし雲貞さん、何ぞござりませんか、直をよくお貰ひ申しますぜ。（ト是れに構はず。）

お虎　これ〳〵、お住持さまの留守を幸ひ、爰で後家と寐た證據は、褌が取つてある。（ト傍にあり合ふ燒場切手の附いて居る白布を取つて）どこの國にか晝日中、町でもあるか寺にゐて褌まで取つて寐るとは、呆れ返つた助平爺いだ。

雲貞　これ〳〵、それは褌ではない、燒場へ掛けてやる白布だ。

お虎　いえ〳〵、そんなごまかしを何でわたしが聞くものか。

雲貞　えゝ、いゝ加減に馬鹿をいへ、燒場から渡つて居る、鑑札が附いて居るわ。

ト吉三是れへ目を附け、しめたといふ思入にて、

吉三　もし、何ぞお拂ひはござりませんか、久しくお貰ひ申しませぬが、何ぞ賣つて下さいましな。

雲貞　おゝ、湯灌場買の吉三郎か、今賣物どころでねえ、此次に來て下せえな。

吉三　左樣でもござりませうが、まだ口明けをいたしませぬから、何ぞ儲けさせて下さいましな。

お虎　これ〳〵古着屋さん、燒餅喧嘩の邪魔になる、早く歸つておくんなせえ。さあ何處へ餅屋の後家を隱した。

雲貞　えゝ、又しても〳〵知らねえといふに。（トお虎を突倒す、吉三介抱なし）

吉三　あこれ危ねえ、お上さん、何處ぞ怪我でもしやあしねえか。

お虎　いえ〳〵、怪我はしませぬが、悔しくッて〳〵なりませぬわいな。(ト　お虎泣く。)
吉三　これ〳〵雲貞さん、燒餅喧嘩は惚れて居るから、考へて見ると可愛い譯だ、今日はお住持がお留守なれば、こんないゝ首尾はねえ、ちよいとそこの小座敷で、仲直りをなさいましな。
雲貞　愚僧はお虎に惚れてるから、仲直りをする氣だが、お虎が愚僧をいやがるから。
お虎　何わたしがいやがるものか、お前がわたしをいやがるのだ。
吉三　それぢやあお前はいやぢやあねえのか。
お虎　お前の前で恥かしいが、わたしやあの雲貞さんが大好きさ。
吉三　雲貞さん、お前はえ。
雲貞　愚僧もお虎は大好きだ。
吉三　さう好き合つた中ならば、早くそこの小座敷で、仲直りをなさいましな。
雲貞　そんなら住持の歸らぬ内。
お虎　あの小座敷でしつぽりと。
雲貞　然し、ひよつと檀家でも。
吉三　そこは氣遣ひなさいますな、權兵衛どんの歸るまで、わしが番をして上げやせう。

雲貞　それは何より忝ない。

お虎　そんなら早う雲貞さん。

雲貞　どれ、据膳のお齋に附かうか。

ト右の鳴物にて、雲貞お虎の手を取り、上手屋體へはひる。吉三殘り、

吉三　雲貞さん、ゆつくりと樂しみなせえ。（ト跡を見送り燒場切手の附いて居る白布を取上げ）いやこんな間のいゝ事はねえ、此了念寺の雲貞はぼんやりした坊主だから、だまくらかして盜まうと思つた矢先きへ此鑑札、こいつあ天から授かつたのだ、少しも早く辨秀に渡して金に有り附かうか。

トにつたり思入、此時幕明の權兵衞下手から出て、

權兵　吉三さん、金儲けかえ。

吉三　えゝ、（トびつくりなし、件の白布を股倉へ引込み素知らぬ振りにて）權兵衞どんか、今日はいゝ金儲けをしたから、お前に一合買ひませう。（ト一朱を一つ出し權兵衞へ遣る。）

權兵　おや、これはお臺場かえ。

吉三　跡はお前つぎ足しなせえ。（ト右の鳴物にて吉三懷へ白布を入れて下手へはひる。）

權兵　湯灌場買の吉三から、お臺場一つ貰つたので、思ひがけなく呑めるわえ、然しこいつア惠比壽金

ぢやあねえか。（ト金をよく〳〵見て、）おや〳〵恵比壽金所か、大黒煎餅から出る金だ、えゝ忌えましい大黒だ。（ト一朱を打附ける、此時お虎出て、）

お虎　はツくしよ。

權兵　おゝ、おつかあか。

お虎　權兵衞さん、（ト肩を叩くを道具替りの知らせ、）惡くお言ひでないよ。

トやはり葬ひの鳴物にて、兩人よろしく道具廻る。

（西寺町の場）――本舞臺一面卒塔婆を結込みし藪疊、後へ石塔、卒塔婆を見せ此後黑幕、上手に松の立木、日覆より同じく釣枝、爰に早桶をおろし、以前の辨秀、下手に九助、中間三人とも煙草を呑み待合し居る心、禪の勤めにて道具留る。

辨秀　いや、待たるゝより待つ身といふが、成程人を待つ位、待遠なものはねえ。

九助　もうとつぷり日が暮れたが、是れから夜道で桐ケ谷まで、擔いで行くのは難儀な事だ。

中間　月があるからいゝけれど、闇の夜では歩けはしねえ。

辨秀　其替り歸りはあれから、直宿へ出て、橋向うへ泊つて歸らう。

九助　そりやあお前の奢りだらうね。
辨秀　言はねえでも知れた事、お妾のお兄いさまが中間に錢を出させられるものか。
九助　そいつあしつかり呑めるわえ。
中間　其勢ひで擔ぎやせう。（ト此時上手より吉三足早に出來り、）
吉三　そこに居るのは辨秀か。
辨秀　おゝ吉三か、待つて居た〳〵、時に一件はどうだつた。
吉三　先づ首尾よく手に入つた。
辨秀　そいつあ大きに御苦勞だつた、それせえ手に入りやあ安心だ。（ト吉三懐から以前の白布を出し、）
吉三　さあ切手附の白布だ。是れを掛けて遣んなせえ。（ト辨秀取つて、）
辨秀　いや有難え〳〵、是れを桶へ掛けてやれば、燒場へ行つて文句なしだ。（ト早桶の上へ白布を掛ける。）
九助　鑑札が出來たら、少しも早く出掛けやせうか。
辨秀　おゝ、御苦勞だが急いでくれ。
中間　合點でござりまする。（ト桶を擔ぎ上げる。）
吉三　おい辨秀、ちよつと待つてくんねえ。

辨秀　何ぞ用か。
吉三　おゝ用があるから一足先きへ、佛を擔がせて遣つてくんねえ。
九助　それぢやあ先きへ行きますかえ。
辨秀　今跡から追附くから、そろ〳〵先きへ出掛けてくれ。
九助　行くは行くが二人ぢやあ、佛が佛だから氣味が惡い。
辨秀　えゝ氣の弱い事を言はねえがいゝ。
九助　どれ出掛けませうか。
卜禪の勤めにて、九助中間早桶を擔ぎ花道へはひる、跡木魚の送り、思入あつて、
辨秀　吉三、用といふは何だ。
吉三　何だといふがあるものか、約束の金をくんなせえな。
辨秀　燒いてしまつてからでいゝぢやあねえか。
吉三　そつちはよからうが、こつちアいかねえ、こんな事は現金、掛賣はお斷りだ。
辨秀　どこで遣るも同じ事だ、それぢや爰で直に遣らう。
吉三　そいつは有難い。（ト辨秀懐の内で勘定なし、）

辨秀　さあ、約束の骨折りだ。（ト十兩紙に包みやる、吉三取つて見て、）

吉三　何だ十兩かえ。

秀辨　二十兩の二つ山、約束通りだ。

吉三　十兩ばかり何にするものだ、こりやあ手前の骨折におれが方からくれて遣るから、殘りの金を貰ひてえ。

辨秀　二十兩の山割だから、殘りの金もやつぱり十兩、どつちを取るも同じ事だ。

吉三　同じ事なら四十兩、殘つた方を貰ひてえ。

辨秀　何と。（ト辨秀ぎつくり思入、木魚入りの合方、蛙の聲になり、）

吉三　さつき手前がうつかりと口走つた五十兩、二つ山なら切餅一俵廿五兩、初手から出しやあおれも默つて貰つておくが、五十兩取つた金を二十兩とごまかして、十兩ぢやあ貰はれねえ、殘つた金の四十兩器用に爰へ出しなせえ。

辨秀　いやそりやあ手前の聞違へ、五兩といつたを二十兩貰つて來たと言つたのだ、燒場切手一枚で十兩取つたら言分あるまい、二足三文見倒して湯灌場ものを買つたとて、こんな儲があるものか、十兩の上は一兩でも、遣ることはならねえ。

吉三　くれられずば貰ふめえ、四十兩の其替りに、五十年の命を貰ふ。

辨秀　何だと。

吉三　たつた木札一枚だが、燒場切手は重い物、表向き變死を燒くにやあ切手の外に寺から寺へ添翰がなきやあ燒けやあしねえ、それをこつそり切手を盜ませ、疵だらけな女の死骸を燒いたといつたら首道具四十兩と雁首をとつけいべいはどつとしねえ、火箸の折れの曲つた根性、手前達の飴を喰ふものか、おれが口たつた一つで小堀の家も改易だ、飴の凧ぢやあねえけれど、絲目を附けず四十兩、そつくり出してくれてしまへ。（ト辨秀思入あつて、）

辨秀　これ〳〵吉三、そりやあ手前他人行儀だ、小堀の屋敷へ妾に行つて居る、おれが妹のあのおかんと譯のある手前ぢやあねえか、末始終夫婦になりやあ、言はずと知れたおれは兄、兄弟仲で因業にさう言はずともいゝぢやあねえか。

吉三　いや、假令眞身の兄弟でも錢金ばかりはこりやあ他人だ。おかんだつて湯島の茶屋に出て居る時分情婦になつたが、賣りでもするかと危ぶんで、小堀の屋敷へ妾にやつたは、辨秀手前の指金だらう。

辨秀　そりや、言はずと知れた事だ、無沙汰に妹をやりやあしねえ、手前にもあの時に二十兩遣つてお

いた、言ひぐさを言はれる所はねえ。

吉三　手切れの金なら貰はねえが、半年と一年貸してくれと頼むから遣つたのだ、いつ何時でも錢に困りやあ小堀の屋敷へ惡足で、錢貰ひに行く積りだ、兄弟だらうが夫婦だらうが、錢ッこぢやあ他人向き、四十兩くれりやあよし、いやだと言やあ燒場へ行き、早桶を轉覆して、代官所へ持ち出すぞ。

ト是れにて辨秀むつとなし、

辨秀　おゝ持出すなら持出せ、首せえやりやあ譯はねえ。

吉三　譯がなきやあ首を寄越せ、是れから駈込み片ツ端から、抱き込むからさう思へ。

ト吉三、きつとなり、行かうとするを辨秀留め、

辨秀　これさ〳〵吉三、今のやうに言つたのは友達仲の常談だ、それぢやあ器用に二十兩、そつくり手前に遣つてしまはう。

吉三　いやだ、四十兩が一兩缺けても、手を出して取りやあしねえ。

辨秀　取らにやあ妹のおかんから、借りて來た金があるから、五兩足して二十五兩、これで淸く手を打つてくれ。

吉三 まだ〱そんな事ぢやあ手は打てねえ、二十兩や三十兩で此首は買へめえぜ。（ト辨秀の首を叩く）

辨秀 さう足許を見られたら、思ひ切つて三十兩。（ト吉三默つて居る、）もう三兩買ひ上げようか。

吉三 えゝしつこい、いやだといふに。

辨秀 そんならどうでも四十兩、耳を揃へて手前は取る氣か。

吉三 取らねえでどうするものだ。

辨秀 いや、いけ太え奴だな。

吉三 なに、太え事があるものか、五十兩取る仕事だが、手前がおかんの兄貴だから、十兩そつちへ負けて遣るのだ。

辨秀 いやはや惡い相手だ。（ト辨秀不承々々四十兩金を出し、）それ、四十兩。（ト吉三に渡す、吉三見て、）

吉三 屋敷だけに小判だな、こいつは珍らしい。

辨秀 あゝ、四十兩せしめようと、思ひの外にたつた十兩、燒場へ行くのもいやになつた。

ト右の合方ばた〱になり、花道より九助足早に出來り、

九助 もし辨秀さん〱、いつまで待たしておくのだ、坊主が一緒に附いて行かにやあ、燒場で佛を受け取らねえ。

辨秀　跡から來ると、さう言つておけいな。
九助　只の佛ならいゝけれど、中の種が怪しいから、一緒に行つておくんなせえ。
辨秀　實は行くのがいやになつたのだ。
九助　いやになられちやあ大變だ、さあ〳〵お出でなせえ〳〵。（ト辨秀を引張る。）
辨秀　えゝ、せわしねえ、引張つてくれるな。
九助　ちつとも早くお出でなせえ。
辨秀　それぢやあ行かにやあならねえか、金を取られて桐ヶ谷まで、佛を送つて行くといふは。
吉三　辨秀。
辨秀　何だ。
吉三　遠方御苦勞。
辨秀　覺えて居ろ。

ト禪の勤めになり、九助辨秀を引張り花道へはひる。時の鐘、吉三跡を見送り小判を出して見ながら、

吉三　四五日跡からすつかり取られ、鹽噌の錢にも困つた所へ、燒場切手を盜んでくれと、賴みに來たは地獄で佛、辨秀坊主は彌陀如來、紫磨黃金のしかも小判で强請り取つた四十兩、先づ當分は極

樂だ、爰らで小判の直でも上りやあ、すつかりおれも、（ト小判を二つに分けて叩くを木の頭浮み上らあ。（ト早めたる木魚へ寺鐘を冠せよろしく、）

ひやうし　幕

三幕目

市ケ谷紙屑屋の場

同返し

駒込圓城寺の場

森川宿邸町の場

〔役名――横木田傳吉、小堀左門、了念寺番僧雲貞、圓城寺住職日和、釜屋武兵衞、家主佐次右衞門所化二人、紙屑屋伊兵衞、吉田忠左衞門、八百屋久四郎。八百屋娘お七、伊兵衞女房お浪、八百屋下女お玉、伊兵衞娘お民等。〕

（紙屑屋見世の場）――本舞臺三間の間常足の二重、上手落間、書心に板羽目の張物、二重の上手間平戸の押入、眞中暖簾口、下手板羽目、是れへ棚を釣り、古手拭古足袋など載せ、此前へ古襦袢古半纏やうの物を吊し、平舞臺、板羽目の前へ紙屑入の御膳籠、鐵砲笊、此側に大きなる麻風呂敷へ紙屑

を入れて包み。ずつと下手路地の入口。いつもの所門口。總て市ヶ谷堀端紙屑屋見世の模樣。爰にお浪丸髷世話女房にて手拭を冠り襷掛けにて、上手紙屑の前に住ひ、蜜柑箱を二つ程前へ置き紙屑をより分けて居る。下手に佐次右衛門中形の半纏木綿やつし、家主の裝にて煙草を呑み居る。此見得よろしく、角兵衛獅子の鳴物にて幕明く。

佐次　いやお内儀、さつきからお前の仕事を見て居たが、なか〱物馴れて手早いものでござるの。

お浪　いやもう、いつも手間を入れまして選らせまするが、御時節柄の事でござりますから、此節はわたし一人、隨分骨が折れますわいなあ。

佐次　何でも其位に心を附けねば、今の世界は渡られぬて。然しよく噺し家などが言ふが、白紙は白紙烏は烏、髪の毛は髪の毛で小切は小切と選分けるのぢやが、成程これは物が讀めたら、選分けるに、手間の取れる事であらうわえ。

お浪　左樣でござりますわいなあ、何でも紙屑の選手は無筆に限りますわいなあ。

ト此内佐次右衛門そこらにある紙屑を取つて見て、

佐次　えゝ、是れは何だ、義太夫のちぎれか。（ト本を見て）えゝ、播州皿屋敷鐵山館の段、こりやあお菊が鐵山に責められる淨瑠璃か、此間相生太夫のを聞いたが、面白い淨瑠璃ぢやて。是れは何だ、

敵討の次第か。（ト見て）いやさうではない、生れ子が口を利いた次第ぢや、是れは何だ、あゝ一丁目の番附か、是れは向島の平岩が湯治場の引札、（トいろ〳〵見る事あって）いや、是れは面白い、成程紙屑屋は無筆でなければいけまいて、あはゝゝゝゝ。

お浪　實に讀み掛けましては、果しがござりませぬわいな。

佐次　それはさうと今日は、伊兵衛どのは生業に出られたかの。

お浪　はい、今日は古足袋が溜りましたから、三軒町の問屋まで持つて參りましたわいなあ。

佐次　いやいつもよく稼ぐ人ぢやの、種々な事を聞くやうぢやが、下帶などは晒す所があつて、又それへ模樣を置いて、出來合の蒲團の表になるさうぢやの。

お浪　其やう事もあるさうでござりますわいなあ。

ト此内奥よりお民島田髷、世話娘好みのこしらへにて、土瓶と茶碗を盆に載せ持つて出來り、

お民　さあお茶がはひりました。大家様お一つお上りなされませ。（ト茶を出す。）

佐次　いや是れはお民どの、御馳走になりまする、いつも〳〵美しい事ぢやの。

お民　又お弄りなされますかいなあ、もし母さん、また肩が張りませうから、ちつと休んでお茶一つ上りませいなあ。

お浪　わしも一服しませう。さあ〳〵大家さま、お澤山召上りませ。
佐次　はい〳〵結構な出花、澤山に頂戴します。お茶菓子を張込まうかの。
お浪　どうぞお願ひ申しまする。
佐次　えゝ、お茶菓子は今川燒にしようか、紅梅燒にしようか、燒團子にしようか、何にしようか、いつその事止しにしようか。
お浪　それがいつち宜うござりませうわいなあ。
三人　あはゝゝゝゝ。
佐次　いや、時にお內儀や、此お民どのを見るにつけ、惣領のお杉どの、奉公先の屋敷から駈落をして行方知れずと聞いたが、いまだに心當りはござらぬかの。（ト是を聞いてお浪ふさぐ思入あつて、）
お浪　はい、今に行方が知れませぬが、どうした事で魔がさしましたか、親の口から申すではござりませぬが、中々みだらな事をいたすやうな生れではござりませぬ、お前さまも御存じの通り、實に優しい孝行者、其上男勝りの烈しい氣質、どうしてまアあのやうな事になりましたか、今以て合點が行きませぬわいなあ。
佐次　さうとも〳〵、あの子の氣質も知つて居るが、ちよつと話しを聞きましたが、相手といふのは同

じ屋敷の小者ではないか。

お浪　はい、中間奉公をして居りまする、心良からぬ九助と申すものぢやといふ、噂を聞いたばかりの事。

お民　姉さんに限つては、さういふ事は神かけてないと思つて居りますれど、お屋敷からの知らせゆゑ母さんも父さんも、心配をして居りますわいなあ。

佐次　さればさ、其やうな事はないとは思へど、そこが思案の外といふ所かも知れぬての。

お浪　それが定なれば、憎い奴でござりますわいな。

ト おろ／＼と思入、禪の勤めになり、下手より雲貞坊主鬘、網代笠を冠り、麻の法衣木魚を首に掛け草鞋にて出來り、門口へ來て、

雲貞　南無阿彌陀佛々々。（ト木魚を叩く、是れにてお民懸硯の引出しより錢を出し、門口を明け、）

お民　はい、上げませうわいなあ。（ト雲貞に錢を遣る。）

雲貞　忝けなうござります。（ト木魚を叩き、）願以此功德無量圓滿大師法界平等、南無あみだぶ南無あみだぶ／＼。（ト木魚を叩きながら内を見て、）誠に御無心でござりますが、どうかお茶を一杯御報謝にあづかりたうござりまする。

お浪　はい〳〵、お易い事でござります、お民や、そこらの茶碗へお茶を一つ上げてたも。
お民　あい〳〵。（ト　お民茶碗を盆へ載せ持つて出來り、）さあ〳〵、たんとお上りなさりませ。
雲貞　はい〳〵、有難うござりまする、御免なされませ。
　　ト門口の内へ腰を掛け、笠を取り茶を呑んで居て、佐次右衞門と顏見合せびつくりして、
佐次　や、お前は檀那寺の雲貞殿ではござらぬか。
雲貞　おゝ、お前は檀中のお家主、佐次右衞門どのでござつたか。
佐次　誠に久し振りでござりましたが、どういふ事で修行には出さつしやるのでござりまする。
雲貞　いやもう、是れには種々話しがある事でござりまする。
佐次　まあ〳〵、草鞋を脱いで爰へ上らつしやりませ。お内儀ちよと見世先きを借りますぞや。
お浪　さあ〳〵御ゆるりとお話しをなされませ。あなた、此方へお這入りなされませ。
雲貞　はい〳〵、左樣なら少々お邪魔をいたしまする。（ト　雲貞草鞋を取つて下手へ住ふ。）
佐次　さあ、最う一つお茶を上りませ。
雲貞　はい〳〵、左樣なら自由に頂戴いたしまする。（ト　茶を呑み居る。）
佐次　時に雲貞どの、そんならもう了念寺には、おいでなさらぬのか。

雲貞　左ればでござるて、とんだ仕落で暇が出ましたゆゑ、據なく托鉢を致して居るのでござるが、誠に町住居をいたしてはとんと困り果てまする。

佐次　それは嘸やお困りの事でござりませう。時に雲貞どの、丁度時分どきぢやが、わしが家へござつて食事をして行かつしやらぬか。

雲貞　左樣でござるか、佐次右衞門どの御遠慮申す所ぢやが、實は今日は修行も少なく、まだ朝飯前でござれば、早速お齋に有り附きませう。

佐次　さういふ事なら直に、わしと一緒にござるがようござる。

お浪　もし大家さま、何もござりませぬが、こちらで上げてはどうでござります。

お民　さうなされたがようござりますわいなあ。

佐次　いや〳〵いつもならお賴み申すが、ちつと家にも志しもあれは、今度また御厄介になりませうそんなら雲貞どの行きませうか。

雲貞　それでは御一緒に出掛けませう。大きにお邪魔をいたしました。

お浪　誠におそう〳〵でござりました。又御修行においでなされませ。

雲貞　忝なうござります。（ト兩人門口へ出て、）

佐次　どうぞ、伊兵衛どのが戻られたら、よく言うて下され。
お浪　はい、左様申しますわいなあ。
雲貞　お齋と聞いたら、急に空腹になつたやうでござる。
佐次　それでは直に膳立をさせませう。さあ、ござりませ。
　　トやはり右の鳴物にて、兩人は捨ぜりふにて路地の口へはひる。跡お浪、お民殘り、
お浪　お心易いとは言ひながら、御修行さんを家へ連れて行て、御馳走をなさるとは、親切なお方ぢやわいなあ。
お民　いつも〳〵氣さくな大家さんでござんすわいなあ。
お民　ほんにさうでござんすわいなお。それはさうと父さんは、もうお歸りでありさうなものでござんすなあ。
お浪　大方どこぞへお廻りかも知れぬが、然しもう間もなう歸らしやんせうから、御膳の支度でもしておいてたもいなう。
お民　あい〳〵さう仕ようわいなあ。あのひものでも燒かうかえ。
お浪　今日は忙しないゆゑ、そんな事にしておいてたも。

お民　あい〳〵。

ト　お民は奥へはひる。お浪は又手拭を冠り、紙屑を選りにかゝる。四つ竹入りの合方へ節廻りの唐人笛をあしらひ、花道より伊兵衛好みの鬘木綿やつし、羽織着附、股引尻端折り草履にて五幅風呂敷を肩に掛け出來り、花道よき所へ留り、思入あつて、

伊兵　あゝ苦の娑婆とはよう言ふた事ぢやなあ、今日三軒町へ行つたついでに、觀音樣へお參りをして御鬮を取つて見たところ、二十五番の大凶ゆゑ娘の事が氣になつて、案じられてならぬゆゑ、晴晉堂へ廻つて見て貰ふたりや、尋ねる娘の命はないと言はつしやつたが、あの先生の占ひは十が十當らぬといふ事はないとの事、なまじ見て貰うたゆゑ餘計に心に掛つて來たわえ。（ト舞臺を見て、）おゝ、浮々と來たうちにもう家ぢや、何にしろ家へ行つて、晝飯でも喰つて腹を丈夫にせにやならぬわえ。（トやはり右の合方にて本舞臺へ來り、門口を明けて、）おい、今歸つた。

お浪　おゝ、今お歸りでござんしたか、御苦勞でござんしたなあ、大層手間が取れたゆゑ、娘も案じて居たわいなあ。

伊兵　おゝさうであらう、觀音さまへ參つて、どうで戻り道ゆゑ、不動樣のお旅宿が下谷へ引けたといふから、お參りをして來たが、大御繁昌の事よ。

お浪　さうでござんしたかいなあ。

ト此内伊兵衞足の砂を拂ひこちらへ來る、奥よりお民出來り、

お民　父さん、歸らしやんしたかいなあ。

伊兵　お丶今戻つた。これお民や、湯でも茶でも一杯くれ。

お民　あいく。(ト湯呑へ茶を汲んで來る、伊兵衞呑んでこなしあつて、)

伊兵　これお浪や、今日三軒町から戻りに、觀音さまへお參りをして、迷ひの種とは思つたが、御鬮を取つて見たところ、二十五番の凶が出たゆゑ、おりや氣になつてならぬわえ。

お浪　そんなら、あの御みくじが凶でござんすかえ。

伊兵　さうよ、それぱかりならよけれども、今の世の晴明と噂のある、晴眥堂の先生の所へ行つて、占ひを見て貰つたところ、易の表でも惡いわえ。(ト鬱ぐ、お浪お民案じられる思入あつて、)

お浪　わしも此頃はお杉の事を案じるせゐか、心の疲れかは知らぬけれど、あの子の行方が知れぬ晩から、いやな夢ばつかり見るゆゑ、氣になつてならぬわいなあ。

お民　もし母さん、さう言はしやんすりや、わたしも毎晩姉さんの事ばつかり、氣になる夢を見るけれど、言うたらお前が氣に掛けようと、今日まで何にも言はぬけれど、同じ夢を三日續けて見たゆ

ゐに、案じられてならぬわいなあ。（ト伊兵衞も是れを聞きこなしあつて、）

伊兵　何も其やうに案じる事もあるまい。心に思ふ夢を見るもの、夢は五臓の疲れとやら、今日も晴眚堂の先生がおつしやつたには、煩ひはあらうが命に別條はない、秋になつたら便りが知れようと言はつしやつたゆゑ、其うち行方も知れようから、きな〳〵と思はぬがよいわえ。

ト兩人に案じさせぬ思入、心の内では大方死んだらうとよろしくこなし、お浪もこなしあつて、

お浪　あの子も烈しい氣性でありながら、假令惡いと思へばとて若いうちは往々あること、其やうに隱れて居ずと、便りでもしてくれゝば此やうには案じぬもの、腑甲斐ない子でござんすわいなう。

伊兵　まあ〳〵それも愚癡といふものだ、假令あれが便りがないにもせよ、まだ〳〵跡には此お民といふ孝行な娘があれば、是れからそちに掛らねばならぬ。あゝもう姉めが事の話しは、これきり貴樣ももう言うてくれるな。

お浪　さあ、言うまいとは思へど、つい言ひ出してならぬわいなあ。

お民　そりや其筈でござんすわいなあ、互ひに思ひ思はれねばならぬけれど、あんまり氣を揉ましやんして、父さん母さんに煩はれでもしたらどうせうと、私やそれが案じられてならぬわいなあ。

トほろりと思入、伊兵衞もこなしあつて、

伊兵　そりやあそちの言ふ通り、何でも中から下のものは、達者でなければ世が送れぬ、いや達者といつても取る年は爭はれぬもの、少し遠道をしたので、足も腰もめり〳〵といふわえ。

お民　もし父さん、お前横にならしやんせ、わたしが揉んで上げようわいな。

伊兵　さうか、揉んでくれるなら、足はいゝが、肩が大分痞へて來たが、ちつとばかり摑んでくれぬか。

お民　あい〳〵、合點ぢやわいなあ、肩を揉んでしまつたら、足も擦つて上げようわいなあ。

伊兵　それぢやあ御苦勞でもやつてくれ。

お民　あい〳〵。

ト伊兵衞も座蒲團の上に住ふ、お民後へ廻り伊兵衞の肩を叩く、お浪は伊兵衞の脫ぎし羽織を疊みながら、

お浪　もしこちの人え、又言出すやうでござんすが、考へて見れば不孝な奴、親子三人此やうに苦勞ばつかりして居るのが、ちつとも通じぬ事かいなあ。

伊兵　お民が孝行に引替へて、あの位不孝な奴があるものか、愚癡な事を言ふぢやあねえが、去年も去年とて病氣ゆゑに屋敷から下つて來て、丁度三月越しの大煩ひ、すんでの事にあつちのものになる所を、爰の醫者あすこの呪禁、長屋の衆のお世話にて富士講のお焚上も丁度三度、其丹精が屆

いてか、やう／＼命を取止めて全快をしたゆゑに、落したものを拾つたやうで、やれ嬉しやと床上げにも、近所へ配つた白い強飯。

お浪　え。

伊兵　いやさ、赤い強飯を祝つてから、又お屋敷へ上りたいと達ていふゆゑ歸してから、日數も經たぬに情人をこしらへ、駈落するといふ奴がどこの國にあるものか、それも男らしい者でもあるか、惡いと噂の中間九助、あんな憎體な奴はないわえ、考へて見れば見る程、癪に障つて腹が立つてあんな親不孝な餓鬼は、どこぞの川へでも飛込んで、死んでゞもしまやあがれば、こんな苦勞はしやあしねえ。（ト惡態をつきながら、涙を隱して泣く。）

お浪　お前そんな事を言つたとて、そりやあ可愛さうでござんすわいなあ。是れが世間にない事ではなし、若い女が男と逃げるのは、幾らもあることでござんすわいなあ。

伊兵　えゝ何をぬかす、爰にも一人娘が居るわえ。有りうちに情人をこしらへて堪るものかえ。

お浪　それはさうでござんすれど、立派な質屋のお孃さんが、鳶の者にくツついたり、又は兩替屋の息子さんが洗濯屋の娘と逃げたり、そこが譬の思案の外、そんなに憎んだものでもないわいなあ。

伊共　なに、憎まずに居られるものか、貴樣があんまり甘いから、情人なんぞをこしらへて、駈落をす

るやうな事が出來るのだ、子に甘いも程があるわえ。(ト是れにてお浪腹の立つこなしにて、)

お浪　さう言はしやんすと、わたし一人惡いやうでござんすわいなあ。

伊兵　手前が惡いに違ひないわえ。

お浪　何で惡いのでござんすえ。(ト兩人言募つて爭ふ、お民は肩を揉みながら氣を揉む思入あつて、)

お民　もし母さん、最う何も言うて下さんすな、今に姉さんの樣子も分らう程に、どうぞ爭うて下さんすないなあ。(ト是れにて伊兵衞もこなしあつて、)

伊兵　いや、手前に肩を揉ました上、氣まで揉ましちやあ氣の毒だ、はゝゝゝ、もうすつかり肩もほぐれて來た。嘸まあ手が草臥れたらう。

お民　いえ／＼草臥れはしませぬ、ちつと足を擦らうわいなあ。

伊兵　いや／＼、もうよい／＼、さあ／＼爰へ來て、茶でも呑むがいゝわ。(トお民よろしく伊兵衞の側へ住ふ、伊兵衞お民に向ひ、)もう／＼おれもお袋も、お杉が事は言はぬから、そちも決して氣を揉まぬがいゝ、あいつが事は死んだと思へば事は濟む、先づあれは死んだとしておいて、是れから今も言つた通り、手前を大事にしにやあならねえ、なうお浪。

お浪　ほんにさうでござんすとも、お杉はあの通りな身持ちになるし、是れから便りに思ふは、お民は

かりでござんすわいな。

伊兵　さうだ〳〵、昨日も大家さまに頼んでおいたが、錢金はなくともいゝから、男振りも相應な心立てのいゝ、女房を優しくする、いゝ聟を貰つて、姉のお杉と二人前たんと孝行をして貰はにやあならぬぞよ。（ト お民はたゞ俯向いて鬱いで居るを、伊兵衛お浪兩人にてお民の顏を見て、可愛い奴だといふ思入あつて、）これお民、ちつと隣りのおみつさんの所へでも行つて、何ぞ話しでもして來ねえか。

お民　いえ〳〵、わたしや縫ひかけた仕事がござんすゆゑ、今日は家に居りますわいなあ。

伊兵　そんなら貴樣のいゝやうにしたがよい。（ト お民の天窓を見て、）おいお浪、聟取り前の大事な娘だなぜ髮でも綺麗に結つてやらねえのだ。賣物には花が肝腎、ちよつと結つて遣るがいゝ。

お浪　つい忙しいので、結日が二三日おくれたわいなあ。ちよつと結直して遣らうわいなあ。

伊兵　さうして遣つてくれ。

お浪　これお民や、戸棚にある鏡臺を出してたも。

お民　あい〳〵。（ト 誂への合方になり、お民上手の戸棚より鏡臺を出し持つて來てよろしく立てゝ、）もし母さん此中には鏡がないわいなあ。

お浪　ほんにさうであつた、昨日磨ぎに遣つたのを、さつぱりと忘れたわいなあ、困つた事をしたわい

なあ。

伊兵　何か買出しの内にはなかつたか。

お民　もし母さん、姉さんの鏡が、お屋敷から返つて居ますが、あれを借りては惡うござんすかえ。

伊兵　なに構ふことがあるものか、姉のものは妹の物だ、鏡は女の魂だ形見だと思つて貰ふがいゝ。

お浪　えゝも、忌々しい形見のなんのと、たゞ借りておくがよいわいな。

伊兵　あはゝゝゝ、なに氣にする事があるものか。（ト伊兵衞も氣になるを、笑ひに紛らす思入。）

お民　それでは姉さんのを出しますぞえ。

お浪　おゝ出してたも〳〵。（トお民やはり上手の戸棚より鏡を出し、持つて來て鏡立へ掛ける。）

お民　丁度この掛にようござんすわいなあ。

お浪　成程、これは誂へ向きであつたわいなう。

伊兵　お民が髮の出來るうち、草臥れ休めに少し横にならうわえ。

お民　寐なさんすなら、枕を上げようかえ。

伊兵　いや〳〵、手枕で遣らかさう。

お浪　もし、風を引くと惡いによつて、褞袍でも掛けて上げようわいなあ。

伊兵　そんなら、ちよつと引つ掛けてくりやれ。

トお浪戸棚より褞袍を出して伊兵衛に着せる、伊兵衛は横になる、お民鏡臺の前に住ふ、お浪は櫛を持つてお民の後へ立掛る、やはり合方になり、お浪お民の顔が鏡へうつる思入、是れをぢつと見て顔を背けて泣く、お民はお浪の泣顔鏡へうつるを見て兩人よろしくこなしあつて、

お民　もし母さん、お前は何で泣かしやんすえ。

お浪　さいなう、わしが泣いたはそなたの顔が、鏡へうつる面差しは、姉のお杉に生寫し、其似た顔を見るにつけ、何處にどうして居るかと思へば、つい涙が出てならぬわいなう。

お民　そんならわたしの此顔が、あの姉さんに。

お浪　似たとはおろか、親の目で、見紛ふ程に似て居るわいなう。

お民　それでお前は泣かしやんすか。

お浪　おいなう。（ト又鏡をのぞく、お民は鏡の蓋をする、）これお民、何で鏡を隠しやるのぢや。

お民　さあ鏡へ顔が寫るゆゑ、お前に涙をこぼさせる、わたしも悲しうなるによつて、それで蓋をしたわいなあ。（ト鏡の蓋を取りのける。）

お浪　成程これはわしが悪かつた、もう／＼決して泣かぬ程に鏡を掛けて、そなたの髪を結ひ直してや

らうわいの。

お民　いえ〳〵鏡はなうてもようござんすから、どうぞ結うて下さんせいなあ。

お浪　それぢやというて、出世前の若い女子が、鏡を立てずに髮結ふものではないわいの。

お民　それでも見ると氣掛りゆゑ。

お浪　いや〳〵、それではわしが心が濟まぬわいの。

お民　わたしや鏡は、（ト兩人にて鏡を引合ふはずみにばつたり鏡を落す、此はずみに蓋取れて鏡ばかり脱けて出ろ、此内より書置出る事、お民これを見て、）もし母さん、鏡の中から此やうな文が出たわいなあ。

お浪　何ぢや、文が出たとは。

お民　もし母さん、ひよつと姉さんが、書いて置いたのではござんせぬかいなあ。

お浪　まあ〳〵ちよつと見せや。（トお浪手に取つて上書を見て、）書置の事。（ト讀んで、）

兩人　やゝゝゝゝ。（ト兩人びつくりして驚き、）

お民　母さん、書置と書いてあるからは、心遣ひな事ぢやござんせぬかいなあ。

お浪　さあ讀むも氣掛り、ちよつと父さんを起してたもいなう。

お民　あい〳〵、（ト伊兵衞を搖起して、）もし父さん、ちよつと起きて下さんせいな。（ト急いで起す。）

伊兵　えゝ何だ、びつくりするわえ、靜にしろよ。
お浪　もしこちの人、お杉が鏡の中より、手紙が出たわいなあ。
伊兵　何だ、鏡屋から手紙が來たと。
お浪　いゝえゝなあ、お杉が鏡の鞘の中から、書置が出たわいなあ。
伊兵　なゝ、何といふ、お杉めが書置が出たと。
お民　ちよと早う見て下さんせいなあ。（ト　お民急いていふ、伊兵衛もいろ／＼思案の思入あつて、）
伊兵　これさ、書置といつても何も驚く事ではない、大方情人と逃げたといふ言譯の手紙であらう、置手紙をする程なりや、是れほど案じぬ、其先きに人にでも屆けて寄越せばいゝ事を、餘計な苦勞をさせやがるわえ。（ト　又橫になる。）
お民　何であらうと、母さん、ちよと讀ましやんせいな。
お浪　さあわしはそなたも知つての通り、あれが手紙は讀兼ねる、そなたちやつと讀んでたもいなう。
伊兵　どうで碌な文言ではあるまい。娘、そなた讀んで見ろ。
お民　そんならわたしが、拾ひ讀みに讀んで見ようわいなあ。
お浪　どうぞさうしてたもいなう。

ト是れにてお民手紙の封を切り書置を開き、お民思入あつて誂への合方、舞臺の後にて飴賣りの唐人笛をあしらひ、

お民　何々、「一筆書殘しまゐらせ候、左樣に候へば私事久々病氣にて宿へ下り、昨日お目出たを幸ひにお屋敷へ上り、御殿の樣子承り驚き入り申し候、御養子の彌平次樣またお妾のお光さま新參の御用人幡代龍左衞門殿三人の惡巧みにて、御家の血筋を絶さんと若殿左門樣に廓通ひをおすゝめ申し、それを越度に檻へ入れ、三度の御膳も碌々上げず毒害なさん巧みの樣子承はり候ゆゑ、何卒お助け申し度く兎や角と思ひ候へども、横木田傳右衞門樣は御追放、伊東吉之進樣は物當りにて俄に御死去、是れも毒殺と申す噂ゆゑ、猶々御案じ申し候まゝ、吉田忠左衞門樣をお頼み申し、檻を破り左門樣をお助け申さんと思ふ折柄、天道樣のお授けにや、檻の鍵を道にて拾ひ、やす〳〵明けて裏手より忠左衞門樣がお供申し、危きお命お助け申し上げまゐらせ候」

トお民よろしく思入あつて書置を讀む、お浪は一々びつくりなせし思入、伊兵衞も是れを聞き、段々と起上り、ぢつと文句を聞いてゐて、伊兵衞こなしあつて、

伊兵　こいつはとんだ事が出來て來たが、こりやなか〳〵一通りの騷動ではないわえ。それにしても駈落したと屆けて來たが、一圓に合點が行かぬ。

お浪 さあ、それも跡を讀んだら知れるであらうが、よくまあお杉も氣丈なこと、若殿樣を助けたいと御家老樣へ相談して、檻からお出し申したとは、出來したぢやござんせぬかいなあ。
伊兵 そりやあ大出來しなやらかしたが、それから跡の納りが肝腎だ。これお民、あとを讀め〳〵。
お民 あい〳〵、えゝ、「危きお命を助けりまゐらせ候て、扨我が身の災難は杉といふ字の紋附きし簪を取落し、それを證據に、」
伊兵 なに、簪を落したと、こりやあしまつたわえ。(ト南無三といふこなし、お浪も氣を揉む思入)
お浪 まあ〳〵、跡を聞かしやんせ。
お民 えゝ、「それを證據に手引きせしとお庭に於て繩目に逢ひ、松の木へつるし上げられ、繩は手にくびれ込み、竹さへ簓になるほどに割竹にて打ち叩かれ、血を吐く程な苦しみは、地獄の責も斯くばかりと存じまゐらせ候へども御恩になりし大殿樣奧樣への御恩返しと、如何やうに責に逢ひ候とも白狀いたさず候まゝ、一兩日の内には責殺され相果て候事と覺悟いたしまゐらせ候。」(ト泣き聲にて讀み)
もし母さん、責殺されて死ぬる覺悟と書いてござんす。こりやまあどうせうぞいなあ。
ト泣伏す、伊兵衞お浪も齒を喰ひしばり泣き居る。
お浪 ひよんな事になつて來たわいなあ。もしこちの人、これでは駈落したのではなかつたかいなあ。

伊兵　最う斯うなつては、どうも斯うも仕様がないが、何でも惡い奴が寄つて集つて、惡巧みをしたに違ひないわえ。これ娘、まだ跡がよつぽどあるか。

お民　まだあるわいなあ。

伊兵　一思ひに讀んでしまつてくれ。

お民　あい。（ト泣伏して居る。）

伊兵　え丶氣が揉めるわえ、早く聞かせてくれ。

お民　あい〳〵。（トよろしく思入あつて、）「猶又我が身事、幼い時より病身にて長々御苦勞お掛け申せし上、又々先立ち候のみか非業な死を遂げ御歎きをかけ候不孝の段々、申譯なく存じ參らせ候へども、假令女子の身なりとも武家奉公いたし候者は、お主へ忠義を盡し度く命を捨て候まゝ、くれ〴〵もお許し下され候やう願ひ上げ參らせ候。まだ〳〵申し上げ度事は海山御座候へども、人目を忍び候上未だ縛られ居り、人を賴み認め候事ゆゑ、心に思ふ十が一、よろしく御推量下され、御讀み取り願ひ上げ參らせ候。先はあら〳〵目出度かしこ。御兩親樣へ、杉より。」

ト書置を讀終り、お民はわつと泣伏す、伊兵衞お浪も淚に暮れし思入にて、伊兵衞疊を叩いて、

伊兵　これお杉、それ程の大騷動なら、何とか家へ人でも寄越しやあ、又相談もあらうもの。何ぼ忠義が

立てたいとて、あんまり忠義過ぎるわえ。

お浪　斯うした事とは夢聊か知らぬゆゑ、今が今まで惡者の九助と駈落したと思ひ、不孝者ぢやの何のと言つて、怨んでばつかり居たわいなう。

お民　もし母さん、ひよんな事になりましたわいなあ。（トお浪に取附いて泣く。）

伊兵　今書置の樣子では、其養子の彌平次とかいふ奴に、妾のお光といふ女がよつぼどな大惡人、怖しい巧みを仕居つたなあ。これお浪、思ひ當つた事がある、此間屋敷からお杉が、駈落したと知らせに來た時、荷物をそつくり下げて寄越したが、何だかおつな鹽梅と思つて居たが案に違はず、惡人共に責殺されてしまつたか。おゝ、情ねえことをしたなあ。

ト此内お浪は泣伏して居て、こなしあつて伊兵衞の側へ摺寄り、

お浪　もしこちの人、此書置があるからは、是れを證據にお代官樣へ駈込んで、惡い奴を吟味して、此腹癒せがならぬものかいなあ。

伊兵　はて、其事もおれが胸にあることだ、何にしろ書いたものがあつた所が、其本人の死骸を何處へこかしたか、それを突當てねば、なかなかお取上げはあるまいから、何でも是れから手を廻して娘が死骸のある所を詮議して、それからがお訴への一段、まあ氣を急かずと、おれに任せておい

たがよい。

ト　お浪を制する。此以前より門口へ以前の雲貞、佐次右衛門立聞きをして居て、此時内へはひり、

佐次　これ伊兵衛どの、様子は残らず門口で聞きましたが、お杉どのがひよんな死を遂げたとの事、嘸まあ愁傷な事でござらうなう。

伊兵　大家さま、とんだ事が出來ました。もし聞いて下さりませ、今日も今日とてお杉が事が氣になつてなりませぬから、晴晉堂で占つて見て貰つた所が、是れは命があるまいと、言はれた時にはハツと思ひまして、道々考へて見た所が、當るも八卦當らぬも八卦といふから、名人といふ晴晉堂でもよもやそんな事はあるまいと、今まで疑つて居りましたが、いよ〳〵死んだに相違はござりませぬ。

ト　此内雲貞は右の話しを聞いて居て、此時前へ出て、

雲貞　横合から異な事を申し出すやうでござるが、今お話しの非業な死を遂げられたといふ娘御といはつしやりますは、もしや左りの手の小指が、少し短くはござらぬかな。（ト是を聞きお浪前へ出て、）

お浪　はい〳〵、仰しやる通り子供の折、瘭疽を病みまして、小指が短かうござりますわいなあ。

雲貞　いよ〳〵小指が、短かうござるかな。

お浪　はい、短かいに相違ござりませぬ。

雲貞　もしそれなれば、死骸の在所が分りました。(ト伊兵衛是れを聞いて、)

伊兵　何とおつしやる、娘が死骸をあなたには、御存じでござりまするか。

お民　あの姉さんの死骸が、知れましたかいなあ。

お浪　それはまあ、何處にあるのでござりまする。(ト三人にて急いていふ、佐次右衛門こなしあつて、)

佐次　まあ〳〵其やうに急かつしやるな、今の話しなら死骸はそれに違ひないといふ譯は、わしも今家で此雲貞どのから聞いた話しが、どうやらをかしいと思ふから、こちの家へ來て話さうと門口まで來た所、様子を聞けばお杉どのが、死んだといふ事を聞き、いよ〳〵似寄りの話しの合紋、なう雲貞どの。

雲貞　さうでござる〳〵。もし伊兵衛どのとやら、佐次右衛門どのは御存じでござるが、わしは谷町の了念寺に勤めた番僧で、雲貞といふものぢやが、もしおつな所から手續きがあるものぢや、まあ聞かつしやれ、後の月の事であつたが、わしが寺の印の附いた燒場の切手を盗まれたと思はつしやれ、其翌る日になると、今の盗まれた燒場の切手を附けた佛を桐ケ谷の光明院へ持込まれ、早桶を火屋へ投り込んだまゝ逃げ出してしまつたゆゑ、直に人足が來て早桶の蓋を取つて見た所が

其中にはひつて居た佛は、血だらけになつた女の死骸、そこで人足もびつくりして住持に話すと是れも驚き、了念寺といふ燒場の切手がある所から、わしが寺へ屍が來たから早速に代官所へ訴へて、檢屍の上で改めて見たところが、年の頃は二十四五な女でござつた。(ト話しながらお民の顏を見て、)もしく、爰にござる此娘御に、よう似た顏附でござつたぞや。

伊兵　何と言はつしやる、あの、これに似て居りましたか。

雲貞　おゝ似て居たく、そこでまあ聞かつしやれ、自身で突いたか又は人に突かれたか、喉に二ヶ所の突疵がござりました、總身は隙間なく紫色に腫上り、いかさま打たれた疵でござらうが、いやもう二日と見られぬ其有樣、話しをしてさへぞつとしますわいの。

トよろしく話す、此内皆々こなしあつて、

お浪　もしこちの人、今此御出家さまのお話しの其死骸が、お杉の死骸に違ひござんせぬ、ほんにまあむごい事を仕居つたではないかいなあ。(ト悔しき思ひ入。)

お民　もし母さん、わたしや悲しうござんすわいなあ。(トよろしく泣く。)

雲貞　其事に附いて、とんだ難儀はわしが身の上、今話した燒場の切手を、盜まれたは番僧の不取締とそれが越度で追出され、せう事なしのお修行坊主、是れも災難でござるわいの。

卜此内伊兵衛はちつと思入あつて、雲貞に向ひ、

伊兵　もし御出家さま、あなたのお話しですつかり樣子が分りました、その非業に殺された女の死骸はわしが娘に相違ござりませぬ。

雲貞　さうでござらうな。（卜佐次右衞門に向ひ、）

伊兵　所で大家さま、今の仕儀でござりますから、どうも捨てゝはおかれませぬ、お杉が鏡の中へ入れて家へ寄越した此書置に、殘らず始末は書いてござりますから、是れを證據に代官所へ訴へて、娘の敵は取らねばなりませぬ、それに附いて御迷惑でも、此雲貞さまに、今の死骸の證人に是非とも代官所へ、出て貰はねばなりませぬ。

佐次　はて、それはわしが呑込んだ、此佐次右衞門も今度の入札で年寄りになつたからは、店子の事には肩を入れねばならぬ。雲貞どのは、わしが萬事を引受けて、きつと證人に出しますわえ。

雲貞　いやも、鹽噌さへ辨へて下されば、修行をするより遙かに樂、きつと證人になりませう。

伊兵　先づそれでわしも安堵しました、此書置と雲貞さまが慥な證據になるからは、願つて出れば娘の敵、きつとおれが取つて遣るから、これ娘も女房も大丈夫だから安心するがいゝ。

お浪　そりやもう敵も取れようけれど、思へば果敢ない娘の身の上、さつき鏡に寫りし顏が、お杉のや

うに見えたのは、此書置を見せよう爲、鏡に殘りしお杉が魂魄。

お民　さいなあ、わたしが一緒に姉さんを、お屋敷へ送つて行つた時も、いつそ別れを惜しましやんしたが、やつぱり蟲が知らせたのか。

伊兵　男勝りの氣勝であつたが、却つてそれが仇となり。

お彌　忠義ゆゑとはいひながら、非業な最期を遂げるとは。

お民　捨てるばかりの神さまで、助ける神はないことか。

伊兵　不便な事を、

兩人　しましたなあ。

ト三人顔見合せて泣く、佐次右衛門雲貞も共に愁ひの思入あつて、氣を取直し、

佐次　あゝこれ〳〵伊兵衛どの、もう歎いても歸らぬこと。

雲貞　その娘御の敵をば、取つて遣るのが佛へ供養。

佐次　手後れにならぬ内、ちつとも早く證據をもつて。

伊兵　成程さうでござります、そんなら是れより代官所へ。（ト書置を懐へ入れ、立ち上り）お浪、羽織をくれ。

お浪　あい〳〵。（ト伊兵衛へ羽織を渡す。）もし、どうぞ首尾ようお杉が敵を。

お民　取つて上げて下さんせえ。

伊兵　慥な證據が千人力、落着いて居ろ、大丈夫だ。

雲貞　其腰押しは、

佐次　大家と、

雲貞　坊主。（ト兩人尻を端折り、立上る。）

伊兵　御苦勞ながら。（ト伊兵衛、雲貞、佐次右衛門門口へ出る、お浪お民も門口まで來て、）

お浪　忘れものはござんせぬか。

お民　そんなら父さん。

兩人　よい吉左右を。

伊兵　むゝ。（ト羽織を引掛けるを木の頭、）待つて居やれ。

ト伊兵衛先きに雲貞佐次右衛門附いて足早に花道へはひる。お浪お民は跡を見送る。此仕組よろしく時の鐘、早めたる合方にて、

ひやうし　幕

ト時の鐘、つなぎにて直ぐ引返す。

(圓城寺玄關前の場) 本舞臺三間の間、眞中破風造りの玄關、向う左右塗緣の杉戸、眞中塗緣の障子を建切り、明建あり、通しの踏段、薄緣を敷きたる式臺、上下屋根附きの白壁、黒く塗りし腰羽目寺めいたる窓、下手に住職代々の大きなる石碑、是れへ髭題目を書き、臺石に圓城寺と記し、此前幅廣の床几を置き、總て駒込圓城寺玄關前の模樣よろしく、題目太鼓にて幕明く。とやはり右の鳴物にて、下手より釜屋武兵衛羽織着流し雪踏、町人のこしらへにてきよろ〳〵しながら出來り、こなしあつて、

武兵　はて、どうも、居所が知れぬわえ、あの八百久の娘のお七、どうかおれが手に入れて、女房に仕ようと思ふから、普請金に貸した百兩の金を囮にして、無理こじつけに得心さゝうと遣りかけて居る最中に、お七は爰の寺にゐる小姓左門となれやつてぱつちりやつたといふ噂、戀の遺恨の仕返しには、二人の奴等を突留めて、此寺へ踏込んで掛り合を附けにやあならねえ。それにしてもどうかして、二人の奴等を突當てゝえものだわえ。

ト又玄關を覗き込んで居る。爰へ所化兩人出來り、武兵衛を見て、

△　此男は又爰へ來て居るな、さつきから墓場をうろ〳〵まごついたり、庫裏の方へ來て見たり、又玄關先きをうろついたり、胡散な奴に違ひない。

○　一體この寺へは、何の用があつてはひつたのだ。

武兵　何さ、そんなにむづかしい事をいふには及ばぬ、わしは此寺に緣者の墓があるから、それを捜して居るのだ。

△　何だ、緣者の墓を捜すのだと。

○　何で、墓を尋ねるのに、庫裏や本堂の前をうろつくのだ。

△　さうして緣者の名前は、何といふのぢや。

武兵　その緣者の名は、なにさ、藪杉屋眼助といひます。

△　何ぢや藪杉屋眼助、其やうな檀家は此寺にはないわえ。

○　何でも怪しい奴に違ひない、さあ〳〵早く門外へ出さつしやい〳〵。

武兵　これさ〳〵、藪杉屋がなければ、船橋屋八兵衛だ。

△　えゝそんな名前もござらぬ、ぐづ〳〵として居れば、寺法に行ふぞよ。

○　さあ〳〵、門外へ出さつしやい〳〵。(ト兩人にて武兵衛を無理やりに引出さうとする。)

武兵　これさ〳〵、さう手荒くするには及ばぬ、そんならちよつと本堂で、阿彌陀さまを拜んでから外へ出るわえ。

△　此男も分らぬ奴だ。日蓮宗の寺に阿彌陀があるものか。

武兵　また違つたか。

兩人　さあ〳〵、ぐづ〳〵せずと、出さつしやい〳〵。

トやはり題目太鼓にて兩人は武兵衛を無理に引出さうとする。武兵衛跡に心の殘る思入にて行くまいとする、兩人捻ぜりふにて手を引張つて無理に下手へ連れてはひる。跡三味線入り音樂やうの鳴物になり、花道より左門之助若衆鬘振袖袴裝、草履にて花手桶へ秋草の入りしを持ち出て來る。此跡より忠左衛門羽織着流し大小にて、編笠を手に持ち、浪人者のこしらへにて出來り、左門之助を見て

忠左　それへお越しなされまするは、若殿左門之助樣ではござりませぬか。

ト是れにて左門之助、忠左衛門を見て、

左門　おゝ、其方は忠左衛門、誠に久々であつたわえ。

忠左　若樣でござりましたか、やれ〳〵お懐しうござりました。誠にはや存外の御無音に打過ぎましたも、浪々の身の暇なく世帶の事に取紛れ、存じながら御疎遠の段は、眞平御高免下さりませ。

左門　無沙汰と申すは互ひの事、何は格別、そちにもいろ〳〵話す事、また聞きたい事もあれば、兎も角もわしと一緒に、來てたもひなう。

忠左　私もいろ〳〵申し上げねばならぬ儀もござりますれば、お供いたすでござりませう。

左門　そんなら、忠左衞門。

忠左　さゝ、お越しなされませ。（トやはり右の鳴物にて本舞臺へ來り、下手の床几へ掛けて、）

左門　先づ忠左衞門、爰へ掛けてたも。

忠左　左樣なら。御免下さりませ。（ト兩人よろしく床几へ掛ける。）扨何からお物語りいたしませうやら。それは格別、あなた樣にも御息災にて、此やうな悅ばしい事はござりませぬ。

左門　そなたも無事にて安堵しました。其方にも種々なる心勞かけたるゆゑ、もし煩うてゞも居りはせぬか、如何いたして暮らし居るかと案じて居りしが、健にてわしも嬉しう思ひますわいの。

忠左　誠に信心の御利益にや、老年に及びましても、振出し一服用ひませぬ、是れだけが私の仕合せでござりまする。

ト此時玄關の障子を明け、お玉丸髷下女好みのこしらへにて出で、左門之助を見て式臺の前まで出來り、

お玉　もし左門様、只今お歸りでござりましたかいなあ。

ト大きくいふ、左門之助びつくりなし、折が悪いといふこなしあつて、素知らぬ振にて慇懃になつて、

左門　おゝ、是れは〳〵お玉どのでござつたか、やう〳〵只今戻りましてござりまする。

お玉　えゝも、戻りましたではござりませぬわいなあ、さつきからお七さまが、（ト言ひ掛けるゆゑ、左門之助は目にて知らせ、言つては悪いといふ、お玉是れに心附かず、）どのやうにお待兼だか知りませぬ。早うお部屋へ行て、お顔を見せて上げて下さりませいなあ。

ト お玉つか〳〵といふ、左門之助聞の悪き思入にて、

左門　何でござるか、かね〴〵お頼みの、御經文の事でござるか。

お玉　あれまあ、何をおつしやりますぞいなあ、證文なんぞの事ではござりませぬわいなあ。今日はお住持様もお留守ゆゑ、よい首尾ぢやというてお七さまが、

左門　えへん〳〵。（ト是れを消す、お玉は是れに構はず、）

お玉　おやまあ左門様、あなたは御風氣でござりますかいなあ、それなればお七さまが、振出しのよいのを持つてゞござりますぞえ、それを煎じて上げませうわいなあ。

左門　成程風氣でござれば、只今參つてお藥をお貰ひ申すから、先づ〳〵奧へござつたがようござる。

お玉　そんなら早う來て下さりませえ。

左門　只今に上りまする。

お玉　又思はせぶりに手間が取れますと、直に迎ひに參りますぞえ。

左門　はて、ようござると申すに。

お玉　待つて居りますぞえ。

ト お玉は捨ぜりふにて頻りに駄目を押しながら奧へはひる。左門之助は迷惑のこなし。此内忠左衞門素知らぬ振りにて顏を背けて居る、扨はといふ思入あつて、

左門　いや、あの女中も分らぬ人ぢやわえ。（ト紛らしていふ。）

忠左　何か御用と相見えますが、拙者はちよつと墓へ參詣のいたしますれば、御遠慮なうあなた樣には、御用向をお足しなされたがよろしうござりまする。

左門　いや〳〵、何も差し掛りし用事でもない程に、其心配には及ばぬ、然し爰は餘り端近ゆゑ、わしが部屋へ來て下され、ゆつくりと話しを聞きませうわいの。

忠左　左樣なら、只今の女中の御用は。

左門　あれは跡でもよいわいの。

忠左　どうやら樣子が。

左門　や。

忠左　いえ、御用がなくば暫時の間。

左門　わしが部屋にて何かの話しを。

忠左　左樣なれば、若殿樣。

左門　どれ、案内をしませうか。

トやはり音樂入りの合方になり、兩人はこなしあつて奥へはひる。此鳴物にて花道より住職日和少し更けたる坊主鬘袈裟法衣にて水晶の珠數を持ち、跡より子役の小坊主書物を包みし風呂敷包みを持ち出で來る。此跡より八百屋久四郎更けたる鬘、羽織着流しにて杖を突き出來り、直ぐ本舞臺へ來て、小坊主日和に向ひ、

小坊　お師匠樣、私はお歸りを知らせて參りませう。

日和　おゝ御苦勞であつた、奥へ參るなら其書物を、居間の机の上へ置いてくりやれ。

小坊　畏りました、さうして久四郎さまのお出での事を申しませうか。

日和　おゝ、お七に知らせたがよい。
久四　是れは憚りでござりまする。（ト小坊主は奥へはひる。）
日和　兄御、よい所でお目に掛りました。道々承りましたが最早御普請出來とは、大分よいお手廻しでござりましたな。
久四　いやもう、餘り早い事もないが、商ひをせねばならぬに依つて、早う〳〵と氣を急いても、扨職人の手ばかりはさう自由にもならぬもの、やう〳〵の事で咋日左官の手が上つたれば、明日は見世の賣出しをする積り、それに附けて長々の間厄介になつた娘のお七、明日は家の賣出しの事なれば、いろ〳〵と家にも手が入るゆゑ、それで今日は迎ひに來ました。嘸やお世話な事でござつたらう。
日和　何の〳〵、何も厄介な事は少しもござりませぬ。こちらへおいてよい事なら、今少し片附きますまでお置きなされても、苦しうはござりませぬが、然し御普請出來でお賣出しとは目出度い事でござりまする、明日はお悦び旁々愚僧もお伺ひに上りまする。
久四　どうぞ遊びながら來て下されし。
ト此内後の障子を明け、お玉出掛り居て、お七を迎ひに來たといふ事を聞き、びつくりしていろ〳〵

こなしつて障子をしめてそつとはひる。

日和　何にいたせ、お七の迎ひにござつたとあれば、又支度もござらうから、愚僧の居間で、ゆる〳〵お話しなさるがよろしうござりまする。

久四　何にしろ、奥へ通るとしませうか。

日和　それがようござりまする。(ト奥へ向ひ、)これ經善や〳〵。(ト呼ぶ、是れにて以前の小坊主出來り、)

小坊　御用でござりまするか。

日和　久四郎さまのお履物を、庫裏へ廻しておきやれ。

久四　是れは憚りでござりまする。(ト久四郎先きに日和式臺へ上ろ、小坊主は兩人の履物を持ち、)それでは先きに通りまする。

日和　さあ〳〵、お先きへお出でなされませ。

トやはり右の合方にて兩人小坊主附いて奥へはひる。直ぐに引違へて、奥よりお玉出來り後を見返りながら式臺へ下り、こなしあつて、

お玉　さあ〳〵〳〵、こりや、大事が出來て來たわいなあ、今旦那さまがござつてのお話しを、立聞きをして居たら、やう〳〵普請も出來上つたによつて、お七さまを迎ひに來たとおつしやつたが、

今日家へ歸つた日には、左門樣にお七さまがお逢ひなさる事も出來ず、お七さまに此事がお聞かせ申したら、嘸まあ本意なう思ふであらう。といふて言はずにおいて、唐突に家へ歸れと言はれたら又びつくりして癪の種、ほんにまあ旦那さまも、あんまり思ひ遣りがないといふものぢやわいなあ、さう御普請を急かずともゆつくりなされぱよい事を、ちつとはお七さまの氣にも、なつて見たがよいわいなあ。（ト頻りに愚癡を言つて考へる思入あつて、）ほゝゝゝ、それもちつと無理かいなあ、そんな愚癡は止しにして、此事を左門樣に相談して。（ト奥へ行きかけこなしあつて、）いや〳〵、それもならぬわいなあ。さつきござつたお侍樣が、まだお部屋に居る樣子、それではやつぱり話しもならず、こりや氣が揉めて、（トぴつたり坐るを道具替りの知らせ、）來たわいなあ。

トやはり題目太鼓になり、お玉よろしくこなしあつて、此道具廻る。

（左門部屋の場）　本舞臺三間の間、中足の二重、本緣附、障子欄間上手一間、附屋體、障子を建切り、向う上手一間の床の間、是れに續き墨繪山水の襖、下手の褄やはり障子、是れより下手折廻して障子の書割、庫裏へ通ふ廊下の心、此前に手水鉢、桐の立木、日覆より樹の釣枝、二重上手に塗緣火

きなる衝立を置き、總て左門部屋の體。上手に以前の左門煎茶道具を出し、急須へ湯をさして居る。下手に以前の忠左衛門住ひ、この模樣よろしく、合方にて道具留る。と左門茶をつぎ、忠左衛門へ出して、

左門　此茶は此間權家の茶より到來したが、一つ呑んで見て下され。（ト忠左衛門茶碗を取つて、）

忠左　これはよい色合、香氣と申しなか／＼銘茶でござりまする。（ト茶を呑む事あつて四邊へ思入、こなしあつて、）扨若殿樣。其節の事は申して返らぬお家の成行、あなた樣にも當寺へお出でなされてより御住持の心配にて寺小姓と姿も變り、長の月日の御艱難、嘸かし本意なう思召しませうが、憚りながら忠左衛門、御推察申し上げまする。

左門　さあ世の盛衰は言うて返らず、其方もあの砌より浪々なして今日が日まで、心勞いたした事であらう、それと申すも此左門を、助けたいといふそちが忠節、又二つには杉が働き、此恩義は忠左衛門、死んでも忘れはしませぬぞよ。

忠左　是れは又勿體ない其お詞、家來の身としてお主樣へ忠節を盡しまするは、こりや珍らしからぬ事でござりまする。左樣に仰せられまするると、却つて迷惑の仕りまする。

左門　それはさうと忠左衛門、只今にては何れに住居いたすぞ。

忠左　私事も其きざみは、あちこちと、流浪いたし居りましたれど、當節は玉川の在松下村と申す所に、緣者の推擧によりまして、手跡指南を生業と仕り、其日の煙りを立て居りますれば、先づ當時心安う住居仕り居りまする、今日は幸ひと寺子の休日にござりますれば、佛參もいたしたし御機嫌も伺はんと當寺へ參りし所、折よくあなた樣のお目に掛り、斯樣な悅ばしい事はござりませぬ。

左門　左樣であつたか、それにて先づ安心と申すもの、それに附けても此方に尋ねたいは、橫木田傳右衛門親子の者、其後とんと樣子も聞かぬが、兩人とも息災にてやはり牛込に住居いたし居るか、あの節も難澁の樣子であつたが、只今にては如何いたし居るか、其方は知らざるか。

忠左　はツ、折節文通の仕りまするが、橫木田氏も打ち續き不仕合せのみ重なりまして、殊に傳右衛門儀は喘息の病を煩ひ長々打ち伏しをりまするが、昨今は病重り醫療等も行屆かず、御存じの通り孝心なる悴傳吉、怠らず看病は仕りますれど、何を申すも身貧な暮し、其上別に生業とてもござりませねば、氣の毒なるは傳吉殿、只今にては往來の人の袖を乞ひ、一錢二錢の合力を申し受け、其日を幽に送り居りますとの事、實以ていたはしい事でござりまする。

トよろしく思入あつていふ、左門之助是れを聞きこなしあつて、

左門　某事もあの折には、横木田親子が心勞にて、彼が家にも忍び居つたが、其時とても豐ならねど其やうにも零落なすとは、はて氣の毒な事ではある。殊に悴傳吉は某屋敷に居る時より一方ならぬ話し相手、あゝどうか彼等親子の者の、貧苦を助けて遣りたいものぢやなあ。

ト心配の思入、此以前より衝立の蔭へ以前のお玉お七、好みのこしらへにて出來り、左門之助を手招ぎする、左門之助是れに心附かずに居る、お七紙を丸めて左門之助に投る事などよろしく。やはり左門之助は氣の附かぬ思入。お玉は忠左衞門が早く歸ればよいといふこなしあつて、椶櫚箒へ手拭を冠せ後へ立て掛ける。お七杓子を持つて招く呪禁など可笑味よろしく。又お七紙を丸めて投げては隱れる。此紙忠左衞門の天窓へ當る。是れにて忠左衞門びつくりして、

忠左　左門樣。このお部屋は大分紙が降りまするな。

ト左門之助心附き、ふと衝立の蔭を見る、此時お七と顏見合せる、左門之助は惡いと目で知らせて、

左門　さ、此頃は天氣續き、紙の降るやうな日和ではないが。

トもじ〳〵していふ、忠左衞門もお七にちよつと目を附けて、

忠左　いや、是れは斯やうでござりませう。大分天井より鼠めが、惡戲に。(ト後へこなしあつて、)誠に鼠は惡戲者ぢやなあ。(ト思入あつていふ、左門之助は間の惡き思入、是れにてお七お玉は衝立の蔭へ隱れる、

忠左衞門こなしあつて、〕時に左門樣、最早仕僧も戻られた樣子でござれば、ちよつと暮參をいたし
て少々仕僧に內談もござりますれば。又々御意得まするでござりませう。

左門　まだよいではないか。まだ種々と話しもあれば。

忠左　有難うはござりますれど、只今も申し上げましたる通り、たまさか一日の休日でござりますれば、
種々用事を掛けましてござりますれば、今日は御免を蒙りまするでござりませう。

左門　多用とあれば、無理に足も留め惡い、近々に又尋ねて下され。

忠左　又伺ひまするでござりませう。〔ト忠左衞門立上りこなしあつて〕いやなに、若殿樣、申すまでもご
ざりませぬが、未だ御壯年のあなた樣、兎角いたすと魔のさすもの、どうぞお身を大切に。

左門　そりや愼んで居るわいの。

忠左　いや、御如在のなき左門樣、いやも、年長けまするを餘計な苦勞。左樣ござれば左門樣。

左門　そちも達者で。

忠左　有難うござりまする。どりや、お暇をいたしませう。
ト唄になり、忠左衞門こなしあつて襖を明け奧へはひる。跡合方になり、衝立の蔭よりお玉は締ひ持
ち、お七は杓子を持ち、

お玉　さあ〳〵、歸つた〳〵。

お七　さあ〳〵呪禁が利いたわいなあ〳〵。

ト兩人いそ〳〵して踊りながら出て來る。左門之助呆れし思入にて、

左門　これはしたり、如何なこと、これお玉どの、そなたはまあ箒を持つて、そりや何の眞似でござりまする。(トきつといふ、是れにてお玉ハイと箒を持つた儘坐る。) お七どの、お前も何ぢや、杓子を持つて、そりや何でござる。

お七　あの、これは。(トやはり杓子を持つたまゝそこへ坐る。)

左門　さうしてまあ、あらう事か以前の家來忠左衞門が來て、いろ〳〵と話しをして居る所へ、紙を投げたり顏を出したり、わしや何うしようと思うて、面目を失うたわいの、お七どのは年の行かぬ事なれど、お玉どのまで同じやうに、ちと嗜んだがようござる。其まあ箒を、下に置かつしやれ。

お玉　はい。(ト箒を下に置く、此内お七は左門之助をぢつと見て居て、)

お七　もし左門樣、逢ひたかつた〳〵、逢ひたかつたわいなあ。

ト左門之助に取附く、左門之助もこなしあつて、

左門　その逢ひたいはよけれど、あんまり常談をなさるにも程があるわい。

お七　それぢやといふて、わたしや氣の揉める事があるゆゑ、お前に逢うて話しが仕度いけれど、今のお方が人の心も知らずに、何時までも居るゆゑに、それでお呪禁をして居たのぢやわいなあ。

お玉　ほんに左樣でござります、今のお方のお話しより、こちらの話しは急な事、それでもわたしが箒を立て、お七さんが杓子で三度招いたゆゑ、お呪禁がやつと利いて、やう〳〵の事で歸りました。

左門　今の事とは、そりやどのやうな話しぢやいなう。（ト此內お七鬱いで居る。）さあ是れからお七さま、今の事のお話しを、しつかりとなされませいなあ。

お玉　もし左門樣、いゝゝ、どのやうな事ではござりませぬ、あの本郷の家が普請が出來て、明日が賣出しぢやといふて、お七さまのお迎ひに、大旦那樣が見えましたわいなあ。

ト是れにて左門之助も驚く、お七左門之助に縋りて、

お七　もし左門樣、父さんが迎ひに見えたが、わたしや假令普請が出來ても家へ歸る事はいやでござんす、どうぞいつまでも家へ歸らず、爰に居るやうな、よい思案をして下さんせいなあ。

ト左門之助に取附き泣く、お玉もこなしあつて、

お玉　どうぞあなた、よい分別をして上げて下さりませいなあ。（ト左門之助當惑の思入。）

左門　さあ、わしぢやとて歸したうはなけれども、元より家が類燒して、居所がないゆゑ此寺へ、食客

に來たそなた衆の事、家が出來たれば、こりや歸らずばなるまいわいなう。

お七　いえ〳〵、そりやお前胴慾ぢや、わたしやどうあつても歸る事はいやぢや〳〵、たつて歸れと言はしやんすりや、わたしや死んでしまふわいなあ。

ト又取り附いて泣く、左門之助困つたものといふ思入、お玉もこなしあつて、

お玉　もし左門樣え、是れ程までお七さまが思うてござる事、どうかよい分別が、といつた所が今日が今日、斯う急場になつて來ては、わくせきと氣を揉んでも良い思案も出ぬ程に、もしお七さま、ひよつと今日お歸りになる時は、又逢はれるにした所が、急に逢はれもせぬ程に、またよい思案の出る間、もしお七さま、左門樣をお連れ申して、ちよつと爰の圍ひの内で、（トお七の背中を叩く。）御相談をなされたら、な、それ、よい智慧が出るかも知れぬわいなあ。

お七　それでもわたしや。（ト間の惡き思入。）

お玉　そんならお厭かえ。

お七　なあに。（ト顏に袖をあてる。）

お玉　えゝも、もどかしい、旦那さまも來てござれば、障りのない内、あの圍ひへ。

ト左門之助の手を取り引立てる。

左門　それぢやというて、もしや人目に。

お玉　えゝも、ぐづ〳〵なさる所ではない。それ、手を取つて。（ト左門之助の手をお七に取らせて、）

お七　玉や、行つてもよいかえ。

お玉　よい所ではござりませぬ。もし〳〵左門樣、あなたも何で立兼ねておいでなさるのでござります、こんな時には男の方が引立てねば埓の明くものではござりませぬ、口說はずつと小短かに。御用を足したら素知らぬ顏で、跡は奧の座敷へ行て、家へ歸るか歸らぬかを、御相談なされませ。

左門　そんならお前に、跡の事は、

お七　よい智慧出しておいてたも。

お玉　はて、一寸延びれば尋とやら。

お七　頼んだぞえ。

お玉　まあ圍ひの內へ。（ト兩人を、無理に手を取らせて上手の屋體の內へ入れて、ぴつしやり障子をしめて、障子の外より口を寄せて、）手廻しをなされませい。（トこちらへ來てほつと思入あつて、）やれ〳〵世話の燒けた事ぢやわいなあ。世話の燒けるはよいけれど、燒けたお家の普請が出來て、大旦那樣がお迎ひに見えたからは、是非連れてお歸りに違ひない、今お二人をあゝしておけば、少しの間のお

暇乞ひ、先づ歸るとなつた日には、わたしも少しは支度もしたし、お七さまの着替の物も片附けねばならず、こりやまあ急に忙しくなつて來た、こりや斯うしては居られぬわいなあ。

トこなしあつて上手の障子の側へ行き、ちよつと立聞きをする事あつて、よし〳〵といふ思入、懷より紙を出して障子の隙間より内へ投込む。これをきつかけに合方になり、こなしあつて奥へはひる。

時の鐘になり、下手より以前の武兵衞出來り、四邊へ思入あつて、

武兵　しめたぞ〳〵、何處ぞで二人を見出さうと、所化共の目を拔いて裏手から爰へ來たが、今下女が取持ちで圍ひの内へ入れたからは、もう大丈夫袋の鼠、是れからがこつちの仕事、お七と左門を引摺り出して、二人が手證を見た上で、先づ和尚めを呼出すわ。所がおれが言ふせりふは、やい和尚、寺の内へ女を引込み出會をさせて濟むと思ふか、此通り代官所へ訴へれば、言はずと知れた傘一本、それとも何ぞ言譯あるか、言譯なければ引括らうか。さあ〳〵とせり詰めれば、お七は直に本郷の八百屋の家へ歸される。所でおれが八百屋へ乘込み、久四郎に貸した百兩の金の催促した所が、金は出來ぬわ、出來ずば娘の聟にならう、金か娘、娘か金か、是れもやつぱり、さあ〳〵、トゞの詰りがいよ〳〵聟さま、左すればお七はおれが女房。いや、旨い話しになつて來たわえ。

ト思はず大きくいふ、此時下手より以前の所化二人出來り居て、武兵衞を見て、

△　やい／＼、此男はさつき門前へ追出したのに、また爰等をうろつくか。

○　何で爰へうせたのだ。

武兵　わしはちつと、尋ねる者があるから來たのだ、何も怪しいものではないわえ。

△　えゝ怪しくない事があるものか、尋ねる人とはだれだ。

トきつと言ふ、此の時奥より日和出來る、所化兩人は跡へ控へる。日和武兵衞を見て、

日和　つひぞ見馴れぬ御仁ぢやが、尋ねると言はつしやるは、何でござるな。

武兵　おゝ住持がござれば言つて聞かさう、尋ねるといふは男と女、上人樣と尊まれ、袈裟や法衣を身に附けて、出會をさせて濟むと思ふか。

日和　何と言はつしやる、出會をさせしと言はるゝには、何ぞ慥な證據でもござつてか。

△　言ひ掛りをする怪しい町人。

○　何ぞ手證を見ていふのか。

武兵　證據も何も入るものか、現在小姓のあの左門と、八百屋の娘お七と二人、あの小座敷で寐て居るわ。

日和　何といふ、すりやあのお七と左門が。

武兵　口でまだ〳〵言はうより、今其證據を出して見せるわ。

ト武兵衞二重へ駈上り、上手の障子屋體の內へはひる。皆々驚く、直に武兵衞屋體より出て見事に轉る。皆々びつくりする。此時上手の障子を引拔く、內に以前の忠左衞門住ひ居てきつと思入あつて、

忠左　あの、こゝな不屆き者めが。（ト合方になり、きつと言ふ、武兵衞起上り、）

武兵　あゝ痛え〳〵、酷い目に逢はせたな。やい侍、何でおれを投げたのだ。

忠左　おゝ、投げてもよい、打殺しても大事ないわえ。

武兵　何で殺しても大事ないのだ。

忠左　やあ、おのれ憎い奴め、浪人なせど身共も武士、佛參なして座敷を借受け休息なせし其處へ、町人の分際で、泥膞踏み込む無禮な奴、まだ〳〵申さば手は見せぬぞ。

ト刀へ手を掛けきつと言ふ、武兵衞心得ぬ思入にて、

武兵　まあ〳〵待つて下さい、さう短氣はしねえものだ、こいつはよつほど稀有だわい。たつた今二人の奴が此小座敷へ這入つたのを、はつきり認めておいたのだが、小姓とお七が侍に替るといふ筈はないが、こいつは不思議の見世物で、天井へでも附きはせぬか、お武家樣へ無禮をしたは、お

れが惡いとした所が、腥物さへやかましい寺へ娘を引摺り込み、坊主と一座させておいても、構はぬといふお觸があつたか。さあ、それを糺さにやあならねえ。（ト是れにて日和こなしあつて、）

日和　はて、入らざる事を申す人ぢや、假令娘をおいたりとも、よい筋があるゆゑおき申した。

武兵　何で女を寺へ引込んで、よいといふ筋があるものだ。

日和　言ふも益なき事ながら、胡亂と思はゞ言ふて聞かさう、あの八百屋久四郎は我が兄なり、殊には檀中の事なれば、其檀家が類燒なし、難儀とあるゆゑ置き申した、それを何で批難をお言やる。

ト此内後へ久四郎出で、

久四　それも最早普請も出來、住居も出來れば今日態々、久四郎が娘の迎ひに參つたが、何の他人の入らぬ口出し。いや御苦勞なお人ぢやわえ。

日和　斯やうに潔白に申しても、まだ〳〵難じるお心かな。

所化両人　よもや何にも言はれまい。（ト武兵衛ぐんにやりとなつて、）

武兵　いや、斯うも手筈が違ふものか、まだ〳〵滅多にあのお七が、家へ歸る事ではないと、思つたゆゑにいろ〳〵と、難じ掛けたらお七坊が、寺にも居られず本鄕へ歸るだらうと思つたから、いやな仕込もしたのだが、歸ると極つて居る事なら、いきぜいもんだが誠に無駄骨、加之に上から投

けられて腰の番の龜藏(の尾)をしこたま打つたも三津からでた錆、地口どころか意氣地のないざま、もう此寺には用はない、どれお暇いたさうか。(ト立ちかゝる。)

忠左　いや、歸すことは罷りならぬ。

武兵　まだ、御用がござりますか。

忠左　返す〴〵も憎き奴、事を巧みし今の始末、まだ其上にわれへの慮外、侍の魂たる我が大小へ足を掛けたる不屆き奴、手討にいたして某が、一分立てねば相成らぬ、身動きさせずとそれへ直れ。

ト刀を持ち立ち上る。武兵衞びつくりしてうろ〳〵する、日和是れを制して、

日和　其御立腹はさる事ながら、取るに足らざる町人風情、何卒御勘辨なし下され、此日和に彼れが命お預けなされて下さりませ。(ト日和命乞ひをする。忠左衞門こなしあつて、)

忠左　料簡ならぬ奴なれども、上人が御挨拶、佛參のきざみなれば、命は助けて遣はしませう。

日和　然らばお助け下されまするとな、有難う存じまする。(ト禮を述べ武兵衞に向ひ、)そこな御仁、愚僧が命を乞ひたれば、ようお詫び申した上、歸らるゝがようござる。

武兵　いやもう、ひよんな所へ掛り合ひ、既に命を取らるゝ所、へい〳〵御料簡下さりまして、有難うござりまする。

ト平伏する、此時上手より以前の左門之助お七お玉出來り、左門之助は上手へ住ふ、お七お玉、武兵衞を見て、

お玉　もしお七さま、あの意地惡の武兵衞さんが、ありもせぬ事言掛けをしたゆゑに、既に命を取らる所、ほんに〳〵よい氣味ではござんせぬかいなあ。

お七　あんないやな好かぬ人はないゆゑに、又と家へ來ぬやうに、切つておしまひなさればよいのになあ。

お玉　さうでございます、いつそ首がない方がよいかも知れませぬ。首があるゆゑきよろ〳〵とした目が、いつち好かぬではございませぬかいなあ。どうぞあなた、首だけ切つてあげて下さりませいなあ。

忠左　何さま左樣いたさうか。（ト又刀を持つ、武兵衞びつくりして、）

武兵　あゝもし〳〵、待つて下さりませ〳〵、お七もお玉も情ない、きよろ〳〵眼が氣に入らずば、是れから目玉は剝き出さぬ、なるたけ細目にいたしまする。（ト又久四郎の方へ向ひ、）これ〳〵、こなたも知らぬ顏をして居る事はない、外の者は知らぬ事、お前の家へはおれが主人から百兩貸してそれで普請も出來たれば、其恩を思ふならお前も口を添へて、此首が胴に附いて居るやうに賴み

ますます。(ト頻りに手を合せて拜む、久四郎もこなしあつて)

久四　いや、わしが見ては餘り惜しうもなさゝうな首ぢやが、當人の心では、首がなうては不自由でござらうの。

武兵　不自由とも〳〵、どうぞ詫びをして下さりませ。(ト頻りに詫びる、忠左衞門是れを見て、)

忠左　只今も申す通り、佛參の拙者なれば、殺生は許して、何ぞ命に代る仕置のいたし方がござらうて。

久四　如何さま無禮をなしたる上からは、たゞ歸しても遣られますまい。(ト此時お玉前へ出て)

お玉　もし旦那さま、斯ういたしたらどうでござりませう、湯屋泥坊の格で、あの丸い顏へ墨を塗つて追出すのは、どうでござりませう。

お七　成程見るもいやなあの顏ゆゑ、墨を塗るのがよからうわいなあ。

久四　こりや、玉が思ひ附きがいつちよからう。

武兵　何だ、おれが顏へ墨を塗るのか、それは許してくれ〳〵。

久四　それがいやなら、首を出す氣か。

武兵　何さ、首は御免だ。

久四　そんなら墨を塗らせるか。

武兵　や、こいつは堪らぬ。（ト逃出しにかゝるを、所化兩人にて引きずゑる。）

兩人　さあ〳〵、早くお塗りなされい〳〵。

お王　あい〳〵、わたしが塗りませうわいなあ。（トお玉有合ふ硯箱を持つて來て太筆を取つて武兵衛の額を
く塗る事よろしくあつて、）さあ〳〵、是れで命代りの此墨塗、此位にしませうわいなあ。

忠左　おゝそれでよい〳〵。お所化衆、そやつを早く門外へ追出し召され。

兩人　畏つてござります。

△　さあ〳〵早く、

兩人　立たつしやい〳〵。（ト武兵衛を引立てる。）

武兵　あゝ何のざまだ、釜屋の面が眞黑とは、是れではまるで釜の底。やいお玉、何ぼわれが下女だと
いつてあんまり釜を安くするな、それもあのれが焚附けてたうとう面まで黑焦げ同樣、あのこゝ
な飯炊女め。

兩人　えゝ、早く立たぬかえ。（トきつと言ふ、武兵衛こなしあつて、）

武兵　あ、まゝならぬ浮世ぢやな。

ト唄になり、武兵衛すまして先きに立ち、所化兩人附いて下手へはひる。跡合方になり、左門之助面

目なき思入にて、忠左衞門に向ひ、

左門　忠左衞門許してくりやれ、我が身の上の事につき種々心勞をかけたるそなた、たまさか來りし其方に、よい耳は聞かせずして、又候今日の此始末、どうもそちに濟まぬわいの。

忠左　それとても今更悔んで返らぬ事、若い内には有りがちながら、大事の御身に寸善尺魔。いやなに久四郎どの、只今あれにて承はれば、お娘御お七どのも、最早今日御本宅へお連れなさるでござりませうな。

久四　左樣でござりまする、最早普請も出來ましたれば、連歸らんと態々迎ひに參りましたが、薄々聞きし娘の身の上。

忠左　さゝ、何事もござるまいが、戸の建てられぬ人の口、堅く申さば男女の道は、七歲にして同じ席にはおかぬが掟、惡しき噂のない内に、お連れなさるが先づ肝要。

久四　御親切なるお心添、有難う存じまする。（ト久四郎日和に向ひ、）扨日和どの、長々と娘の厄介、其上今日はいかい心配、何れ禮には又重ねて。（ト左門之助に向ひ、）左門樣、あなた樣にも御機嫌よろしう。これ娘、日和どの始め左門樣へもお暇乞ひ、ちやつと御挨拶を申さぬか。

トいへどもお七俯向いて居るゆゑ、お玉氣を揉む思入あつて、

お玉　もうしお七さま、又跡でよい思案もござりませう程に、今日の所は、ちやつと御挨拶をなされまして、御機嫌ようお歸りなされませ。

お七　それでも家へ歸るのは。（ト頭を振るをお玉制して、）

お玉　又其やうな事おつしやりまする、さうお案じなされずと、何かの事はわたしが胸に、いえさ、迎ひにお出でなされたゆゑ、ちつとも早うお歸りが、よろしうござりまするわいなあ。

トお七に呑込ませる、久四郎こなしあつて、

久四　えゝ娘、何をぐづ〳〵言うて居る、早う御挨拶をして行かねばならぬ。これお玉、そちも何をもじ〳〵して居るのぢや、早う支度でもせぬかい。

お玉　はい〳〵、只今お七さまもお支度をなされまする。さあ〳〵、ちやつとお立ちなされませ。

ト是れにて餘儀なく、お七左門之助に向ひ、

お七　左門樣、それなら是れがお別れに。

左門　是れまでは親切に、いかい世話になりました。

お七　隨分ともにお達者で。（ト寄らうとするをお玉隔てゝ、）

お玉　御挨拶が濟みましたら、ちやつとこちらへ。（ト手を取つて下座へ來る、久四郎眞中へ出て、）

久四　扨忠左衞門樣、よい折にお目に掛りました、失禮ながら一足お先きへ。
忠左　折もござらば又重ねて、お目に掛るでござりませう。
久四　日和どの、何れ其うち。
日和　愚僧も近々伺ひまする。
久四　さゝ、娘おぢや。（トお七の手を引き平舞臺へ下りる、お玉も跡より下りて、）
お玉　へい〱お住持さま、いろ〱お世話になりました。左門樣、又お目に掛りませう。（ト忠左衞門に向ひ、）あなた樣、御ゆるりと。

ト下手へ來る、お七は左門之助へ心を殘しこちらへ來ようとするを、久四郎無理に手を取り花道の附際まで行く、此時時の鐘を打込む、久四郎思ひ入あつて、

久四　「思へ人、あすもとや聞く此身かは、」
忠左　「問はずばつきじ、」
左門　「夕ぐれの鐘。」
お七　そのかね事も今日を限りに。（ト又寄らうとするを、）
久四　あこれ、さゝ、行きませう。

ト唄、時の鐘になり、皆々こなしよろしく、久四郎お七お玉附いて花道へはひる。跡忠左衞門左門之
助日和殘り、日和こなしあつて、

日和　吉田氏には久々の御佛參に、何やかやの取込にて嘸かし御迷惑、最早七つも過ぎましたれば、夕飯の支度にても申し附けまする、今宵はゆる〳〵御一泊がよろしうござりませう。

忠左　いやも、計らざる御厄介に相成りました、然らばお詞に甘えまして、一宿のお世話に相成るでござりませう。然し必ずお構ひ下さるな。

日和　左樣なされて下さりませ、左門どのにも今宵はゆる〳〵、お物語りをなさるがよい。

左門　有難うござりまする。

日和　愚僧は本堂にて勤めをいたさねば相成らねば、是れにてゆるりとなされませ。（ト立上る。

忠左　御厄介になるでござりませう。

日和　御免下され。（ト合方にて日和は奥へはひる。跡やはり合方にて左門之助思入あつて、）

左門　忠左衞門今更言ふにも及ばねど、斯く成り果るも誰ゆゑぞ、小堀の家へ養子となりし心良からぬ彌平次と妾お光と合體なし、此左門に無實を負はせ亡き者にせん惡巧み、それをそちが計らひにてやう〳〵と屋敷を立ち出で、辛き命は助かりしが、それに列なる腰元お杉、又傳右衞門親子の

者が艱難なすも我への忠節。これ忠左衞門、忘れはおかぬ忝けないぞよ。

ト左門之助こなしあつて手を突き禮をいふ、忠左衞門其手を取つて、

忠左　これはしたり、又其やうな事おつしやりまする。それは格別、左門樣。（ト四邊へ思入あつて、）右の一儀に附きまして、申し上げねばならぬと申すは、腰元お杉が宿と申すは市ケ谷の堀端にて伊兵衞と申す紙屑渡世、ふとせし事より佞人共が巧みの一々露顯なし、證人の者これありまして代官所へ願ひ出しと申す事、御吟味の上彌平次殿は、御本家へお預けと相成り、又妾お光どのは其場より、逐電いたし行方知れず。

左門　むゝ、そんなら杉が宿許より、出訴いたせしそれゆゑに、惡人どもの惡事顯はれ、皆それ〴〵のお咎めとな。

忠左　左樣でござりまする。大惡人の吉三辨秀、此兩人は入牢と相成る。右に附てもあなた樣のお耳へは改めて入れねども、事落着なすまでは、あなたもやはり寺入同樣、この圓城寺へお預けの御身の上、斯かる大事の御身にて婦女子に心奪はれなば、御身は兎もあれ御先祖より、代々續きし小堀の家名も今風前の燈火同樣、其一大事を餘所になす、よもお心ではござるまいが、何卒御身を愼みたまひ、臣等が辛苦を憚りながら、御賢慮なされて下さりませう。

トこなしあつていふ、左門之助感服なせし思入にて、

左門　は〻あ誤り入りし其異見、我が心の愚より家來の者に心勞掛け、何と詞に述べられう。これ忠左衞門堪忍してたも、今より心を改めて猥らな事はせぬといふ、此左門が一期の潔白、誓言立てるわ、む〻。（ト差添を抜き髻を切らうとするを、忠左衞門留めて、）

忠左　こりや左門樣には、何ゆゑ髪をば。

左門　さ、此身は寺院にありながら、心亂れし我が魂、髻拂へば出家も同然、色に迷はぬ我が誓言、それぢやに依つて。（ト又切らうとするを、）

忠左　は〻あ天晴なる御心底、流石は小堀の若殿樣、其御心底を見る上は何しに疑ひ申すべき、頓て目出度き時來らば、直に御歸參なされまして、槍一筋の御主人、御出家などゝは忌はしい。

左門　そんなら疑念は、晴れたるか。

忠左　晴れいで何といたしませう。あ、世の浮沈とはいひながら、お家にあらば腰元近習、お側の御用を足すべきに。

左門　今は寺院の小姓となり、

忠左　昨日の武門に引替へて、

左門　妙法蓮華今日は又、
忠左　佛姿とかはる世も、
左門　法の功力もあるならば、
忠左　やがてぞ開く蓮葉の、
左門　盛り待たるゝ、（ト兩人顏見合せこなしあつて）
兩人　思ひぢやなあ。（ト此仕組よろしく、寺鐘の送りにて、道具廻る。）

（森川宿屋敷町の場）――本舞臺三間の間上手に榎の大樹、日覆より同じく釣枝、一面に練塀、此内所所に樹木の立木、總て森川宿屋敷町の模樣、時の鐘にて道具留る。と直にばた〱になり、上手より傳吉好みの鬘、切繼そぼろなるこしらへにて、頰冠り尻端折りにて駈け出て來る、跡より以前のお玉やはりばた〱にて追駈け出來り、

お玉　泥坊々々。（ト傳吉を捉へる、傳吉は逃げようとするを、お玉足に取附いて、）誰ぞ來て下され、泥坊々々。
　トしやに無二取り附いて居る、傳吉困るこなしにて、
傳吉　あもし〱、靜かにさつしやい、何もわしは取りはしませぬ、其やうに疑ふなら、體の内を改め

させるによつて、爰を放して下され。

お玉　いや／＼、そなたが拔いた簪を返さぬうちは、放さぬ／＼。

ト兩人よろしく爭ふ、此内やはりばた／＼にて、上手より以前の久四郎、お七の手を引き出來り、此體を見て、

久四　これ／＼お玉、簪を拔いた盜人どのは、此人か。

お七　これ、爭うて怪我をしやんな、もう／＼大概にしたがよいわいなう。

お玉　いえ／＼此人が、簪を持つて居るに違ひはござりませぬ、さあ早く出さぬかいなう。（ト爭ふはずみに傳吉の懷より簪ばつたりと落ちる、お玉手早く手に取つて、）それ見やいの、是れ程持つて居ながら、知らぬの何のとしらを切つて。もし旦那樣、お七樣、何とまあ憎い奴ぢやござりませぬかいなあ。

ト簪を兩人に見せる、傳吉は面目なきこなしにて、

傳吉　誠に面目ござりませぬ、どうぞ御免なされて下さりませ、全く惡い心で取りましたのではござりませぬ、御勘辨なされて下さりませ。

お玉　えゝも、盜人猛々しいと、人の物を盜んでおいて、惡い心でないもよく出來たわいなあ。わたしが男であるならば、擔いで行つて川の中へでも、投りこんでやるわいなあ。（ト一人で力んで居る。）

久四　これ〳〵玉や、物さへ返つたら、何も其やうに言ふには及ばぬ。（ト傳吉を見てこなしあつて）斯う見た所かまた年若、身には襤褸を纏うて居れど、腹から賤しい人とも見えず、人柄とても惡からず、盜みするやうなお人とも見えぬが、何で此やうな賤しい稼ぎはさつしやるのぢや。

ト言はれて傳吉恥しき思入にて、手拭を取り手を突き、

傳吉　はい、ようお尋ねなされて下さりまして、有難うござりまする。あなた樣の御推量の通り、なかなか斯やうな賤しい事を生業にいたしまする心は更々ござりませねど、實は私に一人の親がござりますが、老年の上喘息と申す病にて、貧しい中にていろ〳〵と藥の手當もいたしましたが、容易に直らぬ老の大病、さるお醫者の申されますには、人參を用ひねば治り難い病症と承はつて私も、どうか藥が求めたく思へど及ばぬ貧の病、人參求める三兩の金の切羽に詰りまして、心にもない賤しい業、元より業にいたさぬ盜み、旦那さまお女中さま、お許しなされて下さりませ。

ト思入あつていふ、久四郎も是れを聞き氣の毒なる思入、お七お玉も可愛さうなといふ思入。

お七　もし父さん、今の話しを聞きましたか、親御さんの御病氣ゆゑ、そでない事をなさるとは、お氣の毒な事でござんすわいなあ。

お玉　ほんに左樣でござりまする、そんな事とは知らぬゆゑ、簪を取られた悔しさに、あんなにいうた

がお氣の毒になりました、親孝行の爲とあれば、よくまあお盜みなされましたわいなあ。

久四　もしそこなお人、お聞き申すも異なものなれど、斯うお話しを聞きますも、是れもやつぱり他生の緣、さうしてお前の家は、此近邊でござるかな。

傳吉　はい、只今の住宅は飯田町でござりまする。

久四　なに飯田町でござるか、それは餘り近くもない。して、何ぞ稼業でもしてござるかな。

傳吉　さ、其稼業を存じませぬも近い頃まで武家奉公、浪人いたして間もなく親が病に臥しまして、それゆゑ、渡世もいたしませぬ。

久四　むゝ、成程お武家でござりませう、わしもさうは察しましたが、お武家とあればわしもちいとあの邊に知る人もござるが、して親御樣のお名前は、何と言はれまするな。

傳吉　へい、傳右衛門と申しまする。

久四　えゝ。

お七　それではもしや、お寺にて、

お玉　吉田樣のおつしやりました、

お七　お方ではござりませぬかいなあ。（ト傳吉を見る、傳吉も心得ぬ思入にて、）

傳吉　それではもしや、あなた方は。

久四　へい、ちつとはお話しにもなります者、先づ〳〵それは跡での事、今のお話しを聞きましては、延されぬは親御の御病氣。もしそこなお人、お武家出と聞きまして失禮とは存じますが、是れはわしが持合せ、丁度爰に三兩ある、是れをお前に、上げるのではない藥の代とあるゆゑ、都合の出來るまで、お前にわしが貸します程に、早うそれで藥を求め、親御の病氣を全快させたがようござる。

ト紙入より三兩出して紙に包み、傳吉に渡す、傳吉は嬉しき思入にて、

傳吉　えゝ有難うござりまする、御辭退申す筈なれど、盗みまでいたさうと思ひ詰めたる藥の代、お詞に甘えて拜借いたすでござりまする。

久四　さあ〳〵、遠慮なく藥の用に立てさつしやれ。

傳吉　有難うござりまする、是れが誠に地獄に佛でござりまする、假令此身を粉になしても、御恩金の此三兩、きつと御返上申しまする。

お七　どうぞ早う其金で、藥求めて親御さんに、どうぞ上げて下さりませ。

お玉　ほんにまあ、おいとしい事でござりますわいなあ。

傳吉　餘りの嬉しさに、未だお宅も承はりませぬ、してあなた方のお宅はな。

久四　はい、わしは本郷一丁目で、八百屋久四郎でござりまする。(ト是れを聞き傳吉びつくりして、)

傳吉　えゝ、左樣なら、あの御菩提所圓城寺の御緣家なる、久四郎どのでござつたか、誠に不思議な此の出會、とさ、知るお人だけ猶以て、面目もなき今宵の始末。

久四　あゝもし今宵の事は言はず語らず、斯うお名乘り申しては、いろ〳〵お話しもござりますれど、それはゆるりと又近日、御覽の通り女子を連れて居りますれば、もう夜に入れば道も物騷、又重ねてお目に掛りませう。

傳吉　何さま御女中連ゆゑ、それがよろしうござりませう、左樣なれば久四郎どの、是非遠からずあなたのお宅へ。

久四　どうぞ尋ねて下さりませ。さゝ、娘行きませうか。

お七　左樣なれば、あなたさま。

お玉　大きに失禮を申しましたわいなあ。

傳吉　隨分お靜かにお出でなされませ。

久四　そんなら、お別れ申しまする。

ト久四郎先きにお七お玉附いて下手へ行く。此時以前の武兵衛眞黒になつた儘出來り、後より窺ひ出て、

武兵　さつきはよくも恥をかゝせたな。（トお七を捉へる。）

お七　あれえ。（ト振放すを又捉へようとする、傳吉武兵衛を突廻してぐつと捻ぢ上げ、）

傳吉　もし、爰構はずと、ちつとも早く。

久四　おゝ捉まへてゐて下され。さ、娘來やれ。（ト手を取り花道へ行く、武兵衛是れを見て、）

武兵　あれを遣つては。

ト振り解き、行きにかゝるを傳吉武兵衛の襟上を取つて引附ける。久四郎花道よき所まで行き躓く、

傳吉　あ、もし、そこは石高。

久四　おツと承知ぢや。

傳吉　氣を附けて、（ト武兵衛振切らうとするを捉へて見事に投げる。久四郎はお七と入替る、双方見合つて木の頭、）ござりませ。

ト傳吉は向うを見込む、三人は足早に花道へはひる。武兵衛は腰を擦る。此仕組よろしく調練の笛、早き合方にて、

ひやうし　幕

四幕目

本郷八百屋の場
小石川釜屋の場
水道橋小橋の場
八百屋詮議の場

〔役名――湯灌場小僧吉三、土左衛門傳吉、仁田四郎忠常、八百屋久四郎、齋坊主辨秀、海老名軍藏、釜屋武兵衞、破落戸三崎の六、家主太左衛門、八百屋丁稚三太、釜屋の若い者茂九兵衞、鳶の者倶利迦羅辰。八百屋お七、湯島のお勘、八百屋の下女お玉等。〕

(本郷八百屋の場)――本舞臺上へ寄せて三間常足の二重、向う暖簾口、上手押入戸棚、下手乾物の箱を載せし棚の書割、下の方一間落間青物の棚、大根牛蒡いろ〳〵の青物を載せ、此棚の下へ人の這入る事あり、いつもの所門口、此外木戸、火の見櫓、總て本郷八百屋の體。爰にお玉下女のこしらへにて仕着物を縫つて居る。三太の丁稚木綿やつしにて手桶の水を柄杓にて青物に掛けて居る。門口に太左衛門羽織着流し家主にて、お觸帳を持ち立ち掛り居る。此見得角兵衞獅子の鳴物にて幕明く。と三太わざと太左衛門へ水を掛ける。

太左　これ〱小僧、家主たるべきものゝ天窓へ、何で水を掛けるのだ。

三太　いえお前さんに掛ける氣はござりませぬ、青物へ水を掛ける所へ、ひよつくり天窓を出しなすつたから、ついぶッ掛けましたのだ。

お玉　これ三太どの、お前もまあそゝッかしい、なぜ其やうな事をしなさんした、大家さんに誤らしやんせいな。

三太　誤らなくてもいゝけれど、泣く子と地頭仕方がない。大家さま、御免なさいまし。

太左　以來よく氣を附けろ、どこの國にか青物と家主を、間違へる奴があるものか。

三太　あんまり間違はねえ事もないのさ。大家さん、お前の天窓が南瓜によく似て居るからさ。

太左　えゝ此寐小便小僧め、何でおれが南瓜に似て居るものか。

三太　それぢやあ唐茄子かね。

太左　えゝ同じ事だわえ。

お玉　ほんに三太どの、お前のやうに口の過ぎた小僧はない。

太左　こいつはきつと豆藏の子だらう。

三太　あゝ、おいらは豆藏の子だから、泥水と清水の吹き分けをします。

ト三太水を口に含み、太左衞門へ吹き掛ける。

太左　あ、冷たい、又掛けをつたか。（ト手拭で拭く、三太奥へ逃げてはひる。）

お玉　これはまあ、どこもかしこも水だらけだ。御免なすつて下さいまし。

ト手拭で拭いてやる、太左衞門その手を捉へ、

太左　これ〳〵お玉拭くに及ばぬ、おれはおぬしと此やうに、しつぽり濡れたいのだ。

お玉　大家さま、何をなされますぞいな。

太左　何をするとはあんまり野暮な、男が女の手を捉へれば、外にする事はない、おぬしも知つて居る通り女房が死んで今は獨身、物は相談、おれが女房になつてくれる氣はないか、名にし負ふ本郷二丁目で表間口十三間で二人役の家主だ。これ、うんと言つてもいゝではないか。

ト手をとらへ引き寄せる。

お玉　又大家さまの御常談ばかり、わたしのやうな不束者が、十三間二人役の大家さまのお上さんになられませうかいな。

太左　なに、なられぬ事があるものか、一季半季の奉公人には珍らしい利口者、おれと違つて手も書けば、先づ店賃の受取りから出入事の預りまで、立派に間に合ふ德川向、其替りには節句錢を小遣

ひにやりますぞ。

お玉　有難うはござりますが、蟲のせゐで、わたしは大家さまと芋蟲が、大嫌ひでござりますわいな。

太左　おぬしがいやとゐるならば、家主はよしてもよい、どうぞ女房になつてくりやれ。

お玉　假令何とおつしやりましても、わたしは女房になられませぬ、大家さまより芋蟲より、男が嫌ひでござりますわいな。

太左　嫌ひといふはそりや噓だ、凡そ生きとし生けるもの、男は女女は男、嫌ひといふは一人もない。

ト お玉にしなだれる、此時奥より以前の三太覗ひ出て、

三太　濡れたくば濡らしてやらう。（ト手桶の水を太左衞門に掛ける。）

太左　又掛け居つたか、覺えて居れ。

ト太左衞門立ちかゝる、角兵衞早めたる鳴物になり、奥より久四郎羽織着流し、煙草盆を持ち出來り、太左衞門を留める、

久四　これは〳〵お家主さまには、どうなされましたのぢや。

太左　あの小僧めが、水を掛け居つた。

久四　なに、お前さまに水を掛けました。これ、なぜ其やうな惡戯を仕居るのぢや。

三太　いえ、あの大家さまが濡れたいと言はつしやるから、それで水を掛けました。
久四　何で又濡れたいといふは。
太左　さあ、わしが濡れたいといふは。
お玉　わたしを捉へて大家さまが。
太左　あゝこれ〳〵、何しにそなたを捉へてそんな事をいふものか、ふれたいといふのだ。
久四　ふれたいとおつしやりますは。
太左　さあ、今度厳しいお觸があつて、それを觸れに來たのだ。
三太　なあに嘘ばッかりついて、大家さんはお玉どんを捉へて。
太左　えゝ、まだそんな事を言ふか。（ト太左衛門立ち掛るを久四郎留めて）
久四　あもし、あれが嘘は誰も知つて居ります。これ〳〵、手前は油を買つて來い。
三太　あい、横町で買ひますかえ。
太左　油を買ふより賣る方だらう。
三太　大きにお世話、助平大家め。（ト角兵衛獅子の鳴物にて三太奥へはひる。）
太左　いや、あんな嘘をつく奴はない。

お玉　いえ〳〵、子供は正直でござんすわいな。
太左　なに、正直な事があるものか。
久四　いや大家さま、嚴しいお觸とおつしやいますは。
太左　おゝ肝腎の事を忘れて居た、此度富士の御狩につき、第一火の元大切ゆゑ、端々へ木戸を建て暮れ六つ限りに締切つて、町中の外は往來止め、非常の節は爰にある櫓の太鼓を打つを合圖に、端の木戸を明け、往來させよとある問註所のお觸でござる。
久四　左樣なら鎌倉の谷七鄕の其外へは、暮れ六つ限り參られませぬか。
太左　おゝ、爰等では本鄕の木戸を締めれば、駒込へは僅かな道でも暮れては行かれぬ。
お玉　もし櫓の太鼓を打ちますれば、
太左　端々の木戸を明け、どこへでも勝手に行かれるわ。
久四　みだりに太鼓を打ちましたら、お咎めを着ませうな。
太左　おゝ、そりや言はずとも知れた事、元火の元嚴重より端々の木戸を打てば、みだりに太鼓を打つ者あれば、火あぶりの刑に行ふとあるお觸だから、隨分共に氣を附けて下されっ
久四　畏りましてござりまする、はい、分りました。

太左　なに、分つたとは。
久四　今お前さまがお玉を捉へ、濡れたいとおつしやりましたは、火の用心の爲でござりますな。
太左　さう悟られては隱しはせぬ。實はお玉を。
お玉　えゝも、好かない大家さま。
太左　大家は誰にも好かれぬて。
久四　そりや違ひござりませぬ。
太左　いや、是れは惡い三絃だ。
　　　トやはり角兵衞獅子の鳴物にて、太左衞門お觸帳を持つて下手へはひる。お玉門口を締めて、
お玉　一昨日ござんせいな。
久四　あゝこれ、聞えては惡いわいの。
　　　ト久四郎煙草を吞んで居る、稽古唄になり、花道より前幕の武兵衞羽織着流しにて出來り、
武兵　此間鬩城寺で酷い目に逢うた意趣返し、今日は貸金を枷にして、お七の聟にならねばならぬ。
（ト右の唄にて舞臺へ來り、）久四郎どの、内かな。
久四　はい、どなたでござりまする。

武兵　釜屋武兵衞でござる。（ト合方になり、武兵衞内へはひる。）
久四　これは〳〵武兵衞どの、ようござらつしやつた、さあ〳〵是れへ。
武兵　久四郎どの、許さつしやれ。（ト上の方へ住ふ。）
お玉　えゝも、今日のやうにいやな人の來る事はござりませぬわいな。
武兵　なに、いやな人とは。
お玉　いえさ、いやみのない武兵衞さんぢやと申しましたのぢやわいな。
武兵　お七坊もさう言つて居るかな。
お玉　はい、いやな人ぢやと、いえ、いやみのないと言うてぢやわいな。
武兵　いや、それは有難い。（ト煙管を逆に口に附け、）あツつゝゝゝ。
久四　いや武兵衞どの、今日こなたがござつたのは。
武兵　外でもない先達て、主人三右衞門がこなたに貸した普請金の百兩、先月晦日限りの所、今以て挨拶なし、返す氣か返さぬ氣か、其返事を聞きに來ました。
久四　晦日までには是非々々と思ひましたが、燒後の不都合、つい延引いたしましたが、どうか當月晦日まで、お待ちなされて下さりませ。

武兵　そりや不都合なら晦日はおろか、節句前までも待つて遣らうが、只では待たれぬ。
久四　只待たれぬとおつしやるのは、書替の利息でも。
武兵　いや〳〵さういふ譯ではない、抑々燒後の普請金に、わしが口入で百兩貸したは、見込があつて貸したのだ。
久四　其見込みとおつしやりますは。
武兵　さあ、其見込みといふは、こなたの娘のお七坊だ。
久四　へゝえ、娘のお七を見込みとは。
お玉　武兵衞さんはお七さんに、疾うから惚れて居やしやんすわいな。
武兵　さあ、知つての通り此武兵衞も、釜屋の家に年季勤め、別家する體ゆゑ、主人から取持つて百兩こなたに貸したのは、魚心ありや水心、貸した金の出來ぬ時は、直にそれを聟引出に聟になりたいわしが心、不都合ならば此上に、五十や百は助けますが、聟にしては下さらぬか。
久四　不束な娘をば、女房にしたいとおつしやりますは、有難うござりますが、まだ年も參りませねばもそつと一人で我儘言はせ、樂をさせて遣りたうござりまする。
武兵　そりやどのやうにも樂をするがよい、わしが聟に來たとても、譬にもいふ小糠三合、わしがいふ

事聞いてくれゝば、あとはお七坊の心任せ、思ひれ我儘いふがよい。

お玉　差出た事を申しますやうだが、お七さんは今年十六、お聟取りも嫁入りも十六はいたさぬものゆゑ、お七さんにおつしやつても、所詮應とはおつしやりますまい。

武兵　それは世間の愚人のいふこと、なに十六が構ふものか、十三からは一人前の役に立つが女の妙、早くよき聟を取つて、樂をするのが德ではないか。

お玉　それに又外々から言込みもござりますれば、なあ申し旦那さま、お斷りなされた方がよろしからうと存じます。（トお玉思入にていふ、久四郎呑込み、）

久四　おゝさうぢや〳〵、先口の聟があれば、お氣の毒ぢやが武兵衞樣、お斷り申しまする。

ト武兵衞むつとなし、

武兵　むゝ、其先口の聟といふは、圓城寺の左門であらう。

久四　いえ〳〵、左門樣ではござりませぬ。

武兵　いや〳〵左門に違ひない、燒後寺へ行つて居るうち、ちゝくりやつて居る事を門番で聞いたゆゑ此間寺へ踏込み見屆けようと思ひの外、丹波の國の荒熊同樣酷い目に逢つたのも、聟にならうと辛抱したが、先口の聟があつて斷るとあるならば、貸した金を返さつしやい、期月は先日晦日限

り、今日まで待つたはわしが情、たつた今返さつしやい。

久四　普請金に差支へてお借り申した御恩借、都合さへ出來ますれば、直にお返し申しますが、只今直と申しては。

武兵　出來ずば家を渡さつしやい、今もいふ普請金に差支へて貸した金、期月までに返濟出來ずば、建つた家を渡さうといふ證文がはひつて居る、さあ金が出來ずば約束通り、建つた家を渡さつしやい。

久四　御尤ではございますが、御存じの通り入夫の私、爰の家を建てたいばかりで、お借り申した普請金、お約束ではございますが、どうぞ御料簡下さりませ。

武兵　そんなら金を返さつしやるか。

久四　其金がおいそれと、お返し申される位なら、申譯はいたしませぬ。

武兵　金は返さず家は渡さず、それぢやあおれを聟にするか。

久四　さあ、それは。

武兵　聟がいやなら、金を返すか。

久四　さあ。

武兵　家を渡すか。
久四　さあ。
武兵　さあ。
兩人　さあ〳〵。
武兵　久四郎どの、どうでござる。
ト久四郎詰りし思入、此内お玉早く歸さうといふ思入にて、線香と灸を持つて來て、雪踏の裏へ灸をすゑる。
久四　何れとも今が今、御返事がなり兼ねますれば、明日の夕方までお待ちなされて下さりませ。
ト是れにて武兵衞歸り度き思入にて、
武兵　居催促と思つたが、何だか急に歸りたくなつた、明日まで待つてやらうから、三つに一つの返事をさつしやれ。
久四　畏りましてござりまする。
武兵　何でこんなに歸りたくなつたか。（ト煙草入をしまひながら、跣足で花道の方へ行きかける。）
お玉　あゝもし武兵衞さま、お履物がござります。（ト雪踏を出す。）

武兵　これは憚り、(ト辭儀をして雪踏を履き、)これ久四郎どの、言ふまでもないけれど、百兩といふ金が明日までには所詮出來まい、又此家を渡したら、先代へ對して義理が濟むまい、お七が聟におれをすれば、金は返さず家も渡さず、浪風立たず納れば、篤くりと思案をさつしやれ。

ト稽古唄になり、武兵衞思入あつて花道へはひる、久四郎ほつと思入あつて、

久四　來ると長い男ゆゑ、急には歸り居るまいと、思ひの外に武兵衞めが、何で早く歸り居つたか。

お玉　そりやお呪禁をいたしましたから。

久四　どんな呪禁をいたしたのか。

お玉　箒に手拭を冠せましたが一向に利きませぬから、雪踏へ灸をするゑて遣りました。

久四　道理こそ、とつぱくさと落着いて居ず歸り居つた、今日は死んだ婆の命日、まだ佛前を拜まなんだ、此間にお經を上げて來るから、見世を氣を附けてくりやれ。

お玉　はい〳〵畏りました、ゆつくりとお拜みなれませ。

久四　どれ、お經を上げて來ようか。(ト唄になり、久四郎思入あつて奥へはひる。)

お玉　少し空が曇つたせるか、今の間に暗うなつた、火を附けずばなるまいが、三太どんはどうしたか三太どん〳〵、又遊びに出たと見える、困つた子ではあるわいな。

ト思入あつて門口をしめ行燈を取りに奥へはひろ。時の鐘、誂への合方になり、花道より湯灌場小僧吉三、やつし三尺帶草履、好みのこしらへ頬冠りにて出來り、花道にて後を見返り思入あつて、

吉三　辨秀坊主に賴まれて燒場切手を一枚盜み、四十兩取つたばかりに、彼奴と一緒に喰えこみ、再び娑婆へ出られめえと思つたより輕く濟み、此鎌倉を追放で今日娑婆へ出て來たが、何處へ行くにも一文なし、友達に一把づゝ草鞋錢を貰ふのも、あんまり意氣地のねえ話し、どうで暮れ六つの鐘を打つと端々の木戸が締り、五街道とも出られねえから、今夜はこゝをまご附いて、いゝ內會か明巢へ飛込み路用だけ取りてえものだ。（ト右の合方にて舞臺へ來り表から見て、）爰は天人お七といふ、いゝ娘のある八百屋だな、あの娘に客でも附いたか、立派に普請も出來たからは、十や二十はねえ事もあるめえ、爰で路用をこしらへて行かうか。（ト思入あつて門口を明け、）おろしにするのだ、大根を一本くんなせえ。（ト言ひながら內をあちこち見て、）いゝ鹽梅に誰も居ねえわい、賣溜でも持つて行かうか、然し錢は難儀だな。

ト奥へ行かうとする、ばたばたと音するゆゑ、吉三びつくりなし、見咎められてはと青物の棚の下へはひろ、奥よりお玉行燈を提げ出來り、門口を見て、

お玉　おや、表口が明いて居るが、買物買ひでも來たか知らぬ、履物泥坊が多いから、うつかり表は明

けておかれぬ。(ト四邊を見て、)下駄を取られた樣子もなし、見知らぬ草履が一足あるが、誰が爰へ履いて來たか、はて合點の行かぬ事ぢやなあ。

ト言ひながら門口を締める、合方になり、奥より以前の久四郎出來り、

久四　これお玉、見世番はおれがするから、臺所を片附けてくりやれ。

お玉　はい〳〵畏りました、三太どんはどこぞへ行きましたか。

久四　さつき油を買ひにやつたが、家主どのゝいふ通り油を賣つて居ると見える、あいつに構はず奥へ行きやれ。

お玉　左樣なら、お願ひ申しまする。(トお玉奥へ行かうとするを、)

久四　あゝこれ、奥へ行たら、お七にちよつと爰へ來いと言ふてくりやれ。

お玉　はい〳〵、畏りましたわいな。(ト合方にてお玉奥へはひる、)

久四　あゝ一つ叶へば又一つと、釜屋で借りた百兩で、普請が出來て嬉しやと思へば、又其金で明日につまる三つの返事。あゝ、苦勞の絕えぬ浮世ぢやなあ。

ト久四郎思ひ入、合方にて奥よりお七世話娘、振袖裝にて出來り、

お七　父さん、何の御用でござんす。

久四　ちつとおぬしに頼みがある。まあ、爰へ來や〳〵。

おせ　あい〳〵。（ト　お七下手久四郎の側へ來る。）

久四　これお七、そなたに親が手を下げて、頼みがあるが聞いてくれるか。

おし　改まつた父さんの、其お頼みとおつしやるのは。

久四　切ない譯の一通り、とつくりと聞いてくりやれ。（ト　誂への合方になり、思入あつて、）今更いふに及ばねど、過ぎし昔の事からして話さねば合點が行くまい。元このおれは鎌倉の北條家の家來にて戸倉十内といひしもの、故あつて浪人なし、町家の住居いたせし折、一子なきゆゑ江の島の辨才天へ立願なし妻が産みし男の子、産後の惱みに乳が細く、人の世話で東小松の百姓元兵衞といふ者へ七夜過ぎに里に遣り、其後一年經たぬ間に其日の煙りも立て兼ねて、妻諸共に信州の知邊を便り身を寄せしが、月日のたつに關守なく、早くも五年經つうちに再びまうけし女子はそなた、成人なすに隨つて里にやつた惣領が案じられてならぬゆゑ、又鎌倉へ立歸り、東小松の里親へ直に尋ねて行つた所、其前の年洪水にて、葛西一圓家を流し行方知れねば生死も分らず、それを氣病に妻は死去なし、跡に殘りしそなたをば、男の手にて育て兼ね、隣家の人の媒介で、此八百屋へ入夫にはひり、樂々足手を延ばせしに、又もや妻に死に別れ、不手廻りになつた所へ、丸山火

事で類燒なし、兄弟ゆゑに駒込の圓城寺へ立退いて雨露には濡れぬけれど、普請金に差支へ、どうしたものと思ふ折柄、武兵衛が口入で釜屋から百兩借りて普請をなし、元の八百屋になつたれど、まだ町内も建揃はねば、得意もすけなく釜屋から、借りた金も返されず、いつか期月の月日も經ち、聞いて居たか知らぬけれど、最前武兵衛が嚴しい催促、耳を揃へて金を返すか、金が出來ずば家を渡すか、但しは娘の聟にするかと、金を枷に三つの難題、口惜しくは思へども所詮百兩といふ金は、急に出來やう當はなし、又出來ぬとて此家を、金の抵當に渡しては、爰の家の先祖へ濟まず、そなたへ頼みは爰の所、おれでさへいやだと思ふあの醜男の釜屋武兵衛、聟にするのはいやであらう、おゝ尤ぢや／＼、泣くのは更々無理でない、其いやなのは知つて居るが、今もいふ入夫のおれゆゑ、此家を渡す上からは、首でも縊つて死なねばならぬ、親の命を助けるも又殺すのもそなたの料簡、いやぢやあらうが武兵衛をば、どうぞ聟にしてくりやれ。親が手を下げて頼むわいの。（ト久四郎思入にていふ、お七始終泣いて居る、久四郎お七の背中を擦りながら、）これお七、泣いて居ては譯が分らぬ、返事を聞かしてくりやいの。

ト之れにてお七顏を上げ、じゆつなき思入にて、

お七　外の事ならどのやうな、辛い事でもお前の頼み、決していやとは言ひませぬ、武兵衛を聟にする

事ばかりは、どうぞ堪忍して下さんせいな。（トお七わつと泣伏す。）

久四　おゝ尤ぢや〳〵、さら〳〵無理とは思はぬが、そなたがいやといふ時は、此家を釜屋へ渡さにやならぬ、さうした日には今もいふ入夫のおれゆゑ首でも縊り、死なねば此家の先祖へ濟まぬ、爰の道理を聞き分けて、得心してはくれまいか。

お七　親の命に拘はる事ゆゑ、いやと言はれぬ譯ながら、どうかして其金の出來る事はござんすまいか。

久四　是れが十か二十なら七所ごしらへしてなりと、釜屋へ借りを返すけれど、大枚百兩といふ金なれば、力づくにも腕づくにも、此久四郎には出來ぬわいの。

お七　わたしは足らぬ女子の事、今言はしやんした兄さんが、居やしやんしたら膝とも談合、出來まいものでもござんせぬが。

久四　生きて居るやら死んだやら、二十餘年音信不通、生死分らぬ悴が行方、家に居たなら男ゆゑ、おれが力にならうわいの。

お七　どうか急に兄さんに、逢ひたいものでござんすが、逢ふ事は出來ますまいか。

久四　急な事には行くまいが、生きてさへ居た事なら、いつか一度は縁あつて、逢はれぬ事はあるまいわいの。

お七　さうして何ぞ兄さんに、證據でもござんすか。

久四　おゝ、證據は則ち守りの内に、おれが自筆で入れ置いた、臍の緒書に年號月日、戸倉十内が忰嫡曾松と記してある其上に、まだも證據は左りの腕に、鱗に似た痣があつたが、大方今でもあるであらう。（ト此内青物棚の下より吉三出掛り、是れを聞き扨はといふ思入）いや、それは兎もあれ今の賴み、無慈悲な親と思ふであらうが、どうぞ聞いてくりやいの。（トお七ぢつと思入あつて泪を拭ひ、）

お七　事を分けてのお前のお賴み、武兵衞を聟にする事は、いやで〳〵ならぬけれど、親の命に替へられねば、わたしや得心しましたわいな。

久四　そんなら得心してくりやるか。

お七　あい、濟まぬ事ではあるけれど、何事も是れまでと。（ト死なうといふ思入あつて）ほんまに得心しましたわいな。

久四　あゝ忝けない〳〵、濟まぬ譯も知つて居るが、よう得心してくれた。嘸いやであらうが二つの年より此年まで、足手を延した此家の爲、これで先祖へ義理も立ち、おれが死なずにしまうたも、お七そなたの心ゆゑ、あゝ忝けない〳〵、これ手を合して拜むわいの。

ト久四郎手を合せて拜む、お七その手を拂ひ、

お七　あゝ勿體ない、親にわたしが拜まれては、此身に罰が當るわいの。
久四　いや、嘸死んだ女房も草葉の蔭で案じて居たらう、位牌へ話して悦ばさう。（ト此時五つの鐘、）おおあの鐘はもう五つ、此頃は物騒ゆゑ、表口は明けてはおかれぬ。（ト門口を締め掛金をかけ、）人間一生の盛衰は、七轉び八起きとやら、惡い跡は必ず善いもの、苦勞せぬがよいわいの。どれ死んだ女房に、仔細を話して聞かさうか。

ト時の鐘、誂へ胡弓入り、相の山の獨吟になり、久四郎思入あつて奥へはひる。お七跡を見送りわつと泣伏す。吉三思入あつて棚の下へ隱れる。お七顏を上げ思入あつて、

お七　お年寄られた父さんが、いかい御苦勞なさる上、事を分けての今のお頼み、いやと言はれぬ義理ゆゑに、武兵衛を聟にしませうとお心休めに言ふたれど、聟に取られぬ其譯も、御存じの樣子なれど、明けていはれぬ此身の徒、恥しながら十四の春小堀樣の御法事が圓城寺にあつた時、お給仕役に頼まれて初めて見たる左門樣、てもよい殿御と其時から、心に忘れずどうぞして、ま一度お目に掛りたいと神々樣へお願ひ申した、其お惠みやら圓城寺へ、假住居して居る所へ、思ひ掛けない左門樣が、寺入りとやらいふ事でお出でなされて朝夕に、一つお寺に居る嬉しさ、元より惚れたお方ゆゑ、お茶のお給仕召物の疊返しが御緣となり、お玉が氣轉の取持に、嬉しい逢瀬も

度重なり、此世は愚先きの世掛け、言交せし二人が仲、どうまあ今更お別れ申し、武兵衛を聟に取られうぞいなあ。（トわつと泣き、袖にて口を押へ四邊へ思入あつて、）とはいへ、わたしがいやといへば、此家を渡し父さんが死んで言譯なさるとあれば、いやとも言はれず返事をしたのは、身の言譯に死ぬ覺悟、武兵衛が金の催促も、聟になりたい望みゆゑ、その目當のわたしが死なば、さう喧しう言ひもせまい、十六年が其間、御恩になりし父さんに、先立つは不孝ながら、死なねばならぬ今宵の仕儀、せめて一筆書き殘さん。（ト相の山の獨吟になり、お七有合ふ硯箱を出し書置にかゝる、吉三そつと出て後から差しのぞき見て居る、お七泣く〳〵書置を書きしまひ、）さぞや跡で書置を、見やしやんしたら父さんが、親を騙す憎い奴とお腹立ちでござんせうが、お師匠さまの教へにも、二人の夫を持たぬのが、女子の操といふ事ゆゑ、お許しなされて下さりませ。（ト奥へ向ひ思入あつて、硯箱の小刀を取り、）幸ひ爰に此小刀、誰も來ぬ間に少しも早う、さうぢや〳〵。

ト相の山の切れにて、お七小刀を取直し、自害せうとする、此内後に吉三窺ひ居て、此時抱留め、

吉三　あこれ、危ねえ、待ちなせえ。

お七　いえ〳〵放して下さんせ、わたしや死なねばならぬわいな。

吉三　樣子は後で殘らず聞いた、死なうといふのは尤だが、そりや、ほんの鼻許思案、よく人のいふ事

だが、死んで花實は咲きやあしねえ、惡い事は言はねえから、まあ〳〵待ちなせえ〳〵。

お七　いえ〳〵、生きて居ては濟まぬもの、どうぞ放して下さりませ。

吉三　いや放さねえ〳〵、おれが捉めえたら放しやあしねえ、親御が聞いたらどの位、案じるか知れやあしねえ。（ト小刀をもぎ取り、）何が書いてあるか知れねえが、此書置も親御の目に、掛つちやあ苦勞の種。（ト吉三引つたくり袂へ入れる。）

お七　いえ〳〵、どうあつても、わたしや死なねばならぬわいな。

吉三　はて、聞分の惡い、待てと言つたら待ちなせえ。

ト吉三ぢつと留める。合方にて、奧より久四郎お玉出來り、

久四　これは〳〵、どなた樣でござりますか、私は親でござりますが、ようお留めなされて下さりました。

お玉　何でまあお七さま、此やうな事なされました。（トお七俯向き居る。）

久四　さあ武兵衞を嫌ふは尤だが、なぜ此やうな事をするならば、さつきおれが頼んだ時いやと言つてくれぬのだ、兄はあれども生死分らず、天にも地にもたつた一人のそなたを殺してどうせうぞ。おれも直に死なねばならぬ。

お玉　あなたがお留め下されず、お前が死んで見なさんせ、旦那樣が死ぬとおつしやる、危ない事でご

ざんしたな。
久四　さうなる時は千辛萬苦で、建てた此家も人手に渡し、御先祖へおれが濟まず、行く所へも行かれぬわいの。（ト此内お七泣き伏し居て、此時顏を上げ、）
お七　父さん、堪忍して下さんせいな。
お玉　堪忍してとおつしやるからは、死ぬのは思ひ留らしやんすか。
お七　あい、さつぱり思ひ留つたわいな。
久四　おゝ、よく思ひ留つた忝けないく。
お玉　これといふのも思ひ掛けない、あなたがお留め下すつたゆゑ。
久四　おゝさうぢやく、娘が命を拾つたは、全くあなたのお陰ゆゑ、何とお禮を申さうやら。
お玉　まあくお茶一つお上りなされませ。（ト茶臺へ茶碗を載せ出す、吉三頂いて呑む、）
吉三　そんなに言はれちやあ面目ねえ、もう大概にして下さりませ。
久四　いえく、詞でお禮は申し盡くされぬ。
兩人　有難うござります。
吉三　まだそんな事を言ひなさるか、實にわつちやあ迷惑します。

ト吉三を久四郎お玉見て、合點の行かぬ思入にて、

久四　それはさうとお前さまは、往來のお方でござりますか。

お玉　但しは買物にでも、お出でなされましたか。

吉三　なに、買物には來ませぬ。

久四　何しにお出で、

兩人　なされました。

吉三　盗みに來ました。

兩人　えゝゝゝ。（トびつくりなし。どうとなる。）

吉三　わつちやあ此鎌倉に、ちつと居られぬ譯があつて、旅へ出掛ける路用に困り、見世の明いてる所からふつと浮んだ惡心に、賣溜でも盗まうと、忍び込んだ其途端、奥からお前が來なすつて逃げるにも逃げられず、青物棚の下に隱れ、切ない譯の一部始終を、殘らず聞いて菜よりも萎れ、惡い心を飜へし、人參牛蒡を賣つてなりと、堅氣になる氣になりました。

久四　ちよつと見るからたゞならぬ、お人ぢやと思ひましたが。

お七　盗人さんでござんしたか。

お玉　氣味の悪いお方でござんすな。
吉三　なに、氣味の悪い事はねえ、盜みをする者だといつて、ギヤツといつて生れた時から、盜みをするものは一人もねえ、氏より育ちと成人なし、惡い友には染み易く、酒附合から女郎買、ちよつとお花が狐となり、儲けも知らず遣ふゆゑ、帳の上に穴が出來、惡い尻尾を見せまいと親の物を盜むが始め、たゞ取る金ゆゑ止められず、遂にやあ他人の物まで盜み、とゞの仕舞が喰ひ込み、百貫の抵當に編笠一蓋、首を取られて野末へ埋められ、問ひ弔ひも出來ねえ身の上、親兄弟に難儀を掛けるも、ふとした心の迷ひから、元はみんなたゞの人さ。
久四　成程お前のいふ通り、腹から盜みをする者は、たゞの一人もござりますまい、お前もやつぱりそこらから、斯うして盜みをしなさるのか。
吉三　まあ、そんなものさ。
久四　斯う見た所がまだ年も、二十五の曉を越されぬやうに思はれますが、お前は幾歳でござりまする。
吉三　二十四になります。
久四　二十四になられますとか。それでは庚申の生れ。（ト思入あつて、）さうして生れた其所は。
吉三　生れはやつぱり此鎌倉、親は何の某と名乘ればよいに親の恥、又言ふ時節もござりませう。（ト時の

鐘、思入あつて、）うか〳〵茲に長居して居て、こつちの家へ難儀でも、掛けちやあ濟まねえ、お暇しませう。（ト立上るを、）

久四　あゝもし、まあ待つて下さりませ、何はなくとも御酒の一つも。

吉三　有難うござりますが、酒はちつとも行きませぬ。

お玉　それではせめて御膳でも。

吉三　それもさつき喰ひました。（ト此内久四郎金を一兩紙に包み、）

久四　左樣なれば心ばかり、旅へござるといふ事ゆゑ、草鞋錢を進上しませう。

吉三　なに、そんな心配にやあ及ばねえ。

久四　いえ、どうぞ取つておいて下さりませ。

吉三　こつちの家も金の入る中、一兩でも無駄な事だ、友達も大勢あれば、草鞋錢位はどうでもなる、こりやあ無駄だから止しなせえ。どれ、更けねえうちに行きやせう。

久四　そんならどうでもお歸りなされますか。

吉三　御縁があつたら、又お目に掛りませう。

お玉　もしお七さん、もうお歸りなさるとおつしやる、ちやつとお禮をおつしやりませ。

お七　泥坊さん、有難うござりましたわいな。（ト辭儀をする。）

吉三　何の禮に及ぶものかね。（ト言ひながら立上り、思入あつて、）然し今日限り死なうなどゝ惡い料簡を出しなさんな、お前が死ぬとおとつさんも、共に死ぬと言ひなさる、そんな事になつた日には假令手は下さずとも、お前が殺すも同じことだ、金が百兩ありせへすりやあ、死ぬにも何にも及ばねえ、天道樣の惠みがあつたら、明日が日拾ふまいものでもねえ、もしわつちが拾つたら直に持つて來て上げようから、惡い料簡を出しなさんな。

お七　有難うござんすわいな。

久四　あゝ、御生業柄にも似合ず御親切な其お詞。

お七　今おつしやつた兄さんが、居なさんしたら年配も。

久四　おゝ、丁度似寄の泥坊どの。

お玉　そのお行方が知れましたら、嘸よろしうござりませうな。

吉三　いつか一度は親子の緣、逢はれぬ事もあるめえが、女と違つて男の子は惡い者になり勝ちゆゑ、逢はねえ方が花だらう。あゝ痒い、蚤か知らぬ。

ト蚤の喰ひし思入にて、左の手をまくり搔く、此時二の腕の痣見える。

お玉　や、泥坊さんの。（ト痣へ目を附ける、吉三隱して、）
吉三　なに、こりやあ惡い彫物さ。女中、表に誰か居やあしねえか。（トお玉門口から外を見て、）
お玉　誰も居りませぬわいな。（ト吉三うなづき門口へ出て、）
吉三　それぢやあ父さん、いや、お父さん、其うち逢ひませう。
ト時の鐘、新内模樣の合方にて、吉三花道まで行き、思入あつて手拭を冠り逸散に花道へはひる。
久四　人の性は善なりと、惡い事をしながらも親切な盜人どの。
お玉　もし旦那樣、あの泥坊さんは、不斷おつしやる彌曾松樣ぢやござりませぬか。
久四　さあ丁度同じ年なれど、當歳の時別れたきりゆゑ、彌曾松とも思はれぬが、何ぞ證據でもあつてか。
お玉　はい、左の腕に鱗に似た、青い痣がござりました。
お七　えゝ、あの痣があつたかいな。
久四　おゝ痣があれば慥に悴、なぜ早う言うてくれぬのだ。
お玉　申してよいやら惡いやら、知れませぬによつて、申しませなんだわいな。
久四　おれも蟲が知らせてか、我が子のやうに思はれたが、痣があればいよ〳〵彌曾松、遠くは行くま

い跡追掛け、呼戻して名乗り合はう。(ト久四郎帶をきつとしめ門口へ出掛ける。)

お七　それでは父さん、お前は跡を。

久四　おゝ、我が子と聞いては懐しい。

お玉　早く申せばよかつたに。

久四　遠慮したゞけ道の後れ。

お七　そんなら早う。

久四　跡を頼むぞ。(ト時の鐘の送りにて花道へはひる。お玉跡を見送り、)

お玉　若いお方にお年寄り、一町からの後れなれば、道にてお逢ひなされればよいが。

　　ト門口をしめる、お七思入あつて、

お七　どうぞ今の泥坊さんが、兄さんであればよいが、さうしたならば父さんの、よいお力でござんせう。(ト思入あつて、)それはさうと、これお玉、圓城寺の左門様に、ちよつとお目に掛りたいが、今からは行かれまいかの。

お玉　お前さんもめつさうな、此物騒なに夜に入つて、男でもあらうことか、女の身にて駒込までどうして是れから參られませう、うつかりお出でなされたら、途中で惡い者に出逢ひ、どんな目に逢

はうも知れませぬ、決してお止しなさりませいな。

お七　そりやさうでもあらうけれど、女子の思ふ一心に、神様や佛様へお願ひ申した事ならば、行かれぬ事もあるまいわいの。

お玉　いえ／＼どうして行かれませう、そりや神や佛の御利益で、道は無事に行くにもせよ、圓城寺へは參られませぬ。

お七　なぜ行かれぬぞいの。

お玉　此本郷と駒込の境へ大きな木戸が出來、暮れ六つ限りそこを締切り、假令どんな用があつても合圖の太鼓の鳴らぬうちは、木戸を明けねば夜に入つては、通る事がなりませぬわいな。

お七　どうか其木戸を明けられまいかの。

お玉　さつきも裏の大家さまが、お觸にお出でなされましたが、此櫓の太鼓を打てば、それを合圖に端の木戸を明けてどこへでも、勝手に往來さすとの事。

お七　そんなら櫓の太鼓を打つて、駒込へ行く其木戸を、明けて貰ふては惡いかいの。

お玉　いえも、よいの惡いのと飛んだ事でござりまする、濫りに太鼓を打つ者は、曲事たるべきもの也と嚴しいお咎めに逢ひまする、決して打つ事はなりませぬ。其内晝間私が、こつそりお連れ申し

ませうから、もそつと辛抱なされませいな。(ト此時ばた〳〵になり、奥より三太出來り、)

三太　おい〳〵お玉どん〳〵、今油を買つて歸つて來たが、お前が裏口を明けておいたか、泥坊猫が家へはひり、晝間の肴を喰つてしまつた。

お玉　そりやわたしぢやない、お前が裏を明けて行つたのでござんせう。

三太　其猫を打たうと思つて、油差を轉覆したから、奥へ來て掃除をしてくんねえ。

お玉　え、油をこぼしたえ。

三太　染み込むから、早く行つてくんねえ。

お玉　えゝ、世話の燒けた子でござんすなあ。(ト合方にてお玉奥へはひる。)

三太　實は猫が喰つたといつて、此三太がせしめたのだ。

お七　何といやる。

三太　いえ、にやんとも申しはいたしませぬ。(ト奥へ逃げてはひる。時の鐘、誂への合方、お七思入あつて、)

お七　今宵の内に左門樣にお目に掛つておきたいは、明日になつたら又武兵衛が、金を返すか婿にするかと喧しく言うて來よう、どう考へてもわたしが死なねば、左門樣へ操が立たず、どうぞ此世にある内に一目逢うて死にたいわいな、今父さんもお玉も居ねば、脫け出るにはよい首尾なれど、

駒込へ行く其木戸が、締つて居ては行くにも行かれず。(ト門口の櫓を見上げ、)此櫓の太鼓を打てば、それを合圖に木戸が明き、圓城寺へもどつこへでも自由自在に行かれると、今玉が言つたが、どうで死なねばならぬゆゑ、假令どのようなお咎めに、逢うても大事ない此身、打てば打たるゝ櫓の太鼓、情人に逢ひたい一心に、やはか打たいで、(ト上を見あげきつと思入、是れを道具替りの知らせ、)おかうかいなあ。

ト時の鐘早め模樣の合方にて、お七櫓を見上げきつと見得。時の鐘、右の合方にて此道具廻る。

(小石川釜屋の場)――本舞臺三間の間二階家の前側、上手一間大戸潛り附、下手二間雨戸本庇、二階戸袋附の雨戸、上の方九尺土藏の裏を見せ、屋體との境に天人を書きし、御白粉天人香といふ立看板、屋根附、人の上る事あり、此傍に番手桶を積みし用水桶、下の方一間後へ下げて黑塀、爰に△の非人寐て居る。○の夜番人割竹弓張提灯を持ち、立ち掛り居る、時の鐘にて道具留る。

○　さあ〳〵、爰へ置く事はならねえ、早く行かねえか〳〵。

△　どうぞ今夜は、爰へ置いて下さいましな。

○　どうして〳〵置く事はならねえ、早く行け〳〵。此町内はやかましいから、一人も寐かす事はな

らぬ。

△ばら／＼降つて來ましたから、軒下でなくては寐られぬから、爰へ置いて下さりませ。泥坊の用心をして、朝は掃除をして行きます。

○手前達が寐て居たとて、何の用心になるものか、其上朝の掃除どころか、筵のごみや竹の皮を置いて行かれるのが儲けだ。

△きつと掃除をいたしますから、どうぞ置いて下さりませ。

○置く事はならねえ。さあ／＼立て／＼。（ト割竹を叩く。）

△そんな因業な事をいふと、泥坊に逢ひますぜ。

○えゝやかましい、行かねえか／＼。

ト割竹で叩き立て、非人先きに番人追立て／＼下手へはひる。時の鐘、誂への合方になり、花道より以前の吉三出來り、花道にて、

吉三 此鎌倉を追放され、奥州筋へ出掛けようと、路用の金の算段に明巣を覗つて本郷の、八百屋の家へ飛込んで、思はず聞いた身の素性、まだ當歳の其折に、東葛西へ里に遣られ、一年經たず大水で家を流し女房を殺し、おれを連れて里親が罪滅しの西國巡禮、六七年も諸國を廻り、故郷へ飾

る錦どころか、身には襤褸の古ぼろ買、寺門前に居た所から親仁が死んで湯灌場買ひ、經帷子や早布をば買つた報いが構ひを喰ひ、脚絆をはかにやあ歩けぬ吉三、知らぬ先きは兎も角も現在實の親や妹が死ぬと聞いちやあ見遁されず、どうか百兩金を盗んで、二人を助けて遣りてえものだ。（ト右の合方にて本舞臺へ來り、四邊を窺ひ、ト思入、雨車になり、）あゝ又ばら〳〵とやつて來たが、たんと降つてくれにやあいゝが。（ト思入、雨車になり、）あゝ又ばら〳〵とやつて來たが、たんと降つてくれにやあいゝが。五十や百兩はありさうだ。（ト二階を見上げ、）二階の窓から明りのさすのは締りをするのを忘れたか、こいつあ天の助けだわえ。

ト時の鐘誂への合方になり、吉三身こしらへをなし用水桶から立看板に傳はり、二階の庇へ上り雨戸をそつと明け、しめたといふ思入にて、そつと内へはひり戸をしめる。時の鐘、端唄の合方雨車になり、花道より以前の武兵衞、小石川釜屋といふ番傘をさし出來り、花道にて、

武兵　宵から今夜は降るだらうと、傘を持つて出たのが當り、たうとう雨が降つて來たが、大降りにならねばいゝが。

ト花道よりお勘好みのこしらへ、手拭を冠り足早に出來り、

お勘　もし〳〵、そこへお出でなさいますお方、御無心ながら其傘へ、少し入れて下さいましな。

ト武兵衞男と思ひ、

武兵　お氣の毒だが急ぎますから、傘へ入れるは御免なせえ。（ト行かうとするを、）

お勘　さうおつしやらずと困りますから、どうぞ入れて下さりませ。

ト側へ來て傘の柄へすがる。武兵衞見て、

武兵　や、さういふのは女中かえ。

お勘　はい左樣でござります、御迷惑でござりませうが、連にはぐれて道は知れず、どこで傘を賣りますやら、下駄屋か傘屋のあります所まで、お入れなされて下さりませ。

武兵　おゝ入れますとも〳〵、何迷惑な事がござらう、女中衆ならばこつちから賴んでも入れたいのだ、さあ〳〵はひつた〳〵。（ト傘をさし出す。）

お勘　これはまあ有難うござりますわいなア。（トお勘傘の内へはひろ。）

武兵　其うちにもお前のやうな、美しい女中衆なら、どこまでゝも入れたいのだ。

お勘　それはまあ、噓にも嬉しうござりますわいな。

武兵　時にさう放れて居ては、半分體が濡れるから、もつとこつちへ寄つたがいゝ。

お勘　私もあなたの方へもつと寄りたうございますが、おいやでござりませうと存じまして。

武兵　なに、いやな事があるものか、ぐつと寄つて貰ひたいのだ。

お勘　左樣なら。御免なされませいな。

　　ト お勘ずつと寄添ふ、武兵衛肩へ片手を掛け、片手で傘の柄を持ち添へ舞臺へ來る、お勘つまづきし思入にて、武兵衛に捉る。

武兵　あゝ危ない、どうしたのだ。

お勘　つい其石に躓きまして、思はず知らずあなたへ捉り、御免なされて下さりませ。

武兵　なに誤るに及ぶものか、何時までも捉つてゐて貰ひたいのだ。

お勘　噓ばかりおつしやいます。（トちよつと打つ眞似をする、武兵衛お勘の顏を見て、）

武兵　見れば見るほど八百屋お七に、瓜を二つ生寫し、泥臭いおほこ汁より又喰頃なほらの鹽燒、あぶらが乘つて旨さうだ、お前のやうなよい女と、相々傘で步くのは、ちとわしには役過ぎるが、俄降りの雨のお蔭だ。

お勘　雨と申せば此雨は、あがりさうもございませぬが、お前さんはどちらまでお出でなさるのでござります。

武兵　わしはつい爰の、いや爰等に用があつて來たのだが、お前はどこへ行きなさるのだ。

お勸　私は四つ谷見附の、つい側でござりますわいなァ。（ト武兵衞出鱈目に、）
武兵　それは丁度よい道連れ、わしは麹町十三丁目だ。
お勸　思ひ掛けないよいお方に、お連になりましてござりますわいな。
武勸　何にしろ物騷だのに、此美しい顏をもつて、淋しい所を通るのは、さりとては不料簡、此間も此先きで廻りを取られた女があつた。
お勸　廻りとは何の事でござりますぞいな。
武兵　お前廻りを知らないのか、念佛講の事だ。
お勸　念佛講とおつしやりますは。
武兵　お前のやうな美しい女を、大勢寄つて手どり足どり、替り／＼弄んだのさ。
お勸　えゝ、そりやまあ氣味の惡い事でござりますが、どんな者がその樣な事を。
武兵　どうで宿無し同樣な、碌でなしのする仕業。
お勸　さういふ者に出逢まして、恥かしい目に逢ひましたら、悲しい事でござりませう、それも男によりまする、お前さまのやうなお方なら、（ト武兵衞に寄添ひ、）女子の方から廻りとやらを、いたしたうござりますわいな。

武兵　なに、おれならよいと言ひなさるのか。

お勘　はい、よい所ぢやござりませぬわいな。(トお勘、武兵衞の手を取る、武兵衞逆上し思入にて、)

武兵　む〻〻〻。(ト立ち竦みになる。)

お勘　もし、どうなされましたぞいな。

武兵　何だがくわつくわと逆上あがり、耳がぐわん〳〵體がしやつきり、息がはずんで歩かれぬ。

お勘　そりやまあ困つた事でござりますな。(トお勘武兵衞の懐へ手を入れ、)おやまあ、何處もかしこも火のやうに、大層あつうござります。

武兵　あ〻堪らぬ〳〵。(ト武兵衞夢中になりし思入、お勘懐より金の入りし財布を引出すを、武兵衞びつくりして、)あ〻これ、それを。(ト取りに掛るを、)

お勘　え〻喧しいや。(ト臂で脇腹を突く、武兵衞うんといつて倒れる。時の鐘、新内流しの合方へ、夜蕎麥賣りの風鈴を冠せ、お勘につたり思入あつて、)ばら〳〵降るを幸ひに、傘の無心にしつぽりと、濡手で粟の金財布、四五十兩と思つたが、目方は僅か十四五兩、慶庵婆あが口入で旦那取りの給金だけ。思へば小堀の一件で三月しばりの繩目に逢ひ、屏風の内の闇黑へ行くのをこつそり旅へ逃げ、さる親方に圍はれて、小遣取りの切賣りに、替る枕の地獄宿、蒲團に客の餘焔も覺めて歸つた鮫ヶ

橋、濁る心の泥水に又引張りに出掛けるも、斯うした稼ぎを仕よう爲、惡いと知りつゝ只取る金、色氣を捨てにやあ止められねえ。

ト此内金を算へ財布へ入れる。時の鐘、右の合方、二階の戸を明け、以前の吉三庇へ出來り、手拭に百兩包みをつゝみ、懷へ入れ下へ下りようとする。お勘は財布の口をして懷へ入れる。吉三下りようとしてそれを見て居て、煙草入から金を出し、立看板の蔭からお勘へ錢を打ち附ける、此錢下へ落ちて音のするを聞きて、

おや、今の音は錢のやうだが。（ト四邊へ思入、吉三立看板の蔭へ隱れ又錢を打ち附ける。）又錢の音だが、雨が止んで錢が降るとは、いゝ世界になつて來たな。（ト吉三を見て、扨はといふ思入あつて、）や、上に誰やら、（ト吉三立看板につかまり。）

吉三　お勘、おれだ。

お勘　なに、おれだとは。

吉三　忘れたか、吉三だ。（ト此時月出で。）

お勘　天人香の看板に、お七氣取りの吉三さん、それぢやあ今の錢の降つたは。

吉三　まさか紙も投られねえから、おれが錢を投つたのだ。（ト時の鐘、合方きつぱりとなり。）

お勘　思ひ掛けない吉三さん、此間からお前に逢ひたく、方々尋ねて居た所、まだ夜る夜中このやうに屋根歩きをしなさるからは、悪根性が直らないね。

吉三　どうして是れが直るものか、おれも手前と同じこと、堅氣にならうと思つても、只取る金に止められず、今夜も爰へ忍び込み一仕事した所だ。

お勘　わつちも今夜湯島まで、ちつと絡んだ用があつて、歸る途中のばら〳〵降り、傘の無心の筒持せで小遣取りをした所さ。

吉三　手前も小堀の一件で屋敷を逃げたと噂に聞いたが、何處に今まで隱れて居たか、よくも首尾よく逃げ通し、此鎌倉へ出て來たな。

お勘　お前と兄貴が召捕られ、屋敷へ直に宅番が附いた其晩逃げ出して、厚木在に隱れて居たが、皆兇状が濟んだと聞き、二三日跡に出て來たのさ。

吉三　おれも手前の兄貴ゆゑ、すんでの事切られる所、義朝樣の御法事で構ひを喰つて出て來たが、さうして手前は何處に居るのだ。

お勘　何處といふ家もねえが、鮫ヶ橋の夜鷹宿旅烏の勘次といふ妓夫の所に居候、いろ〳〵お前に話しがあるから、今夜一緒に行きねえな。

吉三　どうでおれも鎌倉に、長く居られぬ構ひ者、是れから旅へ出掛けりやあ何時逢はれるか知れねえ體、直に一緒に行きてえが、ちつと脱れぬ用があつて、本郷まで行かにやあならねえ、明日家へ尋ねて行かう。

お勘　きつと尋ねて來てくんねえよ、さうして旅へ出掛けるとは、何處へ行くか知らねえが一旦逃げたわつちゆゑ、それで世間へ出られぬ身の上、お前と一緒に行かうぢやねえか。

吉三　そいつあ丁度いゝ道連、まだ上方を知らねえから、稼ぎ半分京大阪、中國筋から宮島かけ、金毘羅までも行く積り。

お勘　京大阪へ行くならば、お前が家名の音羽山淸水前に友達が、居ることそ幸ひ旅宿になし、名所古蹟を見た果ては。

吉三　手前の家名の大和を廻り、奈良の旅籠屋三輪の茶屋、

お勘　廿日あまりに四十兩。そりやあ昔の旅籠錢、

吉三　日に何兩と入る旅の、路用は二人で道々稼ぎ、

お勘　ごまの灰やら追落し、泊りに着けば筒持せ、

吉三　どうで始終は靑網か、

お勘　唐丸駕で通し駕籠、
吉三　先づ旅立ちの身祝ひに、
お勘　酒でも買つて待つて居るから、
吉三　尋ねて行つてゆつくりと、
お勘　寐物語りに、
兩人　話さうか。（ト兩人思入、此時二階の内にて）
△　やあ、泥坊がはひつた〳〵。
吉三　南無三。
ト吉三びつくりなし、庇から飛び下りる、此時立看板の釘へ片袖引つ掛け、附際より破れ看板に片袖殘る、此袖より書置出掛りゐる、是れにて月隱れる。
お勘　あゝ危ねえ、怪我でもしやあしねえか。
吉三　怪我はしねえから早く逃げろ。
お勘　おいらより、お前逃げねえ。
吉三　いや、金を落したから逃げられねえ。（ト四邊を搜す。）

お勘　そりやあとんだ事をした、幾らばかりあるのだ。
吉三　二分金で百兩だ。
お勘　百兩ぢやあ捨てられめえ。

　ト お勘四邊を搜す。時の鐘、忍び三重模樣の合方。上の方より辨秀、毬栗好みのこしらへ尻端折りにて出來り、此中へはひり、足にさはる金を拾ひ、

辨秀　や、こりや二分金で百兩ばかり。
お勘　さういふ聲は、
吉三　辨秀か。
辨秀　や。（トびつくりする。此時潛りを明け、大勢弓張提灯、棒を持ち出で、）
大勢　泥坊々々々々。

　ト是れにて吉三棒を引ッたくり滅多打ちに打つ、お勘も以前の傘にて打ち東の假花道へ逃げてはひる。辨秀は金を持ち逸散に揚幕へ逃げてはひる。吉三南無三といふ思入にて支へる奴を毆り倒し、辨秀の跡を追つかけ、花道へはひる。皆々四邊を搜し、

泥坊はどつちへ行つた〳〵。（ト武兵衞を見附け、）

△　おゝ、爰に居つた〳〵。
大勢　ぶん毆れ〳〵。（ト皆々武兵衛を打つ、是にてうんと心附き、）
武兵　あゝ痛い〳〵。
△　それ、ふん縛れ〳〵。
武兵　これさ〳〵若い者、おれだ〳〵。
△　おれだ〳〵もねえものだ。（ト皆々にて武兵衛をぐる〳〵卷に縛り上げ、提灯にて顏を見てびつくりなし、）
皆々　や、こりや武兵衛さんだ〳〵。
△　それぢやあお前が泥坊か。
武兵　えゝ、べらぼうめ、何でおれが盗むものか、金を取られて縛られたのだ。
△　そこらがお前の本役だ。
武兵　おきやあがれ。（ト時の鐘、早き合方にて、此道具廻る。）

（川端の場）――本舞臺三間の間平舞臺、上の方橋の袂、下の方一間の番小屋柳の立木、日覆より同じく釣枝、後川を隔て草土手松の書割、所々に捨石、總てどん〳〵川端の體。爰に夜蕎麥賣り荷をおろ

し居る、破落戸三崎の六やつし裝三尺尻端折りにて蕎麥を喰つて居る、此見得時の鐘、ドン〳〵の水音にて道具留る。

六　蕎麥屋さんに時を聞くも、あんまり極りのせりふだが、もう何時だね。

蕎麥　今九つを打ちました。

六　まだ四つだらうと思つたが、もう九つを打つたかね。

蕎麥　夜は短かくなりました。

六　お前は爰へどつちから、商へをして來なすつた。

蕎麥　切通しから川端を、流してこつちへ廻つて來ました。

六　もし來る道で年の頃、二十二三で秀佳に似た、意氣な女に逢はなんだかえ。

蕎麥　いえ、此頃は夜に入つて、女中衆に逢つた事はございませぬ。

六　それぢやあまだ湯島か知らぬ、さあ手を出しな。（ト錢を遣る。）

蕎麥　はい、有難うございます。

六　どうか道で逢ひてえものだ。

ト時の鐘、波の音にて三崎の六は下手、蕎麥屋は橋を渡りはひる。やはり右の鳴物ばた〳〵になり、

花道より以前の辨秀走り出來り、花道にて跡を振返り見て思入、揚幕の内にて吉三おゝい〳〵と呼びながら追かけ出て來る、辨秀これを見て舞臺へ來る。

吉三　おゝい辨秀、待つてくれ〳〵。（ト舞臺へ來る、辨秀立留り思入あつて）

辨秀　おれを呼ぶのは、誰だ。

吉三　誰でもねえ、おれだ。

辨秀　あゝ吉三か、まだ爰らにまご〳〵して居たか。

吉三　明日旅へ出掛ける積りで、路用の算段に歩いて居るのだ。

辨秀　さうしておれを呼んだのは、何ぞ手前用でもあつてか。

吉三　呼び掛けたのは外でもねえ、拾つた金を貰ひに來たのだ。

辨秀　なに、金つた金とは。

吉三　雨降り舉句の闇紛れ、天人香の門口で、手前が拾つた百兩包み。

辨秀　や。

吉三　證據はしかも二分金で、五十兩づゝ二包み、拾つた金を返してくれ。

ト辨秀むゝと思入、誂への合方かすめて浪の音になり、辨秀思入あつて、

辨秀　これ吉三、金を返せ〳〵といふが、三日跡に手前もおれも、小堀の屋敷で頼まれた燒場切手の一件で、既のこと此首の落ちる所を助かつて、鎌倉十里追放で出牢した其時は、一分の金もねえ吉三、どうして百兩持つて居たのだ。

吉三　そりやあ手前が聞くだけ野暮、一夜のうちにも出來るがこちとら、何を隱さうさつきの家へ、二階の窓から忍び込み、百兩盜んで屋根傳ひ、立看板から下りようと思ふ所へお勘が來て、上と下で話すうち、若い者に泥坊と聲を掛けられ飛び下りる、拍子に袖を釘に引掛け、逃げる其時落した百兩、通り掛かつた辨秀手前が、拾つた事を知つて居るから、それをおれに返してくれ。

辨秀　それで樣子がぐわらりと分つた、如何にも手前のいふ通り、おれが拾つたに違ひねえが、手前にやあ返されねえ。

吉三　なぜ返されねえのだ。

辨秀　はて拾つた物は拾ひ德、手前に返す譯がねえ。

吉三　なに、ねえ事があるものか、落した金はおれの金だ。

辨秀　おれの金といふがあるものか、拾つた金は釜屋の金、返してよけりやあ釜屋へ返すわ。

吉三　そりやあ堅氣のいふ事だ、盜んだものを又元へ返すといふがあるものか、只の金なら文句なし拾

つた手前に半分遣るが、まだ當歳で別れた實の親の難儀を救ふ金、こんな事をおれが言つてもちやらッぽこだと思ふだらうが、なくてならねえ金だから、どうぞ今日は返してくれ、今にも間のいゝ事があつたら、直手前に禮をすらあ。（ト此内冠せかけて、）

辨秀　いやだ〳〵、いやだといふに。いつか手前に燒場切手を盗んで貰つた其時に、大骨折つて金高を五十兩の其内を四十兩ゆすり取られ、悔しいけれど表向き盗んだ事が知れた日にやあ、小堀の家に拘はるのみか、おれが命もむづかしいから、默つて往生して居たが、たうとうばれて喰ひ込み、其兇狀を着たからは、最う籠められる事はねえ、意趣を返さにや腹が癒えねえ。

吉三　むゝ、それぢやあおれが四十兩取つたをわれは遺恨に思ひ、其意趣返しに返さねえのか、成程そりやあ尤だが、今もいふ親の難儀を其百兩で救ふのだ、腹が癒えざあ存分に、どうでもして其金を、どうぞおれに返してくれ。

辨秀　むゝ。そんならいつかの意趣返し、此辨秀が存分に、なつてもいゝと言ふのだな。

吉三　さあ、それも是れも明日までに、なくてならねえ其百兩。

辨秀　それ程ほしけりや返して遣らうが、いよ〳〵おれが自由になるか。

吉三　どうとも手前の勝手にしてくれ。

卜吉三體を突附けろ、辨秀しめたといふ思入にて、あたりの石を拾ひ、吉三の胸倉を取り、

辨秀　よくいつか燒場の切手を、盜んだ時に此おれが、足許を見やあがつて因業な事をしやあがつたな、其返報は、（ト石で眉間を打ち、吉三の額へ疵附く、）これでちつとは腹が癒えた。

卜吉三額の血を見てきつとなり、氣を替へ、

吉三　これで手前も腹が癒えたらう、さあ其金を返してくれ。

辨秀　なに、金とは何だ。

吉三　何だといふがあるものか、今言つた百兩を。

辨秀　其百兩がどうしたのだ。

吉三　今手前の存分に、なつたら返すと言つたぢやあねえか。

辨秀　なにそんな事をいふものか、手前の眉間を破つたのは、此間の意趣返し、金はおれが拾つた金、何で手前に返すものか。

吉三　それぢやあ辨秀、今いつたのは嘘か。

辨秀　知れた事だ。

吉三　むゝ、（ト吉三きつとなり氣を替へて、）これさ辨秀、親の命を助けるに、なくてならねえ金だから、

つた手前に半分遣るが、まだ當歳で別れた實の親の難儀を救ふ金、こんな事をおれが言つてもちやらツぽこだと思ふだらうが、なくてならねえ金だから、どうぞ今日は返してくれ、今にも間のいゝ事があつたら、直手前に禮をすらあ。（ト此内冠せかけて、）

辨秀　いやだ〳〵、いやだといふに。いつか手前に燒場切手を盗んで貰つた其時に、大骨折つた金高も五十兩の其内を四十兩ゆすり取られ、悔しいけれど表向き盗んだ事が知れた日にやあ、小堀の家に拘はるのみか、おれが命もむづかしいから、默つて往生して居たが、たうとうばれて喰ひ込み、其兇状を着たからは、最う籠められる事はねえ、意趣を返さにや腹が癒えねえ。

吉三　むゝ、それぢやあおれが四十兩取つたをわれは遺恨に思ひ、其意趣返しに返さねえのか、成程そりやあ尤もだが、今もいふ親の難儀を其百兩で救ふのだ、腹が癒えざあ存分に、どうでもして其金を、どうぞおれに返してくれ。

辨秀　むゝ。そんならいつかの意趣返し、此辨秀が存分に、なつてもいゝと言ふのだな。

吉三　さあ、それも是れも明日までに、なくてならねえ其百兩。

辨秀　それ程ほしけりや返して遣らうが、いよ〳〵おれが自由になるか。

吉三　どうとも手前の勝手にしてくれ。

ト吉三體を突附ける、辨秀しめたといふ思入にて、あたりの石を拾ひ、吉三の胸倉を取り、

辨秀　よくいつか燒場の切手を、盗んだ時に此おれが、足許を見やあがつて因業な事をしやあがつたな、其返報は、（ト石で眉間を打ち、吉三の額へ疵附く、）これでちつとは腹が癒えた。

ト吉三額の血を見てきつとなり、氣を替へ、

吉三　これで手前も腹が癒えたらう、さあ其金を返してくれ。

辨秀　なに、金とは何だ。

吉三　何だといふがあるものか、今言つた百兩を。

辨秀　其百兩がどうしたのだ。

吉三　今手前の存分に、なつたら返すと言つたぢやあねえか。

辨秀　なにそんな事をいふものか、手前の眉間を破つたのは、此間の意趣返し、金はおれが拾つた金、何で手前に返すものか。

吉三　それぢやあ辨秀、今いつたのは嘘か。

辨秀　知れた事だ。

吉三　むゝ、（ト吉三きつとなり氣を替へて、）これさ辨秀、親の命を助けるに、なくてならねえ金だから、

辨秀　誤つた事のねえ此吉三が、手を下げて頼むのだ。（ト吉三手を突き頼む。）手を下げようが足を下げようが、此百兩は返されねえ、訛りも抜けねえ京談で口ぢやあ手前に叶はねえが、腕づくぢやあ負けやあしねえ。

トくろりと尻をまくり、越中褌を見せ憎く言ふ、吉三思入あつて、

吉三　そりやあ手前が言はずとも、所詮おらあ叶やあしねえ、それだから此通り手を下げて頼むのだ。

辨秀　まだぐづ〳〵と言やあがるか、いゝ加減に思ひ切れ。

吉三　それぢやあどうでも返さねえのか。（ト辨秀吉三の前へ顔を出し、）

辨秀　誰が返すものだ。（ト吉三石を拾ひ、）

吉三　返さにやア貰はねえ。

トだしぬけに辨秀の天窓を石で打割る、辨秀わつと言つて倒れ、天窓から糊紅になり、

辨秀　こりや、おれの天窓をぶち毀しやあがつたな。（ト吉三きつとなり、）

吉三　おゝ打ち毀さねえでどうするものだ、親の難儀を救ひてえから、うぬがやうなはつち坊主の、くだらぬ寐言の法談を有難さうに聞いて居りやあ、いゝかと思つて附上り宗旨違ひの七目題目、燒場切手の意趣返しに、眉間へ疵を附けたからは、うぬが拾つた金ばかりか命も共におれが取るか

ら、願以此功德と往生しろ。

辨秀　むゝ、拾つた金と諸共におれが命を取るといふのか、妹のお勘が悪足で腐れ附いて居るからは、言はずと知れたおれは兄、殺されるなら殺して見ろ。

吉三　おゝ、殺さねえでどうするものだ。

ト波の音葛西念佛になり、吉三辨秀摑み合の立廻り、亦石で天窓を打つ、辨秀目へ糊紅のはひりし思入にてひよろ〳〵となり、

辨秀　兄殺しだ〳〵。（トのた打ち廻るを引附け、）

吉三　假令義理ある兄にもせよ、實の親にやあ替へられねえ。

辨秀　さう聞く上は此金も。（ト懐の財布に入りし金を後の川へ打ち込む、）

吉三　や、今川へ投り込んだは。

辨秀　うぬが欲しがる百兩だ。

吉三　えゝ、最う此上は。（ト又立廻つて、辨秀ひよろ〳〵としながら、）

辨秀　兄殺しだ〳〵。（ト逃げるを引附け、）

吉三　どれ、一思ひに殺してやらうか。（ト辨秀の喉へ手拭を掛け締殺す、辨秀虚空を摑み苦しみ落入る。此時

下手より以前の三崎の六窺ひ居てびつくりなし、後からうぬと組附くを振拂ふ、是れにて三崎の六見事に轉るを木の頭、）え丶、忌えましい。

ト辨秀の天窓へ足を掛け蹂躙り、三崎の六は起上り、吉三の煙草入を拾ひ、しめたといふ思入、波の音、寺鐘にてよろしく、

ト波の音にてつなぎ、直引返す。

ひやうし　幕

（八百屋詮議の場）——本舞臺上手へ寄せて一間八百屋と記せし腰障子、眞中町木戸にて左右柵矢來、下の方火の見櫓、後斜に見たる町家の遠見、總て本郷町境の體、爰に仁田四郎忠常野袴ぶつさき羽織大小にて床几に掛け、此上に海老名軍藏同じく野袴ぶつさき羽織にて床几に掛り、後に黑四天の捕手二人控へ、眞中に前幕のお七控へ、此側に久四郎お玉控へ、後に太左衞門の家主、鳶の者半纏股引にて鐵棒を持ち、太左衞門、三太郎五人組二人控へ居る。此見得、時の太鼓にて幕明く。

軍藏　こりや七、堅く禁ぜし櫓の太鼓を、何故に打ちたるぞ。

お七　はい、あの太鼓を打ちますと、木戸が明くと聞きましたゆゑ。

忠常　こりや〳〵何を申す、あの櫓へ上つたのは、高い所で方々を見よう爲であらうな。
お七　いえ〳〵、さうぢやござりませぬ。圓城寺へ參りたさに。
忠常　えへん〳〵。
軍藏　これさ〳〵仁田殿、そりやどうした咳のせきやうでござる。
忠常　されば此間から風邪によつて、（ト咳をせき、）あれ〳〵どうもせいてならぬ。
軍藏　いや、其咳では御迷惑、身共が替つて詮議いたさう。こりや、あの櫓の太鼓を打つたは、木戸を明けよう爲であらうな。
お七　あい、よう御存じでござりますな。
軍藏　むゝ、然らば木戸を明けようばかりか。
お七　あい、左門樣に逢ひたさに。
お玉　あゝもし、めつたな事を。
軍藏　それ、七に繩打て。
捕手　はツ。（ト捕手立ち掛る、）
忠常　あいや、軍藏殿お待ちなされい。

軍藏　何でござるな。
忠常　されば形は大きうござれども、一向年の行かぬ樣子、縛めには及びますまい。こりや七、其方は十五であらうな。
お七　いゝえ、わたしや十六になりまする。
忠常　えへん〳〵。
軍藏　これ〳〵仁田殿、どうした咳のせきやうでござる。
忠常　御覽の通り咳入つて、甚だ難儀いたしまする。こりや七が親久四郎、十五とあれば子供も同然、又お上にも格別の思召しもあるによつて、何事も隱さずに正直に申し上げい。七は十五であらうがな。
久四　はい、有難い其仰せ。これお七、うろたへる所ぢやない、十五ぢやと申し上げい。
お玉　それ〳〵お七さま、お前は十五、な。はい、左樣でござります。
太左　さあ、早く十五ぢやと、
皆々　言うたがよい。
お七　そんなら、まあ、十五でござりまする。

忠常　軍藏殿お聞きなされたか、七は十五ぢやと申しまする。
軍藏　むゝ。
忠常　然らば繩には及びますまい。
軍藏　扨はいよ〳〵十五歲ぢやな。
久四　へい、左樣にござりまする。
お玉　十五に相違ござりませぬ
　　ト ばた〳〵になり、下手より前幕の武兵衞、吉三の片袖を持ち出來り。
武兵　あゝお役人樣、其御詮議暫くお待ち下さりませう。
忠常　其方は何者ぢや。
軍藏　彼は小石川片町の、釜屋三左衞門が甥、
武兵　武兵衞と申しますものにござりまする。
忠左　何用あつて罷り出たのぢや。
武兵　只今御詮議なされました。お七の年が違ひますゆゑ。
忠常　七の年が違ふとは。

武兵　へい、十六歳でござりまする。

軍藏　おゝさうであらう〳〵。

忠常　してそれには證據あつてか。

武兵　慥な證據がござりまする。

軍藏　其證據見せやれ。

武兵　はッ、則ち今朝海老名樣へお訴へ申しましたが、昨夜私方へ盗賊入り、金子百兩奪ひ取り、二階より逃げ去る折、立看板の釘へ引掛け、跡に殘りし此片袖、（ト前幕の吉三の片袖を出し、）これが證據でござります。

忠常　その片袖が證據とは。

武兵　此片袖の袂にありしは、お七が書きし自筆の書置。（ト片袖の袂より前幕のお七の書置を出す。）

軍藏　その書置、是れへ。

武兵　はッ。（ト出す。軍藏取り上げ、）

軍藏　こりや七、此書置はそちが書いたか。（ト差出し見せる。）

お七　はい、私が書きましてござりますわいな。

軍藏　しかと左樣か。

お七　はい。

軍藏　何々「一筆書殘しまゐらせさふらふさふらふ、左候へば私事」

武兵　あゝ申し海老名樣、そこらは無駄でござります、末をお讀み下さりませ。

軍藏　如何にもくだらぬ長文句、圓城寺の左門といふ小姓と七は、ちゝくり合ひ逢はれぬ首尾になつたゆゑ死ぬる覺悟の此書置、おゝ證據になるは爰だ〳〵「十六年が其間の御恩も送らず先立つ不幸を、御許し下され候やう願ひ上げまゐらせさふらふ、とゝさまへ七より、」十六年が其間と記してあるが、慥な證據だ。

忠常　證據といへど男の片袖、分明うならぬ其書置。

軍藏　でもたつた今、私が書置だと言ひました。

忠常　こりや七、いよ〳〵是れはそちが書いたか。

お七　はい、爰に居る武兵衞さんを聟にとるのがいやさゆゑ、わたしや死なうと覺悟なし、其書置を書きまして喉を突かうとした所を、泥坊さんがござんして、わたしを留めて父さんの、目にとまつては惡いといふて、わたしが書いた書置を、袂へ入れて行かしやんしたわいな。

お玉　おゝお七さんのおつしやる通り、あの片袖は覺えある。
久四　夜目にも忘れぬ倅が片袖。
軍藏　なに、倅とは。
久四　いえさ、世間にまゝある辨慶縞ゆゑ、よう覺えて居りまする。（トよろしく思入。）
忠常　して其賊の年恰好は。
久四　はい、年の頃は二十四五で、鼻筋通り細面。
お玉　今の役者で言はうなら、菊五郎に生寫し。
忠常　左りの腕に三鱗の、もしや痣はなかりしか。
お玉　はい、慥にござりましたわいな。
軍藏　扨は小堀の一件で、鎌倉追放申し附けし、湯灌場小僧吉三郎。
太左　そんなら昨夜釜屋へはひり、百兩金を盜んだは。
三太　今評判の湯灌場小僧。
久四　若しや盜んだ百兩は、親の難儀を助ける爲。
武兵　何と。

久四　いやさ、親は何くの誰なるか、其心に早くなつたら、さういふ身にもなるまいもの、是れに附けても武兵衛どの、よくも娘を十六ぢやと、罪に落して下すつたな。
武兵　人我に辛ければ我又人に辛しの譬、此武兵衛を聟にすれば、こんな目には逢はぬのに、最う斯うなれば聟にもなれず、金を取るより外はない。さあ、たつた今金を返すか。
久四　どういたして大枚百兩、今というては出來ませぬ。
武兵　金が出來ずば家を渡すか。
久四　さあ、それは。
軍藏　こりや〳〵久四郎、金が出來ずば家を渡せ、なぜ家を渡さぬのだ。
久四　さあ此家を渡されませぬは、何をお隱し申しませう。入夫に入りし私ゆゑ、先代へ對しましても、どうも家は渡されませぬ。
軍藏　然らば百兩唯今返せ。
久四　さあ、それも今と申しては。
軍藏　金が出來ずば、家を渡すか。
久四　さあ。

軍藏　金を返すか。
久四　さあ、
軍藏　さあ、
兩人　さあ〳〵。
軍藏　どうぢやい。
　　ト軍藏きつといふ、久四郎はツと當惑の思入、此時ばた〳〵になり、下手より三幕目の傳吉出來り、
傳吉　あゝ申し久四郎どの、先達お借り申した、金子をお返し申しますから、武兵衞どのへお返しなされ。（ト二分金の百兩包みを出す。）
久四　さういふこなたは。（ト不審の思入。）
傳吉　先達て森川宿で、金子をお借り申しました、傳吉めにござりまする。
久四　森川宿と言はつしやるのは。（トお玉傳吉を見て、）
お玉　お七さんの簪を。（ト言ひかけるを、）
傳吉　あゝもし、其簪より拔き差しならぬ、手詰めになりし百兩金、是れでお返しなされませ。
久四　其志しは忝けないが、こなたに貸したは僅三兩。

傳吉　これはしたり覺えの悪い、三兩ではない三月下旬、百兩借りたに違ひない。

久四　いや／＼こなたに貸したのは。

傳吉　はて、百兩でござるといふに。（ト傳吉久四郎に呑込ませる。）

忠常　こりや／＼傳吉とやら、其方は何者だ。

傳吉　へい、私事は浮浪人にて一錢二錢の合力受け、其日を果敢なく送るうち、長らく水腫を煩うて土左衛門といふ渾名を取りし、傳吉と申す者、其後親の大病に人參代に差支へ、これなる八百屋久四郎どのより、金子百兩借り受けて親の病氣も全快なせし、其大恩を報ぜんと、思ふ折柄計らずも、我が手に百兩入つたるゆゑ、取り敢へず久四郎どのへ、返濟に參つてござりまする。

忠常　こりや久四郎、其方は傳吉に百兩貸したか。

久四　いえ／＼、親の病氣とござりますゆゑ、人參代に貸しましたは。

忠常　こりや／＼、親の病氣を救はれし、恩義を思ひ傳吉が持參なしたる百兩は、そちが貸したであらうな。

久四　いえ／＼、どうしまして私が。（ト爭ふ。）

軍藏　其百兩、これへ持て。

傳吉　はツ。（ト包金を出す。軍藏見て、）

軍藏　浮浪人の身の上に、不相應な百兩金。こりや武兵衞、其方が宅で盗まれしも、二分金で百兩ぢやな。

武兵　へい、左樣にござりまする。

軍藏　此金子を改め見やれ。（ト出す。武兵衞開き、改め見て、）

武兵　や、こりや一つ〳〵に力の字の極印、手前の印がござりますれば、昨夜盗みとられました、則ち金子でござりまする。

軍藏　扨は傳吉、其方は釜屋方へはひりし盗賊ぢやな。

傳吉　なか〳〵以て左樣な事は。

軍藏　ないと申すに證據があるか。

傳吉　さあ、それは。

軍藏　それ、傳吉に繩打て。

捕手　はツ。（ト立ち掛るを、）

忠常　あいや、軍藏殿、お待ちなされい。

軍藏　又お止めなさるか。

忠常　お止め申すは釜屋方へ、昨夜はひりし盜賊は湯灌場小僧吉三郎と跡に殘りし片袖にて、明白に知れたる上は、傳吉が盜みしとは思はれぬ。

軍藏　でも此金に、釜屋の極印。

忠常　如何いたして此金を、所持なし居るか詮議なさん。こりや傳吉、今軍藏殿の言はるゝ如く、浮浪人の身の上に不相當な此金子、如何いたして所持なし居つたぞ。

傳吉　お尋ねに預りまして、何をか包み隱しませう。其金子は今朝未明、拾ひましてござりまする。

忠常　おゝ、さうあらう〳〵、して何方で拾ひしぞ。

傳吉　はツ、私事は市ケ谷に當時住居いたしまするが、親ども九死一生の煩ひ、淺草寺觀世音へ全快の大願掛け、毎朝未明に參詣いたしまするが、則ち今朝小石川江戸川の小橋にて、計らず此金子拾ひ取り、それより觀世音へ參詣なし、先達ての禮かてら此八百屋へ立寄りしに、久四郎どのゝ金の切羽、員數も同じ百兩ゆゑ、親の命を助けられし、其恩返しに取りあへず、借用せしと申し僞り、久四郎どのへ返せし金子は、今朝未明小石川にて、拾ひし金子にござりまする。

忠常　其方が申し口にて、金子の出所も分りし上は、盜賊にてはあらざるぞ。

軍藏　いや、申し口は立つにもせよ、其儘には許さぬぞ、道に落ちたる物を拾はゞ、早速上へ訴へべきに、自儘にいたすは盗賊同然。それ、傳吉に繩打て。

捕手　はッ。

忠常　いや、お待ちなされい、軍藏殿。

軍藏　いや又でござるか。

忠常　假令落ちたる物にもせよ、親の命を助かりし其恩返しに久四郎が、難儀を見兼て遣はせしは、孝あり義ある彼れが心底、流石は武士の果てはどある、善きにせよ惡しきにせよ、親を思ふ孝に愛で、其金子は拾ひ德、其方へ遣はすぞ。

傳吉　はゝ、有難うござりまする。

軍藏　あゝいや〳〵仁田殿、それでは上の御法が立たぬ、もしお咎めのあつた時は。

忠常　此忠常が越度ゆゑ、貴殿の腹はお借り申さぬ。

軍藏　むゝ。（ト頰を膨らして控へる。）

武兵　そちらはそれでよからうが、盜まれましたる私方は。

忠常　そちが宅より盜みしは、湯灌場小僧吉三ゆゑ、詮議なして召捕へ、御法通り死刑に行ひ、恨みは

返して遣はすぞ。

武兵　それは詰らぬお捌きだ。

忠常　久四郎は傳吉が志しの其百兩、武兵衞方へ返濟いたせ。

久四　畏りましてござりまする。いざ武兵衞どの、受取らつしやれ。（ト百兩出す。）

武兵　おのが金をおのが取つて、百兩貸したを損をするとは、こんな埋らぬ事はない。

軍藏　是れはあまり片手落、依怙の沙汰と誹謗されん。

忠常　いや、孝あり義ある心底に、如何で依怙の沙汰とや言はん、傳吉其方は構ひないぞ。

傳吉　はゝ、御厚情の段有難う存じまする。（ト久四郎思入あつて、）

久四　思へば昨夜忍び來りし、吉三が盜みし百兩が、廻り〳〵て傳吉殿より。

お玉　こちの旦那の手にはひり、此場の難儀が助かりしは。

お七　親を思ふ兄さんの。

久四　あゝこれ、（トお七を押へ、）志しが屆きしか。（ト傳吉、さてはとい　思入、）

傳吉　すりや、盜賊の吉三郎は。

忠常　あいや、入らぬ繰言無用にいたせ。

皆々　はッ。
軍藏　いざ、此上は七に繩打て。
捕手　はッ。
久四　そんな〳〵、
お玉 久四　どうでも。
軍藏　十六歲に相違なければ、罪は遁れぬ覺悟なせ。（ト捕手お七に繩をかける。）
久四　はて、是非もなき、
立役 皆々　事ぢやなあ。（ト皆々愁ひの思入。）
お七　もし父さん、後先見ずの心から、ひよんな事を仕出して、お前にいかい御苦勞掛け、嘸憎うござんせうが、堪忍して下さんせいなあ。（ト顏を襟へ入れ泣く。）
久四　是れも前世の約束ごと、今更言うても詮ない事、煩はぬやうにしてくりやれ。
お七　お前も達者で居て下さんせ。（トお玉側へ來り、）
お玉　お七さん、情ない事でござんすなあ。
お七　頼みに思ふはそなたばかり、父さんのお世話をば、是れからわたしに成代り。

お玉　おゝ、いたしませいで何としませう。（ト皆々泣く、忠常思入あつて、）

忠常　こりや久四郎、一旦縄目に及ぶとも、高が女の事なれば、思召もある程に、必ず共に氣遣ひいたすな。

久四　はツ、有難うござりまする。

軍藏　幾ら貴殿が庇うても、大罪犯せし七が身の上。

武兵　所詮命はむづかしい。

太左　えゝ、入らぬ口出し、

三太　すつこんで居さつせえ。

軍藏　それ、囚人を引立てい。

捕手　はツ。

ト誂への合方にてお七先きに捕手附き、跡より忠常、軍藏、武兵衛、太左衛門、三太郎附添ひ花道へ行く、傳吉見て、

傳吉　あゝ蕾の花のお七どの、

久四　心がらとはいひながら、

お玉　雨にしほめるあの姿。

お七　やがて散行く此身の終り。（ト皆々顔見合せ愁ひの思入、）

久四　えゝ情ない。（ト行かうとするを傳吉留める、）

忠常　こりや、慈悲は上ぢやぞ。

皆々　はあゝ。（ト辭儀をする。）

軍藏　それ引立てい。

ト時の太鼓、うれひ三重になり、お七しを〳〵と立上り、跡を見返りながら、皆々附添ひ、花道へはひろ、舞臺は跡を見送り、双方よろしく三重にて、

幕

五幕目

鮫ケ橋隱家の場

鈴ケ森磯端の場

〔役名――湯灌場小僧吉三、吉田忠左衞門、旅烏の勘次、釜屋武兵衞、中間九助。洗濯屋お虎、湯島のお勘、勘次女房お咲等。〕

（鮫ヶ橋隱れ家の場）＝本舞臺三間の間平舞臺、向う暖簾口、上手押入戸棚、下手鼠壁、上の方一間折廻し障子屋體、いつもの所門口、下の方藪疊、總て鮫ヶ橋お勘隱れ家の體、爰に前幕の勘次大きな膳の上に、小皿もの、肴燗德利、酒道具を置き、傍に女房お咲世話裝にて酌をして酒を呑み居る、上手に○へ夜鷹のこしらへ酒の相手をして居る、下手にお虎二幕目の洗濯屋にて賴みに來たる心にて控へ居る、門口に番傘二本あり、此見得四つ竹節にて幕明く。

○　勘次さん、昨夜は大層遲かつたね。

勘次　姉御が昨日日暮から遁れぬ用で湯島へ行つたが、歸り道が物騷だから、牛込から迎ひながら、廻つたので遲くなつた。

△　何時に歸んなすつたか、切通しで四つを聞いて九つ前に歸つたが、くたびれたので知らなんだ。

○　一寐入りして目が覺めたら、話し聲が聞えたから、八つ過ぎでござりましたらう。

お咲　あい、さうだつたよ、姉さんの歸りなすつたのは、丁度八つだつたが、それから芝の七つを聞いて、内の人が歸つたのだよ。

△　それぢやあ七つでござりましたかね。

勘次　米屋の鷄が鳴いて居たから、七つかも知れなんだ。（トお虎を見て、）これお咲や、手前の話しは此

お上さんか。

お咲　あい、わたしが家に居た時分、一つ長屋で姉妹より心易くしたお虎さん、稼ぎに出たいと言ひなさるから、自前にでも出してあげておくれな。

お虎　お咲さんとは久しいお馴染、どうか出て見たうございますから、お頼み申しまするわいな。

勘次　いや、一人も多いがわつちが徳、何分お心易くお頼み申します。

○　おや、それぢやあ此お上さんも、こつちの仲間へはひりなさるのか、そりやあ賑かになつていゝねえ。

△　まあわたしらと一緒に、切通しへ出て見なせえ、隨分長いお錢も取れて、長屋へ出るよりよつぽどいゝよ。

勘次　ちつとはお前、これまでに引張りにでも出なすつたかえ。

お虎　いえ、引張りに出た事はござりませぬが、今まで家で寺方の洗濯をして居りましたから、坊さん達を引込んでお布施を當に地獄同樣、家で客を取りましたから、まんざら素人でもござりませぬわいな。

勘次　さう切賣りをしなすつちやあ、戸屋に附く氣遣ひもねえ。

お咲　坊さん達は人がいゝから、お錢になつたらうに、なぜこつちへ出なさるのだ。

お虎　いえ人のいゝ事もござりませぬ、番僧などは渡り者で、いゝ所ぢやあござりませぬ、人が惡くッていけませぬが、其中に、さる寺の雲貞といふ番僧が末始終は還俗して夫婦になる約束で、こんな粗末な御面相でも月一兩で其番僧に圍はれて居りましたが、とんだ事で寺をしくじり、今では人の門へ立ち手の內貰ふ修行者ゆゑ、小遣ひの少しづゝも、わたしが送つて遣る仕儀ゆゑ、據なく姉さんを、お賴み申しに參りましたのさ。

勘次　さういふ事なら今夜から、こいらと一緖に出て見なせえ、何の造作もねえ生業だ。

○　どうでお客はお屋敷七分、しつこい事ばかりするから。

△　その氣休めや、あしらひやうは、二階でゆつくり敎へて上げよう。

お虎　はい、どうぞお賴み申しますわいな。

勘次　まあ爰へ來て、一杯遣んなせえ。

ト捨ぜりふにて皆々酒を呑み居る、やはり右の鳴物にて、花道より九助紺看板きたなきこしらへにて出來り、花道にて、

九助　小堀の屋敷の一件で、お光さまに五兩貰ひ、在所へ行かうと思ふうち、野天の賭場へ引掛り、耗

つてしまつて仕方なく、錢貰ひをして歩くが、お光さまを此近所で見たといふ者があろが、どうか居所を突き當て、小遣ひでも貰ひてえものだ。（ト舞臺へ來り門口から內を覗き、）はい、御免なされませ、屋敷引拂ひで國へ行きますもの、合力をして下さりませ。

勘次　屋敷引拂ひも嘘らしいな。

○　いつまであんな事を言つて居るのだらうね。

お咲　お市や早く遣つてしまひねえな。

△　はい〳〵。（ト錢のはひつて居る笊から一文出し、）あい。（ト九助にやる、九助見て、）

九助　此諸式の高いのに、一文ばかり何になるものか。（ト投り附ける。）

勘次　一文でも天下の寶だ、いやならよしねえ、無理にとは言はねえ。

九助　おい親方、そんな事を言はねえで、一合振りおくんなせえな。

勘次　なに、一合振りくれ、お前達に一合はおろか、五勺でも買ふ因緣がねえ。

九助　因緣のねえ事はねえ、是れが堅氣な商人なら、四文くれても默つて行くが、水生業の夜鷹宿、折助にめりはり當り前だ、すくなずくなも文久錢か青錢位はくれてもいゝに、素一文とはあんまり酷い、一合振りおくんなせえ。

勘次　屋敷引拂ひのお前達に、一合づゝ買つた日にやあ、幾らあつてもたまりやあしねえ。
お咲　さあ色を附けてあげるから、口數きかずと早く行きねえ。（ト文久錢を一文遣る。）
九助　何ぞ色を附けて文久錢か、十六や廿四文の端た錢が入るものか、欲しかァうぬ等にくれてやらう。
　　ト投げ返す。
勘次　錢貰ひのくせにして、うぬ等とは誰が事だ。
九助　誰でもねえ、でぼちんの、うぬが事だ。
勘次　さう吐かしやあがりやあ。（ト勘次立ち掛るを皆々留める。）
〇　これさ親方、あんな者に構ふのは損だ。
△　何と言はうとも、打捨つておきなせえ。
九助　さあ打て〳〵、うぬ等に打たれてえのだ。（ト内へはひり、胡座をかき、體を突附けろ、お虎留めて、）
お虎　これさ〳〵お屋敷さん、お前もそんな野暮を言はずと、十六文貰ふにやあ、五十軒から歩かにやあならぬ、默つて貰つて行きなせえな。
九助　えゝ、うぬらの知つた事ぢやねえわ。（トお虎を突倒す。）
勘次　うぬ手出しをしやあがりやあ。（ト側にある傘を取つて立ち掛る。）

お咲　これさ親方、打捨つておきねえよ。
勘次　いや、癖になるからしめにやあならねえ。
九助　さあ打て〳〵。
勘次　打たねえでどうするものか。（ト傘で九助をくらはす。）
九助　あゝ痛い〳〵、體が利かねえ、動かれしねえ。
ト仰向に寐る、皆々捨ぜりふにて勘次を留める。やはり四つ竹節にて、奥より前幕のお勘出で來り、伸びをしながら、
お勘　昨夜更けて歸つたから、睡くつてならねえのに、何でそんなに騷ぐのだの。
勘次　屋敷引拂ひの此野郎が、惡くごた〳〵言やあがるから、叩きしめて遣つたのだ。
九助　あゝ痛え〳〵、膏藥代を貰はにやあ、動かれねえ〳〵。（トお勘九助を見て、）
お勘　やあ、さういふ聲は、
九助　おゝ、お妾のお光さま。
お勘　とんだ所で逢つたの。
勘次　それぢや、姉御の知つた人かえ。

お勘　わたしの勤めた屋敷に居たのだよ。
九助　いや、爰らにお前が居なさると、噂に聞いたが、そんなら爰に。
お勘　何處に居るといふでもないが、兄貴があゝいふ譯になつて、當時無宿の宿なしだから、四五日爰に居候さ、さうしてこなたは何處に居るのだ。
九助　やつぱりわつちも宿無しさ、あの時貰つた五兩の金も、野天博奕で取られてしまひ、爰の家ぢやあ言ひ難いが夜鷹のお蔭で骨がらみ、骨折業が出來ねえから、屋敷引拂ひの中間と、氣障をいつて四文づゝも、貰つてやう〳〵暮して居やすが、よい所でお目に掛りました。お光さま、どうかして下さいましな。
お勘　隨分悪い根性も、十人並にある癖に、意氣地のねえ事ぢやあねえか、小働きでもすりやあいゝに何にしろ見ツともねえ、下馬でも是れで受けねえ。
卜巾着から二分金を二つ紙に包み投つて遣る、九助これを取つて、
九助　こりやあ有難うござります。お光さま、一兩でござりますか。
お勘　一兩ぢやあ不足だといふのか。
九助　いえ、四文八文貰ふ身に一兩は過ぎますが、下馬の一枚も受けて褌の一本も買ふと、一兩ぢやあ

足りませぬ、どうか五兩貸しておくんなせえ。

お勘　なに、五兩貸してくれ。

九助　十兩と言ひてえのだが、言つた所で半分直切られるのは知れて居るから、五兩貸しておくんなせえ。

お咲　もしお屋敷さん、横合から口を出すやうだが、お前方の身の上で、一兩貰ふは過ぎものだぜ。

○　餘計な文句を言はねえで、

△　お禮をいつて早くお出でよ。

九助　お前方の知つた事ぢやあねえ、お光さまに五兩位貰つてもいゝ譯があるから、五兩貸してくれといふのだ。

勘次　どんな譯があるか知らねえが、軒を並べた野玉宿、年中無心合力の凄みのせりふは茶漬飯、盛相飯のお前達に籠められてたまるものか。（ト大きくいふ。）

九助　これさ親方、まあ靜かにしなせえな、天窓ばかりかと思やあ聲まで大きい、お前方に貸せといふのぢやねえ、お光さまに借りて行くのだ。

勘次　そりやあ言はねえでも知れたこと、おれなら百も貸しやあしねえ。さあ、ぐづ／＼言はねえで早

く歸れ。
九助　いや、幾ら歸れと言ひなすつても、借りねえうちは歸らねえ。
勘次　さう強情をぬかしやあがりやあ、腕づくでも引張り出すぞ。
九助　おゝ、出されるなら出して見ろ。
勘次　出さねえでどうするものか。
○　さあ、出やあがれ〳〵。
△　ト勘次九助を引立てに掛るを振拂ふ。○△立ち掛る、此内お勘煙草を呑み居て、
お勘　これ〳〵勘公、隣近所へ見ツともねえ、歸らずば何時までも、ぐづ〳〵言はしておきねえな。
勘次　それだつて此奴等に、ぐづ〳〵言はれちやあ、癇に障りやす。
九助　五兩貸してくんなさりやあ、直にわつちやあ歸りやすが、どうでも五兩貸せねえか。
勘次　知れた事だ。
九助　貸せねえと言やあ仕方がねえ、出る所へ出て貰はうか。（トすつと立つて行かうとする、勘次留めて）
勘次　これ、出る所へ出ると、何處へ行くのだ。
九助　何處へ行かうとおれが勝手だ。

お勘　九助待ちねえ。
九助　え。
お勘　出る所へ出るといふは、そりやあ白痴を脅すせりふだ、おれが小堀の一件で屋敷を逃げたを訴人する氣か。手前もあの時脫れた體、出る所へ出りやあ意趣返しに、抱込むからさう思へ。
九助　やあ。（トびつくりする。）
お勘　そんな野暮を言はねえで、色を附けて遣らうから、それで默つて歸るがいゝ。
　トお勘三兩紙に包んで投げてやる、九助取上げ見て、
九助　こりやあ三兩ござりますね。
お勘　それでも不足か。
九助　どういたしまして、三兩お貰ひ申しますれば、すつかり是れで身裝も出來、好きな酒もうまく呑めます。どなたも大きに失禮を申しました、眞平御免なさいまし。
勘次　どんな事を仕置いたか、三兩とは氣が惡いな。
○　是れから何處へお出でだか、一杯呑むなら爰でおやりな。
△　わたしらも御馳走になりたいものだ。

九助　何處で呑むのも同じ事だ、出しッこなら爰で呑まう。
お咲　誰がお前と出しッこで呑むものかね。
三人　さあ〳〵、早く出ておいで〳〵。
九助　出て行くとも〳〵、金せえ貰やあ用はねえ。いや用のねえ事はねえ、もしお光さま、お前の兄御の辨秀さまは栫る事はござりませぬか。
お勘　小堀の屋敷の一件で、二三日あとに出牢して、昨夜ちよつと小石川で、姿を見たがそれッきり、何處に居るか居所は知れねえ。
勘次　お前どこぞで逢つたのか。
九助　辨秀さんぢやァあるめえが、どん〳〵の川端に坊主の死骸が揚つてあつたが、年恰好が似て居るからさ。
お勘　なに、兄貴に似た死骸があつた。
勘次　それぢやあ川から揚つたのか。
九助　菰が掛けてあつたから、顔も形も見えなんだが、側に出て居る書附に年の頃は三十四五で、太り肉で鼻筋通り、大きな目玉の其上に、左りの小鬢に痣があると記してあるゆゑ、辨秀さんぢやァ

あるめえかと思つてさ。

お勘　そいつあ氣になる話しだの。（トお勘氣になる思入。）

九助　これからどうで歸り道、とつくりと見て辨秀さんなら、わしが直に知らせに來ます。

お勘　無駄足はさせねえから、もしそれだつたら知してくんな。

九助　合點でござります、それぢやあ直に行きませう。（ト門口を見て、）今年位降る年はねえ、又ばらばらと降つて來た。（ト門口へ出て、）もし、どんな傘でもいゝから、一本貸してくんなせえ。

勘次　そこにあるのを、持つて行きねえ。

九助　これを一本借りて行きます。（ト前幕にお勘がさして來たる釜屋の番傘を取つて門口をしめ、傘を開き見て、）「小石川釜屋」、おつな所の傘だなあ。

ト四ツ竹節になり、九助傘をさし花道へはひる。お勘心に掛る思入にて、

お勘　惡い人だが實の兄、今の話しは氣になるが、お前も昨夜はどん〳〵を、夜更に通つて來たといふが、そんな話しは聞かなんだか。

勘次　ちつと聞いた事があります。（ト思入あつて、）これ、手前達は奥へ行つて、此おツかあに場所の樣子を、よく敎へて遣つてくれ。

○　あいく此家では板頭、お職といはるゝお百婆あ、わたしが奥で教へて上げよう。
お虎　どうぞお頼み申します。
△　まあ素人ぢやあ呼聲から、稽古しにやあいけねぇわな。
○　是れから奥で稽古しよう。
お虎　左樣なれば、お二人さん。
△○　さあお出でく。（ト夜鷹の呼聲、四ッ竹節にて○△にお虎附き奥へはひる、勘次思入あつて、）
勘次　お咲や、表に誰ぞ居やあしねえか。
お咲　あいく。（ト門口を明け四邊を見て、びつしやり門口をしめる。勘次は暖簾口から奥を見て、）誰も居やあしませんよ。
勘次　お勘さん、辨秀さんは殺されやしたぜ。
お勘　えゝ、（トびつくりなし、）そりやまあ何處で。
お咲
勘次　今來た丸助が言つた通り、どんくの川端で。
お勘　え。
お咲　そんならあの辨秀さんが。

勘次　むごい目に逢ひなすつた。
お勘　どうしてそれを知つておいでだ。
勘次　昨夜姉御の迎へに行つて、通り掛つて見て來たのだ。
お勘　なに、見て來たと。（ト誂への合方になり、）して、殺した者は。
勘次　お勘さん、是れが證據だ。（ト懷から吉三が落したる前幕の叺煙草入を出す。）
お勘　此煙草入が證據だと。
勘次　殺した所へ出會し、後日の證據に拾つて來た、てつか持ちの煙草入。
お勘　吉の字菱の金物は。
勘次　お前覺えがありませうね。
お勘　むゝ、こりや吉三さんの煙草入。（トぎつくり思入。）
お咲　そんなら殺した其人は、
勘次　これ靜にしろ、吉三さんだ。
お咲　えゝ。（トびつくりなす。）
お勘　扨は兄貴を殺したは。

勘次　どういふ譯か知らねえが、通りかゝつた小石川、組んづ解れつ摑み合、喧嘩と思つて小蔭から樣子を見れば辨秀さんに、相手も知つた吉三さん、いはゞ脫れぬ兄弟仲も他人づくの金ゆゑに、辨秀さんの天窓をこはし、とゞの仕舞が首を締め死骸を川へ突落し、あんまり邪險な仕方だから、見兼ねてわつちが組附いた、其時拾つた煙草入、何ぼお前が惚れて居ても、是れは捨てちやあおかれめえ。（トお勘思入あつて、）

お勘　むゝ、それぢやあ兄貴を殺したのは、わつちが足の吉三さんか。

お咲　とんだ事をしなさんしたな。

勘次　辨秀さんにやあどの位、世話になつたか知れねえのに、金に迷つて殺すとは、あんまり惡黨過ぎやすね。

お勘　來るか來ねえか知らねえが、二人一緒に上方へ逃げて行かうと約束を、しておいたから知らぬ顏で、今夜爰へ來るかも知れねえ、尋ねて來たら樣子を聞き、品によつたら兄貴の敵。

トお勘きつと思入。

勘次　其時こそはわつち等も、助鐵砲をしませうから、思ひ切つて遣んなせえ。

お勘　末始終は夫婦にと、思つた人だが現在の、兄貴を殺した上からは、こいつあ考へものだわえ。

ト思入。時の鐘。

お咲　話しに紛れて日が暮れたを、さつぱりと知らなんだ。

勘次　早く行燈を持つて來い。

お咲　あい〳〵。（ト奥へはひる。）

勘次　もうとつぷりと暮れたから、今に忍んで來たならば。

お勘　篤と樣子を聞いた上、非義非道に殺したら、何ぼ可愛い情人でも、親なき後は兄は親。

勘次　敵を討たずば、（ト大きくいふ。）

お勘　あゝこれ。（ト お勘押へる、勘次口を押へ思入。時の鐘。お咲行燈を提げ出て、）

お咲　お前、おまんまを上んなさらねえか。

勘次　おゝ、腹を丈夫にしておかう。

お咲　それぢやあお上りか。

勘次　えゝ、喰ふといふに。（ト大きくいふ。）

お咲　おゝおつかねえ、喰ひ附きさうだよ。

ト四ツ竹節にて勘次お咲奥へはひる。跡にお勘煙管を突き思入、時の鐘を打上げ、床の淨瑠璃になる、

お勘 〽更け行く鐘も哀れ添ふ、頭しも師走十五夜の、月は冴ゆれど胸の闇。
あの淨瑠璃は門附を隣りの家で呼んだのか、文句は慥、や、ゑん廻し、おしゆんが死ぬる覺悟にて、言交した傳兵衞が來るのを待つてる淨瑠璃だが、それに引替へわつちは又、吉三さんを殺さうと來るのを待つてる胸の闇、世はさま〴〵な事だなあ。（トお勘思入、時の鐘。）

〽死なば一緒と傳兵衞が、忍ぶ姿のしよんぼりと、彳む軒は見覺えの。

ト此内やはり時の鐘、花道より前幕の吉三頬冠り、法被尻端折りにて出來り、花道にて、

吉三 惡い事をする者が、なまなか親に孝行を仕ようと思つて盜んだが、其百兩も役に立たず、剩さへお勘が兄、義理ある中の辨秀を殺すといふは天の罰、昨夜其場で出會した野郎は烏勘次のやうだが、あいつの口から漏れにやあいゝが、もうお勘とも敵同士、一緒に旅へも行かれめえ。是れから行つて餘所ながら暇乞をして行かう。勘次が家は慥に二軒目、向うの家に違ひねえ。

〽慥にこゝぞと門の戸へ、知らす相圖に打つ礫。

ト吉三舞臺へ來り、門口から內を窺ひ、爰だといふ思入あつて、

はい御免なさい、勘次さんの家はこつちかえ。

お勘 あい、こつちでござりますよ。

吉三　眞平御免なさい。（ト門口を明ける。）

お勘　や、吉三さんか。（ト大きくいふ。）

吉三　おゝ、おれだ。

へ聞くにお俊は飛び立つ思ひ、心も共に行燈の燈火吹消し、差し足に、

ト　お勘びつくり思入、吉三跡を見送り家へはひり、そつと門口をしめる。

勘次は留守か。

お勘　今そこらへ行つたやうだ。

吉三　昨夜あれからどつちへ逃げた。

お勘　わつちやあ、あれから川岸へ抜け、直に家へ歸つたが、お前よく逃げられたの。

吉三　二三人叩き倒し、おれも水道橋の方へ逃げたが、屋根から飛んでおりる時、立看板の折釘へ片袖を引つかけたが、はずみに絲が切れてしまひ、片袖殘して來たが、あれが證據にならねばいゝが貧乏人の煮る鰯で思ふやうにやあならねえものだ。

ト　着て居た法被を脱ぐ、下片袖なき着附、お勘見て、

お勘　それぢやあ昨夜其片袖を、跡へ殘して來なすつたのか。

吉三　袂へお七が書置を、入れて置いたが。

〽いふ聲寐耳に與次郎が、

お勘　なに、お七とは。

吉三　いやさ、質に置いた袷が流れ、書出しが來て居たつけが、片袖がなくつて見つともねえ、あいつを一枚出さにやあならねえ。

お勘　其袷を出すにやあ及ばねえ、着憎からうが是れでも着ねえ。

〽妹が姿も闇紛れ、捉へる袖の振合せ、（トお勘戸棚から女の着物を出して遣る。）

吉三　こりやあ手前のか。

お勘　あい、わつちのだよ。

吉三　こいつあ飛んだいゝ柄だ。

〽無理に引込み取違へ、戸口を内からぴつしやり引立て、

ト吉三着憎さうに前を合せ、三尺をしめながら、

女の着物はめつぽふ着にくい。

〽探る手先きに火打箱。（ト此内お勘吉三が脱いだ着物を見て、）

お勘　おや、此着物にやあ血が附いてるが、お前人でも殺しやあしねえか。

吉三　え、昨夜犬に取巻かれ、逃げるはずみに石に躓き、額をこんなに擦剝いたが、汐時でもあつたかして、滅法に血が出たが、其血が大方附いたのだらう。

お勘　額を打つた其血汐が、どうして背中に附いて居るね。

〽いふもがた〳〵胴震ひ、

吉三　さあ、こりや血を拭いた手拭を、肩へ掛けたが、其時でも、大方背中へ附いたらう。

〽面目なさに此姿、しを〳〵として居たりける。（ト吉三思入、お勘着物を疊み、）

お勘　片袖のねえ其上に、そこら〳〵が血だらけゆゑ、人殺しの疑ひが、掛るめえものでもねえ、こりやあ爰へどめておかう。（トお勘戸棚の下へ入れる、吉三思入あつて、）

吉三　そりやあさうと昨夜手前と、旅へ出る約束をしたが、ちつと絡んだ事があつて、それの方を附けねえうちは、出掛る譯に行かねえから、さう思つてくれ。

お勘　なぜ、旅へ行かれねえのだ。

吉三　今もいふ絡んだ事で、當分出掛ける譯に行かねえ。

お勘　さうしてお前、何處に居るつもりだ。

吉三　何處といふ當もねえが、爰に三日かしこに五日、ごろ附いて居るつもりだ。

お勘　ごろ附いて歩くも、たゞの人ならいゝけれど、鎌倉十里追放の肩書のあるお前の體、爰らに居たら濟むめえぜ。

〽突きつけられて目に溜る涙を拂ひ、（ト吉三思入あつて、）

吉三　濟まねえ事はおれも承知、お構ひの地にまごついて居りやあ、又行かにやあならねえから、長く爰にやあ居られねえが、昨夜盗んだ路用の金も小石川で落してしまひ、親の難儀を救はうと、いやさ、おれが難儀は差當り、路用の當てが二朱もねえ、實はそれゆゑ行かねえのだ。

〽詞にわつと泣出し、

お勘　そりやお前でもねえ、吉三さん。（ト言ひかけ煙草を吸附ける。）

〽お詞無理とは思はねど、そも逢ひ掛る初めより末の末まで言交し。（ト煙草を一口呑み、）

今語るのはお俊のさはり、ほんにあの淨瑠璃にいふ通り、路用がねえから行かれねえとは、お詞無理とは思はねどだが、是れが堅氣な素人なら、急に路用も出來めえが、袂錢から取上げて屋尻せえ切るお前の腕で、四十や五十の端た金、一晩にも出來ようぢやあねえか。

吉三　出來ねえ事もねえけれど、盗みをする氣がなくなつたから、二朱の金もむづかしいのだ。

お勘　何でお前、しみツたれな、そんな根性になつたのだ、わつちも茶見世に居た時分、お客の物を取り習ひ、たゞ取る金に面白く盗み心を打明けて、お前と情人になつたのは、悪事に勝れた肚胸が見込み、盗みばかりか人せえ殺す。

吉三　え。

お勘　いやさ、人の物は我が物と、思つて居るお前のくせに、何で盗みを止めたのだ。

吉三　不圖した事から止めようと心へ錠を下したから、鍵があつても締りを明け盗む心がなくなつたから、おれが腕ぢやあ最う出來ねえ。

お勘　お前が出來ざあ路用の金は、わつちの方で拵へよう、昨夜の金が十兩ばかり、まだ爰に殘つて居るが、もう二三十都合したら、京都まで行かれよう。

吉三　何ぼ高い旅籠錢でも、四五十兩ありやあ行かれるが、どうも手前と一緒にやあ。

お勘　わたしと一緒にやあ行かれねえとか。

吉三　行かれねえ譯もねえが、いはゞ敵に。

お勘　え。

吉三　いやさ、堅氣になる氣になつたからよ。

お勘　そりやお前無駄な事だ、今更堅氣になつたとて、どう辛抱が出來るものか、そんな野暮を言はねえで、まあわたしに乘つておいで、

〽大事々々の夫の難儀、命の際に振捨てゝ、女の道が立つものか。

ト此内お勘戸棚から、桐の小箱を持來りて、

吉三　なに、人の物を取らねえでも、ぎつちり詰つた其時は、金になる物があるよ。

お勘　ちよつと見ねえ、是れだ。

〽隱せし剃刀取り出す。（トお勘小箱の中より袱紗包の眠虎の印を出し、吉三に見せる、）

吉三　こりやあ何だ。

お勘　小堀の屋敷の家の寶、眠虎とやらいふ金の印、捨賣りにしても百兩や百五十兩にやあなる代物、是れがなけりや、小堀の若殿、左門之助は一生埋れ木、世に出る事は出來ねえのだ。

吉三　何でそれを盜んだのだ。

ト是れを聞き吉三思入あつて、

お勘　お前も知つて居る通り、勤めをする氣で彌平次さんの妾に行つて居るうちに、小堀の家を横領す

ろ巧みにわつちも加はつたが、左門之助を世に出さうと檻を破つて連出した忠左衛門へ荷擔のお杉、責殺した死骸の一件、鏡から出た書置を、證據に宿から突込まれ、兄貴もお前も喰ひ込み、其時殿の彌平次樣も、御本家預けになつたゆゑ、南無三寶と其晩に、眼虎の印を盜んで逃げたは忠義立てする忠左衛門が、鼻を明かして左門之助に、家督をさせねえ料簡さ。

吉三　成程手前は親讓り、ふて腐れない、肚胸、其騷動のその中で印を持つて逃げるとは、惡い事にやあ拔け目はねえ、實におらあ叶はねえ。

お勘　こんな氣でもなかつたが、みんなお前に仕込まれたのだよ。

吉三　あんまりさうでもあるまいよ。さうして見ると其印が、左門之助が手に入らにやあ、小堀の家は繼がれねえのか。

お勘　それがわつちの意趣返しさ。

〽いつそわしがと二人が爭ひ、中にうろ〱與次郎が、取り押へるも一生懸命。

ト吉三此印を取つて、お七に遣りたいと思ふ心の思入。

吉三　知らぬ先きは兎も角も、妹が縁に繋がれば。

お勘　どうしたとえ。

吉三　いやさ、圓城寺に左門之助は小姓になつて居るさうだが、是れがなけりやあ一生埋れ木、世に出る事の出來ねえ體、噪向うぢやあ捜して居よう、何にしろつまみの庇は滅法界にいゝ彫だ、金物にしたらよからう。

お勘　お前、それが欲しいのか。

吉三　むゝ、（ト思入あつて、）路用の金にしてえからだ。

お勘　欲しきやあお前に遣つてもいゝが、爰で賣るより上方で賣つた方が直がしよう、まあそれまでは預つておかう。

吉三　それがなけりやあ妹が。

〽假令鳥類畜生でも、子の可愛いに替りはない。（ト吉三欲しき思入、）

さういふ路用の當てがあるなら、それを目當てに手前と一緒に、是れから旅へ出掛けよう。

お勘　それぢやあいよ〳〵行きなさるか。

吉三　路用せえありやあ、昨夜も言つた京大阪から、金毘羅までも遊山半分、歩くつもりだ。

お勘　さうして何時出掛けようね。

吉三　長く居られぬ二人の體、譬にもいふ善は急げ、今夜是れから夜をかけて、川崎まで出掛けよう。

お勘　今夜直に出掛けるのかえ。

吉三　行くと肚が極つたら、半時も早いがいゝ。

お勘　わつちもさつき九助が來たから、長く爰にやあ居られねえ。

吉三　それぢやあこれから支度をしよう。

お勘　いや、せはしなくなつて來たね。（ト此時奥にて、）

〽あわたゞしく呼び立つれば、母は奥より立ち出でゝ、

△○　さあお出で〳〵。

ト此時奥より以前の○△お虎出て來る、

お勘　今夜は場所へ行かねえのか。

○　宵の口の水晴れで、今夜はみんな休みましたのさ。

△　それに新子のお虎さんが一杯奢ると言ひなさるから、角酒屋へ行つて遣りますのよ。

お虎　お前さんも一緒にお出でなさいませんか。

お勘　わつちやあ家でやる方がいゝ。

吉三　お勘、新子といふはあの上さんか。

お勘　色白で綺麗だぜ、お前口明けをすればいゝ。

吉三　違へねえ。（トお虎吉三を見て、）

お虎　や、お前さんは。

吉三　ほんに何處でか見た顏だが。

お虎　あい、了念寺でお目に掛りましたが、慥お前さんは、湯灌場買の吉三さんとおつしやいますね。

吉三　なに、了念寺で逢つたえ。

お虎　番僧の雲貞さんと燒餅喧嘩をいたしました、洗濯屋のお虎でござんす。

吉三　むゝ、餅屋の後家に情婦が出來て、雲貞坊主をこづき廻した、洗濯屋の上さんか。とんだ所で逢ふものだ。

お虎　あの時お前が燒場切手を。

吉三　え。

お虎　いえさ、其切手をなくなした科で、雲貞さんがお寺をしくじり、追出されたのでわたしも共々、難儀を重ね爰へ來て、野天の勤めをしますのさ。

吉三　そいつあ氣の毒な事だなあ。

お虎　其難儀もお前ゆゑさ。

○　何を愚癡を言ひなさるのだ、早く行つて呑まうぢやねえか。

△　わつちやあまだ夜食前だから、喉がぐびく〳〵いふやうだ。

お虎　はい〳〵、直に參りませう。

お勘　おい、お前方呑みに行くなら、是れで肴でも買つてくんねえ。

ト紙へ一兩包み投げてやる、〇取つて明けて、

○　毎度有難うござります。おや一兩ござりますね。

△　これぢやあしつかり呑めるね。

お虎　然し、お氣の毒でござりますな。

お勘　なに、そればかりな事を。

○　さあ〳〵お金をお貰ひ申したら、爰でお邪魔にならぬやう。

△　それ〳〵、早く酒屋へ行くとしよう。

お虎　左樣なら、お前さん。

三人　御ゆるりと。（ト吉三へ挨拶して門口へ出る、お勘門口へ來て、）

お勘　あゝこれおつかあ、餘計な口を利かねえやうに。

○　そりや合點でござりまする。（ト門口をしめるお勘思入あつて掛金をかける。門の三人小聲にて、）

△　それぢやあ今の若い人は。

お虎　今評判の湯灌場小僧、吉三といふ泥坊さ。

○　あゝこれ、滅多な事をお言ひでないよ。

（四邊憚り與次郎は、母の手を取りこなたへ直らせ。（ト○先きに三人思入あつて下手へはひる。）

吉三　いや飛んだ奴に逢ふもんだ。（ト四ツ竹節の合方にて、奥より以前の勘次、お咲出來り、）

勘次　吉三さん、此間は。

吉三　久しくお前にも逢はなんだ。

お咲　よくお出でなさいましたね。

吉三　大きにお勘がお世話になつたさうだ。

お咲　いえ、こつちでお世話になりますのさ。

勘次　今奥で聞きましたが、今夜旅へ立ちなさるのか。

お勘　お前にも話した通り、長く居られねえわつちの體、丁度吉三さんが來たこそ幸ひ、川崎まで夜の

うちに、先きへ出越して置く積りさ。
勘次　これから直に立ちなすつたら、七つ時分が鈴ケ森だ。
お勘　丁度時刻もいゝ時分さ。（ト勘次と顔見合せ思入）
お咲　誠にお名残り惜しうござりまする。
お勘　直きこつちへ歸つて來ますよ。
吉三　何にしろ乞食も身祝ひ、是れから旅へ立つのだから、一杯遣つて行かうぢやあねえか。
お勘　ほんに目出度く祝つて行かう。
〽祝ひうたふも聲低に、〽お猿は目出たやなあ。（ト側に有合ふ酒肴を出し吉三猪口を取上げる。）
お咲　お酒が水になりましたらう。
吉三　水の方がいゝのだ。
お勘　どれ、ついで上げようか。（ト酌をする。）
〽聟入り姿ものつしりと〳〵。
吉三　あゝ、こぼれらあ。
〽さりとはく〳〵ノホあろかいな。（ト吉三ぐつと呑み）

お勘　さあ、此世の別れだ。

吉三　なに、別れとはえ。

お勘　いやさ、此鎌倉の別れだから、なみ〳〵と受けてくれ。

お勘　どうで酒でも呑まねえけりやあ、（ト吉三を殺さうといふ思入あつて、）さあ一杯ついでくんな。

ト茶碗を出す。

お咲　おやまあ、大層大きな物で。

〽さんな又あろかいな。（トお咲酌をする、お勘ぐつと呑み思入あつて、）

お勘　お前昨夜小石川で、兄貴の跡を追掛けて行つたやうだが、あれぎり逢はなんだか。

ト吉三ぎつくりと思入、

吉三　むゝ、兄貴の跡を追掛けて逃げようと思つたが、釜屋の奴等に取巻かれ、敲き散らす其内に、半町ばかり遅れたから、たうとう兄貴に逢はずにしまつた。

お勘　捉まつた様子もないが、どつちの方へ行つたらうね。

吉三　大方旅へ行つたらう。

お勘　そんな噂を聞きなすつたか。

吉三　今朝聞いたが、兄貴は檀内國の方へ、行つたさうだ。

勘次　それおやあわつちがいふ通り。

お勘　修羅の太鼓のどん〱から。

吉三　何だと。

お勘　さあどんな惡い兄貴でも、旅へ行つたと聞いた日には、何だかわつちやあ名殘りが惜しい、不斷我慢な根性だつたが、嘸悔しかつた事だらう。

吉三　旅へ行くのが悔しいとは、手前おつな事をいふな。

お勘　さあ悔しからうと言つたのは、生れ故鄕の土地を放れ、知らねえ旅へ出掛けるからさ。

吉三　それもこれも金づくゆゑ。

お勘　今に敵は。

吉三　や。

お勘　さあ、金が敵の世の中だねえ。（トお勘ちつと思入、吉三扨はといふ思入あつて茶碗を取上げ、）

吉三　もう一ぺいついでくれ。

〽これ德兵衛さんござんせ、あんまり來やうが遲いによつて、お初さんが顏を眞赤にして、

腹立てゝ居やんす。

ト吉三酒を呑み居る、かすめてドン〳〵になり、花道より前幕の武兵衞、釜屋の番傘を持ち、九助腰繩にかゝり、捕手四人繩を取り引立て出來り、花道にて、

武兵　これ九助どのとやら、お前が傘を借りて來た家は。

九助　つい向うの家でござりまする。

捕手　すりや、其傘は其方が、金子と共に取られたのだな。

武兵　左樣にござりまする。

捕手　それ九助、案内いたせ。

九助　はッ、（ト舞臺へ來り、）則ちこの家でござりまする。

捕手　武兵衞、隙見いたせ。

武兵　はッ。

〽これお初さん、中直りに聟さんが杯をせいといの、機嫌を直して杯を戴かんせ。

ト此内吉三お勘に茶碗をさす、もういやだといふを無理に呑ませる、武兵衞は門口から内を覗き見て、

そぢや〳〵、昨夜の女が居りまする。（ト床の三味線に乘つていふ。）

捕手　えゝたはけ面め。それ、申し附けた通りに。
九助　はツ、（ト門口へ立ち掛り、明けようとして明かぬゆゑ）もし、お頼み申します〳〵。
勘次　誰だえ。
九助　さつき參つた、九助でござりまする。
お咲　何しに來なさんしたのぢやえ。
九助　傘を返しに參りました。
勘次　何の來ずともよい事を。（ト立ち掛る）
お勘　あゝこれ、明けちやあいかねえよ。
〽これ、戴くなう杯を、さんな又あろかいな。（ト勘次門口から表を覗きびつくりなし、）
勘次　もし、捕手が來ました。
吉三　えゝ。（トびつくりなし、お勘行燈を吹消す。時の鐘。）
お勘
捕手　それ、踏ん込め。
トドン〳〵になり、門口をばら〳〵と毀し皆々内へはひる。此内お勘は小箱を懷へ入れ、匕首を戸棚から出して帶へ差す、吉三尻を端折り身拵へをする。捕手内へはひり、闇黑の立廻り、勘次はお咲を

門口へ突出す、是れにて下手へ逃げてはひる。武兵衛九助の繩をとらへ、猿廻しの見得。

〽よい女房ぢや〱、のほよほあろかいな、さんな又あろかいな、嫁御の晝寢もころりとせ〱、ついでに日和も見てたもれ〱、日和を見たなら落ちてくれ、いや立たしやませ、いや落ちてくれ、いや立たしやませ、そぢや〱〱〱、お猿は目出度やなあ。

ト此内ドン〱を冠せ、立廻りあつて、九助を猿に遣ひ、可笑味の立廻りよろしく、

吉三　きり〱此家を。（ト吉三九助を投退け、きつと見得。）

〽あすの噂となりふりも、窶す姿の女夫づれ、名を畫草紙に聖護院の森を目當に、

ト吉三お勘花道へ行く、舞臺は捕手武兵衛九助を押へ附ける、勘次は下手へ逃げてはひる。三重時の鐘の送りにて、兩人花道へはひる。是れと一緒に舞臺は道具廻る。

（鈴ヶ森仕置場の場。――本舞臺一面の平舞臺、上手に大きな題目の石塔、眞中に醤油樽を冠せし獄門臺、此脇に元小堀彌平次家來龍左衞門といふ罪の次第を書きし捨札、下手に石地藏後一面藪疊、黒幕、よき所に松の立木、日覆より同じく釣枝、總て鈴ヶ森仕置場の體、爰に非人三人焚火をして居る、時の鐘、波の音にて道具留る。

非一　こう傳助や、爰へ掛つた獄門は、小堀の屋敷の用人で、幡代龍左衛門といふ人ださうだな。
非二　元一庵といふ花の師匠で、野刺間半分屋敷へ入込み、養子に來た彌平次の附人で來た用人だ。
非三　其彌平次に妾のお光、龍左衛門と三人で、小堀の血筋を絕やさうと、若殿を牢へ入れ殺さうとした所。
非一　お杉といふ腰元が吉田忠左衛門といふ家老を賴み、其若殿を盜み出し、鼻を明かした所から、其お杉を三人で箱にかけて責殺し。
非二　其死骸の遣り場に困り、お光が兄の齋坊主辨秀を語らつて、湯灌場小僧吉三を賴み、燒場切手を盜ませて、燒かうとしたのが露顯なし、寺が難儀をしたさうだ。
非三　程たつて其お杉の、宿から事がばれたといふ事だな。
非二　おゝ鏡の中に入れてあつた、書置ですつかり分り、それを上へ出されたから、小堀の殿は御本家預け、辨秀吉三は入牢して、鎌倉十里追放で、二三日あとに出牢した。
非一　貧乏鬮を背負つたのは此用人の龍左衛門、こいつがみんなした事と、トヾの仕舞が獄門だ。
非二　そこがやつぱりお上の御慈悲、殿を助けうばつかりに、家來へ罪を着せたのだ。
非三　何にしろ宵に呑んだ、酒がすつかり醒めてしまつた。

非一　もう一升ばかり呑みてえものだな。

ト時の鐘、馬士唄の合方、波の音にて、上手より以前の勘次出來り、

勘次　もし、ちつと物が聞きたいが、今爰へ女と男の二人連れは來なんだかね。

非一　此節は日が暮れちやあ、女の通るはたまさかだが、

非二　どんな風體の女だえ。

勘次　女も男も二十四五で、二人ともいゝなせなこしらへ、八つ山下の夜明しで今しがた通つたといふから、こつちへ來たに違ひねえが、それぢやあまだ跡か知らぬ。

非二　今時分鈴ヶ森へ、女の來る氣遣ひはねえ。

非三　大方橋向うへでも泊つたらう。

勘次　なに、夜道を恐れるやうな女ぢやあねえ。（ト非人の一勘次を見て、）

非一　や、さういふは勘次ぢやあねえか。

勘次　おゝ手前は小堀の屋敷に居つた、中間の傳助か、どうしてこんな所に居るのだ。

非一　おれもすつかりだりむくつて、先月から小屋へはひり、此手合と一つ仲間だ。

非二　それぢやあ此人は、新めへ手前の知つた人か。

非一　おれが以前の友達だ。
非三　知つた中なら遠慮はねえ、爰へ來て一服やんなせえ。
勘次　有難うございます。地獄にも知る人だ、いゝ所で手前に逢つた。（ト焚火の側へ來る。）
非一　さうして今搜すのは誰だ。
勘次　手前も知つてる小堀の妾、お光といつた湯島のお勘に、湯灌場小僧吉三だ。
非一　何で二人を搜すのだ。
勘次　燒場切手の一件で、お勘が田舍に隱れて居たが、皆兇狀が極つたゆゑ、おれが家へ出て來たから、匿つて置いたのは、どうかして抱いて寐ようと下心があつた所、今夜吉三が來やあがつてお勘を連れ出して行つたから、それで跡を追驅けて來たのだ。
非一　天窓の大きいものは運がいゝといふが、湯島のお勘を情婦にしたとは、手前も豪氣な運だなあ。
勘次　まだ、情婦にしやあしねえ。
非一　してもしなくても、其氣ならたゞは通せねえ、一升買ひねえ。
非二　さうだ〳〵、こんな人をたゞ通しちやあ、鈴ヶ森の名代が惡い。
非三　さあ〳〵奢んなせえ〳〵。

勘次　えゝやかましい、それ額銀だ。（ト勘次財布から一分銀を出してやる。）

非一　こいつあ有難い、やう〳〵酒に有りついた。

非二　それぢやあお前汚ねえが、わつちらが小屋へ來なせえな。

勘次　おゝ行くとも〳〵、お前方にも賴みがあるから、小屋へ行つて一杯やらう。

非一　そいつあ話せる、さあ〳〵一緒に來ねえ〳〵。

ト右の鳴物にて四人わや〳〵と上手へはひる。時の鐘、誂への合方かすめて波の音になり、東の揚幕より以前のお勘手拭をすつとこ冠りにして裾を端折り、吉三同じく頰冠り尻端折りにて出來り、よき所にて、

お勘　步くのは早いものだ、もう鈴ケ森へ來たね。

吉三　晝と違つて夜更けちやあ、見るものがねえから道が早い。

お勘　時の鐘が聞えねえが、もう何時だらうね。

吉三　月のあんべいぢやあ、八つだらうか。

お勘　夜は長くなつたね。（ト右の鳴物にて本舞臺へ來る、吉三獄門を見て）

吉三　おゝ、獄門が掛つて居るな。

お勘　えゝ、氣味の惡い。

吉三　そりやあたゞの女のいふ事だ、人せへ殺し兼ねえ手前、向うで氣味が惡いと言はあ。

お勘　なあにさうでねえ事よ、是れでもやつぱり女だから、口先ばかりで意氣地はねえ、斯うして夜道を歩くのも、吉三さん、お前が力さ。

吉三　そいつあ大きな當て違ひだ、こつちで手前を力にするのだ。

お勘　ふざけた事を言ひなさんな。（トお勘吉三の肩を突く、是れにてひよろ〳〵として懷より出刃庖刀を落す、お勘びつくりして庖刀を取上げ。）こりやあ何處から持つて來たのだ。

吉三　夜道をするは物騷だから、さつき休んだ夜明しで、此出刃庖刀を上げて來たのだ。

お勘　盜みをしねえと言ひながら、それ見ねえ、止められめえが。

吉三　違えねえ。（ト出刃を手拭に卷き腰へ差す。）

お勘　此獄門は何だね。

吉三　どうで喰詰め者だらうが、捨札があるから見てやらう。（ト吉三捨札を見て。）元小堀彌平次家來龍左衛門。

お勘　え、それぢやあ是れが龍左衛門の首かえ。（トお勘思入。）

吉三　こりやあ手前の荷擔人だな。
お勘　あゝ彌平次さんの懷小刀、左門を牢へ入れたのも、吉之進を毒殺したのも、みんな此奴の指金だ。
吉三　さういふ惡事があつた日には、板附は當り前だな。
お勘　人を殺しやあ又何時か、殺されるのは天の罰だ。
吉三　どうで此身も、（ト思入あつて、）いや、切られたくねえものだなあ。
お勘　えゝ未練な事をいひなさんな。（ト吉三氣を替へ、捨石へ腰をかけ、）
吉三　何にしろ火があるから、一服遣りてえが煙草入を忘れて來た、無えと思ふと猶呑みてえ。
お勘　そんなにお前、呑みたけりやあ煙草入れを上げようか。
吉三　持つて來たか。
お勘　あい、爰にあるよ。
吉三　そいつア豪氣だ。
お勘　さあ一服お上り。（ト時の鐘、お勘懷から勘次が拾ひし煙草入を出す、吉三何心なく取つて見て、）
吉三　や、此煙草入は。（ト合點の行かぬ思入。）
お勘　知つておいでか。

吉三　どうして是れを。

お勘　拾つたのだよ。

吉三　何處で是れを拾つたのだ。

お勘　小石川のどん〳〵でさ。

吉三　え。（トびつくりする。）

お勘　大層びつくりおしだねえ。（ト合方ぎつくりとなり。）

吉三　あんまり思ひ掛けねえからよ。

お勘　吉の字菱の金物は、こりやあお前の煙草入だね。

吉三　むゝ、こりやあおれの煙草入だが、昨夜手前に逢つた時、小石川で落したが、どうして是れがどんどんに、落ちてあつたか合點が行かねえ。

お勘　なに、合點の行かねえ事があるものかね、お前が兄貴を殺した時、どん〳〵へ落したのだよ。

ト吉三扨はといふ思入あつて、

吉三　それぢやあ手前は、何もかも。

お勘　其場へ出會した勘次から、殘らず聞いて知つて居るのだ。

吉三　むゝ、殺した事を知られたからは。

　　ト此内吉三腰の庖刀を取つて、お勘を殺さうとするを身を躱して、

お勘　こりやあわつちを殺す氣だね。

吉三　昨夜兄貴をどん／＼で殺した事を知つたからは、彼の世を掛けて約束した夫婦も今は敵同士、手前もおれを殺す氣で、刃物を持つて來たらうが、兄を殺すも亭主を殺すも科は脱れぬ鈴ケ森、今は色氣も鮫洲から磯打つ波の荒井ケ崎、體へ入つたひゞひだに消え行く水の安房上總、首を挽かれる青竹の鋸山を向うに見て、獄門臺の其前で、身を捨札と覺悟しろ。

　　ト出刃庖刀を持つてきつと見得。

お勘　兄の敵の其上に、わたしを殺す心なら、假令連添ふ亭主でも、此儘生かしちやおかれねえ、大方路川と眠虎の印を取る氣で爰まで來たらうが、是れを取られて詰るものか、慾には誰も赤羽根に三田の臺より笠の臺、西へ落ち行く待宵の、月の岬を跡になし、死出の八つ山三途の川端、六郷よりか六道の、六つの街の畜生道、此磯端の牛馬と共に屍を曝しなせえ。

吉三　さう又性根がすわつたら、假令抱寐をした女でも、最う生かしちやあおかれねえ。

お勘　お前の口にやあ殺されるが、腕づくならば女でも。

吉三　小癪な事を。

ト波の音、早き木魚にて、吉三出刃庖刀で切つて掛る、お勘も匕首を拔き、兩人立廻りちよつとあつて、よき見得より誂への合方双盤にて兩人立上り、石塔獄門臺を遣ひ、立廻りよろしくあつて、トお勘短刀を打ち落され、たぢ／＼となりどうと下に居る、吉三庖刀を振上げ切らうとする。此時上手藪を押分け以前の勘次、小短き竹槍を持ち窺ひ出で吉三の足を突く、是れにてたぢ／＼となり、どうとなる。お勘短刀を拾ひ立ち掛る、吉三も足の痛き思入にて立廻る内勘次を切下げる、後からお勘吉三を切る、双方糊紅になり、吉三勘次の上へ腰を掛け思入。

やれ、待つてくれ、これお勘。

お勘　えゝ卑怯な事を。

吉三　どうで手前の手に掛り、死なにやあならねえおれが體。

お勘　や。

吉三　昨夜兄貴を殺したも、親兄弟を助けん爲、まあ一通り聞いてくりやれ。

お勘　何と。（ト竹笛入りの合方になり、吉三苦しき思入、お勘捨石へ腰を掛ける。）

吉三　鎌倉十里追放に旅へ出掛ける路用に困り、通り掛つた本郷の八百屋の家へ忍び込み、盜みを仕よ

うと思ふうち、主人が娘に身の上話し切ない譯の一部始終、聞いてびつくり二十四年知らずに暮らした實の親、釜屋武兵衛に百兩借りた金の切羽に妹と親が、死ぬると聞いて助けたく、釜屋の家とも知らずして二階の窓から忍び入り、首尾よく百兩盗み取り、出合頭に手前に逢ひ、話す其内後から聲掛けられてびつくりなし、飛降りる時落した金を通り合した辨秀が拾つて駈出す跡を附け、やつとの事でどんくの、小橋の際で追附いて、親兄弟の命をば助ける金ゆゑ返してくれろと、手を合せ頼んだおれの額へ疵。其百兩を返さぬから、是非なく手籠に辨秀を締殺したも親の爲、其甲斐もなく其金をごもくの中へ投り込れ、望みも叶はず剩せえ妹が櫓の太鼓を打ち、咎めを着たといふ噂、是れまで手前の縁により恩にもなつた辨秀を、慾に迷つて殺しやあしねえ、親の命が取り留めたく、そればつかりに殺したのだ。

お勘　左程に親や兄弟を、思ふ心で何で又、連添ふ女房を邪險にも爰へ連出し殺すのだ。

吉三　殺す心はさらくねえ、敵同士になつたゆゑ旅に行くのを斷りに尋ねて行つて思はずも、小堀の家の寶を見て、心替りは妹が、縁に繫がる左門さま、世に出し度いと思つたが、遺恨で盗んだ寶ゆゑ、所詮たゞぢやあ渡すめえから、殺して取つた其上で、おれも死ぬ氣でした事だ。

お勘　さういふ心と知らぬゆゑ、兄の敵を討たうと思ひ、連添ふ亭主を切つたからは、わたしも生きち

勘次　やあ居られねえ。（ト お勘死なうとする、勘次起上り、）

お勘　どつこい、おぬしは殺させねえ。（ト 抱き留めるを、）

勘次　入らざる邪魔をしやあがるな。

ト ちよつと立廻つて勘次の胸を突く、これにてアツと言つて倒れる、お勘直に刃を喉へ突込む。

お勘　やゝ、こりやお勘には自害したか。（ト 又竹笛入りの合方になり、）

吉三　お前が誠の心を聞いて、どうまあ生きて居られよう、非業に死ぬのも惡事の報い、兄貴は元より又今夜、お前もわたしも龍左衞門が首の前で死ぬといふは、非道に責めたお杉が恨み、曲つたわたしの根性から小堀の家を立てさせめえと、盜み隱した眠虎の印もお前の妹が言ひ交せば、わたしも繋がる緣の端、左門樣へ此印をお渡し申して下さんせ。（ト 小箱の印を出す。）

お勘　いつそ初手から何もかも包み隱さず言つたなら、斯ういふ事にもなるめえに、今更言つても返らぬ事だ。（ト 吉三思入、爰へ非人の一、二出て、）

吉三　其寶をば。（ト 取りに掛るを吉三は非人の一、お勘は非人の二を捕へ、ちよつと立廻つて、）

兩人　斯ういふ事に成行くも、みんな互ひの惡事の報い。（ト 非人の二を引附ける。）

お勘　思へば昨夜旅立の、約束したは前表か。（ト 立廻つて投退け、）

吉三

お勘　明日は二人が冥土の旅、
吉三　行先き長い六道の、
お勘　辻駕籠かつぐ牛頭馬頭に、
吉三　かさなる罪の重さ増し、
お勘　急ぐ泊りも十萬億土、
吉三　其道中の振出しか、
お勘　乘り出す駒の、
吉三　鈴ケ森、
お勘　爰で死ぬのは、
吉三　約束事で、（ト此内兩人を相手に立廻り、此時左右へ投退け、）
兩人　あつたよなあ。（ト兩人苦痛の思入あつて、）
吉三　折角手に入る眠虎の印、此深手では左門樣へ、お届け申す事がならぬ。
　　　ト此時忠左衞門三幕目のこしらへにて出で、
忠左　其印身共がお届け申さう。

吉三　や、さういふあなたは。
忠左　以前は小堀の家老職、吉田忠左衞門と申すものぢや。
お勘　ほんにあなたは、吉田樣。
吉三　御家老樣とあるからは、あなたへ是れを。（ト印を出す、忠左衞門開き見て、）
忠左　ほゝお、疑ひもなき眠虎の印、計らず手に入る上からは、小堀の家は萬代不易。
吉三　左門樣が御家督に、なるに附いても不便なは。
お勘　お前の妹のお七さん。（ト非人起上り、）
非一　櫓の太鼓を打つたからは、鎌倉中を引廻し、
非二　鈴ケ森で仕置に逢ふのだ。
忠左　其大罪も仁田殿の、情によつて十五と極り、お七は助命になつたるぞ。
吉三　すりや命が、助かりましたか。
吉三
お勘　えゝ、有難い。
忠左　まつた吉三が心を籠めし、其百兩も御家の舊臣、土左衞門傳吉の手に入つて、八百屋の難儀を救ひしも、仁心深き仁田殿の、計らひゆゑに役に立ちしぞ。

吉三　あゝ何から何まで。
兩人　えゝ忝けない。（ト本釣鐘を打込む。兩人苦痛の思入にて）
吉三　最早近づく、
お勘　此身の知死期。
非人兩人　わいらは滅多に。（ト掛るを忠左衞門引付け）
忠左　跡氣遣はずと。（ト左右へ投退けるを木の頭）往生しやれ。
ト吉三お勘につたりと思入あつて落入る。波の音、本釣鐘の寺鐘にてよろしく、
ひやうし　幕

小堀政談（終り）

樟紀流花見幕張

丸橋をかけ渡す堀端におぼろ夜の空生醉。徒黨の胸を鐵石ときたふ道檀山に晝夜の會合。谷五郎が隣は千葉の作左衛門娘の聟に鳥目の良藥。一味に加へ誠志を明して三所に沸立つ鼎が計策。初藏が便有馬の松に柵む湯女の小藤に心を亂。會盟の誓を破りしは密書にあらぬ八右衛門が本心顯し。藤四郎は二張の弓師訴人の矢先に圍爐裏の炎へ打込連狀。さゝへる捕手をハッと蹴上る毬ヶ瀬が妻のさそく。民部之輔が獨へ樂い朝茶の湯ゆげに大望の露顯をさとる。太平記の小說を曾我の訥芝玉後日狂言のさかえ。

旭朗　敷詰　彩毛氈

「慶安太平記」は明治三年三月、五十五歳の折、守田座に稿下された。先代左團次の出世藝として傳へられてゐる所の「丸橋忠彌」を含んでゐる作で、由井正雪事件を劇化したものである。左團次の忠彌が大評判であつたとか、仲藏の藤四郎がよかつたとか、訥升の伊豆守が如何にも伊豆樣らしい殿樣であつたとか、さま〴〵の世間に聞えてゐる逸話がある。忠彌の立廻りは文久二年守田座にて故人市川市藏が宮本武藏を勤め、風呂場より藪だゝみの大立廻りをなし喝采を博したりしを應用し、成功したものであつたとは年代記の語る所である。

書卸された時には、人名を憚つて由井正雪が宇治常悦、丸橋忠彌が鞠ヶ瀬秋夜、松平伊豆守が音川修理之介勝元、弓師藤四郎が宗四郎などとなつてゐたが、二度目の上演の明治八年五月河原崎座に上場された時には、本名通りになつてゐた。從つて主なる役名だけは通りのいゝやうにしておいた。近來上場される場合には鞍馬山の谷間とか道灌山の會合とかいふ場面が添へられることがあるが、これは明治十六年七月新富座で「花菖蒲慶安實記」の名題で上演された時增補されたものである。

書卸しの時の役割は、中村芝翫（正雪、正成の靈、增田八右衞門）澤村訥升（金井谷五郎、伊豆ノ守）岩井紫若（藤枝、撫子姫の靈、小藤）中村仲藏（九郎兵衞、作左衞門、藤四郎）市川左團次（忠彌、大竹初藏）澤村其答（千葉の下女お杉、湯女おむら、忠彌女房おせつ）尾上多賀之丞（作左衞門娘お梅、新六妹おもと、湯女おせん）市川子團次（高安繁次郎）中村翫太郎（僧快憚）中村雁八（澁川鄕藏）坂東太郎（森宗意軒）關歌助（高安主膳）岩井粂松（忠彌母おさが）等であつた。

挿繪にしたのは國周筆の錦繪である。

大正十四年六月

校訂者



樟紀流花見幕張（慶安太平記――七幕）

序幕

河内國壺井観音開帳の場
同　高井田入谷田圃の湯
同　平岡森頼信古廟の場

〔役名――金井谷五郎、大竹村藏、高安繁次郎、澁川郷兵衛、船橋丹吾、飯盛專平、元吉新八、若黨佐吾平、見世物師喜太六、下部栗平、茶屋の亭主才六、金貸婆およく、三ツ目壽之介、高安主膳、由井正雪。楠の息女撫子姫の靈、高安の腰元おとり、同じくおえん、元吉姉おもと、楊枝屋娘おりせ。〕

（河内壺井観音開帳の場）――本舞臺正面奥へ入れて仁王門、左右に櫻の立木、向う遠見に本堂、萬字の幕を打廻し、大塔婆に縁の綱を結びて開帳の體、此の前上寄りに二十軒の心の茶見世、掛行燈、常燈明の木燈籠、惣銅壺の茶道具を飾り、床几三脚並べあり、下の方門の側へ寄せて常足一間の楊枝店、軒に酒中花の額看板、正面品々を並べ、前に床几鳩の豆を並べ、是れより下黑御簾の前、見世物小家三ツ目娘の看板、眞中木戸口、上手の床几に澁川郷兵衛、大小袴自墮落なるこしらへ、船橋丹吾大小着流し片肌脱ぎ、飯盛專平同じく大小にて花魁の赤鬘を掛け、下部栗平中間にて櫻の枝へ二升樽を結びたるを持ち、何れも醉ひたるこなし、才六茶屋男にて茶を運び居る、下手に若い衆參詣の仕出し、〇△□等立掛り居る、總て河内の國壺井観音境内の體。雙盤の音にて賑かに幕明く。

△　さうよなあ、おれが生れた年だ。
□　それぢやあ八十年にもなるだらう。
○　いやおどけはおいて、二十六七年も後だらうから、此の開帳は大當りだ。
栗平　おい〳〵若い衆、大當りの芝居とは三丁目か。
三人　え、へい。（ト氣味惡きこなし。）
丹吾　何だ〳〵びく〳〵するなえ、四角四面なお武家樣だわ。
鄕兵　これ〳〵其方どもの風體では、なか〳〵見物することがなるまい、我々が供をいたして參れ、棧敷へ入れて立派に見物させて遣はす。
專平　と思つたら目が覺めた。
才六　さ、櫻のお湯を上げませう。（ト若い衆へ出す。）
△　なに、わたし等にかえ。
專平　目覺しだ、たんと呑みねえ、錢はそつちで拂ふのだ。
□○　はゝ、御馳走でござります。（ト床几へ腰を掛ける、此の時上手にておよくの聲にて）
よく　そんなふゝて勝手を聞いちやあ居られねえ。

喜太　どうとも勝手にしやあがれ。
　　ト矢張り雙盤にて喜太六見世物師のこしらへにて、手拭を深く冠りし振袖の毒之介の手を引き足早に出來る、およく高利貸婆あの裝にて爭ひながら、皆々の前を通り眞中へ來る。
よく　なに、勝手にしろ、いゝわ、腹癒せに此の餓鬼を連れて行くわ。
喜太　べらぼうめ、魔術の太夫を遣つてなるものか。
よく　何だ、こんな不具を、（ト毒之介の手を取り引立に掛るを、毒之介喰附く）あいたゝゝゝゝ。くれえ附きやあがつた。
　　ト打ちにかゝる、若い衆、栗平これを取押へ、毒之介顏を隱せし手拭を取ると、ひつ詰島田前掛けに赤い切をかけし三ツ眼にて、
毒之　やい、おれが事を不具だとぬかしやあがつたな、さういふうぬが面は何だ。
喜太　さうだ〳〵、額に筋を出して目ばかりきよろ〳〵して居やあがらあ、喰えものに飢ゑた狼のやうなざまだ。
よく　いや狼でも化物でも、貸金の抵當に此の三つ目を、連れて行かにやあならねえ。
鄕兵　こりや〳〵町人、控へろ。

栗平　御前が控へろと御意なさる、靜まれ〳〵。(ト これにて別れる。)

丹吾　いつてえこりやどうしたといふのだ。(ト 此の内專平居睡をして居たが目を擦り、)

專平　待てよ、いつてい爰は何處だ。

才六　觀音の地内でござります。

專平　觀音の地内なら鳩に鷄でありさうなものが、狼に三つ眼が居さうもないものだ。

鄕兵　いや、まて、身共が理非明白に捌いて遣はさう、皆々罷り出ろ。(ト 幅廣の机の上へ畏まり、)雙方共に面を上げろ。(ト これにて不承々々に控へる。)

栗平　さあ〳〵、それへ出ろ〳〵。

鄕兵　成程三つ目に相違ない、年は幾つに相成る。

喜太　へい脊は低うございますが、年は二十五になります。

毒之　噓をつきねえな、おらあ子供だわな。

丹吾　僞りを申すか、そんな大きな頭の子供があるものか。

鄕兵　これ〳〵右大將々々、左なのたまふな、まさか貴殿の程大きくもない。然し、それが日はこしらへものか。

よく　いえなに、餓鬼の癖に色氣がつきまして、此のごろ安ものを買つて横根をふみ出し、到頭引つ込まして、其の藥を買ひたいと申しますから、私が金を貸して遣りました。

喜太　それからお前さん、一旦に上へ毒が廻りまして額へ穴があきましたが、段々癒え口になりましたから、玉眼をこしらへて間へ狹みましたら、其のまんまに直りましたから。

鄕兵　あゝ、それで見世物に出したのか、名は何と申す。

喜太　へい毒の深い餓鬼ゆゑ、毒之介と申します。

丹吾　何、毒之介、あゝどうせどくな奴にはなるまい。

專平　いや〱右大將、お手前なども額はお手廣だから、眞中へ眼をこしらへても、まだ〱餘程空地がござる。

鄕兵　外の空地へは桑と茶を植ゑ付けるつもり。

丹吾　えゝ、やかましいわえ。

才六　おい〱お前方、此の群集の參詣だ、見世物を明けて、見物を入れるが肝腎ぢやあござらぬか。

△　とりわけ田舍の參詣も多いから、

□　ずつしり取上がるだらう。

○貸し借りも錢を取つた上のこと。
よく　へい、お前方もさう言つておくんなさることゆゑ。
喜太　元々心安だてゝ言ひ募りましたのでござります。
栗平　さあ〳〵、一つ〆てくれ〳〵。
皆々　やア、よい〳〵〳〵。
喜太　どれ、見世物を明けませう。
よく　おれも手傳つてやるべい。
仕出　どれ、お參りをして來ようか。
ト辻打になり、喜太六、毒之介は見世物小家、仕出は正面へはひる。
郷兵　それはさうと片山から來た手紙に、元吉兄弟が今日開帳參りに出掛けるから、喧嘩を仕掛けてくれろとの頼み。
丹吾　それは先頃元吉新左衞門に恥しめられた遺恨を、こちと等に頼むのだ。
專平　いゝ事は不得手だが、そんな事なら持つて來いだから、向島の方から氣を附けて來たが、見當らねえ。

栗平　何々、女連れだからやう／＼參詣したぐれえであらう。
郷兵　何にしろ氣を附けて、奥山の方をのたくつて見よう。
丹吾　やあい、打ッくらはせろ／＼。
專平　おい兄い、とつさん茶代は戻りだぜ。
才六　へゝゝゝゝ。
郷兵　さあ來やれ／＼。
　ト三味線入り大拍子になり皆々正面へはひる。此の鳴物を借りて花道より高安主膳、總髪、羽織、大小袴にて杖を突き、後より佐吾平着流し若黨の裝、一本差しにて附添ひ出ろ、少し隔てゝおとり腰元の裝袱紗包みを持ち、あとよりおりせ楊枝見世の女のこしらへにて、小風呂敷包みを提げて出來り。
りせ　好い所でお目に掛りました、お上では何方も御機嫌ようい らつしやりまするか。
とり　ます／＼御繁昌でござります。（ト言ひながらおりせ主膳に指をさす、おとり思入あつて、）おゝ、ほんに旦那樣、佐五平どの。
佐吾　旦那樣、おとりどのが參りました。
主膳　なに、とりが、おゝそちは孃が代參にか。

とり　左樣でござります、あなた樣は入江に御用があるやうに承はりましたが。

主膳　さればさ、旁々の約束ゆゑ正午の茶の湯に參りし所、俄に內儀に產の氣がついたと申して家內が騷ぎ立て、茶の湯どころでもなく戾つて、序と申すも勿體ないが、參詣に參つたのぢや。

とり　何にせい、御出產とはお目度度い事でござります。あなたに昨年まで御奉公をいたしてをりました、りせでござります。

主膳　なに、りせ、おゝ何時も健かで目出度い。

りせ　途中で御挨拶申し上げるも失禮、

主膳　おゝ、向うの茶見世へ、

とり　さあ、お供いたすでござりませう。（ト三人舞臺へ來り、）

才六　これは高安の旦那樣、よう御參詣遊ばしました。

主膳　いつも繁昌で好いの。

才六　有難う存じまする、さあお一つ召上がりませ。（ト皆々へ茶を運ぶ。）

主膳　たしか今日は娘が滿願ではないか、それなれば參詣いたせばよいに。

とり　そのお支度でござりましたが、お眼は御願掛けで御全快でござりますが、又夜前からお風氣で、

それゆゑ御延引になりました。

主膳　どうも弱いには困りきるて、はゝゝゝ。ときに、りせは今何れに。

りせ　はい、只今おとりどのに承はりました、お上にはお揃ひ遊ばして御健勝との事、何よりお目出度う存じまする、私は只今この近所に母を養ひますに稼ぎがござりませぬゆゑ、向うへ楊枝見世を出しまして、女子だてらに商ひをいたしまする。

とり　親一人子一人ゆゑ、御奉公がならぬには困らうなう。

りせ　察して下さりませ。常のお客はよけれども、微醉のお方などがわたくしのやうな者までも、なぶるには困りますわいなあ。

才六　いやもう、只今わたくし共の見世へ、お武家か御浪人か存じませぬが、大そうお醉なすつて喧嘩を仕掛けて困り切りました。

主膳　とりは斯様いたせ、滿願の目錄を佐吾平に渡し、是れを連れて先へ參詣いたして戻るがよい。

とり　それでもあなたお一人で、

主膳　いや／＼おれは一人で苦しうない、そちは女子のこと、この節物騷ぢやと申すこと、隨分急いで戻つたがよいぞ。

とり　畏まりました。

主膳　手前は暫く足を休め、暮方までには戻るであらう。これ、りせ、戻りに楊枝を調へようが、そちの見世は。

りせ　はて、あれでござります。

主膳　おゝ向うか、承知いたした。

りせ　おとりどのには、お上へお言傳をお願ひ申さねばならぬゆゑ、つい其處等まで御一緒に。

とり　ほんにさうなさんせ。左樣ならば旦那樣。どれ、お參り申して參じませう。

トおとりに佐吾平、おりせ附いて奥へはひる。と花道より元吉新八羽織大小、おもと屋敷風振袖衣裳、おえん腰元の裝にて袱紗包みを持ち、青日傘をさし掛け附添ひ出で、

えん　御覽遊ばしませ、向島よりこなたの櫻は、眞盛りでござりますわいなあ。

もと　ほんに奥山は、美しい事であるわいな。

新八　京地なども清水觀音の地主の櫻、東にも金龍山に大木の櫻を植附け、貴賤群集いたすとのこと、斯かる靈地には櫻が相應いたすと相見えます。

もと　何は兎もあれ、向うの見世へ。

えん　さあ、いらつしやりませ。（ト三人舞臺へ來て床几へかける。）
才六　これはよう御參詣遊ばしました。
主膳　今日はよい日和にござる。手前は出舟でござれば、此の床几にお掛けなされい。
新八　いや〳〵これにて苦しうござらぬ、先づ御ゆるりと、
主膳　最前より餘程休息仕つりました、是れより參詣いたして參るでござらう。さゝ、是れへ。
才六　左樣なら旦那樣。
主膳　世話であつた。お客、是れへ。（ト奧へはひる。）
もと　あのお方さまは、どうやらお見掛け申したやうな、何でも賑しい所で。
えん　おゝ思ひ出しました、去年道明寺のお開帳の節、お駕籠で入らつしたお方でござります。
新八　いやなに、亭主今のお武家は、
才六　へい、高安の旦那樣でござります。
新八　あゝ左樣か、高安郡にて高安と、たしか名乘つてござる鄕士、殊更馬は大坪、劍術は直神影流の達人との事、最早七十有餘の體なれど健かな事ぢやなあ。
もと　その時あとより女中のお連れがござんしたが、たしかあなたのお娘御とやら。

えん　左樣でござりまする。お名はおふぢさまとやら、御子息樣は繁次郎さまとか承はりましたわいなあ。

もと　ようお名前まで覺えてゐやつたなう。

えん　お二方ながら好い御器量ゆゑ、うつかりお名を覺えましたわいなあ。おほゝゝゝ。

才六　さゝ、も一つ召上りませ。

　ト茶を出す。名古屋名物の唄、大拍子になり、奥より鄕兵衞、丹吾、專平、栗平出來り、鄕兵衞新八の方へ目を附け、皆へ目配せする、これにて、

丹吾　亭主々々、只今御歸館なされた。

專平　ヨウ是れはお客來、留守にいたして失禮千萬。

栗平　しつかり御馳走しにやあならねえ。

　トこれにておもとは氣味惡きこなし、

新八　いや、嘸船頭が待ち兼ねて居らう。さ、參詣の致して參らう。

鄕兵　まゝゝゝ。（ト新八を留める。）

丹吾　怖ろしい、まゝアだな。

專平　べらぼうめ、御酒も上らぬうち、まんまが喰はれるものかえ。
もと　おえんや參詣申して來ようわいなう。（ト立ちかゝるを、）
鄕兵　やあ御息女、御新造、奥方、お待ち下され。手前ども、帶刀いたしをれば、粗忽な事は仕らぬ。
丹吾　袖振り逢ふも他生の緣、酒呑み合ふも茶屋の緣と申せば、何も逃げさつしやるには、及ぶまいではないか。
新八　いえ、逃げも隱れも仕らぬが、外に連れもござつて船に待合せて居りますれば。
專平　さあ、そこもあるが、ふたもある、後もある。やい／＼折助、つげ／＼。（ト茶碗を出す。栗平つぐを呑みほし、）もしえ、思ひ差しざます。お手前一つ上んなましよ、よ。（ト新八の前へ出す。）
新八　これは千萬忝けなうござるが、手前いつするもくださらねば。
鄕兵　いや、お手前さまが召上らずば御新造さまへ、失禮ながらけんじ天皇かきの種ではない、何の種か、べらぼうに美しい畜生め。
新八　これは手前の姉でござるが、姉弟共に一雫も下さることが相成らねば、平に御免下されい。
栗平　親分、狐拳でいくがようござらあ。
新八　これは又御無體。

郷兵　何が無體でござる、お手前も武士ならわれ〳〵も武士でござる。すは戰場に向つて狐拳はいやの槍薙刀の勝負は嫌ひのと言つて居られうか、扨又亂軍に及んだ日には軍令に拘らず、斯樣に組打ちをいたして、（トおもとの手を取り、）かうして、（ト引寄せようとするを、おえん引分け、）

えん　そりや、あなた方御無體と申すもの、こゝお放しなされませいなあ。

新八　酒興と申せど、餘りと云へば。（ト引き退けるを、郷兵衞わざと床几の後へ倒れ、）

郷兵　あいたゝゝゝ、人殺し〳〵。

丹吾　やあ飛でもねえ目に逢はしやあがつたな。

專平　なぜおらが連を投げやあがつた。

栗平　高え酒を呑ませようといふに、厭なら厭で濟むことだ。

丹吾　なぜ理不盡に、

皆々　投げたのだ。

ト此の時分よりおりせ先きに主膳出で、直ぐに下手の床几へ掛ける。おりせ二重へ上り煙草盆を出し、あたりの袋へ房楊枝を入れ、外品々を取る、主膳扇にて指圖をする。

えん　是れは又あなた方、私共の旦那樣が左樣な荒々しい事を、何でなされませう。

新八　餘程の御酩酊ゆゑ、御自身で床几より落ちられたのでござる、あの茶屋の亭主も一伍一什を。
才六　私が證據人でござりまする。是れはあなたの御粗相でお轉びなすつたのでござります。
丹吾　何だ此の爺いめ、うぬが出る幕ぢやねえ、樂屋へ行つて居やあがれ。
鄕兵　あゝ苦しい〳〵、やう〳〵人心地になつた、いやさて〳〵お手の內驚きいつた、われ〳〵柔術の免許は取つてござるがなか〳〵及ばぬ事だ、何れの御藩中か御姓名も承はり、以後御別懇に相成りたい。しかしお若い形で、半元服の女中御同道は好からぬことだ。
專平　さうだ〳〵、觀音へ參るなら、七八十のお婆を連れて來るものだ。
栗平　なぜ〳〵。
專平　お婆へこ〳〵觀音參り。
丹吾　えゝ肝腎の掛合、だまらつせえ、交つ返しやあがるな。
鄕兵　さ、御姓名をお名乘り下されい、斯く數萬の參詣人が見る前で投げられて、この儘に濟まさうと思はつしやるか、斯く同志の者でござれど、決して手出しは致させぬ、一騎打の勝負を遂げませう。さ、お支度なされい。
丹吾　ヨウ〳〵親玉、しつかりとしませうぞ。

新八　何程に仰せられようと、其許方へ對し慮外した覺えはねえけれど、元よりお相手になるべきやうもなく、殊更柔弱非力の某、御立腹ならば幾重にも御高免の程願ひ上まする、御免下されい〳〵。

鄕兵　いや〳〵、いくら詫びてもあやまつても、勝負しにやあおかぬ。

丹吾　おんなじ事なら、强えことを云つて切られる方が得だ。

栗平　是れを肴に一つ召し上がらう。

丹吾　待て〳〵おれが毒味をしてやるべえ。（ト樽より茶碗にうつし呑む）

鄕兵　さ、立合はつせえ〳〵。さ拔かねえか、此の刀は何の爲に差してござる。

　ト立ちかゝり足にて柄を蹴る、此のうち主膳前へ出で、

主膳　あゝいや暫くお待ち下されい、最前よりの樣子は豫じめ承知いたした、手前事は高安の鄕士主膳と申す者、元より根葉のござつても、靈場穢すも無益と御挨拶申す、雙方共に手前に免じ御料簡の上、お歸り下されい。

鄕兵　音に聞えた劒術の達人、高安主膳殿とはお手前でござつたか。

丹吾　何だ、高えの安いのと白癡が蝦じやこを買やあしめえし。

專平　面白い、達人なら其の爺いと此方等が立合はう。

主膳　雙方無難に濟まさうと扱ひにはひりしが、方量もなき傍若無人、望みとあらば立合つて遣はさう。

ト羽織の紐を解きかける、新八分けてはひり、

新八　あゝいや暫く、元の起りは某、われ〳〵故に御老體に、お怪我ばしあつては相濟まぬ。

りせ　旦那樣お危うござります。

主膳　あゝいや〳〵年寄つたれど、何の彼等の五人十人。

栗平　大そうな事を吐かしやがるな。

四人　さ、相手にならう〳〵。（ト立ち上る、此の時花道の揚幕にて）

初藏　何れも待つた、其の相手只今それへ。

四人　どうしたと。

ト早めたる大拍子になり、大竹初藏深編笠、黑羽二重着流し大小にて足早に出で、直ぐ舞臺へ來て下手へ立つ。

鄕兵　何だ〳〵、こつちの喧嘩を買つて出た、

丹吾　相手を見りやあ痩浪人、一文二文の御厚情で、

專平　命を繫ぐ身を持つて、相手にならうも氣が强えわえ。

初藏　さ、それゆゑ命を捨小舟、行方渚に寄邊なき流れ渡りの身に飽き果て、刀の手前各々の相手になつて相果てなば、浪人ながらも武士の本懐、御不足ながら、いざ、お立合ひ下されい。

鄕兵　やあ、しやらくせえ一文貰ひ、

丹吾　戲言吐かずと其の蓮ッ葉を、

ト雙方より編笠へ手を掛けるを、ちよつと立廻つて投げ退ける、これにて程よく編笠脫ける。

主膳　やあ、そちや大竹初藏ならずや。

りせ　ほんにあなたは、

初藏　一別以來、先生御健勝の體を拜し、祝着至極。

丹吾
栗平　うぬを斯うして。（ト又掛るを手早く當てゝ投げ返す。）

主膳　ふむ、今に始めぬ其の手の內。

初藏　斯く流浪の元はと申せば、生兵法に朋友をあやめ、先生の御勘當受けてより五畿七道を漂泊なし修業に油斷は仕らねど、元より未熟無骨の某。

鄕兵　はあ、扨は老耄はうぬが師匠か。

丹吾　面白え、片ッ端から疊んでしまへ。

初藏　何を。

ト雙盤のせめになり、四人主膳初藏へ切つて掛る。新八おもとおえんを圍ふ、才六おりせ下手へ來て顫へて居る、此の内立廻つて主膳上手に郷兵衞を押へる、下手に此の内初藏栗平を投げ返し郷兵衞を引据ゑる、專平丹吾白刃を振り上げるを、郷兵衞の手を持ち添へ青眼に突き附ける。

主膳　殺すも無益、かねて教へし遠霞。

初藏　はッ。

ト郷兵衞を引つ立て突廻す、是れにて丹吾栗平順送りに廻る、此の途端に栗平すつくと立つを、初藏嚴しく當てる、四人わつと苦しみ、一時にぽんと轉る。

主膳　見事。

四人　あいたゝゝゝゝ。(ト苦しむ、才六おりせ嬉しき思入。茶を汲んで兩人へ出す。)

郷兵　君子は危きに近寄らずだ。

丹吾　肋骨が足りなくなつた。

專平　初手から足りねえところを。

栗平　どうでもいゝ、早く〳〵。

郷兵　おれが刀がそこらに。
丹吾　えゝ、それどころではねえ。
專平　今に出直して來るから、待つて居やあがれ。
四人　弱蟲やァい。(ト下手へ逃げてはひる、新八おもと前へ出て、)
新八　われ〳〵が身分より事起り、御兩所に測らざる御苦勞を掛け、何とお禮の申し上げやうもござらぬ。
もと　如何成り行くことかと、わたくしもえんも今に痞が、
主膳　御尤も至極、憎い者共、筋骨拔いてもよけれども群集の妨げ見世の難儀、こなた達を思ひやり見のがして遣はした、あれにて少しは懲りるでござらう。
初藏　人の難儀は我が幸ひと、思ひ掛けない所へ參り、測らず師匠の御勘氣御赦免、えゝ有難う存じまする。
新八　只今あれにて承はれば聞き及びし御姓名、大竹氏とは、もしや大阪方の御浪人。(ト思入にて言ふ。)
初藏　如何にも、大竹初之進が忰、初藏と申す者。
もと　そんならあなたは父上の、常々お噂なされたる、初之進様の御子息でござりますとか。

新八　思ひ掛けなき不思議の對面、某の父新八郎は其許の御親父初之進殿とは無二の朋友との物語り。
主膳　さゝ、それほどの懇親も應永の亂より、父子兄弟も東西と隔たり、音信不通に過ぐる時節。
初藏　最早泰平に治まれば、いつぞは以前の朋友を尋ねんと、心にかゝる折も折。
もと　測らずこれにて大竹樣の御子息樣と、
えん　お名乘り遊ばし、御對面なされしも御佛のお引合せ、
新八　殊更非力の某が難儀を、高安氏のお救ひ下され、
初藏　無難に事のをさまりしも、
主膳　これぞ觀音妙智力。
才六りせ　えゝ有難い。お禮參りに。(ト後へはひる。)
もと　御兩所樣へは何とお禮を、
新八　何れ近日、參上いたしまする。
主膳　何のお禮に及ぶこと、然し以後は御別懇に。
えん　最早夕方、御兩所さま、
新八　お別れ申すでござりませう。

主膳　しかし途中に今の輩が、

初藏　あゝいや道まで拙者が、お送り申さん。

新八　それは千萬。然し餘りと申せば。

主膳　いや／＼、足弱連ゆゑ御遠慮なく。

新八　左樣ござらば。

初藏　さゝ、御同道仕るでござりませう。

ト唄になり、三人を先きに初藏附いて花道へはひる。主膳あたりを見て鄉兵衞の刀に心附き、

主膳　何ぢや、狼狽まはつて白刃を捨て行き居つた、えゝ往來の妨げ、こゝらに鞘が、おゝあつた／＼、斯樣いたしておけば、明日にも搜し參るであらう。（ト鞘を拾ひ刀を納めて、）腰に帶刀たばさみながら、足弱連と侮り、强請騙りの傍若無人、天の冥罰遠からぬうち彼等が身體の寂滅爲樂、（ト此の時入相を打ち込む）。明日ありと思ふ心の仇櫻、夜るは嵐の、（ト行きかけて雪駄の鼻緒切れしを見て）おお、鼻緒が切れたか、ふむ。

ト思案のこなし床几へ掛る、此の仕組よろしく道具廻る。

（同　高井田入谷中田圃の場）——本舞臺上寄りに柵矢來、下の方に藁葺吹拔きの地藏堂、後左右一面

の藪疊、此の間に竹を植ゑ、所々に松の立木、半月を引出し、總て高井田中田圃の體。爰に鄕兵衞、丹吾、栗平、やはり以前の櫻に結びし二升樽を持ち立つて居る。時の鐘、禪の勤めにてよろしく道具なさまる。

丹吾　とんでもねえ災難に出會すものだ。

鄕兵　いくら劍術が達者でも高が老耄、怖くはなかつたが、

栗平　それ〳〵、あの初藏とかいふ浪人め、色氣のねえ力だ。

丹吾　おらあ當てられてから素敵に醉が出た。

鄕兵　べらぼうめ、おらあ醉が醒めた、彼奴等を待伏せをするにも、勢ひを附けにやあならねえ。

栗平　どうだえ、命から〴〵逃げるにも、酒は見のがさねえ。

鄕兵　そればつかり氣がきいた。

丹吾　斯くあらんと存じたゆゑ、茶見世の茶碗を二つあげて來た。

鄕兵　やあお手柄々々、さあ〳〵、まあ爰へぶツ坐れ。

栗平　又お酒盛か。

丹吾　こりや〳〵。

ト酒盛りになる。花道よりおよく下駄をはき毒之介の手を引き、喜太六縫包みを腰にさし出來る。

よく　おそろしい賑やかな開帳ではねえか。

喜太　一寸八分であんなに稼がつしやるに、大きな圖體して居て此のざまア何だ。

よく　ほんに、おらなざあ年が若いと夜鷹にでも出たら、暮しが附かうに。

毒之　おい小母さん、爰等へお前くれえな年の引張りが、いくらも出るぜ。

喜太　おれが妓夫をしてやるが、口を利くと年が知れるから、默つて居りやあいゝ。

よく　おや〳〵お前、腰へ何をさして居る。

喜太　不用心だから、侍と見せる爲に差して歸るのよ。待てよ、草履の鼻緒が、

トこゞむ、此の内郷兵衞酒を呑みて遠目にうかゞひ、小聲になり、

郷兵　これ〳〵、元吉が來た〳〵。

栗平　しかも女が二人だ。

丹吾　何でもあの二才を括しあげて、見てゐる前で念佛講をおッ始め。

郷兵　其の跡で弄り殺しにして遣らう。

栗平　靜かに〳〵。

喜太　高えくせに直きに切れやあがる。（ト舞臺へ來る。此の時月入る。）

よく　おや、暗くなつたわいな。

郷兵　先刻の返報。

喜太　わあ、人間違ひだ〳〵。

吾丹　何を吐かしやあがる、女を逃すな〳〵。

郷兵　二才を縛れ〳〵。

ト郷兵衞、毒之介およくの袖を捉へる、栗平丹吾喜太六を引き据ゑ、あたりの繩にて喜太六を括り手拭にて猿轡を掛ける。喜太六立廻るはずみに、下手の立木にて脾腹を打たれてどうと倒れる。

丹吾
栗平　何處だ〳〵、澁川どこだ。

郷平　え丶婦人が膽を潰さあ、荒々しく物を吐かすなえ。

丹吾　なんの、女に掛けては到つて優しい男だ、これ〳〵御兩人、袖は止めねど半元服はあの元吉、何とか云ふ人はお前の御亭主、（ト星明りにて窺ふ、毒之介頭を振る）あゝ、扨は實正同胞でござるか。（ト毒之介うな丶く。）澁川、同胞だとよ。

郷兵　それ聞いて安堵いたした。

栗平　時に祝言の心に、酒盛りとしようではないか。

丹吾　さゝ、婦人が呑んで、此方が頂戴するが式法だ。

ト茶碗をおよくと毒之介に持たせて、栗平酌をする。これにて兩人頻りに呑む。

郷兵　これ〳〵人が見たら、狐に化されたと思ふだらうな。

丹吾　いや狐といへば拳をして、一人勝ち一人負けで振袖を引受けよう。

郷兵　次に負けた者が、お腰元を占るのだな。

栗平　どうしても一人貧乏鬮があるな。

郷兵　はて、それには工風がある。まあやッつけよう。

三人　や、よい〳〵。

郷兵　そりや、それが振袖さまだ〳〵。

丹吾
栗平　や、よい〳〵〳〵。

栗平　やあ、おれが貧乏か、忌えましい。酒でも呑んで。おや〳〵お腰元は續け呑みか。ちつと頂戴々々。

ト取つて呑む。

郷兵　最前は酒興の餘り無禮を申した。然し男は當つて碎けろとやら、不思議なことが御縁となつて、

靑天井の三々九度。

丹吾　まつたく、友白髮まで此處に添伏しをして居ると申す譯ではない、我れ〳〵が宅へ伴ひ榮耀榮華をいたさすが、可愛がつてくれるであらうの。

郷兵　此のまあ、手先きのぼちや〳〵して居ることわえ。(ト兩人の間へ無理に割込まうとする。)

よく毒之　やあ、人殺しだ〳〵。(ト是れにて月出る。)

郷兵丹吾　やあ、化物だ。

毒之よく　逃げろ〳〵。

ト早めたろ禪の勤めになり、ゞよく毒之介上手へ逃げてはひる。栗平天窓からかぶる、郷兵衞丹吾は花道へ駈け出す、此途端ばた〳〵になり、花道より專平逸散に花道へ行かうとして突き當る。

郷兵　あいたゝゝゝ。

專平　えゝ、どいつだ、目を明いて歩きやあがれ。

丹吾　さういふ聲は、專平ぢやねえか。

專平　丹吾か。

郷兵　待て〳〵化物ぢやあねえか、よく〳〵見ろ。

專平　えゝ、何を言はつしやる、それ、斯ういふ顏だ。

鄕兵　あゝ、化物めいた面でもねえ。

專平　これさ、むだを言つて居る所でねえ、先刻の老耄が其處へ來る〳〵。

鄕兵　成程、高安の歸り道、爰に待伏せだまし打ちに。いや待てよ、おらあ刀を茶屋の前へおいて逃げて來た。

丹吾　いゝ思ひ付きがある。此方へ來さつせえ。（ト舞臺へ戻り）おゝある〳〵。（ト竹を切り取り專平に渡す。兩人は手早く枝を拂ひ竹槍をこしらへ）お手前も栗平も、此の藪に忍んでゐて、いゝ時分にぐつさり。

鄕兵　成程、相手は手利き、欺すに手なし。

專平　待て〳〵。（ト下手の地藏を倒して轉がし出し、よき所へ横に置き、）これから先きは、いつもの通り下水の水があぶれて雪駄では歩かれぬ、入江の際までお供をすると、

丹吾　後へ廻つて突き飛す、地藏に躓く、直ぐにばつさり。

栗平　おゝ、さういふ間に、それ其處へ。

ト四人こなしあつて、鄕兵衞栗平竹槍を持ち藪疊へ忍ぶ、丹吾地藏堂の蔭へはひる、專平不器用に手拭を冠り、およくが穿いて來た下駄を前に置き、坐つて刀を後にたばこを呑み居る。此の內花道よ

り以前の主膳杖を突き出で來り、

主膳　思はぬ事で暫時の暇取り、あゝ然し家來は持つべきもの、子飼より置きたる女子が楊枝店に居つたれば、草履の鼻緒を直してくれた、まさか自身にたてる事もならず。然し佐吾平とりを送り届けたりや、此の道へ迎ひに參る筈ぢやが、あゝ思ふやうにならぬものぢや、此の程は不用心と聞くに、ふむ。（トこなしあつて刀の目釘をしめし舞臺へ來る。）

專平　旦那さま〳〵。

主膳　身が事か。

專平　へい、上手が降りましたかして、此の法隆寺の下水から水を押上げまして、入江の邊までお草履では御歩行がなりませぬゆゑ、下駄をお貸し申しませうと存じて。

主膳　おゝ、いつもの下駄貸しか。

專平　へい、少々づゝのお錢を頂戴いたすも、稼ぎのうちでござります。

主膳　いやそれは幸ひであつた、もし其方が爰に居らずば、心附ずに陷る所であつた。それでは此の履物を。

專平　私が持ちまして、お供を致しまする。

主膳　代料は何程。

專平　いえなに。お志しでよろしうございます、まゝ入江の角へ參りまして。

主膳　左樣か、やれ／＼仕合せをいたした。

專平　お危うございます。お先きへ立つて、それ／＼其處を眞直に、

主膳　承知いたした。（ト地藏の際へ來ると、後より、）

丹吾　覺悟。

ト振上げる、主膳手早く拔きつれ身を躱す、專平打つて掛るを差添の柄にて止める、此時藪の上下より竹槍を突出し主膳を貫ぬく、是れにひるまずちよつと立廻る機に地藏へ躓く、鄕兵衞栗平窺ひ見て、

鄕兵　占めた／＼、どんな達人でも騙し討にはかなはねえ、然し丸腰になつてから手持無沙汰、困り切つた、此の老耄が刀だから慥かに業物、是れをおれが着服して。（ト腰へさす。）

丹吾　待て／＼懷中物は分け取りだ。（ト紙入を引出し、）餘程の重みだ。

專平　百錢ぢやあねえか。

丹吾　はゝあ、手前ぢやアあるめえし。

栗平　や、向うへ提灯が來る。

專平　どつちへ行かう。
郷兵　まあ〳〵藪へはひれ〳〵。
栗平　又やぶの綱か。
丹吾　えゝ、やいやぶ(ぼ)を言ふなえ。
　ト背中を叩き、丹吾專平は地藏堂の蔭、郷兵衞栗平は藪の中へ忍ぶ。此の内花道より佐吾平提灯を灯して先きに立ち、おとり附いて出來り。
とり　竝木のお買物で手間取つたゆゑ、きついう戻りが遲くなつたわいなあ。
佐吾　いつも繁昌の見世ゆゑ、待たせるには困ります。
とり　嘸、おふぢさまや繁次郎樣が、お待ちかねでござんせうわいなあ。
佐吾　さ、ちと急ぎませうか。(ト舞臺へ來る。)
とり　女子の足ゆゑ捗らぬので、嘸お前はもどかしう。(ト佐吾平死骸を見附け、)
佐吾　や、爰に誰やら。(ト提灯を出す、おとり見て、)
とり　親旦那樣。
佐吾　おゝ、慘たらしう、この深手。

とり　こりやまあどうしよう、何としませうぞいなあ。
佐吾　常々より御仁心にて、人に意趣をお受けなされう筈はない、是れはてつきり盗賊の仕業。
とり　その上數ケ所の深手の樣子、大勢仕組んで旦那樣を。
佐吾　まだ此の邊に屈み居らう。
　ト提灯を左の手にて差上げ地藏堂の下を覗く、專平堪りかね打つて掛るを身を躱し、拔打ちに專平を一刀切附ける。
專平　あいたゝゝゝ、人殺し〳〵。
　ト疵を押へて下手へ逃げてはひる。おとり落ちたる刀を拾ひ取る、丹吾窺ひ居て、
丹吾　覺悟〈ト此内鄕兵衞栗平出る、おとり心得、〉
とり　主人の敵。
　ト栗平をしたゝかに切下げる、此の内鄕兵衞丹吾佐吾平と立廻る、おとりは鄕兵衞へ打つて掛る、佐吾平丹吾と立廻り丹吾の刀を打落す、これにて堪りかね上手へ逃げる、鄕兵衞はおとり佐吾平と一寸立廻り、切立てられ、後じさりに上手へはひる。と時の鐘、合方になり、花道より初藏出來り。
初藏　ふむ、ありや太平寺の五ツの鐘、餘程夜が詰つたと相見える、垣内の宅まで月明りで戻らうと思

ひしが折悪い雲隠れ、歩きつけたる道ながら一寸も先きが見えぬは困つたことぢや。（ト舞臺へ來り、躓くに窺ひ見ようとして血糊に辷り、）やゝゝゝ正しく人が殺されて居ると見ゆる、斯樣な場所にあつて無實の難を着るも本意なし、急いで參らう。いや〱兩腰たばさみ、此の儘見捨て行くも本意でなし、あゝこれ燈火を欲しいものぢやが、おゝ向うへ誰やら參る樣子、あの灯にて見屆けくれん。それ〱、

ト矢張り時の鐘合方、烏笛になり、花道より高安繁次郎、若衆鬘袴大小の裝にて、手丸の弓張提灯を持ち足早に出來り、

繁次　月夜と申せど夥しき烏啼き、親人の歸りの遲いも心がゝり、殊には宵からの胸騷ぎ、あゝ何事なければ好いが、（ト舞臺へ來て、）やゝゝゝ、夥しい此の血汐。

初藏　それへお越しなされたお方、その提灯をちよつと拜借仕りたい。

繁次　手前も尋ぬる、（ト死骸を見て、）やあ、こりや親人。

初藏　おゝ、すりや主膳樣でござつたか。

繁次　こりや何者か、あゝ、扨は其方人違ひにて親人を討ちたるよな、包まず名乘つて勝負なせ。

ト提灯を下へ置き身構へする。

初藏　あゝいや繁次郎樣、手前でござる。
繁次　すりや親人を討ちたるは、父の勘當受け漂泊なせし大竹初藏、情を仇にて報いし重罪。さ、立上つて勝負なせ。
初藏　暫く、暫くお待ち下されい、最前壺井の茶店にてあぶれ者共先生を取卷き、既に刃傷にも及ぶべき所某見受け駈付けて、師匠のお手おろさるゝ迄もなく、右往左往へ投散らし測らず主膳樣にお目にかゝり、御勘當御赦免あつて、口論のもとたては元吉の御兄弟、夜道にかゝらば又も彼等が仇せんと某に仰付けられ、恙なく送り屆けて戻る闇黑、師匠と知らず躓きしが、何者たりとも見遁し參るは武士の本意でなしと立留まり、燈火を待ちし拙者が心底、いさゝか僞り申さうや、御賢慮下されい。
繁次　なにさま、始終を承はり疑ひは晴れ申した。ちえゝ口惜しい。してく其のあぶれ者の年恰好は。
初藏　某一々見屆けてござるが、血汐の樣子いまだ時たちし事にはあらず、爰等あたりに屈み居らんも測られず、御油斷あるな。（ト繁次郎提灯をさし上げる、初藏地藏堂の後を窺ひ、くゝられし喜太六を見附け。）おゝ、かしこに何者か縛められて居りまする。
繁次　どれ。（トつかくと行く。初藏縛を解き猿轡を取り捨て、前へ連れて出て）

初藏　こりや〳〵、其方は何者に括られしぞ、心靜かに樣子を申せ。

喜太　はい〳〵、私は見世物師でござります、最前仁王門の小屋から騷がしいゆゑ覗いて居りましたら、おゝさうだ、あなたが編笠でござつて、惡者共を投げられお若いお侍と女中方を此のお方のお賴みで送つてござる迄を見屆け、夜に入つて振袖を着た小僧と婆アを連れ爰へ戻つて來ましたら、慥かそのお侍や女中方と間違へ、私を縛つて强淫をなされうとした時月が出たゆゑ、三ツ目小僧の顏を見て逃出さつしやりましたが、其處へ此の旦那樣が通り掛り、騙討ちしになりなされましたのでござりますわいの。

初藏　おゝ其方の申すにて、一什一伍相分かつた。

繁次　ちえゝ、憎い奴輩。

喜太　もし〳〵其の上、頭立つた奴が、その旦那のお刀を取つて腰へさしました所へ、女中とお侍とござつて、其の二人に切り立てられ、逃げ失せましてござります。

繁次　女と申すは慥かに腰元とり、侍は佐五平と覺えたり。

初藏　彼等に逢へば、敵の行方知るゝ事もござらう。

繁次　何はともあれ、心逸れど今もつて拳も鈍き某なれば、多勢の敵を引受けては、

初藏　お氣遣ひなさるゝな、手前が爲にも師匠の怨敵、加勢何程あらうとも一人殘らずお討たせ申す。

喜太　何でも旦那樣、お刀を持つて居る奴が、音頭取でござります。

初藏　それを證據に、

繁次　日ならず本望。（ト此の時栗平息を吹き返し、よろぼひ起きて、）

栗平　よく酷い目に、

喜太　おゝ、そいつも同類、

初藏　敵の片われ。

繁次　ふむ。（ト突廻し、拔打ちに切り、轉す。）

初藏　天晴血祭り。

繁次　おのれ怨敵。

初藏　今にぞ思ひ、（ト起上がらうとする中間へ止めを刺す。）

兩人　知せてくれん。

ト繁次郎血を拭ふ、此の仕組よろしく寺鐘の送りにて、道具廻る。

（同　平岡ノ森賴信古廟の場）　—本舞臺上へ寄せて中足九尺の廟所、如何にも古びたる體、扉仕掛

にて開閉になること、上手杉の大樹、堂の下三本の大樹眞中橘の幹、これに洞ありて人の出はひりあり、上の方に頼信の墳、横に平岡村と記せし石の榜示杭、下の方は蘆間、この前沼を見せたる通しの土手板、よき所に腰掛心の岩臺、向う在體の遠見。半月を引出し東西の窓蓋をおろし、總て高安郡平岡の森夜の體よろしく、竹笛の入りたる本調子の合方にて道具納まる。と直ぐに花道より金井谷五郎武者修業の打扮にて、包みを背負ひ竹笠を持ち出來り、空を見上げ、

谷五　萬里の人みんなみに來り三春の雁北へ走ると、彼れは故郷へ空を急ぐ、我れはそれには引替て、身の納まりは何處とも限り知られぬ修業の旅。我れ本國を出づる時、普ねく六十餘州を巡り、奸惡非道のものあらば名乘り合せて討つて捨て、一國に一ケ所の首塚を築かん大願を立て、早西國は成就なし、これより東路へ下らんと思へども、未だ當地に塚を築かん便りもなし。おゝ月も西に傾けば宿りを求むるまでもなく、今宵も野宿といたさん。はて、氣散じな境涯ぢやなあ。

ト こなしあつて舞臺へ來り、岩臺に目をつけ思ひ入あつて腰を掛け、火打袋を出し火を打つ、此の時花道よりばた〳〵になり、おとり深手を負ひし體、血襦袢脫ぎかけ白刃を持ち走り出で、ちよつと後を振返り、舞臺へ走り來てどうとなる、谷五郎驚き、

ふむ。女だてらに白刃を振つて、見れば深手を負ひし體、これ心を慥かに仔細を申せ。仔細は何と。

とり　はい〳〵、口惜しうございます。

谷五　口惜しいとは、盜賊に出逢うて、手を負うたとでも申すのか。

とり　壺井の觀音へ代參の歸り、通りかゝつた入江の溝際、數ヶ所の深手を受けたる死骸、立寄り見れば御主人樣、女ながらも見捨てゝは屋敷へ戻られじと同道なせし家の子諸共、あたりを尋ね搜す折柄、不意に拔連れ切り附けしを、お主の敵脫さじと命限りに働けども、先きは多勢こなたは二人、終にはこゝ、此の如く、ちえゝ口惜しうございまする。

谷五　ほゝ、女ながらも天晴忠節、あゝこれ、深手なれども急所は除けてあるぞ、心をたしかに持ちやれ、斯かる事を巧む奴、後追うて參るは必定、某敵は取つて遣はす。

とり　ちえゝ、忝けない。

谷五　先づこれにて當國の首塚は彼奴がそッ首。あゝこれ心をたしかに、これ女中、女中やアい。

トうつとりとなりしおとりを呼び生ける、此の内花道より佐吾平血襦袢脫ぎかけ、白刃を提げて走り出で來り、後より拔身にて鄕兵衞追つかけ出で、花道にてちよつと立廻り、佐吾平受太刀になり、

佐吾　おとりどのやアい。

鄕兵　默つてくたばれ。

ト又ほぐれてちよつと立廻り舞臺へ來り、おとりに躓く、これにておとりきつとなる。

とり　佐吾平どのか。

佐吾　おゝ、こなたは爰に。

郷兵　重ねておいて。（ト打つてかゝるを、谷五郎支へて）

谷五　扨はおのれが、

郷兵　や、又殖えた。

ト振りほどき切つて掛る胸許を取つて、白刄を引つたくり切り下げると、郷兵衞後向にて見物に見えるやうに殼竹割になり、どうと倒れる。此の内おとり佐吾平うつとりとなる、谷五郎心靜かに郷兵衞の首を打落し、

谷五　こりや兩人よく見よ、汝等が敵、主の仇、某只今討取つたるぞ、心を慥かにとツくと見よ。

ト是れにて兩人摺寄り見て、手を合せ、がつくり落入る。

あゝ何れの家來、何處の者と尋ぬる間もなく非業の最期、此の儘死骸を置くも不便。（ト下手の沼を見込み、）それ、（ト兩人を沼の内へ入れ、鼻紙を出し手を拭き、郷兵衞の切首を拭き、）さはさりながら、彼れが所持せし刀の切味。（ト捨てたる白刄を取上げ、月に翳し思入あつて、郷兵衞の拵への吹替

を足にて蹴る。これにて二ツになる」世にも稀なる鋭き銘作、はて良い物が手に入つた、ちえゝ忝ない。（ト落ち散つたる鞘を取りあげ納め思入、差添を抜き橘の幹の皮を削り、腰より矢立を取出し書下し」河内の國平岡の森、一國に一ケ所の首塚、ふむ。

ト頷く。この時月隠れる。谷五郎こなしあつて橘の枝を切り落し、差添を納め件の枝にて根元を掘る思入。此の時薄ドロ／＼、跡風の音驛路の入りし馬士唄になり、上手より撫子姫の靈、前髪の布を掛けし女馬士の打扮にて、馬沓篠竹を持ちつか／＼と出で谷五郎の方を見込み、につこりこなしあつて抜足をして下手へ來り首へ手を掛ける、是れと一時に谷五郎も思はず首へ手を掛け、顔を見合せびつくり思入あつてちよつと立廻り、谷五郎首を引取り、撫子姫谷五郎の後へ廻りちよつと羽交締にするを、谷五郎振り解かうと樣々にする、五體すくみしこなし、此の時上手堂の扉外へ開くと、こゝに由井正雪旅虛無僧の打扮にて、側に天蓋を置き目を閉ぢ印を結んで居る。

扨は我が驕慢を挫かん爲め、老狐天狗の所爲なるか、なにちよこざいな。（ト又身を藻掻き、撫子姫後より伸びて谷五郎の顔をのぞく、谷五郎おどろき」やゝ、まだ幼き賤の女、こりやどうだ。

ト此の内正雪につこりこなしあつて印を解く、これにて大ドロ／＼になり、撫子姫橘の洞へ消える、谷五郎尋れる心にて、ふと上手の正雪を見込み、

扨こそ曲者、
卜意氣込みて行かうとする、此の時扉びしやりとしまる、谷五郎ちよつと考へる思入あつて、
ふむ、源家三代賴信朝臣の古廟を囮に、狐狸妖怪の集つて人民を惱ますと覺えたり、いで正體を顯しくれん。それ。
卜力足を踏み、きつとなる、又ドロ〳〵になり扉開いて、由井正雪野袴ぶつさき大小にて、靜々と前へ出來る。谷五郎拔打ちに切つてかゝる、正雪軍扇を取つて見得よく止めてきつとなる、是れにて三味線入り白囃子になり、白刃と軍扇の立廻りよろしく、此の内谷五郎たぢ〳〵となつて、正面の樟を切らうとする、正雪樟を庇ふ仕組の仕合、トゞ岩臺へ切付けるを正雪扇にてきつと押へ、谷五郎いろ〳〵引んとしてこなしあつて、白刃を捨て、呆れたる思入あつて、
恐入りましてござる。
卜平伏する、山おろしこだまの入りたる合方になり、
正雪　はて賴もしき貴殿の太刀筋、我も諸國を修業なし、多くの人に渡り合ひしが、かゝる烈しき手練を見ず、末賴もしき若武者ぢやなあ。
谷五　何が扨未熟不鍛錬の某、たゞ心得ぬは一命に替へ此の橘の幹を庇ふ貴殿の心底、察する所是れ

則ち南朝の正統、民部輔橘の正雪殿にはあらずや。

正雪　いしくも御身推察の通り由井の正雪、さはさりながら如何して、我が姓名を御存じなるや。

谷五　はッ、さいつ頃九州に於て楠氏の門弟に出合、終夜の物語りに當代兵法の妙を得て、六十餘州に上に立つものなきは、正雪殿より外になしと聞き傳へてより、其許の在所を尋ね何卒してめぐり逢ひなば師と頼み、劍術の奥儀を極めんと心願こめてお跡を慕ひ、測らず爰にて御目に掛るも盡きせぬ奇縁、ちえゝ忝けない。

正雪　して又御身は何處の生れ。

谷五　我が生國は山城の井手の里、金井谷五郎と申す浪人、

正雪　我は當國河内の生れ、

谷五　僅かの境を隔つのみ、

正雪　壁一重なる、

谷五　山城河内、

正雪　不思議な縁で、

兩人　ござつたよな。

谷五 さるにても合點行かぬは、何處より來るともなく、顯れ出でたる賤の女。

正雪 不思議でござるか、むゝ。

ト又印を結ぶ、ドロ〳〵になり、撫子姫木の洞より出で、谷五郎の膝に凭れ恥しきこなし、東西の窓蓋を上げる、谷五郎空を見あげ、

谷五 やゝ、時まだ丑三半なるに、白晝にひとしき此の有樣、（ト撫子姫を見て、）鄙に稀なる少女が容貌、

ト突き退ける。

撫子 お跡を慕ひ焦れ來て、情ないお詞聞く上は、おゝそれ。

ト郷兵衞のさしてゐる刀へ手をかけ、胸を突かうといふ思入。

谷五 南無三それは。

ト引つたくる、此の以前より蘆間を分けて以前の初藏、半身出し窺ひ居て、

初藏 それぞ正しく。

トつか〳〵と出て手を掛ける、正雪手早く印を解く、ドロ〳〵になり月を引上げ、東西の窓蓋をおろす、谷五郎件の刀を引取る。

正雪 ふゝ。

ト扇を開く、撫子姫谷五郎へ寄添ひ、初瀬力足を踏むを一時に木の頭、

えへ、はゝゝゝ。

ト双方こなし、これをきざみにてよろしく、

ひやうし幕

二幕目　由井正雪住居の場

（役名）―由井正雪、楠正成の靈、金井谷五郎、鵜野九郎兵衛、丸橋忠彌、元吉新六、高安繁次郎、快禪坊。繁次郎姉藤枝、楠息女撫子姫の靈、腰元其他。）

（由井正雪住居の場）―本舞臺正面三間常足の二重、板羽目の蹴込み眞中に暖簾口、此の左右とも羽目板・上の方九尺の間、後へ下げて出入りの潜り戸附きの張物、暖簾口上の欄間に横長の額を掲げ、これに『軍學兵法十能六藝陰陽道其外一切指南可爲者也、張孔堂』と記しあり、上下の羽目板にたんぽ附の槍、竹刀、木太刀、樫棒など澤山に掛けある事、總て正雪の住居、道場の模樣よろしく飾り付け、二重の上に元吉新六袴裝にて控へ、下手に高安繁次郎若衆鬘袴裝にて坐し、平舞臺上手に門弟一二四五下手に六八九十何れも袴にて控へ居る、眞中に三七の兩人面を當て竹刀を持ち立身にて試合の見得、幕の内より掛け聲竹刀の音し、白囃子にて幕明く。

ト三七の兩人ちよつと立廻つて、トヾ七打ち据ゑられ、

門七　あゝ參つた〳〵、もう參つたぞ。

門三　然らば勝負は附き申したな。

門五　附いたとも〳〵、八木氏のお勝に相違ない、見事〳〵。

門七　いやもう助作どのゝお手の內、なか〳〵拙者共は及びもない事でござる。

門三　いやこれは御挨拶、全く只今の勝負は、時の張合と申すものでござる。

門一　時に御兩所のお手合せが相濟めば、某一試合と存ずるが、何方のお相手に罷りならうや。（ト思入あつて繁次郎を見遣り、）おゝ幸ひ、是れにござる繁次郎殿とは掛違つて、久々お手合せをいたさぬゆゑ、お立合は下さるまいか。

繁次　これは〳〵笠垣氏のお詞、忝なう存じまする、お稽古下さるは拙者の仕合せ、修業の爲ゆゑ未熟を顧みず、お相手に相成り申さん。

門九　こりや見物事でござらうて。

門八　片時も早く御兩所には、

門十　いざ、お立合なされい。（ト門弟の十竹刀二本を取つて下へ置く、繁次郎こなしあつて、）

繁次　然らばお立合申すでござらう。（ト兩人よろしく支度なして立ち出る、）
門一　いざ、
繁次　いざ、
兩人　いざ〳〵。
ト白囃子になり兩人よろしく立廻つて、ト〻門弟の一竹刀を打ち落され周章て落ちたる竹刀に躓き倒れるを繁次郎打ち据ゑる。
門一　あゝまゐつた〳〵、あゝ痛やの〳〵、板の間に滑つたばツかり思はぬ不覺、さもない時は身共の勝利。
繁次　左樣ならば、今一太刀。
門一　あゝもうそれには及ばぬ。恐入つたお手の內、體と共に痛み入りました。
新六　いやなに、繁次郞殿、御面會いたしなばいつぞは承はらうと、存じたのみにて打過ぎしが、よい折ゆゑお尋ね申すが、もしや其許は河內のお產れではござらぬか。
繁次　如何にも生國は、河內の高安でござりまする。
新六　さすれば、其許は高安主膳殿の御子息でござらうな。

繁次　仰せの如く主膳が忰でござりまするが、どうしてそれを御存じあるぞ。

新六　はて扨それは不思議な御緣、拙者も矢張り河内の產れ、算へて見れば三年あと、壺井寺なる觀世音の境內にて災難に出逢ひし折柄、御親父に助けられた事がござつたなれど、其の後承はれば主膳殿には其の夜の事、人手に掛つてあへない御最期なされしと聞き、あゝ情ない儀と悔めど詮なく打ち過ぎしが、初めて其許にお目に掛りし時御苗字を高安と承はり、こりや正しく恩人高安殿の御子息と存ぜしかども、迂濶に問ひもならざるゆゑ、徒に過せしは拙者の不念。

繁次　仰せの如く主膳の忰にござりまするが、當今にては師匠の御厚志、以後お見知りおかれ下さりませ。

新六　しかしお話しに身が入つて、我れ〳〵共はまだ一勝負もいたさぬが、何方なりとも一本參らうか。

門七　なにさま稽古を差置き、安閑としても居られぬ。一勝負いたさうか。

新六　あゝいや、最早先生も認め物も相濟みし時分と存ずるゆゑ、御機嫌を伺つた上の事にいたさうではござらぬか。

門一　成程、まだ、われ〳〵共もお目通りをいたさねば、左樣いたすがようござらう。

繁次　私は先刻お目に懸りしゆゑ、稽古場のお留守居をいたしまする。

門二　然らば新六どの我れ〳〵も、
皆々　御一緒に、
新六　いざ、御同作仕らう。
ト唄になり、新六先きに皆々附いて上手潜り戸の内へはひる。繁次郎殘り思入あつて、
繁次　あゝ、故鄕を捨てゝ遙々と此の鎌倉へ流れ寄り、昨日と明し今日と暮れ修業に其の身を盡すのも、日頃の本望達したさ、あゝ思へば我々同胞は、世に味氣なき身の上ぢやなあ。
ト思入。奥より藤枝、島田鬘紋付屋敷風の打扮にて出來り、
藤枝　弟まだそこに居やつたか。
繁次　おゝ姉上、よい所へお出でなされました、あなたにお話し申す事がござります。
藤枝　そりや何ぢやぞいの。
繁次　斯様な譯でござります。思ひがけなく今日故鄕の人と名乘り合ひました。
藤枝　おゝ、其の様子は最前わたしも爰へ來る折、ちよつと立聞きしましたゆゑ、出たうは思へど門弟衆の手前を兼ね、たゞあらましを聞きましたが、彼の新六様は觀世音で父上がお救ひあつたお人なりしか。

繁次　如何にも左樣な話しにござりまして、父の恩義を辨へられ、此の末我々同胞が力にならうと、頼もしいお志し。

藤枝　ほんにまあ世に人鬼はないとやら、父上御最期ありし後、頼りに思ふ人もなく共に故郷を立退いて、此の鎌倉へ志し、

繁次　知邊というては父上がお弟子、大竹初藏を頼り來て、

藤枝　其の仲介にて正宗樣へ身を寄せしも、

繁次　劍法修業の御指南受け、

藤枝　親の敵を討ちたいばツかり、

繁次　晝夜心を配れども、

藤枝　今に手掛りないと云ふは、

繁次　何處に敵のあることやら、

藤枝　早う廻り、

兩人　逢ひたいものぢやなあ。（ト兩人ちつとこなし。此の時奥にて九郎兵衛の聲にて、）

九郎　繁次郎さま〳〵、何處においでなされます。（ト呼びながら奥より鵜野九郎兵衛若黨の裝好みのこしら

へにて出來り）おゝ、爰にござりましたか、先刻からお呼びなさるゆゑ、あちこちとお尋ね申しました、さゝちつとも早くおいでなされませ。

繁次　なに、先生がお呼びなされしとか。

藤枝　何やら御用があるのであらうわいの。

九郎　さればさ、用があるからお呼びなさるのだらう、さあ早くおいでなせえ。

繁次　左樣なら、ちよつと參つて伺ひませう。

ト早き合方にて奥へはひる、跡に九郎兵衞四邊を見廻し、

九郎　先づこれで邪魔は拂つた、いやさ、邪魔な所に竹刀がある。（ト下にある竹刀を取上げ）いけぞんぜえな手合だ、なう藤枝さん。（ト言ひながら竹刀を片寄せ）これさ、まんざら見ず知らずの人でもあるめえ、鷹も朋輩犬も朋輩、素知らぬ顏は恨みなものだぜ。（トなまめいた合方になり）いつも言ふせりふだが、抑もお前が爰へ來た時から、あゝ好い器量だ美しいと思つて見る程猶あでやか、役者で言つて見ようなら、あの大和屋の紫若丸出し、何處といつて言分のねえ、此の顏にしみ〴〵迷つた上からは、戀に上下の隔てはねえと昔からいふ粹な通り句、斧九太夫なら慾ゆゑにお金配分高割りだが、しかも似た名の鵜野九郎兵衞おれは戀ゆゑこなたの金箱、どうぞ割込ませて貰ひ

たいなう。

トしなだれ掛るを、

藤枝　えゝ、それどころではないわいな。（ト脇へ寄る。）

九郎　これさ、そんなに氣強く言ひなさんな、おれも男だ、言ひ出したからにやあ義理も恥もいるものか、是でも非でも紫でも色よい返事を聞かねえうちは、所詮思ひ切られねえから、肚胸を据ゑて挨拶しなせえ。（トどつかりと居直る。）

藤枝　たつて其のやうな事言ひなさんすと、旦那さまへ告げるぞえ。

九郎　あゝこれ、それを言はれてたまるものかえ。

藤枝　言はれて悪くばもう重ねて、猥らな事は言はしやんすな。

九郎　言はぬがいゝと言ひなさるが、お前の顔を見て居ちやあ、どうして言はずに居られるものか、思はせぶりにも程があらあ、もう好い加減にうんと言つたがいゝぢやあねえか、（ト手を執る。）

藤枝　えゝ、びつくりするわいな。

ト振り放す、此のとたん九郎兵衛以前の竹刀を踏返し下へこけ、

九郎　あいたゝゝゝ、こいつあ一本参つた、えゝ忌々しい竹刀だ。

ト此の時奥より〈腰元の裝にて出來り。

腰元　藤枝さま〳〵。

藤枝　何ぢやぞいなあ。

腰元　旦那さまが急に召しますわいな。

藤枝　さうでござんすかいな。

腰元　さあ〳〵、ちやつとお出でなされませいな。

ト急き立てられ、藤枝行かうとする。

九郎　旦那も御用なら、こつちも肝腎な御用だ、ちよつと待ちなせえ。（ト裾を捕へる。）

藤枝　知らぬわいなあ。（ト早い合方になり腰元附いて奥へはひる。跡に九郎兵衛こなしあつて）

九郎　何のこツた、面白くもねえよく〳〵な情知らずめ、これ程思つて居るおれの心が知れねえのか、昨日や今日の事ぢやねえ間がな隙がな口說くのも生やさしいものぢやあねえ、これほど物に凝つたなら、どんな名人にでもなられるだらうが、成程この鹽梅ぢやあ色事師にやあなれねえ筈だ。

ト此の以前よき時分に奥より快禪坊、毬栗坊主鼠の着附、平ぐけ好みのこしらへにて出來り、後より窺ひ居て此の時前へ出で、

快禪　木折で行かぬが戀の道、その戀おれが取持つてやらうか。（トこれにて九郎兵衞振返り見て、）
九郎　や、誰れだと思つたら快禪坊、さつきからの樣子をば、
快禪　見たり聞いたりさ、しかしお氣の毒に思つたゆゑ。
九郎　そいつはどうも面目ねえ譯だ。
快禪　いやさ、いつもなら敵役の持前で、此の由直ぐに先生へ注進すると出かけるが、もうそんな古い事は洗ひけへる世の中ゆゑ、宗旨を替へて立役仕込み、是非取持つてやらうと思つて。
九郎　出來る事なら快禪坊、是非取持つて九郎兵衞を浮ませてはくれめえか。
快禪　そこは出家の佛法方便、釋迦の說法空海の智辯を以てたらし込み、こなたの思ひの晴れるやう取持つてやる代り、賴みがあるが聞いてくれるか。
九郎　そりやあ魚心ありやあ水心、戀の取持ちは親より可愛いといふから、聞かれる事なら何なりとも、
快禪　聞かれるどころか、雜作もねえ事だ。
九郎　さうして、賴みといふはどういふ事だ。
快禪　外でもねえ、楠普傳が家の祕書六韜三略の一卷を、おれに見せちやくれめえか。
九郎　これさ、六道だの三途川だのといふから、大方出家の入るものだらうが、おらあ知らねえ。

快禪　さうしらを切らねえものだ、こなたが持つて居る事は、慥かに見ておいたのだ。

九郎　何を見たのだか知らねえが此の九郎兵衞、そんなものア持つちやあ居ねえが、世にも稀なる六韜三略、あつた所が見せられねえ。

快禪　それぢやあいよ〳〵、こなたがそこに持つて居るのだな。

九郎　いゝや、おらあ知らねえ、知るものかえ。

快禪　さう堅く出りやあ是非がねえ、もう此の上は腕づく勝負だ。（トいきなり九郎兵衞の胸倉を取る。）

九郎　えゝ儘にしろ、（ト振拂ひ。）假令持つて居たところが、命限り見せるものかえ、へん、とんだ草臥ものだ、どれ三里の灸でもすゑておかうか。

ト唄になり、思入あつて奥へはひる、跡に快禪殘り、

快禪　何でもあいつが虎の巻を、持つて居るにやあ違えねえが、迂濶に言はねえし太い根性、それゆゑ師匠正雪殿も、外へ寶を出さねえ爲め、あやなしちやあおくものゝ、はて、忌えましい奴だなあ。

ト時の鐘合方になり、花道より丸橋忠彌袴羽織大小の裝、刀を入れし風呂敷包みを持ち出來り、花道にて、

忠彌　次第に延びる春の日の長閑なる儘、ぶら〳〵と致して參つたなれど、もし正雪殿にも他出いたさ

れねばよいが、何にせいおとづれて見ようか。（門口へ來て、）先生は御在宿でござるかな。
ト是れを聞き、快禪坊出て、
快禪　どこからお出でなされました。（ト言ひながら忠彌を見て、）これは丸橋忠彌樣、先づ〳〵これへ。
忠彌　御免下され。（ト二重よき所へ住ふ。）
快禪　先づまあ、煙草盆を差上げませう。（ト煙草盆を出す。）
忠彌　いやお構ひ下さるな、時に快禪老、相變らず御壯健で重疊に存じ申す。
快禪　いやもうずんと健かではござれども、御酒のせるか折々逆上て、耳が遠くなるのには、困り入ります。
忠彌　しかし耳の遠いは長壽を保つと申せば、目出度いことではござらぬか。
快禪　我々などの長生きは却つて迷惑いたします。それは兎もあれ、只今師匠は急な免狀を認め居りますれば、是れで一服召上つて下さりませ。
忠彌　いや今日は拙者も用事を片附け、ゆる〳〵お話しを致す心得で參つたれば決して御心配下さるな。
快禪　何にいたせお出での由を、ちよつとお知らせ申しませう。（ト行きかゝる、忠彌思入あつて、）
忠彌　幸ひ此の包みは、お約束申した拂ひもの、刀、先生のお手許へお置き下さりませ。

快禪　承知いたしました。（ト件の包みを受取り、）左樣なら、それにゆるりとござりませ。

ト合方にて快禪坊奥へはひる。すぐに上手潛り戸の内より以前の新六、繁次郎、門弟の一二三其の外皆皆出來り、忠彌を見やり、

新六　これは〳〵忠彌さま、ようこそ、
皆々　御入來にござりまする。
忠彌　何れも方にはいつもながら御壯健で、御出精な事でござる。定めて御上達と存じまする。
門一　いやもう未熟の我々、
門二　互ひに出精はいたしますれど、
門三　なか〳〵上達いたし兼ねまする。
忠彌　いやお勵みさへあれば、自然と上達はいたすものゆゑ、御出精が肝要でござりまする。
新六　出精と申せば丸橋氏のお出でこそ幸ひ、何卒お稽古を願ひ度う存じまする。
忠彌　何さま、先生に御面會いたすまで、斯樣いたして居るも益ないこと、ちとお相手になりませうか。
新六　何卒御指南を願ひ上げます。
門一　御迷惑ながら我々共もお後にて、

門二　お稽古下さるやう願ひます。

忠彌　ちと先生のお手助けをいたしませう。いざ新六どの、竹刀でお立合ひ申さう。

新六　左樣なれば御免下され。

ト是れまでの内に兩人支度をし、新六は竹刀を二本取つて下へ置き、忠彌も平舞臺へ下りる、兩人竹刀を取つて立ち上り双方見込む、白囃子になり、兩人ちよつと試合の立廻りあつて見得。これにて鳴子の知らせにて、此の道具半廻しになり、下手の門と塀附いて廻り正面になり、道具納まると、直に時の鐘合方になり、花道より金井谷五郎武者修業の裝にて出で來り、花道に止り、

谷五　實に故郷忘じがたしと、十歳餘りで戻つたる此の鎌倉の谷七郷、僅見ぬ間に彌增す繁華、あゝ餘所にあらざる賑ひぢやなあ。(ト此の時舞臺の奧にて試合の掛聲竹刀の音烈しくすること、是れに聞耳をたて、)彼處に烈しき竹刀の音は、正しく劍道修業の道場ならん、はて何人の構へなるか樣子見屆け音づれん。(ト門の所へ來て、窓より内の樣子を見るこなしあつて、)いと手廣なる道場に數多集へる稽古の者、殊に試合の太刀筋は天晴なる手の内、教師の術も思ひやられて慕はしゝ。

ト感心したといふ思入。これにて此の道具逆に元へ戻る。舞臺は以前の忠彌新六よき見得にて納まると、兩人よろしく會釋をして竹刀を引き双方へ別れ、立たうとするゆゑ、

門一　何れもにはお心附かれしか、最前から外面より道場を覗き込み、何やら譏つて居る樣子でござる。

門二　拙者も左樣と心附きしが、何奴なるか詮議いたさん。（ト一、二門口へ來て、）

門一　最前よりそれにをつて、內の樣子を窺ふは何者なるぞ。

門二　見れば兩刀をたばさみ武士たる身にて、門より內を覗き込むとは、禮儀を知らぬ無禮な奴。

門一　殊に未熟と言はぬばかりにせゝら笑ひ、我々共が稽古の誹謗おしやつたな。

谷五　中々もつて左にあらず、拙者武術修業の者ゆゑ、實に見事なる御手練と見惚れて思はぬ今の失禮、眞平御免下されい。

門一　武術修業の者とあれば、定めて覺えの手の內ならん、此の儘には返さぬぞ。

トきつとなる、忠彌思入あつて、

忠彌　あゝいや御兩所、端近にての爭論は近頃以て粗忽であらう、兎もあれ其仁を是れへ伴ひ御示談申すがよろしうござらう。

門二　なにさま、これも御尤も。

門一　然らば、是れへ通らつしやい。

谷五　辭退いたすは却つて失敬、仰せに任せお席を穢さん。

ト谷五郎こなしあつて草鞋を脱ぎ、よき所へ住ふ、門弟の二思入あつて、

門二　さあ、此の上は試合をなして我々が、手練の程を見せてくれん。

門一　何さま以後の見せしめゆゑ、我々が相手になつて、

門三　見事これにて、

皆々　打ち据ゑくれん。（ト皆々きつとなる。）

谷五　如何にも不鍛錬なる拙者ゆゑ、各方のお相手には及びもない事、平に御容赦下されい。

門二　假令不鍛錬であらうとも、武術修業は諸國の道場試み歩くが修業の常、それに何ぞや辭退いたすは怖いのか。それとも又我々を侮つてか、二つに一つの返事をさつしやい。

ト笠にかゝつて言ふ、忠彌こなしあつて、

忠彌　あゝこれお控へなされい、最前より某見受けし所、たゞ人ならず武術もさこそと存ぜらるゝ。

新六　武術修業の御身にて、一旦道場へおはひりにて試合もいたさず、此の儘にいたしては道場の恥辱となれば、是非ともお立合ひ下されい。

谷五　元より某に於て試合を好む譯でもなく、たゞ御門外に於て失敬いたせし、お詫を申すまでの事にて、これへ推參いたしたなれども、さまで仰せらるゝと試合を申し入れたやうにて、實に當惑い

たしまする。

忠彌　何れの御藩かは存ぜねど、拙者事は此の道場の主人由井正雪殿の朋友にて丸橋忠彌と申す者、お見知りおかれ下されい。

谷五　すりや、あの當家は正雪殿の、

新六　いかにも、師匠正雪が、

門弟皆々　道場でござる。

谷五　知らぬ事とて某は、此度漸く故郷なる此の鎌倉へ立戻り、今日わざ〳〵正雪殿のお宅を尋ね申さんと參りし拙者は、金井谷五郎と申す者。

門一　扨は常々先生が、お噂ありし、

門二　金井氏でござつたか。

門一　存ぜぬ事とてこれ迄の、無禮の段々、

門二　偏に御容赦、

兩人　下されい。（トよろしく詫をする。）

谷五　あゝいや其の御配慮には及ばぬこと、正雪殿にはさいつ頃、河内の國平岡の森にてお出合申し、

再會を約せしゆゑ、諸方を尋ね參つてござる。

新六　師匠ことも不斷其許のお噂を申して、日々お待ち申してをつたるところ、

繁次　片時も早く奥へ參つてお知せ申さん。（ト行かうと立ち上る、此の時奥にて、）

正雪　知せに及ばぬ、只今それへ參るであらう。（ト奥より正雪羽織袴にて出來り、）珍らしや金井氏、ようこそお尋ね下された。（トよき所へ住ふ、谷五郎見て、）

谷五　かねての約束違へぬやう、片時も早く面會せんと六十餘州を遍く廻り、漸く戻りし故郷なる當地へ着きしも三日後、諸用を差しおき貴殿の宅を音づれんと、こゝかしこ經巡り歩き今日測らずも面會遂げ、

正雪　先づ其許にも健勝にて、

谷五　貴殿にも別條なく、

正雪　始めて面會せし時は、

谷五　諸國を廻りて河内の國、

正雪　平岡なる森の古廟に、

谷五　首墳立てんとなしたる時、

正雪　曲者なりと爭ひしも、
谷五　末は互ひに打解けて、
正雪　期して面會約せしも、
谷五　今となつては、
正雪　昔語りと、
兩人　なりましたなあ。（ト兩人よろしくある。忠彌思入あつて、）
忠彌　御兩所のお話しにて委しく樣子承はるは今が始めて、はてさて變つたお出合でござりましたな。
新六　然し諸國御修業なされたなら、種々樣々な事がござりませうな。
谷五　いやも、憂きこと辛いことのみでござるが、又人の見ぬ所を見て參つたも一得でござりまするぞ。
門一　いやも存ぜぬ事とは申しながら、最前の粗忽、今更面目次第もござりませぬ。
谷五　左樣仰せらるゝと、拙者却つて迷惑に存ずる。
門二　然し失禮は失禮でお詫びいたしたなれど、又武道は武道でござれば、豫て先生よりも劍道のお達人と承はり居りましたること、お出でこそ幸ひ、我々が修業にも相成ることゆゑ、何卒金井氏のお手の內、どうか拜見いたしたい。

門三　拙者がお相手仕らん程に、どうかお立合ひは下されまいかな。
正雪　あゝいや門弟衆控へめされい、金井氏の手の内は河内に於いて身共が立合ひなしたること、中々以て各方の手練では、及びもない事。
門三　はてさて、それは殘念千萬。
忠彌　をこがましくはござれども、御鍛錬のお手の内拜見せぬは本意にあらねば、未熟ながら某が槍術をもつてお相手いたさん。
正雪　なにさま、忠彌殿ならよきお相手、
谷五　いや、丸橋氏の槍術は、豫て某聞及ぶ名譽の御手練、どういたしてお立合ひがならうや。
正雪　いや、槍術は忠彌殿の得手なれど、又金井氏は劍法の得手、こりや槍劍二道の勝負をめされい。
繁次　これぞまことに晴の業、後學の爲め、
皆々　拜見いたさん。
谷五　左樣ござらば丸橋氏、
忠彌　金井氏、
門弟一二　いざ、御兩所お支度を、

兩人　心得申した。

ト　これより白囃子になり支度をする事、門弟の一、二木太刀を持つて來り平舞臺眞中へやり違ひに置いて兩人の者後へ下り、門弟の三、四の兩人はたんぽ槍を二本持つて出て左右へ別れ、兩人の側に立ち持つてゐる、兩人は互ひに會釋の禮儀あつて立合ひ、双方きつとなつて見合ひ、木太刀の試合よろしくあつて、トヾ谷五郎忠彌の木太刀を打落す、これにて忠彌すかさず門弟三の持つてゐる槍を手早く取る、谷五郎も木太刀を捨て、すかさず門弟の四の持つてゐる槍を手早く取り、双方狙ひ合ひ、槍試合になる仕組宜しくあつて見得、これまでの内正雪始終眼をつけてゐて、この時うんと見込み持つたる扇子をとんと置く、これにて兩人思はず槍を双方一時に下へ落す、正雪思入あつて、

正雪　やあ、勝負は見えたり、双方とも休息めされい。

ト　これにて兩人双方へ別れ、よろしくあつて、

谷五　すりや兩人が槍劍二道の、

忠彌　勝負のほどは相見えましたか。

正雪　しかと見屆け申した。

谷五　して、いづれが勝にて、

忠彌　何れが負なるか、
谷五　批判のほどを承はらん。
正雪　さすがは兩雄あつぱれ御手練、今某が見極めしに、槍術は忠彌殿の勝、又劍術は谷五郎殿の勝ち、甲乙あらぬ龍虎の御兩所、正雪ほとんと感心いたしてござる。
繁次　丸橋殿の御手練は豫ても知れし事ながら、初めて拜見いたしたる金井殿の御鍛錬、
門一　いや、もうおどろき、
皆々　入りましてござる。
谷五　いづれも方の賞美のお言葉、某甚だ恥入り申す、さりながら諸國を經歴なし、武術に秀でし人に數多出逢うて其の術を試みしに、忠彌殿の槍術は凡そ日本に竝ぶものなし。
忠彌　分に過ぎたるそのお言葉、某とてもその如く、貴殿の劍法妙術は正雪殿はいざしらず、かほどの手練を得たりし仁に未だ出逢ひし事なければ、今日の立合ひこそ枯木に花を見たるの思ひ、
谷五　又正雪殿の手練の呼吸に、兩人思はず持ちたる槍を取落すも、
忠彌　實に勝れしあつぱれ心術、
谷五　我々感心、

兩人　いたしてござる。

正雪　いや、これは痛み入りたる儀。何が扨、正雪も龍虎の友を得たりし心地、猶も互ひに打解けて、

忠彌　入魂の盟を、

三人　仕らん。

ト合方きつぱりとなり、奥より以前の藤枝先に立ち、後より腰元茶盆に煎茶道具を載せ菓子鉢を添へて持ち出來り、藤枝谷五郎の前へ行き、こなしあつて、

藤枝　これは〳〵、あなたようこそおいで遊ばしました。粗末の煎茶召上つて下さりませ。

ト腰元茶を出し菓子鉢を出したりなどすることよろしくあつて奥へはひる。谷五郎は茶を手に取つて、

谷五　いや、必ずお構ひ下さるな。（ト思入あつて正雪に向ひ、）御內室でござりまするか。

正雪　いえ、召使ひでござりまする。

谷五　左樣でござるか。（ト藤枝へこなしあつて、）以來は又何かと御厄介になりますほどに、御別懇にお賴み申す。

藤枝　不束のわたくし、お見知りおかれて下さりませ。（ト言ひながら谷五郎の側にある刀を見つけ、）おゝ、このお腰の物は。（ト訝るを繁次郎見て、立寄り、）

繁次　どうやらこれは。(ト手に取上げる故)
谷五　それは拙者が所持の差料。
藤枝　どうも合點が、
ト藤枝繁次郎より取つて見ろ、正雪見やりて、
正雪　こりや〳〵如何いたしたものだ、帶刀を失禮千萬な。
藤枝　はアい。(ト驚き下へおく。)
正雪　いや女子と申すものは、慮外も顧みず、笑止千萬、御容赦下されい。
谷五　何もそのやうに御心配なさるには及ばぬこと。
正雪　然し、見事なるお差料、失禮ながら拜見はなりますまいか。
谷五　いや、御覽に入れるやうな品でもござらぬが。(ト取つて出す、正雪受取り見て、)
正雪　こりや何か、お物好なるおこしらへ。
忠彌　失禮ながら拙者もとも〴〵、
繁次　拜見いたすでござります。(ト兩人差寄り替る〴〵見て、)
正雪　目貫は銀の丸鏡、中には金無垢兎の高彫、

忠彌　縁頭とも赤銅七々子に、色ざししたる吉野の風景、
繁次　鍔は鍛へし南蠻鐵、金銀彫の雪の富士、
正雪　物好したる雪月花、銘は知れねどいづれ銘作、
繁次　よそにはあらぬ、（ト始終眼をつけて言ふこと、）
藤枝　覺えのこしらへ。（ト扨はといふ思入。）
忠彌　定めて中身は、（ト取つて半拔きかけ裏表を返し見て、）して、この銘は、
谷五　來國俊でござる。
忠彌　いかさま、銘作と見受けました。
繁次
藤枝　それぞまさしく。

ト　これにて正雪取つて谷五郎へ戻し、

正雪　こりやよい、お道具でござります。
谷五　いやもう、さしたる品でもござりませぬ。
忠彌　ときに、その斧料で思ひだしました、先達お話しを致しおいたる、拙者が親友千葉作左衞門が拂ひ物、先刻これへ參りし時、快禪殿よりお手渡しいたした筈。

正雪　なにさま、それは先刻快禪より承知いたしてをりましたが、ちと認め物に取りかゝりをつたれば、未だ拜見いたさず、そのまゝこれへ持參いたすやう、申附けおいたれば、後刻拜見いたすでござらう。

忠彌　それは近頃御面倒をかけまする。

正雪　こりや藤枝にはお客人のおもてなし、奥へまゐつて用意いたせ。

藤枝　はい、畏りましたわいなあ。

繁次　どれ、わたくしも御一緒に、

藤枝　さ、まゐらうかいなあ。

ト唄になり、藤枝繁次郎こなしあつて奥へはひる。

正雪　何にいたせ、ゆる〳〵とお物語りもいたしたけれど、先づ當分拙宅へ御逗留下されい。

谷五　拙者とても久々の御面會ゆゑ、種々の奇談もいたしたければ、今宵は一宿御厄介に相なりませうか。

正雪　未だ旅行のお疲れあらん程に、別間へお通り下されて、先づ御休息下されい。

谷五　これに居りつけましたれば、どうか此のまゝ。

正雪　いや、爰は端近、門弟共が稽古いたせば、

谷五　左樣ござらば仰せに任せ、

門一　いざ御案內仕らう。

新六　斯うお出でなされませ。

　ト唄になり、門弟の一先きに立ち、後より谷五郎是れに續いて門弟の二三、其外皆々附いて上手潛り戶の內へはひる、正雪忠彌殘り。

正雪　はて、思ひ寄らずも今日は金井氏が尋ね參られ、貴殿といひ此の正雪は兩の翼を得たる心地、悅ばしう存じ申す。

忠彌　某とても今日は二となき武術の仁に出會ひ、殊に槍刀一度の試合は一つの德を得たるに似たり。

　ト此の時以前の快禪坊、刀の包みを持ちて出來り、

快禪　仰せゆゑ最前の品、これへ持參いたしました。

正雪　おゝ幸ひの折柄、忠彌殿御持參の品拜見いたしませうか。

忠彌　かね〴〵お話し申したる、千葉作左衞門が所持の刀、いざ御覽下されい。

　ト忠彌風呂敷を解き拵へ附の刀を出す、正雪取上げ拔いて見て、

正雪　世にも稀なる此の刀、正しくこれは粟田口吉光でござらうな。

忠彌　あつぱれお目利、いかにも吉光の作でござる。

正雪　(思入あつて、)吉光ならば望みにござらぬ。(ト前へ突き出す。)

忠彌　そりや何ゆゑに、

正雪　さればでござる、粟田口吉光は足利(徳川)家にては吉瑞とするゆゑ、

忠彌　ふむ、左樣の事のござつてか、然らば是れは如何でござるな。(ト又別の拵へ附の刀を出す。)

正雪　して此の刀は。

忠彌　則ち青江村正でござる。(ト正雪の前へ出す、正雪取つて見て、)

正雪　これぞ日頃に望む品。

忠彌　なぜ村正をお好みなさるゝな。

正雪　此の村正は足利家にては、不吉と嫌うて忌める品ゆゑ。(ト拔き放しよく〳〵見て、)燒刃鐵色あつぱれ業物。

快禪　すりや調伏なさんお心で。(ト大きく言ふゆゑ、)

正雪　これ、重ね重ねも音高し、竊に申せ。(ト四邊へこなしあつて、扇を取り要の方にて疊へ密事を書いて見

せ、呑み込ませるこなし、兩人差し寄り讀む思入よろしく、正雪書きしまひ）な、讀めましたか。

快禪　なにさま、これは御尤も。

忠彌　まことに深慮の遠謀、實に感服いたしました。

ト三人よろしくこなし、この内下手より九郎兵衛門の外へ出で、

九郎　楠普傳が家の寶、六韜三略の一卷、おれが盗んでどめて置いたを、卷きあげようばつかりに、我が儘氣儘もそれなりに打捨つておく由井の正雪、快禪坊に言ひつけて先刻の詮議、うか／＼しちやあ居られねえ、どめて置いた虎の卷、これから行つて取出して術よく金に賣代なし、そいつを路用に故鄕へ行つて一思案、どれ、お暇乞ひとしようかえ。

ト行きかけるを正雪きつと見やり、

正雪　こりや九郎兵衛、いづれへ參るか。

九郎　え。（トぎつくりこなしあつて、）なに、何處へも參りはいたしませぬ。

正雪　故鄕へ行くと申したではないか。

九郎　へい、それはあの、おゝ親父がちと病氣でござりますゆゑ。

正雪　そちには親が幾人ある。

九郎　へい、ふたアりございます。
正雪　両親はとくに先きだち、親はない筈。
九郎　いえなに、親ではない、あの兄。いや、兄はなかつた、イヽ妹でございます。
正雪　その妹は故郷には居らぬ筈、しかも有馬の湯治場に、湯女をいたしてをらうがな。
九郎　それはどうございませうやら。
正雪　それはともあれ、主に暇も告げずして故郷へ行くは我儘勝手、此の方にて許さねば行かれぬぞよ。
九郎　なに、行かれぬとは。
正雪　われ足留めの法を呪せば、一寸たりとも歩かれぬぞ。
九郎　所を覚えの鐵臑で、

ト九郎兵衛行かうとするゆゑ、正雪九字を切り印を結ぶ、薄ドロ〳〵になり、九郎兵衛行かうとして行かれぬこなしあつて、

こりやどうだ。(トいろ〳〵こなしある。快禪見て、)
快禪　何と、師匠の手並は恐ろしからうが。
九郎　動きもならぬ身の痺れ。

正雪　逃げられるなら逃げて見よ。

忠彌　稀代な修法もあればあるもの。

正雪　いや、見下げ果てたる。(トにつたりするを木の頭、)下郎ぢやなあ。

トよろしくこの道具廻る。

(奥座敷の場)――本舞臺正面三間中足本緣附の屋體、蹴込み、緣つか、踏段石、大和葺の屋根、四ツ谷丸太の柱、眞中茶立口、上の方床の間、袋棚、腰張したる茶壁、上下とも落間、あとへ下げて上の方遠州ずかし、そげ板網代の檜垣、竹の押緣をしたる塀、上手緣の側に御影石つくばひの手水鉢四ツ目垣、土手板、春の下草をあしらひ花盛り、桃の立木、下手よきところに大きなる春日燈籠、これより上寄りに柳の大樹、所々へ冬木の眞物を大分置き列べ、總て正雪住居奥座敷の模樣、後に此の道具殘らず居所にて替り、又此の道具へ戻る誂への仕掛。二重の上手に、谷五郎以前の打扮にて煙草盆を控へ、空を見上げ居る見得、道具半より、獨吟へ鶯笛をあしらひし鳴物にて、道具をさまる。

〽仇なりと誰かゆふべの遲櫻、よしや歎かじ散るのも花よ、あとに數々言の葉の、

谷五　(よろしく思入あつて、)春も更行く彌生の空、薄紅も三千年の今を盛りの桃の花、老を來啼ける

里の鶯、はて風情ある詠ぢやなあ。

〽色づく宇治の茶の花香、薫りもさすが園の内、

ト此の文句にて奥より以前の藤枝、薄茶の茶碗を茶袱紗に載せて持ち出來り、こなしあつて谷五郎の前へ置き、

藤枝 不束な手前ながら、お好みあらば今一服、

谷五 よいお服加減ゆゑ、つい過しました。

藤枝 お勸め申すもお茶ゆゑに、仰せに任せ差措きませう。

谷五 左樣なされて下さりませ。

藤枝 暫しの間も、御退屈でござりませう程に。(ト言ひながら袋戸棚にある本を取つて來て、)此の御本なりと御覽遊ばしませ。

谷五 なにさま、拜見いたしませう。(ト取つて表題を見て、)こりや兼好が徒然草、(ト開き見て、)實に徒然の折柄は、物の本に如くものはござらぬ、こりや好いものがござりました。

〽盡きぬながめもうはの空、

ト此の内谷五郎は本を見る、藤枝は谷五郎の刀へいろ〳〵こなしあつて、

藤枝　ほんにまあ、私とした事が、お腰を爰へ置きましては、（ト床の間にある刀掛へこなしあつて、）あれへなほして置きませう。

谷五　あゝこれ、それには及びませぬ。

藤枝　御遠慮には及びませぬわいなあ。

〽うつりて清き水鏡、ぢつとみどりの絲柳や。

ト藤枝は刀を取上げ、刀掛へ持つて行かうとして刀をよく〳〵見るこなし、谷五郎はやはり本を見て居る。

藤枝　もしあなた、異な事を伺ひまするが、此のお刀は御重代でござりまするか。

谷五　いや、その一腰は仔細あつて、三年あとに手に入れました。

藤枝　すりや、あの三年あとに。

谷五　如何にも左樣でござる。

藤枝　そんなら若しや、河内の國平岡の森のあたりで、お手には入りませぬか。

谷五　どうしてそれを。

藤枝　大方さうとは。（ト思はずきつと言ふ。）

谷五　え、何といたしましたな。
ト此の内よき程に後へ繁次郎、一刀をさし窺ひ居て、此の時ずつと前へ出で、
繁次　親の敵、覺悟。
〽亂れそめたる軒の春風、
ト繁次郎谷五郎を目がけ刀を拔きかける、谷五郎は目早く見て拔きかける肱を突廻して、ちよつと立廻つてとまり、
谷五　なに、某が敵とは。
藤枝　平岡の森に於て、そなたに討たれし其の人は、
繁次　我々二人が父上なるぞ。
藤枝　その時父が帶せし刀を、こなたが持つて居るからは、
繁次　相違もあらぬ父の仇。
藤枝　さあ、尋常に、
兩人　勝負せよ。(ト兩人双方より詰寄る。)
谷五　その不審尤もなれど、某平岡の森に於て一人の武士を討つたれど、年齡違へば御身等が父御とは

思はれず。

藤枝　卑怯の言譯いたすとも、正しく證據あるからは。

繁次　まこと敵と名乘られよ。

ト繁次郎拔いて切りかゝる、藤枝は手早く袋戸棚に匿しおきたる刀を出して拔き、兩人双方より切つてかゝる、谷五郎これを扇にてあしらひながら三人とも平舞臺へ下り、立廻つてきつと見得、三人よろしくあつて、谷五郎兩人をきつと留めて、

谷五　やあ、まこと敵か敵にあらぬか、その夜の次第一通り聞かれし上は疑ひはれん。心を鎭めて二人の衆、我が申すこと能く聞かれよ。

藤枝　今更聞いて詮なけれど、達ての言葉、仔細は如何に、承はらん。

繁次　して〳〵、其の夜の樣子は如何に。

谷五　如何にも仔細申し聞かさん。(ト合方になり、)されば、某十年あとより、武術修業の旅立も心願あつて六十餘州を隈なく巡り、一國毎に首塚を立て、既に河内に至りしは、三年あとの彌生の末、夫の平岡の森の古廟に塚を建てんと思ふ折、二十ばかりの手を負ひし女子馳せ來り、我れに向ひて申すやう、今澁川鄕兵衛といへる曲者、遺恨に依つて主人高安主膳を殺し、その場で此の身も

この深手、武士の情に助けくれよとたつての頼み、猶も樣子を詳しく聞けば、鄕兵衛といへる奴高安の娘に戀慕なし、花見の歸りを待ち受けて娘を奪はんとなしたるゆゑ、支へし親を討つたりとのことに、憎くき奴と尋ね出し、その鄕兵衛が首討つて首塚となし、これなる刀はその時に其奴が所持して居たりしゆゑ、分捕なして我が差料となしたるなり。

藤枝　それが眞實の事ならば、父を討ちしは、

繁次　あの、澁川鄕兵衛なりとや。

藤枝　して鄕兵衛を、あなたが討ちしとおつしやれど、それには何ぞ、

繁次　慥かな證據がござりまするか。

谷五　さ、その證據は。

藤枝　さあ證據は。

谷五　さあ、

兩人　さあ、

三人　さあ〳〵〳〵。

藤枝　何とでござる、金井どの。(トきつと言ふ。此の時奥にて、)

正雪　その證人、これにあり。（ト合方になり、正雪奥より出來る、兩人見て、）
繁次　あなたは、御主人正雪樣。
藤枝　どういふ譯で證人と、おつしやりまする。
正雪　おゝ、仔細つぶさに申し聞かせん。（ト誂への合方になり、）まだ其の時は某も武術修業の折柄にて、道に行き暮れ平岡の森の古廟に一宿せんと立寄る軒も宵闇にて、一人の武士の曲者の首打ち落し、手負の女を助けたる始終の樣子を木蔭にあつて見屆けしに、首打ち落せし太刀筋も勝れし手練と見たるゆゑ、猶も手の内試さんと共に姓名名乘合ひ、試合を遂げしに天晴武術と互ひに驚き、後には打解け語り合ひ、修業終らば共に尋ねて音信れんと約せし人は金井どの、それゆゑ其の夜鄕兵衞を討つたる人は、谷五郎どのなりといふ事は某しかと見屆けたり、殊に約せし事ゆゑに今日音信れ來られしは、僞りならぬこれ證據、それぢやに依つて正雪が、證人なりと申せしなり、これにて疑ひはらすべし。（ト正雪よろしくある、藤枝思入あつて、）
藤枝　さういふ事とは知らずして、疑ひ起せし身の淺慮、詳しい樣子を承はり、さつぱり疑ひはれました。
繁次　却つて恩ある金井どのを、敵と思ひし粗忽の段、

兩人　お許しなされて下さりませ。（ト兩人よろしく谷五郎へ向ひ詫びる。）

谷五　あゝいや、疑ひ受けしも無理ならず、親御が討たれしその時に帶せし刀を、所持なしをつたが此の身の不覺、今改めて此の一腰は御舍弟へ返上申す。（ト件の刀を繁次郎の前へ出し、）親御の形見と大事になされい。

藤枝　そのお志しは有難けれど、それではどうもお腰が明き。（トこなし、正雪思入あつて、）

正雪　おゝ、幸ひ今日忠彌殿より讓り受けたる此の刀。（ト持つて出たる刀を出し、）金井氏に進上申さん。

谷五　なに、この一腰を賜はるとな、辭退いたすは却つて失禮。（ト言ひながら取上げ見て、）物好きしたるこの拵へ、定めて中身は。

正雪　思召しに叶はぬかは存ぜぬが、中身は則ち千壽院村正の作でござる。

谷五　ふむ、村正とあるからは、豫て某望む所。

正雪　すりや其許にも、

忠彌　村正を。

正雪　言ひ合さねど、

谷五　心は一つ。

繁次　再び父の此の差料、わが手へ戻るもこれ偏に、
藤枝　金井さまのお蔭ゆゑ。
繁次　敵を討つて下されし、御恩に御恩を重ぬる御禮。
兩人　ちえゝ、有難うござります。（ト皆々よろしくこなし、正雪思入あつて、）
正雪　おゝ藤枝姉弟兩人は、斯くも親しき金井氏が既に敵を討たれしは、そち達二人が討つたも同然、今日をその日と戻りし刀を、佛間に供へ香華を手向け、亡き父親の回向をいたせ。
藤枝　重ね〴〵も厚きお詞、仰せにまかせ弟諸共、
繁次　佛間へ參つて回向いたさん。
藤枝　左樣なれば、
繁次　御兩所さま。
藤枝　後程お目に掛りませう。
〽打ち連れ奥へ、（ト兩人奥へはひる。）
〽入相近き春の日も、たけて二人はのどかにも、打解け合うて正雪は金井に向ひ、
正雪　思ひ寄らざる事起り、折角音信れたまはりしに、風情もなくて失禮致した。

谷五　其のお心遣ひはいらぬ事、それは兎もあれ貴殿に逢はゞ早速に問ひ申さんと思ひしも、事繁くして忘れしが、いつぞや河内で出合ひし時、首塚立てんとしたる折、怪しの少女立出でゝ我れを支へ止むるは、小賢しき振舞とたゞ一打と思ひの外、男子も及ばぬ其の働き。

正雪　それぞ身共が行ふ妖術。

谷五　やゝ、其許の妖術とな、してその術は、何人より受けられしぞ。

正雪　おゝ、如何にも、先年武術修業に諸國を巡り、播磨を越えて四國に渡り、

〽又九州に押し渡り、肥前唐津の西の方

天草島に着岸なし、

〽あなたこなたを徘徊なし、打ち眺むれば渺々と果しも知れぬ蒼海の、波濤の音や山彦の松柏茂れる峰高く、

又麓には清き流れの砂川、小高き巌に泰然と一人の老翁釣を垂れ、

〽餘念なぐさみ居たりしが、我れを見るより打ち招き、汝の相をつら〱見るに、事をなすべき器量ゆゑ、與へ傳ふる術ありと、授けられたる妖術なり、

何等の因みで某へ、斯かる奇術を傳へしと、

〽問へば老翁打ち笑みて、やがて用ふる時こそあらん、我れも平氏の成れの果、森宗意軒と言ひし者と、〽言ふ間もあらず搔き消す如く、飄々然と行方は更に白浪の、音のみ高き天草島、奇術を得たる事のあらまし。〽斯くの通りと語るを聞き金井は差寄り、

谷五　得たるも一德、某もいつぞはそれを見たきもの、これにて行ひ見せられよ。

正雪　それはいとより易きこと、其の夜の少女を又爰へ顯し申さん。手練の程を試されよ。

〽座を占め修する呪法の印、時に不思議やあたり忽ち闇々と、妖氣自と立ち昇れば、

ト薄ドロ〳〵になり、正雪文句の通りある、と兩窓をおろし、有合ふ煙草盆野伏間に替り、飛び交ふ事よろしくある、兩人是れを見てきつと見得、大ドロ〳〵になり、掛焰硝立ち、正雪の體を仕掛にてよき所へ消す、知らせに付き此の道具總體居所替りになる。

ト本舞臺正面丸物、本皮の杉林になり、上手つくばひの手水鉢、苔蒸し朽ちたる井筒に替り、下手の春日燈籠は古びたる石の五輪の塔になり、柳の大樹杉の木に替り、二重の蹴込み山の書割に打返し屋體の柱開きて杉の立木になり、屋根欄間とも茂りたる杉の枝になる。四ツ目垣、下草に至るまで

總體に拵る仕掛にて、此の道具納まる、
ト谷五郎は以前の儘平舞臺にて放心して居る。

〽茂り合ふ緣も黑き古木の杉、苔むす林影くらく、陰々朦朧たる山野の狀、爰は何處かしら、いゝ衣にとめ木の薰り風につれ、怪しき姿顯れたり。

ト大ドロ〳〵になり、下手の五輪の塔割れて撫子姬の靈、白振袖姬のこしらへ、片肌脫ぎかけ白柄の薙刀を持ち、立身にスツポンより迫上がる、撫子姬思入あつて薙刀をとんと突く、これにて谷五郎心附きしこなしにて起上り、

谷五　やゝ、今まで住居と思ひしに、忽ち四方に煙たつて、樹木茂りし山林に、怪しき女の其のいでたち、そも又汝は、何者なるぞ。

〽問ひ詰め寄れば、少女は打ち笑み、

撫子　自らこそは楠多聞兵衞正成が娘撫子が、露と消え行く亡き魂なり。

谷五　ふむ、扨は楠家の姬にてあるよな、して、何ゆゑに此處へ。

撫子　父が仰せに恥かしくも、おことが武術を試せとあれば、

谷五　なに、某が手練を試せとや、ふむ。なにさま最前正雪殿が言葉と符合、いざ某が、

〽言ひさま拔いて切りかくれば、心得たりと受流し寄るを左右へ拂ひ退け、悠然としてたゝずみたり。

ト谷五郎刀を拔いて切掛ける、撫子姫薙刀にてあしらひちよつと立廻つて兩人きつと見得、是れを誂への鳴物になり、兩人よろしき仕組の立廻りあつて、トヾ谷五郎五體すくみしこなしあつて、どうとなり下に居て、

流石は楠家の御血筋、兵法手練のお手の內、我々如きが及ぶべき、粗忽の段は幾重にも御容赦あれ。

〽と打ち詫び入り、金井は姫に打ち向ひ、

幸ひなれば承はらん、世の噂にも持囃す正成公が湊川にて足利勢の大敵を、小勢をもつて打破り、終に御最期遂げられし、軍の樣子御存じあらば、此の場に於て語られよ。

〽問ひ寄る折柄、小闇き木影に聲あつて、（ト谷五郎よろしくこなし、と此の時奥にて、）

正成　娘と共に正成が、軍の次第申し聞かさん。

谷五　やゝ、何と。

〽颯と吹きくる風諸共、雲か烟か立覆ふ中に立つたる其の扮裝、

ト大ドロ〳〵になり、誂への杉の立木の所へ煙を出し、件の杉左右に割れ正成の靈、甲冑陣羽織の裝にて軍扇を持ち現はれ出る。

谷五　〽こなたはきつと打ち見やり、（ト谷五郎これを見て、）現れたまふ御方は、正成公にて、御座あるか。

正成　如何にも、我は正成が死して此の世になき魂の、假に姿を現したるなり。

谷五　假令幽冥の御身なりとも、見え申すは武士たる者の身の冥加。

正成　今おことが夫の湊川にて合戰の軍略掛引、又我が討死なせしその樣子聞きたしと望む故、閻浮を立出で來りしなり。

谷五　すりや、お物語り下されんとな。

正成　望みに任せ、其の場のあらまし物語らん。

〽軍扇構へ悠然と座をたゞし、（ト正成よろしくこなしあつて、）今更語るも口惜しや、

〽頃は延元初めの年、しかも皐月の雨も止み、一天雲なく晴れ渡り、寄手の大將尊氏直義二十萬騎の兵をすぐつて、海陸一度に押し寄せたり。

その有様を見渡せば、
〽煙波渺々たる海の面、南の方は淡路島、繪島が崎に鳴門の沖、
西は播磨路須磨の浦、
〽東は攝津生田の森、四方三里に滿ち渡り、さも凄じき其の軍裝。

撫子　味方の兵は新田楠、その勢あつめて二萬六千騎。
〽新田の陣は和田の岬の小松原、二萬五千を五手に分け、

正成　我が勢僅かに七百騎、湊川に陣を敷き、待ち設けたる折柄に、
〽寄手は雲霞の群がる如く、一度に寄せし鬨の聲、日を驚かす大軍を味方の兵士は事ともせず、まつしぐらに切つて入り、突いては崩し切つては乘越え必死の勇戰、足利勢は粉の如くに切散され、どつと崩れて敗走す。
僅か四時に、戰ひ既に二十餘度、
〽皆是れ味方の勝なれど、身は鐵石にあらざれば、殘兵僅かに七十三人、
もうこれまでと引揚げて、
〽廣嚴寺に閉籠り、天運爰に盡きたりと、

我を始め一族郎黨、皆一度に、
〽腹かき切つて死したるなり、

撫子　その餘の事は言ふも益なし、
〽後の世までも楠が朽ちぬ武名の語り草、

正成　是れ正成が一世の誠忠、哀れとも思はれよ。
〽語り終れば金井はそゞろ涙を押し拭ひ、
ト正成よろしくある、谷五郎落涙のこなしあつて、

谷五　聞くも哀れな御物語り、今日目前に見る如く、さしも名に負ふ足利勢を、小勢を以て軍略奇兵に打破り、古今獨歩の名將も時到らずして遺恨の御最期、嘸御無念にござりませう。

正成　われ元より始終の勝利を得る爲めの軍にあらず、只尊氏直義が首取つて、
〽君恩に報ぜん事も水のあはれや湊川、岸のちぐさに置く露と果敢なく消えし我なれば、其恨み盡くる期もなく、中有に迷ふ我が魂魄。
武士の情に一味を語らひ、再び義兵の旗上げなし、修羅の苦患を救はれよ、
〽切に頼むに勇みたち、

谷五　我々大義を承け繼いで、修羅の御無念晴し申さん。

正成　あら有難や忝けなし、これにて此の世に念はなし、さらば、

〽につこと笑みて立ち上れば、又もや妖氣陰々と、立ち覆ふこそ怪しけれ。

ト大ドロ〳〵になり煙り立ち昇る、此内正成の靈引拔き見事なる正雪の打扮になる、是れと一時に知らせに附き、此の道具居所にて替る。と本舞臺元の道具に替り納まる。とドロ〳〵を打上げ、兩窓を明ける事、兩人よろしく思入あつて、

谷五　やゝ、あり〳〵見えし正成公は、正雪殿の妖術なるか、何ゆゑあつて貴殿には、正成公の姿を爰へ、現はされしぞ。

正雪　我元楠家の後胤なれば、亡き正成が恨みを承け繼ぎ、味方を集むる一つの手段。

谷五　すりや正雪殿には、楠家の恨みを承け繼ぎて、

正雪　大義を起さん其の爲に、人の強臆智略を試し、より〳〵集むる同志の輩。

谷五　して其の人數は、

正雪　これを見られしよ。

ト懷中より連判狀を出す。谷五郎取つて手早く開き、よく讀下すことあつて、

谷五　これぞ正しく、（トきつと思入、この以前より忠彌奥より出てゐて、）

忠彌　一味徒黨の、（ト言ふを谷五郎見て、）

谷五　左いふは丸橋忠彌殿。

忠彌　某とても正雪殿と心を合せ豫ての大望、貴殿に於ても異議はあるまい。

谷五　元より我も、足利家には恨みあり、

正雪　夫の桃園の例に習ひ、

谷五　如何にも我々兩人は、關羽張飛の勇を慕ひ、

忠彌　共々これにて義を結ばん。

正雪　折も幸ひ庭前の、桃の盛りはこれ吉端、

忠彌　善にもせよ惡にもせよ、名を後代に殘すべし。

正雪　いさぎよし〳〵、共に天運來るを待たん。

谷五　その天運も足利の今を盛りと時めける、これなる桃花も三士の爲めには。

　　ト手早く件の刀を拔き上手の桃の花を切落す、これを忠彌手早く取り、

忠彌　落花微塵に、（ト差添の柄へ打附けると、仕掛にて花散る、正雪これを見やりて、）

正雪 ふむ、あつぱれ才覺、
谷五 やがて本望、（ト刀を鞘へをさめるを木の頭。三人顏を見合せ、）
三人 むゝはゝゝゝゝ。
ト笑ふをきざみ、よろしく浪の音にて、
ひやうし 幕

三幕目

千葉屋敷の場
金井浪宅の場

（役名──金井谷五郎、千葉作左衞門、下部初藏實は大竹初藏、青波新六、澁川鄕藏、牧方伴作、船橋丹吾、飯盛專平、澁川下部熊平、紙屑買ぼろ八。千葉の娘お梅、下女お澤、其他。）

（千葉屋敷の場）──本舞臺三間の間常足の二重、本緣附、正面上手一間床の間、續いて瓦燈口、太鼓張りの襖、下手腰張りの茶壁、上の方一間折廻し障子屋體、此の前に山吹をあしらひし四ツ目垣、いつもの所枝折門、下の方建仁寺垣、櫻の立木總て武者小路組屋敷千葉作左衞門宅庭前の體。爰に下男箒を持ち庭を掃除して居る、門の外にぼろ八半纏着流し紙屑買にて、屑屋の籠を置き立つて居る。此の見得稽古唄にて幕明く、

ぼろ 屑屋でござい、屑はまだ溜りませぬか、お拂ひ物はござりませぬか。

下男　えゝ煩せえ、おれは掛りが違ふといふに。
ほろ　左樣ではござりませうが、お直段をよくお貰ひ申しますから、どうぞ賣つて下さりませ。
下男　おれが掛りなら賣つてやるが、紙屑は女中のほまち、其のお澤どんはお孃さまのお供で今日は留守だから、又出直して來るがいゝ。
ほろ　左樣なら又出直しませうが、紙屑のその外に何ぞお拂ひものはござりませぬか。
下男　何も外に賣る物はないが、隣家へ行つて見るがいゝ、此の頃越して來た浪人者、何ぞ拂ひ物があるかも知れぬ。
ほろ　お隣りへ越して來たのは、浪人衆でござりますか。
下男　主從二人の男世帶、主人が病氣で困る樣子、何かあらう聞いて見さつせえ。
ほろ　さういふ所がこつちの附目、實に屑ばかり買つて居ては、旨い酒が呑めませぬ。
下男　貧乏人を相手にして思ひれ安く踏倒し、錢儲けをしようとは、いゝや、風の悪い生業だ。
ほろ　そこが譬にもいふ通り、汚なく儲けて清く使へと、それでなければ此の節の辛い浮世は渡られませぬ。
下男　何ぞ隣で安く見倒し、儲け口があつたらば、敎へたおれに禮をさつせえ。

ぼろ　儲かりさへ致しますれば、きつとお禮をいたしまする。
下男　それはさうと、お孃さまも、もうお歸りがありさうなものだ。
ぼろ　左樣なら裏長家を、一廻り廻つて來ますから、其の內籠を置いて下さりませ。
下男　邪魔にならねえ所へ置いて行かつせえ。
ぼろ　はい〳〵畏りました。（ト籠を下手へ置き、）どれ、廻つて來ませうか。
ト鐵砲笊と秤を持つて呼びながら下手へはひる。
下男　いや、よく稼ぐ紙屑屋だ、どれ、おれも怠けず今の內、裏口の方を掃いてしまはう。
ト箒を持ち下手へはひる、稽古唄になり、花道よりお梅島田鬘振袖、家中娘の打扮駒下駄にて出來ろお澤島田鬘やつし裝、下女の打扮にて附添ひ出來る、後より鄕藏、伴作、丹吾袴大小雪駄にて出來り、花道にて、
鄕藏　これさ〳〵、御同道いたさうから、もそつとゆつくりお歩きなされい。
お澤　有難うはござりますが、ちと用事がござりますれば、一足お先へ參りますわいな。
伴作　これさ、お澤どうしたものぢや、我々共が送つて參れば、何も心配なことはあるまい。
丹吾　さうとも〳〵、それに又鄕藏殿のかね〴〵そちへ賴みもあれば、是非とも同道、

三人　致さねばならぬ。

お梅（思入あつて、）これ澤や、早う家へ戻らねば、お父様に叱られるわいの。

お澤　はてよろしうございます、わたくしが呑み込んで居ります。もし何れも様、何ぞ御用がございますなら、宅へまゐつてお聞き申しませう、失禮ながら急ぎますれば、お先へ參りますわいな。

ト　お澤お梅を連れて足早に舞臺へ來る、三人後より來り、枝折門の外にて、

鄕藏　これはしたりどういふものぢや、宅へ參つて申すくらゐなら、そちに手を下げて賴みは致さぬ、あの偏屈な作左衞門殿ゆゑ身共の口から申し難い、それゆゑそちへ內々で賴み置いた、あの一條よろしく返事を賴む〳〵。

お澤　さあ其のお賴みも、旦那樣へ申し上げた上でなければ、御返事は致されませぬ。

伴作　はてさて、それは野暮なこと、假令作左衞門殿へ申さずとも、もう年頃のお梅どの、どうでこれから何れへか緣組をなさるゝ身の上、

丹吾　丁度似合の澁川氏、下拵へさへ取極れば、表向き申し入れて澁川氏の御內寶、決してそちの科には致さぬ。

鄕藏　いらぬ心配いたさずと、附添ふそちが共々勸め、此の緣邊を取持ちくりやれ、禮は後にて澤山い

たさう。

お澤　假令どのやうにおつしやりましても、此のお取持は出來ませぬ。

お梅　これ澤や、早う家へはひりやいの。

お澤　さあ〳〵おはひりなされませ。（ト枝折門の内へはひらうとするを留めて）

鄕藏　どつこい、おぬしを逃しては、身共の願ひもかなはねば、

作作　家へはひらぬ其の先きに、

丹吾　色よい返事を澁川氏へ、

お澤　たとひ何とおつしやりましても、此の事ばかりは。

鄕藏　すりや、これ程賴んでも、

お澤　お孃さまの事なら、お斷り申しますわいな。（ト三人思入あつて）

作作　いや澁川氏こりやべん〳〵と申さうより、いつそのこと、手短かに、

鄕藏　いかさま、左樣いたさずばなるまい、御兩所、お手傳ひ下され。

兩人　承知いたしてござる。（ト腕まくりをする。）

お梅　こりやどうしたらよからうぞいの。

お澤　早うお家へおはひりなされませいな。（トお澤お梅を内に入れようとする。）
三人　どつこい、さうはならぬ〳〵〳〵。（ト捉へるを、）
お澤　えゝもう、お放しなされませいな。（ト突き退けるを、又々捉へる。）
三人　いや〳〵、放さぬ〳〵。
お澤　もし、旦那さま〳〵。（ト大きく言ふ。）
郷藏　あゝこれ、靜かに致せ〳〵。
ト捉へるを振拂ひ、お梅お澤内へはひるを郷藏又捉へる。これをお澤手ひどく突く、これにてたぢ〳〵と紙屑屋の籠にぶツかり、籠とも引くりかへり紙屑こぼれる。此の間に兩人は内へはひり、ほつと思入あつて、お澤お梅の手を取りついと奧へはひる、三人あとを見て、
えゝ忌々しい、たうとうお梅を逃してしまつた。
作作　扨澁川氏、貴殿のお望みが叶ふか叶はぬか、幸ひの此の紙屑、辻占を御覽なされい。
丹吾　これは好い思ひ附き、數多ある反故の内、善惡が分りませう。
ト三人にて段々と讀んで行つて、
郷藏　何ぢや、鳥目の病を治する良藥、

伴作　いや鳥目などは往々ある病。
丹吾　如何なる法かお聞かせ下さい。
鄕藏　鳥目の病を忽ち治する良藥は、酉の年月日時揃ひし誕生の女子、未だ肌をゆるさぬ內、その生血を取りて服する時は、忽ち平癒疑ひなし、
伴作　いや稀代の藥も、
兩人　あるものでござるな。（トこの以前より枝折門の內にて聞いてゐた、作左衛門思入あつて門を明け、）
作左　いや誰人かと存ぜしに、澁川氏を始め、いづれもお揃ひでござるな。
鄕藏　これは〳〵、作左衛門殿。
伴作　其の後は、
三人　御意得ませぬ。（ト辭儀をなす。）
作左　して何れもには、何をしてござるのぢや。
鄕藏　只今これへ參りしところ、石に躓き思はずもこれなる籠を打返し、紙屑がこぼれしゆゑ拾ひ集めて居りまする。
伴作　面白い反故がござるので、それからそれと開き見て、

丹吾　思はぬ暇を費してござる。

作左　只今あれにて承はれば、鳥目の病を忽ち治する祕法書が出ましたとやら、手前にお見せ下されぬか。

郷藏　さゝ、これにござる、御覽なされい。（ト出す、作左衞門取つて、）

作左　こりや聞き及ぶ、眞草翁が難病療治の祕法書、（ト開き見て、作左衞門思入あつて、）稀代な法もあるものぢや、人助けゆゑ此の書附、身共にお讓り下されぬか。

郷藏　屑の内より出でたる書附、お入用なら差上げませう。

作左　それは近頃忝けない、身共がお貰ひ申すでござる。（ト件の書附を作左衞門懐中する。）

郷藏　何は格別、作左衞門殿御在宿でござるからは、

伴作　それにて一服頂戴いたしたいわい。

丹吾　失禮御免下されい。

作左　御遠慮なく先づ〳〵あれへ。（ト合方になり、三人内へはひり、二重上手へ住ふ。作左衞門煙草を出し、）只今粗茶を進上いたさう。

郷藏　必ずお構ひ下さるな。

作左　して各々方には、何れへお越しでござつたな。

郷藏　いや今日は天氣も好く、ずんと長閑でござるゆゑ、これなる御兩所諸共に觀世音に參詣なせしに、御息女にお目に掛りしが、馬鹿者多き花の頃途中をお案じ申すゆゑ、御門まで我々にてお送り申してござる。

作左　よくこそお送り下された、御親切の段身に取つて、千萬忝けなうござる。

伴作　實に當家の御息女は三十二相備はる御器量、かゝる御息女をまうけられしは、お羨ましきことでござる。

丹吾　最早御婚禮盛りなれば、好き御緣をお求めなされ、早く御安心なさるゝが、失禮ながらようござる。

作左　不束な娘をば左樣にお褒め下されては、近頃痛み入つたる次第、先年母が死去の後一人娘にいたはり過ぎ、我儘氣儘に育てしゆゑ、幾歲になつても子供同然、只今後悔いたします。

郷藏　(思入あつて、)いや〳〵我儘氣儘にござらぬ、物靜かなるお梅どの、最早二八の嫁入盛り、隨分貴殿のお爲になる歷然とした相手がござるが、御緣談は如何でござるな。

作左　仰せの如く年頃ゆゑ、相手によつては作左衞門御相談もいたさうが、して、其の相手と申すは。

郷藏　さあ、その先方の相手といふは、

作左　何れの何者でござるな。

郷藏　さあ、其の相手と申すは、ちと手前からは申し兼ねる、どうか御兩所お賴み申す。

兩人　承知いたしてござる。

作左　して其の相手と申すは。

伴作　相手と申すは、餘人にあらず、

丹吾　これに居らるゝ澁川氏。

作左　なに、澁川氏が手前の娘に。

ト郷藏面目なき思入にて、扇にて顏を隱す。作左衞門呆れし思入、伴作丹吾前へ出て、

伴作　疾よりこれなる澁川氏には御息女に執心にて、手前に媒介いたしくれと再應賴まれてござれ共、お物堅い貴殿ゆゑ申し兼ねて居りました。

丹吾　幸ひのよき折柄、いはゞ御身の極る事ゆゑ、我れ〳〵共より申し入れるが作左衞門殿の思召は如何でござるな。

作左　各々方の思召は忝なうはござれども、今も申す一人娘、彼女を他家へ緣附けましては家の血筋

が絶えますゆゑ、緣談の儀はお斷り申す。

鄕藏　承はれば御尤も、然らばどうか手前をば、聟にお取り下さるまいか。

作左　すりや、あの貴殿を。

鄕藏　御不承知かは存ぜぬが、身不肖ながら澁川鄕藏、武藝に於ては極意を極め、澁川流の遣ひ手にて槍は八重垣、弓は藤卷、馬は大坪、牛は高輪、川童流の水練まで學ばぬものは一つもござらぬ、まつた持參がお望みなら百や二百はまだな事、三百四百五百羅漢、うそぢやござらぬ本所五ツ目六ツ目七ツ目、年頃も丁度似合のよき釣合、聟に取つても不足はござらぬ。

作左　(此の内思入あつて、)默れ〳〵、えゝ默らつせえ。程よく申せば附上り、出るまゝの雜言過言、身不肖ながら某も北條流の軍學を指南いたす作左衞門、お手前如きでも侍を娘が聟にいたさうか、殊には持參の金子などゝ聞くもなか〳〵穢らはしい、とつとゝ爰を歸り居らうぞ。

トきつと言ふ、三人むつとなし、

伴作　高の知れたる素浪人に、詞を下げて賴むのに、いゝでも侍とは餘りの雜言。

丹吾　今一言申して見よ、その座は立たせぬ作左衞門、返答いかに、

兩人　なゝ何と。(ト兩人刀を持つて詰寄る、作左衞門思入あつて、)

作左　おゝ申さいで何といたさう、でも侍に相違なきゆゑ、申したが何とした。
兩人　その舌の根を。（ト作左衞門へ立ちかゝるを郷藏留めて、）
郷藏　あこれ、御兩所お待ちなされい、お手前方が老人を相手にいたすは大人氣ない。
兩人　ぢやと申して。
郷藏　はて、いよ〳〵望みのかなはぬ時は腕前見せて返報なすが、ならうことなら娘の聟に、いやさ向うが年をとつて居れば、手前に免じてお控へなされい。（トよろしく兩人を留める。）
伴作　澁川氏の仰せがなくば、料簡ならぬ所なれど、
丹吾　たつてお留めなさるゆゑ、今日は此の儘立ち歸るが、此の返報は、
兩人　重ねてきつと。
作左　某事は好まねど、武士の一分立たぬとあらば、いつ何時でも相手にならう。
郷藏　これさ〳〵、作左衞門殿如何いたしたものでござる、持參の事を申せしにあれは身共が出損ひ、幾重にもお詫びいたせば、後にて篤と御思案あつて、是非とも御息女お梅どのを。
作左　その儀は身共不承知でござる。
郷藏　そこを何卒。

作左　えゝ、武士の詞に二言はござらぬ。

兩人　それぢやに依つて。（ト又立ち掛るを鄕藏留めて、）

鄕藏　はてまあ、拙者にお任せなされい。（ト無理に兩人を宥め、門口の外へ出て、）はてさて、馬鹿な親仁でござる。

伴作　あの老耄め、詞では所詮貴殿の望みはかなはぬ。

丹吾　それゆゑ、彼れを討ち果し、娘を貴殿へ取持つ所存。

鄕藏　その御厚志は忝けないが、先づ此の戀をかなへるには作左衞門より其の先きに、討ち果すものがござる。

伴作　して其のものは、

丹吾　いづくの何者。

鄕藏　此の家の隣家に住居いたす、金井谷五郎でござる。

伴作　何さま彼奴は貴殿の御舍兄、鄕兵衞殿を討つたる敵。

丹吾　殊に又、御執心のお梅どのが惚れて居れば、貴殿の爲には戀の敵。

鄕藏　それゆゑ彼奴を討つて取り、身共が望みを叶へる心底。

兩人　然らば是れより取つて返して、

鄕藏　あいや、一先づ我が家へ立ち歸り、時刻をはかつて暮相より、

伴作　何さま、それも御尤も。

丹吾　左樣ござらば、

兩人　澁川氏。

鄕藏　さゝ、お越しなされい。

ト唄になり、三人花道へはひろ、作左衞門二重に煙草を喫み居て、

作左　いや、馬鹿な奴もあるものぢや。

トあざ笑ふ、合方になり、奧よりお梅お澤出來り、

お梅　どうなる事かと存じましたに、事なく三人戻りまして、

お澤　やう〳〵痞が下りましてござります。

作左　何さ〳〵、彼等如きなまくら武士、假令何人參らうとも、物の數とも思はねば、必ず心配無用にしやれ。

お梅　左樣とは存じますれど、私の事よりしてもしお父樣のお身の上に、お怪我でもある時はと、お案

じ申して居りましたわいな。

お澤　觀音さまより歸りがけ途中で出逢ひ兎やかうと、跡を附けてお家へ參り、お孃さまの無理所望、ほんにまあ押しの強い、呆れた人達でござりますな。

作左　それ〳〵、常々他出するなと申しておくは爰のこと、此の後とも女子ばかりでは遠方へ出ぬがよいぞ。

お梅　もう〳〵これに懲りまして、風呂へも澤と一緒でなければ、參ることではござりませぬ。

お澤　あのやうな馬鹿者が、多く世界にござりますゆゑ、なるたけ外へお孃さまをお出し申さぬやうには致せど、言ふに言はれぬ御願があつて。（ト言ひかけるを、）

お梅　あゝこれ、何にも言うてたもるなや。

作左　その娘の願も、大概。

兩人　えゝ、（トびつくりなす、作左衞門思ひ入あつて、）

作左　それと云はねど此の前の、（ト花溜に入れてある櫻の枝を取つて、）庭に植ゑたる櫻木も、花咲く春の時到り、見事に咲きし此の一枝、これを隣家の金井氏へ床のながめに送りたい、娘そちが自身に持つて行きやれ。（ト出す。お梅取つて、）

お梅　そんなら是れをお隣りへ、
お澤　お送りなさるお使ひに、
作左　娘を遣るもその花の、盛りを見する親心。
お梅　花物言はねど父樣の、その心はお隣りの、
お澤　金井樣が此の櫻を、お床の花にお望みあらば、
作左　所望とあらば何惜しまん、隔ての垣も明け渡し、
お梅　もしやあなたの御意にかなひ、
お澤　花の盛りを手折りても、
作左　見ぬ顏なすが風雅の道。
兩人　そりやまあ、ほんまに。（ト嬉しき思入。）
作左　はて、花盜人に、（トお梅の顏を見てにつこり思入。）罪はないわえ。

ト作左衞門よろしく思入、兩人嬉しきこなし、唄にて此の道具廻る。

（金井浪宅の場）＝本舞臺三間の間中足の二重、本庇本緣附、正面更紗の暖簾口上手一間の壁床、これへ不動の掛物を掛け、此の前に挾箱を置き、下手押入戸棚、上三尺佛檀、正面誂への位牌、

鶴龜蠟燭立て、香爐花立佛具よろしく飾り、此の脇三尺本箱手箱などの書割、上の方一間折廻し障子屋體、この前に手水鉢、鉢前に四ツ目垣、いつもの所門口、金井寓といふ表札、下の方玉椿の生垣、總て金井谷五郎浪宅の體。二重に初藏着流し若黨の打扮にて、大和風爐へ藥土瓶を掛け團扇にて火を煽ぎ居る、平舞臺下手に以前のぼろ八鐵砲笊を持ち控へ居る、此の見得合方にて道具留まる。

ほろ　もし何ぞお拂ひ物はござりませぬか、直をよくお貰ひ申します。

初藏　いや、此方の家は新世帶ゆゑ、まだ入用の道具さへ買ひ揃はぬ不自由勝ち、何も拂ふやうな物はない。

ほろ　左樣でもござりませうが、承はりますれば旦那樣も御病氣とやら、何ぞお拂ひものでもござりますなら、私に賣つて下さりませ。

初藏　旦那樣が御病氣だとて、其の日の煙を立てかねて、拂ひ物をいたすやうな難澁はいたさぬわい、失禮な事を言ふ奴ぢや。

ほろ　いえ、御近所で承はりましたからお聞き申しましたのでござります、どうか紙屑でも溜つて居るなら、お拂ひなされて下さりませ。

初藏　紙屑もまだ溜つては居らねば、又その内に來るがよい。

ぼろ　左樣なら、溜りましたら取つておいて下さりませ。

初藏　溜つたら取つておいてやらう。

ぼろ　（門口へ出て、）これは大そう當が違つた。屑はございく〜、（ト呼びながら下手へはひる。）

初藏　旦那樣が斯うやつて御病氣でおいでなされば、屑屋までが附込んで拂ひ物はないかなどゝ煩く言つて參るのも、望みある身に世間を憚る貧乏暮しを致すゆゑ、忌々しいことだなあ。

トよろしく思入、稽古唄になり、下手より以前のお澤花盆の上へ櫻の枝を載せ、お梅の手を引き出來り。

お澤　はい、御免下さりませ。

初藏　何方でございますな。（ト門口へ來て戸をあけて、）これはお隣りのお孃さまにお女中のお澤どの、ようこそおいでなされました、さあく〜此方へお通りなされませ。

お梅　左樣なら、お許しなされませ。

ト合方になり、お梅は二重へ住ふ、お澤は下手へ來り、下に居て、

お澤　もし初藏どの、これはお庭に咲きました木咲きの櫻でございますが、旦那樣へ御眼病の御見舞のしるし迄にお目に掛けよと、手前主人作左衛門の申附けにて、お梅さまがお使ひにお出なされて

でござりまする。(ト件の櫻の枝を盆に載せしまゝ出す。)

初藏　これは〳〵お使ひがらと申し、見事なるその櫻、旦那樣へ御覽に入れなば嘸お悅びでござりませう。どれ、ちよつとお起し申して。(ト立ち掛る時、上手障子屋體にて、)

谷五　いや參るには及ばぬ、先刻よりこれに起きて居るわえ。

ト合方きつぱりとなり、上手障子屋體を明け、谷五郎五十日鬘着流一本差し、鳥目の思ひ入にて出で二重眞中へ住ふ、お梅嬉しきこなし。

初藏　すりや、旦那樣には御病床にて、

谷五　御隣家より御息女のおいでの趣き承はつた。花の頃にはござれども眼病にて他出いたさず、斯く引き籠り居る所へ見事なる此のお見舞、吉野初瀨の風景を居ながらに見る心地にて、よき慰みをいたしまするぞ、宜しく親御へお傳へ下され。

お梅　さしてもないお見舞を、其のやうに仰やいましてお悅び下さりますとは、お嬉しう存じます。

お澤　もしお孃さま、あなたはそれなる花にあやかり、旦那樣のお枕頭においでなさりたうござりませうな。

お梅　ほんにそなたの言やる通り、自由になるなら此の花に、わたしやあやかりたいわいの。

谷五（これを開かぬ顔にて、）こりや初藏、お持たせの此の花を、佛前へ供へてくりやれ。

初藏　畏まりましてござります。

ト佛壇の前へ挾箱を直し、件の花を花溜へ入れてその上へ載せ、佛壇へ供へる、お梅は谷五郎の顏を見て、

お梅　四五日お目にかゝらぬうち、大そうお窶れなされましたが、お目は如何でござりますな。

お澤　お隣り同志で居りながら、度々お見舞申しますことも、お煩からうと存じまして、御遠慮申して居りまするが、毎日々々お梅さまにはあなたの事を申し暮し、お案じなされてゞござりまする。

谷五　さしてもない病氣をば、其のやうにお案じ下され、何とお禮を申さうやら忝なう存じまする。眼病ながら晝の内は何も替りし事はなけれど、日が暮れますと何一つ黑白も分らね鳥目の煩ひ、ほとんと困り入りまする。

初藏　それに又御覽の如く、明けても暮れても旦那樣と只二人にて話しもなく、退屈いたしをつたる所へ、見事な花をお見舞に、又お美しいお孃さまやお澤どのゝおいでにて、好い保養をいたしまする。

お澤　又初藏どのゝ程の好い、其のやうな事おつしやると上りたうてならぬ所ゆゑ、朝から晩まで上り

ますぞえ。

お梅　ほんに澤の言やる通り、お邪魔でなくば毎日々々お見舞に上りまして、お側で御用が足したいけれど、お嫌ひなさるであらうと思うて。

谷五　何のお嫌ひ申さうぞ、浪々の身にかゝる眼病、見る影もなき男世帯むさくろしいもお厭ひなく、御親切なる其のお詞、この身に取つて如何ばかりか大慶に存じまする。

初瀬　お嬢さまと旦那様を斯うしてお二人並べて見れば、丁度似合のよい御夫婦、世が世であらばお隣り同志、世話がなくてよけれど、何を申すも御浪々、殘念な事でござりまする。

お澤　（これを聞き思入あつて）もしお梅さま、爰等が丁度よいお首尾、日頃あなたのお願ひを、ちやつとそれでおつしやりませ。

お梅　それぢやというて、恥かしうて。

お澤　其のやうな事ではいけませぬ、押しを強くおつしやりませ。

お梅　いえ〳〵恥しうて、言はれぬわいな。

谷五　なに、恥しいと言はるゝのは。

お澤　はい、其の恥しいと申しましたのは、あなた様にお梅さまが。

谷五　なに、お梅どのが某に、

初藏　如何なされましたな。

お澤　(思ひきつて、)はい、あなた樣の御新造におなりなさりたいと、おつしやりますのでござります。

谷五　えゝ。

　　トびつくり思入、お梅恥かしきこなしにて顏を隱す。媚かしき合方になり、

お澤　差附けがましき事ながら、此の程爰へあなた樣がお引移りの其の時に、御隣家ゆゑに手前方へお近附にお出でなされし其の折、これなるお孃さまがあなた樣を思ひ初め、とても女子に生れたらあゝいふ殿御に添ひたいと私へのお話しに、折がなあらばと思ふ内此の程よりの御眼病、その御病氣の御平復と、思ふ願ひのかなふやう、お梅さまには觀音樣へ三七日の御願を籠め、今日滿願にお取りなされし其の御鬮も末の吉、正しく末々は女夫にならるゝお知せと、お梅さまのお悦び、かほどに思ふお心を御不便に思召し、其のお願ひを旦那樣、おかなへなされて下さりますやう、お杉役にわたくしから、お願ひ申し上げますわいな。(トお澤思入にて言ふ。お梅恥しく俯きゐる。)

谷五　浮浪人の拙者めを、それ程までに思召し、お慕ひ下さるお梅どの、忝なう存じます。

初藏　此の美しいお孃さまが、旦那樣をさ程まで、お慕ひなされ下さるとは、私もとも〴〵に悦ばしう

ございまする。

お澤　あのお詞がよいしほなれば、旦那様へ直き〳〵に、お願ひなされませいな。

お梅　それぢやというて。

お澤　お恥しいも御尤もぢやが、それではお願ひがかなひませぬ、思ひ切つておつしやりませいな。

トお澤お梅へすゝめる。

お梅　不束なわたくしを御不便と思召して、お厭であらうと此の身の願ひ、おかなへなされて、下さりませいなあ。（ト共々に言ふ。）

トもじ〳〵と言ふなどもどかしがり。

兩人　下さりませいなあ。（ト共々に言ふ。）

谷五　折角のお願ひながら、此の儀はおかなへ申されぬ。

兩人　えゝ、何とおつしやりまする。

谷五　さ、かほどまでに拙者めをお慕ひ下さるお志し、決して徒には思はねど、町家と違つて武家にては、不義徒は堅い戒め、殊更御親父千葉殿も武道をみがく御氣質ゆゑ、みだらがあつては相濟まぬ。

初藏　成程、これは旦那様のおつしやる所が御尤も。

お澤　そんならやつぱり、お梅さまの。
お梅　このお願ひは、かなひませぬか。
谷五　かなへられぬは御親父の、千葉殿へ濟まざるゆゑ。
　　ト此の內下手より以前の作左衞門出來り、門口に窺ひ居て、
作左　いや、其の御斟酌には及び申さぬ。（ト門口を明け內へはひる。）
谷五　や、これは御隣家の作左衞門殿。
初藏　扨は親御も御得心にて。
作左　近頃さしつけがましけれど、親が許せし娘が願ひ。
谷五　何とおつしやる。
作左　谷五郎殿、御免下されい。
　　ト合方きつぱりとなり、作左衞門二重眞中へ住ふ。
お澤　お梅さまのお心がお愛しうござりますゆゑ、お媒介をいたしましたが、思ひがけなく旦那樣のお耳に入つて、今となり申し譯なき身の越度、
お梅　もしお父樣、必ず叱つて下さりますな。

作左　何の叱つてよいものぞ、そちばかりでない此の親も、疾くより惚れし金井氏、決して叱りはいたさぬぞ。

谷五　扨は拙者の病氣見舞に、御息女を遣はされしは、

初藏　何か、御所存あつての事か。

作左　武士の身にあるまじきみだらなこと、其許の思召しも恥かしけれど、只今も申す通り、實は身共が惚れしゆゑ、櫻の枝を持たせお見舞に遣はせしは、不束なれど其許のお心にかなひなば、娘を差上げ申し度く、花物いはぬ心の謎、願ひをおかなへ下さらば娘が悦び、身共が安心、お聞き濟み下さらば、千萬忝なう存じ申す。

谷五　今海内にて軍學の一二と云はるゝ千葉氏の、その御息女を下されんとは、願うてもなき縁邊なれど願ひある身にこの儀ばかりは、御返答がなりませぬ。

作左　願ひある身と仰せらるゝは、如何なる願ひござつてなるぞ。

谷五　さあ、其の願ひは、言ふに言はれぬ。

作左　言ふに言はれぬ願ひとは。

お梅　（思入あつて、）不束なわたくしゆゑ、谷五郎さまのお心に、かなはぬのでござりませう。

谷五　全くもつて左にあらず。
お澤　そんなら此の場でお願ひを、おかなへなされて下さりますか。
谷五　さあ、それは。
作左　但しは貴殿のその願ひ、身共にお明し下さるか。
谷五　さあ、それは。
お梅　此の身がお厭でござりますか。
谷五　さあ、
お澤　願ひをおかなへ下さりまするか。
谷五　さあ、
三人　さあ、
皆々　さあ〳〵〳〵。
作左　身不肖ながら作左衞門、決して他言は仕らぬ、其の心願をお明し下され。
谷五　この儀ばかりは。(ト谷五郎術なき思入、作左衞門も思入あつて)
作左　娘を娶り下さらば申さずとも聟舅、善惡ともに其許のお力になる身共が心底、かほどに思ふ某

をお疑ひあるは、谷五郎殿、近頃お恨みに存じ申す。

ト作左衞門きつと言ふ、谷五郎困ゐ思入。初藏これをかひとつて、

初藏　いや憚りながら、手前主人が身の願ひと申しまするは、左程におつしやる御息女と御緣組がならざるゆゑ。

作左　そりや何ゆゑに。

初藏　その仔細と申しまするは。（ト言ひ掛けるを、）

谷五　あゝこれ、めつたなことを。

初藏　必ず御案じなされますな、下郎が申し譯いたしまする。（ト初藏前へ出る。合方替つて、）

お澤　して、御緣組がならぬとは。

初藏　何をお隱し申しませう、主人には幼きより許嫁がござります。

作左　何と言はるゝ。

初藏　許嫁さへない事なら、御親父といひ御息女といひ申分なき此の御緣、お媒介いたしましてもお取り結びいたしますれど、許嫁ゆゑ是非がござらぬ。

お梅　何れのお方か知らねども、谷五郎さまと幼いよりお許嫁なされしとは、お羨しい事ぢやなあ。

お澤　どうかそつちの許嫁をお斷りなされまして、お梅さまと御縁をばお結びなされて下されませぬか。

初藏　さあ、これが町人百姓なら約束變替いたせども、先方も名ある武士の娘、浪人の身も厭はずに近近輿入いたさすと、此の程より再度の使ひ、只今になり武士の身でその斷りは申されませぬ。

作左　すりや、それゆゑに金井氏には。

谷五　今初藏が申せし如く、幼年の折親々が許嫁せし娘ゆゑ、折角の思召しをお斷り申す身共が苦しさ御推量下されい。

お澤　そんならどうでも、

お梅　この身の願ひは。

谷五　刀の手前是非なくも、此の縁組はいたされぬ。

お梅　はあゝ。（ト泣き伏す。）

お澤　おゝ御尤もでござりますく。（トお澤介抱なす。作左衞門思入あつて、）

作左　こりや娘、嘸本意ない事であらうが、許嫁がござるとあれば最早そちが願ひはかなはぬ、縁なき事とあきらめよ、此の縁組が調はで殘念なるはそちよりも、親が心は十倍なるぞ、さりながら武士の身の上、愚癡な心を出さずに、思ひ切つて宅へ歸りやれ。

お梅　いえ〳〵わたしは歸りませぬ、あなたに添はれぬ事ならば、死ぬる覺悟でござりますわいな。

ト又泣き伏す、作左衞門不便なといふ思入。

お澤　これはしたり。お孃さま、死なうと覺悟なされしも御尤もではござりますが、それではあなた親御樣へ御不孝になりまする、觀音さまの御鬮も末の吉でござりますから、長い月日のその内には又お願ひもかなひませうから、一先づお歸りなされませいな。

お梅　いえ〳〵、わたしや爰に居て、焦れ死に死にますわいな。

谷五　すりやそれ程に拙者めを。（ト言ひかけるを、）

初藏　あもし、お許嫁がござりますれば、たゞ何事も此の儘に。（トちつと留める。）

谷五　親の許せし許嫁ゆゑ、餘儀なく斷る拙者が苦しさ、御推量下されい。（トよろしく思入。）

作左　お許嫁のござるのを存ぜぬゆゑに娘をば、押付け業に差上げて、面目次第もない儀でござる、作左衞門は子に甘きうつけ者と思召さうが、幼年の折母に別れ我が手しほにて育てし娘、不便ゆゑに愛に溺れ共々推參いたせし某、必ずお笑ひ下さるな。こりやお梅、そちも武士の娘でないか、何をめそ〳〵泣き居るのぢや、涙を拭うて宅へ歸れ。

お梅　どうぞお慈悲に私を、爰に置いて下さりませ。

作左　まだ〳〵左樣な未練を申すか、そちが心も察し居ると、あれ程身共が申すのに、そちが耳へはは
ひらぬか。
お梅　たとひ何とおつしやつても、わたしや歸りませぬわいな。
作左　甘き育てと此の親が、笑はるゝも存ぜぬか、さあ歸れと申さば、疾く〳〵歸れ。
お梅　はあゝ。（ト泣き居る。）
お澤　さあ、お父樣のお恥になれば、一先づお歸りなされませ。（ト言つてもお梅頭を振る。）
作左　まだ歸らぬと申すか。（トきつと言ふ。）
お澤　いえ、お歸りなされますわいな。
作左　言はうやうなき未練者めが、（ト言ひながら不便だといふ思入、お澤お梅をだましながら手を取り立上る、
作左衞門思入あつて、）よしなき事にて長座いたし、御病氣のお邪魔せし段御高免下されい。
谷五　そのお詫は此の方より、申し上げねばならぬ仕儀。
作左　假令御緣は組まずとも、隣家の事ゆゑ此の後とも、
谷五　斯く浪々の私共、
初藏　萬事の御助力、

作左　隣家の誼、

谷五　隔てに垣なく、

作左　御別懇に、

兩人　いたすでござらう。

初藏　左樣なればお孃さま。

お梅　これがこの世の。（ト谷五郎の方へ行かうとするを、）

お澤　あゝもし。（ト留める。）

作左　御眼病大事にめされ。

ト唄になり、作左衛門先にお梅泣きながら跡へ心の殘るを、お澤手を取り下手へはひる。

初藏　谷五郎殿。

谷五　これ。（ト時の鐘合方になり、）かねて貴殿も正雪殿の其の大望に一味なし、大竹氏ともあらうものが、下部姿に身を窶し、拙者と共に寓居なすも、丸橋氏が懇意なる千葉作左衛門を一味の內へ合體させん計略なりしに、我れに娘の戀慕なすはこれ幸ひの手續きなれど、戀路を以て引き入れては武士の本意にあらざるゆゑ、其の斷りに困りし折柄、貴殿の助言で助かりました。

初藏　人目を忍ぶ下郎の身に差控へてをつたれど、困られしゆゑ取り敢ず許嫁の娘ありと、餘儀なきやうに斷りしが、思へば噂に引替へて娘が愛に溺るゝ千葉殿、正雪殿の懇望なれど左程器量のある人とも、拙者が目からは存じませぬ。

谷五　深き所存は知れざれど、娘が愛に引かされしは、如何にも左程の器量とは存ぜられねど心中の、底意知れざる作左衞門。

初藏　娘を餌に我々が、

谷五　大望探る所存なるか、

初藏　鳥のそらねは測るとも、

谷五　人の心は測られず、

初藏　善惡知れぬ、

谷五　今日の縁組、

初藏　油斷ならざる、

兩人　事どもぢやなあ。（ト兩人よろしく思入あつて）

初藏　おゝ何かの事に取紛れ、はたと失念いたせしが、先程快禪殿より其許へお手紙が參つてござつた。

ト懐中より出す、谷五郎取つて、

谷五　なに、快禪殿より某へ。（ト件の手紙を開き見て、）やゝ、此の文體にては忠彌殿を始め、同志の方々某の眼病は僞りにて、隣家なる千葉氏の娘の戀慕に心迷ひ聟になつて一味を脱れん心なりと、一同疑ひをるとの知らせ、然し正雪殿には某が二心なきを御存じとの文言なれども、疑ひ受けしは甚だ心外。

初藏　すりや同志の方々が、貴殿の心底疑ひ居るとな、よし／＼左樣な儀なれば某參り、貴殿が心の潔白を、言開きな仕つらん。（トずつと立ち上る。）

谷五　あゝいや大竹氏、某に成替りおいで下さるは忝なけれど、必ず共に御短氣なきやう、宜しうお取り計らひ下されい。

初藏　委細承知仕つる、左樣ござらば金井氏、

谷五　御苦勞に存じまする。

ト初藏花道へはひる、時の鐘打ち上げ、谷五郎後を見送り床の淨瑠璃になる。

淨るり　〽春の日を惜しむ日影も山の端へ、入相告ぐる夕暮に、軒を目當に門口へ忍ぶ曲者ありとも知らず、谷五郎は歎息なし、

ト時の鐘ばた〳〵になり、花道より以前の伴作走り出來り門口より窺ふ、內には谷五郎思入あつて、

谷五 世の諺にも申す如く、勝たれぬものは主と病、俄の暖氣に逆上なして此の程よりの鳥目の煩ひ、暮れ六ツ限りに黑白もわからず、大望ある身に心急かれ、片時も早く直さんと種々藥用いたせども、更に少しも驗なく、夜に入つては盲目同然、浪花表へ發足なしても、いでといふ時夜に入つて目が見えざれば不覺を取り、

〽もし俘虜にでもなる時は、臆病ゆゑと同志の者にさみせらるゝのみならず、末代までも名の穢れ、

如何なればこそ此の期に及び、斯かる業病煩ひしか、

〽日頃信心なし奉る、菅谷不動の靈驗もあらざる事か口惜しやと、無念の涙に暮れたりしが、

ト此の內谷五郎は口惜しき思入、門口の伴作はこれを聞き、しめたといふおもひいれ。谷五郎氣を替へて、

眼病ゆゑによしなき繰言、誰ぞに是れを聞かれなば愚癡の至りと笑はれん、いくら矢竹に思へども藥のきかざる上からは、猶ほ此の上とも不動尊へ祈念を掛け、眼病平癒お願ひ申さん。

〽床に掛けたる菅谷の不動尊へ合掌なし、一心不亂に祈念なす折柄爰へ連立ちし、那謨三曼茶ばさらだん、

ト谷五郎床の間の不動尊へ向ひ拜み居る、太鼓入り相撲甚句の合方にて、花道より以前の鄕藏、丹吾、專平何れも袴大小、熊平紺看板の中間にて附添ひ出て來る、これにて伴作花道へ行く、

鄕藏　牧方氏、如何でござるな、

伴作　門より篤と窺ひましたが、宅には金井谷五郎たゞ一人でござります。

鄕藏　それはよい所へ參つた、假令金井がどれ程の劍術手練あればとて、

丹吾　向うは一人、こちらは大勢、必ずお案じなさるゝな。

專平　最早金井を討つたやうな、心持がいたします。

伴作　まだ其の上に丈夫なのは、金井は此の程鳥目にて暮れ六ツからは皆目見えぬと、述懷なしてをつたれば、袋の鼠を取るより易し、

鄕藏　返す〲もよき手つがひ、

丹吾　日頃の腕前、

四人　見せるは此の時、

郷藏　必ず共にぬからぬやう。

四人　心得てござる。

〽肩肘張つてのつさのさ、金井が門へ立ちかゝり、

ト皆々舞臺へ來り、熊平に案内いたせといふ思入、熊平心得

熊平　お頼み申す〳〵。（ト谷五郎振り返り、）

谷五　何方なるか、おはひりなされい。

熊平　旦那様、はひれと申しまする。

郷藏　然らば何れも、

四人　先づ〳〵。

〽郷藏始め無法の族、詞も掛けず入り來れば、

ト郷藏先きに皆々内へはひろ、谷五郎心得ぬ思入にて、平舞臺へ下り、

谷五　見受けますればお歴々方、斯く見苦しき浪宅へ何御用あつて御入來なるか、拙者は金井谷五郎と申す者、以後お見知り下されい。

郷藏　然らば貴殿が金井氏とか、身共澁川郷藏と申して、澁川流の極意を極め劍道指南いたす身分、又

同道なせし各々は皆劍道執心にて、一派の流儀を極めし者。
伴作　朋友の其の中には、正雪殿の道場にて御面會せし者もござるが、
丹吾　先づ今日改めてお近附きに參りし我々、
專平　劍道自慢の金井氏、以後はお見知り、
四人　下されい。
谷五　豫て雷名承知いたせし澁川氏を始めとして、武術御執心の各々方、よくぞ御入來下されしぞ。
伴作　今日我々參りしは、神影流の達人と自から誇る其許へ、お手合せをいたしに參つた。
丹吾　承はればその上に、隣家の娘も引入れて、變つたお稽古なされるとやら。
專平　左樣の稽古いたされては、劍道指南の掟が缺け、我々共が則ち名折れ、
熊平　こりや聞き捨てにはなりますまい。
鄕藏　まこと貴殿が神影の極意を極めし達人なるか、但しは所謂手前免許か、とくと實否を訊したく、
お手合せに參つた我々、
伴作　是非とも此の場で、
四人　お立合下されい。（トこれにて谷五郎扨はといふ思入あつて、）

谷五　何事かと存じますれば、劍道試合の御所望とな、拙者も未だ修業中望む所のお相手ゆゑ、おあしらひを願はんなれど、御覽の如き病中ゆゑ、澁川氏とお手合せは思ひも寄らぬ儀でござる。

郷藏　いや／＼さうは脫けさせぬ、身共を始めこれなる方々、貴殿の名をば聞き傳へ、態々今日參りしからは、假令病中なればとて立合はずに歸宅はいたさぬ。

作作　神影流の達人と自らお言やる金井氏、近頃以つて卑怯でござらう。

丹吾　澁川氏が武名に驚き、立合ふ事がならぬとあらば、

專平　そこは又我々が、好いやうに調合なさん。

熊平　先づ金看板の先生より、紺看板の下郎まで、

郷藏　皆劍道の嗜みあれば、是非々々お手並、

四人　拜見いたさう。

谷五　こりや御辭退を申しましても、御承引は下されぬか。

作作　態々これ迄參りしからは、

丹吾　お手並拜見いたさぬ內は、

專平　いツかな此の場は、

四人　歸り申さぬ。

〽何か一物あり顏に退引きさせぬ手詰となり、谷五郎は打ち頷き、

ト谷五郎思入あつて、

谷五　はて、是非もなき事でござる、斯くまで御辭退申せども、御承引なき上からは病中ながら谷五郎、如何にもお相手いたすでござらう。

郷藏　得心の上からは、誰れ彼れと申さうより、此の郷藏が立合はん。

谷五　すりや、澁川氏が、

郷藏　病中の事なれば隨分ともに、柔かくあしらうて遣はさう。

谷五　何卒よしなにお手合せを、

伴作　然らば、疾く〳〵、

四人　支度さつせえ。

谷五　支度に及ばぬ、拙者は此のまゝ、

伴作　支度をせぬとは、にツくき一言、

丹吾　打ち所が惡い日には、

專平　死ぬまいものでもない程に、

鄕藏　覺悟極めて、

四人　それへ直れ。

〽いふもこなたは耳にも掛けず、

谷五　斯かる寓居の事なれば、面小手具足はいふに及ばず、竹刀一本用意がござらぬ。

鄕藏　いや用意に及ばぬ、某は眞劍をもつて勝負いたす。

谷五　むゝ、すりや澁川氏には眞劍にて、

鄕藏　こなたの命を取りに來たのだ。

谷五　何と。

鄕藏　さあ、覺悟いたしてそれへ出やれ。

谷五　扨は身共に遺恨あつて、

鄕藏　いかにも兄の敵を討つのだ。

谷五　なに、兄の敵とは。

鄕藏　さいつ頃、河内の國平岡の森に於て、我が兄鄕兵衞を討つたる敵。

谷五　や、
伴作　先達て、正雪殿の道場に於て、我々が、
丹吾　討ちたる仔細慥かに聞き、鄉藏殿へ知らせしゆゑ、
專平　今日試合にかこつけて、これへ態々參つたは、
熊平　まだ其の外に戀の敵。
鄉藏　あこれ、下郎の身にて口出しいたすな。
谷五　扨は先年、武術修業に諸國を歩きし其の折柄、惡事を働くものを尋ね天誅に行ひて、一ヶ國に一ヶ所の首塚を立てたりしが、河内の國平岡の森にて討ちし鄉兵衛は、其許の舍兄よな。
鄉藏　いかにも身共が實の兄、名乘り合して、
皆々　勝負なせ。
谷五　兄の敵とあるからは、いかにも此の場で勝負なさん、然し神影一流の極意を極めし谷五郎、討てるものなら討つて見よ。(トきつと思入。)
鄉藏　何を小癪な。
〽拔く手も見せず斬り付くるを、身を躱して拔き合せ、二打ち三打ち打ち合ひしが、銳き切

先きあしらひ兼ね、すでに危く見えければ、助太刀なさんと拔き連れて切つて掛るを事ともせず、縦横無盡に切り立てられ、だぢろぐ折柄撞き出す、鐘は暮れ六つ鳥目の時刻、

ト此の内文句のやうに、郷藏拔いて切つてかゝる、谷五郎拔き合せて立廻り、郷藏切立てられ〳〵後ずさりになる、四人これにて拔き連れて切つて掛る、谷五郎事ともせず五人を相手に烈しき立廻り、皆々恐れし思入、谷五郎眞中に刀を振り上げきつと見得、此の時本釣鐘の暮れ六ツを打ちこむ、これにて兩窓の障子を下し、谷五郎びつくりなし、

谷五　やゝ、あの鐘は暮六つなるか。（ト鳥目の思入、皆々しめたといふ思入あつて、）

郷藏　おゝ谷五郎めはこの程より、鳥目になりしと聞き及ぶ、

伴作　最早暮れ六つ打ちたれば、これから先きは盲目も同然。

丹吾　いくら劒術勝れしとて、

專平　目が見えざれば大丈夫、

郷藏　なぶり殺しに、

五人　いたしてくれん。

谷五　假令鳥目に惱むとも、汝等如きの手に合はんや。

郷藏　やあ、こま言いはずと、

皆々　いゝいゝくたばつてしまへ。

谷五　何を。

〽打ち切る鐘に谷五郎、物の黒白も見えざれば、差添抜いて弓手馬手、突出す白刃の稲妻に、しや小ざかしといふまぐれ、五人一度に切りかゝれど飛鳥の如き兩刀の、烈しき手練に附入り難く、暫しは挑み戰ひける。

ト谷五郎差添を抜き後へ廻し、五人を相手に鳥目の立廻り、兩刀にてよろしくあつて、皆々呆れし思入、谷五郎緣端を足にて探り、左右へ白刃を構へ、向うへ思入あつて、

ト時の鐘、竹笛入りの合方になり、谷五郎向うへ思入あつて跫音を聞くこなし、郷藏窺ひ寄つて、

あゝこれ、初藏はまだ歸らぬか、何をいたして居ることぞ。

郷藏　その初藏の歸らぬ内。

ト切り込むを身を躱し切拂ふ。これより五人を相手に危き鳥目の立廻り、郷藏肩先きを切られ、どうとなる、熊平介抱なし手拭にて結へる。後三人を相手に立廻り丹吾上手屋體へ逃げ込む。谷五郎伴作專平を切り拂ひ、跫音をしるべに上手屋體へはひろ。ばた〳〵になり上手屋體の障子を打ち破り、丹吾

手を負ひ出で二重より見事に轉る、此の穴より谷五郎半身出し刀を振り上げきつと見得、此の内伴作、專平囁き合ひ騙し討ちになさんと、有合ふ鋏箱、火鉢、煙草盆、土瓶などを足許へ並べる、谷五郎刀で探りながら眞中へ出來る、伴作專平左右から切つて掛る太刀風に心得切り拂ふ、これにて伴作躓き轉ぶ拍子に煙草盆をひつくりかへし、火入を浴び頭から眞白になる、專平額を切られ糊紅にて赤くなる、爰へ鄕藏切つて掛る立廻り、谷五郎火鉢に躓きたち／＼と二重より落ちどうとなる、熊平後から組附き、しめた／＼と言ふ、谷五郎刀を銜へ手を延し、柔術の手にて熊平を肩を越し見事に投げ、起き上る所を刀にて切る、これにて又四人切つて掛る立廻りになる。

〽斯かる所へ隣より槍携へて作左衞門、庭傳ひに出來り、

トばた／＼になり下手の門より作左衞門、襷袴股立にて手槍を持ち出來り、下手よりかゝる丹吾專平を石突にて拂ひ退け、

作左　やあ／＼金井谷五郎殿、隣家の誼に千葉作左衞門、助太刀に參りしぞ。

〽いふに嬉しく、

谷五　すりや隣家の誼に千葉氏には、お助太刀下さるとな。

伴作　さう聞く上は、われから先きへ。

丹吾　老耄覺悟。

作左　何を小癪な。

〽武術に秀でし作左衛門、二人を相手に手練の早業、突き出す槍の石突きにて、忽ち左右へ眞の當て、

ト作左衛門、伴作丹吾と立廻りよろしくあつて、兩人を石突にて當る、是れにてどう〳〵となる。文句の切れ、床二挺の合方、谷五郎は專平を切倒し、差添を突き立て、鄕藏と立廻り刀を打ち落し、逃げる所を引附ける、作左衛門見て、

やあ〳〵谷五郎殿、そやつは澁川鄕藏なるぞ。

谷五　さては此奴が。

鄕藏　南無三。

ト振り拂つて逃げに掛るを、跫音をしるべに切り下げる、鄕藏二重より落ちどうとなる。谷五郎は一段踏み外し刀を杖に思入。この内伴作心附き鄕藏を見て、

伴作　やあ、こりや鄕藏殿は切られしか。

ト逃げに掛るを作左衛門槍にて突廻す、谷五郎二重より探り足にて下りて來る。爰へ伴作行き當る、谷五郎直に引附ける。

作左　そやつは荷擔の岩淵作作。
谷五　忝けない。（ト作作逃げに掛るを一寸立廻つて見事に切倒し、刀の血を振ひ）三人までは切倒せしが、今一人は逃げましたかな。
作左　これに一人悶絶なし倒れ居れば、唯今それへ。（ト丹吾に活を入れる、丹吾息を吹き返し立上るを、作左衞門石突にて突きやり、）それが船橋丹吾でござる。
谷五　扨は此奴が。（ト丹吾と立廻つて切倒し、）これにて四人仕留めてござる。
作左　鳥目ながら四人を相手に、天晴なる貴殿の御手練、此の趣きは某が證人となつて訴へれば、必ず氣遣ひ召さるゝな。
谷五　御加勢と申し、何から何まで忝なう存ずる。
〽心ゆるんでどうとなる、病の疲れに烈しき息切れ、
ト谷五郎どうとなり、息の切れる思入、
作左　谷五郎殿、如何召されしぞ。
谷五　僅か五人の相手なれど、病中の疲れに此の息切れ。
作左　病中のお疲れ御尤も。やあ〳〵澤、申し附けた藥早く持て。（ト下手にて、）

お澤　畏まりした。

〽はツと答へて隣より藥茶碗を携へて、腰元お澤立ち出で、

ト下手よりお澤茶の湯の茶碗へ紫の袱紗を掛け、これを持ち、片手に雪洞を持ち出來り、

左樣なれば此のお藥を。

作左　お丶谷五郎殿、早く／＼。

お澤　さあ、お藥を召上りませ。

谷五　御親切に忝けない。

〽差出す茶碗を谷五郎、押戴いて呑み終れば、瞑眩なして打ち伏せば、

ト谷五郎茶碗をいたゞきぐつと呑む、薄きドロ／＼のやうな風の音になり、うんと悶絶なす、お澤びつくりなし、

お澤　や丶、こりや谷五郎さまには、

作左　正しく藥の動ぜしならん。

お澤　もし、お心たしかに金井さま。

〽呼び生ける聲耳に入り、こなたの兩人息吹き返し、

トお澤谷五郎の介抱をなす、此の時專平熊平、息を吹き返し、よろぼひながら、

專平 熊平 谷五郎、覺悟、

〽引立つる手を振拂ひ、むつくと起きて兩人を、左右へ見事に投げ退けたり。

ト專平熊平谷五郎を引立てに掛る、やはり風の音になり、谷五郎むつくと起き、兩人を左右へ投げ退けきつとなる、作左衞門上手に槍を突いたまゝ、此の體を見て居る、谷五郎は目の見える思入にて、

谷五 やゝ、今まで見えざる我が兩眼、朧の月の晴れたる如く、

お澤 あなたはお目が見えまするか。

谷五 おゝ、明らかに見えまする。

作左 それぞ正しく藥の效驗。

谷五 して〳〵、これは如何なる良藥。

作左 則ち身共が一子相傳、これを貴殿に進ぜたいが、貰つては下されぬか。

谷五 願うてもない此の良藥、何卒お貰ひ申したい。

作左 唯今進ぜ申すであらう。

〽詞終らぬ其の内に、お澤は心得隣より、持參なしたる亂れ箱。

ト此の内お澤心得下手へはひり、誂へ蒔繪の亂れ箱を持ち出來る、谷五郎は此の内欄間へさしたる、差添と刀の糊紅を拭ひ鞘へ納める、お澤件の箱を谷五郎の前へ出す。

谷五　すりや良藥は、この内に。

作左　箱の内を御覽下され。

〽言ふに手箱の蓋とれば、内には娘お梅の首、

ト谷五郎心得ぬ思入にて箱の蓋を取る、内にお梅の似顏の切首ある、谷五郎びつくりなし、

谷五　やゝ、こりや御息女の、此の首級は。

〽はツとばかりに驚けば、

作左　それぞ則ち鳥目の良藥。

谷五　や、何と。（ト床の合方になり）

作左　作左衞門が一子相傳、これを貴殿へ進上したい。

谷五　合點行かざる此の場の樣子、何ゆゑあつて御息女には。

作左　一命捨てしは外ならず、貴殿に定まる許嫁あると聞きて娘には、添はれぬ緣と諦めて親に先立つ不孝を詫び、則ち自殺いたしてござる。

谷五　えゝ。

作左　娘が命捨てしゆゑ、貴殿の鳥目が平癒せしぞ。

谷五　扨は唯今服せし藥は、

お澤　御自害なされしお孃さまの、則ち血汐でござりまする。

谷五　すりや御息女の其の血汐が。

作左　藥になりしは測らずも最前手に入る祕法書、酉の年月日時揃ひし世にも稀なる產れにて、未だ肌をばゆるさゞる女の生血服する時は、鳥目は忽ち平癒なすと、記しありしに、娘は丁度年度の生れ、是れ幸ひと用ひし生血、平癒なせしを一ッの功に此の首進上いたしたい、受納なしては下さるまいか。

谷五　酉の年度の生れなる女の生血服するときは、忽ち平癒なす事は木庵老に聞きたれど、手に入れ得がたき生血の藥、思ひ掛けなき御息女が、その生れにて我が鳥目、平癒なせしか忝ない。

作左　愚癡なことを申すやうぢやが、貴殿の鳥目を直す藥は、そちの血汐が役に立つと娘に申せば、苦痛を忘れ、さも嬉しげににつこりと笑ふが則ち此の世の別れ、果敢なく息を引き取りましたが、不便な事ではござらぬか。

〽さすが親子の恩愛に、涙拭へばお澤もとも〴〵、

ト作左衞門よろしく愁ひの思入

お澤　たゞ此の上のお情には、お孃さまの其のお首へ唯一言あなたより、未來は必ず女夫ぞと、優しいお詞をお掛けなされて下さりますが、千部萬部のお經より、遙に勝る好い追善。

〽お願ひ申し上げますと、賴むも涙賴まるゝ、谷五郞も涙を拂ひ、果敢なき首級取りあげて、

ト谷五郞思入あつて、お梅の首を取りあげ、

谷五　思へば果敢ないお梅どの、願ひある身に餘儀なくも、切なる心を無足になし、情なく斷り申せしが仇となつて此の最期、嘸や我れをつれなき者と、そなたは恨んでござらうが、餘儀なき譯ゆゑ許して下され。あゝ、今更かへらぬ事ながら手活になせよと下されし、此の櫻の花諸共、

〽今を盛りの美しき姿の花も夜嵐に、散り行く花の七々日、涙の雨にまた元の彼の世の土に還られしか。

さはさりながらそれゆゑに、年度の血汐が役に立ち、思ひ掛けなく我が鳥目の忽ち平癒なしたるは、全くそなたの蔭なれば、忘れはせぬ忝けない。

〽如何なる宿世の惡緣にや、

斯く命まで捨てる程、我が身に心掛けられし、切なる心に此の世はともあれ、未來は必ず一蓮托生、冥土で契りを結ぶ程に、半座を分けて待つて下され。

〽あへなき首に打ち向ひ、此の世の人にいふ如く二世を語らふ谷五郎が、涙に聲もうち曇れば、聞く作左衞門お澤も共に嬉し涙にくれながら、

ト谷五郎切首に向ひよろしく思入あつて、半座を分けてといふ時はら〳〵と涙をこぼす思入、切首へかゝりしを手にて拭ふ、作左衞門お澤もよろしく思入。此の内花道より以前の初藏出來り、門口にて窺ひ居る。作左衞門切首に向ひ、

作左　こりや娘、谷五郎殿の今の一言、承はつて嬉しからうな。

お澤　そのお嬉しいはどのやうぞ、これで迷はずお孃さまも、彼の世へおいでなされます。

作左　自殺なして程たてど、今に娘が相好變らず、

谷五　まことに此の世に居らるゝ如く、笑はぬばかりの此の首級、

お澤　そのお顏の替らぬうち、

作左　とても事にその首と、二世の固めの杯を、

お澤　どうぞお願ひ申しまする。

〽否といはれぬ杯も、願ひある身に受けられず、
　ト谷五郎術なき思入にて、
谷五　彼の世の緣は結べども、此の世に於て杯は、許嫁ある其許ゆゑ、此の世の緣は結ばれませぬか。
作左　許嫁ある其許ゆゑ、此の世の緣は結ばれませぬか。
谷五　餘儀なき義理ゆゑ、お許し下され。
〽いふにお澤は膝摺り寄せ、
お澤　そりやお情ない谷五郎さま、お許嫁のある御身ゆゑ、御自害なされしお梅さま、年度の血汐がお役に立ちお目が直りし上からは、其お禮ぢやと思召し、
〽今杯をなされても、お許嫁のそのお方へ濟まぬこともあるまいに、それがならぬとおつしやるは、
そりやお胴慾でござります。
〽愚癡は女子の常なればと、恨み涙に口說かれて、とかう應答のならざるも、願ひある身を豫てより、作左衞門は推察なし、
　トお澤よろしく思入、作左衞門も思入あつて、

作左　こりや澤、くど〳〵申すな、控へ居よ。

〽澤を留めて威儀を改め、

娘と杯ならぬとは大望ある其許ゆゑ、迂濶に縁は組まれぬのか。

谷五　全くもつて、左樣な儀は。

作左　いやお隱しあるな存じをる、由井正雪殿の企ての、謀叛に一味でござらうな。

谷五　や。

作左　何と相違はござるまい。

〽星を指されし一言に、扨は大望覺られしかと、ためらふ表に窺ふ初藏、それと聞くより飛んで入り、

ト作左衞門きつと思入、谷五郎ぎつくりこなし、門口の初藏思入あつてつか〳〵と内へ入り、

初藏　それ悟られし上からは、

〽覺悟せよと切込むを、身を躱して作左衞門、扇をもつて白刃を押へ、

ト作左衞門へ切つて掛るを扇にてちよつと立廻り、白刃を押へ、

作左　仕儀に依らば某も、その企てに一味なさん、大望お明し下されい。

ト扇を引く、これにて又初藏立ちかゝるを、扇をさし附ける、谷五郎思入あつて、

谷五　して、正雪殿に大望あること、如何いたして御存じなるや。

作左　それぞ豫て忠彌殿、打明けては言はざれど我れを一味に加へんと、面會いたしくれとの頼み、先づ大望を探らんと、刀を望むと聞きしゆゑ、某かねて所持なせし粟田口義光と青江村正二腰の刀を持たせ遣はせしに、今足利家で珍重なす義光を求めずして、不吉の刃とお川ひなき村正を求められしは、足利家を調伏なすこれ反逆謀叛の兆しと、其の折我れは見極めたり。

初藏　さう聞く上は、

〽又も切り込む初藏が血氣に鋭き早業も、流石武術に秀でし千葉、扇をもつて右左り受けつ流しつあしらひつゝ、

ト又初藏切込む立廻り、作左衞門扇にてあしらふことよろしくあつて、

作左　武士の身にあるまじき、近頃愚癡なことながら、娘が願ひ其許がかなへて下さる事ならば、その大望へ一味なさん。

谷五　すりや千葉氏には本心にて、

初藏　一味合體なさるゝとか。

作左　娘と杯して下されば、今日よりは聟舅、親子の中に何偽り、千葉作左衛門虚言は申さぬ。

〽足を拂へば初藏は、尻へにどうと倒れ伏す、作左衛門金打なし、

ト初藏むゝと立ち掛るを、作左衛門扇にて足を掻く、これにて初藏尻ギバにどうと下に居る、作左衛門金打なし、

谷五　むゝ金打ありし上からは、扨はいよく其許は、御疑念はらし下されい。

作左　今日よりして一味合體。

〽一味と聞いて初藏も刀を鞘へ納める此の場、谷五郎は威儀を改め、

ト初藏拔身を鞘へ納める。谷五郎思入あつて、合方になり、

谷五　今は何をか包み隱さん、御推量の通り我々は金剛山の戰破れ、湊川にて討死ありし楠多聞兵衛正成公の無念を承け繼ぎ、足利家を打滅さんと豫ての企て、其の棟梁は楠家の正統、由井正雪殿を大將に、丸橋忠彌を始めとして一味の人數四千餘人、

〽既に先月初めつ方、三更の鐘を合圖に、道灌山へ屯なし、五更の鐘を告ぐる迄、諸國へ赴く人數の配當、戰の掛引き味方の計策、終夜密談なし、年經る松

の古木を目掛け、

〽白羽の矢をば二筋射かけ、

心の内の勝鬨揚げ幸先祝うて別れしが、何を申すも集り勢、采配とつて大勢を指揮なすもの、あらざるゆゑ、當時軍學武術の達人貴殿を味方に引入れなば、萬人に勝る一將なれば、餘所ながら忠彌殿が、再應お勸め申せしかど、御承引これなきゆゑ、

初藏　正雪殿の指圖にて谷五郎殿諸共に御隣家へ引移りて下男と姿を扮せし我は、やはり一味徒黨の者にて、大竹初藏と申すもの。

谷五　まつた最前御息女へ色よき御返事いたさぬは、斯く眞實ある其許へ一味もなきに露顯の時、緣によつて御難儀を掛けるも武士の本意にあらず、如何はせんと思ふ所。

初藏　兄兼て拙者が許嫁のぬしある事に言ひしゆゑ、御息女がこの最期、斯くならぬ前千葉氏が一味なされて下さらば、此のお歎きは掛けまいもの、殘念至極にござりまする。

作左　それも定まる皆約束、一味合體なす上は、お心置きなく娘が願ひ、

お澤　どうぞお首とお杯を、お願ひ申し上げまする。

谷五　何がさて、此の上は願うてもない此の緣組。

初藏　片時も早くこの場にて、

作左　娘が首級と、

お澤　三々九度の、

四人　固めの杯。

〽傍にあり合ふ挾箱、これ幸ひと袱紗を敷き娘が首級かき載すれば、初藏お澤もかい立つて島臺ならぬ小机に、短き命に引替て千歳を祝ふ鶴龜の、蠟燭立てに花活の花も此の場の白小袖、杯代りの中がさに銚子も事をかけ土瓶、二人が前に取り並べ、

ト此の内作左衞門下手へ挾箱を直し、此の上へ首を包みし縫模樣の袱紗を敷き首を載せる、これにてお梅の本首になる、初藏は八寸の上へ紋附の中がさを載せ、土瓶へ水を入れ持ち來る、お澤は佛檀の鶴龜の花立、櫻を入れし花瓶を机の上へ並べ、よろしくあつて、

作左　一世一度の身の晴に、斯かる仕儀でない事なら、立派な儀式もいたさんもの、

谷五　何をいふにも性急に、足らぬ勝なる此の浪宅、

初藏　ほんのまねびの間に合せに、媒人役は此の初藏、

お澤　不束ながら、私も介添かねし待女郎、

作左　手折りて送る花嫁の櫻は雪の綿帽子、

谷五　一重も八重に咲く花の、

初藏　花を重ねし三々九度、

お澤　悲しい内にお目出度い、

谷五　戀と無常の此の祝言、

初藏　まづ杯は花嫁より、

ト膳へ載せしかいさを切首の前へ直す、お澤酌をなす。

作左　どりや目出度く祝して。

〽扇を構へ聲低くに、

千秋萬歳の千箱の玉を奉つる。

ト此の内初藏お澤酌をなし、お梅の切首と谷五郎と杯をよろしくさせ、お澤切首を袱紗に包み箱へ入れる、谷五郎思入あつて、

谷五　夫婦の固め濟む上は、親子の杯、二つには、

初藏　かねて企つ大望へ、合體なせし一味の杯。

作左　如何にも此の場で、いたすでござらう。

〽一味の固めと三人が杯なすを打ち見やり、お澤は有合ふ刃を取り覺悟の自殺に驚く人々、

ト此の内谷五郎作左衛門初藏杯なする、お澤は首に添へし短刀を取り喉へ突き立てる、三人見てびつくりなし、

谷五　やゝ、こりや澤には、何ゆゑに。

初藏　斯かる自殺をいたせしぞ。

谷五　心を慥かに持たつしやれ。

〽介抱なせば顏を上げ、手負ひは苦しき息をつき、

ト床の合方、お澤思ひ入あつて、

お澤　自害いたすは外ならず、人に語らぬ御大望承はりし私ゆゑ、餘所へこの事漏れぬやう、命を捨てゝ彼の世へ行き、お梅さまへお仕へ申し、草葉の蔭から皆々さまの、御望みかなへて御出世あるを、お待ち申して居ります る。

谷五　すりやそれゆゑにお澤どのには、覺悟極めて自殺ありしか。

初藏　流石は千葉のお召仕、あつぱれ見上げし其の心底。

作左　ほゝお、そちが健氣な最期に愛で、お梅と一つ墓所へ埋め、跡懇ろに弔ひ得させすぞ。

谷五　親は如何なる人なるぞ。

お澤　さあ、其の親は何處の誰やら、藁の上より別れしゆゑ、その名も知らず死にますが、心殘りでござります。

作左　（思入あつて、）〽いふに堪らず作左衞門、今日まで包み隱せしが、心殘りが不便さに今こそ明すが其の方は、此の作左衞門が娘なるぞ。

お澤　えゝ、

谷五　すりや作左衞門殿の、

初藏　お胤なりしか。

作左　語るも面目なき次第、今をさること二十年以前、我が手廻りの腰元に情を掛けてまうけし娘、母は産後の惱みに殁り、それより里に遣はして、成人の後手許へ呼寄せ、世間を憚り今日まで娘同樣勞りて召仕となし使ひしが、あつぱれ健氣なこの自殺、我が娘といふも恥かしからず、冥土の土産に親子の名乘り、これで迷はず往生しやれ。

〽聞くに手負は苦しさ忘れ。

お澤　知らぬ事とて今日が日まで、何處の誰が娘やら素性知れねばもしひよつと、親はそでない者でもあるかと、思ひの外に旦那さまが、父上さまでござりましたか。

作左　おゝ、腹は替れど我が娘。

〽初めて明す親と子が、名乗り初めの逢ひ納め、

ト作左衞門お澤の手を取り愁ひの思入あつて、

親子の名乘りせし上は、お梅と一つ墓へ埋め、跡懇ろに弔うてやるぞよ。

お澤　えゝ有難うござりまする。

〽悦ぶ顏が此の世の別れ、果敢なく息は絶えにける。

トお澤嬉しき思入にてよろしく落入る。

〽猛き心も恩愛にせき來る涙呑みこみて、哀れを餘所に氣を勵まし、

ト作左衞門愁ひの思入あつて氣を替へ、

作左　二人の娘を先立つれば一本立ちの作左衞門、正雪殿に合體なし、名を海内に輝さんっしてくれ味方の手配りは、

谷五　此の企ての棟梁たる由井正雪殿は、駿河なる富士の根方へ屯なし、東海道の半途より事を發する豫ての手段、

〽言ふに金井も打ちうなづき、

初藏　又鎌倉の大將は丸橋忠彌、駒飼左司馬、

谷五　難波表の大將は増田八右衞門、斯くいふ谷五郎。

ト此の時以前の熊平疵口を手拭で結へ、窺ひ出で、

熊平　樣子は聞いた。（ト出るを初藏引附ける。）

作左　斯くまで手配り整ふ上は、金井氏には遠からず、難波へ發足召さるであらうな。

谷五　はゝ、仰せにや及ぶべき。（トノリになる。）

〽かねて望みし千葉氏を、味方に附くれば千萬の士卒にまさる名譽の一將、今日ぞ武門の開くる瑞相、最前賜はるこの一枝、花は櫻木人は武士、散るを惜しまぬ花吹雪。

雪にすゝぐの聲あれば、

〽會稽山の旗上げと勇み立つたる有樣は、金剛童子に異ならず、

ト此の内以前の櫻の枝にて熊平を遣ひ、よろしく熊平を當てる。

〽〔作左衞門は菅谷不動の尊像打ち見やり。〕

作左　これに掛けたる菅谷の不動の文字は、うごかず動ぜず。

谷九　互ひの心一致なし、

初藏　うごかず動ぜぬ、

作左　味方は磐石、

初藏　大望成就疑ひなし。

谷五　あら嬉しや、

三人　悦ばしやなあ。

〽〔悦ぶ折柄氣の附く下部、

熊平　（心附き）扨こそ怪しい。（トかゝるを引附け）

谷五　此奴も澁川に荷擔の者。

作左　軍神の血祭り。

熊平　何を。（ト拂ふを谷五郎拔打ちに切る、熊平ぽんと轉る。）

谷五　村正の切味。

作左　見事。（ト谷五郎ひらりと刀を振り、構へるを木の頭。）

谷五　あゝよく切れるなあ。

ト作左衞門初藏感心の思入、谷五郎眞中に刀の糊紅を拭ふ、三人引つ張りよろしくカケリにて、

ト調べにてつなぎ引つ返す、

ひやうし　幕

四　幕　目

足利（江戸）城外の場

〔役名〕――松平伊豆守、弓師藤四郎、丸橋忠彌、燗酒屋勘助、足利近臣一、二、三、四、中間△□○供廻り大勢。

（足利城外の場）――本舞臺正面一面城山の書割り、上の方大盡柱へ取附け、海鼠壁日窓のある屋敷長屋の張物、下の方葭簀圍の出茶屋、煮込み燗酒の道具よろしく飾り、下手に松の立木、總て足利家城外の體。爰に床几二脚並べ△○□等中間にて腰を掛け、朝顏茶碗で盛切り酒を呑んで居る、下手葭簀張りの内に勘介亭主にて酒の燗をして居る、此の見得飴賣りの田舍節にて幕明く。

△　こう酒屋さん、屋敷町で三味線の音は、女太夫ばかりだと思つたら、あの唄は何處だえ。

勘介　あれは此の頃爰等へ來ますが、子供に踊を踊らせて、いゝおけさや甚句の唄をうたふ飴賣りでござり

ますが、今向う屋敷の大部屋で踊らせてをります。
○それぢやあ木遣くづしを唄つて來る、本町二丁目の仲間だな。
□何にしろ、こちと等が酒を呑むにやあ、いゝ藝者だ。
△重役の旦那方が柳橋や今戸へ行つて、藝者をあげて呑まつしやるのも、又こちと等が腰を掛け煮込みのおでんで、斯うして呑むのも旨え味は同じことだ。
○そりやあ川長や梅川、又大七や有明樓と一つにやあならねえが、醉つてしまやあ旦那方だつて、こちと等だつて替りはねえ。
□喰ひつけねえ物を喰ふより、やつぱり煮込みの蒟蒻か芋でぐい／＼呑むはうが、氣がはらなくッてよつほど旨え。（ト下手へ向ひ、）
△おい、もう半分ついでくんねえ。
勘介（徳利を提げて出來り、）はい／＼、又お替りでござりまするか。
○こう手前、半分づゝ幾度呑むのだ。
□これで丁度三度目だ。
△はて、半替りがよつほど得だ。

〇□　いや勘定高い奴だなあ。

ト勘介捨ゼリフにて酒をついでやる、やはり飴屋の田舎節になり、花道より丸橋忠彌一本差し尻端折り下駄がけ、赤合羽を引つ掛け饅頭笠をかぶり、酒に醉ひたる思入にて出來り、花道にて、

忠彌　あゝ好い心持だ〱、川岸通りの居酒屋で、たツた二ツ銚子呑んだのだが、大層醉が出た。いや出る筈でもあらうかえ。先づ今朝家で朝飯に迎ひ酒に二合呑み、それから角の鮨屋で熱い所をちよつと五合、そこを出てから蛤で二合づゝ三本呑み、それから後が雁鍋に好い生肌鮪があつたところから又刺身で一升、とんだ無間の梅ケ枝だが、爰で三合彼處で五合、拾ひ集めて三升ばかり、これぢやあ終ひは源太もどきで鎧を質に置かざあなるめえ。裸になつても酒ばかりは呑まずにやあ居られねえ。（ト舞臺へ來り、三人の酒を呑んで居るを見て、）いや遣つて居るな〱、これを見ては見のがされぬ。どれ、一杯やつて行かうか。

ト笠を脱いで脇の床几へ掛ける、勘介これを見て、

勘介　これは入らつしやりませ、芋で上げますか、蒟蒻で上げますか。

忠彌　何でもいゝから、熱燗で二三杯呑ましてくれ。

勘介　へい〱、畏りました。（ト德利と朝顏茶碗を持つて來て忠彌へ出す。）

忠彌　いや茶碗とは有難い。（ト勘介のつぐを忠彌呑んで、）あゝ、これはすてきに好い酒だ。
勘介　わたしが好きでござりますから、葭簀張りではござりますが、酒は好いのを差上げます。
忠彌　それぢやあ亭主、貴樣も好きか。
勘介　へい、大好きでござります。
忠彌　酒が好きとは頼もしい、ちよつと一杯相手をしろ。
勘介　有難うはござりますが、生業ものを呑みましては。
忠彌　代はおれが拂ふから、遠慮せずに相手をしろ。
勘介　左樣なら、酒の代をあなたが拂つて、わたくしに酒を呑まして下さりますか。
忠彌　おゝさ、酒の錢ならいくらでも拂つてやるから、うんと呑め。
勘介　それは有難うござります、左樣ならお相をいたします。これは憚りさまでござります。

（ト忠彌ついでやる、勘介呑む。三人これを見て思入あつて、）

△　もし旦那、よい御機嫌でござりますな。
忠彌　（三人を見て、）どうだ、貴樣達も酒は好きか。
△　いえも、すきのくはのと私共は酒と聞いては眼がござりませぬ。

忠彌　好きならおれがおごつてやるから、遠慮なく呑むがいゝ。
△　それぢやあ、呑まして下さりますか。
三人　それは有難うござります。
忠彌　亭主、ついでやりやれ。
勘介　へいへい畏まりました、又半替りでござりますか。
△　人のおごりならいつぺいいくりやれ。
○　いや、現金な奴だ。
勘介　お前さん方にも上げませうか。
□　御馳走なら、いやとは言はねえ。
○　おれにもいつぺいついでくんねえ。ト三人茶碗へついで貰ひ、呑むことよろしくあつて〕
忠彌　いや、斯う酒好きな者ばかり集つたとは面白え。これ亭主、肴は何がある。
勘介　へい、芋と蒟蒻の煮込みでござります。
忠彌　煮込みとは有難い、何でもいゝから持つて來やれ。
勘介　へいへい、畏まりました。〔ト石皿へ芋と蒟蒻の煮込みをいれ、盆に載せて持つて來る。〕

忠彌　いやこれだ〳〵、煮込みのおでんでやつちよろねとは、こゝらのことをいふのだな。さあ〳〵、もつとついでくりやれ。

ト勘介につがせ酒を呑むことよろしくあつて、△酔つた思入にて、

△　こう手前達は何と思ふか知らねえが、斯うして見ず知らずのおら達に、この高い酒を腹いつぺいたゞ呑ましてくれるとは、何と勿體ねえ話しぢやあねえか、こんな慈悲深え酒好きな旦那に、天下を取らせてえな。

忠彌　なに、おれに天下を取らしたい。(トいゝ辻占だといふ思入)

○　あなたに天下を取らしたら、思ひれ呑まして下さりませう。

□　どうぞ旦那に天下を取らして、思ひれ酒を呑みてえものだ。

忠彌　いや、生酔といふものは面白い事を言ふものだ。天下を取るの取らないのと、子供の獨樂ではあるまいし、はゝゝゝ。

△　いや獨樂といへば、御馳走で日ざしも廻れば、酒も廻つた。

○　もう殿様のお下り時分、爰にぐづ〳〵して居たら、

□　又部屋頭の因業親仁に、厭な小言を聞かにやあならねえ。

勘介　お供を喰つちや濟まねえから、もう好い加減においでなされませ。

△　左樣なら旦那、大きに御馳走になりました。

○　お蔭でぐつすり醉ひました。

□　どうぞお前さん天下を取つて、

三人　又呑まして下さりませ。（ト右の合方にて三人上手へはひる。）

忠彌　いや酒呑みといふものは、罪がなくツて好いものだ。

勘介　あなたのお蔭で、あの衆も大そう醉ひました。

ト言ひながら下手へはひる、忠彌又酒を呑み居る、下手より縫包みの犬出來り、

犬　わん／＼。（ト吠えるのを忠彌見て、）

忠彌　なんだ、わん／＼だ、時代なことをいふ奴だ、わんと啼くのは當り前だ、赤犬は牛に味が似てるるといふことだから、もうと啼け。

犬　わん／＼。

忠彌　やツぱりわんと啼くか、うぬもうと啼かぬと打つた切るぞ。（トきつといふ、これにて犬下手へ逃げてはひる、）と言つて脅したものだ、彼奴、おれが小間物見世の催促に來たらうが、まだ／＼めつたに

見世は出さねえ。(ト一升徳利の酒をしたんでしまひ) 亭主、まだ酒はあるか。

勘介 へい、もうそれぎりでございます。

忠彌 それぎりとは情ない、代はいくらでも拂ふから、もうちつと呑ましてくれろ。

勘介 左様ならちよつと見ませう。(ト葭簀の蔭へはひり一升徳利を持つて來て) これに少々ござりました。

忠彌 それ見ろ、これほどあるものを無いなどゝ言ひをつて、(ト茶碗へつぎ) 時に亭主、刺身はねえか。

勘介 そのやうな物はござりませぬ。

忠彌 また此奴無いといふか、錢せえ出せば何處にでもあるわ。

勘介 それは町へ參りますれば、何處にでもござりますが、これからよつほどござりますから。

忠彌 よつほどあると言つたとて、一里も二里もありやあしめえ。

勘介 そのやうにはござりませぬが、見世を明けて參られませぬから、どうぞ御免なされて下さりませ。

忠彌 いや〱御免ならねえ、言出した事を一寸でも後へ引かぬが、おれの持ちめえ、厭だといやあ打つた切るぞ。(ト柄へ手を掛けきつといふ、勘介びつくりして後へひつくりかへり)

勘介 あゝ參ります〱、どうぞ命はお助け下さりませ。

忠彌 はゝゝゝ、今のはほんの常談だ。(ト 懐の財布から小判を一枚出し) さあ、直は幾干でも構はぬか

ら、二三人前買つて來てくれ。（ト勘介へ小判を渡す、勘介びつくりして、）
勘介　もし、こりや小判でござりますな。
忠彌　それで足らずば、もつと遣らうか。
勘介　酒の代まで一緒にしても、これではお釣錢がまゐります。
忠彌　酒の代は別に遣るから、大儀ながら行つて來てくれ。
勘介　畏りましてござります、憚りながら留守のうち、見世をお賴み申します。
忠彌　賴まずとも、それは承知だ。（ト勘介傘を持つて花道へ行き、思入あつて、）
勘介　身裝もろく〳〵でないくせに、こんな小判を持つて居るのは、もしや泥〳〵でゝもありはしねえか、引合になりたくないものだ。
忠彌　まだ行かねえのか。
勘介　へい直ぐ行つて參ります。どうか水〳〵ばれにならねばいゝが。
ト勘介花道へはひる、忠彌跡を見送りて、
忠彌　おれの身裝が惡いゆゑ、呑倒されでもするかと思つて、びく〳〵して居るから、小判を一枚遣つたらば早速に行きをつた、扨町人といふものは、け〳〵ちな心のものだなあ。（ト手酌で又酒を呑み、）

何にしろ、酒ばかりは一人では旨くない。誰ぞ相手が欲しいものだ。(ト花道を見てびつくりなし、)やあ、向うから來るあの親仁は、女房の親の藤四郎、又おれを見附けたら、とやかうと言ふだらう、とんだ者が出掛けて來た。

ト忠彌饅頭笠をかぶり葭簀の蔭へはひる。合方になり、花道より藤四郎羽織着流し下駄がけ、少し更けたるこしらへ、袋入りの弓を擔ぎ番傘を提げて出來り、花道にて、

藤四 昨夜の地震で、今日はまた降るであらうと思つたから、傘を持つて來たのが當り、屋敷町で降られる程こんな困るものはない、いや困るといへば、わしの聟忠彌殿にも困つたものぢや、人品といひ器量といひ武藝も十人並に勝れ、言分のない人なれど、酒を呑むと性根を失ひ、それからそれと呑み歩き、とんだ人に娘をやつて、よけいな苦勞をせねばならぬ。(ト此の時雨車になる、)また、ばら／＼とやつて來た、たんと降らぬうちに行きませう。(ト傘を開き、さして舞臺へ來る。よき所にて石に躓き、ばつたり轉び、)あいたゝゝゝ。(ト倒れる、忠彌見兼ねてつか／＼と出て、藤四郎を抱きおこす、)これは／＼何方さまでござりまするか、有難うござります。(ト忠彌笠を冠りしまゝ介抱なす。藤四郎その顏を覗き見て、)や、此方は、聟の忠彌どのぢやないか。

忠彌 危ない事でござりましたが、何處ぞお怪我はなされませぬか。

藤四　いや何處も怪我はしませぬが、はずみで下駄の鼻緒を切つた。

忠彌　どれ、すげて上げませう。（ト取りにかゝるを、）

藤四　いや〳〵、わしがすげるから決して構うて下さるな。

忠彌　遠慮せずとお出しなされい。えゝい。（ト取りにかゝり、嗳をする、藤四郎酒臭き思入にて、）

藤四　忠彌どの、またこなた、呑んでござるの。

忠彌　少しばかり呑みました。

藤四　こなたの大酒が少しばかりで、其のやうに醉ひませうか、まあこゝへかけさつしやい。（ト合方になり忠彌床几へ掛ける。藤四郎は德利に結へある繩きれた取り、床几へ掛け下駄の鼻緒を立てながら、）逢ふ度毎にわしが異見、聞き度くもござるまいが、緣に繫がる親の役、いやな事も言はねばならぬ。何故その樣に酒ばかり呑み步いてござるのだ。そりやもう好きな酒なれば、呑むなではなけれども、人に勝れた器量をもつて斯うしてござるが殘念さに、何處ぞへ仕官さつしやれと度々勸めた其の擧句、石堂家へ千五百石で槍術の指南番に仕官すると言はつしやるゆゑ、やれそれは目出度いことぢやと悅び言へば、それに附き身の廻り萬端の拵へに、二百兩程金の入用、都合して貸してくれと言はつしやるゆゑ、世話になる漆問屋へ口入して借りて進ぜた二百兩、いつ仕官するこ

とかと思ひの外にそれなりけり、身の廻りの拵へどころか、裾から飾りの下るやうな着物を着て呑み歩き、此方が仕官さつしやらぬゆゑ、わしが嘘でも吐いたやうに、貸してくれた其の先へ言譯もない上に、日限が切れて度々の催促、中へはひつて此の親が困るのも構はずに、それからそれへ呑み歩き、わしに難儀を掛けるのか。え丶情ない人ぢやなう。

ト此の内藤四郎下駄の鼻緒を立て、よろしく思入にて言ふ、忠彌は生酔のこなしにて、

忠彌　いや、其のやうに言はれてはまことに面目次第もござらぬ、紀州家へ仕官する料簡ではをつたれど、つい朋友に誘はれて好きな酒に魂奪はれ、今日は吉原明日は品川と廓の酒に呑みあかし、お借り申した二百兩遣ひ果して是非なくも、未だに仕官いたさぬゆゑ、舅殿へ御苦勞かけ、何とも申し譯がござらぬ、これと申すも酒ゆゑなれば向後ふッつり止めますから、御安心下されい。

ト よろしく思入。

藤四　いや〳〵それは呑込みませぬ、止める〳〵と言はつしやるのも幾度だと思はつしやる、後の月も摩利支天樣へ三年斷つたと言はつしやつたも、十日と持たず五日目に味醂は呑んでもよからうと、一口呑むのが初めにてやつぱり元の醉漢どの、そりや此の舅や女房へは、それでも濟まうが禁酒した、摩利支天樣や金毘羅樣へ、嘘を吐いては濟むまいがな。

忠彌　なるほどそれは濟みませぬ、神へ噓は吐かれぬゆゑ、三ケ年斷ちましたを、もう三ケ年斷ちまして、六ケ年に年を增し半日づゝ呑みますが、どうもそれでは呑み足らぬゆゑ、もう六ケ年增しまして十二ケ年と年を增し、毎日かやうに呑みまして、寐たうちばかり斷ちまする。差引勘定いたしますと丁度三ケ年斷つたも同然、よい工夫ではござらぬか。

藤四　えゝ、如何に酒の上なればとて、人を馬鹿にした言ひ方、何ケ年でも此方の勝手に酒は斷つとも斷たぬともさつしやれ。其の年限に引きかへて三月限りで借りた金、言譯も仕盡しもう延び〳〵にはならぬほどに、明日明後日二日の内に、耳を揃へて返して下され。

忠彌　返したいにも此の姿、今もこなたに申す通り、今日は五兩明日は十兩、遊里の酒に二百兩遣ひ果して二朱もござらぬ、どうかこれも禁酒同樣二百兩を二千兩に、いたして先へ返さうから、二三年待つて貰ひたい。（ト忠彌生醉の思入、藤四郎腹の立つこなしにて、）

藤四　えゝ二三年待つてくれとは、言はうやうない、（ト胸倉を取ると、忠彌えゝいと噯をするに藤四郎顏をそむけ、）こなたはなう。（ト誂への合方になり、）三月限りで借りた金を二三年待つてくれと、それで浮世の義理合が、こなたは濟むと思はつしやるか、以前はわしも本鄕でお屋敷方の出入も多く、それ相應にして居たゆゑ、二百兩や三百兩はどうか都合も出來たれど、我が右の手と思つたる悴

に死なれて左り前、三重の帶さへ二重となる廻り兼ねたる身代に、かすかな暮しはして居れど、昔氣質に錢三文人に損を掛けぬゆゑ、此のせち辛い世の中に二百兩といふ金を貸してくれたは先方も達引き、尤も斯ういふ譯あつてと石堂家へ仕官なす、身の廻り萬端の拵へに入る金と委しい話しをした所から、こなたの聟の立身出世目出度いことゆゑ貸してやらうと、直に渡して下すつたは正直正路のわしが徳、それをそれなり仕官もせず遊里の酒に現をぬかし、二百兩といふ金を遣ひ果して二朱もないとは、愛想もこそも盡き果てた。此間から先方へ言譯も言ひ盡し、藤四郎ものら狐、一つ穴といはれぬ先き、首でも縊るか淵川へ身でも投げて言譯せねば、もう言譯がならぬわいなう。

ト此の内藤四郎涙を拭ひながらよろしく思入にて言ふ、よき時分より忠彌居睡りをなし、ト、笠を冠つたまゝ床几の上へ寐てしまふ。藤四郎これを見て呆れし思入。

えゝ人の異見も白川夜船、碇おろして高鼾、あゝ見下げ果てた人ぢやなあ。（ト又雨車になる。）又ばら／＼と降つて來た。此の醉漢にかゝつて居て、お屋敷へ行くが遲くなつた、大降にならぬ内少しも早く行きませう。（ト傘をさし弓を擔ぎ上手へ行きかけ思入あつて、）人品骨柄人並に勝れた業を持ちながら、酒ゆゑ性根を失ひて、娘は元より親にまで、斯かる難儀を掛けるといふは、これ

もやつぱり酒の科、氣違ひ水とはよう言うたなあ。
ト唄になり藤四郎思入あつて上手へはひろ、跡時の鐘雨車、幽めて水の音になり、下手より以前の犬出來り床几の上へあがり石皿の芋を喰ふ思入あつて、寐てゐる忠彌の口の端を甜める、これにて拂ひ退け、
忠彌　えゝ、うつとしい、最う呑めねえ。(ト又犬甜めにかゝるゆゑ、)何をする、呑めねえといふのに。
ト犬を突き倒す、これにて犬床几より落ち、
犬　わん〳〵〳〵。(ト吠える、忠彌起き上り、)
忠彌　畜生め、手前か。
ト袖で口の端を拭く、時の鐘、誂への合方幽めて雨車、犬側へ來るを忠彌石を拾ふ、犬後へ下り、
犬　わん〳〵。
忠彌　この畜生め。
ト言ひながら犬へ石を打附ける思入にて、後の堀へ石を打込み、どんと水音する、忠彌この音を聞く思入。
犬　わん〳〵。(ト又吠えるゆゑ石を拾ひ、)

忠彌　又吠えやアがるか。

ト堀の中へ石を打ち込み水音を聞く思入犬は下手へはひる。此の時冠りし笠ずる〳〵と落ち、忠彌懐から煙管を出し間數を計る思入。合方きつぱりとなり、上手より伊豆守上下大小足駄白張の傘をさし、老中のこしらへにて出來り、此の體を見てそつと忠彌の後へ行き持ちたる傘をさしかける。忠彌體へ雨のかゝらぬゆゑ、心附き後を見返りびつくりなし、煙管を懐へ入れて、

むゝ。（ト笑ひかける。）

伊豆　はゝ、

兩人　むゝ、はゝゝゝゝ。（ト兩人につたり笑ひ、忠彌生酔の思入にて）

忠彌　えゝい。（トわざとよろ〳〵と下手へ行く。）

伊豆　こりや、其方は何をいたしをる。

忠彌　あんまり犬が吠えますから、石を打ッ附けてをりましたが、生酔のことでござりますから、當りましたら御免なさいまし。

伊豆　むゝ、左様であつたか。

トこれにて忠彌、一腰を合羽の内へ隠し笠を持ち、

忠彌　あゝ好い心持に醉つた。（トひよろ〳〵しながら花道へ行く。伊豆守思入あつて、）

伊豆　こりや〳〵、待て〳〵。（トこれにて忠彌振り返り、）

忠彌　お呼びなされましたのは、わたくしでござりますか。（ト下に居る。伊豆守忠彌の顏をぢつと見て、）

伊豆　そちが名は、何と申す。

忠彌　え、（ト思入あつて、）忠兵衞と申します。

伊豆　（思入あつて、）はて、逞しい。

ト思入、此の時上手より近臣一、二上下股立大小草鞋にて出で、忠彌へ思入あつて、

一二　正しく彼れは。（ト立ち掛るを、）

伊豆　あこれ。（ト兩人を留め、花道へ向ひ、）苦しうない、行け〳〵。（ト輕く言ふ、これにて忠彌立上り、）

忠彌　えゝ。何のことだ、どれ、もう一杯呑み直さうか。（ト笠を冠りひよろ〳〵として、）えゝい。

トこれを切ッかけに飴屋節になり、忠彌生醉の思入にて手を叩きながらよろしく花道へはひる、跡鳴物ばつたりと止み、本釣鐘を打込み、伊豆守後を見送り居る、此の時上手より饅頭笠赤合羽の供廻り大勢乘物を擔ぎ出で、後へよろしく居並び、よき程に、

一　御前樣、

二　怪しき奴では、

兩人　ござりませぬか。（ト本釣鐘誂への合方。）

伊豆　今殿中より下城なす乘物越しに見たる所、姿は下賤に扮せども正しく武家とおぼしきもの、酒輿に乘じ吠え付きし犬に礫を打つ體にて、此の水中へ石を打込み、その水音にて淺深の測量なすは心得ず、家來を遠ざけ只一人近寄りて窺ひしに、一癖ありげな物腰恰好、

一　今泰平の御代とは申せど、新田楠兩家の殘黨、

二　此處かしこに徘徊なし、足利天下を狙ふ風說、

伊豆　（思入あつて、）殘黨餘類が徒黨なすとも、高の知れたる集り勢、何程の事あらん、草木も靡く足利天下を彼等がねらふは、龍車に向ふ螳螂が斧、及ばぬこと、

一　されど、下世話に申す如く、

二　打捨ておかれぬ、油斷大敵、

一　跡をつけ行き、

兩人　我々が。（ト立ち掛るを、）

伊豆　こりや、六十餘州は籠中同然。

兩人　それぢやと申して。

伊豆　はて、取るに及ばぬ。(ト傘をさし出す木の頭)放して置きやれ。

ト近臣の一傘を受け取る、伊豆守鷹揚に花道の方を見込む。此の模樣よろしく太撥の時の太鼓にて、

ひやうし　幕

五幕目

有馬溫泉の場
高塚廣野の場

唄淨瑠璃　濡衿松藤浪　(哥澤連中)

〔役名＝増田八右衞門、金井谷五郎、鵜野九郎兵衞、大竹初藏、代官荒波軍藏、亭主佐五兵衞。湯女小藤實は九郎兵衞妹お藤、湯女お蓮、其他。〕

(有馬溫泉の場)―本舞臺四間通し、中足の二重、大和葺本緣附、櫛形の欄間、正面一面紅染の長暖簾、上下のつま塗骨障子、上の方に石の手水鉢、この前に四つ目垣、下の方中二階伊豫簾をおろし、此の下板羽目、四つ目垣山吹の下草、上の方に屋根附の門、これへ浴室と云ふ額を掛け、いつもの所枝折戸、この外に有馬二の湯素麵屋といふ立札を立て、總て有馬湯治場の體。爰に口の若い者口紅の文を持つて居る、これを若い者◎、仲居の四、五立掛り、文を取らうといふ思入よろしく、「松になりたや」の唄にて幕明く。

仲四　これ由藏どん、お前の持つて居る。其の文は、何處から來たのでござんす。
仲五　ちよつと見せて下さんせいなあ。
□　何處から來てもいゝぢやあねえか、男の所へ女から口紅の文が來りやあ、言はずと知れた色筋だ。
◎　男の所へ女から口紅の文が來たとツて、色筋ときまつた譯もあるめえ。
仲四　お前の所へお母さんが、いつも無心に文を書いてよこすではござんせぬか。
□　誰が文を寄越すものか、おらあお袋はありやあしねえ。
仲五　それぢやあ何時もおいでのは、お母さんではござんせぬか。
◎　おゝ黑油を附けて來る婆さんが、お袋でなけりやあ情人だらう。
□　可愛さうな事をいひなさんな、斯う見えても由藏は丸にいの字の定紋で、濡事師の家筋だ。
◎　家筋といふ顔でもねえぜ、外道の面にやあ近いはうだが、人間のはうにはよつぽど遠い。
□　人間のはうに遠くつても、斯うして情人から文の來るのは、憚りながらおればかりだらう。
◎　情人の文だか書出しだか、讀んで見なくつちやあ分らない。
仲四　わたし共もあやかりたいから、
仲五　讀んで聞かして下さんせいな。

□　あやかりたいと言はれちやあ、こいつは讀まずにやあ居られねえ。

仲居二人　早う聞かして下さんせいな。

◎　東西々々。(ト□口紅の文を出し開きて、)

□　唄淨瑠璃名題――、(ト讀みて、)こりや色の文にやあ違つたやうだ。

◎　大方そんな事だらう。どれ、おれに見せねえ。(ト取つて開き見て、)「唄淨瑠璃太夫、哥澤太夫芝金、ワキ哥澤――。」

□　「相勤めまする役人中村芝翫、岩井紫若。」こりや哥澤の連名觸れだ。

仲四　その哥澤の御連中は、京大阪の御見物から有馬へござんして、

仲五　二三日あとから此方の家へ、御逗留でござんすぞえ。

◎　芝金さんといふお方が、端唄をうたつて聞かせると、さつき風呂場で噂があつた。

□　情人の文だと思つたのも、その哥澤の役人觸れか。

仲四　頭取代りの口上言ひ、こゝらがお前の本役だね。

仲五　それも稻荷町の方でござんすね。

□　えゝ忌々しい目に逢ふものだ、斯うして安くされるのも、此の文が違つたばかりだ。

◎ 所詮お前は外道の面へ、近いはうだからむづかしい。

仲四 どうで情人は出來ないから、

仲五 思ひ切つたがようござんすぞえ。

□ 所が思ひ切られねえのが、濡事師の家筋だから、情人をしなくツちやア先祖へ濟まねえ。

◎ いや、無駄を知らねえ人だなあ。

ト時の太鼓になり、花道より荒波軍藏野袴打割羽織、大小にて若黨附き出來り、花道にて、

軍藏 案内いたせ。

若黨 はッ、(ト先きへ拔けて舞臺へ來り、)こりや、亭主はをらぬか。

□◎ はッ、何方樣でござります。

若黨 御代官荒波軍藏樣、お尋ねの筋あつて、お出なされしぞ。

□ これは〳〵、御代官樣でござりますか。

兩人 先づ〳〵これへ。

軍藏 然らば許しやれ。(ト軍藏内へはひり、上手へ通り床几に掛ける。)

◎ これ〳〵お前方、奧へ行つて旦那に早くと言つて下せえ。

仲居　あい〳〵、承知ぢやわいな。（ト奥へはひる。）

二人　唯今主人佐五兵衛、これへ參りますでござりまする。

ト奥より佐五兵衛羽織着流し、亭主の打扮にて出來り、平舞臺へ下り平伏して、

佐四　これは〳〵御代官樣には、お役目御苦勞さまにござりまする。

軍藏　密々其方へ尋ね度き筋あれば、召使を暫く次へ。

佐五　畏まりましてござります。これ、そち達は暫く奧へ。

兩人　へい〳〵、畏まりましてござります。（ト□◎奥へはひる。）

佐五　して密々にわたくしへ、お尋ねの筋とおつしやりますは、如何やうな事でござりますな。

軍藏　（四邊へ思入あつて、）密々其方に尋ぬるは、先達より當家へ參り逗留いたす二人の武士、鎌倉方と申す事だが、日々湯女を大勢集め酒宴をまうけ奢りに長じ、保養をなすと申す事訴への者あつてたしかに聞く、右は足利昵近の者か、又は諸藩の者なるか、それを尋ねに參つたのだ。

佐五　只今お尋ねでござりまする右御兩人のお客樣は、十日前より私宅へ御逗留でござりますが、承はれば石堂（紀州）家の御藩中と申すこと、左のみの御病氣にもござりませぬが、餘程御高祿の御方と見えまして、わたくし方へ三百金ほどお預けなされてござりまする。

軍藏　然らば右の兩人は、石堂家の藩なるか。

佐五　へい、左樣でござりまする。

軍藏　これ迄逗留いたしをるうち、何ぞ怪しい事はないか。

佐五　別に怪しい事はござりませぬ。

軍藏　何にいたせ、大金を酒宴遊興に使ふ上は、町人なれば構はねど、武士とあれば身共から、しかと糺さねば相成らぬ、と申す譯は、新田楠兩家の殘黨寄り〳〵謀叛の企てあるよし、足利殿より國國へ手分けをして、嚴しき詮議、さるに依つて武家に於て不分明なる者あらば、篤と實否を糺せよと老職方より豫ての內意、其の殘黨餘類の者詮議仕出して差出せば拔群の身共が手柄、心を附けて詮議なし、早速役所へ注進いたせ。

佐五　へえ、畏まりましてはござりますが、何を申すもお武家のことゆゑ、めつたの事を申し出して、無禮な奴と、とんだ目に逢ひませうかも知れませぬから、成らう事ならお直々に、お糺しなされて下さりますやう、お願ひ申し上げまする。

軍藏　その儀は決して氣遣ひいたすな、足利家より御下知の御詮議、萬一不法の儀を申さば此の方にて扱ふから、心配いたさず身許を糺しやれ。

佐五　へい／＼、左樣ならば思ひ切つて、尋ねて見ますでござりませう。

ト佐五兵衞怖々ながら受けをする。此の前方より後へ鵜野九郎兵衞、木綿やつし縞の半纏好みの打扮にて窺ひ居て、此の時前へ出て、

九郎　へい、御代官樣へ申し上げまする、その侍の身許調べは、憚りながら私へ仰せ附けられ下さりませ。

ト前へ出る。

佐五　や、誰かと思へば九郎兵衞どのか。

軍藏　むゝ、身許の調べをいたすと申す其方は、當家の者か。

九郎　へい、私は九郎兵衞と申して、此の家に湯女を勸めて居りまする、小藤が兄でござりまする。

軍藏　して、其方が武家の詮議をいたしたいと申すには、心當りでもあつてのことか。

佐五　（思入あつて、）おゝさうぢや、九郎兵衞どのは、御逗留の御武家樣を見知りごしに、知つて居ると言はつしやつたの。

九郎　委しくも存じませぬが、ちつと當りがござりますから、それゆゑ身許を糺しませうと申したのでござりまする。

軍藏　して、逗留の武家の身分は、石堂家にて如何やうな役柄を勸める者だ。

九郎　へい只今では石堂家へ住みこんだかは存じませぬが、近い頃まで鎌倉にかすかな暮しの浪人者、假令主を取つたにしろ、湯水のやうに金銀を蒔き散すのが怪しいと、疾うから目を附けて居りまする。

軍藏　（思入あつて）かう見た所が其方もたゞ者ならぬ其の面體、身許を存じをると申すは、幸ひのよい日明し、此の詮議を申し付くるぞ。

九郎　畏まりましてござります、きつと身許を糺しまして一つの證據を見出しましたら、御褒美がござりませうな。

軍藏　おゝ、いよ〳〵彼等が怪しき者なら、身共が方へ召捕つて鎌倉表へ差出せば、此の軍藏が大きな手柄、そちにも恩賞いたすほどに、骨を折つて糺してくりやれ。

九郎　いえも、お金にさへなります事なら、きつと詮議いたしまして、御注進申しまする。

佐五　（思入あつて）これ〳〵九郎兵衛どの、めつたやたらに受合うて、内の難儀にならぬやう、なるたけ事を穩便に。

九郎　お前に難儀は掛けねえから案じるにやあ及ばねえ、たしかな認めが附かなくツて、こんな事を背負ひ込むものか。

軍藏　何にいたせ、よきものに出合うて身共も安堵、必ず頼むぞよ。
九郎　承知いたしましてござりまする。
軍藏　然らば佐五兵衞。
佐五　御苦勞さまにござりまする。(ト軍藏門口へ出る。)
軍藏　家來參れ。
ト時の太鼓になり、若黨附いて花道へはひる。佐五兵衞跡を見送り九郎兵衞の側へ來り、
佐五　これ〱九郎兵衞どの、あの逗留のお侍を怪しいやうに言はつしやるが、もしや泥坊ではあるまいかの。
九郎　以前の身分に引替へて不相應な遣ひ振り、まさか泥坊もしめえけれど、どうでたゞぢやアあるめえよ。
佐五　そりやあ、もしや贋金でも。(ト佐五兵衞思入。)
九郎　いや贋金や泥坊ぢやあねえ、わしが圖星に嗅ぎつけたは。
佐五　圖星といふは。
九郎　これ、(ト九郎兵衞佐五兵衞に囁き、)種はこれに違えねえ。

佐五　そんなら謀叛の。

九郎　これさ、大きな聲をしなさんな。

佐五　どうかこつちの掛り合に、ならぬやうにしたいものだ。

九郎　そりやあ決して案じなさんな、悪事に沖を越して來た、わしが舵を執るからは、お前の難儀にしやあしねえ。

佐五　こなたを力にしてゐるが、險難なことはあるまいかの。

九郎　はて、危い船に乘せやあしねえ、氣を丈夫にして居なせえ。

佐五　それぢやあ何かの相談を。

九郎　奥へ行つて話しませう。

ト合方にて九郎兵衛佐五兵衛奥へはひる。太鼓入り派手なる出の唄になり、花道より益田八右衛門羽織大小堂島下駄、好みの打扮にて出來る、續いて小藤湯女派手なるこしらへ、湯女の一、二、三、湯女の打扮、お蓮同じく湯女にて三絃を擔ぎ、竹に附きたる火繩を持ち出來り、花道にて、

八右　有馬山いなの笹原風吹けば、いでそよ人とつらねたる、古歌の心も有明の、櫻にくらす山狩に松にしがらむ小藤を連れ、戀には登る有馬富士、

小藤　賤しいこの身もお情に、人形筆の命毛かけ、連理の松の千代八千代緣結びし中の坊、
一　ほんに離れぬ布引の女男に流るゝ瀧よりも、湯宿に夜每濡れ浴衣、
二　蜘手の瀧かさゝがにの、愛し可愛の沖越えて、
三　互ひの思ひいく瀨河、誰白石の瀧の絲、
お蓮　解けて今宵はしつぽりと閨の口說も有馬菅、いつ行く山と思ふうち。
八右　遊び暮して來るともなく、向うは宿のもう庭先、
小藤　早う行かうぢやござんせぬか。
八右　おゝ、何事もそち次第。
一　そんなら早う、
皆々　增田さん、
八右　皆も一緒に、
皆々　さあ、ござんせいな。
　　　ト此の人數本舞臺へ來る。奧より以前の仲居の四、五出來り。
仲四　これは〳〵旦那さま、大そうお早うござりましたな。

仲五　小藤さんはめつたに外へ出やしやんせぬゆゑ、山道で、
仲四　嘸お草臥で、
兩人　ござんせうわいな。
小藤　いえ〳〵、今日は皆さんと遊びながら行たゆゑに、思つたよりは草臥れぬわいな。
兩人　それはよぅござんしたな。
仲五　おゝ、さつぱりと忘れて居たが、旦那さまへお隣のお客さまから、お手紙が參りましてござります。（ト懷から手紙を出す。）
八右　おゝ、碁の好きな御隱居が、昨日の勝負をしようといふ大方身共を迎ひであらう。（ト言ひながら開き見て、）案の定、迎ひの手紙だ。（ト懷中なし、）後方參ると申してくりやれ。
仲四　畏まりましてござります。
八右　いやお蓮が參つたので騷ぎながら歩いたせゐか、とんと道に倦きなんだ、先づ湯よりも酒と致さう。
お蓮　それが何よりでござります。お瀧どん、お肴を早く。
仲居
二人　あい〳〵。（ト奧へはひる。）

一　今宵は旦那の思ひ附で、大湯女小湯女はいふに及ばず、若い者まで一つになり川崎音頭の總踊。

二　それに又、隣座敷へ東からお出なされた、お客さまのお催しで、

三　一緒においでなされました哥澤の太夫さんが、東で流行る端唄をばおうたひなさると申すこと。

八右　それは何より聞きごとだ、そち達は知るまいが、その哥澤の芝金といふはまことに聲の好い太夫、身共も東に居た時分二つ三つ稽古したが、なか〳〵もつてむづかしいものだ。

小藤　さつきお唄ひなされましたは、何といふ唄でござります。

八右　あれは「我がもの」というて、端唄の中での利ものだ。

ト奥より仲居の四、五廣蓋へ三ッ物の肴を載せ、杯洗と燗徳利を持ち出來り、

仲四　はい、お肴を持つて參りました。

お蓮　おみきどん、お燗はいゝかえ。

仲五　丁度よろしうござります。

お蓮　さあ旦那さま、私は先刻から喉がむづ〳〵いたします、早くお始めなされませいな。

八右　よく呑みたがる奴だなあ。（ト此の時下手二階家にて仲居〇の聲にて）

〇　さあ〳〵哥澤のお師匠さん、早く聞かして下さりませ。

八右　もう端唄が始まるさうだ。

小藤　丁度幸ひ、何よりの、

皆々　よいお肴でござんすなあ。

ト これにて知せに付き、下手二階の伊豫簾を捲上げる、爰に哥澤連中羽織袴にて居列び、直端唄になる。

〽春の夜の夢も結ばで明烏、殘る口説の有馬山、いなせともなき後朝に、互ひに募る戀の情、晴れて添寐を待つわいな。

ト此の内八右衞門猪口を取り、小藤酌をなし、皆々端唄を聞く思入あつて、お蓮手を叩き、

お蓮　おや〳〵初めて端唄を聞きましたが、まことに意氣なものでござりますね、わたしや芝金さんに惚れましたよ。

八右　太夫もお蓮に惚れられたら、嘸嬉しいことだらう。

一　お蓮さんばかりぢやござんせぬ、あの聲にはわたし等も、

皆々　惚れ〳〵としますわいの。

小藤　そんなにみんなが惚れたらば、お上さんが御一緒ゆゑ、氣をお揉みなさんせうわいな。

八右　さういふ小藤も、哥澤に大方惚れたであらうがな。
小藤　いえ〳〵、わたしや太夫さんより、
八右　外に惚れて居るものがあるか。
一　そりや申さずとも知れたこと、小藤さんは增田さんに、
お蓮　惚れぬいて居やしやんすわいな。
八右　あんまりさうでもあるまいて。
小藤　さうでないとは、憎らしい。（ト八右衞門を抓る。）
八右　あいたゝゝゝ。
二　小藤さんの惚れてのことは、此の有馬の湯治場で、
三　誰知らぬものもないのに、其のやうなことおつしやるなら、
お蓮　思ひ入いぢめて、
皆々　あげなさんせいな。
〽粹な浮世も戀ゆゑに、野暮な愚癡さへ有明の、花には曇る空くせの、雨もいつしか春の宵、星もちらほら薄あかり、

ト此の内小藤八右衛門の胸づくしを取るを振り拂ひ、又取り附くを突き退ける。小藤腹の立つ思入にて煙管を打附け、上手を向きつんとする、これを皆々留めることよろしくあつて文句の切れ。

八右　これ〳〵小藤、又おぬしの癇癪か、野暮をいはずと哥澤の、あの端唄を聞いたがよい。

ト八右衞門右合ふ三絃を取つて、

〽忍び〳〵に相惚の、嬉しき床にまだ消えぬ、吸殻で見る顔と顔、眞の色ではないかいな。

ト八右衞門よろしく三絃を彈く、

小藤　わたしや愛敬のない生れゆゑ、笑ひ顔は出來ぬわいな。

もういゝ加減に笑ひ顔を、見せてくれてもいゝではないか。（ト三絃を置き小藤を引寄せる。）

八右　またそんな皮肉を言ふか。

お蓮　小藤さんが笑はずば、わたしが代りに笑はうわいな。（ト小藤の前へ顔を出し、）ほゝゝゝゝ。

トをかしな顔をして笑ふ。

小藤　あのまあ、をかしな顔わいなあ。（ト笑ふ。）

お蓮　それ、笑はして上げたわいな。

一　小藤さんの笑ひが出たら、爰に大勢斯うして居るは、程が惡いぢやござんせぬか。

二　ほんにお前のいふ通り、爰に居るより、奥へ行つて、

三　晩の踊りの稽古でも、しようではござんせぬか。

四　まだわたし等はうろおぼえ、

五　早う稽古がしたいわいなあ。

お蓮　まあさう急かずと、もう一杯、

一　はて、爰に居ては邪魔になるゆゑ。

お蓮　それだといつて、

皆々　さあ、ござんせいなあ。

〽薄墨ににじみ勝ちなる玉章の、切るに切られぬ筆のさや、涙の雨のふるさとへ、泣いて別るゝ歸る雁。

ト此の内仲居みな〳〵思入あつて奥へはひる、跡また八右衞門酒を呑み、小藤に差す。小藤此の端唄を聞き酒に咽せて泣く。

八右　これ小藤、何を泣くのぢや。

小藤　あの端唄を聞くにつけ、いつかあなたもあのやうに故鄕へお歸りなさんせうと、それが悲しうござ

んすわいな。

〽留めてとまらぬ春の暮、花を見捨てゝ候かしく、

ト小藤よろしく泣く。八右衛門これを引寄せ、

八右　なんの泣くに及ばぬこと、さして病もないけれど、保養がてらに御主人へ長く暇を願うて來たれば、いつ歸らうと自由な身の上、若しまた國から迎ひが來たら、おぬしが體を身儘になし一緒に連れて行かうわいの。

小藤　そりや、眞實のことでござんすかえ。

八右　假初ながら二世かけて言交せし上からは、國へ伴ひ宿の妻、生涯おぬしと離れぬ心ぢや。

ト引き寄せる。

小藤　すりや、それ程までに、（ト寄添ひ、）嬉しうござんすわいな。

〽花も實を結ぶまことゝ眞の床、若葉にくらき下座敷、（ト小藤寄添ひながら是れを聞き、）あれ、あの端唄の花も實を、結ぶまことゝいふ所を、ちよつと覺えて置きたいもの。

ト三絃を取るを、

八右　あの唄が覺えたくば、後でおれが教へてやらう。

〽はなす間もなき短夜に、東雲近く時鳥、唯一聲を二人して左りと右の耳に聞く、嬉しい仲ぢやないかいな。

ト此の内小藤三絃を彈かうとするを、八右衞門その三絃を引取り引寄せる。此の折奥より以前のお蓮出て、これを見て氣の揉める思入、よき程に以前の佐五兵衞出來る、お蓮佐五兵衞の手を執る、これにて文句の切れになり、知せに付き伊豫簾を下し哥澤連中を消す、佐五兵衞はお蓮を突き倒し、

佐五　え丶、何をするのだ。

お蓮　や、旦那さんか、戸惑ひをしました。（ト逸散に奥へ逃げてはひる、八右衞門小藤びつくりなし、）

八右　お丶、そちは主人か。

佐五　だいぶお早いお歸りでござりましたが、定めて今日は弓場山から有明櫻、千鳥の瀧、爰で名代の有馬富士山々御遊山がござりましたらうな、又晩ほどの大踊りを女子共は申すに及ばず、皆樂みにいたしてをりまする。

小藤　もし旦那さん、今日は増さんの山見物で、よい樂みをしましたわいな。

佐五　嘸面白い事であつたらう。（ト合方にて奥より以前の九郎兵衞出來り、思入あつて、）

九郎　お丶妹、今歸つたか。（トこれにて佐五兵衞小藤の後へ住ふ。）

小藤　お前は兄さん、何ぞ用でもござんすのかえ。
九郎　ちつと手前に用があるのだ。
小藤　何の用か知らぬけれど、爰はお客の座敷でござんす、部屋へ行て下さんせいな。
九郎　何もそんなに呆氣なく部屋へ行けと言ふにやあ及ばねえ、お客の座敷と知つて來たのだ、これお藤、用といふのは外でもねえ、手前にちつと頼みがあつて、それで歸りを待つて居たのだ。
小藤　どうでお前が待つて居たとは、よい事ではござんすまい。さうしてわたしへ頼みといふわえ。
九郎　久しいものだが、又無心よ。
小藤　え。
九郎　手前も聞くのが厭だらうが、おれも言ふのが實に厭だ、といつて他人にやあ猶言へず、據ろなく同胞の誼に手前を頼むのだ。
小藤　いつも〳〵お前の無心、聞き度くもござんせぬが、幾らほど入るのでござんす。
九郎　今度はたんとのことぢやあねえ、五十兩貸して貰ひてえのだ。
小藤　え、何を見込みでござんすか、わたしや奉公の身でござんす、金のなる木は持つまいし、大概にして下さんせいな。

ト小藤は八右衞門に氣の毒なる思入にて、顔を背けて言ふ。佐五兵衞も間の惡きこなし。八右衞門はそ知らぬ振にて酒を呑み居る、九郎兵衞こなしあつて

九郎　そりやあ手前が言はねえでも、奉公の身も知つて居るが、此の湯治場で大盡といはれるお客が手前の馴染、金のなる木のあるも同然、その旦那へ頼んだら僅か五十兩の事だから、出來ねえこともあるめえぢやあねえか。

小藤　いえ〳〵わたしゃ、あつかましいそんな事は言はれぬほどに、お前の頼みは出來ぬから、今日は歸つて下さんせいな。

九郎　歸れといつておいそれと、歸られる位なら、厭がられに來やあしねえ、今日その金を返さにやあ、首足をもがれる位な、切ない事情があるから來たのだ、何でもかでも五十兩手前に借りにやあ歸られねえ。

八右　（この内思入あつて、）こりや〳〵亭主、あの者は小藤の兄か。

佐五　へい左樣にござります。小藤が兄の、九郎兵衞の申す者でござります。

八右　むゝ、左樣か。（トこなしあつて、）こりや九郎兵衞とやら、これへ參れ。

九郎　へい〳〵御酒の席のお邪魔をしまして、まつぴら御免下さりませ。（ト前へ出る。）

八右　只今これにて承はれば、金子が入用ぢやと申すな。

九郎　面目次第もござりませぬ。

八右　何程あればよいのぢや。

九郎　へい、五十兩欲しいのでござりまする。

八右　五十兩あれば好いのか。それは何より易いことだ、身共が用立て、遣はさう。

小藤　（これを聞きて、）あもし、どうもそれでは。

八右　はて、可愛いそちが兄とあれば、惜しうは思はぬ五十兩。（トこなしあつて、）こりや亭主、預け置いた金子の內、五十兩遣はしてくりやれ。

佐五　へい左樣なら此の九郎兵衞に、五十兩貸しますのでござりますか。

八右　早う遣はしてくりやれ。（トこれにて佐五兵衞扨はといふこなしあつて、）

佐五　どうやら怪しい。

八右　や。（ト思ひ入。）

佐五　いえ、あやかりたいほど好いお氣前、見ず知らずの九郎兵衞に五十兩貸してやるとは、惜しいものでござります。

九郎　とんだ岡燒持だ。

ト佐五兵衞は奥へはひり、直ぐに胴卷を持ち出來り、内より五十兩包みを出して八右衞門に見せる。八右衞門それを遣れといふこなし、佐五兵衞惜しさうに、

佐五　それ、五十兩。（ト渡す、九郎兵衞受取り。）

九郎　これは旦那樣有難うござりまする。これ小藤、手前からよくお禮を申してくれろ。

ト小藤氣の毒なる思入にて俯向き居るゆゑ、八右衞門こなしあつて、

八右　何の禮に及ぶこと、今にも小藤を年拔して女房になせば其方は、身共の爲には兄も同然、さすれば身共が貢いでも、何の別してもない事ぢや、又入用なら何時でも。

九郎　へい〳〵、其のお詞を守りまして、又御無心に上ります。

佐五　いや、慾の深い人だな。

九郎　はて、慾を離れて此の浮世が、どうして渡られるものか。

八右　いや氣の輕い男ぢやな。先づ女房の兄とあれば近附きの杯いたさう。さゝ、一つ呑みやれ〳〵。

ト八右衞門九郎兵衞に杯をさす。

九郎　へい、有難うござります。酒と聞いたら目のない九郎兵衞、早速頂戴いたしまする。（ト九郎兵衞

杯を取り、佐五兵衛酌をする。）これは憚り。

小藤　（これを見て、）又お前、お酒かえ。お金をお借り申したら、早う歸つて下さんせいな。

九郎　極りで手前も野暮を言ふぜ、折角の思召し、そんな失禮が出來るものか。

トせゝら笑ふ、「松になりたや」の唄になり、花道より初藏胸當、紺の手甲脚絆大小草鞋菅笠を持ち、旅裝にて出來り、花道にて、

初藏　昔やんごとなき御方が藥師如來へ御願望にて、千人の背を洗うたといふ日本一の有馬の湯治場、賑かな事ではある。名に負ふ箱根の七湯にも勝り劣らぬこの繁華、これ等が田舍に京ありだなあ。（ト思入あつて舞臺へ來り、）素麵屋といふは爰の家だな、どうか御兩所のうちにお目に掛りたいものだ。（ト門口から内を覗き、）や、それにお出なされまするは、八右衛門樣ではござりませぬか。

ト八右衛門、初藏を見て、

八右　おゝ、さう言はるゝは大竹氏、いや初藏か、これへ參れ〳〵。

初藏　左樣なら、御免下さりませ。（ト初藏内へはひり、）此の有馬の溫泉に御逗留は存じながら、ひよつと御他出でもありはせぬかと、心を痛めて參つたところ、測らずお目にかゝりまして、大慶な儀でござります。

八右　遠路の所を大儀であつた、さゝ草鞋を解いてこれへ參り、先づ一つ呑んだがよい。
初藏　有難うはござりますが、鎌倉表より火急のお使ひ。（ト言ひながら懐中より小さな狀箱を出し、）委細の事は御狀の内に、いざ御披見下さりませう。
　　　ト八右衞門狀箱を受取り、中の手紙を出して封を切り、上包を袂へ入れ、八右衞門開かうとするを、九郎兵衞覗き込むゆゑ、八右衞門手紙を懐へ入れ、少し酒に醉ひたるこなしにて、
八右　すりや、鎌倉表より急ぎの狀ぢやと申すのか。
初藏　へい、左樣にござりまする。
八右　湯治願ひの日限も切れ、長逗留いたすゆゑ、早う歸れと家老中より大方迎ひの書狀であらう。文體は見るに及ばず、書狀は慥かに受取つたと、立歸つて言うてくりやれ。
　　　トこなしあつていふ、初藏は氣を揉む思入あつて、
初藏　いや申し增田樣、あなたもあまりの當推量、遠路の所を夜を日につぎ、拙者がこれへ參りしは。
八右　こりや〳〵口數を申すに及ばず、仔細は承知いたしてをる。
初藏　ではござりますが、豫ての大望。（ト九郎兵衞これを聞き咎め、）
九郎　なに、大望とは。

八右　これはしたり初藏、大望とは何の事ぢや、燕雀何ぞ大鵬の心を知らんや。此の書面は見るに及ばぬ、無益の手紙はまツこのやうに、（ト懐から手紙を出しずた〳〵に引裂き、）斯う引裂いて反故に致すのぢや。

ト丸めて前へ投る。初藏は呆れし思入、九郎兵衞この手紙へ目を附け取らうとするを、小藤手早く取上げる、初藏びつくりなし、

初藏　や、こりや大事の密書を。（ト立ち掛るを、）

八右　こりや〳〵、そちが氣を揉むに及ばぬ、捨ておきやれ〳〵。

初藏　いえ〳〵、捨てゝはおかれませぬ。

小藤　さ、お前が大事と言はしやんす此の手紙は、お國においでの奥様かお妾さんの、迎ひの文でござんせう、わたしや腹が立つゆゑに、それで貰うて置きまする。（ト小藤思入あつて、八右衞門へ寄添ひ、）何とさうでござんせうがな。

八右　いや、此奴はよつぽど廻り氣な、悋氣するとは忝ない。

ト小藤の膝へ凭れる、九郎兵衞こなしあつて、

九郎　いゝおつな所から持ちかけた妹の悋氣も、どうやらあぢな。（ト小藤の側へ寄らうとするを隔てゝ、）

八右　どうぢや兄貴、この心底ゆゑ身共が小藤へ、首ッたけ惚れたも無理ではあるまい。

　ト酒に醉ひたるこなしにて扇を額に當てゝ、初藏この體を見てきつとなつて、八右衞門の前へ出で、

初藏　いや増田樣、いやさ八右衞門殿、この有樣は何事でござる。大切なる御用ゆゑ遠路の所を夜を日につぎ、かゝる姿で初藏が持參なしたるその密書、披見もなさらず引裂き捨て、それで濟まうと思はつしやるか、大事な體を持ちながら、女に魂奪はれて言はうやうない、こなたはなあ。

　トきつと言ふ、八右衞門きつと思入あつて、

八右　はてさて、野暮な聲ではあるわえ。これさ初藏、そのやうに腹を立つと不粋といつて女子の禁物、堅いことは打ち捨てゝ兎角浮世は色と酒、（ト側にある以前の三絃を取つて、）こりや此の三絃のこまごとを、言はぬが言ふにます穗の芒。（ト三絃を彈いて、）

〽誰を招くか秋風が、ぞつと身にしむ女郎花、（ト八右衞門唄ふことあつて、）

あはゝゝゝゝ、いや面白いゝゝ。（ト他愛なきこなし、初藏きつとなり、）

初藏　扨はいよゝゝ大事を忘れ、色故心が腐つたのぢやな、もう此の上は初藏が其の性根の曲りなば。

　ト二重へつかゝゝと上り刀の柄へ手を掛ける、八右衞門三絃にて留める、初藏振り拂つて、又抜きかけるをちよつと立廻つて、初藏足を拂はれどうと下に居る。九郎兵衞小藤の手紙を取りにかゝるを、

八右衞門三絃にて隔てる、又初藏立ちかゝるを小藤留める、それを初藏振り拂つて、もうこの上は。〔ト初藏刀を拔いて振上げる、八右衞門三絃で留める、この時奥にて、〕

谷五　やあ〳〵初藏逸まるな。

初藏　や、あの聲は、

佐五　お連さまの金井樣。

ト合方になり、奥より谷五郎羽織着流し刀を提げて出來り、初藏又立掛るを谷五郎留める。

谷五　急く所でない、初藏待つた。

初藏　や、あなたは金井谷五郎樣。

谷五　增田氏の此の場の樣子、立腹なすは尤もぢやが、たゞ何事も他言を憚る。いやさ、大醉の上なれば、此の場はこの儘捨て置きやれ。

初藏　でも、大切なる書面をば。

谷五　はて、如何なる書面か知らねども、假令にもいふ本性違はず。

初藏　や。

谷五　いやさ本性にも相成らば、身共が篤と異見を申せば、先づ落着いて居つたがよいわえ。

初藏　それぢやと申して、日限のお使ひ。

谷五　はて、何事も身共に任して、急かずとそちは控へて居やれ。

ト谷五郎初藏に呑込ませる。これにて初藏ちつと下に居る。

八右　これは〳〵金井氏御挨拶忝ない、さて〳〵初藏といふ奴は、野暮なものではござらぬか。

谷五　何さま彼は國育ち、世間見ずの野暮者ゆゑ、貴殿へ粗言を申せしならんが、何事も保養の場所拙者に免じて御免下され。

八右　左様貴殿に言はれては、近頃面目次第もない。（ト此の時奥より、以前の仲居殘らず出來り、）

一　申し旦那さま、お誂へのお肴がお座敷へ廻りました。

二　お床の花もさし替へて置きましたれば、

三　小藤さんも御一緒に、

四　崖の座敷へ、

皆々　おいでなされませいな。

八右　（思入あつて、）如何さま、爰の酒も滅入つた、座敷を替へて呑み直さう。

佐五　それが宜しうござります、崖から後の山々を見はらしますれば氣が替り、又御一興でござります。

ト八右衞門、九郎兵衞を見て、

八右　小藤が兄もなる口なれば、一緒に參つて相手でもしやれ。

九郎　それは有難うござります。所が有馬の湯治場だけ、瀧呑みとやらかしませう。

八右　いや瀧呑みとは面白い、金井氏貴殿も一緒においで下され。

谷五　拙者は少々用事もござれば、先づ〳〵お先きへ。

八右　然らばお待ち申してをるぞ。こりや初藏、何事も酒興の上、腹も立たうが許してくりやれ。

ト初藏何をといふ思入、谷五郎これとこなし。

一　さあ小藤さん、お前も一緒に。（ト此の内小藤思入あつて、）

小藤　爰に長居も何とやら、さあ增田さん、奥の座敷へ。

八右　おゝ、皆も一緒に、

九郎　どれ、御馳走になりませうか。

仲居
皆々　さあ、ござんせいなあ。

ト「松になりたや」の唄になり、八右衞門小藤の手を取り、九郎兵衞佐五兵衞仲居皆々附き、奥へはひろ、初藏思入あつて、

初藏　こりや斯うしては。（ト立ち掛るを又留めて、）

谷五　事荒立ては大義の破れ、何事も身共に任せ穩便にいたされよ。（ト是れにて初藏下に居る。）

初藏　増田氏の爲體、たゞ事とは思はれず、金井氏にはお留めあるが、如何めさるゝ御所存なるぞ。

谷五　當所に長の逗留なし、遊興いたすも豫ての計略、なれども色に溺るゝは名將勇士も往々ある事、篤と實否を糺した上、

初藏　まこと放埓に極まらば、

谷五　これ。（ト初藏に囁く。）

初藏　すりや、八右衛門殿を連れ出して。

谷五　あゝ、これ。（ト四邊へ思入。）何かの事は、奥へ參つて。

初藏　左樣ござれば、谷五郎殿。

谷五　どれ、案內いたしませう。

ト「松になりたや」の唄になり、谷五郎先に初藏附き奥へはひる。時の鐘合方になり、奥より以前の小藤出來り、四邊へ思入あつて、

小藤　不圖した事から増田さんと斯うして深く言交せば、お案じ申すお身の上、最前爰へ鎌倉から初藏

どのとやらいふ人が、急な御用でお持ちなされし、大事の手紙を引裂いて捨てゝお仕舞なされしは、どうも合點が行かぬゆゑ、直にわたしが拾うて置いたが、火急な御用ぢやあるまいか、幸ひあたりに人目もなければ、妾で讀んで見ようわいな。

ト小藤手紙を出し、破れを廣げ見ようとする、此の時後へ九郎兵衞出て、

九郎　それはおれが讀んでやらう。（ト取りにかゝるを振拂ひ、）

小藤　や、お前は兄さん。

九郎　屋敷の手紙はむづかしい、手前達にやあ讀めやあしねえ。

小藤　いえ〳〵、これは大事の手紙、お前には見せられぬわいな。

九郎　えゝ、しつこい、見せろといふに。

ト九郎兵衞取りにかゝるを小藤懐へ入れる、九郎兵衞引附け取らうとするを、遣るまいといふ立廻り、奥より以前のお蓮踊りの名前書の書附を持ち出來り、

お蓮　もし〳〵小藤さん、踊りの順を書いたから、ちよつと見て下さんせいな。

ト此の中へはひる、九郎兵衞突退け、

九郎　えゝ、それどころかえ。

お蓮　あれさ、さう言はずと。

ト九郎兵衞を隔て、こつちやの立廻り、此の内小藤は摺抜け奥へ逃げてはひろ、九郎兵衞間違へてお蓮の書附を引取り見て、

九郎　なに、惣踊り順書、小藤、小かつ、

お蓮　そりや踊りの順書でござんす。

九郎　えゝ、摺替られたか。

お蓮　その書附を。（ト取りに掛るお蓮を突き倒し、）

九郎　えゝ、忌えましい。

ト順書を打ち附け奥を見込む、お蓮起上り痛いといふ思入。「松になりたや」の唄にて道具廻る。

（高塚廣野の場）――本舞臺一面平舞臺、丸竹の竹藪、上下山の張物、松の立木、この藪の向う有馬の山々を見たる遠見、總て有馬街道高塚廣野の模樣。時の鐘、風の音にて道具留る、と時の鐘を打上げ床の淨瑠璃になる。

〽入相の鐘に暮行く高塚に、一むら茂る藪疊、直なる竹の横道より、胸に、案も有馬心いそ

の湯の裏手一筋に、足を早めて大竹初藏。

ト禪の勸めばた／＼になり、花道より初藏尻を端折り一本差しにて走り出で、直に舞臺へ來り思入あつて、

初藏　正雪殿の大望に一味荷擔の人數の內、衆に勝れて器量あるゆゑ、谷五郎殿と兩人を大阪表へ遣はされしに、頭と賴む八右衞門殿、酒興の上とはいひながら大事の密書に目も通さず、引き裂き捨てたる傍若無人、金井殿と言合せ篤と實否を糺せし上、若し變心に極まらば味方の者の一大事、

〽後の方の竹藪に、きつと目を附け心にうなづき、（ト竹藪へ思入あつて、）

む〻幸ひの此の竹藪、こゝへ忍んで來るを待ち受け、善惡糺した其の上で、仕儀に及ばゝ生死の境、（トこの內下緖にて襷をかけ、）道は一筋此處で、駕籠の來るのを、待合さん、さうだ／＼。

〽藪かき分けて初藏は、暫し傍に身を忍ぶ。（ト時の鐘にて初藏上手の藪へはひる。時の鐘、）

〽折もこそあれ、向うより酒にたわいも內心の、臍は固めし英雄の醉も增田を乘物へ、のせて金井の谷五郎、後に附添ひ出來り、

ト花道より△○駕籠舁にて、京四ツの駕籠を擔ぎ、後より以前の谷五郎縞の袴大小草履にて附添ひ出來り花道にて、

谷五　こりや〳〵若い者、高塚の藪際へその駕籠を下してくりやれ。

△○　へい〳〵畏まりましてござります。

〽足を早めて藪際へ、息杖なして立ち留まり、（ト舞臺へ來り、）

△　左樣なら旦那樣、これへ下しますでござりますか。

谷五　おゝ、其の邊へおろしてくりやれ。

兩人　へい〳〵畏まりました。（トよき所へ駕籠をおろす。）

谷五　道を急いで大儀であつた、この高塚の藪際でちと待合す人があれば、其方達は町へ參り、呑口ならば一口呑み、息をついて來てくりやれ。

○　へい〳〵有難うござります、呑口どころではござりませぬ、呑む方では此の街道での指折でござりまする。

△　棒組とは申しながら、二人ながら巨蟒同樣、年中呑むので素ッ裸、酒ゆゑ苦勞を致します。

谷五　それ程の上戸では十分にも參るまいが、これで一口氣を附けて參るがよい。

ト紙入より二分金を一つ出して遣る。

○　これは澤山に有難うござりまする。

△ これでは大呑めに呑めます。

○ 左様なら直にやつて參ります。

谷五 いや〳〵、ちと待合すに暇どれば、なるたけゆるりといたして參れ。

△ 左様なら落着いてやつて參ります。

○ 降りませうかと思ひましたから、桐油を附けて參りました、若しばらつきましたらお掛けなされて下さりませ。

△ お提灯はこれへ掛けて置きます。

谷五 大きに世話であつた。

兩人 どれ、行つて參りませうか。

〽足を早めて立ち歸る後見送りて谷五郎、四邊を窺ひ駕籠へ立寄り、

ト此の内△○は花道へはひる。谷五郎後を見送る、時の鐘蛙の聲、谷五郎四邊へ思入あつて、駕籠の側へ來り、

谷五 増田氏々々、いやさ、八右衛門殿。

〽呼び起されて八右衛門、酒にたわいもちよろ〳〵眼。

トこの内谷五郎駕籠の垂をあげる、内に以前の八右衛門寐てゐて、漸う眼の覺めし思入にて、

八右　こりや誰ぞをらぬか、水を持て〱。（ト手を叩く、谷五郎、側へ寄り、）

谷五　増田氏心を慥にお持ちなされい、金井谷五郎でござる。（トきつと言ふ。心附きたる思入にて、）

八右　なに、金井氏でござる。（ト此の時知せに附き月をおろす、これにて谷五郎を見て、）まことに貴殿は谷五郎殿。（ト四邊を見廻し、）こりや座敷と思ひの外、四邊も廣き此の原中、何しに爰へ參つてござる。

谷五　拙者がお連れ申してござる。

八右　其許が連れられしとか、如何なる譯で原中へ、身共を駕籠で連れられしぞ。

谷五　ちと密々に其許へ御談判がいたし度く。

八右　御談判とは、又例の御異見ではござらぬか、御異見ならば八右衛門承はり度くござらぬな。

〽谷五郎は打ちうなづき、駕籠の桐油を傍に敷き、

ト谷五郎思入あつて、駕籠の洞油を取り上の方へ敷き、

谷五　何はともあれ、先づ〱これへ。

八右　すりや、あの身共に。

谷五　御苦勞ながら。

〽言ふにひよろ〳〵駕籠を立出で、
ト八右衞門思入あつて、ひよろ〳〵と駕籠より出で、伸をしながら、

谷五　如何にも貴殿は、小藤といふ狐に魂奪はれて、現他愛もござらぬが、本性あらば谷五郎が申す事をお聞き下され。

八右　これは狐に化されたか知らぬ。

八右　如何にも、忝はるでござらう。

〽しかつめらしく座に直り、（ト八右衞門やはり生醉ひの思入にて　桐油の上へ住ひ、）

あゝ醉醒めで喉が乾くが、水を一杯貰ひたい。

谷五　お望みならば、その水を只今進上いたすでござる。

八右　それは何より忝ない。

〽谷五郎は用意せし腹切刀を扇に載せ、（ト谷五郎懐より九寸五分を出し、扇の上へ載せ、）

谷五　水より冷たき氷の刃、これを貴殿へ進ぜたい。

〽差出せばぢろりと見遣り、（ト谷五郎八右衞門の前へ差出す、八右衞門これを見て、）

八右　なに、この刃物を某へ下されんとは如何なる譯、仔細を聽聞いたしたい。

ト床の合方蛙の音になり、谷五郎思入あつて、

谷五　仔細と申すは外ならず、豫て貴殿も某も正雪殿の大義に與し、一味の浪士四千餘人、多人數の其のうちより眼識によつて選出され、攝州表の大將を承はつて此の地へ來り、湯治と號して逗留なすも、今にもあれ、時日極り內通あれば、鎌倉と同時に諸武士へ下知なして、討つて出ん計略も、上部にそれと知られぬやう、

〽保養がてらの湯治と僞り、心にもなき遊興なすも、身の大望を祕する爲、

一味の者は拙者に限らず苦心いたすにその許は、謀もまことゝなり、湯女の小藤に魂奪はれ、酒興の上とはいひながら、今日鎌倉表より大竹氏が持參の密書、披見もせずに引裂き捨ては、言語に斷えし貴殿の振舞、血氣の初藏怺へ兼ねたゞ一討にいたさん所存、尤もなれば其の場を留め、此の高塚の原中まで伴ひ來るは拙者の寸志、

〽貴殿を助け置く時は、終に酒興に大義を漏らし、

正雪殿はいふに及はず、四千餘人の一命にかゝる事ゆゑ助け難し、これにて切腹いたされよ、それとも存命いたし度くば拙者を討つて存命あれ、生きてをつては正雪殿一味の者へ濟まざるゆゑ、

手籠になしても助け置かれぬ、さあ先非を悔いて切腹めさるか、但し拙者を討たるゝか、手籠になして命を取らうか、さあ〳〵、有無の返答承はりたい。

〽義を金鐵と固めたる流石金井が詞詰、増田が心測りかね後に窺ふ大竹初藏、互ひに眼配せ居合腰、異議に及ばゝ一討と一心籠めたる其の有樣、酒に熟せし八右衛門、悠然として詞を改め、

ト此の内八右衛門は俯き居る、谷五郎段々に詰寄りきつと言ふ。初藏も藪を押分け出で窺ひ居る、八右衛門思入あつて顏を上げ、短刀を載せし扇をいたゞき、

八右　斯く朋友の信義厚く、切腹せよとは忝なき金井氏の厚情ながら、餘人は知らず其許は、御存じならんと思ひしが、やはり小藤に魂奪はれ、放埓惰弱と思はつしやるか。

谷五　何と。（ト床の合方竹笛入になり、）

八右　此の期に及び朋友を、恨むは愚癡の至りながら、正雪殿に與して六十餘州を覆へす大義を計るその者が、高が有馬の湯女ぐらゐに魂奪はれ變心なさうや。そも〳〵貴殿と某は大阪表の同志の者を指揮なす役に參りしが、人にそれと知られぬやう遊興なす其の中に、小藤に馴染重ねしも彼れが兄は其の以前正雪殿の師と頼みし、楠不傳が若黨にて鵜野九郎兵衛といひし者、生得

心の良からぬ奴、石堂家の藩中と湯治宿へは申せども、彼れが素性を存じをれば、小藤が縁に金子をもつて手なづけおくも我々が、素性を人に言はせぬ爲め。

〽斯く兄弟の因みを結びし貴殿にまでも放埓と、斯く思はする拙者が苦心、三絃取つて彈くうちも片時忘れぬ味方の懸引き、

心の調子は狂はねど、

〽その張皮の犬猫同樣思はるゝのが口惜しい、

それも最前大竹が持參なしたる火急の密書、披見なすにも九郎兵衞始め、あたりは鵜の目鷹の目ゆゑ、懷中なせし其の折に竊かに書狀を取替へ、引裂き捨てしは誰が見ても障りにならぬ不用の書面、密事を知らせし大竹が持參の密書はこれにあり、披見あつて某が湯女に魂奪はれぬ疑念をはらして下されい。

〽あたり窺ひ懷中より以前の密書取出せば、金井心得傍なる提灯とつて火影に見やり、扨はと驚き、繰返し讀む此方には初藏が、面目なげに藪蔭に息をこらして忍び居る、金井ははたと膝を打ち、

トこの內八右衞門よろしく思入あつて、懷より以前の密書を出す、谷五郎駕籠の提灯をとつて密書

を開き見て驚く思入、藪の蔭にて初藏扨はといふ思入。谷五郎とつくと密書を讀み終り、

谷五　扨は當月二十六日、いよ〳〵大義を發すると、貴殿と拙者へ知らせの書狀。

八右　此の一大事を九郎兵衞に、それと知られし其の時は、忽ち事の露顯となり千辛萬苦も水の泡、引き裂き捨てしは我がさそく、

〽正雪殿を始めとして、四千餘人の一命に拘はる事を、八右衞門たゞ一人の心より、引出す事を致さうや、推量下され金井氏、

〽人に增田が本心を明かすを聞いて谷五郎、身をへりくだり座を占めて、

ト谷五郎ぢつと思入あつて、

谷五　はゝッ、斯くあらんとは存ぜしかど、測り難きは人心、若しやと貴殿を疑ひて大竹某兩人にて、他聞を憚る大事ゆゑ、人里離れしこの廣野へ貴殿を伴ひ來りしは、此の本心を知らんが爲め、これにて安心致したり、さはさりながら假初にも斯かる大智の其許を疑ひしは我が粗忽、申し譯には此の場に於て、

〽切腹いたすと谷五郎、有合ふ刃取上ぐれば、藪の内より初藏が飛んで出でゝ押し留め、

ト谷五郎面目なき思入にて八右衞門の前にある短刀を取つて腹を切らうとする、藪の内より初藏つか

つかと出て、谷五郎を留め、

初藏　やれ、逸まりめさるな金井氏、その粗忽はこの初藏、四邊の人も憚からず大事の密書を出せしは、斯かる大義に與しながら、後先思はぬ此の身の淺慮、そのお詫には拙者が此の場で、

〽腰の刀へ手を掛くれば、（ト初藏　刀へ手をかけるを、）

谷五　あいや、こなたは死するに及ばぬ、切腹なすは谷五郎。

初藏　いや、切腹なすは此の初藏。

谷五　いゝや身共が、

初藏　いや拙者が、

〽死を爭ひし義心と義心、增田はきつと聲を掛け、（ト兩人死なうとするを八右衞門留めて、）

八右　やれ御兩所とも短慮なり、今私の趣意を以て命捨つるはまことに犬死、最早日限極りし上は御兩所共に大事の身の上、無益に此の場で切腹なさば、豫て由井の正雪殿に誓ひし詞が相立ちますまい。

谷五　ではござれども、貴殿へ對して、

初藏　粗忽なしたる、

兩人　申し譯に。（ト又死なうとするな、）

八右　今死するこそ粗忽千萬、身共に濟むの濟まざるのと、それらの儀は些細の事、大事を抱へし身をもつて、たつて切腹めさるなら身共もとも〲此の場に於て。（ト刀の柄へ手を掛ける。）

谷五　こりや、めつたなことを。

八右　然らばお止まり下さるか。

初藏　ぢやと申して。

八右　誓つた詞を反故にめさるか。

谷五　さあそれは。

八右　身共も切腹いたさうか。

兩人　さあ、

八右　さあ、

三人　さあ〱〱。

八右　死を止まつて御兩所とも、最早日限極りし上は事を發する大義の用意が、肝要でござらうがな。

へ理を諭したる增田が詞、兩人實にもと其の理に服し、

ト八右衞門よろしく思入にて言ふ。谷五郎初藏こなしあつて、

谷五　思慮深き增田氏の詞に從ひ、死を止まり、

初藏　大義の時節に正雪殿へ、

谷五　互ひの一命、

兩人　捧げ申さん。

八右　はゝ、天晴なる其の義心、これにて身共も安堵いたした。

初藏　斯く決心なしたる上は、鎌倉表へ立歸り、同志の者へ片時も早く此の地の樣子を申し聞けん。して、正雪殿へ御兩所よりの御返書は、如何でござるな。

八右　その返翰は、先刻竊に認め置いた。すなはちこれに。（ト懷中より手紙を出す。）

〽言ふに兩人打ちうなづき、

谷五　密書は披見いたさねど、初藏殿より承はり、拙者も認め置いてござる。

〽互ひに書狀取出し、（ト八右衞門谷五郎懷より封じたる手紙を出し、）

八右　して、其許の文面は。

谷五　時日違へず、鎌倉表と同時に發する承知の返翰。

八右　某とても同じ事、時日違へず承知の返翰。（ト兩人出す。初藏受取りて、）

初藏　斯くお心が一致の上は、大阪表は金鐵同然。（ト二通の手紙を懷中なし、）然らば拙者はこれより直に鎌倉表へ、片時も早く立歸らん。

八右　時刻違はゞ何かの手違ひ、

谷五　御苦勞ながら片時も早く。

初藏　はゝ、仰せにや及ぶべき。夜を日についで鎌倉へ、持參いたすでござりまする。

谷五　然し大事の返書なれば、

八右　必ず人目に掛らぬやう。

初藏　心得ました、左樣ござらば御兩所樣。

八右　大望首尾よく成就せば、

谷五　その時互ひに、

初藏　目出度く面會。

八右
谷五　大竹氏。

初藏　おさらばでござりまする。

〽書狀受取り大竹は、勇み進んで駈けて行く。
ト初藏ばた〳〵にて逸散に花道へはひる。五ツの時の鐘。
〽折から告ぐる初夜の鐘。
八右　今打つ鐘は最早五ツ、これより旅宿へ立歸り、崖の座敷で何かの密談。
谷五　いや增田氏には一足お先へ、慥なれども大竹どの、生瀨川の渡し場まで、見え隱れに守護いたさん。
八右　何さま、これも大事の前。
谷五　事なきやうに見送りて。
八右　後刻密談。
谷五　左樣ござらば增田氏。
兩人　お別れ申す。
〽兩雄左右へ別るゝ折柄、（ト以前の駕籠舁△〇後へ出て）
△〇　樣子は聞いた。
〽組附く駕籠舁振拂ひ、拔く手も見せず、

ト〇は八右衞門、△は谷五郎にかゝる。兩人突廻して拔打ちに浴せる。駕籠舁兩人立身にて苦しむ、谷五郎八右衞門氣味合の思入あつて、

八右　蛙は口ゆゑ、

谷五　益ない殺生。

八右　〽刀を引けば兩人は、もんどり打つて、

ト兩人一時に刀を引く、〇△見事に轉る、兩人顏見合せ氣味合の思入あつて、刀の糊紅を拭ふ、此の見得よろしく三重、時の鐘の送りにて、この道具廻る。

（有馬溫泉の場）——本舞臺、元の湯治場の道具、茲に以前の佐五兵衞帳面を繰つて居る、道具半程より「松になりたや」の唄にて、よろしく道具留る。

佐五　（思入あつて、）いや、何でも好い後は惡いといふが、此間から御逗留の石堂家のお武家樣、風呂は幕湯で仕切つてあるし、祝儀は元より勘定まで摑み取りの金儲けと喜んで居たところ、さつき九郎兵衞が話しでは、御代官樣からお調べの楠家とやらの殘黨らしいが、ひよつと詮議になつた時は、こちの家もかゝり合ひ、損をせぬやう勘定をよく調べて置かねばならぬ。

ト ばた〳〵になり、花道より以前の九郎兵衞走り出で、直に舞臺へ來り、

九郎　おゝ、佐五兵衞さん、爰に居なすつたか。

佐五　おゝ九郎兵衞どのか、何處へこなた行かしつたのだ。

九郎　ちよつと高塚まで行つて來た。

佐五　さうとは知らず、先刻からこなたの行方を搜して居たのだ。

九郎　何ぞ急な用でもあつてか。

佐五　用といふのは外でもないが、石堂家のあの御武家は、どうでも怪しい人達かの。

九郎　怪しいどころか、御代官から詮議のある曲者に、あの二人は違えねえ。

佐五　何ぞ慥な證據があるかな。

九郎　おゝ、先刻爰から京四ツの駕籠に乘せて、相役の谷五郎が附添つて裏手へ出たは、若しひよつと風でも喰つて逃げるのかと後を附けて行つた所、あの高塚の原中へ駕籠をおろして駕籠舁を遠ざけ、さつき使ひに來た奴も一ツ穴の曲者にて、三人寄つて密事の話し、一伍一什を竹藪の蔭に隱れて聞いて居たが、正しく謀叛に一味の奴等だ。（トこれを聞き佐五兵衞びつくりなし、）

佐五　えゝ、そんならいよ〳〵謀叛人か、さう聞いては大變だ、着類その外いろ〳〵な旅の荷物を預つ

たが、よく調べて置かねばならぬ、あんまり金を使ひ過ぎる好過ぎた客と思つたが、怪しい人では其の金も、吐き出さねばならぬ譯だ。

九郎　それぢやあ何ぞ預つた荷物の内に、怪しい物でもありやあしねえか、調べて見なせえ。

佐五　なるほど、こいつは捨てゝはおかれぬ。

九郎　ちつとも早く詮議をしなせえ。

佐五　いや、とんだ事が出來て來たわえ。

ト佐五兵衛帳面を抱へ奥へはひる。九郎兵衛跡に思入あつて

九郎　いや、待てば甘露の日和といふが、待たずにふいと湧出した湯治の湯より懐があつたまつたは妹を、餌に貰つた五十兩、その手續きから増田金井が素性を見出した楠家の餘類、由井正雪へ荷擔の兩人、訴人をすりやあ褒美はずつしり、小藤の蔓より金の蔓、こいつは旨く取り附いたわえ。何にしろ善は急げだ、風を喰はぬ其のうちに、ちつとも早く代官所へ、むゝ、さうだ。

ト九郎兵衛こなしあつて立ち上る、此の内後へ以前の小藤窺ひ居て、袖に隱せし懐劒を抜き、唐突に九郎兵衛の後より肩先へ切り付ける、九郎兵衛びつくりなし、わつと云つてどうとなる、小藤又切りかける、ちよつと立廻つて九郎兵衛小藤の手を押へ付け、

や、わりやア小藤、何でおれを切りやあがつたのだ。

小藤　假令兄でもこなさんを、生けては置かれぬ、情人の爲め。

九郎　何と。

小藤　さあ、言交した八右衞門さんの訴人をすると言はしやんすゆゑ、お前を殺さにやならぬのぢや。命はわたしに下さんせ。

九郎　むゝ、扨は男に迷やアがつて、わりやあ兄をば殺す氣だな。

小藤　情人の爲めには替へられぬ、大事を知つたがお前の不運。

九郎　さういふおのれが根性なら、もうこれまでだ、めそつこめ、手疵を負つても鵜郎九郎兵衞、うぬも生けちやあ置かねえぞ。

小藤　さういふお前を。（ト振拂つて又切つて掛るを、）

九郎　何を小癪な。

トこれより唄入りの鳴物になり、兩人よろしく立廻り、九郎兵衞手疵の痛む思入にて、苦しみながら有合ふ三絃を持つて打つてかゝり、立廻りのうち、九郎兵衞懷劍を取り切つて掛る、小藤三絃にて受け、兩人右の鳴物にてよろしく。トゞ小藤を引附け突かうとする危き立廻り、此の時後へ以前の

八右衞門出で、九郎兵衞を引附け懷劍を打落す。小藤起上り直に懷劍を取つて、九郎兵衞の腹へ突き込む。これにて九郎兵衞よろしく苦しむ、小藤懷劍をぬく、九郎兵衞ばつたり倒れる。小藤乘つかかり止めを刺す。これにて九郎兵衞落入る。小藤はつと思ひ入、八右衞門こなしあつて、

八右　ほゝお、小藤出來した、委細は奥にてつぶさに聞く、我が一大事を知つたる九郎兵衞、訴人させじと現在の兄を害せしそちが貞節、忘れは置かぬ忝ないぞよ。

小藤　そのお詞を聞く上は、最早この世に、(ト小藤懷劍を喉へ突立てる、八右衞門駈寄り介抱なし、)

八右　我れへ操を立てし上、兄を害せし言譯に自害なせしは、返す〴〵も天晴健氣なそちが心底、假の契りの我ゆゑに、一命捨てし誠に愛で、未來は必ず女夫なるぞ。

小藤　えゝ嬉しうござんす、悪い人でも兄は親、男の爲とはいひながら手に掛けたれば死ぬるは覺悟、末期の際の嬉しさは未來は女房とおつしやつた、其のお詞を樂みにわたしや冥土へ行きまする。

八右　おゝ、この世の縁は薄くとも、未來は替らぬ我が女房、三々九度の杯も柄杓のえにし長ゝれと彼の世を約す水杯

ト合方になり、八右衞門立上り、手水鉢の水を柄杓に汲み小藤に呑ませる。小藤嬉しき思ひ入にて、

小藤　これで迷はず往生します。(ト小藤八右衞門の手を取り、)八右衞門さん。

八右　おゝ、（ト手を取り交し愁ひの思入）最早近附く、知死期時。

小藤　もう眼が見えませぬわいな。（ト小藤うつとりなる、八右衛門耳へ口を寄せ）

八右　未來は必ず一蓮托生、成佛いたせ。

小藤　えゝ、嬉しうござんす。

ト小藤よろしく落入る。八右衛門は涙を拭ふ、此の時花道の揚幕にて音頭の太鼓の頭を打込む、これにて八右衛門氣を替へ、小藤の死骸を後へ片附け花道へ思入あつて、

八右　ありや總踊りの音頭の太鼓、踊りに紛れて此の家を立出で、大竹氏を送りたる、金井にま一度對面なし、何かの密事を牒し合はさん。

トこなしあつて花道へ行きかける。音頭誂への唄になり、花道より大勢揃ひの着附手拭を冠り、踊りながら出來り、八右衛門に行き合ひ、これにてぢり／＼と舞臺へ八右衛門戻る、この時上手より捕手の人數同じく踊りの對の衣裳にて此の中へ交り、八右衛門と入りかはり、よききつかけにて着附を脱捨て、黑の四天捕手のこしらへになる、これにて踊りの人數は上下へ逃げてはひる、これより右の鳴物へドン／＼を冠せ、捕手と立廻つて、

むゝ、扨は此の家に我々の素性を悟る者あつて、訴人なせしと覺えたり、斯かる大望企つものが

なにこれしきに恐れんや。

ト ばた／＼になり、下手より幕明きの荒波軍藏、襷鉢巻十手を持ち出で、

軍藏 やあ謀叛人の正雪に、一味荷擔の増田八右衛門、さあ、尋常に、

皆々 繩にかゝれ。

八右 謀叛に荷擔なんぞとは、此の身に取つて覺えはない。何で繩目に掛らうや。

軍藏 慥な證據ある上は、最早かなはぬ。

皆々 覺悟なせ。

八右 なにを、小癪な。

ト 誂への鳴物になり、後の長暖簾を切落し、向う打ち拔き風呂場、奥庭の遠見になり、軍藏八右衛門に打つてかゝる、兩人立廻りよろしくあつて軍藏切立てられ下手へ逃げてはひる。八右衛門追掛け行かうとする、捕手出で打つて掛り、これより仕拔の立廻り存分あつて、よき見得より鳴物替つて捕手を左右へ切り倒しきつと見得、ばた／＼になり花道より以前の谷五郎、腰に風呂敷包を結附け拔身にて黒四天の捕手二人を相手に立廻り出來り、花道にてちよつと立廻り舞臺を見て、

谷五 そこにござるは、増田氏か。

八右　おゝ金井氏。

捕手　何を。(ト八右衞門谷五郎へ掛る・雙方立廻り、谷五郎舞臺へ來り捕手を切り倒し、)

谷五　何者が訴人せしか、斯く八方を取り圍むは、大望露顯と覺えたり。

八右　如何にも訴人の者あつて、我々兩人召捕らんと、代官所より數多の捕手、これに附いても氣遣はしきは先刻別れし大竹氏、首尾よく渡しを越えられたか。

谷五　その初藏は情なや、一命捨てゝまツこの如く、

ト腰の風呂敷包を解き、中より初藏の切首を出し見せる、八右衞門びつくりなし、

八右　やゝゝ、すりや大竹には、落命せしとか。して〳〵それは、如何なる仔細で。

谷五　仔細は先刻高塚より初藏殿の後追つかけ、生瀨川へ赴く途中、爰かしこに人數の屯、心得がたく思ふ折、旅の飛脚が船頭と口論なして大騷ぎと、聞くに心も心ならず、馳け行き見れば相手は初藏、多人數を相手となし數ヶ所の手疵に腹へ突立て、死ぬる覺悟の所へ馳けつけ息ある內ゆゑ介抱なし、仔細を聞けば生瀨川の渡しを越えんとなせし時、船に船頭をらざるゆゑ、火急の使ひに心急かれ、水棹を取つて押出す折柄、それ船盜人遁すなと數多の船頭馳來り、打つて掛るに是非なくも相手を四五人殺害なし、數ヶ所の手疵に步行かなはず、殘念ながら切腹なすと息も絕え絕

え我への話し。（ト此の内捕手かゝり、谷五郎よろしく立廻り）

八右　して〳〵密書は、奪はれしか。

谷五　そこはぬからぬ初藏殿、船頭どもに奪はれなば密事の露顯と思ひしゆゑ、二通の狀は提灯の消え殘る灯に燒きすてゝ、證據は跡へ殘さぬといふを名殘りに果敢なき最期、せめて首級を寺院へ埋め跡懇ろに弔はんと、介錯なして持參せり。（ト首を見せる。）

八右　むゝ、流石は大竹初藏殿。天晴健氣な最期ながら、船頭風情を相手になし、切腹なせしは殘念ならん、無念の心中察し申す。（ト八右衞門首へ手を掛け愁ひの思ひ入）

谷五　見れば血汐の行潦、增田氏にも多くの捕手を。

八右　我が腕限り切り捨てしが斯く八方へ手が廻れば、一先づ此の場を落ち延びん。

谷五　いかほど詮議嚴しくとも、發する其の日は二十六日。

八右　三日の內に鎌倉へ、此の地の樣子は知れ難し。

谷五　これより直ぐにわれ〳〵二人は。

八右　大阪表へ立ち越えて、一味の者と評定なし、

谷五　事を發する用意なさん。

八右　然し此の地を立退くには、やはり湯治の客の體にて、道を違へて赴かん。

谷五　いかにも我は此の首級、とある寺院へ葬りて、多田の裏道赴くべし。

ト首を風呂敷へ包み腰へ付ける。

八右　又某は池田街道。(ト兩人身支度をなし)

谷五　立退く跡に憂ひなきやう。

八右　火の用心こそ肝要なれ。(ト兩人四邊を見廻し)

谷五　然らばこれより、

八右　別れ〳〵に。

ト兩人よろしく思入、誂への合方にて塵をはらひ悠々と入替り、八右衛門は花道、谷五郎は東の歩みへ掛る。この時知せなしに灯入りの月を引出す、兩人これを見て、

八右　やがて發する大望の、

谷五　折から晴るゝ夜半の月、

八右　はて心地よき、

兩人　幸先きぢやなあ。(ト兩人につこりと思入、此の時黒四天の捕手四人出で)

四人　曲者。

ト聲に掛ける、兩人うん〳〵と遠當にあてる。これにて捕手四人立ちすくみになり、兩人はこれに構はず、謠曲をうたふ。

八右　〽月は鞍馬の僧正ヶ谷にみち〳〵峰を動かし。

谷五　〽嵐こがらし瀧の音、天狗だふしは、

兩人　〽おびたゞし。（ト兩人よろしく謠曲をうたひ、こなしあつて、）むゝ、（ト笑ふ、これにて四人見事に轉る、これを木の頭。）はゝゝゝゝ。

ト是れをきざみ、本釣鐘靜なる三重にて、

ト幕外兩人見得、誂への鳴物にて兩人花道へはひる。知せに附き、跡シャギリ。

幕

六幕目大詰

丸橋寓居の場
伊豆守邸の場
駿府梅屋の場

〔役名――由井正雪、松平伊豆守、弓師藤四郎、千葉作左衛門、丸橋忠彌、高安繁次郎、僧快禪、駒飼五郎平、松平の臣杜戸源二、勝田彌三郎、松平の臣洲崎傳藏、最上久六、梅屋の下男喜介、久保井眼四郎。正雪姿藤枝、忠彌女房お節、同母おさが其他〕

（丸橋寓居の場）――本舞臺三間常足の二重、正面小形の襖、上手に障子屋體、いつもの所門口、これへ槍術指南と記したる表札を掛け、平舞臺に駒飼五郎平浪人者の打扮にて、刀を持ち立ち掛り居る、勝田彌三郎浪人者にてこれを留め、お節丸髷武家女房の打扮にて、五郎平を支へ居る、此の見得、早き合方調べにて幕明く、

五郎 勝田氏、お手前までが同じやうに、そこお放し下されい。

彌三 ぢやと申して內儀が存じた譯でもござらねば、先づ〱暫くお待ちなされい。

五郎 やあ、いつまで安閑と待つて居られるものだ。さ、お內儀火急の用事で罷り越した我々、一刻も早く忠彌殿にお逢はせ下され。（ト お節の側へ詰寄つて言ふ。）

お節　さ、何を申すも折悪しく最前の客来にて、つい好きな酒ゆゑに過しまして、他愛なく臥つて居りますれば、起しましても御用辨にはなりますまい程に、どうぞ醉ひの醒めますまで、失禮ながら暫くの内お待ちなされて下さりませ。

五郎　いやさお内儀、平生ならば醉つたでもようござるが、先達て駿河表よりお飛脚參り、いよ〳〵日限極りたれば、同志の者は寢食を打ち忘れ、其の日を待つて居るに引替へ、すわといはゞ采配取る忠彌殿が酒に醉ひ、前後不覺に寐るといふは餘りといへば言ひ甲斐ない、それとも御所存あつての儀か、御本心が承はりたければ、それゆゑ忠彌殿にお逢はせ下されと申すのだ。

彌三　その御疑念はさることながら、名にし負ふ正雪殿のお眼識にて、この鎌倉の多人數を懸引せらるゝ忠彌殿、御油斷なきは知れし事ゆゑ、兎も角もお目覺めを相待ち、篤とお談じ申すがよろしうござらう。

お節　どうかあなたのお執成しにて、左樣なされて下さりませ。

五郎　いゝや左樣なりませぬ、何故ならば忠彌殿には酒を呑んでは正體なく、既に先達ても知らるゝ通り、祕すべき大望口外せられし事あるに性懲りもなく酒に醉ひ、此の後如何なる一大事を引出さんも測られず、事成就なすそれ迄はきつと禁酒めさるやう、某參つて御異見加へん。さ、御案内

下され。（ト立ち掛るを彌三郎袂を押へ、）

彌三　さ、御尤もなる仰せなれども、それも醉ひの醒めし上にて。

お節　何を申すも正體なければ。

五郎　おゝ正體なければ某が、醉醒めの水より冷たき氷の刃にて、酒の醉を醒してくれん。

ト刀の目釘をしめして、ずつと立上り行かうとするを、お節彌三郎よろしく留め、

彌三　これはしたり、左樣あつては所謂同志討、事の破れとなるは必定、

五郎　さゝ、その破れとならざる内、某參つて息の根止めん。

お節　はて、假令醉つても本性違はず、心に油斷のない事は連添ふ女房のわたくしが、よく存じて居りまする。

五郎　いゝや緣者の證據、當てにはならぬ。

彌三　なれども、上部は醉うても本性亂さず、人を計る計策も昔より往々ござれば、篤と實否を糺せし上にて。

五郎　ぢやに依つて某が、まこと本性あるか無いか、奥へ參つて見屆け申さん。

トお節彌三郎の留めるを振放し、つか〳〵と行かうとする。此の時上手屋體の内にて、

忠彌　かしましい、靜まりめされい。
五郎　左いふは慥に、
兩人　忠彌殿。
お節　おゝ、お目が覺めましたか。
ト言ひながらお節障子を開ける、内より忠彌長襟の懸りし八丈の着附、挾み帶、少し醉つたる寐起の體にて出來る、
忠彌　御兩所のお出は、疾くより某存じをつた。
五郎　すりや我々推參いたせしを、御存じありながら、最前よりお二人さまが、お待ち兼ねでござんすわいな。
彌三　何ゆゑお逢ひ、
兩人　下さらぬぞ。（ト詰寄つていふ。忠彌始終生醉ひのこなしにて）
忠彌　さればお聞き下され。始めの程は駒飼氏が大聲を借金取りと思ひ違へ、こいつ逢つては大變と息を殺してよく〳〵聞けば、案に相違の各々方、それゆゑお待せ申せし拙者が失禮、まつぴら御免下されい。したがこれを思へば世の中に、借金取り程怖いものはござるまいか、百萬の大敵も物の

數とは存ぜざれど、かの川柳點にすら夕べの鬼と云はるゝ勇士、何が得たる弓張り矢立を携へ、こちから當てなしに鐵砲の言延べは、少しも通さぬたて催促、これを脫るゝ計略ばかりは孫呉の祕書にもござるまいてな、むゝ、はゝゝゝ。（ト始終醉つたる思入にて言ふ、五郎平むつとこなし、）

五郎　あいや、忠彌殿、我々は其許の身貧な話し聞きには參らぬ。お手前とて浪人なせど侍ではござらぬか、諺に申す武士は喰はねど高楊枝、如何程貧に迫ればとて隱すべきが道なるに、自慢らしう言はるゝは、はゝあ、まだ醉が醒めませぬな。大望抱へし身をもつて亂酒いたし、同志の者のそれで束ねが出來まするか。（トきつといふ。）

忠彌　又しても／＼大きな聲は四邊へ遠慮、まゝ野暮を言はずと一杯上れ、迎ひ酒にお相手をいたさう。こりや女房ども氣の附かぬ、一口附けて參らぬか。

五郎　いやお構ひ下さるな、身共酒は大嫌ひでござる。

忠彌　なんの、いつも呑みながら。

彌三　まゝ、何にいたせ差懸りし御內談相濟みて後、御酒は頂戴いたすでござらう。

忠彌　なるほど、左樣ならば其の御內談から、先へ致さうかな。

彌三　それは滿足、然らば早速申し上げまするは夫の一儀、最早日限間近きゆゑ、申し合はせに參りし

我々。

忠彌　はゝあ、其の儀でお越しなされたか。

五郎　されば、貴殿のお手筈承はりし上、同志の者へ漏れざるやう通達仕つらん。

彌三　何卒お指圖、

兩人　下されい。（ト忠彌の側へ詰寄り、少し小聲にて言ふ。忠彌思入あつて）

忠彌　いや、その儀ならば猶のこと、爰で一杯呑みながら御相談いたすのが、却つて人の心が附かぬ、さゝ、女房酒を持て來い〳〵。えゝ、持つて參れと申すに。

お節　そりや持つて參るは易けれど、今も今とてお二人さまが、お前の御酒の過ぎるのをきつうお案じなされてゐれば、どうぞもう上らずに早う大事のお話して、お二方が落着くやう、なされてあげたがようござんすわいな。

忠彌　さ、その酒も計略なれば。

お節　いゝえいなあ、そりや御計略でもござんせうが、又その上呑ましやんしたら前後忘却しなさんして、用の足りぬは知れてあれば、今日ばかりは御酒なしに、お二人さまと何かの相談、首尾よう行たその上での悦び酒を樂みに、萬事のことをとつくりと。なあ申しお二人さま、左樣ではござ

りませぬか。（ト碎けて思入、五郎小膝を打ち。）

五郎　いかさま、悦び酒とは、こりや吉左右、御內儀出來ましたわえ。

彌三　流石に丸橋氏の御內室ほどあつて、まことに感心仕つた。

忠彌　こりや女房が出來ましたな。

兩人　いや、お出來しなされたとも〳〵。

忠彌　然し、又前悦びと申す事もござれば。（ト言ひかける。）

お節　又しても其のやうな事いうて居るうち、人でも來ると案じられてならぬ程に、早うお話しをしなさんせ。その內表はわたくしが氣を附けてをりますれば、お心置きなうお二人さま、お談じなされませいな。

五郎　これは〳〵、何かと御心添へ。

兩人　千萬忝なう存ずる。

トこの內お節門口へ行き、戸を明けて表を窺ひ居る、忠彌せゝら笑ひ。

忠彌　いや女子と小人養ひ難しと、酒さへ呑めば某が精神亂るゝと思うて居るは女の淺慮、假令いか程醉へばとて大望抱へし身をもつて前後忘却仕らんや。諸事我が方寸にあるを知らず、いやはや

白癡たやつでござる。

五郎　その仰せ御尤もにはござれども、餘りなる其許の御行跡に、我々すら如何ぞとお案じ申す程なれば、女儀の事ゆゑ御内室がお心遣ひあるは道理、然し御本心承はつて、先づは安堵。

彌三　この上は時日も僅かの事なれば、我々共は玉川へ、今宵の内に罷り越し、

五郎　かねて正雪殿より仰せありし、夫の一藥を水中へ流し、

彌三　まつた、市中の酒店へ、火藥を仕込みし樽を配り、

五郎　短兵急に計らふ手筈、

彌三　此の上の駈引は其許次第、

五郎　萬事よろしう、

兩人　頼み存ずる。（ト詰寄つて言ふ、此の内忠彌睡たきこなしにて、）

忠彌　すりや、身共に指圖せいと言はるゝのぢやな。

兩人　いかにも左樣、

忠彌　その指圖と申したら、

兩人　如何でござるな、

忠彌　各々方には、早くお歸りなされい。

兩人　や。

忠彌　拙者睡たうてならぬ、まつぴら御免下され。

　　トその儘そこへ横になる、五郎平彌三郎顏見合せ呆れし思入、お節恷へかれ、

お節　あれまあ、うとましい。(ト寄るを五郎平留めて、)

五郎　あゝいや、斯かる性根の腐りしものには、必ず共に心配無用。

お節　でもまあ、これが。

五郎　はて、打捨て置きやれと申すに。(トきつといふ、お節はハツと泣伏す。)かやうなる愚者に聰明叡智の正雪殿が、この鎌倉を任されしは、諺に申す智者の一失。

彌三　然しこれには、何ぞ見どころあつてのことならん、今一應某が。(ト立ち上るを、)

五郎　えゝむだな話しだ、よしにめされ。

彌三　先づく拙者にお任せ下され。(ト忠彌の側へ行き、)いやなに、忠彌殿、お心附けられ我々へ、何卒お指圖下されい、これさ、丸橋氏々々。(ト忠彌の耳へ口を寄せて言ふ、お節も立寄り、)

お節　えゝも、正體なう何の事ぞいなあ、もし此方の人、眼を覺して下さんせ、これ、正氣になつて下

さんせいなあ。（泣聲になつて搖り起す、忠彌現の思入にて、）

忠彌　あゝ、好い心持だ、起してくれるなく。

お節　あれ、まだあんな。（ト當惑の思入、彌三郎ぢつとなり、）

彌三　はて、是非に及ばぬ。

五郎　それ見さつせい、元より性根のない丸橋、かゝる所にべんくと暇取るは無益なり、これより同志の者共へ、此の仔細を申し渡さん。いざ勝田氏、（ト立ち上るをお節あわてゝ留め、）

お節　あゝもし、どうぞ醉の醒めますまで、同志の方へおつしやることは。

五郎　この期に及んで聞く耳ござらぬ。

お節　そこをどうぞ。

五郎　存じ申さぬわえ。（ト振拂ふ機に刀の鐺お節の腹へ當りしこなしにて、たぢくとなる。）

彌三　こりや御内儀には、（ト寄るを五郎平突き廻し、）

五郎　えゝ、構はずとござらつせえ。（ト兩人下手へ足早にはひる。）

お節　あゝもし、それ言ふことは、どうぞ待つて下さんせ。（ト四邊を見廻し、）もう行つたのかいな、情ない駒飼どの、同志の者に聞えては夫の恥になるわいな。えゝこれ、後より追附き賴まんにも脾腹

の痛みに歩行さへ、自由ならぬは何事ぞ。（トうろ〳〵なし忠彌を見て、）わたしがこれほど氣を揉むに、主は何にも白川夜船、（ト忠彌の側へ行き、）これイなあ、忠彌どの、お前の恥辱になる事ゆゑ、私がこれ程苦勞をするになんぼお酒の上とはいへど、知らずに居るとはなさけない、まだお目が覺めぬのかいな。（ト搖り起せども忠彌寢入り居る。）えゝも、これほど言ふに夢現、こりやまあ何としたことぢやぞいな。

トはあつと泣伏す。合方きつばりとなり、奥よりおさが母親のこしらへにて出來り、お節の體を見て、

さが　これ嫁女、どこぞ氣合でも惡いのか。

お節　いゝえ。

さが　それでも、濟まぬ顏して居やるぢやないか。

お節　これはあの、おゝそれ、只今客來がござりまして此方の人と一口あがり、戻りしなによろめくはずみ脾腹へ肱が當りまして、餘りの痛さに氣が鬱いでなりませぬ。

さが　そりやまあ危ないことであつた、まだきつう痛むなら黄蘗の粉を酢で解いて、早う附けたがよいわいの。

お節　もうそれほど痛みもいたしませぬわいな。

さが　それに附けても酒を呑む者は厭ぢやなう。そして客といふは、何處のお方ぢや。

お節　さあ、そのお客は、おゝそれ〳〵、槍術の朋友で餘所の道場に試合があるとて、連れだつて行く約束に、迎ひに見えたのでござりますわいな。

さが　さうであつたか、わしも奥に居て客のある樣子ぢやと思うて居たが、大きな聲をする内にも又何やらひそ〳〵話し、耳の遠さにおぼろながら、玉川への一藥、

お節　え。（トぎつくり思入。）

さが　いやなに、玉川岸に、打身にならぬ良い藥があるとやら、早う買うて附きやといふことといなう。

お節　はい、序がござりますれば、取りにやりませうわいな。

さが　あゝ人に怪我をさせるも酒、悪い道に入るのも酒、こちの悴忠彌なども酒の上では此の母に度々苦勞さす内にも、今のやうな恐ろしい、いやなに、恐ろしい大酒ゆゑ、ふとした心の間違ひから死恥さらさうかと、案じる苦患が助かりたいと思ふに附け、早う彼の世へ行きたいわいなう。」

ト愁ひのこなし、お節思入あつて、

お節　母さまとなされたことが、その樣な取越し苦勞遊ばすと、お體の毒になりますれば必ずきな〳〵思召しまするな、あの忠彌どのぢやというて、假令御酒をあがればとて生醉は本性違はず、死恥

を曝すやうな無分別な事をなされませうか、たゞ御酒を吞めば此のやうに寢るのが癖、それに附けてもこちの人いつまでおよることやら。どれお風でも引かぬやう搔卷かけて上げませうか。

ト合方になり、お節上手屋體より小搔卷を持ち來り忠彌にかける、此の内花道より弓師藤四郎羽織パッチ尻端折り、少々更けたる打扮にて出來り、花道に留り、

藤四　どうぞ今日は酒に醉うて居ねばよいが、武士道の一通りは十人並に勝れた忠彌どのなれど、玉に疵は酒が好き、それゆゑ金がいるかは知らぬが、おれが方ばかりでなく諸方で金を借りた樣子、僅か三人か四人の暮しでいくら酒を吞んだといつて、さう暮しにかゝりさうもないものだが、何にしても困つた人と緣組をした。（ト言ひながら舞臺へ來り、）はい、御免下さい。

お節　おゝ、お前は父さん。

さが　なに、藤四郎どのがござつたのか。（ト此の内藤四郎内へはひり、）

藤四　これは御老母、いつもながらお替りもなくてようござる。

さが　こなたさまにも、お達者で。

藤四　いやも、達者ならよけれども、年の加減か一年增しに、持病が殖えて困りまする。

さが　そりやもう、お互ひさまでござりますわいな。

藤四 （寐て居る忠彌を見て）持病といへばこれ娘、寐てござるは忠彌どのぢやないか。
お節 あい。
藤四 何處ぞ惡いのか。
お節 いゝえ。
藤四 また呑み過ぎか。
お節 あいなあ。
藤四 そりや惡い所へ來た。
さが え。
藤四 いえなに、時候が惡いから、どうぞなされたかと思ひました。
さが どういたして、忰は御酒ばかり呑んで居るせゐか、苦勞がないと見えまして、達者過ぎる位でござります。
藤四 いや上る方は、よほどお德でござりますよ。
さが ほんにあなたは上りませぬな。
藤四 一向に下さりませぬ。

さが　呑むものはいけませぬ。これ嫁女、早う起したがよいわいなう。
お節　畏まりました。
さが　どれ、お茶なといれて進ぜませうか。
　　　トおさが奥へはひる、お節忠彌の側へ行き、
お節　もし、こちの人、ちよつと起きて下さんせく。（ト搖起す。忠彌目の覺めしこなし、）
忠彌　あゝ、いゝ心持に寐てゐるものを、起したは何ぞ用か。
お節　あい、わたしの父さんが見えたわいな。
忠彌　なに、舅どのが。（ト起き上り、藤四郎を見て、）これは藤四郎どの、失禮まつぴら御免下され。
藤四　何のく、折角寐てござつたに、お邪魔をして氣の毒な。
忠彌　どう仕ツて、お出がなくとももう起きます時分でござる。何にいたせ、今日はよくこそお出でなされました。
藤四　いやあんまりよくも參らぬて、何も今更改めて言ふにも及ばぬが、いつぞやこなたがわしが家へござつて、石堂家へ千五百石でお抱へになるに附き、身の廻り萬端の支度なすに二百兩ほど急に金子が入用ゆゑ、用立てくれと達ての頼み、聟舅の間柄に出世の事ゆゑどうがなと心に思へど、

近頃は弓生業も閑なれば、二百兩は扨置いて二十兩も蓄へなく、據ろなく他へ賴み此の藤四郎を目當にてこなたに貸した二百兩、段々延びたものだから先方からは矢の催促、もうさう〳〵は言ひ延べられぬが、いつたいまああの金は、どうして下さる積りだ。

忠彌　あの金子なら必ず御心配下さるな、近々のうちきつと御返濟申すでござらう。

藤四　これさ〳〵、さう安請合に言はつしやつても、其の金高は大枚二百兩、どこから扶持の來るといふ當もない、失禮ながら浪人風情のこなたの身で、手輕く出來よう筈がない。

お節　ほんに父さんの言はしやんす通り、差當つてこれといふ。

ト此内忠彌少しむつとしたこなしにて、

忠彌　えゝ父入らぬ口出しするか、僅か二百兩位は愚なこと、何萬兩でも我が手に入る、近い中に吉事がある。

藤四　途方もない、何萬兩、とんだ時候違ひの夷講ぢや、これ人の金を只取るにしても知れたものだ、何ほ言譯の仕樣がないというて、好い加減な事を言はつしやるな。(ト腹の立つ思入にて言ふ。)

忠彌　いや、よい加減でない、慥かにはひる事がござる。

藤四　むゝ、そりや又どうして。

忠彌　さあ、其の仔細と申すは。（ト此の内お節扨はといふ思入あつて、）
お節　あゝもし、めつたな事を。
ト目で押へろ、忠彌ぢつとなる。藤四郎お節の様子にちよつと目を附け思入あつて、
藤四　これ娘、どんな事か知らぬけれど善にせよ悪にせよ、親子の中になに遠慮、若し金儲けの事なれば、わしも半口乗せては下さらぬか。
忠彌　お望みなら乗せて進ぜませうが、必ず他言さつしやるな。
藤四　なに、他言するな。
お節　さればいなあ、現在良人の實親なれど、母さんにさへ漏らさぬ事ゆゑ。
藤四　それ程の大事なら神佛かけて他言しまい、職人ながらおれも弓師藤四郎、生業なれど弓持たぬ法もあれぢや。
忠彌　御誓言承はつて先づは安堵。
藤四　して、其の譯と言はつしやるは。
忠彌　外でもござらぬ、遠からず天下を握る此の忠彌。
藤四　えゝ、扨は謀叛を。

忠彌　あこれ。

ト押へお節に目配せをする、お節門口の外を窺ひぴつじやり締める、藤四郎思入あつて下に居る、

これより合方になり、忠彌思入あつて、

さ、其の仔細と申すは外ならず、さいつ頃湊川にて亡び給ひし楠正成公の末葉にて、其の名四海に隱れなき由井正雪と合體なし、あまねく浮浪の武士を語らひ、楠家の怨敵足利を討滅さん企てあつて、同志の者を二手に分け、正雪殿には先達て駿府表へ立ち越えられ、彼の地に於て懸引なし、某はこの鎌倉を預り、最早日限僅かにて、豫て伏せおく地雷火の發するを合圖に討つて出で、足利の天下を横領なす、手番ひ萬端調うてござる。（ト始終を聞き藤四郎びつくりなし、）

藤四　え、そんならあの足利天下を。

忠彌　あゝこれ。（ト押へるお節つか／＼と行つて門口を窺ふ、藤四郎顫へながら一寸四邊へ思入あつて氣を替へ、）

藤四　それはまあよい企て、成程委しう譯を聞いて見れば、こりや何萬兩でも手に入る筈。（ト思入、）

忠彌　首尾よう參る其の時は、右の金子を倍増しに返金いたすその間、先方へはよしなに言譯頼み申す。

藤四　そりや呑み込んだが、然しそれ程の企てするには定めし一味徒黨の、その人數も餘程あるでござらうの。

忠彌　同志の姓名、則ちこれに、
　　ト手早く懷より袱紗包の一卷を出す、藤四郎取つて繰りひろげ見てうなづき、

藤四　正雪殿とこなたが初筆、これ程大勢の其の中で、大將分になる程の立派な武士を夫に持つた娘が因果、いや、此女が果報、この親までが肩身が廣い、一大事でなくば人に話して自慢がし度いわい。

お節　あゝもし、めつさうな幾ら自慢がし度いからというて、外の事とは違ひまする、嘘にも其の樣なこと、必ずいうて下さんすなえ。

藤四　えゝ氣遣ひすな、こりやうつかりゝゝ嬉しい餘り、何の可愛い娘や聟どのゝ難儀になる事、他言しようぞ。何にせい、さういふ吉事があることなら、ちつとも早く先方へよいやうに言譯して置かう。

忠彌　何分よろしうお賴み申す。

藤四　承知でござるゝゝ。（ト立ち上る。）

お節　もう時分ぢやに、御飯でもあがつて行かしやんせいな。

藤四　どうして飯所か、胸がいつぱい。

兩人　え。

藤四　さあ、あまりの嬉しさに、おりやもうぞく〳〵とするやうな。どれ、此の勢ひに又催促の來ないうち、少しも早う斷つて來よう。（ト言ひながら門口を出る。）

忠彌　左樣なれば舅どの。

藤四　聟どの。娘。（トお節が不便だといふ思入あつて、氣を替へ、）吉左右を待ちまするぞ。（ト戸を閉め花道まで行き、思入あつて、）ても怖ろしい聟が企み、娘も疾くより荷擔の樣子、打捨て置かれぬ天下の大事、聟や娘の身の上ながら、數萬人には替へられぬ、當時明智の松平公へ、これより直に訴人をなさん。さうだ〳〵。（ト雪駄を脱ぎ手に持つて逸散に走り入る。お節忠彌に向ひ、）

お節　もし忠彌どの、最前お前が醉はしやんして、取りとめもない事言うたを駒飼どのが立腹して、同志の者に告げるというて戻つたが、お前それでよいのかいな。

忠彌　善いも惡いも我が胸にあること、案じずと折角の醉を醒した、一銚子つけてくりやれ。

お節　又お酒でござんすかいな。

忠彌　いくら呑んでも本性違はず、醉つたと見するも一つの計略。

お節　でも、最前のあの始末は、

忠彌　豫てよりの申し合せ。

お節　そりや何で。

忠彌　同志數多の其の中には、底意の知れぬ者あれば、某惰弱と聞くならば、元より變心あらんものは、見限らせて退散させねば、すはといふ時心置かれ、懸引自由ならざるゆゑ、頭立ちし者達へ申し附けたる我が計略。

お節　さうとは知らず先刻の心配、それ聞いて安堵しました。さ、さういふ事なら幸ひ爰に酒肴、たんと呑んだがよいわいな。（ト言ひながら上手屋體の内より廣蓋に載せし酒肴を持來る、忠彌茶碗を取上げ、）

忠彌　さ、冷でもよい、ついでくりやれ。

お節　あい／＼。（トつがうとする、此の時忠彌の持ちし茶碗二つに割れる。忠彌思入あつて、）

忠彌　や、いゝ、ひゞも入らざる此の茶碗、二つに割れしは。（ト氣になる思入、お節こなしあつて、）

お節　おゝ、物が殖えるといふ、縁起ぢやわいな。

忠彌　しかし、どうやら心にかゝる。

お節　え。（ト忠彌割れたる茶碗をあたりへ捨てるを、道具替りの知せ、）

忠彌　これへつぎやれ。

ト廣蓋の上の小丼を出す、お節酌をしながら氣に懸ける思入よろしく、時の鐘合方にて此の道具

廻る。

（伊豆守邸の場）＝本舞臺三間の間、高足の二重、本庇本緣附、正面銀襖、上の方一間折廻し塗骨障子屋體、此の上網代塀、石燈籠、四ツ目垣、下の方屋根附の門出入り、續いて網代塀松の立木、總て伊豆守邸奥庭座敷の體。二重眞中に褥、上手に黑塗の脇息、下手同じく煙草盆、上下に杜戸源二洲崎傳藏袴一本ざしにて控へ居る、合方しらべにて道具留る。

傳藏　これ杜戸殿、御前樣には俄かに是れへ、何故お出で遊ばしますな。

源二　扨はお手前には、未だ御存じござらぬか。

傳藏　何事なるか、某は一向に存じませぬ。

源二　只今弓師藤四郎あわたゞしく屋敷へ參り、御前樣へ直き〳〵に申し上度き事ありと役人中へ火急の願ひ、一大事とあるゆゑに直き〳〵これにて御前樣が、仔細をお問ひ遊ばすのだ。

傳藏　それは氣遣はしい事でござるが、その一大事を告げに參りし弓師藤四郎が妻と申すは、御前樣にお乳を上げし乳母と申すことでござるな。

源二　如何にも奥樣のお氣に入りにて、お出入りのことゆゑ藤四郎が妻となりしが、當御前が御誕生の折女子を產みて乳が良きゆゑ、大奥樣のお賴みにて再び御殿へ乳母に上り、七ケ年が間奉公なし、

首尾よくお暇にまはりて、又々藤四郎が妻となり一昨年長の病氣で、終に死去いたしてござる。

傳藏　その出生の女子といふは、さる浪人の方へ嫁せし、いゝせつと申す娘でござるな。

源二　恐れ多い事ながら、せつと申す娘は御前樣とは乳兄弟、それゆゑ御扶持を下されんと御前樣より御意あれど、町人風情に恐れ入ると頂戴いたさぬ昔氣質、その正直な藤四郎が一大事を告ぐるとあるゆゑ、只今是れへ呼出し、お直にお問ひ遊ばすのだ。

傳藏　油斷ならざる此の時節、一大事とあるからは、容易ならぬ儀でござらう。

源二　最早これへ御前樣の、いらせられるに間もあるまい。

傳藏　然らばこれへいらせられるを、お待ち受けいたすでござらう。

ト時計の音になり、奥より松平伊豆守羽織袴一本ざし殿の打扮にて出來る、後より袴一本ざしの侍二人手箱と伊豆守の刀を袱紗にて持ち、附添ひ出る、源二傳藏はハッと平伏する。伊豆守褥の上に住ふ。

源二　御前樣には御下城あつて、お奥へ入らせられしに、藤四郎が訴へにより、

傳藏　又々これへいらせられ、終日の御休息遊ばす間もなき御役柄、

源二　御苦勞千萬に、

兩人 存じまする。

伊豆 此の程天文の博士より近きに凶變ありとの訴へ心ならず思ふ折柄、弓師藤四郎が俄かの訴へ、身も老職を勤め居れば打捨て置かれず、直々に事の仔細を聞かねばならぬ、片時も早く藤四郎を庭前へ呼び出せ。

源二
傳藏 はツ、畏まつてござります。(ト下手へ向ひ)

源二 それに控へし藤四郎。

傳藏 御前のお召し。

兩人 急いでこれへ。(ト下手にて)

藤四 はあゝ。

ト合方になり、下手の門より藤四郎以前の裝にておづ〳〵と出來り下手へ平伏なす。伊豆守見て、

伊豆 おゝ弓師藤四郎か、久々逢はぬが、無事で好いな。

藤四 はツ、有難き御懇の御意、年取りまして一年増しに、達者になりましてござりまする。

伊豆 それは何より重疊ちや、何か訴への儀があつて參つたと申す事ぢやが、何事なるかこれへ參れ。

藤四 いえ、餘り御前間近くは、恐れ多うござります。

伊豆　外ならぬ藤四郎、苦しうない近う。
源二　御意なれば、
傳藏　お縁間近く、
藤四　はあゝ。（ト藤四郎舞臺眞中より少し下へ住ふ。伊豆守思入あつて、）
伊豆　して、訴人の趣きは、
藤四　一大事にござりますれば、お人拂ひを願ひまする。
伊豆　むゝ、他聞を憚るとあれば、そち達は次へ立て。
源二　ではござりまするが、
傳藏　御前樣のみ。
伊豆　苦しうない。行け〳〵。
皆々　はあゝ。（ト源二傳藏侍皆々附いて奥へはひる。）
伊豆　近習の者は遠ざけしが、して、一大事の訴へとは。
藤四　はツ、恐れながら御當家、足利天下をねらひまする謀叛人がござりまする。
伊豆　むゝ、それは容易ならざる儀。して〳〵謀叛の棟梁は。

藤四　石堂家を始めとして諸家樣へ立ち入りまする由井正雪と申す軍學者、それに荷擔の諸浪人數千人ござりまする內、丸橋忠彌と申す者當鎌倉の大將にて、則ち二十六日に事を發する慥かな事を測らず先刻承はり、此の鎌倉の騷動ゆゑ取るものも取りあへず、駈附けまして此の儀をば、竊に申し上げまする。（ト伊豆守これを聞き思入あつて、）

伊豆　よくも早速訴へ出でたり、其の正雪と申す者は軍學兵法諸流に達し、此の程駿河の富士ヶ根へ旅行せしと聞き及ぶ、察する所國々へ一味の者を手分けなし屯なすと覺えたり。（ト伊豆守扨こそといふ思入にて、）して、其の忠彌と申すものは年の頃三十三四、色白く太り肉、鼻筋通り眼中鋭く大酒をいたす者ではなきや。

藤四　如何にも、御前樣の御意の通り、年齡恰好その如く、しかも大酒をいたしまする。

伊豆　それにて思ひ當りしは、先達て下城の砌、外堀にて出合しものたゞ者ならずと思ひしゆゑ、其の名を問へば取りあへず、忠兵衞と申せしが、若しや忠彌が前名を、忠兵衞とは申さぬか。

藤四　へい、慥か幼い其の折は、忠二郎と申しましたさうにござりまする。

伊豆　扨こそ出合し其の折に酒興の體にて外堀へ、石を打込み測量なすは曲者と思ひしが、由井正雪へ荷擔なせし謀叛の輩でありしよな。如何にして其の方は、此の密事を聞き出せしぞ。

藤四　此の密事を聞き出しましたは、其の忠彌に先達てさる方より二百兩金子を借りて遣はしましたが、返さぬゆゑに今日も催促に參つたところ、我が大望が成就なせば十倍にして返さうから、それ迄待つてくれとの頼み、其の大望は如何なる事と聞いてびつくり謀叛の企て、これは天下の大事と存じ定まる日までも聞き糺し、承知なしたる體に見せその場を歸り途中より、御前樣へお訴へに上りましてござりまする。

伊豆　して、其の忠彌に如何なる緣で、二百金貸し遣はせしぞ。

藤四　へい、何をお隱し申しませう、其の丸橋忠彌事は、娘が聟にござりまする。

伊豆　（びつくりなし、）何と言やる、そちが娘の聟ぢやと申すか。

藤四　へい、弓を頼みに參つたが緣となつて、忠彌方へ娘を妻に遣りましたも、浪人ながら武藝は元より、器量骨柄勝れしゆゑ、娘よりも私が忠彌に惚れて遣はしました。

伊豆　さほどに思ふ忠彌が謀叛よくぞ訴へ出でたるぞ、早速捕手を遣はし、事ならざる其の内に、一味の者ども召捕らん。たゞ不便なはそちが娘忠彌が妻とあるからは、助け置かれず搦め捕り、共々仕置き致さねばならぬ、是非なき事と覺悟いたせ。

藤四　その儀は元より覺悟と申すは、親共は元御當家に御奉公いたせしもの、又わたくしとても數年來

弓師を業に世を送りし御厚恩を存じますれば、娘と共に私のよしや命を召さるゝとも天下のお爲と存じますれば、命に代へて此の企てお訴へ申し上げまする。

トよろしく思入にて言ふ。伊豆守感心なせしこなしにて、

伊豆　娘は元よりその身の一命捨てても天下の爲を思ひ、聟の謀叛を訴へ出でしは、町人ながら流石に弓師、武士も及ばぬ健氣な心底、伊豆感心いたせしぞ。

藤四　恐入つたる其のお詞、斯くお訴へ申しまするも天下のお爲め二つには、妻が御恩を蒙りし御前樣への御奉公、御役柄ゆゑ御不念にならざるやうに申し上げます。最早二十六日に餘日なければ、片時も早くお召捕りの、御用意が肝要かと存じまする。

伊豆　おゝ、今宵の内に捕手の人數を忠彌方へ遣はさんが、して住居は何處なるぞ。

藤四　へい、笹目ケ谷に居りまするが、お召捕りの其の折は、私めが先へ立ち御案内いたしまするが、爰に一つのお願ひは餘命ござらぬ忠彌が母、何卒お上のお慈悲にておいたはり下さりますやう、偏にお願ひ申し上げます。

伊豆　おゝ、其の儀は伊豆承知いたした、必ず共に氣遣ひいたすな。

藤四　有難う存じまする。

伊豆（思入あつて、）何にいたせ其處は庭先、藤四郎にはこれへ參れ。（ト緣の上へ來いといふ思入。）

藤四　町人の身をもつてお緣先へ上りまするは、恐れ多うござります。

伊豆　そちが親は元家來、其の遠慮には及ばぬ。

藤四　ではござりまするが。

伊豆　たつてと申せば、手を取らうか。

藤四　はゝ、恐れ入りましてござりまする。

ト藤四郎おづ／＼と二重へ上り、下手へ住ひ辭儀をなす、伊豆守思入あつて、

伊豆　さて藤四郎、その方へ松平伊豆守一禮を述べねばならぬ。

藤四　え、そりや何故でござりまする。（ト誂へ笙の入りし合方になり。）

伊豆　今其の方の訴へなくば、由井正雪に荷擔の者共二十六日に事を發し殿中の騷動大方ならず、取り分け鎌倉谷七鄕の町中の者共狼狽なし、流矢放火の其の爲めに命を捨つる者あらんに、測らず祕する企て知れ、今明日の其の內に一味の者共召捕らば、足利殿を始めとして下萬民の者までも陣鐘太鼓の音を聞かず、天下はます／＼泰平なり、この大難を脫れしも藤四郎が訴ゆゑ、まさにこれ弓矢の守護神、正八幡の御加護と、肝に銘じて有難く、そちに一禮申すぞよ。

ト伊豆守手を突き禮を言ふ、藤四郎平伏なし、

藤四　これは〳〵勿體ない、數なりませぬ町人に左樣な御意がござりましては、却つて罰が當りまする、お手をお上げ下さりませ。（ト伊豆守氣を替へ思入あつて、）

伊豆　これといふも三世の奇緣、そちが父は言ふに及ばず、又妻しげも其の以前予が母に仕へしもの、緣あつてそちへ嫁し女子をまうけし其の砌、丁度予が出生なし、母の心にかなひしゆゑ乳母に招きて七ケ年、再び當家に奉公せしそちが妻も死去なして今は黃泉の客となりたり、忘れ遺兒の娘せつにも、久しう逢はぬが無事なるか。

藤四　母と違つて丈夫な生れ、器量は十人並なれど、女子の業は何一つ出來ぬと申す事もなく、第一親へ孝心厚く夫へ貞節つくしまするは、十人並に勝りし娘、身貧に暮すばつかりに浮浪人の妻となり、可惜命を捨てさせまする。（ト藤四郎愁ひの思入にて淚を拭ふ。伊豆守もぢつと思入あつて、）

伊豆　十人並に勝れたる孝貞厚き心より、善惡共に夫に隨ひ斯かる惡事に與しならん、餘の儀ならに伊豆が上へ願うて助命させんに、天下を狙ふ謀叛人に一味の上は助け置かれぬ、忠彌と共に重き罪科に行はねば相成らぬ。それと知りつゝ現在の親が子の訴人をなし命捨てさす藤四郎、嘸や悲しき事ならんと心の內を推量なすも、七ケ年が其の間世話になりたる乳母が娘、下世話に申す乳兒

弟、他人のやうには思はぬぞ。

藤四　はゝ、乳兄弟とのお詞は我々風情に勿體なし、仰せの如く何一つ親の心に背かぬ娘、非業の最期をいたさせますは不便にはござりますれど、數萬人の難儀に一人の娘は厭ひませぬ、邪險な親と恨むかは存じませぬが天下のお爲め、さのみ悲しくもござりませぬが、今御老職の出頭たる松平樣が娘をば乳兄弟とのお詞は、有難過ぎて私は嬉し淚がこぼれまする。

ト藤四郎娘の事を餘所になして泣く思入、

伊豆　おゝ我とても同じこと、此の企てが知れずして不意に騷動起るときは、老職勤むる予が越度、そちが訴へくれしゆゑ事なく治まる鎌倉山、これ皆一人の娘を捨てし藤四郎が蔭ゆゑと思へば、斯くいふ伊豆も嬉し淚がこぼれるわえ。（ト伊豆守も淚を拭ひ愁ひの思入）

藤四　すりや御前樣にも、

伊豆　貴賤上下の隔てはあるとも、

藤四　世の人情には隔てなく、

伊豆　人悲しめば、

藤四　ともに悲しむ、

伊豆　藤四郎、
藤四　御前樣、
伊豆　思へば不便な、
兩人　身の上ぢやなあ。（ト兩人よろしく愁ひの思入、又暮六ツの時計になり）
伊豆　誰そある。灯しもて。（ト奥にて）
源二
傳藏　はあゝ。（ト奥より源二、傳藏菊燈臺を持つて出で左右へ置く）
伊豆　こりや、兩人共これへ。
兩人　はツ。（ト伊豆守の側へ寄る、伊豆守源二に囁く、源二又傳藏に囁く。）
源二　すりや忠彌と申す浪人を、
傳藏　今宵の内に。
伊豆　おゝ、柔術勝れし者を選み、事穩便に召捕り參れ。
兩人　委細畏まつてござりまする。
藤四　御用意よくばわたくしが、御案内いたしませう。
伊豆　片時も早く用意いたせ。

兩人　はあゝ。（ト源二傳藏奥へはひる。）

伊豆　藤四郎も老後に及び、聟と娘を失ひて嚥力なく思ふであらう、此の訴へは大功ゆゑ、元の武士に取立て得させん。

藤四　有難うはござりますれど、聟や娘を先立て、浮世の中もうるさきゆゑ、今より頭を剃りこぼち出家となりて亡き人の菩提を弔ふ心ゆゑ、此の儀は御免を蒙りまする。

伊豆　なにさま我が子を先立てなば、再び仕官も望みにあるまじ、何れへなりとも庵を結び、出家となりて世を送りやれ、扶持に代へて佛供米、生涯そちに送り得させん。

藤四　はゝ返す〴〵も有難き御前樣の其のお詞、もどくは却つて失禮ゆゑ頂戴致すでござりまする。

トばた〳〵になり、花道より源二傳藏袴股立大小十手をさし、後に黒四天襷鉢巻の捕手大勢出來り、花道に居並び、

源二　はッ、一番手より二番手まで、捕手の人數用意萬端、

傳藏　整ひまして、

皆々　ござりまする。

藤四　御用意よくばわたくしが、御案内いたしませう。（ト花道へ行くを、）

伊豆　こりや〳〵藤四郎、
藤四　はツ。(ト花道にて下に居る。)
伊豆　由井正雪が謀叛に與なす忠彌は天下の大罪人、案内なして召捕らば、妻も同罪、取逃すな。
藤四　はゝ。(ト伊豆守思入あつて、)
伊豆　此の伊豆が因みあれば取逃せしとて、いやさ、乳兄弟とて容赦はならぬ、取逃さぬやう心得よ。
藤四　はツ。(ト伊豆守逃せといふ思入にて、)
伊豆　捕手の者も心得よ。
源二 傳藏　はあゝ。(ト辭儀をなす。)
伊豆　寛仁大度の足利天下、心得たらば疾く〳〵參れ。
藤四　左樣なれば御前樣。
伊豆　必ず共に、(ト扇で逃せといふ思入あつて胸を叩くを道具替りの知らせ、)取り逃がすな。
　トよろしく思入時の太鼓になり、源二傳藏捕手みな〳〵花道へはひる、藤四郎これに附き悄々と花道へはひる。伊豆守後を見送り、ゆつくりと此の道具廻る。

（丸橋寓居の場）━━本舞臺元の道具へ戻る。

トおさが懷劍にて自殺し居るを忠彌お節介抱なし。

忠彌　こりや母上には、狂氣ばしなされしか。

お節　何ゆゑの御自害で、

兩人　ござりまする。（ト合方になり、おさが苦痛の思入にて、）

さが　いゝや狂氣せぬゆゑ此の自害、今までわしは知らざりしが最前見えた侍の詞の端々、よもやと思ふ其の内に藤四郎どのへの話を聞き、始めて知つた謀叛の企て、威勢盛んな足利殿へ浪人風情が徒黨して仇せんとは及ばぬこと、それを知りつゝ生き存らへこの母まで諸共に憂き恥を曝さんより、命を捨て冥土へ行き此の世の苦患が助かりたさ、刃に伏せば佛の導く彌陀の利劍と有難く、わしは往生しますわいなう。

お節　すりや、それゆゑの御自殺か、定めてあなたのお心では夫の企て知つて居ながら、なぜ諫めぬとわたくしをお憎しみもござりませうが、これまで度々申せども聞き入れなければ仕方なう、打捨置いたばつかりに、非業の御最期させましたは、連れ添ふ女房のわたしの科堪忍して下さりませ。もしこちの人、お詫び申して下さんせいな。（トハアと泣き伏す。）

さが　何のこなたを恨まうぞ、これもみんな前世から定まりし約束と、わしやあきらめて居りますわいなう。

忠彌　そのお覺悟を聞くに附け、直ぐに追腹仕り不孝のお詫いたさねば濟まざる譯とは存じて居れど、義によつて與せし企て、善悪ともに何日までも存ふべき命ならねば、

お節　やがて冥土でこのお詫。

忠彌　いたしますればわれ〳〵が、

お節　不孝の段は幾重にも、

忠彌　御免なされて、

兩人　下さりませ。

トおさがに縋つて言ふ、此の時花道の揚幕にて、ドン〳〵を打込む、忠彌お節聞き耳を立て、向うへ思入あつて、

お節　あの太鼓は。

忠彌　町を廻る時にあらず。（ト此時下座にてもドン〳〵を打つ、忠彌きつと思入あつて、）正しく人數を集むる太鼓。

お節　もしや露顯を。

忠彌　はて、心ならぬ。（ト思入）

さが　それを見ぬうち、早うあの世へ。（ト喉へ突立てし刄を拔き苦痛の思入）

忠彌　最早これが、

お節　親子一世の、

兩人　お別れなるか。

ト回向の思入、おさががつくり落入る、お節はハアと泣伏す。忠彌ぢつとなる。此の内後へ黑四天の捕手兩人窺ひ寄り、

捕手兩人　捕つた、

ト忠彌に打つて掛る、ちよつと立廻りのうち花道より以前の藤四郎先に、黑四天の捕手大勢附き出で來り、直ぐに舞臺へ來り門口の外に窺ひ居る。此の内お節はおさがの死骸を片附け、上手屋體より忠彌の大小を持ち來り、大の方を忠彌へ渡し自分は小の方を差し身繕ひする、忠彌捕手を踏まへ刀を差しながら思入あつて、

忠彌　こりや何者が訴人なせしか。（ト門口の外にて）

藤四　おゝ、舅の藤四郎ぢや。
忠彌　や、何と。（ト思入、藤四郎門口を明ける、忠彌お節びつくりなし、）ほんに、こなたは。
お節　父さん、お前は鬼かいなあ。
藤四　さあ假令鬼と言はれうとも諸人の難儀になる事ゆゑ、不便と思へど此の親が訴人をしたれば忠彌殿、卑怯未練に逃げ隱れ、名を穢さうより繩にかゝり、お上のお仕置受けて下さい。
忠彌　えゝ、親と思ひ一大事を口外せしは過りなれど、訴人なすとは非道な舅。
お節　こちの人堪忍して下さんせ、その申し譯はさうぢや。
ト脇差を拔き自殺しようとするを、藤四郎駈け寄つて留め、
藤四　いゝや天下の囚人、自殺はならぬぞ。（ト刃を取る、忠彌見てきつとなり、）
忠彌　飽くまで辛き、（ト藤四郎へ飛びかゝらうとするを、後より捕手かゝる忠彌振拂ふ機に懷中より連判の一卷を落す、）南無三、徒黨の。（トお節連判を手早く取りあげ、）
お節　連判狀はわたしがしつかり、
藤四　それぞ後日の。
お節　何を。

ト振拂ふ、捕手また忠彌にかゝる、ちよつと立廻り藤四郎お節は連判を奪ひ合ふ。この内始終門口の捕手、十手を構へ窺ひ居て、この時、

捕手　そりや。

トばら／＼と内へはひり忠彌に打つて掛り、双方入亂れて立廻りのうち、お節は連判を持ち奥へ逃げて行く、藤四郎は後を追つてはひる。これより忠彌捕手と立廻りの内、お節に心引かるゝ思入にて、過つて刀を打落され、たぢろぐ所を、又打つて掛るをきつと留める。これにて知せなしに此の道具廻る。

(裏手の場)＝＝本舞臺三間正面玉椿の生垣、上手丸木柱の簀戸、納戸の入口、下手井戸眞中にはれ釣瓶の丸太を横向きに立て、此の前に小高き掛樋の箱、側に魚盤臺洗ふべからず、洗濯物無用などと記せし井戸端の掟書よろしく、總て南(本)鄕丸山邊武家勝手口の模樣、始終ドン／＼にて此の道具留る。と直にばた／＼になり、上手の簀戸を蹴放し捕手大勢逃げて出る。後より忠彌大童になり鴨居を持ち、追つかけ出で來り、これより又捕りもの、立廻りの内、捕手目潰しを打ち附け、忠彌の面體へ當りし思入、これより竹笛入になり、忠彌眼眩みめつた打ちの立廻り、捕手かなはず下手へ逃げてはひる、後に忠彌息の切れし思入にて、井戸端へ探り寄り水を汲み釣瓶より呑んでほつと思入、ばた／＼になり上手よりお節逃げて出るを、藤四郎追つかけ出でお節を押へ、手早く繩を掛ける、お節忠彌を見て、

お節　こちの人、口惜しい〳〵わいな。（ト泣き伏す。）

忠彌　こりや現在の、

藤四　さ、可愛い娘に繩かけるも、天下のお爲めを思ふゆゑ。（トほろりとこなし、）

忠彌　あまりと言へば、（ト寄るを捕手後より窺ひ寄つて、捕つたと掛るを其の儘、忠彌思ひ出せし體にて、）お、すりや連判までを。

お節　いえ、あれ取られてはと思ふゆゑ。

藤四　後日の證據は火鉢の中へ。

忠彌　火中なしたか。

お節　はい。

忠彌　それ聞いて一つの安堵、これより一方切拔けて同志を集め花々しく、かなはぬ迄も一働き、女房許してくれよ。

トきつとなつて行かうとする、爰へ以前の捕手大勢熊手竹槍などを持ちばら〳〵と出て忠彌にかゝる。これに追はれて忠彌是非なく掛樋の上へひらりと飛び乘る、直に後より熊手にて忠彌の髻をきつと捉へる、これにて忠彌うしろのはれ釣瓶の丸太へ兩手を廣げ、眞向きになるを、捕手左右より竹槍に

て十文字に押へて磔の見得、

捕手大勢　捕つた。

お節　あれ、忌はしい。

ト寄らうとするを、藤四郎繩を控へるを、道具替りの知せ、

藤四　ありさまぢやなあ。

ト本釣鐘、ドン／＼にて此の見得よろしく道具廻る。

（駿府梅屋の場）――本舞臺三間常足の二重、正面上手一間の床の間眞中茶立口、下の方九尺腰張の鼠壁、左右障子建切り、大和葺の軒口切椽蹴込み、晒竹の押椽せし板羽目沓ぬぎ、前側一面に伊豫簾をおろし、上手後へ下げて杉皮竹の押椽雨おさへの付きし低き塀、此の前四ツ目垣山吹の盛り。この傍に蹲ひの手水鉢、よき所に石の井筒春日燈籠、下手一間の待合、所々に梅の立木。爰に久保井眼四郎浪人者のこしらへにて、庭下駄をはき手桶柄杓を持ち水を打つて居る、最上久六やはり浪人者にて指圖して居る、下男草箒を持ち掃除して居る、此の模樣宿場騷ぎのやうな合方にて道具留る。

下男　これは有難うござります、あなた方のお手傳で掃除にはかゞ行きました。

久六　どうして此の廣い庭を、一人で掃除するのはなか〳〵骨だ。

眼四　此の又梅も咲いた時は見事だが、散るとまことに見苦しいから掃かずには置かれず、奉公人殺しといふ花だ。

下男　それに私共は、此の駿府中の旅籠屋でも一番家は廣し、梅は多し、此の節は朝起きて掃除をしまふと直ぐに日が暮れまする。

久六　ほんに梅の多い家だ、それで家名が梅屋かな。

下男　いえ、さういふ譯でもござりますまい。（下眼四郎はやはり水を打つて居る。）

久六　これさ〳〵久保非氏、一所へばかり水を打つてはぬかつていけぬと申すに、ちと此方の方へ撒かつせえ。

眼四　お手前は何もせずに、人を叱つてばかりござるが、なんぼ顔が古いからと申して、新參者をさう籠めさつしやるな。

久六　籠めるではないが、貴殿がいけづるいからだ。

眼四　舞鶴の居候でも、大きにお世話でござる。

久六　何を申すか、ちつとも譯が分らぬ。

眼四　某よりはお手前こそ、平生おつしやることは少しも分らず、年功程にもないと皆人が申しますわ。
久六　こりや身共のことを惡く申したな。
眼四　おゝ申した、それが惡くば早く隱居へ言附けさつせえ、さうでもせずば意趣の返しやうがござるまい。
久六　あるかないか身共の手の内、見せてくれん。
眼四　小癪なことを。（ト双方柄へ手を掛ける、下男びつくりなし兩人を留め、）
下男　まあ〳〵お待ちなさりませ〳〵、梅の咲いてゐる下で、御浪人のお二人がどうか喧嘩を遊ばすと、此の前この在方へ東京から參つた調作に畠藏といふぺい〳〵役者のした鞘當を見るやうで、面白くも何ともないから、お止しなされませ〳〵。
久六　いゝや、そち達の存ぜぬこと、
眼四　怪我せぬうちに、
兩人　退いた〳〵。
下男　いゝえ退かれぬ、退きやんせぬ。えゝどうでも好いから、まあ〳〵御料簡なされませ〳〵。
兩人　料簡ならぬ〳〵。

ト爭ふ、下男捨ぜりふにて留める、此の時下手より高安繁次郎着流し一本ざしにて庭下駄をはき出で來り、是れを見て兩人を支へながら、

繁次　これはしたり御兩所、如何なされたものでござる、先づ〳〵お待ちなされ〳〵。

ト是れにて兩人離れ、繁次郎を見て、

眼四　どなたかと存じたら繁次郎殿。

兩人　面目次第もござりませぬ。

繁次　いつたい、これはどういたされたのぢや。

兩人　いやもう、ほんの時のへうりにて、詰らぬことを申し募り、

眼四　その許のお扱ひに預り、

兩人　千萬忝けなう存ずる。

繁次　そのお禮には及び申さねど、先生にも種々御心配のある御樣子なれば、喧嘩は勿論騷がしき儀は、お愼しみなさるがようござる。

兩人　恐れ入りましてござります。

下男　さうでござりませんでも、旅籠屋と申すものは諸國の人の寄合ふ所でござりますから、隨分騷々

しいものでございます。

繁次　いや騒々しいで思ひ出せしが、只今し方表の方が騒がしきゆゑ、何事なるかと出て見たれば早打が通りしが、ありや何處へ參りしやら。

下男　あれは此の駿府の御城内へ參つたのでございますが、何か鎌倉(江戸)に變があつたと見えます。

久六 眼四　なに、鎌倉に變が、(ト顏見合せて思入。)

繁次　それも治定いたしたと申す儀ではござるまい。

下男　しつかりとは知れませぬが、何でも御城内から弓鐵砲を持て、何處へ行くか大そうに出掛けます。

久六 眼四　え。

下男　おゝ鐵砲といへば風呂を焚きッ放しにして置いたが、もう沸きましたらう。あなたおはひりなされませぬか。

繁次　一風呂はひらうかな、各々方には如何でござる。

久六 眼七　お相伴仕らう。

繁次　然らば御一緒に、

下男　どれ、お背中でも流しませうか。

ト繁次郎先に三人下手へはひる。跡靜かなる誂への合方薄く風の音になり、日覆より梅ちら〳〵と散る、よき程に前側の伊豫簾をまき上げる、内に正雪好みのこしらへにて柄杓を搆へ爐の側に佇ひ、脇に四方棚の飾り附け、下手に姿藤枝、作左衞門好みの打扮にて佇ひ、正雪散る花に目を附け思入あつて、

正雪　最早花も名殘りの茶の湯、いざ立てゝ參らせん。

お藤
作左　頂戴いたすでござりませう。

トやはり合方ドロ〳〵のやうな薄き風の音になり、正雪靜かに釜の蓋をとり蓋置きに載せ、湯を汲まうとして柄杓を控へ、不審の思入にて、

正雪　はて、不審の事もあるものかな。(ト思案の思入、作左衞門も正雪の體に合點の行かぬこなしにて、)

作左　お立前、如何ぞいたされしか。

正雪　されば、沸りし釜の蓋を取りしに、常とは變り湯氣の上らず、殊に又今朝の雲だち惡しきは正しく鎌倉表にて大望露顯と覺えたり、はゝあ天なるかな命なるかな。

ト歎息する、作左衞門氣にかゝる思入にて、

作左　釜に湯氣の立たざるとて、知れやう筈はと疑へど、これまで貴殿が運氣の考へ相違いたさぬ上か

らは、思慮淺き忠彌どのゝ、酒興の上にて口外いたされしやも測られず。

藤枝　女子だてらに私が差出がましうはござりますれど、只今のお詞に思ひ比べて見ますれば、此の四五日の夢見の惡さ、心に懸りをりましたが、それももしや左樣なる知せではござりませぬか。

作左　何ともつて心ならねば、同志のうち心利きたるものを選び、街道登りの旅人共に樣子を窺はせ申さうか。

正雪　いゝや、豫て早道の快禪坊、吉凶共に知らする約束、事あらば取りあへず今に注進あるでござらう。

ト此の時、ばつたりと音して上手井筒の内より、快禪好みのこしらへにてぬつと出で、

快禪　御兩所、それにお出でありしか。

正雪　おゝ快禪坊か、して注進は凶事か吉事か。

兩人　さゝ、どうぢや〳〵。（トこの内快禪坊前へ出て、下手へ來り手を支へ）

快禪　はッ、鎌倉表の一大事にござりまする。

正雪　一大事とは氣遣はしい。

作左　して〳〵樣子は、

兩人　如何なるぞ。（ト小鼓の入りし合方になり）

快禪　されば候、丸橋氏の舅たる藤四郎が訴人なし、明智の伊豆守が指圖により捕手來つて忠彌殿必死の働きなしたれど、多勢に無勢敵し難く、召捕りには相成つたれども、妻が氣轉に連判を火中なせしと承はれば、一味の者の姓名知れず、これのみ味方の一つの安堵、なれども物に敏き伊豆守なれば、必ず御油斷は相成りませぬぞ。（トこれにて正雪作左衞門思入あつて、）

正雪　扨は我が推量に違はず、鎌倉表の其の急變、

作左　さすれば當地へ討手の者の、向はんは必定なり。

藤枝　種々の御苦勞遊ばせし、その企ても僅かにて、

快禪　露顯なせしは天命なるか。

正雪　是非もなき、

四人　次第ぢやなあ。（トこの時花道揚幕の内にてドン〳〵を打つ、皆々思入あつて、）

正雪　やゝ、間近く聞ゆる、あの太鼓は。

作左　最早討手の寄すると覺えたり。

快禪　いで、此の上は花々しく。（トきつとなつて立ち上るを、）

正雪　あいや快禪先づ待たれよ、假令一戰なすにもせよ、手足纏ひの此の藤枝。（ト藤枝に向ひ、）こりや

其方は斯く急變出來いたせば少しも早く此の場を落延び、何處へなりとも身を忍び我々最期と聞くならば、跡懇ろに弔ひくれよ。

藤枝　仰せなくとも、後世の營みいたしまするは道なれど、深き御恩を受けながら、あなたの御最期餘所になし、どうまあ存へ居られませう、わたくし不便と思召さば、どうぞ冥土へ諸共に、お連れなされて下さりませ。

正雪　その志し過分なれど、今にもあれ足利の討手向ひなば、正雪始め同志のもの討死なせし其の中に、女の死骸ありしなどゝ噂あつては末世の恥辱。

作左　殊更叛逆人の我々なれば、死後の弔ひ誰れあつて致しくれよう筈なければ、某とても共々にお頼み申す、藤枝どの。

正雪　さ、我が申す事聞き分けて、

兩人　少しも早う落ちておくりやれ。（ト正雪作左衞門思ひ込んで頼む）

藤枝　それぢやと申して、どうまあこれが。

正雪　やあ、斯程申すに聞き入れずば、是非に及ばぬ離別なさうか。

藤枝　さあ、それは。

正雪　但し、得心いたしたか。
藤枝　さあ、
正雪　さあ、
兩人　さあ〳〵。
正雪　藤枝、返事は如何なるぞ。（トきつと言ふ。）
藤枝　すりやどうでも落ちねばなりませぬかいなあ。（トハアと泣伏す、作左衛門思入あつて、）
作左　お志しの切なるは感ずるに餘りあれど、お詞背くも貞女にあらねば、正雪殿の仰せに隨ひ早う此の場を落ちられよ。
藤枝　それ程までにおつしやるを、聞き入れぬも本意ならねば、惜しからぬ命ながらへ後世の營みいたしませう。
正雪　ほゝお、よくぞ得心いたしたり、それにて先は一つの安堵、（ト奥へ向ひ、）やあ〳〵繁次郎はや參れ。（ト奥にて、）
繁次　畏まつてござります。（ト半合羽大小脚絆旅裝にて出來る、快禪見て、）
快禪　やゝ、旅裝ひの其の體は。

繁次　さ、委細をお次で承はり、某とても師の御恩報ずるは此の時なれば、冥土のお供致したけれど、押して願へぬ今の仕儀、それゆゑ斯かる旅裝ひも、必定姉を伴ひて一先づ爰を落ちよとの御用ならんと斯くの仕儀。

正雪　流石は繁次郎、かゝる場合を推量り心利きたる其の一言、如何にも姉が身の上をそちに頼まん我が所存、(ト有合ふ手箱より袱紗包の金を出し、) 早速ながら、此の金子は同胞二人が養ひ料、些少なれども受けてくれよ。(ト繁次郎の前に置く、繁次郎思ひ入あつて、)

繁次　はツ、お志し有難うは存じますれど、もし姉ぢや人、こりや如何いたしませうな。

藤枝　御恩の上にそのお金、受けてはどうもわらはの心が。

作左　さ、濟まぬと思はゞ正雪殿へ、御恩報じは只今も申す如く　後世の營み、

正雪　申さばそれは、弔ひ料。

快禪　心置かずと受納めされい。(トこれにて藤枝繁次郎顏見合せ思ひ入あつて、)

藤枝　左樣ならば、辭退いたさず、

繁次　お志しの此の金子。

藤枝　有難く頂戴、

兩人 仕るでござりませう。（ト繁次郎件の金子をいたゞき懷中する。）
正雪 受納いたして先は滿足、此の上は少しも早く爰を立退き、二人とも何處の浦にも身を忍び、一旦埋れし高安の家名を起すが肝要なるぞ。
藤枝 はッ、有難き其のお詞、左樣なれば、
兩人 此のまゝに。
正雪 落ち行かんにも女子連れでは、目に立たん。
作左 道を違へて裏表、
快禪 出合ふ所は札の辻、
正雪 忍びおほせて、
三人 少しも早う。（ト藤枝繁次郎是非なき思入にて、）
藤枝 そんならこれが、
兩人 今生の。（ト名殘り惜しき思入、正雪もほろりとこなしあつて、氣を替へ、）
正雪 おゝ、暇の印し、身が差代へ、藤枝そちへ形見なるぞ。（ト出すを藤枝泪ながら取つていたゞき、）
藤枝 すりや、これをわたくしへ。

正雪　さ、その短刀の長からぬ、短き縁とあきらめて、
藤枝　なく／＼爰をちこちの、人に問ひつゝ故郷へ、
作左　行く雁ならぬ假の世も、
繁次　夢と覺めたる夜嵐の、
快禪　花もろ共に散りて行く、
正雪　身は憂き旅の、
皆々　別れぢやなあ。

ト愁ひの思入よろしく、寺鐘合方にて此の道具廻る。

(本陣門外の場)＝本舞臺三間後黑塀、眞中に兩扉閉切潛り附の門、上下黑塀見越しの松、上手に埒を結ひし宿札、本陣門外の體、時の鐘ドン／＼にて道具留る。と直にばた／＼になり、花道より黑四天の捕手六人、銘々十手を持ち出で、直に本舞臺へ來り、四邊を窺ひ、

捕一　此の家に泊る正雪こそ謀叛人の張本にて、それに荷擔の丸橋忠彌は、鎌倉にて召捕れど、
二　いまだ徒黨の者共は、そこかしこに忍びをれば、如何なる企なさんも知れず、
三　中にも由井正雪は諸流に渡る達人と、聞き及びたる嗚呼の曲者、

三、殊に徒黨の軍師たる千葉作左衛門、僧の快禪、彼奴は力量勝れしとやら、
四　その外一騎當千の者多ければ、容易ならざる今宵の捕もの。
五　打ち漏らしては一大事、男女に限らず此の家へ、出入るものに心を附けん。
一　必ず共にぬかりめさるな。
五人　心得申した。
一　忍ばッせえ。
五人　はッ。

ト捕手上下へ三人づゝ別れて窺ふ。時の鐘静かなる合方になり、門の潜りをあけ藤枝件の短刀を差し、菅笠に顔を隠し四邊を窺ひ、誰も居らぬといふ思入にて頷いてほつと思入、爰へ兩人上下より窺ひ寄つて、

兩人　捕つた。（ト掛るを藤枝びつくりし、身を躱してよろしく留め）
藤枝　こりや女子を捕へて、何となさんす。
一　やあ假令女であらうとも、最前この家のもの共は殘らず呼び上げ參つたれば、外に人なき此の家より出でたるからは其方も、正しく正雪へ由縁の者、さあ尋常に、

皆々　繩かゝれ。

藤枝　いゝや、正雪には由緣の者ならねば、繩打たるゝ覺えはない。

○　假令あらうとあるまいと、一旦疑ひかゝりし上は、其の儘に通さんや。それ、何れも。

皆々　はッ、動くな。（ト立ち掛る。）

藤枝　すりや、どうあつても、

○　かなはぬ事だ。

皆々　腕廻せ。

藤枝　小癪なことを。

ト捕手打つて掛るを藤枝短刀を拔きちよつと立廻る、直ばたくになり、花道より以前の繁次郎藤枝を尋ぬる思入にて出で來り、花道より舞臺の樣子を窺ひ、心ならぬこなしにて直ぐ駈來り此の中へはひり、藤枝を圍ひ刀を拔きちよつと立廻りあつてきつと見得、これより三味線入り誂への鳴物になり、繁次郎六人を相手によろしく立廻りあつて、トゞ捕手を上下へ追ひ込み、後退りに藤枝に行き合ひ、雙方きつと身構へなし、窺ひ見て、

繁次　や、姉上か。

藤枝　おゝ、そなたは弟、ようまあ爰へ、

繁次　さあお出の遲さに札の辻より、取つて返せば此の始末、どこもお怪我はござりませぬか。

藤枝　いゝや、わしに怪我はなけれども、此の圍みの嚴しき中を、ようまあそなたは來やつたなう。

繁次　されば仕合せと見咎められず、此處までは參りしがこれより行くべき道なければ、繩目の恥を受けんより、只今途中で承はれば明智の聞えの伊豆守、此の地へお越しとあるこそ幸ひ、速かに訴へ出で、明白なるお調べを、受けるがまだしもわれ〳〵が、身の潔白にござりませう。

藤枝　なるほどそれも一理あり、さういふことなら諸共に。

繁次　左樣ござらば姉上さま。

藤枝　少しも早う。

ト行かうとする、此の時後へ捕手兩人窺ひ寄つて捕つたと掛るをちよつと立廻つて見得、ドンドンの鳴物にて此の道具廻る。

（奥庭離れ座敷の場）　本舞臺三間下手より中程まで高二重の築山心の土手、此の上に大和葺の軒口を見せたる二間本緣附の亭屋體、正面腰張りの相馬砂壁、三方折廻し障子建切り、この屋體少し山の上より前へ張出し、所々に丸木の根太を立て、此の下泉水の心、正面灯入りの庭の書割り、

上下とも一面に梅の林、總て奥庭離れ座敷の模様、時の鐘薄くドン／＼の鳴物にて道具留る。と直に薄きドン／＼になり、花道より捕手四人窺ひながら出で舞臺へ來り、小石を拾ひ礫に打つ、ばつたりと音して上手より同じく捕手四人窺ひ出で、雙方一寸囁き合ひ上手へ忍ぶ。跡靜かなる合方、蛙の聲になり、日覆より梅ちら／＼と散り、よき程に屋體前側の障子を引拔く、内に正雪好みの衣裳に着替へ、上手へ床几に懸り刀を構へ、下手に作左衞門淺葱の着附白の上下にて下に住ひ、前へ三方に九寸五分を載せしを控へ居る、正雪思入あつて、

正雪　はて、一入なる庭前の眺め、差込む月は朧なれど心隈なき今宵の手筈。

作左　同志の者へは其許より、快禪に申し附けられ、蓄へ置きし軍用金、皆それ／＼に配分いたさせ、

正雪　離散なせし上からは最早貴殿と某のみ、潔よく切腹なし、名を後世に轟かさん。

作左　仰せにや及ぶべき、此の場に於て諸共に、

正雪　いざ生害の、

兩人　仕らん。（ト雙方身繕ひをなす。正雪思入あつて、）

正雪　あゝ、これについても貴殿と某、死を同じうなすといひ、如何なる深き因みにや、惡しき事と御合點ながら我が企てに助力あつて、舊家楠の怨敵たる足利殿の今は武將と仰がれたまひ、時めく

を見るに附け其の無念忘れがたく、あながち慾に迷ひしにはあらねどもたゞ武士の意地、かなはぬ迄もと思ひ詰め、徒黨を集むるそれ迄は、日蔭なる身に世を忍び、諸國遍歴なすうちも或ひは山野に一夜を明し、其の艱難は如何ばかり。

作左　某とてもまッ其の如く、義に依つて一味なせば浪々の身の糧に盡き、三度食事をなさずと雖も、假令諸侯の招きにも祿を辭して主取りなさず、又は同志のその内にも、或は親に生別れ妻子を捨つるも武士道の、本意なれば是非なけれど、

正雪　左程の思ひせしことも、最早や僅かに斯くの仕合せ、

作左　如何なる宿世の因果にや、思へば思ひ廻すほど、

正雪　作左衛門殿、

作左　正雪殿、

正雪　武運拙なき、

兩人　身の上ぢやなあ。（ト宜しく愁の思入あつて、正雪氣を替へ、）

正雪　あゝ未練の歎きに時うつる。用意よくば某が、介錯いたし參らせん。

作左　こは冥加なる其の仰せ、正しく楠家の末葉たる正雪殿の御介錯にて切腹なすは、作左衛門下世話

に申す死花とやら、この上の悦びや候べき。

正雪　假令我が系圖正しければと申して、一旦民家に落ちし身の、各々方の助けなくば、事成就せずといへども、名を末世に殘す程の此の企てはなし難し、それを思へば皆同列、何ぞ高下のあるべきや。配慮あらずと心靜かに。

作左　その仰せこそ冥土へ土產、いで魁けの仕らん。

ト三方を押し頂き、九寸五分を取つて腹へ突き立て引廻す、正雪見て、

正雪　や、あつぱれ生害。

作左　憚りながら。（ト首を差延べて苦痛の思入。）

正雪　おゝ。（ト刀を拔き目先へ突きつけ、）臨終稱念、

作左　南無阿彌陀佛。

正雪　えい。

ト作左衞門の首を打落し、刀の糊紅を拭ひ鞘へ納め首級を取つてほろりとこなし、此の時後へ捕手兩人窺ひ寄つて、

捕手　捕つた。

トかゝるを振解いて立廻りのうち、作左衞門の上を取り手早く首級を包み、何處ぞへ埋めようといふ思入あつて行かうとするを、捕手六人ばら〳〵と出て支へる。正雪是非なく八人を相手に誂への鳴物になり、捕物の立廻り存分あつて、トヾ捕手を上下へ追込み、ほつと思入。花道よりばた〳〵になり、以前の快禪走り出來り、直に舞臺へ來て正雪を見て、

快禪　おゝ正雪殿、是れにおいでありしか。

正雪　そちは快禪、して同志の者は如何なせしぞ。

快禪　はッ、仰せの如く軍用金を配分なし、殘らず離散いたせしかど、此の場の樣子氣遣かはしく取つて返せし甲斐あつて、御健勝の内お目にかゝり、先づは重疊、して千葉氏には。

正雪　自殺なせし此の首級、ひそかに四邊へ埋められよ。

快禪　畏まつてござる。（ト首級を受取り、）して貴殿には。

正雪　我れもこれにて切腹なせば、介錯いたしくれよ。

快禪　委細承知仕る、愚僧とても出家相應、介錯なして追腹切り、冥土の案內仕らん。

正雪　ほゝお、勇ましき其の一言。何はしかれ、その首級少しも早く。

快禪　心得ました。（ト上手へ行き土手の蔭を掘り首を埋めて居る、正雪うなづき、）

正雪　これにて思ひ置く事なし、この上は捕手の者又もやこれへ向はぬ内、潔く切腹なさん。それ。

ト つか〳〵と屋體へ駈上り腹を切らうとするを、捕手二人後より窺ひ寄つて又掛るを、振解いて一人を膝の下に引敷き、一人は後より抱き留めるを、正雪その儘一腰を拔き腹へ突き立てる。此の内快禪は首級を埋めてしまふ。

快禪介錯。

快禪　はツ。

ト屋體へ駈上り捕手を見事に投げ退け、一腰を拔きさつと身構へる。此の時花道揚幕の内にて、

伊豆　介錯待つた。

正雪
快禪　や、何と。

伊豆　松平伊豆守、それへ參つて切腹の樣子、檢使いたさん。

ト三味線入り大小の鳴物になり、花道より伊豆守陣笠凜々しきこしらへ、源二、傳藏同じく陣笠にて軍兵大勢附添ひ出で直に舞臺へ來り、伊豆守上手へ床几に掛る、正雪見て、

正雪　こは存じ寄らざる伊豆守殿の御入來、大罪犯せし我々の御檢使とは勿體至極。

伊豆　いゝや假令叛逆の罪あるとも系圖正しき楠の末葉たる汝ゆゑ、何卒切腹いたさせんと再三武將へ

願ひを上げ、お聞き濟みに依つて當地へ馳付け、右の趣き申し聞けんと存ぜしに、先づは自殺の體を見屆け、某に於ても祝着いたす。

正雪　はッ、お情厚き伊豆守殿、そのお詞が冥土へ土產。

伊豆　あゝいや、冥土への土產なら、まだ取らする品あり。それ、呼び出せ。

源二　はあッ。（ト揚幕の方へ向ひ、）それに控へし若者、君のお召し、急いでこれへ。（ト花道の内にて、）

繁次　畏まつてござりまする。

ト花道より繁次郎上下大小にて、折敷の上へ紫の袱紗に包みし切髮を載せ持ち出で、直に舞臺へ來り、下手に住ふ。正雪見て、

正雪　や、そちは繁次郎、合點行かざる、

正雪 快禪　その體は。

繁次　御不審御尤も至極、最前我々同胞の者仰せに從ひ、此の家を立ち出で、途中に於て捕手に圍まれ詮方盡きて伊豆守樣へ詳しく次第を申し上げしに、孝子なりと御賞美あつて御家來にお抱へ下されゝ、高安の家名相立てよとの有難き御諚、それのみならず此の一品、（ト件の切髮を折敷のまゝ正雪の前へ持つて行き、）いざ、御覽下されて。（ト正雪不審の思入にて、袱紗を開き見て、）

正雪　この切髪は。

伊豆　それこそ汝の妾藤枝の黒髪なれども、叛逆人の憚りあれば其方の縁諸共、切つて亡父や由縁の者の追善供養の其の爲に、尼寺一宇建立なすも、亡き者共へ我が寸志。

正雪　斯くまで厚き伊豆守殿の御仁情、最早足利武將へ對しお恨み申す念もなく、改心なして正雪が冥土の旅へ首途の悦び。

伊豆　我れは又、叛逆人滅びし上は、取り敢ず鎌倉表へ凱陣の悦び、

繁次　善惡二つの追分は、智者と勇士の別れ道。

快禪　愚僧は彼の世の案内に、十萬億土へ一足飛び。

源二　眞如の月の國ならで、

傳藏　星月夜なる鎌倉と、

正雪　彼の世此の世へ、

伊豆　立ち別れ行く、

皆々　敵味方。

ト本釣鐘を打込み薄き風の音になり、日覆より梅ちら／＼散る。正雪これに目を附け、

正雪　限りあれば吹かねど花は散るものを、心短かき春の山風。

伊豆　や、あつぱれ秀逸。

正雪　いで、介錯。

快禪　はッ。（ト立ち上つて刀を抜き、振り上げる。）

伊豆　はて潔き。（トすつと立つ、正雪手摺へ片足踏み掛ける。雙方見合つて木の頭、）生害ぢやなあ。

ト正雪引廻す、伊豆守下よりきつと見込む。皆々引ぱりよろしく、本釣鐘の捨鐘。三重へドン〱を冠せ、よろしく、

幕引附けると、えいと太刀音して、留の木に附き、跡打ちこみ。

幕

慶安太平記（終り）

〈附録〉 主なる興行年表

笠森お仙

年時	座名	名題	お仙	おきつ	丹三郎	茂兵衛	市助	藤兵衛	おさみ	おむら
慶應元年八月	守田座	怪談月笠森（くわいだんつきのかさもり）	澤村田之助	澤村田之助	中村福助	中村芝翫	市川九蔵	中村仲太郎	坂東玉三郎	尾上梅幸
明治十一年九月	都座	雨催月笠森（あめもよひつきのかさもり）	澤村百之助	澤村百之助	片岡我童	片岡我童	片岡市蔵	中村相蔵	岩井紫若	市川源之助
明治三十六年六月	明治座	怪談月笠森（くわいだんつきのかさもり）	中村福助	中村福助	市川染五郎	三桝稲丸	市川團蔵	市川瀧十郎	市川左文次	市川紅若
明治三十九年五月	市村座	空朧月笠森（そらもおぼろつきのかさもり）	中村福助	中村福助	中村芝鶴	｜	片岡市蔵	澤村村右衛門	市川紅若	中村銀之助
大正十年九月	市村座	怪談月笠森（くわいだんつきのかさもり）	澤村宗之助	澤村宗之助	坂東三津五郎	大谷友右衛門	尾上菊五郎	市川新十郎	尾上菊三郎	

お静禮三

年時	慶應三年二月	明治十七年一月	明治二十五年九月	明治三十一年二月	大正六年三月	大正六年十一月	大正十年二月
座名	市村座	市村座	壽座	眞砂座	歌舞伎座	市村座	市村座
名題／役割	契情曾我廓亀鑑（けいせいそがくるわかゞみ）	斛駒曾我御行松（のりそめそがおぎやうのまつ）	鏡仕立廓精夜具（かゞみじたてくるわのつみやぐ）	おしづ禮三（れいざ）	吹雪花小町お靜（ふゞきのはなこまちおしづ）	契情曾我廓亀鑑（けいせいそがくるわかゞみ）	小磯ケ原（こいそがはら）
おしづ	澤村田之助	岩井松之助	岩井松之助	澤村訥升	中村歌右衛門	尾上菊次郎	澤村宗之助
禮三	市村家橘	片岡我童	市川八百藏	市村家橘	市村羽左衛門	守田勘彌	尾上菊五郎
惣右衛門	關三十郎	中村芝翫	尾上新七	關歌助	市川段四郎	市川新十郎	大谷友右衛門
お民	市川新車	河原崎國太郎	坂東三津之助	瀬川路之丞	澤村源之助	河原崎國太郎	―
お早	河原崎國太郎	中村福助	市川小傳次	―	市村龜藏	市川米藏	―
傳次	坂東龜藏	市川壽美藏	市川壽美藏	大谷馬十	中村歌六	中村東藏	―
半兵衛	坂東龜藏	中村芝翫	市川新藏	關歌助	市川猿之助	坂東彦三郎	―
麥庵	關三十郎	市川壽美藏	市川秀五郎	―	中村歌十郎	中村翫助	―

小堀政談

年時	明治七年二月
座名	中村座
名題／役割	吉樣參由縁音信（きちさまゝゐるゆかりのおとづれ）
吉三	尾上菊五郎
お杉	尾上菊五郎
お七	坂東三津五郎
お勘	坂東三津五郎
辨秀	中村仲太郎
忠左衛門	坂東龜藏
左門之助	嵐璃鶴

年時	明治十年二月	大正七年九月	大正十二年一月
座名	中島座	市村座	新富座
名題	封文梅吉様	吉様参由縁音信	同上
	中村重藏	尾上菊五郎	市村羽左衛門
	尾上幸藏	河原崎國太郎	｜
	喜瀬川露紅	尾上菊次郎	中村福助
	澤村巴杖	尾上菊五郎	坂東秀調
	吉川路島	中村吉右衛門	中村吉右衛門
	吉川路島	坂東彦三郎	｜
	嵐德之丞	坂東三津五郎	中村時藏

慶安太平記

年時	明治三年三月	明治八年五月	明治十三年二月	明治十六年七月	明治二十七年五月	明治三十年十二月	明治三十五年五月
座名	守田座	河原崎座	猿若座	新富座	明治座	春木座	明治座
名題／役割	樟紀流花見幕張	花見時由井幕張	兩軍錄由井演說	花菖蒲慶安實記	花菖蒲慶安實記	慶安太平記	花菖蒲慶安實記
正雪	中村芝翫	市川團十郎	片岡我童	尾上菊五郎	市川左團次	｜	｜
忠彌	市川左團次	市川左團次	市川市十郎	市川左團次	市川左團次	澤村訥子	市川左團次
伊豆守	澤村訥升	市川團十郎	片岡我童	市川團十郎	市川權十郎	澤村春五郎	市川權十郎
谷五郎	澤村訥升	市川權十郎	坂東家橘	尾上菊五郎	市川小團次	｜	｜
増田	中村芝翫	｜	片岡我童	市川左團次	｜	｜	｜
初藏	市川左團次	市川團升	市川新十郎	尾上松助	｜	｜	｜
藤四郎	中村仲藏	中村仲藏	片岡市藏	中村仲藏	市川壽美藏	片岡當十郎	市川壽美藏
おせつ	澤村其答	市川門之助	岩井紫若	坂東秀調	坂東秀調	中村富十郎	澤村源之助

明治二十九年九月	明治座	名高慶安太平記（なもたかきけいあんたいへいき）	—	市川左團次	中村芝翫	—	—	—	市川荒次郎	市川莚女
明治四十二年十月	明治座	花菖蒲慶安實記（はなしやうぶけいあんじつき）	—	現市川左團次	片岡仁左衛門	中村又五郎	—	市川權三郎	中村勘五郎	市川莚女
大正四年六月	本鄕座	慶安太平記（けいあんたいへいき）	—	市川左團次	市川八百藏	—	—	—	市川左升	市川松蔦
大正五年六月	歌舞伎座	慶安太平記（けいあんたいへいき）	—	市川左團次	中村歌右衛門	—	—	—	市川八百藏	中村芝雀
大正七年十二月	市村座	慶安太平記（けいあんたいへいき）	中村吉右衛門	尾上菊五郎	中村吉右衛門	坂東三津五郎	中村東藏	中村吉右衛門	中村東藏	市川米藏
大正九年五月	新富座	花菖蒲慶安實記（はなしやうぶけいあんじつき）	—	市川左團次	市川中車	—	—	—	中村傳九郎	坂東秀調
大正十二年四月	明治座	慶安太平記（けいあんたいへいき）	—	市川左團次	片岡仁左衛門	—	—	—	市川左升	市川松蔦

大正十四年七月十日印刷
大正十四年七月十三日發行

著作權者印

『默阿彌全集第八卷』
非賣品

補修　河竹糸女

校訂編纂者　河竹繁俊

發行者　東京市日本橋區通四丁目五番地　和田利彦

印刷者　東京市小石川區諏訪町五十六番地　堀江關武

印刷所　東京市小石川區諏訪町五十六番地　常磐印刷所

發行所　東京市日本橋區通四丁目五番地　春陽堂



